
憎まれ役に転生！？

居眠り小僧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憎まれ役に転生！？

【Nコード】

N9198T

【作者名】

居眠り小僧

【あらすじ】

気が付いたら「遊戯王GX」の「丸藤 翔」に転生してました。

orz

追記：歌詞の部分を削除しました。それとPVが15万件を突破しました。本当にありがとうございます！

フィールド1：試験開始（前書き）

今回が初投稿&初執筆になります。

色々と、見直し部分が多いのが定評になりそうだ。

o r z

フィールド1：試験開始

やつほー、改めましてこんにちわ。新たな憑依者です
今回はなんと・・・「遊戯王GX」の世界の人物に憑依するらしい
です。

しかし、どうしてこのキャラクターになった。
水色の髪と眼鏡が特徴な・・・

そう「丸藤 翔」である。

本編では脇役の中でも優遇されている方だが、小説系ではアンチが
多くてマジで勘弁。漫画版だといいい子なんだけどね。

それと流石に原作のままのデッキでは少々きついで・・・

大改造 ビフォーアフター！！

手札から魔法カード「融合」を発動！

兄である「丸藤 亮」が預けてくれたサイバーデッキとロイドデッ
キを融合ー！！

俺のデッキ、特殊召喚。

・・・ん？なぜサイバーデッキを俺に預けたんだろ？

まあ、気にしないでおこづ。

と、言うことで本編開始！！

省略するとデュエルアカデミに入学試験を受けに行き、無事に筆記
試験は合格（番号は34番だった）、これから実技を受ける。実技
と言うのは・・・試験監にデュエルで勝つことだ。

で、お約束の相手「クロノス教頭」だ。
個人的には面白くて気に入っているが、まあ、テンプレ通りなら油断しない限り勝てるはずだ。

「では、次の34番、どうぞナノーネ」

「はい。34番、丸藤 翔です。よろしくお願いします。」

「デュエル」

「先攻は私がいただくノーネ。ドローツ。手札から魔法カード「強欲な壺」を発動するノーネ。「強欲な壺」の効果でデッキからカードを2枚ドロウ。手札から魔法カード「テラフォーミング」を発動！このカードは、自分のデッキからフィールド魔法を一枚選択し、手札に加えることが出来るノーネ。」

この「強欲な壺」は今じゃ禁止になっているが、当時ではどんなデッキでも入っていたドロウ系カードだ。復活きぼんぬん、ちよつと待て、「テラフォーミング」だと！？

自分のデッキからフィールド魔法をサーチする効果だが、専用デッキでは必須とも言われているカードじゃないか。

本気すぎるぞ、このクロノス先生……。

「私はデッキからフィールド魔法「歯車街」を選択、手札に加えるノーネ。フィールド魔法「歯車街」を発動、これにより古代の機械と名のついたモンスターは生贄が一体減るノーネ。」

「歯車街」は古代の機械デッキに欠かせない重要カード
あれだけで生贄が一体減るのは大きいぞ

……ちよつと待て、この時代には「歯車街」はまだ存在していな

いぞ！？

「さらに手札から魔法カード「二重召喚」を発動するノーネ。この効果により、このターン二回の通常召喚ができるノーネ。」

そして「二重召喚」は上級モンスターを呼ぶか、または場にモンスターの数を増強させるために使うカード。

「さらに手札から「トレードイン」を発動するノーネ。手札からレベル8の「マシンナーズカノン」を墓地に送り、デッキから2枚ドロ。」

古代マシンナーズ・・・だと！！

今更ながら、テンプレでよくある小者臭が漂うクロノス先生ではない。い。

というか、卒業デュエル以上の本気を出したクロノス先生と俺は戦っているらしい・・・入学試験だろ？これ？

あのデッキに勝てる受験生は果たしているのかどうか？

「私は手札から永続魔法「古代の機械城」を発動。そして「マシンナーズソルジャー」を攻撃表示で召喚ッ！！そしてマシンナーズソルジャーの効果発動！！自分フィールド上にモンスターが存在しない場合にこのカードが召喚に成功した時、手札から「マシンナーズ・ソルジャー」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができるノーネ！私は手札から「マシンナーズフォートレス」を攻撃表示で特殊召喚するノーネッ！！」

・・・1ターン目から飛ばすなあ。

「マシンナーズソルジャーが通常召喚されたことにより、「古代の

城」にカウンターを1つ載せるノーネ。」

古代の城0 1

「私は古代の城の効果を発動。「アンテイク・ギア」と名のついたモンスターを生け贄召喚する場合、必要な生け贄の数以上のカウンターが乗っていれば、このカードを生け贄の代わりにする事ができるノーネ。」

・・・来るか、最初の難関(+

「現れるノーネツ、古代の機械巨人ッ!!!!」

ゴゴゴゴゴッ!!

とてつもない威圧感を放ちながら、一体の巨人が現れる。

この「古代の機械巨人」こそ、クロノス先生の切り札である。

「ターンエンドなノーネ。」

クロノス 手札2 場モンスター3 伏せ0 フィールド魔法「歯車街」

「1ターン目から3体のモンスター。しかもそのうち2体は上級モンスターだ?」

「あ、アレに勝てるデッキなんてあるのか?」

「無茶苦茶だろ、おい!!」

ざわ・・・ざわ・・・会場がざわめいている。

無理もない。俺も驚いているのだから。

さて、気合を入れてやりますか!!

「俺のターン、ドローツ!!魔法カード「天使の施し」を発動。3枚ドロし、その後2枚捨てる。・・・手札から魔法カード「融合賢者」を発動。デッキから「融合」を手札に加え、そして「融合」を発動。手札の「サイバー・ドラゴン」2体を墓地に送り、「サイバー・ツイン・ドラゴン」を融合召喚!」

個人的には「サイバー・ドラゴン」x3を使用した「サイバー・エンド・ドラゴン」より確実に使い勝手がいいモンスターと思うんだが・・・アニメでは不遇なんだよな。

「な、なんでカイザーと同じカードを使っているんだ?」

「フーか、どうやって「サイバー・ドラゴン」なんてレアカードを手に入れたんだ?」

観客席からいい質問が来たので、答えよう。

「一応断っておくが、このデッキはあの「カイザー」が使用していたデッキを俺流に改造した物だ。そしてこの「サイバー・ドラゴン」達は「カイザー」から直接預かっているだけだ。」

ざわ・・・ざわ・・・

おいおい、俺の名前をちゃんと確認したのか?

ちなみにカイザーこと兄貴はただいま修行のために放浪中らしいが、また道に迷ったと思われる。意外と方向音痴なんだよなあ・・・うん。

「と、気を取り直して。サイバー・ツイン・ドラゴンでマシンナーズ・ソルジャーに攻撃。エボリューション・ツイン・バースト！」

サイバー・ツイン・ドラゴンのエネルギー弾の直撃を受け、マシンナーズ・ソルジャーは跡形も無く消し飛んだ。

クロノス LP40001200=2800

「アガガガガッ。」

「サイバー・ツイン・ドラゴンは一度の戦闘で2回攻撃が出来る。続けてマシンナーズ・フォートレスを攻撃！エボリューション・ツイン・バースト！」

こちらにもエネルギー弾を受け、消し飛んだようです。合掌。

クロノス LP2800-300=2500

「マシンナーズ・フォートレスの効果発動！！このモンスターが戦闘で破壊された時、相手フィールド上のカード1枚を破壊することが出来るノーネ！もちろん対象は「サイバー・ツイン・ドラゴン」なノーネ！！」

くっ、やはり破壊されたか・・・
覚悟していたとはいえ少々厄介だな。

「俺は手札から「融合回収」を発動。融合素材として墓地に送った「サイバー・ドラゴン」と「融合」を手札に加える。そして「サイバー・ドラゴン」を攻撃表示で特殊召喚。」

かつてのアタッカーをことごとく打ち破った、革命児・・・見ッ参！！
あれ？「おい、何で特殊召喚できるんだよ？」とか「インチキ効果もいい加減にしろ」とか罵声が来なかつたな。それだけ「サイバー・ドラゴン」が有名なのか。

ただしその対策として「サイバー・ダイナソー」は勘弁な、うん。

「さらに手札から「エクスペレスロイド」を守備表示で召喚。そしてエクスペレスロイドの効果を発動。このカードを召喚した時、墓地に存在する「エクスペレスロイド」以外の「ロイド」と名のついたモンスター2体を手札に加える事が出来る。」

「あなたの墓地にロイドは存在しないノーネツ、いや・・・まさか！！」

「そう「天使の施し」の効果で墓地に送った2枚のカードは両方「ロイド」と名の付くモンスターカード・・・「ドリルロイド」と「ステルスロイド」を回収！！」

しかし、エクスペロイドは召喚しただけで回収できるのが正直強いと思う。特にこの世界では表側守備表示で出せるのがかなり役立つな。

「さらに手札から「痛み分け」を発動！自分の場のモンスター1体をコストに、相手は場のモンスター1体を生贄に捧げなければならぬ。俺は「エクスペレスロイド」を生贄にする！！」

クロノス先生の場には「古代の機械巨人」のみ。

ポッシュート！！

「マンマミーヤッ、私の古代の機械巨人がッ!!」

ざわ・・・ざわ・・・

「あのモンスターたちを1ターンで・・・」

「嘘だろ？」

「なんて奴だ！」

「俺はこのままターンエンドです。」

翔 手札3 場モンスター1 伏せ0

マシンナーズ・ソルジャーはまだ許容範囲として、フォートレスと古代の機械巨人が同時に並べられるのは流石に焦った・・・。今回の手札が良かったから何とかだったが、次同じことをされたら乗り切れるだろうか？

しかしそれよりやばいのは今の手札がバレバレだと言うことだ。すべて回収したカードだから仕方ないが・・・。

「私のターン、ドロー!! 私は手札から魔法カード「天使の施し」を発動。デッキから3枚ドローし、その後2枚墓地に送るノーネ。魔法カード「古代の整備場」を発動。墓地の「古代の機械巨人」を手札に加えるノーネ。さらに、手札に加えた「古代の機械巨人」を墓地に送り、墓地の「マシンナーズ・フォートレス」を特殊召喚するノーネ!!」

攻撃力2500のモンスターが簡単に蘇生、しかも自爆特攻で相手を潰せるのが「マシンナーズ・フォートレス」の強みだな。ただし、機械族のみでレベル8以上になるように捨てなければならぬのが少しネックだが・・・。専用デッキならほぼ関係ないだろう。

「さらに手札から「サイクロン」を発動。フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊するノーネ。もちろん対象にするのは「歯車街」なノーネ。」

まさかあのカードまで・・・いや、もう突っ込むのは止そう。

「「歯車街」の効果発動！このカードが破壊され墓地に送られた時、手札、デッキ、墓地から「アンティーク」と名の付くモンスター1体を特殊召喚することが出来るノーネッ！私はデッキから「古代の機械巨竜」を特殊召喚するノーネ！！！」

現環境でもかなりの使い勝手の良さから多くのプレイヤーに愛され、絶望を与えた

「古代の機械巨竜」・・・もはや2つのストラクチャーの良い部分を切り抜いたようにしか見えないよorz

ちなみに特殊召喚が可能なこのカードの攻撃力は3000、レベルは8ということでトレードインにも使えるし、マシンナーズ・フォートレスのコストにも使えるからものすごい利便性がある。貫通効果が無いのが救いだ。

クロノス先生のマシンナーズ・フォートレス、古代の機械巨竜に比べてこちらのサイバー・ドラゴンがものすごく弱弱しく感じるのは気のせいだろうか？

「バトルなノーネッ！古代の機械巨竜でサイバー・ドラゴンに攻撃！！アルティメット・フアング！！！」

サイバー・ドラゴンがエネルギー弾を放ち迎撃するも、あの体格差だ。まったく効いていないだろう。そのまま距離を詰められ、一気

に首元に噛みつき・・・

バキンッ!と、ものすごい音を立てながら噛み砕いてた。

お、俺のサイバー・ドラゴンが噛み砕かれた・・・だと!?

翔 LP4000 LP3100

「続いて、マシンナーズ・フォートレスでダイレクトアタックする
ノーネツ!」

高速でこちらに近づき、そのまま殴る。

真正面からなので、実際見てみると中々怖い。

てか、肩のキャノン砲で砲撃しないのかよ!

翔 LP3100 LP600

つく、俺のライフがかなりヤバイ。てか、このターンに下級モンスターを出されていたら終わっていたよ。次のターンで何かしらのカードが引けなければ終わりか。

「私はこれでターンエンドなノーね。」

クロノス 手札1 場 モンスター2 伏せ0

ええい・・・ままよ。

「俺のターン、ドローツ!!!」

・・・よし、まだ何とかなるかもしれない。

だが、手順を間違ってはだめだ。まずは「融合」を伏せて・・・。

「俺はカードを1枚セットし、手札から魔法カード「天よりの宝札」を発動。お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドロウする。俺の手札は2枚。よって4枚ドロウ。」

「私は1枚なので5枚ドロウするノーネ。」

万が一と思って入れたカードがこの場で役に立つとは・・・まあ、いいか。

「俺は相手の場の「マシンナーズ・フォートレス」と「古代の機械巨竜」を生贄に「溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム」を特殊召喚!!!」

「ノーツ!? 私のモンスターがーッ!!!」

よし、このまま畳み掛ける!!!

「さらにセットカード、オープン! 「融合」を発動。手札の「トラックロイド」「ドリルロイド」「エクスプレスロイド」「ステルスロイド」を融合!!! 融合召喚、「スーパービークロイドステルス・ユニオン」!!!」

トラックの部分がライオンだったらほぼアウトだったな、うん。

いくぞ、僕らの勇者王「ガオ イガー」!!!

「「スーパービークロイドステルス・ユニオン」の効果発動。1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にフィールド上に存在する機械族以外のモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。俺は「溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム」を指定する!!!」

溶岩魔人ラヴァ・ゴーレムが吸収され、心なしかイグニッション状態になっっているように見える。

「さらに、「愚鈍の斧」を「スーパービークロイドステルス・ユニオン」に装備！攻撃力が1000ポイントアップ。ただし、「スーパービークロイドステルス・ユニオン」の効果は無効になる。」

これでスーパービークロイドステルス・ユニオンのデメリット効果は消えた。

「速攻のかかし」や「バトルフェーダー」、「クリボー」が無ければこれで終わりだ。

「バトル、「スーパービークロイドステルス・ユニオン」でダイレクトアタック！ゴルディオーンツ、トマホツツク!!!」

もの凄いスピードで、クロノス先生に切りかかるスーパービークロイドステルス・ユニオン・・・これが鬼型だったら「ゲッターロボ」にしか見えないよ。

「ペペロンチノツ!!!」

クロノスLP2500 LP0

ふう。何とかデュエルには勝った。

「ありがとうございました。」

「さすがカイザーの弟なだけあるノーネ。試験用に調整したとはイエ、この私に勝てるとは中々見所があるノーネ。」

・・・待て、「試験用に調整した」だと？
本気のデッキはどれだけ恐ろしいんだよ！！

つと、そろそろ観客席に行くか。

で、観客席に着いてから色々なデュエルを観察したが、チートモン
スター（シンクロやオリジナル）は出てこなかった。良かったね、
翔ちゃ・・・げふんげふん。

さて、もうすぐメインバトルである主人公である「遊城 十代」と
「クロノス先生」とのデュエルが始まる。ここで漫画版か、アニメ
版の分岐がはつきりするので重要だ。

が、少し眠いので仮眠を・・・zzzz

つは、やばい。本格的に寝てしまったようで、すでにデュエルが始
まっているようだ。

お、十代の場には「E・HERO フレイムウイングマン」が融合
召喚されたと言うことは、おそらくアニメ版かな？で、クロノス先
生の場には「古代の機械巨人」が1体と伏せカードが2枚。さて、
どうなるか？

「フレイムウイングマンの攻撃力は2100、私の「古代の機械巨
人」にはあと1歩及びませーんッ。」

やはり、台詞が違う。

「じゃあ先生に教えてやるぜ。ヒーローにはヒーローに相応しい戦
いの舞台つてもんがあるんだ。フィールド「摩天楼 スカイスケレ
イパー」！！！」

地面からビルが次々と生えてきて、気がつけば立派な都市部へと変わっていた。

「エヴァンゲリオン」の迎撃用ビルを思い出したのは俺だけか？

ビルに囲まれて身動きが取りずらそうな「古代の機械巨人」とは対照的に、まさに狩人としてタワーの鉄片に立っている「EHERO フレーム・ウイングマン」。

「さあ舞台は整った。行けっ、フレーム・ウイングマン。「古代の機械巨人」に攻撃！」

タワーから飛び降りて、一気に降下するフレームウイングマン。

「ヒーローは必ず勝つ！！」「摩天楼 スカイスクレイパー」の効果は、自分より攻撃力の高いモンスターに攻撃をした場合、攻撃力を1000ポイントアップさせる。「HERO」専用のフィールド魔法。」

「中々面白い効果を持っているノーネ。」

「食らえ、スカイスクレイパーシユート！！！」

上空から古代の機械巨人に襲い掛かるフレーム・ウイングマン。勝った！と十代は思った。

「ですが、まだ詰めが甘いノーネッ！！速攻魔法「禁じられた聖槍」を発動！このカードはモンスター1体の攻撃力を800ポイントダウンし、さらにこのターンこのカード以外の魔法・罫カードの効果を受けないノーネ。チェーンして速攻魔法「リミッター解除」を発

ツ動！！自分の場の機械族モンスターの攻撃力を2倍にするノーネ
ッ！！」

「E—HERO フレイム・ウイングマン」 ATK3100 13
00

「古代の機械巨人」 ATK3000 6000

襲い掛かってきたフレイム・ウイングマンの攻撃を難なく受け止めた。

「古代の機械巨人の反撃、アールティメット・パウインドッ！！」

そして無情にもフレイム・ウイングマンを地面に叩きつけ、潰した。

「うわーっ！！」

十代LP3000

十代が負けた、だと！！

てか、なぜに「禁じられた聖槍」があるんだよ！？
この先どうやるのやら・・・orz。

今日の最強カード

「サイバー・ツイン・ドラゴン」

星8 光属性 機械族 ATK2800 DF2100

「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

翔「サイバードラゴン2体による融合でしか融合召喚できないモンスターだが、この攻撃力で2回攻撃は中々強い。特に大きなメリックトはこの2つだな。」

1、光属性なので「オネスト」の恩赦を受けられる。
2、「リミッター解除」や「パワーボンド」の効果で攻撃力が倍になる。

最近では「プロトサイバー・ドラゴン」や「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」など「サイバー・ドラゴン」として扱うことが出来るモンスターが出てきたことでさらに融合しやすくなったな。」

「???」しかし残念ながら、融合代用モンスターは使用することが出来ません。ただし「融合呪印生物ー光」の効果で墓地に送れば、特殊召喚は可能です。」

翔「だが、その場合は蘇生制限を満たしていないから「死者蘇生」などで墓地から復活することが出来ないのが痛い。」

「???」まあ、その制限があったとしても「オネスト」や「リミッター解除」、「パワーボンド」による火力アップした状態での2回攻撃は強いですよ?。」

翔「確かに。お、時間か。それじゃあ、次回から宜しく。」

「???」「はい!」

フィールド1：試験開始（後書き）

初めまして、居眠り小僧と申します。

色々と未熟な部分もありますが、どうぞよろしくお願いします。

フィールド2：出会い（前書き）

書き手に回って、初めて書く事の大変さを学んだ気がします。
毎日更新している作者の方々はどうやってネタを振り絞っているんだろ？

追記「指名者」だったんですね……。間違ってますみません。

フィールド2：出会い

さて、そろそろフェリーが出航するな。

ん？話がいきなり飛んだって？ああ、すまない。

十代がクロノス先生に負けたというアクシデント以外は特になく、試験はすべて終了した。で、後日合格の通知が届くので注意するよ。うにと先生方から諸注意を聞き、その場で解散となった。

そして今日・・・合格通知の手紙が届いたので、さっそく合格者のみが乗れるフェリーに乗り込むことにした。この船に乗って、離島に建設された「デュエルアカデミア」に行くらしい。しかし、フェリーって事故フラグがビンビンしているから困る。「タイタニック」を見て豪華客船は死亡フラグにしか見えなくなったのはいい思い出だ。

・・・

・・・

何人かが船酔いしたようだ。

転生前に、ハワイ行きの修学旅行で「ドルフィンウォッチング」を楽しもうとしたら、学生組が全滅したのを思い出した。自分はなんとか耐えたものの、陸に上がった時にダウンしたなあ・・・まさかイルカを見て楽しむはずがカエルの合唱（人間バージョン）を生で聴く羽目になるとは思わなかったよ。

「大変でしたね、マスター。」

ああ、大変だった。気分的には最悪だったよ。
美人の合唱なら嬉しいが、野郎だらけのお下劣大百科は見るに堪え
なかった。
おまけに潮風でしょっぱくなった昼食のハンバーガーは核弾頭だっ
たよ。
よく倒れなかったな、俺。

「ははは・・・」

苦笑しかないよなあ、うん。俺がお前の立場だったらそうする。
ちなみにイルカは少しだけ、クジラはそこそこ見れたから個人的に
は満足。
だが、友人たちは倒れていたためおそらく見れなかったと思う。非
常に残念である。

「まあ、イルカなら水族館でも見れますから。」

水族館のイルカのショーは中々見ごたえがあつて好きだが、個人的
には猫をなでていたほうが好きだな。

「そつといえばマスターは無類の猫好きでしたからねえ・・・。」

苦笑されるのは仕方ないな、うん。

レスキューキャットを当てるためにかなりのパックを買ったのはい
い思い出だ。

しかし、あのイラストは正直反則だと思う。おまけに効果も強かつ
たりする。

ちなみにネズミ系も好きだったりする。特に好きなのが「キーマウ
ス」だな。ただし「素早いビッグハムスター」テーマはだめだ。

「効果は強いんですけどねえ。」

うん、そこは全力で同意する。

ただしイラストが酷い。あれはハムスターじゃないやい。（泣

「あ、そろそろ着くみたいですよ？」

意外と早いな？いや、話が弾み過ぎて時間を忘れていただけかもな。

「マスター、忘れ物はないですか？」

一応確認したが、全部ある。

大丈夫だ、問題ない。

てか、荷物をすべて持ったまま話していたから忘れるって方が難しいと思うぞ？

「まあ、万が一ってことがありますから。」

心配性だなあ、うちの精霊は。だが、そこがいい！！

ちなみに前に会話した時に「お前は俺の嫁か？」とふざけて言ってみたら、「いいえ、あなたの妻です。」と言った後に、自分の言葉に驚き慌てふためいた姿はごちそうさまでした。と言わざるを得ない。

で、持ち物を点検し確認した後に船から下りた。

港から少し離れた所に教師達が集まっており、手続きを済ませた生徒に制服を渡している。さて、貰いに行くか。

案の定、支給されたのは赤服・・・まあ、着替えておくか。

しかし、34番なのに赤ってどういうことだ？

「納得がいかないみたいだな。これをよく読むんだ。」

ん、評価判定基準表？どれどれ・・・

判定基準表

ブルー：「デュエルアカデミア」に多額の献金をし、なおかつ成績優秀な者に限る。

イエロー：「デュエルアカデミア」に多額の献金をした者か、成績優秀な者の二つを対象とする。

ただし、予定以上の人数が候補として上げられる場合、前者を優先的にする。

レッド：筆記試験において一定以上の成績を上げ合格し、なおかつ実技試験において試験官から一定の評価を得た者。ただし、クロノス教頭に限りLPを半分以上削れた者、または勝つことが出来た者は筆記試験において合格判定を貰っていなくても、合格された者としてみなす。

・採点方法は減点法とする。

デュエルアカデミア教育委員会

やっぱり金が物言う世の中なんだね。汚えぞ！！

で、献金者が多いものの青から振り落とされた人が黄色に入り、なしくずし的に俺は赤になったのか。しかしこうしてみると、配色が信号機なんだよなあ。

「何しているんだ？34番？」

落ち込んでいた俺に声をかけてくれたのは、イエローの制服を着た三沢だった。

やっぱり三沢はイエローか。俺は三沢に評価判定基準表を手渡す。

「ああ、これを見て頭が痛くなったんだ。」

「これは・・・酷いな。」

「だな。貧乏人に厳しい世の中になったもんだ。いきなりで悪いが、名前は？」

「俺の名前は三沢大地だ。よろしく頼む34番。」

「俺の名前は34番じゃなくて丸藤翔だ。よろしく、三沢。」

世の中の理不尽に泣く知人が増えて嬉しいよ。

ん、俺と同じくレッドの制服を着た男子生徒が近づいてきた。

「よっ、俺の前にクロノス先生と戦った奴だよな。俺、遊城十代。よろしくな!」

俺のことを指しているんだな。

「俺の名前は丸藤翔だ。よろしく、十代。」

「俺の名前は三沢大地だ。よろしく頼む。」

名前の教えあった後、十代が「お前のデュエル、めっちゃワクワクしたぜ。」と言ったことから、試験官とのデュエル内容について3

人で熱く語った。

どうやら三沢は原作の万丈目と戦った時の水デッキを使用したらしい。

で、内容としては「化石発掘」を使用して「ハイドロゲドン」をサーチ、召喚。1枚伏せでエンド。

試験官が「ジエネティック・ワーウルフ」を召喚。そのまま攻撃したが、三沢が「収縮」を使い攻撃力が半減、結果返り討ちに。さらに「ハイドロゲドン」の効果によりデッキから「ハイドロゲドン」を特殊召喚。試験官はカードを2枚伏せ、エンド。

三沢は「大嵐」を使い、伏せカードを破壊。ちなみに「攻撃の無力化」と「聖なるバリアミラーフォース」だったそうだ。そして「ハイドロゲドン」に「団結の力」を装備。万一のために「異次元の指名者」を使い「冥府の使者ゴーズ」を氏名。どうやら無かったようなので自分の手札1枚がランダムに除外。その後そのまま攻撃し、勝利。

「異次元の指名者」を使ったのは驚いたな。

十代はいつものHEROデッキを使用したみたいだ。

クロノスが先攻だったらしい。「テラフォーミング」で「歯車街」をサーチ、発動。手札から「古代の機械城」を発動。「古代の機械獣」を召喚、「古代の機械城」にカウンターが1つ乗る。その後「サイクロン」で「歯車街」を破壊し、効果発動。デッキから「古代の機械巨竜」を特殊召喚し、エンド。

十代は「E・HEROバブルマン」を召喚。「古代の機械城」に2つ目のカウンターが乗る。「E・HEROバブルマン」の効果によ

り2枚ドロ。場の「バブルマン」と手札の「突然変異」を墓地に送り、「E・HEROバブルマン・ネオ」を特殊召喚。「バブルマン・ネオ」に「バブル・ショット」を装備。そのまま「バブルマン・ネオ」で「古代の機械巨竜」に攻撃。「バブル・ショット」の効果によりダメージは発生しないが、代わりに「バブル・ショット」が破壊される。しかし「バブルマン・ネオ」の効果により「古代の機械巨竜」が破壊される。「融合」を發動し、「バブルマン」として扱う「バブルマン・ネオ」と手札の「E・HEROクレイマン」を融合。「E・HEROマッドポールマン」を融合召喚し、壁とする。その後、カードを1枚伏せエンド。

クロノスが「天使の施し」を發動し、3枚ドロして2枚捨てる。「古代の機械獣」に「古代の機械掌」を装備。「マシンナーズ・ソルジャー」を召喚。「古代の機械城」に3つ目のカウンターが乗る。「古代の機械獣」で「マッドポールマン」を攻撃。しかし「マッドポールマン」の方が硬く、ダメージを受けるが「古代の機械掌」の効果により「マッドポールマン」を破壊。「マシンナーズ・ソルジャー」で直接攻撃を仕掛けるが伏せていた「聖なるバリアミラーフオーズ」により迎撃され、クロノスのモンスターが全滅。その後「古代の整備場」で「古代の機械巨竜」を回収し、墓地の「マシンナーズ・フォートレス」を特殊召喚するためのコストとなる。カードを伏せず、エンド。

十代は手札から「E・HEROスパークマン」を召喚。「古代の機械城」に4つ目のカウンターが乗る。「スパークマン」に「スパークガン」を装備。「スパークガン」の効果により「マシンナーズ・フォートレス」を守備表示に変更。「スパークマン」で「マシンナーズ・フォートレス」に攻撃、そのまま撃破したものの「スパークマン」も「マシンナーズ・フォートレス」の効果により破壊される。カードを1枚伏せエンド。

クロノスが「古代の機械城」の効果を使用し、生贄の代わりにする。「古代の機械巨人」を召喚。「天よりの宝札」を発動し、クロノスと十代は手札が6枚になる。「古代の機械巨人」で十代に直接攻撃をする。ダメージステップに速攻魔法「突進」を使用し、さらに打撃力を上げた。

その後、カードを2枚伏せエンド。

十代は手札から「融合」を発動。手札の「E・HEROフェザーマン」と「E・HEROバーストレディ」を融合。「E・HEROフレーム・ウィングマン」を融合召喚。そして「摩天楼スカイスクレイパー」を発動して第一話の最後になつたらしい。

個人的にはカードの組み合わせがうまいと感じたものの、なぜこうも都合よく専用カードが来るのかが不思議で仕方ない。

話すのにに夢中になっていたら、先生たちが引率して講堂に案内しているので俺たちもその案内に従って講堂に行った。
よくある入学式だ・・・眠い。zzz

デュエツ！！

キングは1人、この俺だ！

静かにしていてくれ！

やらないか？

お前にも愛を与えてやる。

俺は少々荒っぽいぜ！

ゴレンダア！！

グレンキャノンもだ！

アーツ！！！！

）

っは。とても恐ろしい夢を見ていた。特に尻が壊滅的になると言う意味でな。

あれ？起きたと同時に閉会の言葉になっていた。な、何を言っているのか（以下略）
ともかく、これから寮に行つて荷物整理だな。・・・と、その前に十代を起こさねば。

ユサユサ

「ん、あれ？俺寝ちまったのか？」

「そうだ。ちなみにもう入学式は終わつて、皆動き始めたぞ。」

「そっか。ありがとな、翔。」

「いいつてことよ。」

「お、来たか」

外に出ると三沢が待っていた。

「三沢もこれから寮に行くのか？」

「ああ、色々と整理したいからな。」

「そうか。じゃあまた今度な、三沢。」

「またな、三沢。」

「ああ。またな、十代。翔。」

そういうと三沢はイエロー寮へと向かった。
さて、俺たちもレッド寮に行くか。

「そろそろ行こうぜ。」

「そうだな。」

・・・

・・・

・・・遠い。もはや遠足クラスだぞ？

ん、あれか？何かぼつんと立っているアパートもどきか？
う、嘘だと言ってよバーニイ！！

結果：レッド寮でした。

しかも寮長が「にゃ〜」と語尾のつく先生。そう、大徳寺先生だ。
・・・男で「にゃ〜」は無いと思うぞ、うん。まあ、それは置いといて。

大徳寺先生から部屋の番号を教えて貰い、いざ自分の部屋へGO！！
ん、原作通りじゃないのかって？ああ、俺の場合は筆記試験で上位
だったし、それにクロノス教頭にも勝ったから1人部屋に案内され
たよ。

意外と中はしつかりしているらしく、安心した。これで中が手抜き
だったら本当に泣けたよ。

寝ている間に雨漏りとか勘弁だしな。

「ここなら・・・大丈夫そうですね。」

ああ、出てきても大丈夫そうだ。

一応玄関のドアには鍵をかけたしな。

「こつやって実体化するのは、久しぶりですね。」

白き翼に望みを乗せて、輝け明日の守護者
ガーディアン・エアトス、ただいま見参！

「私は勇者特急じゃありませんよ！？」

わかってるよ。って、頼むから涙目になるな！！

・・・こつやって顔を合わせるの久しぶりだな、アイリス。

次回予告

出会いは全ての始まり　そして時は動き出す
運命の歯車が回る、回る

まだ見ぬ明日を変えながら

「次回　フィールド3：帰還」

弾いたコインは、どこへ舞う

フィールド2：出会い（後書き）

色々和不評が出てくることを覚悟して精霊を出しました。

ガーディアン・エアトスつて、他の遊戯王GX系小説でも結構出番が多いと思います。中には強化型がシンクロモンスターとして登場したり、「バスターモード」の派生版で強化されたりとかなり優遇されています。

まあ、初登場から6年もの時を経てOCG化したその人気振りには驚かされましたが・・・

ちなみに作者もエアトスはお気に入りです。が、やはりアニメでの影響がラフェールが使うのが一番しっくり来ます。

フィールド3：帰還（前書き）

第三話でまだ1日が終わらない・・・どうなっているんだこの小説は。

はい、作者の行き当たりばったりです。申し訳ありません。orz

なんとという究極のミス「マルコ」ではなく「マルタン」でした。
どうしてこうなったorz

フィールド3：帰還

「久しぶりだな・・・アイリス。」

「いつも会っていますけどね。」

苦笑しながら、答える。まあ、そうなんだけどね。

「しかし、こうやって実体化するのは久しぶりですね。マスター。」
「うーんと、体を伸ばしている。
本当なら、いつも実体化させてあげたいのだが・・・そうはいかない。」

精霊という存在がもし世に広まったとすれば、必ずそれを悪用する輩が出てくるはずだ。何時の時代も、懲りないものだ。

まあ、世間がそれを認めなかったとすれば普通の服を着させて一般的に行動させる事は可能かもしれないが、それも危ない。万一、警察の取調べがあれば即アウト。パスポートも国籍も無いので。そうなれば、色々と厄介なことになりかねない。

ちなみに実体化していない状態でアイリスと話す時も細心の注意を払わなければならないので、結構きつかったりする。下手に怪しまれるのは勘弁だしな。

「ああ、ここならあまり大声で話さない限りは大丈夫だろう。」

この部屋はレッド寮の1番端つこで、階段から1番離れていたりする。泣けるぜ。

だが、そのおかげでアイリスとゆっくり話すスペースを確保できたのは運が良かった。

てか、1人用の部屋にはキッチンがあるんだ。しかも電気、ガス、水道といったライフラインまで完備されているのは驚いた。レッド寮ということで省略されているのを覚悟していたからなあ。

「やっと・・・気を休めて、ゆっくり話すことが出来るんですね。まるで夢のようです。」

とても嬉しそうだ。それもそうか、いままで周りを警戒しながら話さないといけなかったなあ。

「そうだな。だが、先に荷物整理をしなければいけないな。」

「そうですね。私も手伝います。」

「ありがと。じゃあ、アイリスは台所用の荷物を頼む。」

「はい。」

台所用品はアイリスに任せた。てか、彼女が料理を担当しているから俺がやったら不味いことになりそうだ。

「さて、最初に衣類品をタンスに入れて・・・。」

・・・

・・・

・・・

「ふー、やっと終わったか。」

まさか夕方までかかるとは思わなかった。が、何とか夕食までには間に合ったようだ。

「マスター、お茶が入ったので飲みませんか？」

「ありがとう、アイリス。いただくよ。」

何というタイミング、さては狙っていたな？

「いいえ、偶然です。」

ふふふつと、笑っている。どう見ても待機していたな。

と、お茶が冷めないうちに飲むか。

ごくっ・・・ふーっ、うまい。

仕事疲れにはたまらんな。

「そういえばマスター。今日は新人歓迎会がありましたよね。」

「ああ、手紙通りの日程ならな。」

「なら、今日の夕飯はそれで済ませますか？」

うーん、新人歓迎会ってことだからそこそこの料理は出るかもしれないし・・・そこで済ませるか。

「ああ、今日はそれで済ませるよ。」

「わかりました。」

ドンドンッ！

「翔、いるか？」

十代が尋ねてきたようだ。ヤバイ、もう歓迎会の時間だったりするのか？

（アイリス、すまないがお茶の片付けを済ましたら実体化を解除してくれ。）

（はい。・・・残念です。）

少し落ち込んでいるみたいだ。ごめんな、アイリス。さて、出してみるか。

「ああ、ちょっと待ってくれ。」

アイリスの実体化解除も済み、一応デュエルディスクを持ったし・
・行くか。

ガチャッ

「どうした。十代？」

「そろそろ歓迎会が始まるから一緒に行かないか？」

「ん、いいぞ。じゃあ、行くか。」

「おう、早く行こうぜ！腹が減って待ちくたびれてたんだ。」

・
・
・

どうやら会場は大徳寺先生の部屋らしい。レッド寮の生徒全員が入りきるスペースに住んでいるってのもすごいな。

料理の方も中々豪華だな。アニメなら育ち盛りにはきつかったが、ここでは十分腹を満たせそうだ。

(良かったですね。マスター。)

(ああ、確かに。これで夜中に夜食を頼まなくて済む。)

(それぐらい別に構いませんよ?)

(いつも、ありがとう。)

(いいえ、どういたしまして。それより、始まるみたいですね。)

大徳寺先生がどうやら歓迎の言葉を言うようだ。

「新1年生諸君、入学おめでとうなのにな。このデュエルアカデミアでは様々な事を学べるチャンスがあるのにな。なのでそのチャンスを生かし、積極的に物事に取り組んでほしいのにな。話が長いと料理が冷めてしまうので、そろそろいただこうかにな。」

お、話が短くて助かった。

さて、いただきますか。周りの皆もスタンバっているしな。

「あ、今日は特別ゲストが来ているにゃ〜。先に紹介しておきますにゃ。」

あ、皆ちよつと落ち込んでるな。一部では不満そうだし。

「それでは紹介しますにゃ。何と、今日来たのは……。」

ゴクリッ

「カイザーこと、3年生の丸藤 亮君だにゃ〜。」

「……な、なんだってっー!!」「」

(いきなりですね……。マスター?)

何で兄さんがこんなに早く帰って来るんだ!? 確かもっと先のはずだったが……。

案の定、出てきてからはかなりの注目を浴びているな。

「新一年生の諸君、入学おめでとう。知つての通りデュエルアカデミアでは「デュエルモンスターズ」を専門的に取り扱っている。だが、5科目と体育もあるからくれぐれもおそろかにしないように……。私の錬金術がないにゃ!」まあ、それは置いといて。「酷いにゃ!」「これ以上話すとかどくなってしまうから歓迎の料理をいただく。」

はやつ……。面倒だから途中で切ったな。大徳寺先生カワイソス。

「……では、いただきます。」

「ちょっと待つノーネッ!!」

その声はクロノス先生!

・・・うわっ、テーブルが2つに分裂してその中からクロノス先生が現れた。

あんたはMrうるちか?中のヒト的な意味で。

「こんなスペシャルゲストを呼んでいて私に声をかけないなんて酷いノーネ。」

「す、スペシャルゲストって言っても、一生徒ですし・・・。」

大徳寺先生のほうが正論に聞こえる気がするが・・・ほっというおこっ。

さて、メシメシ。

ん、兄さんがクロノス先生と話し始めたようだ。

「クロノス先生、お久しぶりです。」

「シニョール亮も元気そうぞ何よりなノーネ。修行の成果はどうなったノーネ?」

「まあ、ぼちぼちですが・・・これまでに無い様々な経験をさせてもらいました。」

「それは良かったノーネ。ところで、今年はシニョール亮の弟であるシニョール翔と戦ったノーネ。」

それまで料理にしか興味を持っていなかった生徒たちが一気にクロ

ノス先生に注目した。

「ほう、私の弟にですか？で、どうでした。実力の方は？」

「中々見所がありまシータ。試験用のデッキとは言え、私を打ち破った実力はすばらしいノーネ。」

「翔が勝ったのですか。成長したみたいで兄としては嬉しいですね。」

「兄さんが置いていったサイバー・ドラゴン達が無ければやばかったです。」

あ、兄さんと目が合った。

「翔、久しぶりだな。元気になっていたか？」

嬉しそうだな・・・少し複雑な気分でもあるが。

（中の人が変わりますからね。）

（まあ、な。）

「はい。兄さんも相変わらずで何よりです。」

「こやつめ、ハハハ。」

ぐわしぐらしと、俺の頭を撫でるカイザー。

いや、撫でると言うより髪を崩すと言った方が正解か？

「ところで兄さん。例の置いていったデッキなんだけど・・・。」

「ああ、あのサイバーデッキはお前の入学試験祝いに置いて行ったんだ。好きに使ってくれていいぞ。」

え、マジか？太っ腹だな。

「いいの？サイバーデッキは1セットしか無かったはずじゃあ？」

「サイバー・ドラゴンなどは結構余っていたからな。買占め……げぶんげぶん、もとい手元になんかあるから困ってないぞ。サイバーデッキもちゃんとするし。ちなみに予備デッキも作っておいたから。」

（今、買占めって言ったよな？）

（言いましたね。）

（まさかサイバー系のカードが希薄なのは、兄さんが買い占めたからなのか？）

（ま、まさか……汗）

「と、それよりだ。翔。久しぶりに決闘しないか？」

兄さんから決闘の申し込みが来ました。

逃げるわけにはいかないな。戦えるチャンスなんて滅多にないし。

「別に良いけど、どこでするの？」

「そうだな……ここだと少し狭いから、外でやるか。」

「ん、わかった。」

皆がテーブルや料理を外に持ち出し始めた。
さては食べながら観戦するつもりだな。

「すごいな、翔。あのカイザーと決闘できるなんて。くーっ、俺も決闘してみたいぜ!!」

「後から兄さんに頼んでみれば？運がよければ決闘してもらえるかもしれないし。」

「ホントか！？よしっ、今のうちデッキ調整しとかないとな!!行くぞ、ハネクリボー。」

(クリクリっ。)

十代がマツハで部屋に帰っていった。
転んで怪我をしなきゃ良いが……。てか、地味に精霊の声が聞こえたぞ。

やっぱりハネクリボーか。

「さて、私も息子に連絡を……。」「

「先生の息子さんもこの学園に来ていらっしゃるのですか？」

あ、兄さんが食いついたようだ。

「そうなのーね。マルタンと言う名前の黒髪の少年が私の息子なのデース。ちなみにシニョール翔と同じく、今年入学したばかりデー

ス。」

え、マルタンってあの？ヘルヨハンの前の、あれか？
この世界は一体どうなっているんだ？

「ほう、一度手合わせ願いたいものですね。」

「ははは、今のマルコではシニョール亮やシニョール翔に勝つことは難しいと思うノーネ。ですが、私はマルコが最後まであきらめずに決闘してくればそれで満足なノーネ。」

「親の性……ですか？」

「そんなも感じなノーネ。シニョール亮もいずれ、感じる日が来ると思うノーネ。」

「今はまだ、想像できないですね。」

「私も当時は似た感じだったノーネ。まあ、焦らずにゆっくり感じればいいノーネ。」

「そうですね……。ご教授、ありがとうございます。」

「礼はいらないノーネ。これも、教師が生徒に教える一つの授業なノーネ。」

物凄く……俺が場違いな所にいる気がしてならないや。ははっ！と、三沢に連絡しておこう。実はメールアドレスを貰っているから、連絡がつけたりするんだ。

えーと、「俺とカイザー亮がレッド寮前で決闘することになった。

何か得られる物があるかもしれないから、見に来た方がいいぞ。」
と、送信！！

さて、外に出てみるか。ん、もう夜になったのか。

3〜4人が何やら作業をしている。

どうやら、ここの際の生徒がいつの間にかキャンプファイヤーの薪を組み始めていた。

は、早いなあ……。

(あの約束のせいで、今回も出番を見送ってしまつてゴメンな。アイリス。)

(仕方ありませんよ。それに、来るべき時のためですから。)

(だな。しかし……空が綺麗だなあ。)

(そうですね。)

ふと、空を見上げる。

真っ暗になった空に、無数の星が輝いていた。

久しぶりの兄弟対決には絶好の場所だな。

さて、兄さんも外に出てきたみたいだ。恐らく準備万端ということだろう。

なら、俺もオリジナルのカードが入ったこのロイドデッキで死力を尽くさせてもらおう。

風は風を運び、噂は噂を運ぶ

全ての生徒、教師が見守る中……兄弟対決は始まった。

次回「フィールド4：サイバーVSロイド」

オリジナルは主人公の専売特許ではない。

フィールド3：帰還（後書き）

翔「今回はついに兄さんと決闘か……。」

アイリス「色々予想外でしたね。」

翔「まったく。まさかこんなに早く兄さんが帰ってくるとはなあ。
一応オリジナルのカードを加えてみたけど、厳しいだろうな。」

アイリス「そんなに強いのですか？」

翔「チートドローは伊達じゃないの一言かな。俺の場合はサーチして何とか凌いでいるが……消耗戦になったら確実に負ける。」

アイリス「短期決戦を挑んでみますか？」

翔「サイバーが短期決戦用だな。しかもチートドローで強化されているという鬼畜仕様。」

アイリス「八方塞ですね。（汗）」

翔「いや、起死回生の策が案外見つかるかもしれないから、やるだけやってみるよ。」

アイリス「頑張ってください。」

フィールド4：サイバーVSロイド（前書き）

勢いに任せて書いたらこんなことに・・・

まだまだ文章が甘いので努力せねば。

今回はオリジナルが入っているので、ご了承ください。
それと今回は少し書き方を変えてみました。出来れば感想をお願いします。

追記：途中で場のモンスターの数が間違っていました。申し訳ありません。

誤字、脱字が多すぎて泣けますね・・・。

フィールド4：サイバーVSロイド

「これより、シニョール亮対シニョール翔のデュエルを始めるノ
ネ。」

「カイザー、頑張れー!!」

「翔、負けんじゃねーぞ!!」

(なあ、レッド寮だけの歓迎会がどうしてこうなった?)

(ははは。。。ブルー、イエローの人たちもどうやら観戦しに来
たみたいですね。)

俺が三沢に送ったメールがばれてイエローの生徒が、マルタンに連
絡した内容がばれてブルーの生徒が来たんじゃないかと思う。とい
つても、俺の勘が正しければの話だが。てかさ。。。

(三沢なんかビデオカメラを持って録画しているし。)

(今後の参考にするんじゃないでしょうか?)

まあ、別に構わないのだが。

と、兄さんがデュエルディスクを構えた。

「翔、始めから全力でかかって来い。」

「もちろん、そうじゃないと勝てないよ。」

流石にサイバー相手にのんびり事を構えられるほど俺は気長じゃない。

さて、やるか。

「「決闘!!」」

わーっ、と一段と大きくなる歓声。

正直耳が痛いよ。

「俺の先攻、ドロー!手札から「サイバー・ドラゴン・ドライ」を攻撃表示で召喚。カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

亮 手札3 場 モンスター1 魔法・罠2

サイバー・ドラゴン・ドライ ATK1400

「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を簡略化させたデザインだな。しかし・・・「サイバー・ドラゴン・ドライ」???初めて聞くカードだ。

恐らく、場にある時「サイバー・ドラゴン」として扱う効果を持っている可能性は大にある。

だとしたらサイバーがさらに強化されたのかよ。気が滅入るぜ。orz

さて、気を取り直して・・・。

「俺のターン、ドロー!俺は手札から「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚・・・。」

サイバー・ドラゴン ATK2100

罠か?いや1400といえば・・・リクルーターか?

もしそうだとしたら厄介だが、やるしかない。

「バトル、「サイバー・ドラゴン」で「サイバー・ドラゴン・ドライ」を攻撃！エヴォリューション・バースト！！」

こちらのサイバー・ドラゴンが放ったエネルギー弾が、サイバー・ドラゴン・ドライを消し飛ばした。

亮LP4000 3300

「「サイバー・ドラゴン・ドライ」のモンスター効果発動！このカードが戦闘によって破壊された時、デッキから「サイバー」と名のつくレベル4以下の機械族モンスター1体を特殊召喚することが出来る。俺は「プロト・サイバー・ドラゴン」を特殊召喚。」

プロト・サイバー・ドラゴン ATK1100

やはり予想は大当たりか。サイバー専用とはいえ、サポートカードで爆発力がさらに増したな。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

翔 手札3 場 モンスター1 魔法・罠2

サイバー・ドラゴン ATK2100

「俺のターン、ドロー。手札から「天使の施し」を発動。3枚ドロし、その後2枚捨てる。」

リバースカードオープン！「ゲットライド！」を発動。墓地の「アーマード・サイバーン」を「プロト・サイバー・ドラゴン」に装備。「アーマード・サイバーン」の効果発動。1ターンに1度、装備さ

れたモンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせることによつて、フィールド上の表側表示のモンスター1体を破壊する。翔の「サイバー・ドラゴン」を破壊！」

プロト・サイバー・ドラゴン ATK1100 100

まさか、あのコンボが完成したのか？

「さらに手札から「機械複製術」を発動。自分の場の攻撃力500以下のモンスター1体を対象にし、デッキから同名モンスターを2体まで特殊召喚する。俺は「プロト・サイバー・ドラゴン」を指定。そして「プロト・サイバー・ドラゴン」は場に存在する時、「サイバー・ドラゴン」として扱う。よって、デッキから「サイバー・ドラゴン」2体を特殊召喚する！」

このコンボってかなり難しいはずなんだけど、何でこんなにあっさり出来ているんだろ？

サイバー・ドラゴン ATK2100

サイバー・ドラゴン ATK2100

プロト・サイバー・ドラゴン ATK100

「手札から「サイバー・ドラゴン・ドライ」を召喚。そして手札から魔法カード「融合」を発動！「サイバー・ドラゴン」となっている場の「プロト・サイバー・ドラゴン」とこのカード以外に「サイバー・ドラゴン」と名のつくモンスターが存在する場合「サイバー・ドラゴン」として扱うことが出来る「サイバー・ドラゴン・ドライ」と場の「サイバー・ドラゴン」を融合！「サイバー・エンド・ドラゴン」を融合召喚……！」

な、何だつてー！！
早い、早いよ兄さん。

「セットカードオープン、「リビングゲッドの呼び声」を発動！墓地の「融合呪印生物―光」を特殊召喚。そして効果を発動。このモンスターと「サイバー・ドラゴン」を墓地に送り、「サイバー・ツイン・ドラゴン」を特殊召喚！」

2ターン目で「サイバー・エンド・ドラゴン」と「サイバー・ツイン・ドラゴン」を揃えただー！！

「手札から「天よりの宝札」を発動。お互いに手札が6枚になるようにデッキからドロウする。俺は5枚ドロウする。」

なんつー、手札調整……。

「じゃあ、俺は3枚ドロウするよ。」

「手札から「ハリケーン」を発動。お互いの魔法・罫を全て手札に戻す。」

ぎゃー、俺のセットカードが！！

「バトル。「サイバー・エンド・ドラゴン」でダイレクトアタック！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

食らったら負けるが……ここでそちらの「天からの宝札」が助けになるとはな。

「手札から「カイトロイド」を墓地に送り、効果発動。戦闘ダメー

ジを0にする。」

「ほう、防いだか。なら「サイバー・ツイン・ドラゴン」でダイレクトアタック！ツイン・エヴォリション・バースト！！」

「墓地の「カイトロイド」をゲームから除外。ダメージを0にする！」

「だが、「サイバー・ツイン・ドラゴン」は1度の戦闘で2回攻撃することが出来る。ツイン・エヴォリション・バースト！！」

流石に、もう防げないな。てか、1枚で2度おいしいカイトロイドは反則だと思う。

翔LP4000 1200

「カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

亮 手札3 場モンスター2 伏せ2

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800

・・・

「うー、デッキ調整をしていたら遅れちゃったぜ。げっ、もう始まってる！」

カイザーとの戦いのためにデッキ調整していたら、いつの間にか翔

との戦いが始まっていた。ヤバイ、急いで見ないと。

「十代、お前今まで一体どこ行っていたんだ？」

あ、三沢か。

「すまねー、ちょっとデッキ調整していてな。」

「まあいい。それより・・・翔がやばい。」

「え？」

改めてみると、翔のLPは1200しか無く伏せカードもない。手札がまだ多くあるのが唯一の救いだ。一方カイザーはLPがまだ3300もあり、場には何とカイザーの切り札である「サイバー・エンド・ドラゴン」と「サイバーツイン・ドラゴン」の2体が存在していた。

「このままでは、翔は押し切られるぞ！」

三沢が苦しそうな顔をしている。確かに一見そうかも知れねえ・・・けど、

翔はまだ諦めてはいない！

「いや、翔ならこのピンチをひっくり返してくれそうだけぞ！..」

...

...

「頑張れー！翔ー！！」

あの声は十代、戻ってきたのか。意外と遅かったな。

そして、その遅れを取り戻すかのように必死に応援してくれていた。

なら、その応援に答えないとない！！

「俺のターン、ドロー！」

「ラヴァ・ゴーレム」が来なかったのは痛いが・・・まだ方法はあ
る。

「手札から魔法カード「大嵐」を発動、フィールド上の全ての魔法・
罠カードを破壊する。」

「セットカードオープン、カウンター罠「マジックジャマー」を発
動！手札からカードを1枚墓地に送り、魔法カードの効果は無効に
して破壊する。」

「大嵐」がやられたか、しかし手札は消耗できた。

「手札から「苦渋の選択」を発動！デッキからカードを5枚選び、
相手はその中から1枚を選択する。そして選択したカードを手札に
加え、残りのカードを墓地に送る。俺はデッキから「パトロイド」、
「ドリルロイド」、「ラダーロイド」、「スチームロイド」、
「レスキューロイド」を選択。」

全てロイド系で揃えた理由は・・・すぐに分かるさ。

「なるほど。手札に「エクスプレスロイド」があるか・・・。なら
「レスキューロイド」を選択しておこう。」

やはりバレたか、まあ・・・少し考えればそうだよな。

・・・

・・・

「そうか！」

「どついつことだ？三沢？」

はっ、と衝撃を受けた三沢に対し、十代はちんぷんかんぷんだった。

「あれは「エクस्प्रेसロイド」で回収するために使ったんだ。例えカイザーが何を選んだとしても、その後に好きに回収することが出来る。・・・考えたな。」

「へえ、すごいな。翔は。」

「ああ、俺もこの戦術には驚かされた。」

・・・

・・・

墓地肥やしは基本中の基本です。
本当にありがとございました。

と、気を取り直して・・・

「魔法カード「強欲な壺」を発動し、デッキからカードを2枚ドロ
ー。手札から「アースクエイク」を発動。表側表示のモンスターを
全て守備表示に変更する。」

サイバー・エンド・ドラゴン DEF2800

サイバー・ツイン・ドラゴン DEF2100

「そして手札から「エクスプロイド」を守備表示で召喚し、効果発
動。墓地の「ドリルロイド」と「スチームロイド」を手札に加える。
」

よし、そろった。

「手札から魔法カード「融合」を発動。手札の「ドリルロイド」「
スチームロイド」「サブマリノロイド」を融合。「スーパービーク
ロイド ジャンボドリル」を融合召喚。」

スーパービークロイド ジャンボドリル ATK3000

「バトル。「スーパービークロイド ジャンボドリル」で「サイバ
ー・エンド・ドラゴン」に攻撃！」

ミラーフォースが来なければ大丈夫だが・・・いけるか？

「中々やるようになったな・・・だが、リバースカードオープン。
罠カード発動！「サイバネティック・ヒデウン・テクノロジー」！
相手モンスターの攻撃宣言時に、自分の場に存在する「サイバー・
ドラゴン」及び「サイバー・ドラゴン」を融合素材とするモンスタ
ー1体を墓地に送り、相手の攻撃モンスターを破壊する。俺は「サ
イバー・ツイン・ドラゴン」を墓地に送り、「スーパービークロイ

ド ジャンボドリル」を破壊する！」

無残にも「サイバー・ツイン・ドラゴン」と。「スーパービークロイド ジャンボドリル」が溶鉱炉へと落ちていった。
・・・かなりピンチになったぞ、おい。

「カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

翔 手札1 場 モンスター1 伏せ2

エキスプレスロイド DEF1600

「俺のターン、ドロ。」「サイバー・エンド・ドラゴン」を攻撃表示に変更。バトル、「サイバー・エンド・ドラゴン」で「エキスプレスロイド」に攻撃、エターナル・エヴォリション・バースト
！！」

貫通効果持ちだから、エキスプレスロイドだけでは防げない。

「リバーズカードオープン、畏カード発動！「ガード・ブロック」！相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動することができ、その戦闘によって発生する自分へのダメージは0になる。そしてカードを1枚ドロする。」

「防いだか・・・カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

亮 手札3 場 モンスター1 伏せ1

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

結構やばいが、キーカードさえ引ければ・・・。

「俺のターン、ドロー!!」

まだ、何とかなるかもしれない。

「セットカードオープン、「リビングデッドの呼び声」を発動。俺は「エクスペレスロイド」を特殊召喚。そして効果を発動し、墓地の「パトロイド」と「ラダーロイド」を手札に加える。そして「エクスペレスロイド」を生贄に、「ジャンボロイド」を召喚。「ジャンボロイド」の効果発動。このモンスターが「ロイド」と名のつくモンスターを生贄にして召喚に成功した時、デッキからカードを2枚ドローする。」

ジャンボロイド DEF2700

(ジャンボ旅客機をモチーフにしたロイド)

・・・すべてのキーカードが揃った!!

まさかこのカードで決着をつけることが出来るとはなあ。

「兄さん。」

「どうした、翔?」

「俺たちの決闘を幕引きするのに相応しいカードを、今手札に加えることが出来たよ。」

「まさか!」

焦ってももう遅い。これで、決まりだあー!!!

「手札から「パワーボンド」を発動!!手札の「パトロイド」「ラ

「ダーロイド」「レスキューロイド」と場の「ジャンボロイド」を融合！！」

「レスキューロイド」と「ラダーロイド」が「ジャンボロイド」の左右の格納庫から発進し、その格納庫が変形して「ジャンボロイド」の足となった。次に「ジャンボロイド」の前頭部分が2つに割け、肩となる。そこへ「レスキューロイド」と「ラダーロイド」が左右の腕となり、「パトロイド」が大きく開かれた「ジャンボロイド」の胴体部分へと格納された。そしていつの間にか現れていた頭部の目に光が宿る。

「火炎合体！」「ファイヤーダグオン」！！！！」

ファイヤーダグオン A T K 3 2 0 0

）　　）　　）

もちろん「勇者指令ダグオン」のオープニングが流れるようにデュエルディスクを改造しておいた。かっこいいぜ！！

「攻撃力3200!？」

「まだ足りていないぞ!!！」

どよめきが奔るものの、まだ勝てなくて残念がる声もあるが……大丈夫だ。

ファイヤーダグオン A T K 3 2 0 0 6 4 0 0

「攻撃力が倍になった!？」」

「パワーボンドの効果だ。パワーボンドの効果によって融合召喚されたモンスターは、そのターン終了時まで攻撃力が元々の数値分アップする。」

不思議がっていた生徒に指導、ご苦労様です。

「さらに、「ファイヤーダグオン」の効果発動！「ファイヤーホルド！！」」

赤い炎によって拘束されるサイバー・エンド・ドラゴン。

「この効果は相手の場のモンスター1体を選択し発動する。この効果の対象となったモンスターは、ターン終了時まで他のカードの効果を受けない。」

「な、何！！（手札のオネストが・・・つく）。」

オネスト辺りが飛んできたら終わりだからなあ。危ない危ない。

「バトル、「ファイヤーダグオン」で「サイバー・エンド・ドラゴン」に攻撃、「ファイヤーブレードツ！！」」

右腕となった「ライダーロイド」から剣が伸び、「ファイヤーダグオン」が構える。

そして、一気に切りかかった。

「リバースカードオープン、畏カード発動！「聖なるバリア ミラーフォース」！」

光の壁が現れ、「ファイヤーダグオン」の攻撃を跳ね返そうとする。

だが「ファイヤーダグオン」はその光の壁を突き通るかのごとく、すり抜けた。

「何!」

「「ファイヤーダグオン」は攻撃時、相手の罨カードの効果を受けない!さらに、」

ファイヤーダグオン ATK6400 7400

「「「また攻撃力が上がった!!」」

「「ファイヤーダグオン」は攻撃時、攻撃力が1000ポイントアップする!」

そして、「ファイヤーダグオン」は「サイバー・エンド・ドラゴン」の中心部を十文字切りにした。「ファイヤーダグオン」が離脱し、構える。そして・・・「サイバー・エンド・ドラゴン」が力を失い、爆発した。

亮LP3300 0

な、何とか・・・勝ったな。

「「「わーっ!!!」」」

物凄い歓声を受けているが・・・正直疲れ果てていて、ぐったりしたい。

すると、兄さんがやって来た。

「翔、強く・・・なったな。」

「まあね、兄さんもさらに強くなったよ。」

ん、クロノス先生が何やら企んだ顔をしていた。

「さてここからは、新入生徒諸君の歓迎会兼・・・デュエル大会を始めるノーネ!!!!」

「「「おーっ!!!!」「」」

ま、マジですか!?

しかもブルー、イエロー、レッド生徒のほとんどが賛成の声を上げているし・・・。
俺に死ねと?

(お疲れ様です。マスター。)

(ただいま、アイリス・・・骨は拾ってくれ。)

(不吉な事を言わないでください!!!)

冗談でもなさそうなんだな・・・これが。

まあ、何とか体を持たせるためにとにかくご飯を食べないと。
ん、十代と三沢がやって来たようだ。

「すごいな、翔!まさかあのカイザーに勝てるなんて夢にも思わなかったぜ!!それに、最後に出した「ファイヤーダグオン」がサイッコーにかっこよかったぜ!!!!」

「ああ、ありがとう十代。」

いつもならこの活発さは面白く感じるが・・・疲れているときは勘弁してくれ。

「おめでとう、翔。まさかカイザーに勝てるとは・・・。ん、死にかけているが大丈夫か？」

「ありがとう、三沢。ともかく今は疲れたから、せめて飯を食わせてくれ。」

「あ、ああ。そういえば俺たちもあのデュエルに夢中になっていたから、ご飯を食べ損なっていたな。今から取りに行くか？」

「行く行く、俺もつめちや腹ペコなんだよ。」

「おう・・・やっと飯にありつけそうだ。」

「あ、あの・・・。」

ん、ふと声が出た方向を見ると、青い服を来た黒い髪の少年が立っていた。

まさか・・・。一応尋ねてみるか。

「君はもしかしてマルタン君かい？」

「ぼ、僕をご存知なんですか？」

「ああ、クロノス先生から話を聞いていてね。おい、十代、三沢。クロノス先生の息子さんのマルタン君だ。」

十代と三沢が物珍しそうにマルタンを見ていた。

「へー、あのクロノス先生の。」

「だが……。」

「クロノス先生にまったく似てないな。」

「ははは……僕は母親似ですから。」

……

クシユンッ！

「大丈夫ですか？クロノス先生。」

「今、悪口を言われた感じがしますが、気にしないことにするノーネ。」

……

「あ、そういえばまだ自己紹介がまだだったな。俺は遊城十代。よろしくな！」

「俺は三沢大地。三沢か大地のどちらかで構わない。」

「僕は大和マルタン。マルタンでいいよ。」

「そうだ、マルタン。俺と決闘しようぜ！クロノス先生の息子と聞

いて、ワクワクしてきたぜ!！」

「僕は別に良いですけど・・・翔さんが死にそうですよ?」

十代、頼むからそこは空気を読んでくれ。

それとマルタン、空気を読んでくれてありがとう。

「そうだな、じゃあ・・・まずは飯にして腹ごしらえだな。」

「僕も一緒にさせてもらってもよろしいですか?」

「ああ、いいぜ!！」

「ありがとうございます。」

それからはずつくりと時が進んだ。

飯を食って腹ごしらえをし、その後急遽開かれたデュエル大会ではブルー生徒、イエロー生徒、レッド生徒が完全に混ざり合い、己が腕を披露しつつ、打ち解けていった。

そして祭りは、夜遅くまで続いた。

・・・

・・・

少し離れた所の廃屋から1つの物陰が現れた。

「ふふふ・・・今年も選り取り見取り。いい獲物ね。せめて、私の餌になりなさい。下等な人間たちよ!」

フィールド4：サイバーVSロイド（後書き）

亮VS翔・・・考えるのと、書くのが大変でした。

今回出したオリカは今度の機会にでも詳細を書こうかと思っています。

フィールド5：急変（前書き）

この話から少し原作と順番が狂ってきます。

・・・辻褄合わせ大丈夫かなあ？

フィールド5：急変

「で、あるからして……」

ん、今何しているかって？授業だよ、授業。

ちなみに日にちとしては、あの新入生歓迎会の1週間後だ。

「ここはこうなって……。」

暇だ……。今は「デュエルモンスターズ」の授業をしているが、内容が酷い。

まさか基礎の基礎をもう一度ここで習うとはなあ。

気分的に、数学を算数からやり直している感じだ。

(眠そうですけど、大丈夫ですか？)

(何とか。正直アイリスと話せてなかったらとっくに寝てるよ。)

さすがに声を出したらばれるので、筆談で答えている。

「む、時間か。今日はこれまでにする。」

やっと終わった。次の講義は錬金術……大徳寺先生か。

やっぱり錬金術って両手をパンツ！てすればできるのか？

「流石に無理ですよ！！」

「ですよー。って、大徳寺先生。何時からそこに？」

「今来ましたのにや。これから皆に注意事項がありますから、このまま教室に残ってほしいのにや。」

えー、と不満そうな声上がる。気持ちは分かるぞ。

「まあ、落ち着いて落ち着いて。・・・こほん。このデュエルアカデミアの近くに廃屋があるのは皆も知っていると思うにや。早い話があそこに近づかないようにくれぐれも気をつけるのにや。」

「何ですか？」

疑問に思ったレッド生徒が声を上げる。

「知っている人は知っているかもしれないけど、昔この島は外国から移住したとある一家が住んでいたのにや。しかし、その一家が邪神を崇高していた話はあまり知らされていないと思うのにや。」

「そんな話があったのか・・・。」

「で、それと廃屋に何の関係が？」

生徒の中から疑問の声があがる。

「そうか。あの失踪事件か!!」

失踪事件？三沢が何か知っているようだ。

「そうなのにな。順を追って話を進めると・・・あの廃屋は先に話した一家が住んでいたのにや。しかし、子宝に恵まれずその一家は断絶してしまったのにや。」

(な、何かホラーになってきたな。)

((ガクガクブルブル))

アイリス・・・ホラーが苦手なのか。俺も苦手なんだがな。

「そこへ、廃屋を解体しようとした業者が入り込んだのにや。そして悲劇は起こったのにや。」

ゴクンッ

皆が息を呑むのがわかる。

「飛び交う悲鳴、段々と消えていく声。そして最後は・・・再び静寂に戻っていったのにや。まるで初めから何も無かったかのように。」

教室内がとてつもなく緊迫くした雰囲気になる。

「その話を聞いた生徒が肝試し気分に入ったのにや。結果は、業者の人たちと同じく、今でも帰ってきてないにや。」

「ちなみに、その生徒は何年前に入ったんですか？」

ブルー生徒が尋ねる。

「去年にや。薄気味悪いということで、爆破処分をしようとしたのにや。しかし、爆破を担当していた人が爆破3日前に突然謎の失踪をしたのにや。さらに爆破用の火薬も全て綺麗さっぱり無くなって

いたのにゃ。」

皆がぞつとし、教室の空気が一気に冷えた。

「けど、何でニュースにならなかったんだろ？失踪事件って普通報道されるよな？」

イエロー生徒が咳く。普通なら、な。

「・・・その事件を取り上げようとした人々は必ず失踪して行ったという話にゃ。なので、くれぐれも気をつけてほしいのにゃ。」

さーっと、生徒たちの顔から色が消え、さらに温度が下がった。
ん、待てよ？

「大徳寺先生、その話を俺たちにしてあなたは大丈夫なんですか？」

「よくぞ気がついたのにゃ。この話は世間に報道したり解決しようとしなければ災いが来なかつたりするのにゃ。なので、こうして注意するだけに留めておけば命の心配は必要ないのにゃ。」

意外だな。知ったもの全てに口封じをするかと思ったのだが。

それと現状維持は仕方が無いのかもしれないな、誰だって命は惜しいし。

「とにかく、絶対あの廃屋には近づかないでほしいのにゃ。」

コクコクツと全員が同意の意を表した。

あんな話を聞かされて行きたいと思う奴がいるのだろうか？

気になるが、好奇心は猫をも殺すというしやめておくのが無難だな。

と、今から錬金術の授業だから行かないと。

・・・

い、今起こった事を話すぜ。

俺は錬金術の授業を受けていたら、1人の生徒何をとち狂ったのか「サンポール」と「ドメスト」を素材とし、融合。教室内が恐ろしいことになっちまった。

もちろん授業は即中止、数人が保険室送りとなった。

俺も少し吸ってしまったって気分が悪い。

（大丈夫ですか？マスター）

（結構ヤバイかも、皆は真似するなよ。）ガクッ

（マスター、応答してください。マスターッ！！）

GAME OVER

・・・

結局夜になってやっと気分が良くなった。

今は自室で待機しているが・・・もうこりこりだよ、まったく。

ドタドタドタッ！！！！

（何だか騒がしいですね。）

（何かあったのかな？）

ドンッ！！

「翔、今から遊戯さんのデッキを見に行こうぜ！」

十代が現れた。ん、ちょっと待て？遊戯のデッキ公開はまだまだ先のはずじゃなかったのか？

「十代、落ち着け。遊戯さんのデッキ公開なんてまだ無かったはずだろ。」

「何言っているんだよ、翔。今日の午後からそういった放送があったろ？」

はい？

（そうなのか？）

（マスターが必死に倒れないようにしている時に放送されたのではないだろうか？）

ありえるな、十分に。あの時は藁をも掴む気分で耐えようとしたし。まあ、最後は倒れたけど。

「そうか・・・ちょっと待ってくれ、よし。行くか」

万一の時のためにデッキを持っていかねば。最悪、神楽坂と戦う羽目になるからな。

「ああ、早く行こうぜ！」

デュエルアカデミアに向かう途中、三沢やマルコ、明日香とジューン
ことももえ、そして万条目や兄さんと合流した。
何っーか、多いね。人数的な意味で。

（それだけ人気なんですよ。）

（だろうな。）

遊戯さんも大変だな、こんなに人気だと。

パリーンッ！！

「待つノーネ、シニョール風！」

と、のんきに考えていたら案の定ガラスの割れる音が。
ん、風？神楽板の名前か？

「このデッキは頂いて行く。わが主のために！！」

ちよ、どこぞの残党さん！？

中の方は潜入工作のプロだからこの程度は楽勝だろうな。

「急いじつ。」

「」「」「ああ。」「」

・・・

そして展示会場に入ると、無残にも割られたガラスケースと軽症を

負ったクロノス先生が残っていた。

「クロノス先生!!!」

「ん、皆どうしてここに来てるノーネ？」

まあ、そりゃ疑問に思っわな。

「クロノス先生、一体何があつたんですか？」

みんなの疑問をカイザーが聞いた。

「それが・・・いきなりコウモリが私に襲い掛かってきて、その隙にシニョール風が展示予定のデッキを奪っていったノーネ。」

「『なんだって!!!』」

（翔、これは。）

（ああ、かなりやばいかもしれない。）

これは予想外だった。まさか、神楽板とカミューラが手を組んでいたとは。

いや、待てよ。

（あの時、「わが主のために」って言っていたよな。）

（はい。！、まさか）

（恐らく、操られていたのかもしれない。）

でなければ、あんな事を言う必要は無いはずだ。

クロノス先生が何やら悩んでいる。何かあったのか？

「そういえば、あのシニョール風は異様に目が赤くなっていたノーネ。・・・何か裏があるノーネ。」

ビンゴ、これで裏は取れた。

吸血鬼は血をすった人間を下僕に出来るという伝説を聞いたことがある。

それが本当なら・・・。

「で、風はどこに行っただのですか？」

「あの方角は、廃屋があるノーネ。」

「『『それだ。』』」

皆が完全にピンと来たらしい。

まあ、怪しすぎるわな・・・どう考えても。

「よし、廃屋に急ごう。」

「ちょっと待つノーネ。」

皆が行こうとした時、クロノス先生が静止をかけた。

「何でだよ、クロノス先生！」

「あそこは危険なノーネ。だから私も行くノーネ。」

「え、いいのかよ？」

「生徒が危険な所に行くのに、教師が黙っているわけには行かないノーネ。それに生徒が教師を見捨てることであつても、教師が生徒を見捨てるわけには行かないノーネ！」

「ありがとうございます。クロノス先生。」

「それでは、廃屋に行くノーネ。」

「はい（おう）！！！！」

・・・

「はあはあ。」

俺は何のために？何でこんな事を？
負けたくないから？違う！見返すために？
自問自答が続く。

「そこまでだ、神楽坂！」

くっ、見つかったか。

「どうしてこんな事を？」

うるさい。

「早くデッキを返すんだ！」

うるさい、うるさい。

「俺はもう負けない。このデッキさえあれば・・・誰にも負けない
!」

「なら、僕が相手をします!」

「マルコ!」

「いいだろう、このデッキの錆にしてやる。来い!!」

「決闘!!」

・・・

「俺のターン、ドロー!俺は手札から「融合」を発動!手札の「幻
獣王ガゼル」と「バフォメット」を手札融合。いでよ!「有翼幻獣
キマイラ」!

有翼幻獣キマイラ ATK2100

「カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

凧 手札2 場モンスター1 伏せ1

有翼幻獣キマイラ ATK2100

「僕のターン、ドロー!手札から「サイクロン」を発動、凧の伏せ
カードを破壊する。」

「つく。(ミラーフォースが!)」
破壊されたのは聖なるバリア ミラーフォース。運がいいな。

「さらに、手札から「仮面竜」を守備表示で召喚。カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

マルコ 手札3 場モンスター1 伏せ1

仮面竜 DEF1100

「俺のターン、ドロー!!手札から「天使の施し」を発動。3枚ドロし、その後2枚捨てる。手札から「死者蘇生」を発動!墓地の「ブラック・マジシャン・ガール」を特殊召喚。」

「今さっきの天使の施しで落としたツ!?!」

「ご名答。さらに手札から「賢者の石」を発動。デッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚!」

魔術師の少女が賢者の石と思われる物体に呪文を唱えると、石が光を放ち黒き魔術師を場に呼び起こした。

まさに流れるような速さで召喚したが・・・それゆえに手札消費が激しい。

短期決戦じゃ厳しいぞ?

「くっ、「ブラック・マジシャン」に「ブラック・マジシャン・ガール」・・・どうやって突破すればいいの?」

「くう、ワクワクしてきたぜ!!!」

「だが、これを使い切れなかったらこのターンで終わってしまう。」
突破やワクワクはともかく・・・乗り切りは大丈夫だろう。そのための仮面竜なのだから。

「ふっ、このターンでケリをつけてやる。バトルだ！」「ブラック・マジシャン・ガール」で「仮面竜」を攻撃！ブラック・バーニング！！」

仮面竜がブラック・マジシャン・ガールの炎によって焼き尽くされる。結構えぐいな。

「つく、だけど「仮面竜」の効果発動！このカードが戦闘によって破壊されたとき、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚することが出来る。僕はデッキから「仮面竜」を守備表示で特殊召喚。」

仮面竜 DEF1100

「無駄だ！」「有翼幻獣キマイラ」で「仮面竜」に攻撃！」

有翼幻獣キマイラのもの凄いスピードから出された突進が仮面竜を打ち倒した。

「「仮面竜」の効果を発動、デッキから「神竜エクセリオン」を守備表示で特殊召喚！」

神竜エクセリオン DEF900

神竜エクセリオンだと！また癖の強いカードだな。

「はっ、全て打ち砕いてやるよ!!!」ブラック・マジシャン「で」
神竜エクセリオン」に攻撃!ブラック・マジック!!!」

黒い衝撃波がエクセリオンを襲い、エクセリオンは力尽きてしまっ
た。

「俺はこのままターンエンドだ。これで俺の勝ちだな!」

凧 手札0 場3 伏せ0

有翼幻獣キマイラ ATK2100

ブラック・マジシャン ATK2500

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000

...

「やばい、マルコの場合にモンスターがいなくなった。」

「これじゃあ、厳しいぞ!」

三沢と万条目をはじめとする大勢がまずいと判断しているようだが、
俺とクロノス先生、兄さんと十代はむしろ落ち着いていた。

「これで、勝ちましたね。クロノス先生。」

「うむ。」

えっ、と驚く皆。

「マルコはわざと最後にエクセリオンを特殊召喚しましたね。」

「あれで、完全にチエックメイトなノーネ。」

「どういうことですか？先生？」

疑問に思った明日香が声を上げた。

「「神竜エクセリオン」は墓地に同じモンスターがある時に召喚した場合のみ、特殊能力を得られる非常に難しいモンスターなノーネ。」

「しかし、それをうまく発動できた場合・・・一気に形勢を逆転することが出来るほどの能力を持っているんだ。」

俺も転生前はあのコンボを良く使ったな。逆転1KILL、懐かしい。

「まあ、よく見ておくノーネ。」

・・・

「僕のターン、ドロー！僕は手札から「おろかな埋葬」を発動！デッキから「神竜エクセリオン」を墓地に送る。」

「そんな事をして、一体何になる!？」

「見て驚かないですよ？セットカードオープン！魔法カード「クリボー」を呼ぶ笛」を発動！デッキから「クリボー」または「ハネクリボー」1枚を手札に加えるか特殊召喚することが出来る。僕は「ハネクリボー」を特殊召喚する!」

「お、俺以外に相棒を使っている奴がいるなんて。良かったな、相棒！」

(クリクリ)

(嬉しそうですね。)

(そうだな。)

十代の相棒であるハネクリボーも嬉しそうだ。

「そして、「ハネクリボー」を生贄に「神竜エクセリオン」を生贄召喚！」

神竜エクセリオン ATK1500

「攻撃力1500?生贄召喚しなければならないのに1500?馬鹿にしているのか?」

「うるさい!!」

マルコが切れたようだ。何か、エクセリオンに特別な思い入れがあるのか?

「エクセリオンは僕が、僕がデュエルをやりたいと言った時に父さんがその記念に買ってくれたパックで手に入れた・・・はじめてのカード。相棒だ!その相棒を馬鹿にするな!!」

なるほどな、気持ちはよくわかる。

マルコ・・・思う存分やってくれ。

「「神竜エクセリオン」の効果発動！このカードの召喚成功時に自分の墓地に存在するこのカード1枚につき、3つの効果から1つを選択し、得ることが出来る。ただし同じ効果を重複して得ることは出来ない。僕の墓地にエクセリオンは2枚あるから、2つの効果を得られる。僕は2番と3番目の効果を選択する。」

「エクセリオンは何も変わっていないような・・・。」

疑問がまた上がる。まあ、このカード自体がマイナーだから仕方ない。

「これで、準備が完全に整ったノーネ。」

後は、装備カードかオネストでOK

「そして装備カード「守護神の矛」を「神竜エクセリオン」に装備！」

神竜エクセリオン ATK1500 3300

「攻撃力が跳ね上がった!?!」

「「守護神の矛」の効果は、墓地に存在する装備モンスターと同名カード×900アップする。エクセリオンは2枚あるから1800ポイントアップ！バトル、「神竜エクセリオン」で「ブラック・マジシャン・ガール」に攻撃！エクセリオンバスター!!!」

ちよ、それ管理局の魔王と必殺技名が同じだぞ!?!

まあ、それは置いて・・・。

閃光の一撃がブラック・マジシャン・ガールを消し飛ばした。

風LP4000 2700

「っ!!」

「神竜エクセリオン」の効果発動!このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える!」

「何!」

風LP2700 700

「まだまだ!「神竜エクセリオン」の効果が発動!!このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう一度続けて攻撃を行うことが出来る!!」

「何だと!?!」

そう、エクセリオンは・・・舐めちゃいけない。

「バトル、「神竜エクセリオン」で「ブラック・マジシャン」に攻撃!エクセリオンバスター!!」

師匠も弟子の後を追いました。合掌。

風LP7000

・・・

凧からコウモリが剥がれた。そうか、これで操っていたのか。

「……………」

「凧、大丈夫か？」

気絶した凧を十代が揺さぶるが・・・駄目だ、反応が無い。
恐らく、カミューラを倒さない限り凧を目覚めさせることは出来な
いだろう。

「廃屋に・・・行こう。」

「「「へっ?」「」」

「凧がその方向に行っていたということは、そこに何か必ずあるは
ずだ。」

「でも、凧はどうする?」

「三沢、すまないが頼めるか?」

「わかった。皆も気をつけて。」

とりあえず、凧を三沢に預け俺たちは廃屋に向かった。
そこに地獄が待ち受けていると知らず…………。

次回予告

平穩を望む心　しかし時代はそれを許さなかった
業火が友を　家族を　そして愛する者を包み込む時
やさしさは刃に変わる

「ファイルド6：クロックタワー」

悲しみに固められた針は　もう前へ進まない

フィールド5：急変（後書き）

今回マルコが使ったデッキは作者のデッキをモチーフにしました。しかし、次の回からオリジナルカード系が結構出ますので、一気に賛否両論になりそうですね。・・・まさかカミューラの出番がこんなに早いとは。

フィールド6：クロックタワー（前書き）

クロノス先生の家って実はかなりの名家らしいですね。なので、今回はそれを生かさせてもらいました。

追記：「クロックタワー」の効果を明確にしました。不思議がっていた方々には申し訳ありません。正しくは「自分の場と墓地の」です。

また「シザーマン」の効果も一部追加しました。

フィールド6：クロックタワー

「ここか!?!」

俺たちはクロノス先生の案内の下、廃屋にたどり着いた。

しかし予想以上の大きさだ。これは洋館と言った方が正解じゃないのか？

何っ？か、バイオに出てきてもおかしくないような雰囲気だけだ。

「しかし、不気味ね……。」

明日香の言に皆が賛同した。

ここを題材とした数々のホラーゲームが出てもおかしくは無いほど、不気味だ。

(マ、マスター。本当に入るんですか?)

(怖いのは分かるが、仕方ないだろう。)

俺だって正直怖いけど、もしここで入らなくて被害が出てしまったとしたら悔やみきれないだろう。

虎穴にいらさずんば虎兇を得ず、だ。

「シニョーラジュンコとシニョーラももえはここに残ってもらえませんか?」

「……え?」「」「」

クロノスの突然の提案に一同は驚く。

結構危なさそうだけどな、ここも。

「な、何ですか？」

「そうですね。私たちじゃ何か問題がありますか？」

不満を述べる2人。そりゃそうだ、こんな不気味で怖い所に残れと言うんだし。

しかし、クロノス先生はその不満を予想していたらしい。

「これには訳があるノーネ。もし、私達が廃屋の中に入って何らかの理由で出られなくなったとしたら、大変なことになるノーネ。しかし、もし2人がここに残って私達が戻って来れなかったとしても、外から人を呼ぶことが出来るノーネ。」

「ちょっと先生、不安になるような事を言わないでくれよ。」

「だが、現実的な意見だ。十代、もし俺たちがこの廃屋で閉じ込められて脱出できなかつたとしたらどうする？」

「そりゃ、窓から出たり壁を壊したり……。」

「そう、普通ならそうやって脱出するはずだ。しかし、以前ここに来て行方不明になった連中はそれが出来た可能性があったのにもかかわらず、それをしなかった。いや、それが出来なかったというべきか。」

ここに来てホラー確定ですか、兄さん。
皆顔を青ざめているし。

「だから、俺たちの安全のためにも・・・頼めるか？」

「わ、わかりました。」

「わかりましたわ。」

渋々ながらも従ってくれたようだ。

これで退路は確保できたことだし・・・行くか。

「よし、行こう。」

・・・

ギーッ

廃屋の門を開け、大広間に入る。

見たところ廃屋って感じがしない。

変に中が綺麗だった。そう、今でも誰かが住んでいてもおかしくないような・・・。
そして

（ぶ、不気味ですね。）

（ああ）

一つの古時計が飾られていたが、電池が切れていたのであろう。まったく動かない。それが逆に不気味さを一層させていた。
ポケモンでの「森の洋館」を思い出す・・・あれは怖かった。あの幽霊たちには諸説あるが、正直今でも怖い。

バサバサバサッ！！

コウモリ達が突然出てきた。やはりここが正解だったのだろう。

「私の家に土足で入り込んでくるとは・・・可愛がってあげないとねえ。」

正面から女性の声が聞こえた。

すると、前の階段から緑髪のロングヘヤーとドレスが特徴的なヴァンパイア、カミューラが降りてきた。

「ふふふっ、選り取り見取り。」

俺たちを見て、品定めをするかのごとく薄く笑っていた。

「お前が神楽坂を操っていたのか！！」

十代が叫ぶ。

「あの坊やの事かい？そう私だよ。」

あっさりと認めた。

そして苦々しい表情となる。

「しかし、使えない根性無しだったよ。私のコウモリで劣等感を暴走させ「究極のデッキ」を盗ませることに成功したけど、その後はあっさりとその坊やに負けて奪い返されるんだし。まったく、いい迷惑ね。」

「何！？」

カミュラの不満に怒る皆。
友人が利用され、さらに根性なし呼ばわりされるのだから怒りを露にせざるを得ない。

「その性根、この私が叩き直してあげるノーネ!!!」

デュエルディスクを構えるクロノス先生・・・原作通りなら負けるが、頼む。勝ってくれ。

「ほう、意気のいい先生なこと。では始めましょう。闇のデュエルを。このヴァンパイヤのカミュラに勝てるかしら?」

「舐めると痛い目にあうノーネ。いざ」

「デュエル!!!」

「私の先攻、ドロ。私は「不死のワーウルフ」を攻撃表示で召喚。さらにカードを1枚伏せ、ターンエンドよ。」

カミュラ 手札4場 モンスター1 伏せ1
不死のワーウルフ ATK1200

「私のターン、ドロ。手札から「テラフォーミング」発動!デッキからフィールド魔法「歯車街」を手札に加えるノーね。そして「歯車街」を発動!これにより「古代の」と名のつくモンスターの生贄が1体減るノーネ。さらに手札から「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚!!!」

サイバー・ドラゴン ATK2100

「サイバー・ドラゴン!?」「」

皆が驚いた。「サイバー・ドラゴン」は買占めのせいで兄さん専用じゃなかったのか?

「サイバー・ドラゴンは翔の兄ちゃん専用じゃなかったのか。」

「この「サイバー・ドラゴン」は、私の人脈をフルに生かし手に入れたものなノーネ。シニョール亮が買占めを行う前に確保することが出来たのは行幸だったノーネ。」

「そ、そうだったのか。」

「てか、買い占めていたのかよ。」

「デッキに必要だったからな。」

兄さんを見てみんなが呆れている。気持ちは分かるぞ。

てか、デッキに入れていいのは3枚なのに何でそんなに買い占めるんだ?

「さらに、手札から「古代の機械工兵」を召喚しますーの。」

古代の機械工兵 ATK1500

「バトルなノーネ、「古代の機械工兵」で「不死のワーウルフ」に攻撃!」

「ならセットカードオープンツ、発動しない!?」「古代の機械工兵」が攻撃した場合、ダメージ計算終了時まで相手は魔法・罠力ー

ドを発動することが出来ないノーネ！」なんて厄介な！！」

不死のワーウルフが自慢のスピードを生かし、古代の機械工兵に一気に近づき爪で切りかかる。だが、工兵が装備していた左腕の盾に防がれてしまう。そして工兵の右手に装備されているドリルで反撃され、破壊された。

カミューラ LP4000 3700

「「古代の機械工兵」の効果発動！このカードの攻撃したダメージステップ終了時に、相手魔法・罠カード1枚を破壊することが出来るノーネ。そのセットカードを破壊するノーネ。」

「つく！」

工兵がドリルでセットカードを粉碎した。

「道連れ」か、リクルーターで使うなら悪くないな。

「なら破壊された「不死のワーウルフ」の効果発動！このカードが戦闘によって破壊された時、デッキから「不死のワーウルフ」を特殊召喚することが出来る。この効果によって特殊召喚された「不死のワーウルフ」は攻撃力が500ポイントアップする！」

不死のワーウルフ ATK1700

「なら、また破壊するまでなノーネ。「サイバー・ドラゴン」で「不死のワーウルフ」に攻撃なノーネ。エヴォリューション・バースト！！」

サイバー・ドラゴンの攻撃で不死のワーウルフが吹き飛ばされ、破

壊される。

カミューラ LP3700 3300

「しかし「不死のワウルフ」の効果で、デッキからまた特殊召喚されるわ。さらに500ポイント上がったね!!」

不死のワウルフ ATK2200

「カードを1枚伏せ、ターンエンドなノーネ。」

クロノス 手札2 場 モンスター2 魔法1 伏せ1

フィールド魔法「歯車街」

サイバー・ドラゴン ATK2100

古代の機械工兵 ATK1500

「私のターン、ドロ。なら私も「テラフォーミング」を発動。デッキからフィールド魔法「クロツクタワー」を手札に加えるわ。さらに「クロツクタワー」を発動!!」

歯車によって構成された街が崩れ・・・一つの時計台が現れた。

(嫌な予感がする・・・)

「なら「歯車街」の効果発動するノーネ!このカードが破壊された時、デッキから「古代の」と名のつくモンスター1体をデッキ、手札、墓地から特殊召喚することが出来るノーネ。私はデッキから「古代の機械巨竜」を特殊召喚するノーネ!!」

古代の機械巨竜 ATK3000

「クロックタワー」の効果発動！この効果は私の場と墓地にアンデッド族モンスターが存在する時のみに発動することが出来る。私は自分の場と墓地の全てのモンスターをゲームから除外し、「シザーマン」をデッキから特殊召喚する！！」

シャキーンッ、シャキーンッ、シャキーンッ！

こ、この音は鉄の金属音。

・・・マジかよorz。

シザーマン ATK3800

ギャー！！俺の転生前のトラウマキター！！これのせいで何度寝れなかったことやら。

「シザーマン」が場に存在する時、私はモンスターを召喚することができない。バトル、「シザーマン」で「古代の機械巨竜」を攻撃！さあ、切り刻みなさい！！」

シザーマンの鉄が古代の機械巨竜の首を刎ねた！

そして、刎ねられた首の部分からオイルが噴出した。そうまるで血のように。

そして、首を失った竜は力を失い崩れ落ちる。

クロノス LP4000 3200

「グウ！！・・・この痛みは？」

痛みによってクロノス先生が倒れかけるが、気合で耐えたようだ。

「この痛みこそ闇のゲームの最大の特徴。そう、ダメージを受けたプレイヤーは痛みを受け、敗者は人形となり、魂を棺に納められる。そして棺に納められた魂は、私の養分となり徐々に消えていくわ。ただし、私が負けた場合、人形から元の姿に戻り無事だった魂は肉体に戻る。そして私は消えてなくなるわ。」

ざわざわ・・・

「闇のゲーム・・・噂には聞いていたけど本当にあつたんだ。」

「謎の失踪事件は闇のゲームによって人々の魂が封印されたのか。」

「だが、カミューラのほうがデメリットが凄いな。失敗すれば消えてなくなるんだぜ?」

「負けなければいいだけの事! 「シザーマン」の効果発動! 相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、もう1度攻撃することが出来る!! 「シザーマン」で「古代の機械工兵」を攻撃! 切り刻みなさい!」

文字通り、機械工は完全にバラバラに解体されていく。もしアレが人間だったら、考えたくは無いな。

クロノス LP3200 LP900

「ガア!!」

ドサッ。

「クロノス先生!!」

ついにクロノス先生が倒れた。

「ま、まだまだ・・・負けるわけには行かないノーネ。」

気力を振り絞り、何とか立ち上がる事ができた。

「ふふふ、その余裕がいつまで続くかしら？私はカードを2枚伏せ、ターンエンドよ。」

カミューラ 手札1 場 モンスター1 魔法1伏せ2

フィールド魔法「クロックタワー」

シザーマン ATK3800

「生徒たちを守るために、私は負けるわけにはいかないノーネ!! ドロー!手札から「強欲な壺」を発動!2枚ドローするノーネ。さらにセットカードオープン!「融合」を発動!場の「サイバー・ドラゴン」と手札の「サイバー・ドラゴン」2体を融合。「サイバー・エンド・ドラゴン」を融合召喚するノーネ!」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

「「サイバー・エンド・ドラゴンまで!?!」」

「私の人脈を甘く見ないでほしいノーネ。」

サイバー・ドラゴンがあるからサイバー・ドラゴン系のカードがあつても不思議ではないが・・・エンドまで手に入れていたか。

「さらに手札から「大嵐」を発動するノーネ！」

！カミューラがかなり焦った顔になる。

「セットカードオープン、カウンター罠発動！！「マジック・ジャマー」を発動！手札を1枚墓地に送り、「大嵐」を破壊するわ！」

やはり「クロックタワー」を破壊する事が「シザーマン」攻略の鍵か。

「ならバトルなノーネ！」「サイバー・エンド・ドラゴン」でシザーマンを攻撃！！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

サイバー・ドラゴンの威力の数倍と思われる攻撃が三連続、シザーマンに襲い掛かる！！攻撃が通り、霧が晴れる・・・「シザーマン」は健在だった。

カミューラ LP3300 3100

「残念ね。「シザーマン」は戦闘によっては破壊されないのよ。」

「カードを1枚伏せターンエンドなノーネ。」

クロノス 手札0 場 モンスター1 伏せ1

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

「私のターン、ドロー！セットカードオープン、魔法カード「死者への手向け」を発動！手札一枚を捨て、場のモンスター1体を選択し破壊する。「サイバー・エンド・ドラゴン」を破壊！」

ミイラ男が現れ、ミイラ男が巻いている包帯がサイバー・エンド・ドラゴンに襲い掛かる。必死になって抵抗するものの、完全に包帯でぐるぐる巻きになり破壊された。

「セットカードオープン、罠カード発動！「ロスト・テクノロジ」を発動！このカードは自分の場の機械族モンスターが効果によって破壊されたときに発動する事ができるノーネ。破壊されたモンスターのレベル以下の機械族モンスターをデッキから召喚条件を無視して特殊召喚する事ができるノーネ！現れるノーネ、「古代の機械巨人」！！」

古代の機械巨人 ATK3000

「だが、攻撃力が足りない……。」

「父さん！」

「クロノス先生！！」

クロノス先生がふと俺たちに振り返る。

「今の私の姿を覚えていてほしいノーネ。」

「「え？」」

「例え負けが完全に見えたとしても、最後の一瞬まで諦めてはならないノーネ。……そして、みんなが私や先に封印された人たちを救い出す事を信じているノーネ。」

「ふふふ、その希望は私が完全に刈り取ってあげるわ。バトル、」

シザーマン」で「古代の機械巨人」を攻撃！」

古代の機械巨人から繰り出される攻撃をひらりとかわし、鉄で首を刎ねた。

そして、力を失った体が前のめりに倒れた。まるでクロノス先生の意思を表すかのごとく・・・。

クロノス LP900 100

「そして、「シザーマン」の効果でもう一度バトルするわ。「シザーマン」でダイレクトアタック！」

「ペペロンチーノ!!!」

クロノス LP1000 0

クロノス先生、頼むから最後にそれはやめてくれ・・・。

「父さん!!!」

「『クロノス先生!』」

そして、クロノス先生が完全に倒れた。

「闇のゲームの敗者は先に説明した通り・・・魂は封印され、私の人形となる!!!」

クロノス先生の体から一筋の光が出てきて、カミューラが降りてきた階段の近くにあった棺に入っていった。そしてクロノス先生の体が光だし、人形となってカミューラの元へと行った。

「ふふふ、次の生贄は誰かしら？」

カミューラがクロノス先生の人形を保管庫らしき箱に投げ入れる。

「僕が行きますー!!」

「待て、マルコ。」

マルコが激昂して、クロノス先生の仇を討つべく行くこととする。
だが、兄さんに止められた。

「何故止めるんですか!？」

「次は・・・俺がやる。」

「「「ええっ!?!」」」

「ふうん、意気のいい坊やね。いいわ。相手してあげる。」

「だが、少し待ってもらえるか？」

「あんまりレディを待たせないでよ？」

「わかった。皆、少し待っていてくれ。」

そう言うと兄さんは猛ダッシュで外に出た。逃げ出したと言っ
才
チは無いだろっな？

・・・5分後

「待たせたな。」

汗だくになりながら、戻ってきた。

全力疾走で走って何を持って・・・それは!?

そして兄さんはタオルで汗を拭き、それを羽織った。

「さあ、カミューラ。地獄に付き合ってもらおうぞ!!」

「威勢だけはいいのね。だけど、私を失望させないでよ?」

「決闘!!」

次回予告

敵の血潮で濡れた肩 地獄の人間と人は言う

時止まりし塔に 地を啜る者達が現れる

吸血鬼と吸血部隊 似て非となる存在がぶつかりあう

「フィールド7：レッドショルダー」

裏の闇は 底知れず深い

フィールド6：クロックタワー（後書き）

知っている人は知っている次回のタイトル。
・・・ごめんなさい。アレを使います。

フィールド7：レッドショルダー（前書き）

ついに亮VSカミューラです。

亮がちよっとヘルカイザー化しています。

今回も修正が入るだろうなあ。

フィールド7：レッドシヨルター

「ファーストレディだ。先攻は譲る。」

「あら、礼儀は知っているのね坊や。」

いや、兄さん。口元が笑っていますよ？
といつても、注意深く見なければ分からないけど。

「なら、私のターン。ドロー！」「ゴブリンゾンビ」を攻撃表示で召喚。ターンエンドよ。」

カミューラ 手札5 場 モンスター1

ゴブリンゾンビ ATK1100

「俺のターン、ドロー！手札から「スコープドッグ 訓練仕様」を攻撃表示で召喚。」

頭部に装備された、まるで顕微鏡のレンズのようなターゲットと無駄のない絶妙なバランスで「兵器」として「傑作機」の太鼓判を押しされた優秀機体。カラーリングはほぼ緑一色になっている。

武装はアサルトライフルらしき銃と腕に装備されたアームパンチのみという基本的な装備となっている。

AT スコープドッグ訓練仕様 ATK1400

「バトル！」「スコープドッグ 訓練仕様」で「ゴブリンゾンビ」に攻撃！」

ダダダダダダッ！！

アサルトライフルの連射により、ゴブリンゾンビは蜂の巣になった。

カミュラ LP4000 3700

「しかし「ゴブリンゾンビ」の効果が発動するわ。このモンスターが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキから守備力1200以下のアンデッド族モンスターを手札に加えることが出来る。私は「不死のワーウルフ」を手札に加える。」

また不死のワーウルフ・・・最悪、2200が出てくるのは厳しいぞ？

どうやってこいつを倒すつもりなんだ？

「ならカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

亮 手札3 場 モンスター1 伏せ2

AT スコープドッグ訓練仕様 ATK1400

「私のターン、ドロー。私は手札から永続魔法「ミイラの呼び声」を発動！そして「ミイラの呼び声」の効果で手札から「ヴァンパイア・レディ」を特殊召喚！」

ヴァンパイア・レディ AK1550

「さらに私は手札から「不死のワーウルフ」を召喚。バトルよ！」「ヴァンパイア・レディ」で坊やのモンスターを攻撃！」

アサルトライフルの連射をひらりと避け、接近される。

左腕のアームパンチを繰り出す前に、切り捨てられてしまった。

「『ヴァンパイア・レディ』の効果発動。このカードが相手モンスターに戦闘ダメージを与えた時、カードの種類を宣言する。坊やはデッキから宣言されたカードの種類を1枚選択し、墓地に送る。私はモンスターカードを選択するわ。」

おい、やめる。それは相手に塩を送るような物だぞ。

「わかった。俺はデッキから『サイバー・ドラゴン』を墓地に送る。」

よりによってそれが……。

「さらに、『不死のワウルフ』でプレイヤーにダイレクトアタックッ！」

「セットカードオープン、畏発動！『ガード・ブロック』！この戦闘ダメージを0にし、さらにデッキからカードを1枚ドロウする。」

ガード・ブロック……使われると厄介だが、自分で使うとまいちなんだよなあ。

「なら私はカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

「『スコープドッグ 訓練仕様』の効果が発動！このモンスターが戦闘で破壊され墓地に送られたターンの終了時、デッキから『スコープドッグ』と名のつくレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る。俺はデッキから『スコープドッグ通常装備』を攻撃

表示で特殊召喚!!」

スコープドッグ 通常仕様 ATK1800

「そしてこのカードが召喚、または特殊召喚されたときデッキからカードを1枚ドロウする。」

手札消耗を回復できるモンスターだと!?!
モンスターとしても傑作機かよ。

カミューラ 手札2 場 モンスター2 永続魔法1 伏せ1

永続魔法「ミイラの呼び声」

ヴァンパイア・レディ ATK1550

不死のワーウルフ ATK1200

「俺のターン、ドロ。俺は手札から魔法カード「レッドシヨルダマーチ」を発動!デッキから「レッドシヨルダ」と名のつくモンスター1体を手札に加える。俺はデッキから「スコープドッグレッドシヨルダ」を手札に加える。」

レッドシヨルダマーチを発動すると同時に兄さんのデュエルディスクから音楽が流れ出す。もちろん流れるのは「レッドシヨルダマーチ」だ。

「俺は「スコープドッグ 通常装備」を生贄に「スコープドッグレッドシヨルダ」を生贄召喚!」

通常のスコープドッグとは色々違い、武器が多く装備されている。そして何より、一番の特徴はその名の通り右肩が「赤いのだ」。そう、血を何度も塗ったようなどす黒い「赤」だ。

スコープドッグ レッドシヨルダ― ATK2500

「さらに、墓地の「スコープドッグ 訓練機仕様」と「AT スコープドッグ 通常装備」をゲームから除外し、「スコープドッグ フル装備」を特殊召喚！」

武装は「スコープドッグ レッドシヨルダ―隊仕様」と同じなのだが、左肩に明るい「赤」が塗装されている。

スコープドッグ フル装備 ATK2200

「手札から装備魔法「火炎放射器」を「レッドシヨルダ―隊仕様」に装備。これにより攻撃力が300ポイントアップ。そして手札から装備魔法「パイルバンカー」を「フル装備」に装備。攻撃力が500ポイントアップ。」

スコープドッグ レッドシヨルダ―隊仕様 ATK2800

スコープドッグ フル装備 ATK2700

「バトル、「スコープドッグ フル装備」で「ヴァンパイヤ・レディ」に攻撃！」

「なら、セットカードオープン。罠カード「聖なるバリア ミラーフォース」を発動！」

「甘い！セットカードオープン、カウンター罠発動「トラップジャマー」！これにより「聖なるバリア ミラーフォース」の効果を無効にし、破壊する！」

「つく！」

七色の光の壁が現れたと思ったら、光が消え出し崩れてしまった。

スコープドッグの右肩に装備されているミサイルランチャーがヴァンパイア・レディの動きを牽制する。そしてスコープドッグが一気に接近し、パイルバンカーで左胸を串刺しにする。

結構えげつないな。ん、この攻撃って昔からヴァンパイアを撃退する方法じゃなかったっけ？「杭を心臓に突き刺す。」だったっけな？あ、カミューラがかなり怒っているようだ。自分もヴァンパイアだしな。

カミューラ LP3700 2550

「そして「レッドショルダー隊仕様」で「不死のワーウルフ」に攻撃！」

ダダダダダダッ！！

アサルトライフルで不死のワーウルフの下半身を打ち抜く。が、まだ動けるらしく上半身で必死にもがき続けていた。

「汚物は消毒だっ！！！」

火炎放射器でもがき続けていた不死のワーウルフを丸焦げにする。・
・これはこれで酷いな。皆も顔を引きつらせている。

この攻撃でどうやらカミューラの怒りに油を注いってしまったようだ。表情がかなりやばい。

カミューラ LP2550 950

「不死のワーウルフ」の発動！・・・しないだど！？」

「「火炎放射器」の効果発動。このカードを装備したモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、墓地で発動する効果を無効にしゲームから除外する。」

「破邪の大剣-バオウ」の亜種と言ってもいいだろう。だが、手札コストなしなのは大きいな。攻撃方法はちとキツイが。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンを終了する。」

亮 手札1 場 モンスター2 装備魔法2 伏せ1

装備魔法「火炎放射器」、装備魔法「パイルバンカー」

スコープドッグ レッドシヨルダ―隊仕様 ATK2800

スコープドッグ フル装備 ATK2700

「私のターン、ドロ―！・・・ふふふ、坊や。あなたは中々手ごわかったわ。だけど、これで終わらせてあげる。手札から魔法カード「幻魔の扉」を発動！フィールド上の全てのカードを破壊するわ！」

「そ、そんな！」

「インチキよ！」

「反則だ！！」

（それより反則なカードが世の中には存在するんだよなあ・・・。）

ああ、考えたくない。元の世界ではこんなカードはまだやさしく思

えるのだ。

その環境を思い出したくない。

(知らないって、怖いですね。)

(ああ、まさに「知らぬが仏」だよ。)

「なら、リバースカードオープン。カウンター罠発動! 「魔宮の賄賂」! 相手の魔法・罠1枚の発動を無効にし破壊する。」

「何!?!」

幻魔の扉が開く前に、扉は消えていった。

「そして「魔宮の賄賂」の効果で相手は1ドローする。」

「つく。・・・ふふふ、」

また「あの」カードを引いたか?

「坊や、あなたも先生と同じ方法で倒してあげるわ。私は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動! 墓地より「不死のワーウルフ」を特殊召喚! そして、手札からフィールド魔法「クロックタワー」を発動!」

時が止まりし塔が現れる。

やっぱりきたか。だが、「テラフォーミング」のサーチによる即発動が避けれたのは運がいいと思う。

「そして「クロックタワー」の効果発動! 自分の場と墓地のモンス

ターを全てゲームから除外し、デッキから「シザーマン」を特殊召喚！！」

シャキーン、シャキーン、シャキーン

再びのトラウマ。すでに戦闘体制に入っているようだ。

シザーマン ATK3800

「バトルよ！「シザーマン」で「スコープドッグ レッドシヨルダ」隊仕様」を攻撃！！切り刻みなさい！！！」

カミューラの怒りがシザーマンに移ったのか、いきなり襲い掛かる。スコープドッグも全ての武装で狙いを定め一斉射撃！命中したものの・・・ダメージは皆無のようだ。ぴんぴんしてやがった。爆煙の中から接近を試みる。

ボトムズのほうも重火器では無理と判断し、左腕のアームパンチで賭けに出る。足のローラーダッシュから出されるスピードを生かし、急接近。そして必殺の一撃を繰り出した。が、まだ生きていた。

そして・・・
ザシュツ！！

上半身と下半身は生き別れになった。

亮 LP3850 2850

「・・・。」

「涼しい顔をしているわね。だけど、何時までその余裕が続くかしら？シザーマンの効果発動！このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう1度攻撃することが出来る！バトルよ、「シザ

「マン」で「スコープドッグ フル装備」に攻撃！！」

「レッドシヨルダ―隊仕様」とほぼ同じの過程と結果だった。

亮 LP2850 1750

相変わらず、涼しい顔をしている。凄いな。

「私はこのままターンエンドよ。・・・坊や、最後の足掻きを見せてもらおうよ？」

「その前にカミューラ、二つほど聞きたいことがある。」

「何かしら？」

「なぜ、俺が勝てば封印された人間は元に戻るのか？そして、なぜここに関わった人間の魂を封印した？」

「いいわ、答えてあげる。1つ目の質問は・・・戻るわ。ただし、封印された時間が長ければ助からないと思うけど。」

長ければ助からない可能性もあるのか。去年に封印された生徒は大丈夫だろうか？

恐らく最初に封印された作業員たちは無理かもしれないが。

「そして2つ目の質問は・・・私の復讐を果たすのに邪魔されるわけにはいかなかったのよ。あなたたち人間が、私達ヴァンパイアを化け物と言いつ伐したせいで、唯一の生き残りである私の一族はこんな辺鄙な所まで逃げなくてはならなかった！しかし私の一族も傷ついた物が多く、結局私一人になってしまった。」

(悲しい・・・ですね。)

(残念だが、人間同士でも争いが起こっているほどだ。他の脅威が存在するとなれば、それは排除しようとするだろうな。)

カミューラの口から語られる過去に、何とも言い難い雰囲気になる。重いな。

「だから、私一人でもあなた達人間共に復讐してみせるわ！ヴァンパイアの誇りにかけて！！」

「それが、答えか？」

「そうね。それがあなたの問いに対する答えよ。さあ、満足したかしら？あの世への置き土産は？」

ふっ・・・と兄さんが笑う。

「それはどうか？俺のターン、ドロー！！手札から魔法カード「強欲な壺」を発動。デッキからカードを2枚ドロー。・・・カミューラ、俺が貴様に地獄への引導を渡してやる！！」

兄さんの雰囲気が変わった。

「手札から永続魔法「未来融合 フューチャー・フュージョン」を発動！！俺は「キメラテック・オーバー・ドラゴン」を指定！デッキから融合素材となるモンスターを墓地へ送る。俺は「サイバー・ドラゴン」2枚、「スコープドッグ 訓練仕様」2枚、「スコープドッグ 通常装備」2枚、「スコープドッグ レッドシールド」仕

様」2枚、「スコップドッグ フル装備」2枚、「ベルゼルガ」1枚、「スコップドッグ ISS」1枚、「速攻のかかし」3枚の計15枚を墓地へ送る!!!」

こ、この流れはまさか・・・

「手札から魔法カード「オーバーロード・フュージョン」を発動！墓地の「サイバー・ドラゴン」と他全ての機械族モンスター17枚を融合!!!「キメラテック・オーバー・ドラゴン」を融合召喚!!!」

未来オーバーキター!!!

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK?

「攻撃力が無い、だと!?!」

「いや、「キメラテック・オーバー・ドラゴン」の攻撃力は融合素材にしたモンスターの×800ポイントだ。つまり・・・。」

18×800=14400

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK14400

「『14400!?!?!』」

「ば、馬鹿な・・・。」

へなへなとカミュラが座り込む。まあ、気分はよくわかるよ。うん。

てか、皆も驚いて唾然としている。十代以外……。

「すげーぜ、カイザー！こんな切り札があつたなんて！！」

キラキラとしている十代に対し、クールに無視する兄さん。
雰囲気という奴があるからなあ……。仕方ない。

「「キメラテック・オーバー・ドラゴン」が融合召喚に成功した時、自分フィールド上のこのカード以外のカードを墓地に送る。この効果で永続魔法「未来融合 フューチャー・フュージョン」が墓地に送られる。」

といつても大局に変わりはないけどな。

「そして「キメラテック・オーバー・ドラゴン」は融合素材にしたモンスターの数だけ相手モンスターに攻撃が出来る。残念だったなカミューラ。「シザーマン」は不死の能力を持っている……。その不幸を呪うがいい！！バトル、「キメラテック・オーバー・ドラゴン」で「シザーマン」に攻撃！！エヴォリション・レザルト・バースト！！17連打！！」

18個の頭部から高密度のレーザーがシザーマンを襲う。
流石のシザーマンもかなり効いたようだ。

カミューラ LP950 - 179250

「ガアアアアアアアアアア！！！！」

その苦しみは同時にカミューラにも与えられる。
あれ？闇のゲームじゃないのに何でダメージが？

(「シザーマン」が何らかの関係をもっているのでは?)

確かに、その可能性は十分にある。
てか、まだ1連打残っているぞ?

「カミューラ、そしてシザーマン・・・今楽にしてやる。くくく・・・
手札から「禁じられた聖杯」を発動!フィールド上のモンスター1体を選択して発動する。ターン終了時まで選択したモンスターの攻撃力を400ポイントアップし、効果を無効にする。俺は「シザーマン」を選択。」

シザーマン ATK3800 4200

「これで不死の能力は消え去った!消えろ、呪われし者よ!!エヴオリュション・レザルト・バースト!!!!」

カミューラ LP-179250 -189450

「不死」の能力を失ったシザーマンは光の中に消え去り、その主たるカミューラも同じ運命をたどった。

「カミューラ・・・お前の敗因はたった一つ、たった一つのシンブルな答えだ。

てめえは俺を怒らせた。」

最後の決め台詞はJOOJOかよ!?!
しかもかなり有名な奴だし。

カミューラが消えると、人形にされた人たちが元に戻り、棺に納め

られていた魂たちも元の体へと入っていった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

やばい、建物が崩れだした。

恐らく、主であるカミューラが存在しなくなった今自動的に崩壊するようになっていたとかいう話だろう。急いで脱出せねば！！

「な、何が起こっているノーネ！？」

クロノス先生は無事だったようだ。しまった、気を失っている人たちを運び出さないと！！

流石に目の前で死ぬのは寝覚めが悪すぎる。

「皆、気を失っている人たちを抱えていくぞ。」

「わかった。」

「わかったわ。」

「まかせろ。」

「大丈夫ですか？」

いいタイミングでジュンコとももえが屋敷に入ってきた。危ないけどな……。

「ジュンコ、ももえ。気を失っている人たちを運び出して！」

「わかったわ。明日香さん。」

「わかりましたわ。」

そうして崩壊していく廃屋の中、必死に運び出したことが幸いし何とか全員救助することが出来た。ちなみにけが人もいない。そういえば、去年行方不明になった生徒って？

「兄さん!？」

明日香さんのお兄さんの吹雪さんだったようだ。何でここに入ってしまったんだろうか？

そうして完全に廃屋は崩れ去った。

これでカミューラとのデュエルは終わったな。しかし、タイタンとのバトルは見てみたかったなあ……。と思いきや、あれは廃寮だったことに気づく。あれ？ならタイタンの出番は無いの？

まあ、気にしないでおこう。

それから俺たちは気を失った吹雪さんを保健室へ運び、その他の人たちはへりで病院へと搬送された。後日談になるが、意識を失った人たちは皆回復したらしい。ただし、廃屋に関する記憶は失っている人もいるが。まあ、知らないほうがいいだろう。

(マスター……私の出番って一体。)

(すまん。)

実を言うと、ガーディアンデッキは対カミューラ戦で使用するはず

のデッキだったりする。コウモリによる事前サーチを避けるため、今まで使うことが出来なかった。だが、兄さんが今回勝利したため出番がなくなってしまった。無論、勝ったほうが喜ばしいのだが・・・なんだかなあ。で、アイリスは不機嫌になっている。

（そう、へそを曲げるなよ。アイリス。俺の予感だと、すぐに出版はやってくるぞ。）

（本当ですか？）

（ああ。）

（なら、信じます。）

そういうと、にっこりと笑った。

後日、俺の予感は予感は当たっていた事がすぐに証明された。

だが、まさかの初陣があの人との対戦になるうとは流石に予測できなかった。

次回予告

ヴァンパイアの生き残りと死闘を果たした彼らに待っていたのは校則だった

法か私情か 様々な匂いを嗅ぎつつ 罪人達に判決が下る

「ファイルド8：制裁」

力なき者は ただ食われるのみ

フィールド7：レッドシヨルター（後書き）

まさかの亮大暴れ回でした。

そういえば、キャラクター紹介とか番外編で話の補完をしたほうが良いでしょうか？

それと、最後を今回の最強カードにするかそれとも次回予告にするか悩みますね。

フィールド8：制裁（前書き）

実を言うと、遊戯王GXの本編はほとんど見たことがありません。なので、圧倒的に描写が不足しているかもしれないませんが、何とぞご了承を……。

追記：まさか「遊戯王GX」本編で三沢が「破壊輪」を使っていたとは……。

フィールド8：制裁

「だからここは、厳しい処分を下すのでアールツ！！」

「しかしそれでは、生徒たちへの教育の妨げになるノーネ！！」

（やっぱり荒れているなあ・・・。）

（そうですねえ。）

校長室でナポレオン教頭とクロノス先生がいがみ合っている。

理由はアレだ。俺たちが進入禁止エリアに指定されていた廃屋に入ったことがきっかけで、倫理委員会から「処罰すべき」という意見が出てきたのだ。

だが、助けられた人たちから感謝の言葉が届いているということで、温情を出すべきではないだろうかという意見も出ている。

ということ、廃屋に行った俺たちは放課後に呼び出され、校長室に集まってこの議論を聞かされていた。

ちなみにナポレオン教頭も倫理委員会派なので、クロノス先生は結構苦戦しているらしい。

どうでもいいが、個人的には自宅謹慎などが尤もだと思っている。

反省文付きのな。

何故かって？ここで下手に罪を重くして裁いたら、後々問題になる恐れがある。

だが、無罪放免はもつとやばい。独断専行で手柄を立てたらこつちの物と考える輩が現れ、学校が荒れるのが目に浮かぶ。

「静かにしたまえっ！！」

校長の怒号と共に室内は一気に静かになった。
校長の貫禄は大切なんだなあ・・・と思った一瞬であった。

「このままではイタチごっこです。こうなれば制裁決闘で決着をつけてはどうですか？」

（何故？そうなるんだ？）

（意見の堂々巡りで疲れたんじゃないでしょうか？なので分かりやすい方法を取ったのではないのでは？）

だとしてもこれは酷い。

下手をすれば「決闘が強ければ何でもまかり通る」羽目になりかねないぞ？

「面白いのでアール。その話に乗せさせてもらうのでアール。」

「なら、私もその話に乗らせてもらうノーネ！」

ナポレオン教頭とクロノス先生が賛同したようだ。

どうやら、俺の理論は正しかったようだ。

悲しいぜ・・・。

「そういうと思ったので、すでに我輩は5人の刺客を用意したのでアール。」

5人？ええと・・・処罰対象は？

「ブルー生徒を処罰するのは流石に我輩も気が引けるのでアール。」

よって、残った5人で制裁決闘を行うのでアール。」

お得意様にはやさしいな。流石公務員、汚い。

兄さん、万条目、マルタン、吹雪さん、明日香、ジュンコ、ももえはブルー生徒だから・・・

残ったのは俺、十代、三沢、凧、ん？一人足りないぞ？

「もちろん、この処罰対象にはクロノス先生も含まれているのでアール。」

な、なんだってー！！（AA略

まあ、考えてみれば生徒の鏡である教師が校則を破るのは確かに不味い。

そういう意味では正しいのだろうが・・・。どうも蹴落とそうとしているように見える。

「そのくらいは覚悟していたノーネ！して、制裁決闘の時間は？」

「明日の午前9時。ちなみに生徒たちには特別授業と題して見に来るように言っているのアール。つまり、在校生たちの前で制裁決闘をしてもらうのでアール！」

「分かったノーネ。しかし、5人ということはシングルデュエルを5回するノーネ？」

「元々制裁決闘はタッグデュエルを採用していたのでアール。つまり、タッグマッチデュエルを2回、シングルデュエルを1回するのデアール。」

つまり1人がはみ出しを食らうってわけか。
はい、二人組み作ってー。のトラウマが甦るな。

「ちなみにタッグマッチデュエルとシングルデュエルのチーム分けには、このクジを使ってもらうノーネ。それぞれの割り箸の先端に単語が書かれてあり「A」が2つ、「B」が2つ、「C」が1ずつ入っているのでアール。ちなみに不正を防ぐために、一気に引いてもらうのでアール」

つまり「C」を引いたらアウトか。

「面白そうじゃねえか。」

「分かりました。」

「わかりました。」

「分かったノーネ。」

他の皆さんは納得かよ。畜生。

ちなみに上から十代、三沢、凧、クロノス先生だったりする。
俺も腹をくくるしかないな。

「わかりました。では、やりましょう。」

みんながクジに群がる。くそっ、しょうがねえな。

「では、3、2、1、アチヨー!!!」

何でアチヨー？まあ、いいや。

「俺はBを召喚だぜ！」

「俺はAでした。」

「俺はBです。」

「私はAなノーネ。」

つまり・・・俺が引いたクジを見る。

「C」と書かれていました。畜生、フラグを立てたのが悪かったのか？

「お互い恨っこ無しなノーネ。」

まあ、そうなんだけどね。

「なら、明日のチームは決まったのでアール。ちなみに、ズルをしてメンバーを変えるのは違反行為とさせてもらうのでアール。」

「ふん、このチームで十分戦えるという事を証明するノーネ！」

「ふふん、その余裕が何時まで続くかが見ものなのでアール！」

そしてこの話は一旦決着がついたのだった。

・・・

・・・

・・・

ブルー生徒ということで罪無しとされた面々は不満気だった。まあ、そうだろう。色のせいで自分たちはお咎め無しと言われたんだから。

校長室から出ると、凧がみんなに謝った。

「みんな、俺のせいでこんなことに巻き込んでしまっただけに申し訳ありませんでした！！」

おお、綺麗な頭下げだな。

「まあ、気にするなっつて。」

「そうよ。あなたは操られていたんでしょ？」

「それなんだけど・・・。」

凧がとても苦しそうな顔をしていた。

「俺もよくわからないんだ。」

「「「えっ!?!」」」

そりゃどういふことだ？

みんなも不思議がっている。

「あの時、俺は操られていたのかもしれない。けど、・・・あのデッキで皆を見返してやりたいって気持ちも確かにあったんだ。」

気持ちは分からなくはないが。むむむ。

「まあ、もう過ぎてしまったことなので、もう気にしないほうがいいノーネ。」

「・・・わかりました。それと。」

「それと?」

凧がとても落ち込んでいる。何があった?

「実は操られていた時に、どうやら俺の本来のデッキが奪われてしまったようで・・・。」

「僕も奪われていたりするんだよね。ああ、僕の「真紅目の黒竜」・・・。」

「何ー!?!?」

おいおい、マジかよ。

てか、吹雪さんもデッキを奪われていたのか。

「なのでどうしたら良いかと・・・。」

ポンツと手を叩く音がする。

何やらクロノス先生が思いついたようだ。

「とりあえずシニョール凧はシニョール十代のサポートデッキを作るノーネ。それではチームごとに分かれて、まずお互いのデッキ内容を把握しておくべきなノーネ。」

「「わかりました（・・・）。」」

渋々、クロノス先生の提案に乗る風。気持ちは分かるが、デッキが無ければなあ・・・。

「それでは、解散なノーネ。」

「皆、頑張ってね。」

「負けるなよ。」

「頑張ってください。」

「うう、僕の「真紅目の黒竜」・・・。」

「兄さん、落ち込まないで。」

兄さん、万条目、マルタン、吹雪さん、明日香、ジュンコ、ももえと分かれる。

吹雪さんは相棒の「真紅目の黒竜」を失ったショックでしょんぼりしているが、妹の明日香が何とか立ち直らせてくれるだろう。

とりあえず、制裁組みはそれぞれの寮の自室を使用しタッグパートナーと調整をすることとなった。

・・・

・・・

Aチーム

「クロノス先生はやはりいつものデッキで行くのですか？」

「そうする予定なノーネ。シニョール三沢も機械族で行くノーネ？」

「そうですね。以前、自分が使っていたあのデッキを使おうかと思っています。」

「あのデッキ？何のことなノーネ？」

クロノス先生が不思議に思っていると、三沢が机から一つのデッキを取り出した。

「これです。」

「こ、これは……。面白そうなノーネ。」

にやり、と笑う。

そうして、クロノス先生と三沢はタッグマッチ専用デッキを調整し始めた。

・・・

・・・

Bチーム

「すまない、十代。俺のせいで。」

「気にするなって！それより、デッキはどうするんだ？」

「うっん……。」

悩みだす風。

（確かに、他人のデッキを知ってそれを自分の物にすることが出来るだろう。しかし、もう嫌なんだ！といっても、何か無いかなあ……）

ふと、近くにラジオがあったことに気づいた。

「なあ、十代。ちょっとラジオを聞いていいか？」

「ああ、別にいいぜ。」

許可を貰い、ラジオをつける。

<今日はリクエストがあったこの曲を流そうと思います。>

どうやら何かしらの音楽番組で、今からリクエスト曲が流れるらしい。

<曲名は「ザザザツ」です。どうぞ……！>

曲名のところで雑音が入ってしまい聞こえなかったが、曲の音楽は普通に聴けた。

（これだ……！）

風の頭の中に新たなデッキが浮かんだ。そして今まで持っていたカードを全て出し、デッキを構築していく。そのスピードに十代は驚

いていた。いや、呆れていたといったほうが正解だろう。

「凧。お前、デッキを組むのが早いな。」

「38、39、40・・・完成だ！！俺の新デッキがやっと完成したぜ！」

（これで俺は、再び戦うことが出来る。よろしくな、俺のデッキ。）

凧のデッキが完成した後は、2人で十代のデッキ改良をすべく、頭をひねっていた。

・・・

・・・

「で、俺は1人か。」

「大丈夫ですか？マスター。」

「うん。アイリスがいてくれたおかげで助かったよ。ありがとう。」

「どういたしまして。」

うん、こういうときに精霊がいてくれると本当に助かるよ。気分的な意味で。

やっぱり1人ぼっちはキツイでござる！！

ちなみに今は実体化しています。人が来たら不味いけどな。

「さて、デッキの改造準備でもしますか。」

「そうですね。」

知つての通り、この世界では「強欲な壺」などがまだ禁止ではない。なので転生前に持ってこれたこのデッキにそれらを加えて強化しておく。

必須なのは「強欲な壺」「天よりの宝札」だろうな。

「天使の施し」もいいのだが、デッキとの相性があまりよろしくないのが残念。

ちなみにこのデッキは2011年3月の制限・準制限を適用したデッキなので「大嵐」を新たに入れる予定だ。ミラーフォースのトラウマは中々消えないんです。（作者談）

・・・

・・・

「流石に、「エフェクト・ヴェーラー」などのチューナーは不味いな。」

「ですね。まあ、シンクロしなければいいだけの話なんですけど・・・」

「いや、感づかれたら・・・危険だ。代用として「天罰」を入れておこう。」

いきなり未来組（主にパラドックス）がやってきて、殺されるのは勘弁願いたい。

僕、悪い転生者じゃないよ!?

未来のカードを使うとはいえ、シンクロには関係ないカードを使うつもりだ。しかし・・・

「もう少しシエイクアップしたほうがいいな。」

「デッキ枚数が少し多いですね。事故りますよ?」

デッキ枚数46・・・少し不味いな。

「思い切って「次元斬」でも組むかな?」

「それじゃあ、大徳「ストップ、ネタバレよくない。」あ、すみません。」

ほとんどばれているけど仕方ない。コナン「新一と同じぐらいな。てか、中の人って確か同じだったよな?」

「まあ、あの人のデッキに「ガーディアン・エアトス」を入れれば、かなり脅威なデッキって言うか「次元エアトス」の復活じゃね?」

「それはDTのお話では?」

「なんだよなあ・・・。「D・D・アサイラント」や異次元シリーズを入れれば確実に十代に勝てそうだよ」

「特に「異次元の女戦士」は強いですよね。」

「ああ、あの使い勝手は恐ろしいくらいだ。残念なのが「ウイルスカード」の両方に引つかかる点だが、リクルーターからでも「増援」からでも持ってこれる汎用性は鬼だろ。」

「この時代は「増援」も制限ではないですし・・・。」

「うん。「次元斬」が火を噴く時代だな。あ、そうだ。」

教科書を開いてみる。確か、制限カードに関する記述は・・・と、あった。

何々、禁止カードはモンスターカード「混沌帝竜・終焉の使者」、
「サイバーポッド」、
「ファイバーポッド」、魔法カード「サンダー・ボルト」・
「ブラックホール」・
「地割れ」・
「ハーピィの羽簞」、
「心変わり」
畏れカード「ラストバトル！」だそうだ。
制限、準制限は長いので省略。

ただし「死者への手向け」、
「ブラック・コア」などのコストあり
モンスター除去カードが入っていたのは驚いた。どうやら魔法カードでのモンスター除去には厳しいらしい。

「なら「地砕き」と「ブラックホール」は不要だな。と、ならこのカードを加えて・・・。」

「地砕き」や「ブラックホール」などを外し、「強欲な壺」といったドロー強化系のカードを加える。これがないと始まらない。昔の人いわく「強欲な壺が入っていないデッキはデッキじゃない。」なんて格言があったそうだしな。

「よし、出来たー!!」

何とかデッキ圧縮をしつつ、この時代のカードを入れることが出来た。

結構厳しかったけど、なんとかなるもんだな。

「後は明日に備えるだけですな。」

「そうだな。時間も時間だし、寝るか。」

ふと、時計を見ると10時になっていた。早いなあ。

「そうですね。では、お休みなさい。マスター。」

「お休み、アイリス。」

明日の相手はいったい誰なんだろう……。不安と期待を抱きつつ、俺はそのまま眠りについた。

次回予告

翔「ついに始まる制裁決闘。・果たしてどうなることやら。」

アイリス「あれ？いつものとは違うんですか？」

翔「作者のネタが尽きたらしい。というか、元々カミューラ戦までの予定だそうだ。」

アイリス「そうなんですか。」

フィールド8：制裁（後書き）

ただ今、とあるサイトにて本編を視聴中です。
遊戯王さん、情報ありがとうございます。

フィールド9：制裁決闘第一回戦（前書き）

ついに制裁決闘が始まりました。

先に一言・・・クロノス先生ごめんなさい。

追伸：早すぎた埋葬のLP800分を忘れていました。

それと、歌詞を書くことが違反になるらしいので、削除しました。
音楽を聞きながら、想像してください。

フィールド9：制裁決闘第一回戦

「さて、いよいよか。」

「頑張りましょうね。マスター。」

自室で朝食を済ませ、準備を整えてから、自室を後にする。

ちなみに料理はアイリスが作っています。彼女いわく、料理を作る
ことが好きということで、ほぼ毎日彼女の手料理をいただいでいま
す。今度、売店で日ごろの労わりとして何かプレゼントでも買って
こよう。うん。

ちなみに朝飯はご飯、味噌汁、卵焼きでした。これぞ日本の朝食だ
ね。

と、惚れ気話は置いていて。

俺はレッド寮の外で十代と凧を待つ。数分後……。

ガチャ、どうやら彼らが自室から出てきたようだ。

「おはよう。十代、凧。よく眠れたか？」

俺が十代と凧に声を掛ける。

十代は眠たそうに、凧は十分な反応を返してくれた。

「おはよう。翔、凧。今日の決闘が待ちきれなくてあまり眠れなか
ったぜ。」

「おはよう。翔、十代。俺は十分寝れたな。例え誰が相手だろうと、
新たな俺のデッキが打ち砕いて見せるぜ!」

十代はともかく、凧はかなり自信満々だな。その自信に足を掬われなければいいが……。

「ん、翔。ひよつとしてお前の後ろにいるやつって……精霊か？」
流石にバレました。まあ、今までみたいに隠す必要はもう無かったのでいいかと。

「あ？十代……お前は何を言っているんだ？翔の後ろには何もいないだろ？」

残念ながら凧には見えないらしい。
時には見えないほうが幸せな時もあるから、一概に見えることがいいとは限らないんだよなあ。

「凧は知らなかったのか？十代は靈感が強いから、そういう類が見えるんだぜ？」

精「霊」だから一応靈感であっているはずだ。
文字的な意味でも。

「マジか……俺はそういった類が苦手だからちよつと勘弁してほしいな。」

顔が少し青ざめてる。どうやら凧はそういった話は苦手らしい。
俺もホラーは苦手だから安心しろ。

「と、ゆっくりしていると会場に遅れるぞ？」

時間はまだあるが、早めに行っておいて損はない。遅れたらアウトだが。

「なら、行くか。」

「おう、そうだな。くーっ、今からもうワクワクが止まらねえぜ！」

やっぱり十代はこっぴでなくては。と、その前に。

「十代、十代。」

「どうした？翔？」

「ちなみに彼女は「ガーディアン・エアトス」で、名前は「アイリス」だ。よろしくな。」

（初めまして、十代さん。）

「なるほど。よろしくなアイリス！俺の相棒は「ハネクリボー」だ。」

（クリクリ〜）

（よろしくね。ハネクリボー。）

（くり〜）

なんつーか、やっぱりハネクリボーは癒されるな。マスコットのな

意味で。

「し、翔。お前も幽霊が見えるのか？」

あ、凧の顔色が完全に青ざめている。まあ、見えない人からすればこの光景は不気味だよなあ……。

「まあ、そんな所だ。」

「悪霊退散、悪霊退散！！頼むから迷わずに成仏してくれーッ！！」

凧が必死になって除霊しようとしている。といっても、彼女たち（ハネクリボーの性別ってどっちだ？）は天使族なので福はあっても害は無いだろう。一部不安な奴はあるが。ちなみにアイリスとハネクリボーは苦笑している。悪霊じゃないってば。遊んでいたら少し時間が不味いことに。

「やばい、急ぐぞ！」

「お、おうー！」

「ま、待ってくれ！」

・・・

何とか会場には間に合った。流石にここで遅刻は洒落にならんがな。ちなみにクロノス先生と三沢は待ってました。

「こんな大切な時に……先が思いやられるノーネ。」

「まあ、大丈夫ですつて。クロノス先生。」

ため息をつくクロノス先生とそれを案じるように言う三沢。
なんていうか、すみません。

一息ついて辺りを見渡すと生徒が完全に集まっていた。
こりゃ、結構プレッシャーになるんじゃないか？

「ふん、逃げ出さずに来たのは褒めるのでアール。しかし、この刺客たちによつて無様な敗北を喫するのは眼に見えているのでアール！何せ彼らはあの伝説の決闘王と戦い、そのうち1人は見事勝利をもぎ取った歴戦の猛者たちなのでアール！！」

ナポレオン教頭が5人の刺客らしき人と共に現れた。

ちなみに刺客の皆さんはどうやらフードつきのコートを被っている
ので、まったく分かりません。せめて事前情報さえ手に入れば戦い
やすかったのだが……。

待てよ、今「そのうち1人は勝利をもぎ取った」ってことはキャラ
の分析が少し楽になった。ただし、漫画版はまったく分からんが。

「ふん。そんなこけおどしで腰が引けると思いますーノ？ふん、今
から負けたときの言い訳を考えておくのがいいノーネー！！」

ナポレオン教頭の挑発に対し、強気で返すクロノス先生。
そうしていると、大徳寺先生が現れた。

「なら、そろそろ制裁決闘を始めてもよろしいかにゃ。」

「我輩はいいである。」

「いつでも、来いなノーネ。」

この言葉を発端に、一気に空気が硬くなった。いよいよか……。俺たちはベンチへと行く。

「ではこれより、制裁決闘を始めるにゃ!!」

「頑張れー、クロノス先生！」

「三沢ー、しつかりしろよ！」

わーっ!!!!と歓声上がる。もちろんベンチ組である俺たちも応援する。

見る側なら楽だが、やる側は大変だぞ?これ。

「では、クロノス先生と三沢くんのAチーム対刺客さんA、Bによるタッグマッチデュエルの始まりにゃ。両者、前へ出るにゃ。」

クロノス先生と三沢が前に出ると同時に、刺客側も2人動いた。その動きはまるで香港映画さながら……。なら、奴らは!?!? そうして彼らはコートを剥ぐ。

「おぬし達に」

「恨みは無いが」

「これも定め」

「引かぬとあれば」

「かかって来るがよい！！」

やっぱりきた。迷宮兄弟。

しかし三沢は分らないとしても、クロノス先生の古代の機械デッキだと消耗戦になりそうだな。不安なのが、魔神シリーズの効果がOCGなのか原作なのが分からないのがキツイ。OCGでは1回だけとはいえ、攻撃された時に攻撃力を0にする効果を持っているのは非常に厄介だ。一方原作では、攻撃を1回だけ無効にする能力なので、あまり脅威には感じない。

「ふふん。そう言われて尻尾を振って逃げるわけにはいきませぬ。」

「そういうことです。」

「では、ルールを説明しておくのによ。お互い最初のターンは攻撃できないのによ。攻撃できるようにするのは、次の最初の人のターンからにや。そして、自分とパートナーは場を共有してもらうにや。つまり、自分とパートナーはうまく考えてモンスターを召喚したり、カードを伏せなければ、味方の足を引っ張るにや。説明はここまでとして・・・それでは。」

「「「決闘！！」」」

「私の先攻、ドロー。私は手札から「地雷蜘蛛」を攻撃表示で召喚。」

地雷蜘蛛 ATK2200

攻撃力を取るならATK2300もある「ゴブリン突撃部隊」の方

がいいような気がするが。何故あんなカードを採用しているんだろ？
コイントスに失敗したら結構やばいのに。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

迷宮兄弟（兄） 手札4 場（共用） モンスター1 伏せ1

地雷蜘蛛 ATK2200

「俺のターン、ドロー。（翔、お前の戦術を使わせてもらっぞ！）
手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動！俺は「パトロイド」「
リーダーロイド」「ジエットロイド」「ヒタチロイド」を2枚選択し、
そして相手はこの中から1枚を選択し、選択されたカードは手札に
選択されなかったカードは墓地に送られる。」

ヒタチロイド・・・絵柄見ると「JR東日本651系電車」をモチ
ーフにしたデザインのロイドだな。てか、三沢がロイドを使うのは
驚いた。俺の戦術が奪われるとは・・・。

「なら、「パトロイド」を選択する。」

「わかった。「パトロイド」を手札に加え、残りのカードは墓地に
送る。手札から「エクスプレスロイド」を守備表示で召喚。この効
果により、墓地の「ヒタチロイド」2枚を手札に加える。」

エクスプレスロイド DEF1600

「三沢、俺たち猛獣特急隊の力を見せてやろっぜ！」

「ああ！俺は手札の「ヒタチロイド」を2枚、そして場の「エクス
プレスロイド」を墓地に送り、「猛獣三体合体 トライボンバー」

を特殊召喚する!!」

三沢のデュエルディスクから音楽が鳴り出した。

おお、このBGMは「吠えて発進!ボンバーズ」か。三沢も手の込んだまねをしゃがって!(ほめ言葉)

「お前たち、行くぞ!」

「「おう!」」

「ヒタチロイド」2体が人型ロボットに変形し、左右の足となる。

そして「エクस्प्रेसロイド」が胴体となり、「ヒタチロイド」の前頭部分が両腕となって連結される。そして「エクस्प्रेसロイド」から顔が出てきた。

「トライボンバー!!」

猛獣三体合体 トライボンバー ATK2600

「「何!?!」」

初ターンから攻撃力2600だから驚くのも無理はない。あちらからすれば、「三魔神」と互角の攻撃力を持っているのだから。

「か、カッケー!!」

どうやら十代のハートに直撃らしい。俺も心が躍る。やっぱり勇者シリーズは最高です。

「そして「ヒタチロイド」の効果発動!このカードが手札、または

場から墓地に送られた場合、デッキからカードを1枚ドローする。まずは1体目の「ヒタチロイド」の効果が発動し、1枚ドローする。そして2体目の効果でもう1枚ドローする。」

ドロー効果有るかよ。恐ろしいな。

てか、ボンバーズが堂々と喋っているのはびっくりしたぞ。まさか

三沢は「勇者特急マイトガイ」デッキか？

「そして、カードを2枚伏せターンエンド。」

三沢 手札5 場 モンスター1 伏せ2

猛獣三体合体 トライボンバー ATK2600

手札がまだ五枚・・・これは酷い。

「く、おのれ・・・私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドローする。兄者、すまないが力を借りるぞ。」

「ふふ、構わないぞ。弟よ。」

「手札から魔法カード「生贄人形」を発動！「地雷蜘蛛」を生贄にレベル7のモンスターを特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターン、攻撃を行うことが出来ない。現れる！「風魔神 ヒューガ」！！」

物凄いバランスの悪いモンスターが現れた。見た目的に合体するのがバレバレだぞ？

風魔神 ヒューガ ATK2400

「すまぬ、兄者。」

「何、お前のためなら犠牲になろう。」

「それでは私の気がおさまらぬ。私は手札から魔法カード「闇の指名者」を発動！プレイヤー1人のデッキを対象とし、カード名を1つ選択する。もし、選択されたカードが対象のプレイヤーのデッキに存在する場合、対象となったプレイヤーの手札に加える。私が指名するのは「雷魔神 サンガ」！」

「ありがたい。私のデッキには「雷魔神 サンガ」が存在する。そして効果により私の手札に加える。」

（三文芝居、お疲れ様です。）

（まあ、これも戦術の一つだと思いますよ？）

（といっても、普通の決闘なら「闇の指名者」は完全にデッキ確認にしか使えんぞ。）

（タッグデュエル専用カードですね。）

「そして、私は手札から魔法カード「二重召喚」を発動。このターン、私は2回まで通常召喚を行うことが出来る。私は手札から「ヒゲアンコウ」を召喚。「ヒゲアンコウ」は水属性モンスターを生贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生贄にすることが出来るダブルコストモンスターだ！私は「ヒゲアンコウ」を生贄に、「水魔神 スーガ」を生贄召喚！！」

下半身とも言える、これまた微妙なモンスターが現れる。

水魔神 - スーガ ATK2500

「そして私はカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

迷宮兄弟（弟） 手札1 場（共用） モンスター2 伏せ2

水魔神 スーガ ATK2500

風魔神 ヒューガ ATK2400

手札が一枚、燃費が悪いな。

「私のターン、ドロ。私は手札から「マシンナース・ギアフレーム」を召喚するノーネ。」

機械兵士の整備士らしいフォルムだ。といっても、ソルジャー（兵士）より攻撃力の高い整備士って・・・。

マシンナース・ギアフレーム ATK1800

「そして「マシンナース・ギアフレーム」の効果発ツ動！このカードが召喚された時、デッキから「ギアフレーム」以外の「マシンナース」と名の付いたモンスター1体を手札に加えることが出来るノーネ。この効果により私はデッキから「マシンナース・フォートレス」を手札に加えるノーネ。カードを1枚伏せ、ターンエンドなノーネ。」

クロノス 手札5 場（共用） モンスター2 伏せ3

マシンナース・ギアフレーム ATK1800

猛獣三体合体 トライボンバー ATK2600

いたって普通だが、普通ゆえに消費も少なく次の行動に移しやすい。面白くないと言えばそうかもしれないが、堅実だと思う。

「私のターン、ドロー！手札から魔法カード「天使の施し」を発動。デッキからカードを3枚ドロし、その後2枚捨てる。そして魔法カード「早すぎた埋葬」を発動！ライフポイントを800支払い、自分の墓地にあるモンスター1体を選択する。選択したモンスターに、このカードを装備させて攻撃表示で特殊召喚する。このカードが破壊された場合、装備されたモンスターは破壊されるがな。俺は墓地の「カイザーシーホース」を墓地から特殊召喚！」

迷宮兄弟 LP8000 7200

カイザーシーホース ATK1700

「この「カイザーシーホース」もダブルコストモンスターだ。よって、このモンスターを生贄に、「雷魔神 サンガ」を生贄召喚！」

雷魔神 サンガ ATK2600

上半身型のモンスターだ。どう見ても「風魔神・ヒューガ」「水魔神 スーガ」と合体するな。こりゃ・・・。

「そして場の「雷魔神 サンガ」「風魔神 ヒューガ」「水魔神 スーガ」の三体の魔神が場に存在している時、これらを生贄にすることで最強の魔神を呼び出すことが出来る。現れる！「ゲート・ガ―ディアン」！！」

「水魔神・スーガ」を土台とし、その上に「風魔神 ヒューガ」が、

さらにその上に「雷魔神 サンガ」が乗っかり、1つの魔神が誕生した。

ゲート・ガーディアン ATK3750

どこかで「合体だー!!」と叫ぶ声が聞こえた気がするが気にしない。

いや、気にはしては負けな気がする。

「すっげー！けど、合体はやっぱり「トライボンバー」の方がカッコいいな。」

十代の声に気づいたのか

「お、分かっているじゃねーか！」

トライボンバーが十代に向かって手を振る。

「おお、「トライボンバー」が俺に手を振ってる！」

感動した十代もトライボンバーに手を振り返した。

「ふふふ、我らの切り札を見て驚くのも無理は無い。」

観客の方では早くも諦めが広まっているが、コミュニラVSカイザーを見た面々はあまり答えていない様子。アレのおかげで感覚が少し狂ったらしい。

「では、バトルだ！「ゲート・ガーディアン」で「マシンナーズ・ギアフレーム」を攻撃！」

「セットカードオープン、罾カード発ッ動！「ガード・ブロック」
！この戦闘でのダメージを0にし、1枚ドローしますーの！」

ゲート・ガーディアンの攻撃でギアフレームがたやすく破壊される。
しかし、ダメージは0。まだまだ戦える。

「くっ、ならカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

迷宮兄弟（兄） 手札1 場（共用） モンスター1 伏せ3
ゲート・ガーディアン ATK3750

「俺のターン、ドロー。」

「三沢、次は私達の番です。」

「頼む。セットカードオープン、罾カード「リビングデッドの呼び
声」を発動！墓地の「エクスプレスロイド」を攻撃表示で特殊召喚
する。」

エクスプレスロイド ATK400

「そして「エクスプレスロイド」の効果発動！墓地の「ラダーロイ
ド」と「ジェットロイド」を手札に加える。そして手札の「ラダー
ロイド」「パトロイド」「ドリルロイド」「ジェットロイド」を墓
地に送り、「緊急4体合体 ガードダイバー」を特殊召喚！」

再び三沢のデュエルディスクから音楽が流れ出す。
今度は「緊急発進！ダイバース」か。

「みんな、人命救助にベストを尽くすぞ!!」

「はい!!」

やっぱりダイバーズも喋るのか。となると・・・。

「ラダーロイド」が上半身、「パトロイド」が股間部分に変形し、そして「ドリルロイド」が右足に、「ジェットロイド」が左足へと変形し、それぞれ合体されていく。

「ガードダイバー!!」

緊急4体合体 ガードダイバー ATK2400

「すっげー!今度は消防車がメインなのか!!」

さらに一段と目を輝かせて叫ぶ十代。

「電車の次は消防車・・・次は何が出るんだろ?」

十代とは対照的に、冷静に次を分析しようとする凧。お前達のタツグデュエルが気になるよ。

「今更攻撃力2400のモンスターなど」

「「ゲート・ガーディアン」の敵ではないわ!!」

確かに攻撃力ではキツイ面がある。

「「緊急4体合体 ガードダイバー」の効果発動!このカードが特

殊召喚されたとき、相手の場の魔法・罠カードをすべて破壊し、墓地に送る！」

「何!?!」

「ハイドロキャノンツ!!」

ガードダイバーの両肩に装備されている放水機から勢いよく水が発射され、相手の場の魔法・罠カードを水圧で押し流した。

墓地に送られたカードは「聖なるバリア ミラーフォース」「攻撃の無力化」「アヌビスの裁き」だった。・・・結構危なかったな。

「そして「緊急4体合体 ガードダイバー」の効果発動!1ターンに1度、墓地の「ロイド」と名の付くカード2枚をデッキに戻し、デッキから1枚ドローする。俺は「ラダーロイド」と「パトロイド」をデッキに戻し、シャッフル。そして1ドロー。」

ふっ、と三沢が笑う。まさかそろったのか?

「行くぞ、ガイン!」

「いつでもOKだ。三沢!」

やはりガインも喋るのか。

「俺は場の「エクスプレスロイド」と、手札の「エクスプレスロイド」と「スチームロイド」を墓地に送り、「勇者特急 マイトガイン」を特殊召喚!」

「チエンジ、マイトガイン!」

またもや三沢のデュエルディスクから音楽が鳴り出す。
BGMはもちろん「レッツ・マイトガイン!!!」

2体の「エクस्पロイド」と1体の「スチームロイド」が空を飛ぶ。
そして2体の「エクस्प्रेसロイド」が1体の「スチームロイド」
を囲むように前に出る。

まず「スチームロイド」の後方部分が変形し、足となる。

そして後ろ半分が反転し、下半身となる。

続いて「エクस्प्रेसロイド」のうち1体が腕の形に変形し、

もう1体の「エクस्प्रेसロイド」も腕の形に変形した。

変形した2体の「エクस्प्रेसロイド」が「スチームロイド」の左
右に来る。

「スチームロイド」の車掌が乗りそうな部分の左側から連結器が出
てきて、左側に来た1体の「エクस्प्रेसロイド」がレーザーサイ
トによって誘導され、「スチームロイド」に連結される。

左側に来たの「エクस्प्रेसロイド」も同じ方法で「スチームロイ
ド」に連結される。

右腕となった「エクस्प्रेसロイド」の後部から手が出て、完全に
腕となった。

そして同じ方法で左腕の「エクスプレスロイド」も腕となる。

「スチームロイド」の前頭部分が折れ、胸の部分に覆いかぶさる。覆いかぶさった時、列車の汽笛がなった。

そして頭部が現れ、その目が輝く。

(〴〵)

変形が終わると同時に音楽も鳴り止む。

「こ、これが三沢の切り札なのか。」

生徒の誰かが呟く。

「そう、その通りだ！」

その呟きに、三沢が答える。

「銀の翼に」

マイトガインが前に出て、右腕を左前に力強く出す。

「希望のたまを乗せて」

今度は左肩を重心に、前に出る。

「灯せ平和の青信号！」

自分の頭部に装備された列車の信号機を模ったパーツに右指を指して、強調する。

「勇者特急マイトガイン。定刻通りにただいま到着!!!」
その場で一回点し、ポーズを取る。

勇者特急 マイトガイン ATK2800

「すげー、変形も音楽も決め台詞も全てあるのかよ！くーっ、俺のHEROにもほしいぜ！！」

十代のテンションは完全にMAX状態だ。

「車両の次は列車・・・すごいな。」

少し悩みながら、凧は冷静にマイトガインを見つめる。

「ふふ」

「登場は派手だが、残念だったな。」

十代とは対照的に、マイトガインの攻撃力を見て笑いを飛ばす迷宮兄弟。

「いやあ、勇者シリーズを舐めてはいけませんよ？」

「バトル！」「勇者特急 マイトガイン」で、「ゲート・ガーディア」に攻撃！」「

「動輪剣！」

マイトガインの左の腰部分に収められていた剣を取り出し、構える。明らかに剣の方が長いのに、どうやって収納したんだろ？

「血迷ったか！？」「マイトガイン」の攻撃力は2800だぞ？」

「シニョール三沢!？」

迷宮兄弟とクロノス先生の同様を他所に、三沢は自信満々でマイトガインを見つめる。

そして動輪剣の左右のつばが開き、中央の輪が勢いよく回転し、煙が出る。その回転に呼応するように、剣が光り輝く。

「勇者特急 マイトガイン」の効果発動! 相手モンスターに攻撃する場合、攻撃力が1000ポイントアップする!」

「何!？」

勇者特急 マイトガイン AK2800 3800

勇者シリーズでの特徴なのかな? 攻撃時に攻撃力が上がるのは。だとしたら結構面倒なことになるな。

「さらに、手札から速攻魔法「リミッター解除」を発動! 自分の場の機械族モンスターの攻撃力を2倍にする!」

勇者特急	マイトガイン	AK3800	7600
猛獣三体合体	トライボンバー	AK2600	5400
緊急4体合体	ガードダイバー	AK2400	4800

マイトガインが背中のスラスターで空中に飛ぶ。

そう、ゲート・ガーディアンの上付近に。

「縦一文字切り!」

「はぁー!」

三沢の掛け声と共にマイトガインの気合の入った一撃が、落下スピ
ードを加えてゲート・ガーディアンに襲い掛かる。そしてなす術無
く切り裂かれるゲート・ガーディアン。
そしてなぜか爆発し、爆炎からマイトガインが現れる。大地に刺さ
った動輪剣を抜く。

迷宮兄弟LP7200 3350

「まだだ、「猛獣三体合体 トライボンバー」と「緊急4体合体
ガードダイバー」で迷宮兄弟にダイレクトアタック!!!」

「ボンバーガントレット!!!」

「ダイバーギムレット!!!」

トライボンバーは格闘で、ガードダイバーは手に持っていたライフ
ルで迷宮兄弟を攻撃する。

迷宮兄弟LP3350 - 2150 - 6950

「そこまで！勝者、クロノス先生と三沢君のAチームにや！」

「『三沢ーッ!!!』」

観客から三沢コールが大きく響く。

「出番が少なかったノーネ。」

クロノス先生、哀れ。

「マイトガイン達もかっこよかったぞ!!!」

その声に対して、マイトガインがどや顔と共に頭部の信号機を模したパーツから青信号が光る。そしてソリッドビジョンが解除され、彼らは消えていった。

迷宮兄弟がどこかへ去った後、ナポレオン教頭が悔しがっていた。

「くーっ、まさかの切り札があったのであるとは……。我輩も焼きが回ったのでア〜ル。しかし、まだ勝負はこれからである！」

「ふんっ。どのような刺客を用意したとしても、私達は決して負けはしないノーネ！」

ナポレオン教頭とクロノス先生がいがみ合っている中、三沢がベンチに戻ってきた。

「『三沢ー！』」

「十代、翔、凧。ただいま。」

「三沢、俺のヒーローにも決め台詞とか、音楽とかそういうのを頼む！」

十代が三沢に勢いよく頼む。変身と変形は残念ながら相性が悪いので断念しているみたい。三沢も少し呆れているみたいだ。

「しかし、三沢。お前が「勇者特急マイトガイン」系カードを持っているとはな。」

「ああ、パックを買ったら偶然当たってな。イラストが気に入った

からデツキを作ってみたんだ。」

まあ、俺の「ファイヤーダグオン」もパツクで当てたからなあ。今度は「勇者警察ジエイドッカー」か「黄金勇者ゴルドラン」のどちらかが来そうな予感がするよ。

「で、次は誰なんだ？」

十代と俺の質問が終わり、凧が三沢に聞く。

「ああ、確か次は……。」

「さあ、次は。シングルデュエルにゃ！今度は丸藤君のＣチーム対刺客さんこととの対戦にゃ。両者、前に出るにゃ！」

三沢が答える前に、大徳寺先生が叫ぶ。
タイミング悪いな！

「だそつだ。頑張れよ、翔。」

「ああ、頑張ってくる。」

「翔、頑張れよー！」

「サンキュー、十代。」

「翔。」

「どつした？凧？」

ベンチから行こうとすると、真顔になった凧から呼び止められた。

「俺の予感が、ヤバイと告げている。……油断するなよ？」

「分かってるって。じゃあ、行って来る。」

そうして俺はベンチを後にし、会場へと足を向けた。

次回予告

翔「クロノス先生&三沢のAチームが見事勝利を収めたな。そして次は俺か。で、相手は……何だと!？」

アイリス「久しぶりですね。師匠。」

翔「こりゃ厳しいことになりそうだ。」

アイリス「例え、あなたが相手でも……私は戦います!」

次回「制裁決闘第二回戦」

フィールド9：制裁決闘第一回戦（後書き）

正義の力が嵐を呼びました。

そんな回でした。・・・他の勇者は誰が使うんだろ？

しかし、三魔神の能力がまったく生かされませんでしたね。 o r z

次回は・・・恐らくバレバレですね。

フィールド10：制裁決闘第二回戦（前書き）

今回はガーディアン of 始祖であるあの人との決闘です。

・・・一部キャラ崩壊していますので、ご注意を。

追記：アイリスはOCG仕様の「ガーディアン・エアトス」です。
それと、また音楽が違反になるので削除しました。

フィールド10：制裁決闘第二回戦

「これより、丸藤君のCチーム対刺客さんCのシングルデュエルを開始するのじゃ！両者、前へ出るのじゃ！！」

わーっ！！

「翔、頑張れー！」

「負けるなよ、翔！」

観客席のみならず、ベンチ組からも声援が聞こえる。

(かなり・・・緊張するな。)

(これだけ多くの方がいますからね。)

なんつーか、晒し者にされている気分だ。ちょっと恥ずかしかったりする。

いや、あんまり注目されると緊張して話せなくなるタイプなんだよ。俺。そういう意味では、ある意味拷問でもある。やめて・・・本当に。

俺が前に出ると、コートを被った刺客Cも前へ出る。

「少年、恨みは無いがこれも定め。覚悟してもらっぞ！」

その声は、「遊戯王5D's」の「カップラーメンマン」！！しかし、口調が違う。そう思っていると刺客Cがコートを剥ぎ、剥

がれたコートは宙を舞った。

中から現れたのは「うほっ」な人がいればホイホイ誘いそうな大柄な体格をしている金髪のアメリカ人男性。・・・最初は必要だが、ここまで書けばアニメ「遊戯王」ドラマ編をご視聴している読者なら分かるはずだ。

そう「ラフェール」である。俺からすれば「ガーディアン」のカテゴリーの始祖はこの人じゃないかと思っている。てか、この人がいなかったら「ガーディアン・エアトス」は存在していたのか疑問だ。

「ルールはいつも通りにや。それでは両者、いざ！」

「決闘！！」

わー！！さらに一際大きい声援が・・・耳が痛いぞござる。

「俺の先攻、ドロー！俺はモンスターをセット。カードを2枚伏せターンエンド！」

翔 手札3 場 モンスター1 伏せ2
セットモンスター DF？

「私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキから2枚ドローする。そして私は「バックアップ・ガードナー」を守備表示で召喚！」

バックアップ・ガードナー DF2200

守備力が地味に「サイバー・ドラゴン」の攻撃力を上回っているのがすごいな。てかこのカードを早くOCG化してくれないかな。他

のガーディアンデッキも作りたし。

「私は手札から永続魔法「守護神の宝札」を発動！手札を5枚捨て、デッキから2枚ドローする！そして、次のターンよりドローカードを2枚までドローする！！」

（早速これか・・・。）

（次のドロー前に「サイクロン」を使われたらディスアドバンテージが凄いですね。）

（観客、および読者様から非難が殺到しそうだがな。）

アイリスと話していると、ラフェールが笑い出した。ちょっと不気味だ。

「ふふふ、少年よ。私の友が君と戦いたいと気が逸っている。私は手札から装備魔法「重力の斧 グラール」を「バックアップガードナー」に装備！そして、「ガーディアン・グラール」を特殊召喚する！！」

ガーディアン・グラール AK2500

恐竜に服を着させたモンスターってかなり珍しくないか？と思う今日この頃のカード。実際は「ガーディアン」の中でもかなり強いけどな。

ざわ・・・ざわ・・・

「なんで、あんな攻撃力の高いモンスターが手札から特殊召喚でき

るんだ？」

「おそらく「サイバー・ドラゴン」に似た特殊召喚方法を持っているんだろ。」

ベンチ

「すっげー！手札から攻撃力2500のモンスターを特殊召喚するなんて！！」

十代は驚いているが、凧や三沢は対照的に落ち着いていた。

「なあ、三沢。確かラフェールは……。」

「ああ、「ガーディアン」の使い手だ。しかし、あのデッキはかなりの難易度を誇るはずだ。それを軽々と……。」

「それはカードとの絆があるからだと思いますーノ。」

クロノス先生が三沢たちの会話に参加する。

「「クロノス先生!?!」」

「彼は昔からあのデッキ一筋で勝ち上がってきた猛者と聞きましたノーネ。その長き年月に裏づけされた絆は、私達の想像をはるかに超えるものだと思いますーノ。」

「なら。」

「翔は果たして勝てるのだろうか？」

凧と三沢は暗い顔になった。だが、十代はむしろその顔に輝きを増していた。

「いや、翔はどんな時でも勝つさ。それに……。」

「……それに?」「」

十代が一旦間を置くと、みんなが釣られた。

「あいつの傍には、大切な相棒がいるから。な、ハネクリボー!」

(クリクリ)

ハネクリボーは相棒である十代の言葉を肯定しているかのごとく返事を返した。

...

(流石にいつも勝てるとは限らないんだがな。)

十代の言葉に少し焦るが、同時に嬉しかった。ここまで信頼されるとは思っていなかったからだ。

「私は「バックアップ・ガードナー」の効果発動!自身に装備されている「重力の斧・グラール」を「ガーディアン・グラール」に装備させる。」

バック・アップガードナーがガーディアン・グラールに斧を手渡して渡す。手渡しだったのか。

ガーディアン・グラール ATK2500 3000

「攻撃力が3000!!!」

ブルーアイズと同じか。ちと厄介だな。

「バトル!」ガーディアン・グラール」で、セットモンスターを攻撃!英断の斬撃!!!」

ガーディアン・グラールの斧が俺のセットモンスターに切りかかるうとする。

だが、通すわけには行かない。

「セットカードオープン、畏カード発動!」くず鉄のかかし!相手モンスター1体の攻撃を無効にする!!!」

突如として盛り上がった案山子にグラールが切りかかる。しかし案山子は切れず、見事に耐えた。

「そして「くず鉄のかかし」は発動後、墓地に送らずにそのままセツトする。」

「何ッ!?!」

ざわ・・・ざわ・・・

「あんなカード、あつたっけ?」

「いや、初めてみたぞ。」

「ほしいな。あのカード・・・便利そうだし。」

ベンチ

「へー。中々面白いカードだな。ん？どうしたんだ？風、三沢。」

喜んでいて十代に対し、風と三沢はぶつぶつと喋っており、なにやら話しているみたいだ。

・・・

(実際はまだこの世界には無いカードだからな。驚いて当然だと思うがな。)

まあ、この世界のことだからあちらも何かしらの強化が施されているはずだ。注意せねば・・・。

「ならば、私はこのままターンを終了する。」

ラフェール 手札0 場 モンスター2 魔法カード2

永続魔法「守護神の宝札」 装備魔法「重力の斧 グラール」

バックアップ・ガードナー DEF2200

ガーディアン・グラール ATK3000

「俺のターン、ドロー！俺はセットモンスターを反転召喚・・・できないんだよなー。」

「ん、「重力の斧 グラール」の効果を知っているのか？」

「重力の斧・グラール」は相手は表示形式を変更できないという効果を持つている。結構厄介だ。てか、意外と驚いているな。ロックデッキなら採用範囲内だろ？これ。

「まーね。・・・ロックなのは、ちと厳しいな。むむむ。」

手札は残念ながら、今は温存しておきたいカードばかり・・・どうする？

「なら、このままターンエンドかな。」

翔 手札4 場 モンスター1 伏せ2
セットモンスター DEF?

「ほう、そのままターンを終了したか。私のターン、ドロ！私は手札から装備魔法「蝶の短剣・エルマ」を「バックアップ・ガードナー」に装備！そして手札から「ガーディアン・エルマ」を召喚！」

ガーディアン・エルマ ATK1300

「蝶の短剣・エルマ」が凶悪なカードだったため禁止カードになり、その後まったく姿を見ていない珍しいモンスターだ。しかし、蝶を意識した服装は露出が凄いな。てか、蝶と言うと「蝶サイコー！」の人を思い出してしまう。

「そして、「ガーディアン・エルマ」の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚された時、自分の墓地にある装備魔法を1枚、このカードに装備させる！私は墓地の「ガーディアンシールド」を装備！」

確かアレは装備モンスターが破壊された時、あのカードを墓地に送ることで破壊を無効にする身代わりカードだったはず。

「そして「バックアップ・ガードナー」の効果により、自身に装備されている「蝶の短剣 エルマ」を「ガーディアン・エルマ」に装備させる！」

グラールのとおりと同じように、やはり手渡しで短剣を渡した。

ガーディアン・エルマ ATK1300 1600

「バトル！「ガーディアン・エルマ」で、セットモンスターに攻撃！！情熱の雷鳴！！！」

ガーディアン・エルマがジャンプし、空を舞う。そして、一気に降下し自身が持っている短剣でセットモンスターを切り裂こうとした。

「セットモンスターは「ウェポン・サモナー」。守備力は1600だから破壊されない！」

魔術を操りそうな男性型のモンスターが現れる。実際魔法使い族なんだけどな。

エルマの短剣を魔術によって作り出された防御壁で防ぐ。

「そして、「ウェポンサモナー」の効果発動！デッキから「ガーディアン」と名の付くカードを1枚手札に加える。」

「ほう、少年。君もガーディアンデッキなのか。」

ラフェールが興味を持ったらしく俺に尋ねる。

「まあ、そういうことです。俺はデッキから「ガーディアン・エアトス」を手札に加える！」

「何！？「ガーディアン・エアトス」を持っているのか！」

ラフェールがかなり驚く。まあ、俺のエアトスはOCG仕様だけだな。さすがにアニメオリジナルのアレは持っていない。イラストが気に入っているので、機会があれば1枚はほしいな。専用装備魔法込みで。

「もちろん。で、「ガーディアン・エアトス」を手札に加えてデッキをシャッフル。」

念入りに切っておかねば・・・固まっていたらやばいな。

「なら、「ガーディアン・グラール」で「ウェポン・サモナー」を攻撃！英断の残撃！」

「再び畏カード「くず鉄のかかし」を発動し、攻撃を無効にします。そしてセット。」

「私はこのままターンを終了する。」

ラフェール 手札0 場 モンスター3 魔法カード4

永続魔法「守護神の宝札」 装備魔法「重力の斧 グラール」 装

備魔法「蝶の短剣 エルマ」 装備魔法「ガーディアンシールド」

バックアップ・ガードナー DEF2200

ガーディアン・グラール ATK3000

ガーディアン・エルマ ATK1600

「俺のターン、ドロー！よし・・・行くぞ、アイリス。」

(いつでもどうぞ！)

「俺は手札から「ガーディアン・エアトス」を特殊召喚！！」

(〜)

俺のデュエルディスクから音楽が流れる。

今回は水木一郎verの「熱風！疾風！サイバスター」だ！

一つの風が新たな風を呼ぶ。

新たな風はまた新たな風を呼び、その帯を重ねていく。

やがてその風の帯は、一つの竜巻になった。

そしてその中から白き羽が現れ、大きく羽ばたく。

すると竜巻があつという間に止んだ。

そして羽の生えた1人の少女が現れる。

「私はサイバスターじゃないですよっ！？」

第一声がそれか！？

ざわ・・・ざわ・・・

「生贄なしで2500・・・だと！？」

「翔もあんなカードを持っていたのか。」

「しかし、あのモンスターは中々かわいいな。」

「分かっているって。と、カードを1枚伏せ、手札から魔法装備「魔道師の力」と「レインボー・ヴェール」を「ガーディアン・エアトス」に装備！「魔道師の力」は自分の魔法・罠カードの数×50ポイントアップする効果を持っている！！俺の魔法・罠カードは5枚！よって攻撃力・守備力共に2500ポイントアップ！！」

ガーディアン・エアトス ATK2500 5000

「何！5000だと!?!?!」

観客が皆驚いている。

まあ、いきなり「ファイブ・ゴッド・ドラゴン」と同じ攻撃力を持つモンスターを出されたら驚きもするわな。

「バトル！「ガーディアン・エアトス」で「ガーディアン・エルマ」に攻撃！」

アイリスが左腕を掲げると、風の帯が左手に集まる。すると、その中から1本の刀が現れ、アイリスがその刀を掴むと風が吹き止んだ。結構便利だな。

そしてアイリスが鞘を左腰に装備させ、刀を抜かずに腰を沈めて構える。

「はあっ!?!」

気合の入った声と共に一陣の風が舞う。

するとアイリスが元にした場所から、ガーディアン・エルマの後ろまで移動しており、いつの間にか刀が抜かれていた。そしてその刀

を鞘に納める。

チンツッ！

納めた時に音が鳴る。するとガーディアン・エルマが装備していたガーディアンシールドが真っ二つに割れていた。

「ガーディアンシールド」の効果を発動し、「ガーディアン・エルマ」の破壊を無効にする。」

ラフェールが静かに言った。やはり、身代わり系だったか。

「しかし、ダメージは受けてもらおう。」

ラフェール LP4000 400

「そして俺は、このままターンエンドだ。」

翔 手札2 場 モンスター2 伏せ3 装備魔法2

装備魔法「魔道師の力」 装備魔法「レインボー・ヴェール」

ウエポンサモナー DEF1600

ガーディアン・エアトス ATK5000

「くっ、私のターン。ドロワー！カードを1枚伏せ、手札から魔法カード「天よりの宝札」を発動！お互いに手札が6枚になるようにカードをドロワーする。私の手札は無い。よって、6枚ドロワー！」

「俺は4枚ドロワー！」

これでラフェールの手札は生き返った。なら、何かしらの方法でこ

の状況を逆転しようとするはずだ。それを防げれば俺の勝ちだ。
ラフェールが手札を確認して不敵の笑みを浮かべる。あ、こりゃ・
・ちよつとやばいかも。

「私は手札から装備魔法「静寂のロッド ケースト」を「バックアップ・ガードナー」に装備！」

バックアップ・ガードナー DEF2200 2700

結構硬くなつたな。といつてもケーストさん出るから無意味だけど。

「私は手札から「ガーディアン・ケースト」を召喚！」

ガーディアン・ケースト ATK1000

一言で言うならばマーメイドと言った方がいいのかな？一応下半身は魚だし。と言つても種族は海竜族なんだけどね・・・珍しいとかいいようがない。

「さらに「バックアップ・ガードナー」の効果発動！装備されている「静寂のロッド ケースト」を「ガーディアン・ケースト」に装備！」

またもや手渡された・・・。お疲れ様です。

すると、ラフェールの背後に白い翼が出てくるのを確認できた。ということとは。

「少年よ、私のエアトスが君の相棒に会いたがっているようだ。」

ラフェールのエアトスフラグキター！！

1度は生で見てみたかったから、思う存分召喚してください。

「私は手札から装備魔法「女神の聖剣 エアトス」を「バックアツプ・ガードナー」に装備！そして私はこのモンスターを手札から特殊召喚する。いでよ！「ガーディアン・エアトス」ッ！！」

「女神の聖剣 エアトス」から一羽の白き鳥が羽ばたき、天へと上る。そして彼女が天から舞い降りた。

これが、ラフェールのエアトスか・・・うん、感動しました。本当に生で見れてよかったです。

ガーディアン・エアトス ATK2500

ラフェールのエアトスが舞い降りると、アイリスが驚いていた。どうした？

「し、師匠！てことは・・・、皆さんまで！！」

な、なんだってー！（AA略
てか、精霊に師匠がいたのは驚いたよ。ブラック・マジシャンガールの師匠がブラック・マジシャンという設定は有名だが、同名カード内で師弟関係があったとは。

「久しぶりですね。元気にしていましたか？」

「はい！師匠！！」

「すっかり遅しくなったなあ。」

「ははは、あの頃とあまり変わりませんよ。グラール先生。」

「ふふふ、謙遜しなくても十分成長しましたよ？」

「そうですね？ありがとうございます。ケーストお姉さん。」

「今さっきの攻撃は中々筋が良かったぜ！」

「あ、ありがとうございます。エルマ先輩。そしてごめんなさい。」

「気にしなくても大丈夫だって。」

ラフェールのエアトスや他のガーディアンに対して明るく元気に答えを返すアイリス。

なんつーか、師弟というより仲のよい家族に見えて仕方ない。てか、敵同士なんだが・・・大丈夫なんだろうか？これ。個人的にはちと心苦しいんだが。

「そういえば師匠やグラール先生、ケーストお姉さん、エルマ先輩は今まで何をしていたのですか？里の皆は師匠達が行方不明になって随分慌てていましたけど。」

あ、何かラフェール陣のガーディアン達が苦い顔になった。

「ええっと・・・。」

ラフェールのエアトスが少し話しづらそうにしていると、グラールがアイリスの疑問に答えた。

「まあ、何だ。エアトスがラフェールに一目ぼれして、こちらの世

界へと来てしまつてな。俺たちはそれを食い止めようとしたんだが。」

「逆に私達まで巻き込まれてしまつて。」

「そこで、私達もこの世界で生活しているつて事。」

「だって仕方が無いじゃないですか!？あんな子供が事故で家族を失い、たった一人で無人島に流されているのをただじつと見ているのは私の性に合いませんよ!」

真つ赤になつて仲間たちの話を否定しようとするエアトス。あれ?これってデュエル中じゃなかつたっけ?

「ちなみラフェールはエアトスの好みのドストライクだったりするんだよな・・・さらに当時は子供だったし。」

「エルマツ!!」

エルマが笑いながら話すと、エアトスが怒鳴る。

「とりあえず、そういうことだ。まったくエアトスは・・・。」

「まあ、放つて置けないというのは本心でしたけどね。」

グラールとケーストが苦笑しながら答える。

いい仲間に恵まれたじゃないか。ラフェールのエアトスは。

「こほんっ!とりあえず、今は敵同士なので話は後にしましょう。」

顔を真っ赤にしたエアトスが無理やり話を終了させた。何っーか、物凄い漫才を見ていた気分だよ。

「あーと、少年よ。何と言うか……。」

「わかっています。ラフェールさん。」

「すまん。」

この微妙な雰囲気は気分的にもよくわかる。シリアスな展開がマジでぶち壊されたからな。

「気を取り直して。「バックアップ・ガードナー」の効果発動！装備されている「女神の聖剣 エアトス」を「ガーディアン・エアトス」に装備！」

また同じ展開なので省略。

ガーディアン・エアトス ATK 2500 2800

エアトスの効果は相手の墓地にモンスターがある場合のみ発動できる。……残念ながら俺の墓地にモンスターはいないぞ？

「私は今さつきセットしたカードを発動する。通常魔法「強襲形態 アサルトモード」を発動！このカードは自分のライフを半分支払い、自分の場に存在するモンスター1体とそのモンスターに装備されている装備魔法1枚をゲームから除外し、「・アサルトモード」を特殊召喚する！私は「ガーディアン・エアトス」と装備されている「女神の聖剣 エアトス」をゲームから除外し、デッキから「ガーディアン・エアトス・アサルトモード」を特殊召喚！」

ラフェール LP400 200

女神の聖剣 エアトスが輝き、ガーディアン・エアトスはその剣を天へと掲げる。

すると光がガーディアン・エアトスを包み込む。そして光が消えると真紅の鎧を纏ったガーディアン・エアトスが現れた。ちなみに鎧のデザインは「ダーク・ヴァルキリア」にそっくりだったりする。

ガーディアン・エアトス・アサルトモード ATK3000

まさかこんな奥の手が用意されていたなんて・・・

「さらに、「ガーディアン・エアトス・アサルトモード」の効果発動！このカードが特殊召喚に成功した場合、デッキから装備魔法カード1枚を選択し、このカードに装備することが出来る。私はデッキから「団結の力」を選択！そして「ガーディアン・エアトス・アサルトモード」に装備させる！！」

「団結の力」は自分の場のモンスター1体につき、攻撃力・守備力が800ポイントアップする化け物カードだ。確かラフェールの場のモンスターは5体。ということは・・・

ガーディアン・エアトス・アサルトモード ATK3000 7000

「攻撃力7000！？」「」

もはや攻撃力のインフレになりそうだ。

「さらに手札から速攻魔法「サイクロン」を発動！そちらの「魔道師の力」を破壊する！」

ガーディアン・エアトス ATK5000 2500

やばい、これ以上攻撃力をあげられたら・・・詰むな。

「バトル！「ガーディアン・エアトス・アサルトモード」で「ガーディアン・エアトス」に攻撃！！」

「なら、セットカードオープン！畏カード発動！」

「無駄だ！「ガーディアン・エアトス・アサルトモード」は相手の効果モンスター・魔法・畏カードの効果では破壊されず、対象にならない！」

「いや、この畏の対象にするのは俺のアイリスだ！」

「何！？」

「そして発動する畏カードは「ライジング・エナジー」！手札を1枚捨て、対象にしたモンスターの攻撃力をターン終了時まで1500ポイントアップする！！」

翔 手札6 5

ガーディアン・エアトス ATK2500 4000

「だが、まだ足りないぞ！」

観客から悲鳴らしき声上がる。
わかつているさ、そんなことは。

ラフェールのエアトスが一振りの剣を構えると、アイリスも刀を呼び出し・・・居合いの構えを取る。

「例え、あなたが相手でも・・・私は戦います！」

「成長したわね。なら、行かせて貰うわ！」

ラフェールのエアトスとアイリスがほぼ同時に動いた。

「縦、一閃！！！」 「霞切り！！！」

・・・

お互いが切り抜き、そして背を向けたまま硬直する。

「っ！」

先に倒れたのはアイリスだった。片膝で何とか体勢を保ち、刀を鞘へと戻す。

チンツッ！

その音が引き金となったのか、ラフェールのエアトスがゆっくりと倒れた。

翔 LP4000 1000

ラフェール LP2000 0

「な、なぜ私のエアトスが？」

「悪いがこれを発動させてもらった。・・・罠カード「プライドの咆哮」だ。このカードは戦闘計算時、自分のモンスターが相手モンスターよりも攻撃力が低い場合、その攻撃力の差分のライフポイントを払って発動する。ダメージ計算時のみ、自分モンスターの攻撃力は相手モンスターとの攻撃力差+300ポイントアップする。」

ガーディアン・エアトス ATK7300

一瞬の静寂が場を包み、次の瞬間には大きな歓声がこの場を制圧していた。

「勝者、翔君のCチームだにゃ！」

「翔ー、よくやったぞー!!」

「カッコ良かったぜ！翔！」

しかし、この大声援は流石に頭に響くから勘弁してくれ。

「少年、いや・・・翔。」

ラフェールが俺に何か言いたいらしい。

「君とはもう1度、どこかで戦いたいものだ。」

「僕もですよ。ラフェールさん。」

「その時まで、楽しみに待っておこう。」

（アイリス、お元気で。）

（師匠もお元気で。）

（アイリス・・・無茶はするなよ？）

（分かっています。）

（次に会う時にはもっとお話がしたいですね。）

（確かに。出来れば、決闘以外で会いたいですね。）

（あんたのマスターと仲良くな。）

（分かっていますよ。それでは。）

そう言うと、ラフェールとガーディアン達は下がっていった。さて、俺もベンチに行くか。

「翔、やったな！」

「ああ、何とか・・・で、三沢たちは何をしているんだ？」

十代は元気そうにしているが、なにやら三沢と凧の様子がおかしい。

すると、三沢と凧が俺に詰め寄ってきた。

「翔、頼むから「くず鉄のかかし」を俺に分けてくれ！」

「俺にもだ。翔。頼む！」

「すまないが、「くず鉄のかかし」はデッキ分しかないから無理！」

「「そんな」」

がつくりと頂垂れる二人。

「てか、そろそろお前たちの番じゃないか？」

「そうなのーネ。最後はシニョール十代とシニョール凧のタッグマツチなのーネ！」

「ああ。お前たちのデュエルを見て、俺の脚がムズムズしていたぜ！ やつとこれで決闘できるな、凧！」

「そうだな、十代！俺の新デッキが火を噴くぜ！」

「俺のHEROデッキも負けないぜ！」

十代と凧はもうヒートアップしているよ。早いなあ・・・。

（それだけ燃えてるって事です。マスター。）

（おう、お疲れ。アイリス。）

「さあ、最後は遊城&神楽坂君のBチーム対刺客さんD&Eのタッグマッチデュエルにゃ！」

「じゃあ、行ってくるぜ！」

「ああ、勝つてこい。」

「もちろん!!！」

そういうと十代は会場へと駆け出した。

「じゃあ、俺も行ってきました。」

「シニョール十代を頼むノーネ。」

「わかっていますよ。クロノス先生。」

そういうと、凧も十代の後を追った。

次回予告

翔「これで勝てれば、全員の勝利だ。」

アイリス「しかし、そう甘くはないと思いますよ?」

翔「まあ、な。さて次の相手は・・・お前たちかよ！」

次回「制裁決闘最終戦」

フィールド10：制裁決闘第二回戦（後書き）

と言うことで、今回はラフェールとの対戦でした。

前回の三沢が派手すぎたので、ちょっと控え目な感じがしますね。

さて、風のデッキはどうでしょうか？

フィールド11：制裁決闘最終戦（前書き）

今回は予想外の2人が登場します。・・・作者の予想的な意味で。

フィールド11：制裁決闘最終戦

「これより、最終戦。遊城&神楽坂君のBチーム対刺客さんD&Eのタッグマッチデュエルを始めるにゃ！」

「十代！しっかりしろよっ！」

「凧、汚名挽回のチャンスだ！ミスんなよ!？」

「汚名は挽回じゃなくて返上だ!!！」

わーっと声上がる。しかしまあ、喉は大丈夫なのだろうか？もちろんだが、俺たちベンチ組も応援しておく。

「十代、気張るなよ!？」

「凧、落ち着いていくんだぞ！」

「二人とも頑張るノーネツ！」

十代と凧が前へ出ると刺客D&Eも前へ出るが・・・何かもしもじしている。

何かあったのか？

「・・・今からでも棄権した方が良かったんじゃないですか？」

「いや、ここで引いちゃったらあいつらに悪いだろ？それと、ゴメンな。こんなことに付け合せてしまって。」

「い、いえそんなこと。．．．それに私も一緒に決闘をしたかったですし。」

「じゃあ、行こうか。」

「はい！」

お、刺客D&Eが前に出る。そしてコートを剥いだ。
げ、あいつらは．．．。

「さて。男、城之内！！売られた決闘は買わせて貰うぜっ！」

「わ、私も一緒に頑張りますっ！」

「城之内 克也」と「北森 玲子」じゃないか！城之内はともかく、
何で「遊戯王R」のキャラクターが！？この世界はアニメと「遊戯
王R」の正史を統合した世界なのかよ！！
てか、何故に城之内がこの制裁決闘に参加しているんだ？

「おおと、これはまさかの人物だにゃ！何と遊城&神楽坂君と戦う
のは、あのバトルシティでベスト4の座を手に入れた猛者「城之内」
選手だにゃ！そして城之内選手を追い詰めた天才決闘者「北森」選
手とのタッグマッチだにゃ！」

わーっ！！

「城之内さん！後でサインくれー！」

「きゃー、城之内さん！！」

「北森さんー！俺だー、結婚してくれー！」

「まさかあの憧れの人に彼女がいるなんて！」

「何とつらやま．．．けしからん！」

何っつーか、凄いことになっているな。

主に観客席側が。いや、十代も興奮しているよ。

「すっげー！生の城之内さんって始めてみた！くーっ、あんな有名な人と戦えるなんて、俺ってついてるーっ！」

そして、凧は驚きつつも気合を入れなおした。プレッシャーとの戦いになりそうだからなあ。

「十代、凧！今すぐ俺と変われ！」

「そうだ。羨ましいぞー！」

「制裁決闘じゃなくて、これじゃあ代表戦じゃないか！」

あ、やっぱり一部から批判が出ているな。気持ちは分からなくはないが。

「まー、まー、落ち着くにや！ルールは第一回戦の時と同じにや。

言い忘れていたけど、自分のターンで相手のモンスターの表示形式の変更や攻撃は出来るにや。それでは……。」

「「決闘！！」」

わーっ！！！

まさかの有名人が出場していたという予想外の決闘に会場がヒートアップした。

「俺の先攻、ドロー！」

凧が先手か・・・どんなデッキを使うんだろ？

「俺は手札から魔法カード「増援」を発動！デッキからレベル4以下の戦士族1体を手札に加える。俺はデッキから汚い忍者・・・げふんげふん、「速攻の黒い忍者」を手札に加える！」

今、汚い忍者って言ったろ！「飛影」のことか！？

「そして俺は手札から「速攻の黒い忍者」を攻撃表示で召喚！」

速攻の黒い忍者 AK1700

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

凧 手札3 場（共用） モンスター1 伏せ2

速攻の黒い忍者 AK1700

まさかの「速攻の黒い忍者」・・・忍者デッキか？

「わ、私のターン。ドロー！」

「ドローフェイズにセットカードオープン！永続罫カード「忍法変化の術」を発動！」

そして永続罫「忍法 変化の術」にチェーンしてもう一枚のセットカードを発動！永続罫カード「魔封じの芳香」を発動！」

げえ！忍法シムルグデッキかよ！？おまけに魔封じの芳香でほぼ完全口ツクと来たし。

「な、なら、チェーンして手札から速攻魔法「サイクロン」を発動

します。私は「魔封じの芳香」を破壊します！」

あ、残念。魔封じの芳香が破壊され、完全なロツクにはならなかったようだ。

しかし、「忍法 変化の術」を破壊した方がよかつたんじゃない？まあ、シムルグなんてカードがあるとは思わないだろうし。

「くっ、仕方が無い。だが、「忍法 変化の術」は発動される！このカードは、自分の場の「忍者」と名のつくモンスター1体を生贄にして発動することが出来る。俺はレベル4の「速攻の黒い忍者」を生贄に捧げる。選択したモンスターのレベル+3以下の獣族・鳥獣族・昆虫族のいずれかのモンスター1体をデッキから自分フィールド上に特殊召喚する！俺はデッキからレベル7の鳥獣族モンスター「ダーク・シムルグ」を選択し、特殊召喚する！」

ダーク・シムルグ ATK2700

おおー、会場から驚きの声上がる。

「なら、私は手札から「増援」を発動します。私はデッキから「キングス・ナイト」を手札に加えます！」

絵札の三銃士か？だが、アレは結構きついはずだ。

「さらに私は、手札から「沼地の魔神王」を墓地に送り効果を発動します。デッキから「融合」を手札に加えます。そして魔法カード「二重召喚」を発動し、このターン私は2回まで通常召喚を行うことができます。私は手札から「クイーンズ・ナイト」を攻撃表示で召喚します。」

クイーンズ・ナイト ATK1500

今さっき「キングス・ナイト」を手札に加えたってことは・・・ア
ウトだな。

「そして私は手札から「キングス・ナイト」を召喚し、効果を発動
します。このカードが召喚に成功した時、場に「クイーンズ・ナイ
ト」が存在する場合、デッキから「ジャックス・ナイト」を場に特
殊召喚できます！現れて！絵札の三銃士さん！」

キングス・ナイト ATK1600

ジャックス・ナイト ATK1900

「そして私は手札の「融合」を発動！場の「ジャンク・ナイト」、
「クイーンズ・ナイト」、「キングス・ナイト」を融合し、「アル
カナ ナイトジョーカー」を融合召喚します！」

絵札の三銃士が一つになり、最強の切り札が現れた。

アルカナ ナイトジョーカー ATK3800

「「1ターン目から攻撃力3800!?!?」」

「すげえぜ！玲子ちゃん！」

「あ、ありがとうございます。城之内さん。」

正直俺もしよっぱなからジョーカーを出されるとは思っていなかつ
たから、観客同様驚いた。しかし手札消耗がヤバくないか？

「私はこのまま、ターン終了です。」

北森 手札1 場(共用) モンスター1 伏せ0
アルカナ ナイトジョーカー ATK3800

手札消耗が激しいとはいえ、これはかなり危険だ。
流石にタイムンじゃあ、ジョーカーには勝てない。

「すっげー！くっつ、ますます燃えてきたぜ！！俺のターン、ドロ
ー！俺は手札から「E-HERO クレイマン」を守備表示で召喚
するぜ！」

E-HERO クレイマン DEF2000

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

十代 手札3 場(共用) モンスター2 伏せ2 永続罫1
永続罫「忍法 変化の術」
ダーク・シムルグ ATK2700
E-HERO クレイマン DEF2000

「いくぜ。俺のターン、ドロー！俺は手札から「コマンド・ナイト」
を攻撃表示で召喚！」

コマンド・ナイト ATK1200

支援用モンスターとしては結構強いので、戦士族で組むのなら入れ
てもいいと思われる。

「そして「コマンド・ナイト」の効果で戦士族モンスターの攻撃力

が400ポイントアップするぜ！」

アルカナ ナイトジョーカー ATK3800 4200
コマンド・ナイト ATK1200 1600

「そして手札から永続魔法「連合軍」を発動！自分の場の戦士族・魔法使い族モンスター1体につき、自分の場の全ての戦士族は攻撃力が200ポイントアップする。俺たちの場には2体、よって400ポイントアップするぜ！」

アルカナ ナイトジョーカー ATK4200 4600
コマンド・ナイト ATK1600 2000

もう究極嫁ですら単体で倒せるレベルって……。

「俺はカードを1枚伏せ……あれ？出来ないぞ？」

「「ダーク・シムルグ」の効果で、相手はカードをセットすることが出来ません。」

「あ、そうなの……。ならターン終了だ。」

城之内 手札4 場（共用） モンスター2 伏せ0 永続魔法1
永続魔法「連合軍」
アルカナ ナイトジョーカー ATK4600
コマンド・ナイト ATK2000

コマンド・ナイトの効果で他のモンスターを倒してからじゃないと攻撃できないから、実質ロックに近い感じだな。さて、どうやって切り崩す？

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「闇の誘惑」を発動！デッキからカードを2枚ドローし、その後手札から闇属性モンスターを1体をゲームから除外する。俺は2枚ドローし、手札から闇属性モンスター「終末の騎士」をゲームから除外する。」

手札交換だな。いいカードは引けたかな？

「俺は手札から「キラー・トマト」を守備表示で召喚。さらに「ダーク・シムルグ」を守備表示にし、カードを2枚伏せターンエンド。」

キラー・トマト DEF1100

キラー・トマトは日本版と海外版ではイラストがぜんぜん違うカードの一つだ。ちなみに海外版のイラストはこのカードの元ネタそっくりらしいが・・・俺は知らない。

風 手札1 場（共用） モンスター3 伏せ4 永続罫1

永続罫「忍法 変化の術」

ダーク・シムルグ DEF1000

キラー・トマト DEF1100

E・HERO クレイマン DEF2000

結構押され気味だな。ちょっとヤバイかも。

「私のターン、ドロー！手札から魔法カード「強欲な壺」を発動します！デッキからカードを2枚ドローします。バトル！「アルカナ ナイトジョーカー」で「ダーク・シムルグ」に攻撃します！」

「ならセットカードオープン、畏カード発動！「炸裂装甲」！攻撃モンスター1体を破壊するぜ。（少なくとも手札1枚は犠牲に出来る。）」

「な、なら手札から速攻魔法「融合解除」を発動します。「アルカナ ナイトジョーカー」をデッキに戻し、融合素材となった三銃士さんを場に特殊召喚します！」

「何イ！」

ジャックス・ナイト ATK1900
クイーンズ・ナイト ATK1500
キングス・ナイト ATK1600

「そして永續魔法「連合軍」と「コマンド・ナイト」の効果により、攻撃力が上昇します。私達の間には4体になったので800ポイントアップし、さらに400ポイントアップします。」

ジャックス・ナイト ATK1900 2700 3100
クイーンズ・ナイト ATK1500 2300 2700
キングス・ナイト ATK1600 2400 2800
コマンド・ナイト ATK1600 2400

最低攻撃力が2400の低レベルモンスター軍団・・・鬼だろ。

「巻き戻しが発生し、対象のなくなった「炸裂装甲」は空撃ちになります。」

「・・・。（無駄に数を増やしてしまったか。いや、早めに「融合解除」を使わせたと思った方がいいな。）」

「バトル！「クイーンズ・ナイト」で「ダーク・シムルグ」に攻撃します！クイーンズ・クラッシュュ！」

「やばい！リバーズカードオープン、罠カード発動！「重力解除」！フィールド上の表側表示の全てのモンスターの表示形式を変更するぜ！」

「え、そんな！」

十代の重力解除のおかげで、相手の場のモンスターはすべて表示形式を変更され、攻撃は出来ない。このターンは何とかしのいだか。これから、ん？風が何か仕掛けていたようだ。

「よし、いいタイミングだ十代！これで一気に攻めれる。相手モンスターが守備表示に表示形式を変更された時、セットカードオープン、罠カード発動！「断頭台の惨劇」！相手の場のモンスターが攻撃表示から守備表示になったときに発動可能。相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する！」

「何イ！」「そんな！」

まさか「炸裂装甲」は困だったのか！？この戦法は結構有名だが、まさか昨日のうちに打ち合わせていたとは・・・恐ろしい。まあ、これで相手の場のモンスターは完全に一掃されたから攻めるチャンスが出来たな。

「私は「シャインエンジェル」を守備表示で召喚し、ターンエンドです。」

シャインエンジェル・・・リクルーターか。時間稼ぎとして結構いいいな。しかしマツチヨな人間に天使の翼は似合わないと思う。

北森 手札1 場(共用) モンスター1 セット0 永続魔法1
「連合軍」

シャインエンジェル DEF800

「俺のターン、ドロー！よし。俺は手札から魔法カード「融合賢者」を発動！デッキから「融合」を手札に加える。そして魔法カード「E・エマーゼンシーコール」を発動！デッキから「E・HERO」と名のつくモンスター1体を手札に加える。俺は「E・HERO スパークマン」を手札に加える！そして魔法カード「融合」を発動！手札の「スパークマン」と場の「クレイマン」を融合！融合召喚！現れる、「E・HERO サンダー・ジャイアント」！」

E・HERO サンダー・ジャイアント ATK2400

リクルーター潰しキター！しかし、後の霸王化したときの「ダークコーリング」で出す「ライトニング・ゴレム」はこれより段違いの強さを持つんだよな。

「俺は「サンダー・ジャイアント」の効果発動！手札1枚を捨てることで、相手の場にあるこのカードより元々の攻撃力が低いモンスター1体を破壊する！「シャインエンジェル」は破壊させてもらおうぜっ！」

「ええっ!?!」

「いけっ、サンダー・ジャイアント」！「ヴェイパー・スパーク」!?!」

巨大なプラズマがサンダー・ジャイアントから発せられる。それをシャインエンジェルに撃ち込み、破壊した。

「いくぜ！バトル、「E・HERO サンダージャイアント」でダイレクトアタック！ボルテックサンダー！」

城之内・北森 LP8000 5600

「さらに、風の「ダーク・シムルグ」でダイレクトアタック！」

城之内・北森 LP5600 2900

「そして風の「キラー・トマト」でダイレクトアタック！」

城之内・北森 LP2900 1500

「へっ！中々やるじゃねえか！燃えてきたぜ！！！」

城之内は何か燃えている様子だ。・・・結構やばいんだがな。

「よし、このまま行けば……。俺はこのままターンエンド！」

十代 手札2 場（共用） モンスター3 伏せ1 永続罠1

永続罠「忍法 変化の術」

ダーク・シムルグ ATK2700

キラー・トマト ATK1400

E・HERO サンダー・ジャイアント ATK2400

「俺のターン・・・ドローツ！よしっ！俺は手札から「時の魔術師」

を召喚するぜ！」

時の魔術師 AK500

「そして「時の魔術師」の効果発動！当たりが出れば相手の場のモンスターが全滅し、はずれが出れば、俺たちの場のモンスターが全滅し、その攻撃力の半分のダメージを受ける。行くぜ！大博打だ！
！タイムルーレット！！！」

一発逆転か、あるいは自滅か。観客、ベンチ、そして場の視線が時の魔術師の右手の杖で回っているルーレットに注目する。

ここに来て城之内の十八番「ギャンブル」に出るか……。あいつの悪運は恐ろしいから、十中八九は成功するんだよなあ。

少しずつ回転が止まり、そして針は止まった。

「……」

「……」

その針は、当たりを指していた。

「……よっしゃ！！当たりだ！！」「時の魔術師」の効果発動！「
タイム・マジック」！」

「タイムマジック！」

時の魔術師が杖をかざすと、一瞬にして十代と凧の場のモンスターが全滅していた。

アニメでは時が経つシーンを入れていたが、現実では早すぎてただ

全滅したという結果しか分からなかった。

「す、すごいです。城之内さん！」

「す、すげえ。俺たちの場のモンスターが一瞬で……。」

「まさか、一瞬で全滅……そんな馬鹿な。」

ざわ……ざわ……

「あの場面で当たりを引いたのかよ。」

「何てこった。」

「てか、ギャンブラーの方が合っているんじゃないか？」

最後の意見はある意味当たっている気がするが……気にしない。

「十代たちの場のモンスターが、全滅か。不味いな。」

「手札が消耗しきっているのは不味いノーネ。最悪、逆転されるかもしれないノーネ。」

三沢とクロノス先生が結構焦っている。全滅し、手札消耗が激しいのは分かるけど、まだ大丈夫だろ。ライフポイントはまだ削られていないんだし。

「まだ大丈夫だと思いますよ？それに十代には伏せカードがありませんし。」

「それなら。」

「いいノーネ。」

何とか不安を飲み込んだらしい。
さて、城之内はどんな行動に出るんだ？

「俺は手札から魔法カード「融合」を発動！手札の「ベビードラゴン」と場の「時の魔術師」を融合！「千年竜」を融合召喚！」

千年竜 ATK2400

オレンジ色の子供の竜が時の魔術師の魔法によって、進化したらしい。

Bを連打したら、進化キャンセルは出来ますか？俺はベビードラゴンが大好きです。

「さらに手札から魔法カード「強欲な壺」を発動して、デッキからカードを2枚ドロー！さらに、魔法カード「天使の施し」を発動してカードを3枚ドローし、その後2枚捨てる。そして俺は手札から装備魔法「早すぎた埋葬」を発動する。ライフを800支払い、墓地の「ギルフォード・ザ・ライトニング」を特殊召喚するぜ！そして「連合軍」の効果で攻撃力が200ポイントアップするぜ。」

城之内&北森 LP1500 700

ギルフォード・ザ・ライトニング ATK2800 3000

3体生贄で「サンダー・ボルト」と同じ効果を持つモンスターだ。今では「神獣王 バルバドス」が目立ちすぎているが、それでも十分強い。

ちなみに原作版の城之内のデッキで一番攻撃力が高いモンスターだったりする。

「手札から魔法カード「ハリケーン」を発動！場の魔法、畏カードをすべて持ち主の手札に戻すぜ！」

「っ！（攻撃の無力化が）」

「これで「ギルフォード・ザ・ライトニング」は完全復活したぜ！そして再び永続魔法「連合軍」を発動。そして装備魔法「団結の力」を「千年竜」に装備。俺たちの場のモンスターは2体。よって攻撃力・守備力が1600ポイントアップするぜ！」

千年竜 ATK2400 LP4000

「バトル！「ギルフォード・ザ・ライトニング」でダイレクトアタック！」

十代・凧 LP8000 LP5000

「そして「千年竜」でダイレクトアタック！サウザンド・プレス！」

十代・凧 LP5000 LP1000

「俺はこれでターンエンドだ！」

城之内 手札1 場（共用） モンスター2 伏せ0 永続魔法1

装備魔法1

永続魔法「連合軍」 装備魔法「団結の力」

千年竜 ATK4000

ギルフォード・ザ・ライトニング ATK3000

わーっ!と、観客席から歓声上がる。何せこの1ターンで逆転したのだ。盛り上がらないはずが無い。もし200ポイント余分にライフが余っていたとしたら、十代たちは負けていたな。そう思うとぞつとする。

「な、何とか耐え切ったか。」

「首の皮一枚で繋がったノーネ。」

三沢とクロノス先生が冷や汗を書いていた。気持ちは俺も同じだよ。

「凧がこのターンで何か対策を取れないと・・・詰みますね。」

「ああ、そうだな。」

「シニョール凧の引き運に賭けるしかないノーネ。」

本当に、賭けるしかなさそうだ。

「あ、危なかった・・・。俺のターン、ドロー!「キラール・トマト」を準備表示で召喚。カードを1枚伏せ、ターンエンド!（「大寒波」で魔法・罫が封じられない限り何とか耐えられるが。）

凧 手札0 場（共用） モンスター1 伏せ1

キラール・トマト DF1100

キラール・トマトは破壊されたとき攻撃表示でモンスターを特殊召喚するから・・・不味いな。このままだと特殊召喚したところで結果は同じだぞ?」

「わ、私のターン、ドロー！手札から速攻魔法「サイクロン」を發動！セットカードを破壊します。」

「チェインしてセットカードを發動！速攻魔法「エネミーコントロール」！俺は2番目の効果を發動！俺の「キラー・トマト」を生贄に、このターンのみ「千年竜」のコントロールを得る。」

「あ、そんな・・・（ギルフォード・ザ・ライトニングじゃ千年竜は倒せない。）私はこのままターンエンドです。そして「千年竜」は私達の場に戻ってきません。」

北森 手札1 場（共用） モンスター2 伏せ0 永続魔法1 装備魔法1

永続魔法「連合軍」 装備魔法「団結の力」

千年竜 ATK4000

ギルフォード・ザ・ライトニング ATK3000

「さあ、お前の実力。見せてもらおうぜ！」

「はい。城之内さん！・・・俺のドローは奇跡を呼ぶぜ！俺のターン、ドロー！！！」

手に震えを必死になって抑えながら十代はカードを引いた。あいつが引いたカードは？

「俺は手札から「天使の施し」を發動！デッキからカードを3枚ドロし、その後2枚捨てる。そして手札から「E・HERO バブルマン」を守備表示で召喚！」

E・HERO バブルマン DF1200

「「E・HERO バブルマン」の効果発動！自分の場に「バブルマン」以外のカードが無い場合、デッキから2枚ドロウする。」

さすが強欲なバブルマン。汚い。OCGでこれだったら、確実に禁止カードだったな。

「そして手札からフィールド魔法「摩天楼 スカイスクレイパー」を発動！」

次々と高層ビルが建ち、まるでアメリカ漫画でよくありそうな場所に変化した。

「へー、すげーな！」「な、何だか面白そうですね。」

城之内たちは関心して「スカイスクレイパー」のビジョンを見渡す。

「へへっ、ここからが本番です！俺は手札から魔法カード「ミラクルフュージョン」を発動！場の「E・HERO バブルマン」と墓地の「E・HERO バーストレディ」「E・HERO フェザーマン」「E・HERO クレイマン」「E・HERO スパークマン」をゲームから除外して融合！」

??? ATK2800

ざわ・・・ざわ・・・

「攻撃力2800?」

「これじゃあ、「ギルフォード・ザ・ライトニング」にも勝てやしない。」

「次のターンで反撃されて終わりか。」

観客席から諦めの声が聞こえ始めた時、

「待ていッ!!」

まるで喝を入れるかのごとく、一つの声が聞こえた。そして、あの音楽が流れ始めた。

「!?!」

観客席、ベンチ、場の全ての人が声の元を探した。するとその人物は「摩天楼 スカイスクレイパー」の一番高いタワーの頂上に立っていた。スポットライトを背中に浴びて。

「優勢と劣勢には翼があり、常に戦っている者の間を飛び交わっている……。」

「例え、絶望の淵に追われても、勝負は一瞬で状況を変える……。」

「人、それを回天という!」

E・HERO ロム・ストール ATK2800

ろ、ロム兄さん。ロム兄さんじゃないか!!

十代のE・HEROの最終形態は「マシンロボ」だったのか。

「バトル!」E・HERO ロム・ストール」で「ギルフォード・ザ・ライトニング」に攻撃!」

「天空宙心拳の奥義・・・受けてみる！」

「な、自爆するつもりか!？」

「とあああー!」

十代の攻撃宣言と共に、デュエルディスクから音楽が流れ、ロム兄さんがタワーから飛び降りた。てか、十代のデュエルディスクからも流れるのかよ!?!しかも音楽が「スパロボMX」の「勝利のマシンロボ」だし。

「「摩天楼 スカイスクレイパー」の効果」の効果は、自分より攻撃力の高いモンスターに攻撃をした場合、攻撃力を1000ポイントアップさせる。「HERO」専用のフィールド魔法。」

「何イ!?!」「え、それじゃあ!?!」

E・HERO ロム・ストール ATK2800 3800

「サンダーサイクロン!」

ロム兄さんのとび蹴りがギルフォード・ザ・ライトニングに直撃する。

どうでもいいけど・・・どう見てもサイクロンじゃねーっ!!--どっちかってなら「ライダーキック」だよ。

「とおああーっ!」

サンダーサイクロンを決めた後、連続張り手で相手を怯ませる。

「奥義を受けろっ！ゴットハンドッ！スマアッシュ！」

キター！！ゴッドハンドスマッシュ！！まさか生で聞けるとは・・・
生きてて良かった。

「成敗！！！」

そして、爆発した。・・・何故爆発したのかを聞いては駄目だ。

城之内&北森 LP8000

「そこまで！勝者は遊城&神楽坂君のBチームだにや！」
わーっ！！

再び、観客から歓声が沸き起こる。

「十代、よくやったぞー！！！」

「凧も頑張ったなー！！！」

十代達が歓声を浴びていると、城之内達が近づいてきた。

「お前達との決闘、中々面白かったぜ！」

「俺達もです。な、十代。」

「ああ、ガツチャ！俺もです。城之内さん」

十代の決めが出た。しかし、城之内達にはさっぱりだったようだ。

「なんだ？その・・・ガツチャってのは？」

「ああ、これは十代の癖みたいなもんで・・・。」

「そうか・・・なら、俺も。ガツチャ！またどこかで決闘しようぜ！」

「はい！」

「な、なら私も・・・が、ガツチャ！た、楽しかったです。」

「俺も楽しかったです。北森さん。」

「また、どこかで会いましょう。」

「はい！」

「じゃあな！」

「またお会いしましょう。」

そう言つて、城之内達は去っていった。さて、行くか。

「おい、十代。凧！！！」

「よくやったノーネ！シニョール十代、シニョール凧！」

「お疲れ！十代！凧！」

「三沢！クロノス先生！翔！」

俺達は十代と凧の元へと駆け寄った。これで全員が勝った……。これでお咎めはあったとしても軽いはずだ。

「まさか、全敗とは……。悪夢なのでア〜ル。」

ナポレオン教頭は白くなって倒れていた。そう、真っ白になって。ん、校長がこっちに近づいてきた。

「これは、とてもすばらしいものを見せてもらいました。」

「校長！これで私達のお咎めは無しなノーネ？」

「ええ、この制裁決闘で私も多くの事を学ばせてもらいました。なので……。」「

「なので？」

ゴクリッ！……緊張が走る。

「今回の決闘内容の反省点をB4のレポート用紙3枚にまとめて提出してください。」「

な、何だかなあ。

まあ、これだけならいいか。

「ええ〜、マジかよ。」「

十代は不満の声を上げる。気持ちは分からなくはないが、この程度

で済んだだけいいだろ。

「さて、俺は今から自室に戻って書きますか。」

「なら俺も行くかな。」

三沢と凧が自室に戻ろうとしているが・・・あれ？

「なあ、今日はまだ授業があつたんじゃないのか？」

「今日は土曜日なので午前だけなノーネ。午後からはお休みなノーネ。」

あ、そうだった。すっかり忘れていた。てか、土曜に午前中授業つても懐かしいな。

「さて、私も早めに提出するために戻りますーノ。」

あ、どうやらクロノス先生も戻って書く予定らしい。

(マスターも早めに書いた方がいいのではないのでしょうか?)

(そうだな。)

なら、俺も戻ってちゃっっちゃか書きますか。

「おい、十代。置いていくぞ！」

「ま、待ってくれよ！皆ー！」

フィールド11：制裁決闘最終戦（後書き）

まさかのロム兄さんに作者のテンションも上がりまくりました。

ちなみに、何故城之内達がここに来たかと言うと、バイトを探している途中、デュエアカデミアで試験官（タッグデュエル用）の臨時バイトを募集との手紙が来てそれに応募して合格、そして直前になるまで制裁決闘ということ知らされておりませんでした。

ちなみに作者的には城之内&北森ペアが好きですね。舞？・・・ノ
ーコメントで。

フィールド12：天罰（「遊戯王GX・戦乱の六武衆」とのコラボ作品）（前

今回はガイウス様の「遊戯王GX・戦乱の六武衆」とのコラボです。ですがキャラクターの性格がおかしい（作者の力不足）、過去を捏造といったほぼ別人に近い状態なので、それを覚悟してお読みください。

追伸：一人称の間違いを訂正しました。（正しくは俺じゃなく僕でした。）

ちゃんとキャラクターを把握していなかったとはorz

コラボって、こんなに大変だったとは……。他の作者様がいかに偉大であるか良くわかった気がします。

ガイウス様、お許しください！

ガイウス様）ぬわーっ！！

「翔くん。今から女子風呂を覗きに行くよ。」

「はい？」

あの制裁決闘から一週間後、俺達は校長の課題を終わらせて普段の日常に戻っていた。そして夜、暇なのでデッキを改良していた時に吹雪さんがやって来て今に至る。

今の俺の顔はかなり間抜けだろう……。自覚はしている。

「なぜ、今から行くんですか？」

「まだ僕の体調があまり良くないんだ。だから元気をつけるために見に行こうと思ってね。ついでに皆も呼ぼうかと思ったのさ。」

「気持ちは分からなくはないが……。」

「地獄の片道切符を皆に配布すんじゃねーっ!!」

「てか、俺は一週間前に制裁決闘を受けたばかりなんだぞ!? またあれを受けると言うのか？」

「元気になるのは下半身だけでは？」

「ははは。否定は出来ないね。けど、覗きつてのは男のロマンじゃないかな？」

「吹雪さん。それ、犯罪です。」

俺が呆れながら答える。こういうノリは好きな方だが、ここでバレ

たらこの3年間は確実に地獄だぞ？それと比べれば流石にリスクが高すぎる。

「手厳しいね。じゃあ、君は行かないのかい。」

「残念ながら、命が惜しいので。」

その答えを聞くと吹雪さんは「そうか。」と言い、両目を不気味に輝かせながらどこから持ってきたか分からない長ネギを取り出した。

「翔君。君は少し熱があるみたいだね。風の噂では長ネギをケツの穴にドッキングさせると治るらしい。」

「・・・勘弁してください。」

脅しと来たか。

「大丈夫。痛くは無いはずだ。万丈目君、三沢君。悪いが翔君を拘束、もとい動かないように抑えていてくれ。」

そついうと外から万丈目と三沢が現れた。お前達・・・

「すまん、翔。」

「俺達も命が惜しいからな。」

「さて、どうするっ？」

仕方が無い。

「わかりました。俺も行きますよ。」

俺もやっぱり命は惜しい。

その答えを聞いて、吹雪さんにはっこりと笑った。

「さすが翔君！わかってくれたようだね。」

「やっと翔の説得が終わったか。」

「兄さん!？」

外から兄さんが現れた。しかも取材で使いそうな大型カメラを持ってきてるし。

どこから調達したんだ？それ。

「ああ、これで人数はそろったね。さて後は……。」

「待て!」

吹雪さんが何か言おうとした時、十代が現れた。

おお、救いの神か？

「よくわかんねーけど、こんな面白そうな事をやっていて俺だけ除け者にしないでくれよ!!」

・・・ごめん、救いじゃなかったわ。

この便乗むつつりスケベが!!

「ごめんごめん。十代君も今から誘う予定だったんだ。じゃあ、行

「こうか。」

どうやら参加するのは吹雪さん、兄さん、万条目、三沢、俺、十代の6人らしい。マルタンは貧乏くじを引かなくて良かったな。俺は万ーに備えてデュエルディスクとデッキを持っていくことにした。

こんな阿呆なことにガーディアンデッキを使うのはどうかと思うので、ロイドデッキを持っていくことにした。

（帰ってきたら説教は決定ですね）

（にこやかに笑いながら言う台詞かよ!?!）

やはりアイリスは笑っていた。もちろん「ガーディアン・デスサイズ」の仮面を取り出してだ。・・・アイリスは怒ると「ガーディアン・デスサイズ」の仮面を被って変身(?)することが出来るという恐ろしい特技を持っているから、洒落にならない。

（私も監視として一緒に行かせて貰います。もちろん拒否権はありませんよ?）

（ああ、わかったわかった。）

万一覗いたらとしたら「フォビデウン・ゴスペル」か、デスサイズの鎌が飛んできそうだな。死ねる自信は十分あります。

さて、行きも地獄。帰りも地獄。・・・腹を括るか。

・・・

「っ、ここは?」

1人の少年が目を覚ました。そして辺りを確認するために見渡した。

「そうか。僕は鬼王との決戦で相打ちになっちまって。ん？」

そして今いる場所がどこか、頭の中で整理して気がついた。

「って、ここは女子風呂のすぐ裏じゃないか！危ない危ない。ん、何だこの声は？」

なにやら声が聞こえたので、その方向を見てみる。

すると、暗くて顔は分からなかったが男子のブルー生徒がこちらに近づいていることが分かった。しかも知らない声の人もいたので、何となくここが自分達のいた世界とは違うという事を直感で感じた。

「異世界だろうがなんだろうが、やっぱりブルー生徒は屑の塊か。僕がこの手で消してやる！」

そういうと少年はブルー生徒がいた方角へと足を進めた。

・・・

「まいつちんぐ先生のような存在こそ至高だと僕は思うよ。」

「いや、神風が最高だろ！」

「何の！ブルマこそ国宝だろ！！」

頭が痛い。もはや何の小説か分からない会話だな。

ちなみにこの会話の内容は「どんなシチュエーションがいいか」と

言うことらしい。

この変態共が！！てか、まいっちんぐ先生は古いよ！
ちなみに上から吹雪さん、万丈目、三沢の順だ。

「ふう……。」

兄さんが呆れてものも言えない様子だ。ようやく仲間がいたよ。
やったね翔ちゃん！

「おいやめる。」

いきなり十代から言われて驚く。

「どうした？十代。」

「いや、何かそう言わなきゃいけない気がしてさ。」

どうやら心の声が聞こえるらしい。お前はニュータイプかよ！？

「そつえば亮はどうなんだい？」

吹雪さんが兄さんに話題を振る。頼むからこの議論を早く打ち切っ
てくれ。

アイリスの表情が怖い笑顔になっているから！！

「YesロリータNoタッチに決まっているだろ！！」

真顔で宣言しやがった。

……駄目だこりゃ。頭痛がしてきた。早く帰って寝たいよ。

「ふふふ、亮らしいね。」

「な、なるほど。」

「さすが、カイザーと呼ばれる男の答えだ。」

十代と俺以外は納得しているらしい。それでいいのか？

（アイリス、頭痛薬ってあるか？）

（残念ながら無いですね。）

（ですよねー。）

もうどうにでもなれ！。

と、歩いていたら分岐点に差し掛かったようだ。こんな場所って原作にあったっけ？

まあ、いいや。

「吹雪、ここから俺達は別働隊として手筈通りに動くぞ。」

「OK！じゃあ、万丈目君と三沢君は僕に着いて来てね。」

そう言うと、兄さんは吹雪さんにあの大型のカメラを渡し、吹雪さんと万丈目と三沢の三人が右方向に行きだした。

「なら、俺達は左側だな。行くぞ。」

「まだ歩くのかよ。俺、疲れたぜ。」

兄さんが行くこうとすると、十代が不満の声を上げた。まあ、気持ち
は分かる。

「ん、なら十代は帰るか？」

「だって、覗きだろ？俺、そんなの見てもつまらないし。」

ある意味問題発言だと思うのは俺だけなのか？
さすがにちつとは興奮した方がいいと思うのだが……。

「まあ、あいつらが帰ってくるまで俺と決闘でもするか？」

「やるやる！カイザーと決闘できるなんて付いて来てよかったぜ！
！」

「行かなくていいの？兄さん。」

「まあな。残念ながら覗きは俺の趣味じゃない。見るなら真正面か
ら堂々と行く！それが俺のジャスティス（正義）だ！！」

「かつこいいぜ、カイザー！！！」

兄さん……どうしてこうなった。orz

そして十代。物事をちゃんと把握しているかい？

（馬鹿ばっか……と言うだろうなああの娘がいたら。）

（言いますね。確実に。）

もうため息しか出ない。幸せ？何それうまいの？

(パラッパッパッパッ)

俺が頭を抱えていると、いきなり兄さんの左腰の部分から音が鳴り始めた。

それってあのピエロの着信音じゃないか!? 教祖様が来る、逃げる! そして兄さんが無線機を取り出した。それもどこから調達したんだよ。

「どうした?」

「三沢です! 今見知らぬブルー生徒から決闘を受けていて万丈目が戦っているのですが、かなりやばくて。」

「何イ!」

こんなフラグってあったっけ? 完全に予想外だ。ていうか兄さん焦りすぎ。

「あ、万丈目がやられた! で、今から吹雪さんが戦うようです。」

「わかった。今から合流する。そこで足止めしといてくれ!」

「わかりました!」

ぷっ、と無線機が切れる。

「と言うことだ。今から吹雪たちを助けに行くぞ!」

「ああ!」

「了解。」

緩んだ気を直し、吹雪さんたちが行った道へと進む。
あの万丈目を破った実力だ。油断は禁物だな。

・・・

「『万条目！』」

「カイザーに、十代に、翔か。」

万条目がボロボロになって道端に倒れていた。
これは酷い・・・。

「万条目、しっかりしろ！」

「あの男が使うカードには・・・気をつける。っ！」

そう言うと万条目が気絶した。まさかもうセブンスターの面々が
動き出したのか？

カミューラの件もあるから、かなり危険な気がする。

「十代、すまないが万丈目を抱えて先に戻っていてくれ。」

「わ、わかった！」

兄さんの言葉に十代は頷き、万条目を抱えて撤退した。

「急ぐぞ、翔！」

「はい！」

吹雪さん、三沢。無事でいてくれ！

・・・

「ネクストジーサジタリウス・」でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「くっ！」

吹雪 LP3000

「吹雪！」「吹雪さん！」

っ、一步遅かったか！

見知らぬモンスターの攻撃により、敗北してしまったようだ。

「カイザー！翔！」「亮、翔君！」

三沢と吹雪さんが俺達に気づいたようだ。それと同時に見知らぬブルー生徒もこっちに気が付いたようだ。

「カイザー・・・そうか。お前が丸藤 亮か。」

「誰だ、貴様は！」

「僕は黒鉄 レオ。見ての通り、ブルー生徒だ。・・・お前らのような腐った変態共を消すのが僕の目的だ！」

腐った変態……ごもつともです。恥ずかしい限りだ。

「俺は変態じゃないよ！仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよっ！！」

そこでその名言が来るか！？

真面目な場面なのに。

「……っ、やはりカイザーもブルー生徒でしかなかったという」
とか。いいだろう。僕が消毒してやる。」

消毒するのは頭の中だけでお願いします。

ひゃっはー！汚物は消毒だー！！

「ということだ。翔！頑張れ。」

「はい？」

ぽんっ、と肩を叩かれる。何を言っているのですか？
まるで訳がわからんぞ！

「俺への挑戦権を得るためには翔を倒してからだ！」

た、盾にしゃがった！汚ねえぞ！！

「ほう、まあいい。翔、お前の腐った心も消毒させてやる。」

納得しやがった！？勘弁してくれよ。

(マスター！頑張ってください！！)

アイリス、お前もか！仕方ない。

「決闘！！」

「僕の先攻、ドロー！僕はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンを終了する。」

レオ 手札3 場 モンスター1 伏せ2

セットモンスター DF？

「俺のターン、ドロー！・・・。」

今さっき、「ネクストG」とかいう聞いたことの無いカテゴリーのモンスターがいたな。下手に動く和不味いか？なら、様子を見るか。

「俺は手札から速攻魔法「サイクロン」を発動！魔法・罠カードを1枚破壊する。対象にするのはレオから見て右側のカードだ！」

「っ！（「ドレインシールド」が・・・やるね）。」

「俺は手札から「ジャイロイド」を守備表示で召喚、カードを2枚伏せターンエンド！」

翔 手札2 モンスター1 伏せ2

ジャイロイド DF1000

「僕のターン、ドロー！（翔の一人称は確か「僕」のはず。やはり

おかしい。」

何か考えているようだ。あまり変な企みは勘弁してくれ。

「僕はモンスターを反転召喚！「魔装機関車 デコイチ」だ！そして効果発動！このモンスターがリバーズした時、デッキからカードを1枚ドローする。」

デコイチか。闇属性機械族という恵まれた種族とそこその攻撃力と優れた効果を持っているからかなり厄介だ。

「そして手札から「ネクストG - ブラックシャドウ」を召喚！」

「ネクストG？」

「「ネクストG」とは銀河の彼方からやって来た機械のモンスターたちさ！ちなみに「ネクストG」のGはギャラクシーのGさ。」

銀河から来るのは「星の戦士」だけで十分だ！

ネクストG - ブラックシャドウ ATK1600

デカイ影が現れた。なーんか、見たことがあるような形だな。・・・しかし「シャドウ」か。「影には攻撃が通らない」とかふざけた能力がありそうだ。

「さらに手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドローする！」

「通させたら不味いな。セットカードオープン、カウンター罠発動

！「魔宮の賄賂」！魔法・畏カード1枚の発動を無効にし、破壊する！」

「なら、僕も使わせてもらおう！セットカードオープン、カウンター畏発動！「神の宣告」！ライフポイントを半分にし、モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚、魔法または畏カード1枚を無効にし、破壊する！」

「なっ！（ドローを阻止できなかったのは痛いな。）」

レオ LP4000 2000

・・・

「不味いな。」

「ライフを半分に出たから優勢に見えるか？」

兄さんの呟きに三沢が疑問を投げかける。

「いや、「神の宣告」が入っているということはライフを犠牲にして戦う。いわば、肉を切らせて骨を絶つデッキだ。だからライフが減るよりも手札補充を阻止できなかったのは致命傷だ。」

「なるほど」

・・・

「チェーン終了。よって、「強欲な壺」の効果で2枚ドロー！よし、手札から永續魔法「ネクストコール」を発動！1ターンに1度、「

ネクストG」と名のついたモンスターを通常召喚することができる。」

つまり、「ネクストG」シリーズなら1ターンに2回まで通常召喚が出来るのか。

「「ネクストコール」の効果を発動し、僕は手札から「ネクストG - ヴァイス・バスター」を攻撃表示で召喚！」

ネクストG - ヴァイス・バスター ATK1800

で、でかい・・・10mはあるぞ！このガンダムもどきは！そして右手に持っているのはビームライフルか？

「「ネクストG - ヴァイス・バスター」の効果発動！1ターンに1度、相手の魔法・罠カードを1枚破壊することが出来る！ロックオン！」

ビームライフルによって、俺の伏せカードを破壊する気か？

「だが、甘い！セットカードオープン、罠カード発動！「和睦の使者」！このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されず、俺は戦闘ダメージを受けない！」

「なるほど、空撃ちか。なら、僕はカードを1枚伏せてターンを終了だ。」

レオ 手札3 場 モンスター3 伏せ1 永続魔法1

永続魔法「エクストコール」

魔装機関車 デコイチ ATK1600

ネクストG - ブラックシャドウ ATK1600
ネクストG - ヴァイス・バスター ATK1800

「俺のターン、ドロー!」
「ヴァイス・バスター」が厄介だな。なら
手札から「スチームロイド」を攻撃表示で召喚!」

スチームロイド ATK1800

「バトル、「スチームロイド」で「ネクストG - ヴァイス・バスター」を攻撃!そして「スチームロイド」の効果発動!「スチームロイド」が相手モンスターを攻撃した時、攻撃力を500ポイントアップする!」

スチームロイド ATK1800 2300

スチームロイドの衝突力に耐え切れず、ヴァイス・バスターが粉々になった。

レオ LP2000 1500

「ふふふ……。」

レオがいきなり笑い出した。不気味だな、おい。

「君は僕が知っている「丸藤 翔」じゃないね。」

「ああ、その通りだ。俺も残念ながら「黒鉄 レオ」なんて人物は知らないからな。」

「なるほど……平行世界に飛ばされたのか。」

「平行世界、だと!？」

まさかこの世界で平行世界の人間と戦うことになるとはなあ。「事実は小説よりも奇なり」とはこのことか。

「僕が知っている「丸藤 翔」の一人称は「僕」だった。しかし、君は「俺」を使っている。」

なるほどな、癖が違うってことか。だが正直、どうでもいいことだ。「彼」は「彼」であって、「俺」は「俺」でしかない。

「まっ、それを知ったってどうにもならないから続けるぞ。俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド!」

翔 手札1 場 モンスター2 伏せ1

ジャイロイド DEF1000

スチームロイド ATK1800

(手札消耗が激しい。ドロソースを引かないと消耗戦だぞ。)

「僕のターン、ドロ!僕は「魔装機関車 デコイチ」を生贄に捧げ、「ネクストG ロスト・ネクスター」を生贄召喚!」

ネクストG ロスト・ネクスター AK1300

アーマーを着たかわいらしい女の子が現れた。「極聖天 ヴアルキリア」を思い出すな。だが攻撃力1300だと?厄介な効果を持っている確立がビンビンするよ。

「そして「ネクストG ロスト・ネクスター」の効果発動！このモンスターが生贄召喚に成功した時、自分のライフを半分にする事で、攻撃力を2700にすることが出来る。」

「私の真の姿を見せてやる！」

レオ LP 1500 750

どうやらあの女の子は精霊のようだ。・・・マジか！そして女の子の全身が装甲で覆われる。文字通りフルアーマーだな。

なんか「ロックマンX4」のアイリスを思い出すな。アレはかなり苦戦した記憶がある。何せプレイヤーがゼロだったし。

それと「昼夜の大火事」で終わるLPだが大丈夫か？

「バトル！「ネクストG ロスト・ネクスター」で「スチームロイド」に攻撃！メガ・ガトリング！！」

（スチームロイドの効果で500ポイントダウンするのは痛い。なら！）

スチームロイド ATK 1800 1300

「俺はセットカードオープン、畏れカード発動！「ガード・ブロック」！相手ターンの戦闘計算時に発動可能。この戦闘のダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドローする！」

「（ダメージステップに発動するから「トラップスタン」が使えない！）」

「消し飛べーッ！！」

「ネクストG ロスト・ネクスター」の右腕に装備されたガトリング砲から銃弾の嵐が走り、「スチームロイド」を粉々に砕いた。

「僕はカードを2枚伏せ、ターンを終了だ。」

レオ 手札1 場 モンスター2 伏せ3 永続魔法1

永続魔法「ネクストコール」

ネクストG - ブラックシャドウ ATK1600

ネクストG ロスト・ネクスター ATK2700

「君の防御は、彼より遥かに固いね。」

「そりやどうも。俺のターン、ドロー！（危険だが、やるか）俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドローする。・・・（何も無いか）なら2枚ドロー！そして手札から魔法カード「融合賢者」を発動！デッキから「融合」1枚を手札に加える。そして手札から魔法カード「融合」を発動！レオ、お前が銀河の彼方から来た機械のモンスターを使うなら、俺は宇宙の彼方から来た勇者を使うまでだ！手札の「パトロイド」と「シヨベルロイド」を融合！」

巨大な「シヨベルロイド」のシャベル部分に「パトロイド」が乗っている。

・・・「シヨベルロイド」でかつ！また「ダグファイヤー」なら様になっていたが仕方が無い。そして通常、人が乗り操縦する場所が真つ二つに割れ、後部に接続されて腕となる。「ガチャン！！プシユー！」接続部分からロックが掛かる音が聞こえる。これがまたかっこいいんだよ。うるさい？それはロマンが分からない奴だけだ。そして後部が立ち上がり、上半身となる。「ウィーン！ピシィン！

ガシャン！」

そして正座をしていた人間が立つような動作でどんどん下半身への変形が完了していく。「ウィーン、ウィーンウィンウィン、ガチャン！」どうやら足のロックも完了したようだ。そして胴体が開き、中から顔が現れる。そこへシヨベル部分に乗った「パトロイド」が入り、格納される。そして胴体が閉じり、両目に光が灯る。

「剛力合体！「パワーダグオン」！！」

パワーダグオン ATK3300

余談だが、「パワーダグオン」の変形シーンは普通の物とは違い「ゆっくり変形している」。これは「速さ」を見せているのではなく、「力強さ」を表している。作者もこの変形シーンを見て惚れた。まあ、「ファイヤーダグオン」の変形シーンも好きだが。

「へえ・・・強いね。」

「まあな。バトル！「パワーダグオン」で「ネクストG・ブラックシャドウ」を攻「残念だけど、「ネクストG・ブラックシャドウ」は相手の攻撃対象にならない・・・なら、「ネクストG ロスト・ネクスター」を攻撃！パワードリルアーム！！」

左腕に装備されたドリルでネクストG ロスト・ネクスターを粉碎しようとする。

「だけど、通りはしない！セットカードオープン、罠カード発動！「聖なるバリア ミラーフォース」！攻撃宣言時に発動し、相手攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

光の壁が現れ、その壁から無数の閃光が飛びパワーダグオンを狙う。そしてその閃光は見事に直撃し、爆炎がフィールドを包み込む。パワーダグオンは木っ端微塵に破壊された。
・・・はずだった。

「何ッ！」

その爆炎が収まった時、パワーダグオンは立っていた。傷一つ負わずに。

「「パワーダグオン」のモンスター効果！「パワーダグオン」は相手の効果モンスター、魔法、罫カードの効果では破壊されない！！」

そしてそのまま左腕に装備されたドリルでネクストG ロスト・ネクスターを粉碎した。

「きゃーっ！！！！」

レオ LP750 150

「そして俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

翔 手札1 場 モンスター2 伏せ1

ジャイロイド DEF1000

パワーダグオン ATK3300

「僕をここまで追い詰めたのはデュエリストは久しぶりだよ！なら、僕も本気を出そう！！僕のターン、ドロ！そしてセットカードオープン！罫カード発動！「無用な欲張り」！デッキからカードを2枚ドロ！する。ただし次からの2回ドロフェイズでドロ！するこ

とは出来ない。そして手札から永続魔法「未来融合ーフューチャー・フュージョン」を発動！僕は「超銀河戦艦 ハルバード」を選択し、融合素材となるモンスターを墓地に送る！「超銀河戦艦 ハルバード」の融合素材は「ネクストG」と名のついたモンスター7体だ。僕はデッキから「ネクストG サジタリウス・」を1体、「ネクストG スライダー・スコピオン」を1体、「ネクストG スライダー・ゲノム」を1体、「ネクストG ヴァイス・バスター」を2体、「ネクストG ブラック・シャドウ」を1体、「ネクストG エマーゼンシーフォース」を1体送る！」

超究極墓地肥やし&デッキ圧縮じゃねーか！！ふざけんな！！
まあ、「キメラテック・オーバー・ドラゴン」には流石に敵わないが。

「バトル！「ネクストG・ブラックシャドウ」で「ジャイロイド」に攻撃！」

「「ジャイロイド」は1度だけ戦闘では破壊されない！」

ブラックシャドウの闇討ちが来るが、ジャイロイドが気合で耐えた。見ていて凄く健気だな。

「そしてセットカードオープン、畏カード発動！「バスターフュージョン」！！」

「バスター・モード」の亜種か？

「「バスターフュージョン」は手札・場・墓地から融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを除外して選択した融合モンスターを融合召喚扱いとして融合デッキから特殊召喚する！ただ

し、このカードの発動に成功した後、このカードを発動したプレイヤーはライフが100になる!!」

レオ LP150 100

「反則じゃねーか!!ライフは100だとしても、1キルすれば十分だし。」

「銀河はチートの巣窟か？」

「俺は「未来融合」フューチャー・フュージョン」で送ったモンスターをゲームから除外し、「超銀河戦艦 ハルバード」を融合召喚する!!」

「あれ?どこにもいないぞ?」

「ハルバードなら宇宙さ」

「はい?」

突如モニターが現れ、戦艦が人型に変形する。

これ、マクロスじゃねーか!!!

超銀河戦艦 ハルバード ATK4600

「そしてこのカードの効果で選択した融合召喚に成功した時、バスターシールド・カウンターを融合召喚したモンスターに1つ置く。このカードによって融合召喚された融合モンスターがフィールド上から離れる時、かわりにバスターシールドカウンターを1つ取り除く事ができる。さらに、「超銀河戦艦 ハルバード」の効果発動!このカードが融合召喚に成功した時、融合素材となり墓地、または

ゲームから除外されている「ネクストG」と名のついたモンスター2体をこのカードに装備する！」

ヴァイス・バスターとロスト・ネクスターが次元の歪みから現れ、搭乗する。

もう、突っ込まない方がいいな。何っ！か、疲れた。「BF」みたいな能力を見すぎて。

「バトル！超銀河戦艦 ハルバード」で「パワーダグオン」を攻撃！ハルバートキャノン！！」

まるでマクロスと同じように、砲が上を向いているせいで、両肩に装備されているように見えるキャノン砲が90度折れ、発射体制に移行する。

そして・・・激烈なエネルギー砲が宇宙から地球へ。正確に言えば、パワーダグオンを狙って放たれた。

「うわぁーっ！！」

流石のパワーダグオンもこのエネルギー砲には耐えられず、爆散してしまった。

翔 LP4000 2600

「そして「超銀河戦艦 ハルバード」の効果発動！相手モンスターを戦闘で破壊した時、もう1度攻撃することが出来る！バトル！超銀河戦艦 ハルバード」で「ジャイロイド」に攻撃！ハルバートキャノン！！」

「っ！セットカードオープン！畏カード発動！くず鉄のかかし」

！相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

ハルバートキャノンがかかしによって防がれた・・・よく折れなかつたな。

「そして「くず鉄のかかし」は再びセット状態に戻る！」

「それは面倒だな。なら手札から速攻魔法「サイクロン」発動！「くず鉄のかかし」を破壊する！」

これで、俺の防御手段がほぼ消えた。

「僕はカードを1枚伏せ、ターンを終了する。」

レオ 手札1 場 モンスター2 伏せ1 永続魔法1
永続魔法「ネクストコール」
ネクストG - ブラックシャドウ ATK1600
超銀河戦艦 ハルバード ATK4600

ふと、一つ気になったことがあった。

「なあ、一つ疑問に思っていたことがあるから聞いていいか？」

「ああ、別に構わない。」

「なぜ、万条目や吹雪さんといったブルー生徒を襲うんだ？」

「覗きを許すわけにはいかないだろ。」

まったくその通りだ。・・・納得できるから泣ける。

「それもあるが、もう一つ理由がある。」

「理由？」

レオの顔が俯き、憎しみで燃えた顔になる。・・・ユベルが見たら必ず取り込もうとするような顔だな。

「ああ、僕はオベリスクブルーを、あの屑どもを憎んでいるからさ
！！！」

「なぜ？と聞いていいか。」

俺の問いに、レオは静かに呟き始めた。

「僕にはかつて、刎頸の友と言える仲間がいた。あいつは誰にも優しく、そしてこの学園に出来た壁を乗り越え、皆を鍛えた。それがいつか本人のためになると信じて……。そして皆は彼に協力し始め、学園に壁が消えそうになったとき、それを逆恨みにしたオベリスクブルーの屑共があいつに無実の罪を被せて、あいつは退学させられる羽目になった。だから俺は、オベリスクブルーみたいな屑の塊共を1人残さず消すと誓ったんだッ！！！」

・・・

(。。。)

レオの告白に皆が暗い表情になる。

「そうか。・・・俺のターン、ドロー。なあ、レオ。」

「なんだ？」

「復讐をするのは勝手だが、俺の友人が巻き込まれるのなら話は別だ！悪いがこのターンで、勝負をつけさせてもらおう！俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロ―し、その後2枚捨てる！」

「それは通させない！セットカードオープン！カウンター罠発動！「魔宮の賄賂」！相手の魔法・罠カード1枚を無効にし、破壊する！」

「「ああつ！！！」」

「天使の施し」が破壊され、皆の顔が暗くなる。だが、まだまだ！！

「だが、「魔宮の賄賂」の効果で俺はデッキからカードを1枚ドロ―する！ジャイロイド」を生贄に、「ジャンボロイド」を生贄召喚！「ジャンボロイド」の効果発動！このモンスターが「ロイド」と名のつくモンスターを生贄にして召喚に成功した場合、デッキからカードを2枚ドロ―する！」

これで俺の手札は3枚。・・・一気にいくぞ。

「カードを2枚伏せ、手札から魔法カード「天よりの宝札」を発動！お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにデッキからドロ―する。」

「な、まさか「天使の施し」は！！！」

「そう、ブラフだ！このカードの発動を成功させるためのな！！俺の手札は0！よってカードを6枚ドロー！！」

「つく、僕の手札は1枚、よって5枚ドロー！」

「さらにセットカードオープン！魔法カード「苦渋の選択」を発動する！デッキからカードを5枚選び、相手はそこから1枚を選択する。そして選択したカードを手札に加え、残りのカードを墓地に送る。俺はデッキから「パトロイド」を1枚、「ラダーロイド」を1枚、「エクस्प्रेसロイド」を2枚、「レスキューロイド」を1枚で計5枚を選択！さあ、どうする？」

「・・・なら、「レスキューロイド」を選択する。」

「わかった。なら「レスキューロイド」を手札に加え、それ以外のモンスターは墓地へ送る！そして手札から死者蘇生を発動！墓地の「エクस्प्रेसロイド」を特殊召喚！」

エクस्प्रेसロイド DF1600

「そして「エクस्प्रेसロイド」の効果発動！このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、墓地の「ロイド」と名のつくモンスター2体を手札に戻す！俺は墓地の「ラダーロイド」と「パトロイド」を手札に加える！さらに、手札から魔法カード「融合回収」を発動！墓地の「融合」と融合素材となったモンスター1体を手札に加える！俺は「パワーダグオン」の融合素材とした「シャベルロイド」と「融合」を手札に加える！そして手札から魔法カード「貪欲な壺」を発動！墓地のモンスター5枚をデッキに戻しシャッフル、その後2枚ドローする！俺は墓地の「スチームロイド」「パトロイド」「パワーダグオン」「ジャイロイド」「エクस्प्रेसロイド」

をデッキに戻る。この時、「パワーダグオン」は融合モンスターだから融合デッキに戻る。そして2枚ドロ―！」

手札と場と墓地が目が回るほど動く。
仕掛けは上々、これからが本番だ！

「手札から「融合」を発動！手札の「パトロイド」「ラダーロイド」「レスキューロイド」と場の「ジャンボロイド」を融合！！！」

「レスキューロイド」と「ラダーロイド」が「ジャンボロイド」の左右の格納庫から発進し、その格納庫が変形して「ジャンボロイド」の足となった。次に「ジャンボロイド」の前頭部分が2つに割け、肩となる。そこへ「レスキューロイド」と「ラダーロイド」が左右の腕となり、「パトロイド」が大きく開かれた「ジャンボロイド」の胴体部分へと格納された。そしていつの間にか現れていた頭部の目に光が宿る。

「火炎合体！「ファイヤーダグオン」！！！」

ファイヤーダグオン ATK3200

「残念だけど、まだ「超銀河戦艦 ハルバード」には届かない。」

「分かっているさ！そして「ファイヤーダグオン」の効果発動！「ファイヤーホールド」！！！」

赤い炎によって拘束される超銀河戦艦 ハルバード・・・宇宙まで届く炎って凄いな。宇宙には酸素が無くて火は発生しないはずなのに。

「この効果は相手の場のモンスター1体を選択し発動する。この効果の対象となったモンスターは、ターン終了時まで他のカードの効果を受けない。さらに手札から速攻魔法「融合解除」を発動!「フアイヤーダグオン」を分離し、「パトロイド」「ラダーロイド」「レスキューロイド」「ジャンボロイド」を特殊召喚!そして手札から魔法カード「融合」を発動!手札の「シヨベルロイド」と場の「パトロイド」を融合!」

「剛力合体!「パワーダグオン」!!!」

パワーダグオン ATK3300

「・・・何がしたいんだ?」

「さあ?」

皆が呆れている。・・・気持ちは分かるが、今からがこの手間の総結集だ!!!

「俺は手札から魔法カード「パワーボンド」を発動!場の「パワーダグオン」「ラダーロイド」「レスキューロイド」「ジャンボロイド」を融合!!!」

「何!?!」

「超火炎合体!!!」

「パワーダグオン」と「ラダーロイド」「レスキューロイド」を収納した「ジャンボロイド」が光の中を駆ける。そして「パワーダグオン」と「ジャンボロイド」が背中合わせてドッキングする。そ

してさらに速度を上げ、光を駆け続ける。そして「ジャンボロイド」「ラダーロイド」「レスキューロイド」が変形し、「ファイヤーダグオン」の姿になっていた。

そして「ラダーロイド」「レスキューロイド」が再び格納され、さらにそこに「パワーダグオン」の足が下駄のような形になって装着される。そして「ラダーロイド」「レスキューロイド」のなくなった腕には「パワーダグオン」の腕が変形したものが装着される。「パワーダグオン」に収納されていた「パトロイド」が「ファイヤーダグオン」に格納される。そして「ファイヤーダグオン」の胸に鳥のエンブレムが入ったカバーが装着される。最後に「ファイヤーダグオン」の目に光が宿る。

「スウウウパアアファイヤーダグウウオンツツ!!!」

スーパーファイヤーダグオン ATK5000

「そして「パワーボンド」の効果発動!!!」

スーパーファイヤーダグオン ATK5000 10000

「『攻撃力10000!!!』」

「バトル!「スーパーファイヤーダグオン」で「超銀河戦艦 ハルバード」を攻撃!」

「『超銀河戦艦 ハルバード』!迎撃しろ!ハルバードキャノン!」

パワーダグオンを1撃で葬ったハルバートキャノンが、今度はスーパーファイヤーダグオンを破壊すべく、放たれる。それに対し、ス

「パーファイヤーダグオンは片手を宙に上げた・・・まさか！

ハルバートキャノンがスーパーファイヤーダグオンに降り注いでくる。しかし、それを片手で防ぎきった。傷一つ付けずに。そして、超銀河戦艦 ハルバードがいる方向に照準を合わせ、胸のエンブレムが赤く光り始めた。

「スーパーファイヤーメガ光波ツ発射！！」

まるで炎の鳥を模した赤いエネルギー体が発射され、超銀河戦艦ハルバードの中央を貫き・・・撃沈した。

「『スーパーファイヤーダグオン』の効果、このモンスターが戦闘を行う場合、相手モンスターの効果はこのターンのバトルフェイズ終了時まで無効化される。」

レオ LP1000

「ふう・・・。勝ったか。」

「・・・。」

啖呵を切ったのはいいが、実際はかなり危なかった。

もしも「天よりの宝札」「苦渋の選択」「貪欲な壺」のどれか1枚が欠けていたら、負けたのは俺のほうだった。

「ん、拙いぞ！どうやらこの決闘が女子寮にバレたみたいで、こっちに人が向かっている！！」

げげっ！このままじゃあ、確実に退学になっちまう。逃げなければ！

ていつか、皆はもう先に逃げているし。

「翔！」

逃げようとしているとレオから声を掛けられた。

「僕は・・・間違っていたのか？」

「いや、気持ちは間違っちゃいないと思う。ただ、焦りすぎただけだろ。俺が言えることは唯一っ！」

失礼を承知でレオに指を刺す。
こういうときはノリが優先だ。

「お前の友人の冤罪を晴らして、ゆっくり考えてみる。何か見つかるかもしれないぞ？じゃあ、女子にはれない様に逃げ延びろよ！！！」

そう言つと俺は手を振って、その場から立ち去った。

「「ゆっくり考えてみる」か。それも必要かもしれないな。」

レオは翔が去っていった方角を見つめる。

「ありがとう。そしてまたな、翔。」

何か吹っ切れた顔をして、その場を去っていくレオ。

そして彼の姿はいつの間にか消え、元の世界へと戻っていった。

・・・

「はあはあはあ……ここまで逃げればもう大丈夫だろ。」

その後俺達は全力疾走で自分達の部屋へと戻っていった。途中、先回りしていた女子生徒がいたが何とか彼女達の目を潜り抜け逃げ延びることに成功した。まるで「メタルギア」だったよ。

「マスター。いえ、翔。」

「どうした。アイリス？」

アイリスが実体化して真正面に座り、何か聞いたそうにしている。何かあったっけ？

てか、「翔」と呼ぶときは怒っている時か真面目な話をする時だけかな。気をつけねば。ということで俺も正面で正座をする。

「もしも、翔の友人がレオさんの友人と同じ目に会ったとしたら……翔もあなりますか？」

鋭い質問だな。けど俺の答えは決まっている。

「まあ、なるかもしれないな。だが」

「だが？」

「その時はお前が俺を止めてくれると信じている。」

「……信じる、ですか。自分勝手ですね。」

怒っているようで顔が少し俯いている。まあ、こんな身勝手な事を押し付けちゃなあ。

「翔。」

「ん？っ！！」

「……えーと、ただいま正面からアイリスに抱きしめられて、キスされています。しかも深いほうの。」

「……」

「……」

「……」

「ぶはあ。」

「いきなりどうした！？アイリス。」

アイリスの顔が真っ赤になっていた。それと同じくらい俺も真っ赤になって尋ねる。

あと、ご馳走様でしたといわざるを得ない。

「私も。」

ぼつり、と呟いた。

「へ？」

「私もあなたを信じています。だから。」

肩が震えている。そして……少しではあるが、泣いていた。

「だから……一人で悩みを抱え込まないでください。そして、忘れないでください。あなたの傍にはいつも私がいるという事を。」

「あ、ああ。」

どうやら釘を刺されたようだ。嬉しいような、ちと恥ずかしいような・・・むむむ、何とも言えないな。

「わかった。今の言葉を覚えておくよ。・・・ただ。」

「ただ？」

「何っーか、あれをする必要は無かったんじゃないのか？」

頬を指で搔きながら聞いた

流石に俺も恥ずかしいので、アレ呼ばわりさせてもらっつ。

最悪R - 15 指定されそうだしな。

「あ、アレは何というかそのー!!」

また顔を真っ赤にし、混乱していた。

やっぱり、そうなるだろうな。

「こ、怖かったんです。」

「怖かった？」

どういうことだ？説明を頼む。

「何と云うか・・・いつか翔が1人でどこかに行ってしまうような気がして。」

え、何そのフラグ。まさかの死亡フラグか？それともヘルガツチャの代わりに俺が霸王化するのか？勘弁してくれ。ここは死亡フラグを折っとかねば。と言うことで無理やり話題を変えるか。

「大丈夫だつて。そういえば説教はいいのか？」

「あつ！」

地雷は覚悟しているさ。物件が多い状態でハリケーンボンビーに突っ込むような気分だが、やるしかない！

「そうですね・・・なら。」

にっこりと笑う。顔だけはな。何か黒いオーラ出しているし。

「色々な意味で存分にさせてもらいます。」

その後は多くは語らない方がいいだろう。ただ、次の日は睡眠不足だったと言っておく。

フィールド12：天罰（「遊戯王GX・戦乱の六武衆」とのコラボ作品）（後

と言うことで、ギャグ、決闘、シリアスを入れた結果がこれだよ！！
正直自分にはシリアスがあっけないということが良く分かりました。書くのがきつかった……。やっぱりほのぼのが一番いいですね。

フィールド13：修行と眠気と第三のデッキ（前書き）

今回のタイトルは「仮面ライダーオーズ」風にしてみました。
ネタが思いついても、本編の地形が良く分からないから当てはめられない。

追記：今頃なのですが、このマルタンは「クロノス先生の息子」という設定になっています。まさか「遊戯王GX」では、ナポレオン教頭の息子だったとは……。

orz
情報がとうございませぬ。そして本当に申し訳ありませんでした。

ちなみに今回からモンスターの効果の明確化を試みました。

フィールド13：修行と眠気と第三のデッキ

「どうしたもののか。」

俺はデュエルアカデミア内でもかなり強いほうだと思っていた。だが、それはただの慢心だったという事が、昨日の戦いでよくわかった。カードの強弱などではない。自分自身の弱さが引き起こした敗北だと実感できたからだ。

だからもう1度初めから出直し、鍛えたい。そう思つてカイザーさんと「丸藤 亮」にアドバイスを貰い、修行の旅に出る事を決意した。修行に出る前に校長やクロノス先生には話をしており、校長からは「体を大切にするように」、クロノス先生からは「修行から帰ったらお土産を頼むノーネ」という言葉をいただいた。・・・クロノス先生、俺は旅行に行くんじゃないですよ？

そういうことで、船に乗りいざ修行の旅へいざ出発！となったのはいいものの、出航してから数時間後、嵐に遭遇してしまい船は転覆。俺も海へと投げ出された。

船が死亡フラグだと言う事は前もって聞かされたが（カイザー談）、まさか自分まで同じ目に会うとは・・・まさか仕組まれていたとか？

そして投げ出され、気が付くと砂浜に転がっていた。しかし、人の気配がしない。どこかの無人島に流れ着いたようだ。

荷物を調べると、海に探された時にデッキを失ってしまうという痛恨のミスをしてしまった。だが、逆に考えれば新たなデッキを作るための未練を断ち切れたとも言える。無論、前のデッキにも愛着はあったが。

とりあえず、ここがどこなのか確かめるべくこの島を調べる事にし

た。食料が今もっている分だけでは心もとないので、現地調達をも考えなければならぬ。計画的に食料を切り詰めなければ。ふと、風が俺の頬を通り過ぎた。やさしく、力強く、それでいて何か懐かしい香りを残して。

ふと、その風が通り過ぎ去った方向を見ると一枚のカードを落ちていた。

近づいて拾ってみる。

「何だこのカードは？」

まさか、このカードが俺の生涯の相棒になるとは……今の俺には想像もつかなかった。

・・・

「万丈目が修行の旅に出ただとっ！？」

「黒鉄 レオ」と名乗る別世界のブルー生徒との対戦をし、アイリスの説教を受けた翌日。睡魔と必死に闘い、何とか授業が終了したので帰って早く寝ようと思った矢先、マルタンから思わぬ知らせを受け、今に至る。ちなみに背中と下半身が痛い。まさか正座で1時間近く説教された挙句に、強く抱きつかれたまま一緒の布団で寝る事になるとは。ちなみに背中ではアイリスの爪が刺さっていた。さすがに寝ている時も泣いていたので剥がす事はしませんでした。いい匂いがしたのは否定しない。むしろ自分の感情を抑制するのに必死でまったく眠れませんでした。

どうせ俺は狼になりきれないガキだよ、こんちくしょう！！

それはさておき、予想以上にこの世界は物事が早く動くなあ。

(これじゃあ、対策の施しようが無いですね。)

(まあ、元からあまり期待しない方が正解かもしれないがな。)

カンニングペーパーもテストの内容が変わればただのデメリットでしかない。むしろ、なまじ対策を取ってしまった場合の方が不味い事態になるかもしれないしな。

「はい。何でも「一から出直したい」という理由で父さんに掛け合ったようです。」

「で、クロノス先生は合意したのか。」

「ええ。「帰ったら土産を頼みますー」の一言だったそうです。・
・父さんらしいと言えばそうなんです、何だか呆れます。」

マルタンが肩を落としてため息をつく。
変わった父親を持つと子は苦労するなあ。

「ははは。まあ、クロノス先生らしいじゃないか。さて、そろそろ帰って寝るか。」

睡魔との闘いで精神と体がボロボロなのでさっさと帰りたい。

「あ、今日は周一のランダム決闘の日ですよ?」

わーすーれーてーた!!!

はあ、面倒だ。ちなみに「ランダム決闘」とは、学年、色に関係なく選別され、その人と戦わないといけないという決まりだ。一週間に一回、全生徒はやらなないといけない。(怪我、病気の人は除く)

しかも自分の番になるまで観客席で待たなければならぬ……まあ、自分の決闘が終わったらすたこらサッサ出来るのが気楽だが。しゃあない。第三のデッキを使うか。

（あのデッキを使うのですか？）

（ああ。一撃必殺で片付ける。）

（事故りやすいですし……私はあんまり好きではないです。）

（すまん。今回は目を瞑ってくれ。）

このデッキを今まで使わなかった理由は……後に分かるさ。さて、会場に行きますか。

・・・

十代や凧、マルタンや三沢は相手を一掃し、順調な勝利を収めた。さて、次は俺か。

「では、「丸藤 翔」君対「天上院 明日香」さんの対決にや！」

わーっ！！

「明日香さん、頑張ってー！」

「勝ってくださいまし。」

「翔！負けるなよー！！！」

「頑張れーッ！」

様々な応援が聞こえる。どちらかと言うとやはり明日香の方が声援が大きいな。

まあ、声援は無ければ悲しいが、あっても緊張するから勘弁な。

「悪いがかなり眠いんで、最初から飛ばさせてもらっぞ。」

「ふふ。残念だけど、私はそう簡単に倒せないわよ。」

うつらうつらしながら言うと、流石に一蹴されてしまった。

まあ、威厳も何もないからなあ。

「決闘!!!」

「俺の先攻、ドロー!」

「明日香さんが先攻だろ!」

「レディファーストという言葉を知らないの?」

観客からさじを投げられる。だが知ったこっちゃ無い。

それにレディファーストって言葉は外国だろ?ここは日本だ!!!だから通用しない。

「さて、俺は手札から「お注射天使リリー」を攻撃表示で召喚!」

お注射天使リリー

効果モンスター 星3 地属性 魔法使い族

AK400 DF1500

効果：このカードが戦闘を行うダメージ計算時に1度だけ、2000ライフポイントを払って発動することができる。このカードの攻撃力は、そのダメージ計算時のみ3000ポイントアップする。

かなり大型の注射を持ったピンク髪の看護婦が現れる。といっても下半身は半ズボンだな。ちなみに頭にかぶっている帽子の絵柄は

赤十字型とハート型があり、赤十字型は絶版であつたりする。これには理由があり、赤十字はジュネーブ条約により衛生兵にのみ使用を許された紋章であるため、モンスターカードであるこのカードにはふさわしくないとか。

「さらにカードを3枚伏せ、ターンエンド。」

翔 手札2 場 モンスター1 伏せ3

お注射天使リリー AK400

「お注射天使リリー」、かなり厄介なモンスターね。私のターン、ドロー！私は手札から「エトワール・サイバー」を攻撃表示で召喚！」

エトワール・サイバー

効果モンスター 星4 地属性 戦士族

AK1200 DF1600

効果：このカードは相手プレイヤーを直接攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。

スケート選手らしき人物が現れた。・・・しかし防御力の方が高いのはイメージ的にも合わないなあ。

「（効果を使わなければそのまま破壊され、使ってもライフは半分に減るわ。）バトル！「エトワール・サイバー」で「お注射天使リリー」に攻撃！ラディカルグッドスピード！！」

ちよwおまwww

それはクルーガーの兄貴の技名じゃないか！！

エトワール・サイバーがスケートの要領で加速し、リリーに接近する。

「だが、まだまだ。セットカードオープン、畏カード発動！「ドレイン・シールド」！相手攻撃モンスターの攻撃を無効にし、その攻撃力分だけライフを回復する！」

エトワール・サイバーが速度を生かした蹴りをリリーに食らわせようとしますが、盾が現れた事によって防がれた。

翔 LP4000 5200

「やるわね。ならカードを2枚伏せ、ターンエンド。「前にセットカードオープン、速攻魔法発動！「サイクロン」！今伏せたカードを破壊する！」つく！（和睦の使者が）」

サイクロン 速攻魔法

効果：フィールド上の魔法・罠カードを1枚破壊する。

和睦の使者か・・・となるともう一枚は「ドゥーブル・パッセ」かな？

明日香 手札3 場 モンスター1 伏せ1

エトワール・サイバー AK1200

「俺のターン、ドロー！」

よし、ケリをつける！

「俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカ-

ドを3枚ドロ―し、その後2枚捨てる。」

天使の施し 魔法カード（制限）

効果：デッキからカードを3枚ドロ―し、その後手札からカードを2枚捨てる。

「そして手札から永続魔法「一族の結束」を発動！自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に存在する表側表示のその種族のモンスターの攻撃力を800ポイントアップする！」

一族の結束 永続魔法

効果：自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

「これでケリをつけさせて貰う！バトル！「お注射天使リリー」で「エトワール・サイバー」に攻撃！」

「残念だったわね！セットカードオープン、罠カード発動！「炸裂装甲」！」

炸裂装甲 通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体を破壊する。

「なら、「炸裂装甲」にチェインして手札から速攻魔法「デイメンション・マジック」を発動！「お注射天使リリー」を生贄に捧げて、手札の「チェミナイ・エルフ」を攻撃表示で特殊召喚し、「エトワール・サイバー」を破壊する！」

「何ですって！」

デイメンション・マジック 速攻魔法

自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる

爆風がリリーに襲い掛かるが、間一髪で箱の中に納まった。そして箱の中から双子のエルフの姉妹が現れる。それと同時にエトワール・サイバーが箱の中に消え、そのまま消滅してしまった。

チェミナイ・エルフ

通常モンスター

星4 地属性 魔法使い族

AK1900 DF900

交互に攻撃を仕掛けてくる、エルフの双子姉妹

チェミナイ・エルフ AK1900 2700

「一族の結束」により攻撃力がアップ！、バトル！「チェミナイ・エルフ」でダイレクトアタック！」

双子の姉妹がそれぞれの得物で明日香に攻撃する。

「つく！」

明日香 LP4000 1300

「まだよ、まだ私は戦えるわ。」

「残念、まだ奥の手がある！セフトカードオープン、畏カード発動！「地霊術 鉄」！自分の場の地属性モンスター1体を生贄に捧げて、墓地のレベル4以下の地属性モンスター1体を特殊召喚する！俺は「チェミナイ・エルフ」を生贄に捧げ、「天子の施し」で墓地に送った「地霊使い アウス」を攻撃表示で召喚！」

双子の姉妹が光と共に消え、代わりに眼鏡をかけた茶髪のかわいらしい女の子が現れた。族に言う「霊使い」の1人である。

地霊使い アウス

効果モンスター 星3 地属性 魔法使い族

AK500 DF1500

リバース：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手フィールド上の地属性モンスター1体のコントロールを得る。

「そして「一族の結束」の効果により800ポイントアップ！」

地霊使い アウス AK500 1300

「これで止めだ！バトル、「地霊使い アウス」でダイレクトアタック！」

アウスが明日香に近づき、杖でそのまま殴る。い、痛そうだな。

明日香 LP1300 0

「そこまで！勝者「丸藤 翔」君だにゃ！」

わーっ！

「翔！やったなー！」

「霊使いで決めるなんて分かっているじゃねーか！！」

・・・声援が聞こえるが、正直もう限界なので退室した。

（マスター。大丈夫ですか？）

（正直かなりしんどい。）

何とか気力で持たせてきたが、限界はとっくに過ぎていた。

そして最後の気力を振り絞り、やっと自室に入って布団を出しそのまま意識をブラックアウトさせた。

・・・

翔が布団を出してそのまま倒れてしまった後、私は実体化してまず扉の鍵をかけた。万が一他の人に姿を見られたら、翔に迷惑が掛かってしまう。

その後、翔にちゃんと布団を被せた。

「・・・翔。」

私も布団の中へ潜り込み、翔をやさしく抱きしめた。今にも割れそうなガラスを慎重に触るがごとく、そつと。そして翔に触れる。

暖かくて、ほつとする。まるで暗闇の中で光を見つけたような安心感すら覚えた。

程なくして、私も眠りに付いた。

・・・

「あれ？翔は？」

十代が周りを見渡すが、翔の姿が見えず驚いていた。

「あ、翔なら先に帰ったみたいですよ。」

十代の疑問にマルタンが答える。

「「「えー！！！！」」」

周りにいた一同が驚いた。来週は、毎年恒例のデュエルアカデミア本校とデュエルアカデミアノース校との友好デュエルがある。そして今日、その選抜戦が始まる予定だったからだ。

「じゃあ、翔を連れ戻さない！」

「いや、それはやめておいたほうがいいですよ？」

「どうして？」

凧が急いで翔を連れ戻そうとした時、マルタンから止められた。

「今日の翔はどうやら体調が余り良くないようですから、そっとしておいた方がいいですよ。」

「なるほど。」

マルタンから事情を聞き、皆は納得する。

「なら翔は辞退と言う事で先生に話して、まず俺達だけでやっておくか。」

三沢が話を持ち上げる。

「しかし翔が不参加になって不満を言わなければいいが。」

「それについては大丈夫なノーネ。」

「クロノス先生。」

凧が不安がっていると、クロノス先生が声を掛けた。

「どうして大丈夫なんですか？」

「今日、シニョール翔自身が代表戦を辞退する事を私に話したノーネ。」

「何で、あいつは辞退したんですか？」

「何でも最近は何も調子が優れず、皆に迷惑をかけたくないと言っていたノーネ。」

「なるほど。」

疑問に思われていたことが解消され、納得する一同。

「それよりも、これから選抜戦の候補者が上がるはずなので、ちゃんと聞いておくよーに。」

「はい。」

「わかりました。父さ、いえクロノス先生。」

マルタンが父さんと言いかけた所を修正し、ちゃんと先生と言う。

「うむ。」

クロノス先生が満足し、そこから立ち去っていった。

・・・

「それでは、これよりデュエルアカデミア本校対ノース校との代表選抜試合を始めるノーネ！今回の候補者は・・・オシリスレッド代表シニョール十代とライエロー代表シニョール三沢なノーネ！！！！」

クロノス先生の宣言に対し、観客席から声援が沸く。

「十代、頑張ってくれー！！」

「三沢ー！！負けんなよー！！」

そして十代と三沢が前に出て、デュエルディスクを構える。

「まさかこんな形でお前と戦う事になるとはな。」

「へへっ！俺も制裁決闘の時からずっと戦ってみたかったんだ。」

「俺もだ。だが、手加減はしない！！」

「望む所だ！」

「決闘！！」

フィールド13：修行と眠気と第三のデッキ（後書き）

今回は翔が眠気に勝てず、途中退場でした。

ちなみに第三のデッキは地属性魔法使い族デッキ（一部他の属性あり）でした。

フィールド14：HEROと黒き勇者と来客（前書き）

勢いに乗れたので書いてみました。

恐らく書き直し部分も相当出るかもしれませんが・・・。

追記：マイトガイン系は「XYZ」シリーズのようなイメージで使えます。ただし、手札からも使えるので「マグネット・ヴァルキリオン」の上位互換とも言えますが・・・。

音楽は削除しましたorz

フィールド14：HEROと黒き勇者と来客

「俺の先攻、ドロー！俺は手札から「E・HERO クレイマン」を守備表示で召喚！」

E・HERO クレイマン

通常モンスター 星4 地属性 戦士族

ATK800 DEF2000

粘土でできた頑丈な体を持つE・HERO。体をはって、仲間のE・HEROを守り抜く。

かなり大型のモンスターが両手をクロスにし、身構える。これでヒーローだから凄い。

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

十代 手札3 場 モンスター1 伏せ2

E・HERO クレイマン DEF2000

「常套手段だな。俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロー、その後2枚捨てる！」

天使の施し 通常魔法（制限）

効果：デッキからカードを3枚ドローし、その後手札からカードを2枚捨てる。

「そして「天使の施し」で墓地に送った「ヒタチロイド」のモンスター効果発動！このカードが手札、または場から墓地に送られた場

合、デッキからカードを1枚ドローする。俺が送った「ヒタチロイド」は2枚。まずは1体目の「ヒタチロイド」の効果が発動し、1枚ドローする。そして2体目の効果でもう1枚ドローする。」

ヒタチロイド

効果モンスター 星4 地属性 機械族

ATK 300 DEF 1500

効果：このカードが手札、または場から墓地に送られた場合、デッキからカードを1枚ドローする。

ざわ・・・ざわ・・・

「天使の施しのデメリットが無いだと!?!」

「なんてカードだ。」

生徒の中からざわめきが奔る。デメリットが逆手に取られ、完全に悪用されているしな。これは酷い。

「そして手札から「エクस्प्रेसロイド」を守備表示で召喚!」

エクस्प्रेसロイド

効果モンスター 星4 地属性 機械族

ATK400 DEF1600

効果：このカードの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「エクस्प्रेसロイド」以外の「ロイド」と名のついたモンスター2体を手札に加える事ができる。

「そして「エクस्प्रेसロイド」に効果発動!このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「エクस्प्रेसロイド」以外の「ロイド」と名のついたモンスター2体を手札に加える事ができる!俺は墓地の「ヒタチロイド」2体を手札に

加える！行くぞ、十代！俺は場の「エクस्प्रेसロイド」と手札の「ヒタチロイド」2体を墓地に送り、「猛獣三体合体 トライボンバー」を特殊召喚！」

三沢のデュエルディスクから音楽が鳴り出した。いつも通り「吠えて発進！ボンバース」である。

「お前たち、行くぞ！」

「おう！」

「ヒタチロイド」2体が人型ロボットに変形し、左右の足となる。そして「エクस्प्रेसロイド」が胴体となり、「ヒタチロイド」の前頭部分が両腕となって連結される。そして「エクस्प्रेसロイド」から顔が出てきた。

「トライボンバー！！！」

猛獣三体合体 トライボンバー

融合・効果モンスター 星7 炎属性 機械族

ATK2600 DEF1800

効果：このモンスターは手札または場から「エクस्प्रेसロイド」1枚と「ヒタチロイド」2枚を墓地へ送った場合のみ、融合デッキから特殊召喚することが出来る。（「融合」の魔法カードは必要しない）。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、自分の手札を1枚墓地に送る事で、このカードに攻撃対象を変更する事ができる

「くっ、やっぱりかっこいいなあ!!」

十代はキラキラした目でトライボンバーを見つめ、感激していた。

「そして「ヒタチロイド」の効果発動!このカードが手札、または場から墓地に送られた場合、デッキからカードを1枚ドローする。まずは1体目の「ヒタチロイド」の効果が発動し、1枚ドローする。そして2体目の効果でもう1枚ドローする。」

三沢の手札がどんどん回る、あまり消費せずにだ。

「そして手札から魔法カード「大嵐」を発動!場の全ての魔法・罠カードを破壊する!」

大嵐 通常魔法（制限）

効果：フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

「やべっ！（俺の伏せカードは「ドレインシールド」と「ヒーロー・シグナル」だから発動できない。）」

ドレインシールド 通常罠

効果：相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する

ヒーロー・シグナル 通常罠

効果：自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

大嵐が発生し、十代の備えてあったカードを全て吹き飛ばしてしま
った。

「よしっ！バトルだ！」「猛獣三体合体 トライボンバー」で「クレ
イマン」に攻撃！ボンバーギムレット！！」

トライボンバーの抜き手が、クレイマンを貫いた。そして、爆風が
十代を襲う。

「そして「猛獣三体合体 トライボンバー」のモンスター効果発動
！このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻
撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与
える！よって十代に600ポイントのダメージを与える！！」

「つく！」

十代 LP4000 3400

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

三沢 手札5 場 モンスター1 伏せ2

猛獣三体合体 トライボンバー ATK2600

...

「さすが三沢。手札消耗がほとんど無い。」

凧から賞賛の言葉が出る。

実際、三沢の手札はまだ5枚。「ヒタチロイド」の有効活用で一気

に優位に立った。

「けど、ここから十代の反撃が開始されますね。」

マルタンは自信満々で話す。まるで自分がその場に立っているかのごとく。

・・・

「へへっ、やるな三沢！俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「融合」を発動！」

融合 通常魔法

効果：手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

「手札の「E・HERO フェザーマン」と「E・HERO バーストレディ」を融合！融合召喚、マイフェイバリットカード！「E・HERO フレイムウイングマン」！！」

E・HERO フレイムウイングマン

融合・効果モンスター 星6 風属性 戦士族

ATK2100 DEF1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」

効果：このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「さらに手札からフィールド魔法「摩天楼 スカイスクレイパー」を発動！」

「つく、やはり来たか！」

摩天楼 スカイスクレイパー フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

高層ビルが一気に生え、まるでアメリカンコミックの舞台に仕上がった。

一番高いビルにフレイムウイングマンが立っている。まるで獲物を狙うタカのように。

「バトル！「フレイムウイングマン」で「トライボンバー」に攻撃！」

フレイムウイングマンが飛び降り、トライボンバーに奇襲をかける。

「そして「摩天楼 スカイスクレイパー」の効果により「フレイムウイングマン」の攻撃力は1000ポイントアップする。食らえ、スカイスクレイパーシュート！」

フレイムウイングマン ATK2100 3100

「応戦しろ！トライボンバー！！」

「ボンバーギムレット！！」

鋭い抜き手がフレイムウイングマンに襲い掛かるものの、皮一枚の差で避けられる。

そして懐に飛び込まれたトライボンバーはフレイムウイングマンの右腕に装備された火炎放射器で焼かれる。

「く……ガードダイバー、マイトガイン。後は……頼ん……だ……ぜ……」

炎に焼かれつつも、最後までトライボンバーは仲間の事を思い、力尽きた。

「トライボンバーッ!!」

三沢 LP4000 3500

「そして、「フレイムウイングマン」の効果発動! 戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える!」

「つく!!」

フレイムウイングマンが三沢に近づき、トライボンバーと同じように火炎放射を浴びせる。

三沢 LP3500 900

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド!」

十代 手札0 モンスター1 フィールド魔法1 伏せ1

フィールド魔法「摩天楼 スカイスクレイパー」
E・HERO フレイムウイングマン ATK2100

・・・

「十代が反撃に出たか・・・だが。」

凧が十代の手札を見て口を濁らせる。

「まあ、手札の差は場で何とか補ってもらおうと思いますよ?」

マルタンが横から口を挟んだ。

「いや、これは厳しいだろうな。」

マルタンの言葉に異を発した人がおり、マルタンが横を振り向く。

「『カイザー!』!」

まさかの人物に回りは驚いた。

ちなみに吹雪さんと明日香も一緒にいた。

「やつほー、みんな。」

「十代がかなり苦戦しているようね。」

明日香が亮の言葉に賛同している。恐らく凧と同じ手札の関係上だろつ。

「さて、三沢君はどうやってこの場を逆転してくれるのだろうか?」

吹雪が楽しみに三沢の動きに注目する。

・・・

「さすが十代。やってくれたな。俺のターン、ドロー！！俺は手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動！」

苦渋の選択 通常魔法（制限）

効果：自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せる。相手はその中から1枚を選択する。相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードを墓地へ捨てる。

「俺はデッキから「スチームロイド」「ドリルロイド」「ジェットロイド」「ラダーロイド」「パトロイド」を選択！さあ、十代！選ぶ方がいい！！」

三沢の「苦渋の選択」に十代は悩んだ。下手に選べば「マイトガイ」か「ガードダイバー」のどちらかが出てくる事はほぼ確実なのだから。

「んー、じゃあ「ドリルロイド」を手札に加えてくれ！」

「分かった。「ドリルロイド」を手札に加え、他のカードを墓地に送る。俺はセットカードオープン永続罠「リビングデッドの呼び声」を発動！」

リビングデッドの呼び声 永続罠（制限）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「自分の墓地のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚！甦れ、」
「エクスペレスロイド」！！

エクスペレスロイド ATK400

「そして「エクスペレスロイド」の効果発動！自分の墓地の「ロイド」と名の付くモンスター2体を手札に加える。俺は「スチームロイド」と「ジェットロイド」を手札に加える。さらに手札から「エクスペレスロイド」を守備表示で召喚！」

エクスペレスロイド DEF1600

「そして効果発動！俺は墓地の「ラダーロイド」と「パトロイド」を手札に加える！トライボンバーの弔い合戦だ！行くぞ、皆！」

「「おう！」「」

「俺は手札の「ラダーロイド」「パトロイド」「ドリルロイド」「ジェットロイド」を墓地に送り、「緊急4体合体 ガードダイバー」を特殊召喚！」

再び三沢のデュエルディスクから音楽が流れ出す。ダイバーズの手マソング「緊急発進！ダイバーズ」だ。

「みんな、ボンバーズの仇を討つぞ！」

「「「おう！」「」

「ラダーロイド」が上半身、「パトロイド」が股間部分に変形し、

そして「ドリルロイド」が右足に、「ジェットロイド」が左足へと変形し、それぞれ合体されていく。

「ガードダイバー！」

緊急4体合体 ガードダイバー

融合・効果モンスター 水属性 機械族

ATK2400 DEF1900

効果：このモンスターは手札または場から「ラダーロイド」「パトロイド」「ジェットロイド」「ドリルロイド」を墓地へ送った場合のみ、融合デッキから特殊召喚することが出来る。（「融合」の魔法カードは必要しない）。

このモンスターが特殊召喚に成功した時、相手の場の魔法・罠カードを全て破壊する。

「おお、ダイバーズか。かつこいー！！

「緊急4体合体 ガードダイバー」の効果発動！このモンスターが特殊召喚に成功した時、相手の場の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「ハイドロキャノン！！」

十代がのん気に楽しんでいると、ガードダイバーの両肩に設置された放水機から勢い良く、水が発射される。

「やべえ！速攻魔法「クリボーを呼ぶ笛」を発動！」

クリボーを呼ぶ笛 速攻魔法

効果：デッキから「クリボー」または「ハネクリボー」1枚を手札

に加えるか特殊召喚することが出来る。

「俺はデッキから「ハネクリボー」を選択し、守備表示で特殊召喚！頼むぜ、相棒。」

(くりくり)

ハネクリボー

効果モンスター 星1 光属性 天使族

ATK300 DF200

効果：フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時に発動する。発動後、このターンこのカードのコントローラーが受ける戦闘ダメージは全て0になる。

水が「摩天楼 スカイスクレイパー」を流し、都市は水没してしまった。

いや、正確に言うと都市が消えてしまったただけだが。

「一気に決めるぞ！ガイン！」

「OKだ！三沢！！」

「俺は手札のスチームロイド」1体と場の「エクस्प्रेसロイド」2体を墓地に送り、「勇者特急 マイトガイン」を特殊召喚！！」

「チェンジ、マイトガイン！」

三沢のデュエルディスクから音楽が鳴り出す。

BGMはもちろん「レッツ・マイトガイン！！」

2体の「エクस्पロイド」と1体の「スチームロイド」が空を飛ぶ。そして2体の「エクस्पレスロイド」が1体の「スチームロイド」を囲むように前に出る。

まず「スチームロイド」の後方部分が変形し、足となる。

そして後ろ半分が反転し、下半身となる。

続いて「エクस्पレスロイド」のうち1体が腕の形に変形し、

もう1体の「エクस्पレスロイド」も腕の形に変形した。

変形した2体の「エクस्पレスロイド」が「スチームロイド」の左右に来る。

「スチームロイド」の車掌が乗りそうな部分の左側から連結器が出てきて、左側に来た1体の「エクस्पレスロイド」がレーザーサイトによって誘導され、「スチームロイド」に連結される。

左側に来たの「エクस्पレスロイド」も同じ方法で「スチームロイド」に連結される。

右腕となった「エクस्पレスロイド」の後部から手が出て、完全に腕となった。

そして同じ方法で左腕の「エクस्पレスロイド」も腕となる。

「スチームロイド」の前頭部分が折れ、胸の部分に覆いかぶさる。覆いかぶさった時、列車の汽笛がなった。

そして頭部が現れ、その目が輝く。

(~)

変形が終わると同時に音楽も鳴り止む。

「お、マイトガインか。やっぱりかっこいい!!」

十代がマイトガインの姿を見て喜ぶ。

「そう、その通りだ!」

十代の声に、三沢が答える。

「銀の翼に」

マイトガインが前に出て、右腕を左前に力強く出す。

「希望のぞみを乗せて」

今度は左肩を重心に、前に出る。

「灯せ平和の青信号!」

自分の頭部に装備された列車の信号機を模ったパーツに右指を指して、強調する。

「勇者特急マイトガイン。定刻通りにただいま到着!!」
その場で一回点し、ポーズを取る。

勇者特急 マイトガイン

融合：効果モンスター レベル8 地属性 機械族

ATK2800 DEF2200

効果：このモンスターは手札または場の「スチームロイド」1体と「エクस्प्रेसロイド」2体を墓地へ送った場合のみ特殊召喚することが出来る。（「融合」の魔法カードは必要しない）。

このモンスターが相手モンスターに攻撃する場合、攻撃力が1000ポイントアップする。このモンスターが戦闘によって破壊された場合、そのターン終了時に墓地から特殊召喚することが出来る。この効果を使用した場合、このモンスターの攻撃力と守備力は元々の半分の数値になる。またこの効果はデュエル中1度しか発動できない。

「さらに手札から魔法カード「オーバーロード・フュージョン」を発動！！」

オーバーロード・フュージョン 通常魔法

効果：自分フィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、闇属性・機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「俺は墓地の「スチームロイド」1枚と「エクस्प्रेसロイド」2枚をゲームから除外し、「勇者特急 ブラックマイトガイン」を融合召喚！！」

「……な、何だっ……！！！！」

「チェンジ、ブラックマイトガイン！」

またもや三沢のデュエルディスクから音楽が鳴り出す。

BGMは同じく「レッツ・マイトガイン！！」だ。

「マイトガイン」と同じ過程で変形が終わると同時に音楽も鳴り止

む。

マイトガインのカラーリングを黒くし、頭部デザインを「マジンガ
ーZ」風に変更した特別機。いや、本来なら敵として存在するはず
だった勇者が今、オリジナルと共闘している。

「黒い力を」

ブラックマイトガインが前に出て、左腕を右前に力強く出す。

「正義に変えて。」

今度は右肩を重心に、前に出る。

「灯せ悪への赤信号！」

自分の頭部に装備された列車の信号機を模ったパーツに左指を指し
て、強調する。

「勇者特急ブラックマイトガイン。声援を受けて只今見参！！」

その場で一回点し、ポーズを取る。

勇者特急 ブラックマイトガイン

融合・効果モンスター 星8 闇属性 機械族

ATK2800 DEF2200

「スチームロイド」+「エクスプレスロイド」+「エクスプレスロ
イド」

効果：このカードは融合召喚でしか特殊召喚することは出来ない。

このモンスターが相手モンスターに攻撃する場合、攻撃力が1000
0ポイントアップする。自分フィールド上の「マイトガイン」と名
のつくモンスターが相手モンスターに攻撃する時、このモンスター
の攻撃力分アップさせる事が出来る。この効果を発動させたターン、
このモンスターは攻撃する事はできない。

「マイトガインにも兄弟機がいたなんて……く〜！俺つついてるぜー！！」

まさかのマイトガインの同型機の登場に十代のテンションはヒートアップした。

「ブラックマイトガインは元々、マイトガインを破壊するはずだった闇の勇者……しかし！」

「そう！今の私はガインと同じ、平和を守る戦士となつたっ！！」

「ブラック！お前がいれば百人力だ！！」

マイトガインが嬉しそうにブラックマイトガインに話しかける。

「私もだ。ガイン……もうあの悲劇は繰り返させない。」

「ああ！行くぞ、ブラック！！」

「了解だ！ガイン！！」

マイトガインとブラックマイトガインが腕を組み、それを外すと一目散にフレイムウイングマンに攻撃を仕掛ける。

「バトル！「勇者特急 マイトガイン」で「フレイムウイングマン」に攻撃！！そして「勇者特急 ブラックマイトガイン」の効果発動！！自分の場の「マイトガイン」と名の付くモンスターが相手モンスターに攻撃したとき、「ブラックマイトガイン」の攻撃力分だけ攻撃力をアップさせる！さらに、「マイトガイン」の効果発動！相手モンスターを攻撃する場合、このモンスターの攻撃力は1000

ポイントアップする!!」

勇者特急 マイトガイン ATK2800 3800 6600

「（ブラック）動輪剣ツ!!」

マイトガインとブラックマイトガインが左の腰部分に納められていた剣を取り出し、同時に構える。

「ガイン、私が先に仕掛ける。後に続いてくれ!」

「了解!!」

ブラックマイトガインが背中のスラスタでフレームウイングマンに接近する。

そしてマイトガインも背中のスラスタで空を舞う。

「横一文字切りイ!!」

「うおーっ!!」

ブラックマイトガインの動輪剣がフレームウイングマンを横一文字に切りつける。

「今だ、ガイン!!」

「十文字切りイ!!」

「はぁー!!」

三沢の掛け声と共にマイトガインの気合の入った一撃が、落下スピ
ードを加えてフレイムウイングマンに襲い掛かる。ブラックマイト
ガインによって深手を負ったフレイムウイングマンはなす術無く切
り裂かれる。そしてやはり爆発し、爆炎からマイトガインとブラッ
クマイトガインが現れる。大地に刺さった動輪剣を抜き、左腰に納
めた。

そしてマイトガインとブラックマイトガインが並び、どや顔と共に
頭部の信号機を模したパーツから青信号と赤信号が光る。

十代 LP3400 - 11100

「そこまで！！勝者はライエロー代表シニョール三沢なノーネ！
！」

わーっ！！

「やったなー！三沢ー！！」

「お前の本気を久々に見たぜ！！」

「十代も惜しかったよ！！」

「次は頑張れよ、十代！！」

観客席から惜しみない拍手と声援が聞こえた。

「くーっ！後ちよつとだったのに・・・悔しいな。けど面白かった
ぜ！またやろうな、三沢ー！！」

「ああ、今度も倒して見せるがな！！」

「へへ！次こそは俺が絶対勝つてやるぜー！！」

そうして十代と三沢が腕を組み、一掃声援が沸きあがった。

・・・

「惜しかったな、十代は。」

「あの時に押し込めていればね。」

凧とマルタンが十代の戦いぶりを悔しがっていた。あそこで一気に決める事ができれば・・・そう思うとやはり悔しいらしい。

「だが、三沢のあの展開力は中々目を見張る物だったな。」

「そうだね。僕もアレには驚いたよ。」

「私も。まさかあそこまでやるなんて・・・さすが三沢君ね。」

亮と吹雪と明日香は三沢の展開力に驚かされていた。

「まあ、それはそれとして・・・十代君と三沢君に会いに行くかい？」

「そうですね。行きましょう。」

「ああ。」

「はい。」

皆は十代と三沢の元へと行った。

・・・

十代と三沢が対戦していた頃、一隻の船が港に着いていた。とある者は下船し、またとある者は乗船していた。そして1人のレッド服を着た生徒らしき人物が船から下りる。

「亮様。今、会いに行きますね」

次回予告

「亮様、私と付き合ってください!」

「俺の信条か、それとも慕う者の想いか……。」

「恋する乙女は強いんです!」

「ダイターンツ、カムヒアツー!!」

次回「フィールド15：乙女と変態と伊達男」

「届け、私の一途な思い!!」

フィールド14：HEROと黒き勇者と来客（後書き）

今回は前から十代VS三沢でした。

あれ？この小説では十代って自力ではまだ勝ってないような・・・

（汗）

ま、まあ「ダイの大冒険」でいうポップフラグですねわかります。

今回は再び大暴走を予定していますので、カイザーファンにとってはキツイかもしれません。（笑）

ブラックマイトガインの回は作者がマジ泣きした覚えがあります。

あれは神回だった・・・なのでブレイブサーガで仲間フラグがあった時は狂喜しました。

フィールド15：乙女と変態と伊達男（前書き）

あれ？亮を暴走させるはずが・・・レイが暴走しました。

と言うことで、レイファンの方は今回は注意して読んでください。

ちなみに作者はブルーレイ（TF）が大好きです。

追記：今回からオリジナル系のみ説明を入れてみました。

何度も変更して申し訳ありません。それとバーボンハウスネタは削除しました。不快に思われた方には申し訳ありません。

フィールド15：乙女と変態と伊達男

翔です。前は出番がなかったのですが、眠かったのでご了承を。

で、やっと眠気が取れました。ただ・・・

アイリスがまた抱きついて寝ています。

抱きついて寝るのは別に構わない。俺個人としても嬉しいからな。

しかし、無防備すぎるので何っーか、うん。正直餌を前にして「待て」と言われた犬のような気分だと言っておきます。

少しはだけた服、押し当てているやわらかな胸、ほんのりと紅くしている顔、そしてまるで誘っているかのような魅惑的な唇。

これだけでグツと来る物がある。

しかし、こつも無防備に身を任せ幸せな顔をしていると・・・自身に罪悪感が沸きますね。信頼を裏切るといっつか何と云うか。なので襲う気にはなれない。ただ、やはり自分の中の「男」が目覚めっぱなしなのはきつい。

さて、起こしますか。

ゆさゆさ

「アイリス、そろそろ起きろ。」

肩を揺らして起こす。この方法ってかなりの人が起きるから、結構効果的だな。

案の定起きたようだ。

「ん、うん。おはようございます。マスター。」

「ああ、おはよう・・・て時間じゃないけどな。」

「そうですね。」

時間を見てお互い苦笑する。今は夕方の6時なので、あと1時間で夕飯になる。ちなみに夕飯は皆と一緒に食堂で食べています。

「じゃあ、時間つぶしに罰ゲームありのブラックジャックでもするか？」

「おもしろそうですね。けど、罰ゲームで変な事を頼まないくださいよ？」

「わかっているよ。」

さて、憑依前の学生時代のに付けられたあだ名「ラッキーマン」の実力を見せ付けますか。

・・・

「15回中9回勝利か、まだまだ運は鈍ってないな。」

「うううう・・・。(シクシク)」

トランプをシャッフルしたのはアイリスなんだから、恨むなら自分の運を恨むしかないぞ？ちなみに残りの6回は4回引き分け、2回負けだった。これなら大勝といわざるを得ない。

さて、罰ゲームの内容は・・・ただ1つ。

「に、似合っていますか？」

「ああ！もちろん」

アイリスが恥ずかしそうに聞く。それに対し、俺はグッと親指を立てて答える。

今アイリスは罰ゲームにより、鳥をモチーフにした兜を外し、青色のリボンでポニーテールをしているのだ。結構新鮮で、かなり可愛い。・・・鼻血が出そうじゃなかった。

「しかし、何でポニーテールなんですか？」

「いや、ポニテは男の夢だぞ？」

「ゆ、夢ですか？」

「うん。」

すまないが、俺はポニーテール派なんだよ。文句は受け付けない。ちなみに髪を整えるのを見ていて「ポ・ニ・テ！ポ・ニ・テ！」と心の中で叫んでいたのは内緒だ。

「さて、罰ゲームもとい願望も叶ったことだしそろそろ行くか。」

「願望だったんですか？まあ、行きましようか。」

（頼んでくれればいつでもしたのに。）

少し呆れ気味だが、気にしない。さて、食堂に行きますか。無論、アイリスは精霊化した状態だが。

・・・

「皆に紹介するにや。編入テストを受けて、オシリスレッドに編入

される事になったレイ君だにゃ。」

「.....」

あ、ありのまま、今、起こった事を話すぜ！

「月一テストと代表選抜戦が終わったその夕方に、レイの編入イベントが発生していた。」

どれだけイベントの進行スピードが速いのかわからねーと思うが、俺もどうになりそうだ。

何せ「遊戯王GX」ではそこそこの時期を空けていたのだから。作者のシナリオ作成の無鉄砲振りを味わったぜ.....

と、話を戻そう。原作と同じようにレイは俯いて黙っている。

下手に話すと自分が女の子と言う事がばれるからなあ。仕方ない。そして大徳寺先生の説明を受けた皆は驚きの声を隠せなかった。

「へえ。編入試験を合格したのか.....すごいな。」

「あの試験を合格したってことは、ラーイエローにすぐ上がれそうだな。」

「うほっ！いい男の娘。やらないか？」

上二つのはわかる。しかし、最後の一言を言った奴出て来い！レイは女の子だっ！！

ちよっとした波乱を残し、レイの歓迎会はスムーズに行われた。

ちなみにレイは十代の部屋に泊まる事になったらしい。隼人は？と言う人がいると思うが、この世界では無事に卒業したらしい。よかったな。

・・・

「じゃあ、三沢が代表戦に選ばれたってわけか。」

「ああ、十代も惜しい所まで行っただがなあ。」

レイの歓迎会が終わった後、俺は凧から代表選抜戦の結果を聞いた。まさか十代が敗れるとは・・・主人公補正はどこへ行った？まあ、大局にはあまり影響は無いと思うから恐らくは大丈夫だろう。あれ？そういえば

「なんでブルー生徒は出ていないんだ？」

「あれ？翔は知らなかったのか。ブルー生徒は代表戦のタッグマッチデュエルに選抜されているぞ。」

「何？」

「つまり、代表戦はライイエロー又はオシリスレッドによるシングルデュエルとオベリスクブルーによるタッグデュエルの2本なんだよ。」

・・・まさかここまで変わっているとは。相手側のシングルは万条目の可能性があるとして、タッグの方は誰が出るんだろ？不安だ。

「ちなみに俺達のほうのタッグマッチは吹雪さんと明日香になったぞうだ。」

な、なんだってー！！

まあ、兄妹だから息は合うかもしれないが・・・吹雪さんは元のデ
ツキを失っているからなあ。大丈夫だろうか？

「あ、それと。吹雪さんたちは何やら衣装を作っているらしいとい
う情報があったな。」

「どこで手に入れたんだ？その情報は。」

「秘密だ。まあ、一言いわせてもらうと俺の情報網は色を超越して
入ってくるから、聞きたい事があったら言ってくれ。」

「ああ、分かった。」

「じゃあな。」

そういうと凧は自分の部屋へ戻っていった。

盗聴器でも仕掛けているのか？そういうえば覗き（第十二話参照）の
時に、兄さんが大型カメラを持ってきていたが、アレも凧が調達し
て来たそうだった。

凧は立派な商人になれそうだな。友人の俺としては複雑な気分だが。

「さて、課題をちゃっちゃと終わらせてまた寝るとしますか。」

「時間も時間ですしね。」

「そうだな。」

そうして俺も部屋へ戻り、課題を済ませてから再び眠りに付いた。

・・・

そして翌日。今日は全校集会があり、代表の発表があった。やはり風の情報網通り三沢と吹雪さんと明日香が出る事になっていた。ちなみにマルタンは準決勝で敗退したそうだ。

「亮様。」

隣にいたレイがトロンとした声で呟く。ブルー寮に潜入して危険を冒されるより、こっちから紹介しておこうか。

「うちの兄さんがどうかしたの。」

「へっ！？そ、その・・・。」

俺の言葉にレイが慌てふためく。まるで小動物のようだ。

（かわいいねえ。）

（そうですね。）

俺とアイリスが心の中で呟く。うん、傍から見るとかわいいよなあ。まあ、レイの家族や友達は今頃大慌てしているだろうが。

「何なら、今日兄さんの所に案内しようか？」

「え、本当！？」

キラキラと目が光るレイ。完全に恋する乙女の目だな。

けど、兄さんは「YesロリータNoタッチ」と宣言していたから

(第十二話参照)、どういつ結末になるだろうか？第三者視点で存分に楽しませてもらう。

で、時間は飛んで放課後。

俺は約束通りレイを兄さんの所へ案内する事にした。

ブルー寮の生徒が不思議がっていたが、俺が丸藤 亮の弟である事を明かすと素直に案内してくれた。ネームバリューって凄いな。

コン、コン

とりあえずノックしてみる。

「誰だ。」

どうやら兄さんはいるようだ。

「兄さん。俺だよ。」

「翔か。今空けるからちよっと待っていてくれ。」

ガチャ

「どうした。翔。」

「ああ、実は。」

「亮様!!」

「のわぁ!!」

ドサッ

兄さんが部屋から出てきた所をレイが飛びかかった。兄さんは咄嗟の事で支えきれず、そのまま押し倒されてしまった。

「誰だ。君は？」

「亮様。本物の亮様だ。」

困惑している兄さんとまるで猫のように体を擦り付けるレイ。シュールだ。

「すまないが、俺は男に抱きつかれて嬉しがるような趣味は無いんだが……。」

兄さんの一言にレイがショックを受けている。ちょっと待てよ？

「兄さん。何度も俺に膝枕を要求していたような気がするが？」

「翔のは別だ。人間枕は買ってもない！」

肉親だから安心するって意味なのか？それとも……アツーチの趣味があるのか？

腐女子が沸きそうで怖いよ。

「りよ、亮様。僕は女の子です……！」

レイが何とかショックから立ち直ると、頭巾(?)バンダナ(?)まあ、いいいや。を解く。すると長い髪が現れ、一気に女性的になった。

「な、な、何だって……!!!!」

咄嗟に部屋を閉め、耳栓をする。亮のあまりの驚きの大声にレイがびっくりしていた。そりゃ、ここまで驚かれるとなあ。

(耳栓しても結構耳が痛いとは)

(うつつ。耳がキーンってなっています。)

「ま、まあ・・・なんだ。一旦部屋の中へ入ってゆっくり話そう。翔、お前も入れ。」

「はい、亮様」

「おじゃまします。」

・・・

「なるほどな。俺に憧れてここまで来たのか。」

「そうです!」

亮の確認にレイは勢い良く答える。

そして何やらレイが覚悟を決めたようだ。

「亮様。僕はあなたが好きです! つ、付き合ってください!」

「だが断る。」

・・・兄さんの一言に場が凍りつく。その言葉は有名だが、そこで使うか兄さんよ。

「君は恋をしてここまで来たと思うが、君の親兄弟や友人は君を心配しているはずだ。大切な人の気持ちを知ってやれないのなら、俺は即答で断らせてもらう。」

（と言う建前だが、俺には「YesロリータNoタッチ」という気高い信念があるんだ。ここで信念を捻じ曲げちまったら、多くの盟友に対して顔が立たなくなっちまう！！）

「わかった……。」

亮の言葉にレイは俯きながら呟く。このフラグはまさか……

「なら、決闘してでも亮様の心をいただくわ！！」

デュエルディスクを構え、殺気を漂わせながら目を血走りさせるレイ。

ヤンデレだったのか！！

「ほう。面白い……その勝負。乗らせてもらう。」

にやりと笑い、デュエルディスクを構える兄さん。絶対遊んでいるな。

「「決闘！」」

「僕の先攻、ドロー！私は手札から「恋する乙女」を攻撃表示で召喚！」

恋する乙女

効果モンスター 星2 光属性 魔法使い族

ATK400 DEF300

効果：このカードはフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り戦闘によっては破壊されない。このカードを攻撃したモンスターに乙女カウンターを1個乗せる。

ドレスを着た可愛らしい少女が現れた。少女チツク過ぎて個人的にはちょっと・・・な。

だが、スタッフが暴走するきっかけを作ったという意味では大好きだ！

「さらに、カードを2枚伏せターンエンド！」

レイ 手札3 場 モンスター1 伏せ2

恋する乙女 ATK400

予想通りといえばそこまでだが、・・・サイバーデッキにそれは自殺行為だぞ？

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

「さらに、手札から「サイバー・ドラゴン・ドライ」を召喚！」

サイバー・ドラゴン・ドライ

効果モンスター 星4 光属性 機械族

ATK1400 DEF900

効果：このカードが戦闘によって破壊された時、デッキから「サイバー」と名のつくレベル4以下の機械族モンスター1体を特殊召喚

することが出来る。このカード以外の「サイバー」と名の付くモンスターが自分の場に存在する場合、このカードは「サイバー・ドラゴン」として扱う。このカードが墓地に存在する場合、このカードの名称は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

・・・効果があつきりしたけど、恐ろしいな。

「俺は手札から魔法カード「融合」を発動！場の「サイバー・ドラゴン」として扱う「サイバー・ドラゴン・ドラゴン」と「サイバー・ドラゴン」と手札の「サイバー・ドラゴン」を融合！「サイバー・エンド・ドラゴン」を融合召喚！！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

3つ首のサイバードラゴンが現れた！いや、トリシューラも3つ首だし、究極嫁も3つ首だしな。別作品だが、キングギドラも3つ首だったな。

つて、初っ端からこれかよ！？手札消耗もすさまじいが、大丈夫なのだろうか？

「バトル！「サイバー・エンド・ドラゴン」で「恋する乙女」に攻撃！エターナルエヴォリュションバースト！！」

凄まじいエネルギーが3つ、恋する乙女に襲い掛かる。いくらなんでもやりすぎでは？

しかし、レイが静かになつていて不気味だ。

「かかった！セットカードオープン、罠カード発動！「デイメンション・ウォール」！！相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに

相手が受ける。よって、亮様。私の痛みを受け取って」

「な、しまった!!」

恋する乙女に直撃したエネルギー弾の衝撃波がレイに襲い掛かるはずだったが、後ろから兄さんに襲い掛かる。

「っぐ!!」

亮 LP4000 300

やはり対モンスター用の迎撃カードか。しかし、まさか「ダイヤモンド・ウォール」とは。

もし、あれが「魔法筒」だったらやられていたな。まあ、「恋する乙女」の効果は使えなくなるが。

「そして、「恋する乙女」の効果発動!このカードは攻撃表示である場合、戦闘によって破壊されない。さらに、このモンスターが攻撃された時、相手モンスターに乙女カウンターが乗るわ!」

き、来たか!原作の「遊戯王GX」でもスタッフが悪乗りしたとして有名だったシーンが。

そして辺り一面がお花畑になる。

「サイバー・エンド・ドラゴン様。酷い、酷いわ。」

「・・・」

恋する乙女がサイバー・エンド・ドラゴンに泣き落として攻めかかる。しかし・・・

(か、髪型がアフロかよっ!!)

(エターナルエヴォリューションバーストの直撃を食らいましたからね。くくく)

俺とアイリスは笑いをこらえるので必死だった。やばい。ふ、腹筋が死ぬ。

シリアスに見えてアフロだから乙女の夢が完全に壊れているよ。

しかもサイバー・エンド・ドラゴンは無表情なのが笑いのつぼに入る。

は、早く終わらせてくれ。俺の腹筋が死ぬ前に!

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

亮 手札0 場 モンスター1 伏せ2

サイバー・エンド・ドラゴン(乙女カウンター1) ATK4000

「僕のターン、ドロー!私は手札から装備魔法「キューピット・キス」を発動!「恋する乙女」に装備させるわ!」

キューピット・キス 装備魔法

効果:乙女カウンターが乗っているモンスターを装備モンスターが攻撃し、装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを受けた場合、ダメージステップ終了時に戦闘ダメージを与えたモンスターのコントロールを得る。

何やら天使が現れて、恋する乙女の頬にキスをする。

しかし天使よ。笑いをこらえながらキスするとは漢だな。

「バトル！」「恋する乙女」で「サイバー・エンド・ドラゴン」に攻撃！―途な思い！」

「サイバー・エンド・ドラゴン様」

恋する乙女がサイバー・エンド・ドラゴンの懐に飛び込むが、逆に吹き飛ばされる。

こ、これはひどい……。くくく。

レイ LP4000 300

「。。。。」

サイバー・エンド・ドラゴンが心配したのか、鼻の部分で恋する乙女をそつと撫でる。

「サイバー・エンド・ドラゴン様。私のために戦ってくださいますか？」

恋する乙女の言葉に、サイバー・エンド・ドラゴンの目が光る。
やべえ、造反しやがった！

「なら、サイバー・エンド・ドラゴン様でダイレクトアタックですう。う。」

「つく、セットカードオープン、畏カード発動！」「ガード・ブロック」！！相手ターンのダメージ計算時のみ発動可能。この回の戦闘ダメージを0にし、デッキから1枚ドローする！」

「なら、僕はカードを1枚伏せターンエンド！」

レイ 手札2 場 モンスター2 伏せ2

恋する乙女 ATK300

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

「俺のターン、ドロ―！…すまんサイバー・エンド・ドラゴン。俺は手札から魔法カード「ソウルテイカー」を発動！相手の場のモンスター1体を破壊し、相手はライフポイントを1000回復する。俺は「サイバー・エンド・ドラゴン」を指定！」

「なら、チェーンでセットカードオープン、速攻魔法発動！「神秘の中華なべ」！自分の場のモンスター1体を生贄に捧げ、その攻撃力が守備力のどちらかを選択し、その数値分だけライフを回復する！もちろん対象にするのは「サイバー・エンド・ドラゴン」で、攻撃力を選択！」

「っ！」

レイ LP300 4300

「そして「ソウルテイカー」は不発となるわ。…亮様。恋する乙女を甘く見ないでよ？」

にやり、とレイが不気味に笑う。

しかし、まさかここまで出来るとは…侮りがたいな。兄さんもこれには驚き、活を入れなおす。

「そうだな。俺は手札から魔法カード発動！「強欲な壺」！デッキからカードを2枚ドロ―する。」

「させないわ！セットカードオープン、カウンター罫発動！「マジックジャマー」！！手札を1枚捨て、相手の魔法カードを無効にし、破壊する！」

レイ 手札2 1

「つく、そこまであったとは。」

強欲な壺が破壊された事により、手札回復の方法がなくなってしまった。

まさか、このまま負けるのか？

「だが、保険をかけていて正解だった。セットカードオープン。魔法カード発動！「魔法再生」！！自分の墓地の魔法カード1枚を手札に加える。俺が選択するのは「強欲な壺」だ。」

げ、原作版の魔法再生。アレってチートクラスだよな。

レイもまさかの伏せが魔法カードだとは思っていなかったのか、苦笑しい顔になっている。

「そして手札から魔法カード発動！「強欲な壺」！！デッキからカードを2枚ドロウする！そして手札から「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロウし、その後2枚捨てる。」

一気に手札交換系が来たな。何つー運だよ。

「そして手札から「サイバー・ヴァリー」を攻撃表示で召喚。

サイバー・ヴァリー ATK0

効果を無効にするカードがあれば怖くないが、なかったら結構めんどくさいカードが来たな。「オーバーロード・フュージョン」「フラグか？

「そしてターンエンドだ。」

亮 手札1 場 モンスター1 伏せ0

サイバー・ヴァリー ATK0

「私のターン、ドロー！ふふ、私の恋が実る時がついに来た！バトル！「恋する乙女」で「サイバー・ヴァリー」に攻撃！一途な思い！！」

「つく、「サイバー・ヴァリー」の効果発動！俺は「サイバー・ヴァリー」をゲームから除外し、デッキからカードを1枚ドローする。そしてバトルを終了させる。」

サイバー・ヴァリーがゲームから除外され、バトルが終了した。結構危なかったな。

「ふふ。恋に障害は付き物よね。私はこのままターンエンド！」

レイ 手札2 場 モンスター1 伏せ0

恋する乙女 ATK300

「俺のターン、ドロー！俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

亮 手札0 場 モンスター0 伏せ2

「私のターン、ドロー！私は手札から装備魔法「ウェディングドレス

ス」を発動！「恋する乙女」に装備！！」

ウェディングドレス 装備魔法（オリジナル）

効果：このカードを装備したモンスターは相手の魔法・罠カードの対象にならず、効果を受けない。このカードを装備したモンスターが相手モンスターに攻撃した場合、ダメージステップ終了時にそのモンスターのコントロールを得る。

恋する乙女の服装がウェディングドレスに変更される。そして髪型も変わり・・・

昇天ペガサスMIX盛りに進化した！！

「（ブフォッ！！）」

ついに耐えられず、兄さんと俺とアイリスが思いっきり吹いてしま

う。てか、兄さんも我慢していたのか。

「バトルよ！「恋する乙女」でダイレクトアタック！一途な思い！！」

昇天ペガサスMIX盛りにした恋する乙女が兄さんに近づいてくる。・・・まさか、負けるのか？こんな恥ずかしい方法で。

「セットカードオープン、罠カード発動！「ヒーロー現参」！！相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手は自分の手札からカードをランダムに1枚選択する。

選択したカードがモンスターカードだった場合、自分フィールド上に特殊召喚する。違う場合は墓地へ送る。俺の手札は1枚。よって強制的にこのカードが選択される！モンスターカード「無敵鋼人

「ダイターン3」！」

青髪の少年が表れる。あれは・・・「破嵐 万丈」！

「ダイターンカムヒアー！」

その声と共に音楽が流れ、大型の戦闘機らしき物が現れる。
無論、音楽はオープニングテーマの「カムヒアー！ダイターン3」だ
が。

そして戦闘機が変形し、巨大ロボットへと形を変えた。

無敵鋼人 ダイターン3

効果モンスター 星8 光属性 機械族

ATK3500 DEF2800

効果：このモンスターは相手の魔法・罠カードの効果では破壊されない。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「ふふ、けど「ウェディングドレス」の効果でいただくわ。バトル
！「恋する乙女」で「ダイターン3」に攻撃！一途な思い！！」

（今思ってたんだが、一途って名前の割には連発しているな。）

（何だか、愛が安売りされている気分ですね。）

「ダイターン様〜」

恋する乙女がダイターン3に近づく。それに対し、ダイターン3が
何やら構え始めた。あの構えはまさか！

「俺はダメージステップにセットカードオープン、速攻魔法発動！
「リミッター解除」！！自分の場の機械族モンスターの攻撃力をタ
ーン終了時まで倍にする！」

ダイターン3 3500 7000

「日輪の力を借りて」
右手を前へ突き出し、円を描く。

「今必殺の」
右腕を思いつきり前へ突き出し、左腕を左腰の近くに持って来てポ
ーズをとる。

「サン」
額の斜め上に右腕を構え、斜め下に左腕を構え、額に光が集中する。

「アタックッ！！」
両手を広げ、光を開放する。1つに固まった光の玉が勢いよく発射
された。
そしてその光の玉が恋する乙女を捕獲する。

「きゃーっ！！」

「ああ、恋する乙女が！！」
恋する乙女がサンアタックに捕獲されている隙に、ダイターン3は
恋する乙女の真上まで飛んでいた。
そして兄さんが叫ぶ！

「その恋愛フラグを」「ダイターンクラッシュッ!!」「

ダイターン3が一気に降下し、恋する乙女を蹴り飛ばした。

レイ LP4300 - 2400

「……。」

ドサッ!

決闘が終わり、レイが倒れた。

「レイ!!」「

兄さんと俺が駆け寄ってみると、気絶しているようだった。

そして顔には一筋の涙が流されていた。

「……悪いが、俺にはこうするしかなかった。」

「兄さん。」

真面目な顔をした兄さんが無線機を取り出す。まだ持っていたのか、それ。

「吹雪か? すまないが、明日香に変わってくれ。……すまん、頼みがあつてな。ふむ、わかった。」

ガチャ

どうやら吹雪さんと明日香に連絡していたみたいだが、何を話したんだ?

「何を話してたの？」

「明日香にレイの面倒を見てもらうように頼んでな。」

「え？」

「餅は餅屋だ。明日香なら大丈夫だろ。」

なるほどな。それからほどなくして……。

こんこん

「亮？いるかしら。」

声からして明日香が来たらしい。

「ああ。空けているから入ってくれ。」

ガチャ

「レイって子を引き取りに着たけど……翔、あなたもいたの？」

明日香が驚いた顔をしている。まあ、余計な事をしてしまった気はするがな。

「ああ。レイに兄さんを紹介してくれって頼まれてな。」

「で、結果はこうなったのね。」

レイの姿を見て明日香はため息をつく。面目ない。その後、明日香がレイを引き取り問題は収まった。

そして・・・レイが故郷へ帰る日が来た。

見送りに来たのは俺と亮と明日香の3人だ。そのほかの連中には内緒にしている。この件を聞かれたとしても適当にはぐらかす予定だ。そしてレイが乗った船が出港した。

「レイ、気をつけるよ!」

「無理はするなよ。」

「またね、レイ。」

俺達がレイに別れの挨拶をする。

レイも手を振り、笑顔で大声を出そうとしていた。十代はいないし・・・まさか。

「また会いに来ますね。明日香お姉さま!」

「お姉さま!?!」

兄さんと俺がポカーンとした表情で明日香の方を見る。当の本人はため息をついていた。

「あの子の世話をしているうちに懐かれちゃって・・・それでお姉さまって呼ばれるようになったの。」

「さ、災難だったな。」

「元はといえばあなたのせいなのよ!?!」

兄さんの慰めの声に明日香が切れた。

「やばい、逃げる！」

「あ、待ちなさい！！！」

兄さんが身の危険を感じ、その場から逃げ出す。そしてそれを追う
明日香。

そして取り残される俺。

「。。。。。」

（まあ、今回は大変でしたね。）

アイリスから慰みの言葉が出る。気持ちはありがたいが

「何だかなあ。」

その言葉が港に響き渡った。

フィールド15：乙女と変態と伊達男（後書き）

むむむ・・なぜこうなった。の一言ですね。

ちなみに本来なら亮を変態化させてギャグ回にするはずだったので、レイがヤンデレっぽくなりました。

それと、夏・シチューエーションボタンは番外編でやるかどうかと思っています。自分の場合はどうしても文が長くなってしまつので・・・。

フィールド16：勇者と伝説と風竜（前書き）

ついに友好戦の開催です。

さて、どうなることやら・・・。

追記：一部変な部分があったので訂正しました。 o r z

フィールド16：勇者と伝説と風竜

レイの騒ぎから一週間後、ついにデュエルアカデミア本校対ノース校の友好デュエルが開始される事になった。

どうやってノース校の人たちは孤島であるデュエルアカデミアに来るんだろ？と疑問に思っていたら

1人の生徒が空を見上げて呟いた。

「なんだ？大きい飛行機だな。」

3機の飛行機が編隊を組んで飛んでいた。

そして飛行機の後部ハッチが開いた・・・まさか

「雪？いや違う。人だ！人が雪のように降ってくるぞ!？」

まさかのパラシュート降下かよ!？原作だと潜水艦から来たような気がするが・・・

つて、これじゃあノース校じゃなくてスカイ校のほうが似合っているんじゃないかな？

ちなみに何故あの生徒が雪って言ったのかというと、ノース校は白を基本とした制服を配布しているからだ。自衛隊みたく緑でいいと思うが。

その疑問をよそに、着々とノース校の生徒がデュエルアカデミアの地に降り立つ。

そしてパラシュートの安全ベルトを外し、身軽になる。ちよ、不法投棄はしないでくれ!

と思っていたら、ノース校の一部の生徒がパラシュートを素早く片

付けていた。

そして各個に席に座っていく。・・・お前らは軍隊か？

「これより、デュエルアカデミア本校対ノース校の友好デュエルを始めるノーネツッ！」

わーっ！！！！

クロノス先生の宣言と共に会場から大きな歓声が沸き起こる。

あそこまでする必要があるのはさて置き、デュエルアカデミアの人たちだけでなく、ノース校の人たちも観戦に来ているから驚いた。お前ら授業はどうした？

そう思い、近くにいたノース校の生徒に聞いてみると、

「今日の授業は友好デュエルを見る事で、課題はそれに関するレポート3枚を提出しないといけないそうです。」

なるほど。うちと同じだな。さて、俺達もしっかり観戦しておかねば。

しかしまあ、TV局が来ていたとはいえ・・・このカメラの量はすごいな。正直呆れてものも言えない。確か万丈目の兄が経営しているんだっけな？

(それだけ注目されているってことですよ。)

(なるほどな。)

「さて、第一試合はデュエルアカデミア代表「三沢 大地」対ノース校代表「万丈目 準」のシングルデュエルなノーネッ！」

ええっ！！

デュエルアカデミア生徒のほとんどが驚いた。俺も少し驚いたが。

「万丈目って修行にいったんじゃ？」

「恐らくそこでスカウトされたのかもしれないな。」

急いで駆け込んできたらしく、肩で息をしながら十代が聞く。すると同じように疲れ果てた凧が答える。って、お前ら何時からそこにいた！？

「十代、凧。お前ら何時の間に来たんだ？」

「今さっき来たばかりだ。」

「十代のデッキ改良に付き合っていたから、かなり遅れてしまった。」

なるほどな。まあ、十代の改良デッキは今回は見れないから置いて、いよいよ始まるようだ。

まずは三沢が現れた。

わーっ！！

「三沢、勝てよ！！」

「三沢君頑張って！！」

「負けるんじゃないぞ！！」

デュエルアカデミア生徒から声援が届く。もちろん俺達も応援をする。

「頑張れー！三沢ー！！」

「ファイトだ！三沢！」

「三沢、やっちまえー！！」

声援が次第に引き、落ち着いてきた頃に万丈目が現れるはずだった。

・

あれ？万丈目は？
すると

）

）

こ、このハーモニカ音はまさか満足さん！？

するとハーモニカを吹きながら、黒いコートを身に纏い万丈目が現れた。もちろんドヤ顔も忘れてはいない。

まさか万丈目が満足さん化してしまったとは。

「万丈目、どうしてこうなったかは聞かないが・・・お互いベストを尽くそう。」

「ああ、そうだな。」

三沢が少し驚きながら万丈目に話しかける。ちゃんとした会話は出ているらしく、ドッチボールにはなっていない。ここで「ヒヤッハー！踊れ三沢。死のダンスを！！」なんて言い出したら、真面目に吹き出していた。

「それでは、ロボトルーじゃなかった。デュエル開始なノーネ！！
（おじいさんの口調が移ってしまったノーネ。）

おい、今「ロボトルファイト」って言いかけたろ！？中の人の影響か。

まあ、それはさておき

「「決闘！」」

「俺の先攻、ドロー！俺は手札から「ランサー・ドラゴニユート」を守備表示で召喚！」

ランサー・ドラゴニユート DEF1800

竜が斧を持っている。と言った方がいいのか。いや、ドラクエなどのリザードマンと言った方が分かりやすいな。それが斧を構え、自身を守るうとしている。

といっても、攻撃力より守備量のほうが高いのは少し悲しい。まあ、「仮面竜」で引っ張って来れる閻属性ドラゴン族ではかなり貴重な存在だが。

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

万丈目 手札3 場 モンスター1 伏せ2

ランサー・ドラゴニユート DEF1800

基本的な戦略だな。さて、三沢はどう出るかな？

「俺のターン、ドロー！俺は手札の「ラダーロイド」「パトロイド」

「ドリルロイド」「ジェットロイド」を墓地へ送り、を墓地に送り、

「緊急4体合体 ガードダイバー」を特殊召喚！」

三沢のデュエルディスクから「緊急発進！ダイバーズ」が流れ出す。

「みんな、人命救助にベストを尽くすぞ!!」

「『はい!!』」

ライダーロイド」が上半身、「パトロイド」が股間部分に変形し、そして「ドリルロイド」が右足に、「ジェットロイド」が左足へと変形し、それぞれ合体されていく。

「ガードダイバー!!」

緊急4体合体 ガードダイバー ATK2400

「おお、ガードダイバー!! かつこいい!!」

十代の心はMAXハート。今度こいつに勇者デッキを貸してみようかな?

反応がかなり気になるし。

「『緊急4体合体 ガードダイバー』の効果発動! このカードが特殊召喚された時、相手の場の魔法・罠カードをすべて破壊する!」

「ハイドロキヤノンツ!!」

ガードダイバーの両肩に装備された放水機から水が発射されようとしていた。

「甘いぞ、三沢! セットカードオープン、カウンター罠発動!」天罰! 手札1枚捨てて効果モンスターの効果を無効にし、破壊する!!」

「な、しまった!！」

雷がガードダイバーに直撃する。

「うあああーっ!！」

「ガードダイバー!！」

体の各部分からショート音が聞こえ、ボロボロになっていた。そして片膝を付き、倒れ込む。そう、前のめりに。

「た、倒れる時でも前のめりに……。」

その言葉を最後に、ガードダイバーが爆発した。

「が、ガードダイバーが……お前の死を無駄にはしないッ!！」

三沢の声に決意が灯る。

「俺は手札から俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動!デッキからカードを3枚ドロ、その後2枚捨てる!そして「天使の施し」で墓地に送った「ヒタチロイド」のモンスター効果発動!このカードが手札、または場から墓地に送られた場合、デッキからカードを1枚ドロする。俺が送った「ヒタチロイド」は2枚。まずは1体目の「ヒタチロイド」の効果が発動し、1枚ドロする。そして2体目の効果でもう1枚ドロする。」

三沢の「天使の施し」から「ヒタチロイド」に続ける効果の多さは異常だな。仕込んでいるんじゃないか?と疑いたい。だって今さっ

きまで手札が2枚だったのにもう4枚まで回復しているんだぜ？

ざわ・・・ざわ・・・

「天使の施しのデメリットが無いだと!？」

「なんてカードだ。」

ノース校の生徒の中からざわめきが奔る。デメリットが逆手に取られ、完全に悪用されているしな。俺が相手をして無くと思う。

「そして俺は手札から「エクस्प्रेसロイド」を守備表示で召喚!」

エクस्प्रेसロイド DEF1600

来るか!ボンバーズが!

「そして「エクस्प्रेसロイド」に効果発動!このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「エクस्प्रेसロイド」以外の「ロイド」と名のついたモンスター2体を手札に加える事ができる!俺は墓地の「ヒタチロイド」2体を手札に加える!行くぞ、十代!俺は場の「エクस्प्रेसロイド」と手札の「ヒタチロイド」2体を墓地に送り、「猛獣三体合体 トライボンバー」を特殊召喚!」

「お前たち、ガードダイバーの敵討ちだ。本気で行くぞ!」

「「おう!」」

三沢のデュエルディスクから「吼えて発進。ボンバーズ!」が流れ出す。

「ヒタチロイド」2体が人型ロボットに変形し、左右の足となる。そして「エクस्प्रेसロイド」が胴体となり、「ヒタチロイド」の前頭部分が両腕となつて連結される。そして「エクस्प्रेसロイド」から顔が出てきた。

「トライボンバー!!」

猛獣三体合体 トライボンバー ATK2600

「くっ、やっぱりかっこいいなあ!!」

十代はキラキラした目でトライボンバーを見つめ、感激していた。うん、やはり今度貸そう。

「そして再び「ヒタチロイド」の効果発動!このカードが手札、または場から墓地に送られた場合、デッキからカードを1枚ドローする。まずは1体目の「ヒタチロイド」の効果が発動し、1枚ドローする。そして2体目の効果でもう1枚ドローする。」

て、手札消耗というよりも手札回復じゃないか?

しかし「ヒタチロイド」がOCG化したら即禁止になりそうだな。

「バトル!」猛獣三体合体 トライボンバー」で「ランサー・ドラゴニウト」に攻撃!ボンバーギムレット!!」

「うおーっ!死にさらせえ!!」

トライボンバーが物騒な事を言いながら、ランサー・ドラゴニウトを抜き手で襲う。

斧で必死に守ろうとするが、抜き手が斧を砕き体ごと貫いた。

そして爆風が万丈目に襲い掛かる。

「そして「猛獣三体合体 トライボンバー」のモンスター効果発動！このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える！よって万丈目に800ポイントのダメージを与える！！」

「っうぐ！」

万丈目 LP4000 3200

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

三沢 手札2 場 モンスター1 伏せ1

猛獣三体合体 トライボンバー ATK2600

1ターン目でここまで出来るのは凄いの一言だと思う。
無論「ヒタチロイド」のおかげなのだ。

「俺のターン、ドロー！手札から「ポケ・ドラ」を守備表示で召喚
！」

ポケ・ドラ DEF100

黄色の小型ドラゴンが現れた。手には栗らしき物を持っており、それを食べて火を吐いている。・・・丸っこくて可愛いなあ。万丈目、そいつをこっちによこせ！！

「そして「ポケ・ドラ」の効果発動！デッキから「ポケ・ドラ」1枚を手札に加える。」

ステータスはともかく、中々面白い効果を持っているな。

「さらに、手札から魔法カード「クロス・ソウル」を発動！相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動！このターン自分のモンスターを生贄する場合、自分のモンスター1体の代わりに選択した相手モンスターをリリースしなければならない。このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事は出来ないがな。

俺は貴様の場の「猛獣三体合体 トライボンバー」を選択！そして「トライボンバー」と「ポケ・ドラ」を生贄に捧げ、「タイラント・ドラゴン」を生贄召喚！！」

「く・・・マイトガイン。後は頼むぜ！」

「トライボンバー！」

そう言い残し、トライボンバーとポケ・ドラは生贄に捧げられ、巨大な竜が現れた。

その名の通り、とても凶暴な竜が。

タイラント・ドラゴン ATK 2900

「「クロス・ソウル」の効果で残念ながら攻撃する事は出来ない。カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

万丈目 手札1 場 モンスター1 伏せ1

タイラント・ドラゴン ATK 2900

そういえば万丈目っていえば「アームド・ドラゴン」シリーズが主力だったはずだが・・・

まだ手札に来ていないのか？

「俺のターン、ドロー！俺はカードを1枚伏せ、手札から魔法カード「天よりの宝札」を発動！お互いに手札が6枚になるようにデッキからカードをドローする！俺の手札は1枚！よって5枚ドローする。」

「俺も1枚・・・5枚ドロー！」

お互いの手札が補充され、停滞しそうになっていた場に活力が戻った。

「行くぞ、三沢！」

「ああ！そして俺は手札の「スチームロイド」1体と「エクस्प्रेसロイド」2体を墓地に送り、「勇者特急 マイトガイン」を特殊召喚！！」

三沢のデュエルディスクから音楽が鳴り出す。

BGMは「吼えて発進。ボンバース！！」。と言うことは、簡易変形か！

「チェンジ、マイトガイン！」

「スチームロイド」の後部に格納されていた2体の「エクस्प्रेसロイド」が発進し、腕の形に変形する。「スチームロイド」も変形し、後部が下半身になる。そして「スチームロイド」の前頭部分が折れ、胸の部分に覆いかぶさる。それと同時に「エクस्प्रेसロイド」が「スチームロイド」の左右に合体し、腕となる。そして仕上げに頭部が現れ、その目が輝く。

変形が終わると同時に音楽も鳴り止む。

「こ、これが噂のマイトガインか。!!」

ノース校の生徒がマイトガインの姿を見て驚く。

「そう、その通りだ!」

その声に、三沢が答える。

「銀の翼に」

マイトガインが前に出て、右腕を左前に力強く出す。

「希望のぞみを乗せて」

今度は左肩を重心に、前に出る。

「灯せ平和の青信号!」

自分の頭部に装備された列車の信号機を模ったパーツに右指を指して、強調する。

「勇者特急マイトガイン。定期通りにただいま到着!!」

その場で一回点し、ポーズを取る。

勇者特急 マイトガイン ATK2800

「さらに、セットカードオープン!「オーバードロード・フュージョ」を発動!!俺は墓地の「スチームロイド」1枚と「エクस्प्रेसロイド」2枚をゲームから除外し、「勇者特急 ブラックマイトガイン」を融合召喚!!」

「マイトガイン」と同じ過程で変形が終わると同時に音楽も鳴り止む。

マイトガインのカラーリングを黒くし、頭部デザインを「マジンガ1Z」風に変更した特別機。いや、本来なら敵として存在するはずだった勇者が再び、オリジナルと共闘している。

「黒い力を」

ブラックマイトガインが前に出て、左腕を右前に力強く出す。

「正義に変えて。」

今度は右肩を重心に、前に出る。

「灯せ悪への赤信号！」

自分の頭部に装備された列車の信号機を模ったパーツに左指を指して、強調する。

「勇者特急ブラックマイトガイン。声援を受けて只今見参！！」
その場で一回点し、ポーズを取る。

勇者特急 ブラックマイトガイン ATK2800

「すっげー！あの時と同じパターンだけど、一気に2体。しかもヒーローとダークヒーローの夢の競演は心が躍るぜ！」

十代・・・いや、もう突っ込むのはよそう。

「しかし、あれだけ連続で出せる三沢も凄いな。」

「ああ、そう思う。」

凧の言葉に俺も同意する。

三沢が主人公補正を受けてるんじゃないか？

「ああ！行くぞ、ブラックー！！」

「了解だ！ガインー！！」

マイトガインとブラックマイトガインが腕を組み、それを外すと一目散にタイラント・ドラゴンに攻撃を仕掛ける。

「バトル！「勇者特急 マイトガイン」で「タイラント・ドラゴン」に攻撃！！そして「勇者特急 ブラックマイトガイン」の効果発動！！自分の場の「マイトガイン」と名の付くモンスターが相手モンスターに攻撃したとき、「ブラックマイトガイン」の攻撃力分だけ攻撃力をアップさせる！さらに、「マイトガイン」の効果発動！相手モンスターを攻撃する場合、このモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする！！」

勇者特急 マイトガイン ATK2800 3800 6600

「「「6600!?!」」」

ノース校の生徒が驚いていた。下手なモンスターだった場合、この一撃でケリがつくからなあ。ちなみにこの攻撃が通れば、三沢の勝ちだ。

「「（ブラック）動輪剣ツー！！」」

マイトガインとブラックマイトガインが左の腰部分に納められていた剣を取り出し、同時に構える。

「ガイン、私が先に仕掛ける。後に続いてくれ！」

「了解!!」

ブラックマイトガインが背中のスラスターでタイラント・ドラゴンに接近する。

そしてマイトガインも背中のスラスターで空を舞う。

「横一文字切りイ!!」

「うわーっ!!」

ブラックマイトガインがタイラント・ドラゴンに切りかかるようにした時、万丈目が笑っていた。っ、まさかあの伏せカードは迎撃用罠か？

「三沢・・・焦ったな？セットカードオープン、罠カード発動!」「バーストプレス」!!自分フィールド上のドラゴン族モンスター1体を生け贄に捧げ、効果発動!生け贄に捧げたモンスターの攻撃力以下の守備力を持つ表側表示モンスターを全て破壊する!俺は「タイラント・ドラゴン」を生贄にし、守備力2900以下のモンスターを全て破壊!!」

「っ、しまった!!」

「く、三沢・・・頑張れよ。うわあーっ!!」

タイラント・ドラゴンが命を掛けて出したプレスによってマイトガインとブラックマイトガインが破壊される。その後、タイラント・

ドラゴンも倒れ、消えてしまった。

「マイトガインとブラックマイトガインが一瞬で……。つく、カードを2枚伏せターンエンド！」

三沢 手札0 場 モンスター0 伏せ3

一気に三沢の場が吹き飛んでしまい、今まで急いでいたツケが来てしまった。

「俺のターン、ドロー！三沢……。このターンでケリをつける。スタンバイフェイズ時に、墓地の「ミンゲイドラゴン」の効果発動！自分の場にモンスターが存在しない場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる！」

ミンゲイドラゴン ATK400

ドラゴンにしては一風変わったなモンスターが現れた。このモンスターはダブルコストモンスターでもあるから、かなり強かったりする。その場合は、ドラゴン族デッキで組む事をお勧めするが。

「そして俺は手札から「風の幼竜 シロン」を攻撃表示で召喚！」

「ガガッ？」

風の幼竜 シロン

効果モンスター 星1 風属性 ドラゴン族

ATK300 DEF200

効果：手札2枚を墓地へ送り、このカードを生贄に捧げる。デッキまたは手札から「伝説の風竜 シロン」を特殊召喚する。

ぱたぱたと背中の中を飛び、頭にはゴーグルを被っており、体は白が基本で青も混じっているネズミ・・・レジェンズじゃねーか！？

「そして「風の幼竜 シロン」の効果発動！手札2枚とを墓地に送り、このカードを生贄に捧げる。デッキから「伝説の風竜 シロン」を特殊召喚する！シロン、カムバツク！！」

万丈目の言葉と共に、一つの物体が現れる。形状で言うならアイスクリームのコーン状といえば分かりやすいだろうか？ってありゃタリスポッドじゃねーか！？

そしてシロンはタリスポッドに入り、結晶化する。そして

「リポーンツ！！」

その言葉が引き金となり、結晶が光り始める。

そして一匹の竜が現れた。そして一筋の風が吹き荒れる。

「いい風だ。なあ、準？」

金色の髪を生やし、布の手袋をした白と青の竜が現れる。

あのネズミがそのまま巨大化？もとい、竜へとなったと言ったほうが正解か。

そして、万丈目に話しかけた。・・・こいつも精霊かよ。

「ああ、そうだな。シロン。」

シロンをまっすぐ見つめ、そう答える万丈目。なんつーか、変わったな。

伝説の風竜 シロン

効果モンスター 星8 風属性 ドラゴン族

ATK2500 DEF2000

効果：このカードは相手効果モンスターの効果では破壊されない。

1ターンに1度、場のすべての魔法・罫カードを元の持ち主の手札に戻すことが出来る。このカードが風属性以外のモンスターに攻撃した場合、相手モンスターの攻撃力は半分になる。

「伝説の風竜 シロン」の効果発動！場の全ての魔法・罫カードを持ち主の手札に戻す！いけえシロン！」

「ウイングツトルネード!!!」

シロンが羽ばたき、大きな旋風を巻き起こす。

その風に耐え切れず、伏せられていたカードが全て持ち主の手札へと吹き飛ばされてしまった。

「つく！（「ドレイン・シールド」と「聖なるバリア ミラーフォース」と「マジック・ジャマー」が）」

「さらに手札から装備魔法「団結の力」を発動！シロンに装備させる!!!」

伝説の風竜 シロン ATK2500 4100

「4100!!!」

観客からどよめきが聞こえる。

・・・残念だが、ここまでか。

「バトル！」「伝説の風竜 シロン」でダイレクトアタック！」

「ウィングツトルネード!!!」

再びシロンが羽ばたき、大きな旋風を巻き起こす。

その風に耐え切れず、三沢が吹き飛ばされる。

「つく・・・うわぁー!!」

三沢 LP4000 - 100

「そこまで！勝者はノース校代表「万条目 準」なノーネ!!!」

わっー!!

「万丈目君、よくやった。」

「万丈目。お前がいる限り負ける気がしないぜ。」

「三沢、中々面白い物を見せてもらったよ。」

「三沢君、次は頼むぜ！」

三沢が立ち上がるうとする、万丈目が近づき手を差し伸べる。

「三沢、またやろう。」

万丈目の手を取り、三沢が立ち上がる。

「ああ、今度は俺が勝たせてもらおう！」

「っふ、その時が楽しみだ。」

そして万丈目は戻って行った。その後、三沢も控え室へと戻ってい

った。

「まさか万丈目がここまでやるとは……。」

凧の言葉に俺と十代が肯定する。

三沢に除去魔法などが来なかったのも敗因だが、万丈目の戦略も中々面白い物だった。

「けど、もし今度戦ったら三沢が勝つと思うぜ！」

「かもな。」

万丈目の手を取った三沢の目はリベンジに燃えていた。あの様子だと、デッキ研究をさらに進めるだろうな。

「次は吹雪さんと明日香対誰だっけ？」

「さあ？」

実を言うと、次のタッグマッチデュエルの対戦相手の情報がまだこちらには流れていなかった。だから十代の声に対して、答える事ができない。

「ほい。これで分かるぞ。」

そう思っていると凧が一枚の紙を差し出した。どこから手に入れたんだ？これ。

「情報つてのは、あるところにはあるんだよ。」

そうか。まあ、深くは聞かないほうがいいだろう。
で、対戦相手は・・・マジか!!

・・・

「じゃあ、行ってくるよ。亮、マルタン君、三沢君。」

「行ってきます。亮、マルタン君、三沢君。」

吹雪と明日香が控え室から出ようとしていた。
次のタッグマッチデュエルに出場するためだ。

「ああ、行って来い。」

「頑張ってください!」

「俺の代わりに勝って下さい。」

「ああ。三沢君の無念を晴らしてくるよ。」

「応援よろしくね。」

亮、マルタン、三沢が応援する。

そして、吹雪と明日香がそれに答え、会場へと足を運んだ。

・・・

「ふふ、優。ボクたちの出番だね。」

「そうだな・・・って、有栖。頼むから抱きつかないでくれ。」

有栖と言われた女の子に抱きつかれ、少し困惑している優。といっても、迷惑そうな顔では無さそうなのでまんざらでもない様だ。

「お前ら、そろそろ時間だからさっさと行ったほうがいいだろ？」

優と有栖のいちゃつきっぷりにゲッソリしながら言う万丈目。

「じゃあ、万丈目。行ってくる。」

「じゃあね、万丈目くん。」

そう言うと、優と有栖は会場へと足を運ぶ。

「ふう……。。」

（疲れているみたいだな？ 準。）

万丈目のため息にシロンが現れた。無論、風竜状態でだが。

「ああ。まったく、あいつらを見ていると気苦労が絶えん。」

（人間つてのも大変なんだな？）

「お前が羨ましいよ。」

（そうか？）

「ああ。」

万丈目がぐったりした状態で、あの2人を見ていた。

「さて、優。有栖。お前達の実力を見せてもらうぞ？」

次回予告

「私達に勝てるかな？」

「俺達の実力を見せてやる！」

「な、シンクロ召喚だと!?!」

「これがボク達の愛の力だ!断空光牙剣!やってやるぜーッ!?!」

「ツインドライブッ!?!」

次回「恋と幻影と絆」

「さらばだ!レッドアイズッ!?!」

フィールド16：勇者と伝説と風竜（後書き）

と言うことで、三沢対万丈目でした。

え、サンダーじゃないかって？はい。この世界では見栄を張っていないため、ただの万丈目になっています。

どっちかと言うと気苦勞なキャラになりそうですね。

ちなみになぜシロンを出したかと言うと・・・万丈目ってやっぱりドラゴン系の使い手というイメージが定着しているので。初期案だと「サイレント・マジシャン」などのLV系モンスターを使う予定でした。

さて次は、ZET様の作品「遊戯王デュエルモンスターズGX」転生者による転生記「」とのコラボ作品にさせていただきます。が、前回のガイウス様とのコラボ作品みたいにキャラクターの性格などが変になっているので、「平行世界の人間」だと思って読んで頂ければ幸いです。

なお、デッキとモンスターを変える予定ですのあしからず。それでは。

フィールド17：恋と幻影と絆（「遊戯王デュエルモンスターズGX」転生者による

今回はZET様の「遊戯王デュエルモンスターズGX」転生者による転生記」とのコラボ作品です。

注意：性格がかなり違う、デッキも変更されているといった点がありますので、どうかその辺はご了承ください。

・・・作者はシンクロをあまり使わないので、書くのが大変でした。それと、実は1度気落ちしていきキャラクターの書き方がおかしくなっている部分もあるかもしれませんが、どうかご勘弁を。

追記：ライフが少し間違っていたので訂正しました。ついでにオリカの名前も変更しました。孝さん。ありがとうございます。

「さて、第二回試合は・・・デュエルアカデミア代表「天上院 吹雪」「天上院 明日香」対ノース校代表「天空 優」「神崎 有栖」のタッグマッチデュエルなノーネー！」

わーっ！！

「そういえば、俺。吹雪さんの決闘見るの初めてなんだけど。」

「周一決闘でも姿を見なかったしな。」

「そうなのか？」

「ああ。」

十代の疑問に凧が答える。じゃあ、どんなデッキを使うのか分からないのか。

そう思っていると、ノース校の方から1組の男女が出てきたが・・・いちやいちゃしているよ。といつても女子が男子に猛烈にアタックしているだけだが。

「ふふ、優。ボク達、夫婦決闘を皆に見せる時が来たね。」

「ちょっと待て。まだ結婚していないだろうが。」

「まあ、いいじゃないか。すぐに実現するんだし。」

「はぁ・・・。まあ、いいや。（ある意味間違いないからなあ。）」

・・・あれ？何だろう。ここ決闘場だったよな？
と思っていると、ノース校の応援席からアイマスクにふんどし二丁
の男子が数名現れ

「しつと団！！」

の旗を掲げていた。

「ひとつ世のため！」

「ブ男のため！」

「悪と戦い今日もゆく！」

「愛と正義と希望の戦士！！」

「しつと団参上！！」

と、堂々と宣言しやがった。

へ、変態だー！！おまわりさん、こつちです！！
ノース校の方から悲鳴が聞こえる。・・・同情します。
すると、先生方が現れ、すぐに取り押さえられた。

「こら、君達！やめないか！」

「あ、何をする！HANA SE！！！」

「その言い訳は布団の中で聞いてやるから。な！」

「アッー!!」

そうして「しつと団」と名乗った変態共は去っていったが。今、熊先生がいたろ!!絶対いたろ!!

俺もホイホイ布団の中へ誘導されないように気を付けねば・・・。

「あーっ。一部変な生徒がいたような気がしますーが、続けるノーネ。」

クロノス先生が困惑しつつも続けようとする。
お気持ちお察しします。

「続いては・・・」「ふははははっ!」「オッホホホッ!」・・・今度は何なノーネ!？」

続けようとした矢先、高笑いと共にまたもや変態が現れたようだ。アカデミア生徒とノース校、そしてTVカメラが声をした方へ向く。こ、この音楽は・・・!!

「彩りましょう、食卓を!」

「皆で防ごう、つまみ食い!」

「常温保存で愛を包み込む!」

「カレーなる決闘者、快盗レトルト只今参上!!」

「咲かせましょう、お米の花!」

「散らせましょう、悪の花！」

「天より舞い降りた、美女決闘者！」

「快盗レトルトレディ、只今参上！！！」

「ぶーらぶらー！」でおなじみの変態仮面の仮面が変わった男性と結構露出度がすごい女性が現れた。しかし、声でバレバレだ。吹雪さん。明日香・・・お前ら一体何をしているんだ！？正直、頭が痛い。誰だ、こんな入れ知恵をやった奴は？

「わあー。かつこいいー！！ねえ、優！今度ボク達もやってみようよ」

「・・・俺に死ねと？」

どうやらノース校代表の女子に受けたようだ。もっともその彼氏（？）はゲツソリしていたが。

「うおー！すげえかつこいいぜ！！あの人たちは一体誰なんだ！？」

十代は感激しながら叫んでいた。それは本気で言っているのか！？何っ！か、ノース校のあの女子と十代を組ませたら凄いカオスになりそうだよ。誰かにストッパー役を頼まねば

「・・・今さっきの「しつと団」の方が俺は好きだな。」

風エ・・・気持ちは分からなくはないが、それは言わないお約束だ。

「レトルトかつけーッ！！！」

「あれ？吹雪さんは!？」

「あのレトルトレディの衣装・・・ごくり!」

「明日香さん？明日香さん!？」

そしてこの観客の声である。お前ら・・・気づいていないのか。

（何っ！か。完全にカオスだな。）

（そうですね。）

アイリスが苦笑しながら答える。まともな人がいてくれて俺は嬉しいよ。

「うぬぬ！これは・・・何とアカデミア代表選手の名前が彼らに変わっていたノーネ!！」

「『えーっ!』『!』『!』」

ここにいるほとんどの人が驚いていた。さて、正体に気づいた人数を集計してみたいな。

「まあ、さておき・・・ごほん！なら急遽変更しまして、デュエルアカデミア代表「快盗レトルト」「快盗レトルトレディ」対ノーネ校代表「大空 優」「神崎 有栖」のタッグマッチデュエルを始めるノーネ!！」

わーっ!!!

歓声が今さっきよりも沸く。ノリノリだな。ここまでくると。

「私達に勝てるかな？」

レトルトが挑発すると

「ボク達の実力を見せてやる！」

と返された。どうやら準備はいい様だな。

「それでは決闘開始なノーネ！！」

「」「」「決闘！！！！」「」「」

「ぼ、私のターン、ドロー！私は手札から「サイレント・ソードマン LV3」を攻撃表示で召喚！」

サイレント・ソードマン LV3 ATK1000

長剣を持った少年が現れる。

何でレトルトもとい、吹雪さんが「LVシリーズ」を持っているんだ！？

まあ、気にしない事にしよう。

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

レトルト 手札3 場（共用） モンスター1 伏せ2

サイレント・ソードマン LV3 ATK1000

「優、ボクが先に行くね！ボクのターン、ドロー！ボクは手札から「TG ストライカー」を攻撃表示で特殊召喚するよ！」

TG ストライカー ATK 800

「『TG?』」

初めて聞くカテゴリーモンスターに驚く観衆。だが、俺は別の意味で驚いていた。

まさか、シンクロを使ってくる奴が出てくるとは……。頭痛がする。

俺の「ガーディアン」デッキも一応はシンクロ出来るように調整してあるが、使わなかった理由はただ1つ。

もし使ったとして、それがユベルや子安（光の人）にバレてしまつたら？ 奴らは必ず使つたろう。何せ、現実でもシンクロ召喚はそれまでの環境をなぎ払い、デュエル的高速化に繋がるほどの強さを秘めているからである。ブラックローズやトリシューラ、ゴヨウやブリューナクといったトラウマもここから始まつた……。それはさておき、ここからは腹を据えて見てみよう。

「『TG ストライカー』は、『サイバー・ドラゴン』と同じ特殊召喚条件を持っているんだ。さらに、レベル4以下のモンスターが特殊召喚したとき、手札から『TG ワーウルフ』を特殊召喚する事が出来る！」

TG ワーウルフ ATK 1200

「1ターンに2体!？」

会場がざわめく。この展開力がTGの恐ろしさ……。前世ではお世話になりました。

「そして手札から『TG サイバーマジシャン』を攻撃表示で召喚
」!

TG サイバーマジシャン ATK0

「攻撃力0?」

「何をするつもりだ?」

「先の2体を生贄にして最上級を出したほうがいいのでは?」

再び会場がざわめく。最後の意見は分からなくはないが……。それはシンクロという概念を知らないから言えるのだ。

「そして「TG サイバーマジシャン」の効果発動!自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを「TG」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ素材とする場合、手札の「TG」と名のついたモンスターを他のチューナー以外のシンクロ素材にする事ができる!僕は場のレベル1チューナー「TG サイバーマジシャン」を手札のレベル4「TG ラッシュライノ」にチューニング!」

「「チューニング!?!?!」

サイバー・マジシャンが光となり、一つの輪になる。そしてライノラッシュユがその輪に包まれ、星になる。

1+4=5

「万を超える知恵を持ちし賢者よ!

その英知でボク達を導いて!!

シンクロ召喚!TG ハイパー・ライブラリアン!」

TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400

本を持つたいかにも読書人らしき人物が現れる。

キター!!!チートシンクロモンスターの1体。

こいつのおかげでどれだけシンクロが強くなった事か。

「うおすげえ!!!」

「何なんだアレは?」

「か、かつこいいい……。」

観客から驚きの声が聞こえる。

何せ未知の召喚方法を目の前で見る事になったからなあ……。

「すっげー!!!何なんだアレ!?!」

「面白い召喚方法だね。」

「……面白いが、次はどうするつもりだ?」

「何か嫌な予感がするわ。」

十代が驚きっぱなしである。吹雪さんは感心し、それとは対照的に
凧や明日香は注意深く観察していた。

まあ、このカラクリを解くのには一苦労すると思うがな。

「さらに!私はレベル2チューナー「TG ストライカー」をレベ
ル3「TG ワーウルフ」にチューニング!」

今度はストライカーが光となり、2つの輪になった。そしてワーウ
ルフがその輪に包まれ、星となる。

2 + 3 = 5

「光を導く魔術師よ、その慈愛でボク達を導いて!」

シンクロ召喚！！TG ワンダー・マジシャン！！」

TG ワンダー・マジシャン ATK1900

出たな、シンクロチューナー！これと「フォーミュラー・シンクロン」には何度痛い目を見た事か。そしてこの「TG ワンダー・マジシャン」は初登場時に男声という黒歴史があるんだよなあ・・・。

「ふーっ。やっぱりシンクロの台詞を考えるのは大変だね。」

カミングアウトしやがった！？
いいのか、それ？

「えーと、「TG ワンダー・マジシャン」の効果発動！このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、場の魔法・罠カードを1枚破壊する！ボクは右の伏せカードを破壊するよ！！」

「つく！（攻撃の無力化が）」

はああああ！と気合一発、伏せカードを殴り壊した。
絶対マジシャンじゃねーだろ！！それは格闘家のやる事だ。

「そして「TG ハイパー・ライブリアン」の効果発動！シンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロ―する！」

「何イ！！」

観客席から驚きの声が聞こえる。

この能力が結構めんどくさい。相手のシンクロ召喚でも自分の手札を回復できるしな。

「ボクはカードを1枚伏せてターンエンド！」

有栖 手札2 場(共用) モンスター2 伏せ1

TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400

TG ワンダー・マジシャン ATK1900

「私のターン、ドロ―！スタンバイフェイズに兄さんの場の「サイレント・ソードマン LV3」の効果発動！このモンスターを生贄に捧げ、私のデッキから「サイレント・ソードマン LV5」を特殊召喚する！」

少年が成長し、青年へと姿を変えた。

サイレント・ソードマン LV5 ATK2300

「私は手札から「サイレント・マジシャン LV4」を攻撃表示で召喚！」

見習い魔術師と言えそうな少女が現れる。ちなみに服装は白をベースにしているのでOCGタイプの物だろう。

サイレント・マジシャン LV4 ATK1000

「さらに私は手札から魔法カード「レベルアップ！」を発動！フィールド上に表側表示で存在する「LV」を持つモンスター1体を墓地へ送り発動する。そのカードに記されているモンスターを、召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する！私は「サイレント・マジシャン LV4」を選択！」

「させないよ！セットカードオープンカウンター罠発動！「魔宮の賄賂」！！魔法・罠カード1枚の効果が無効にし、破壊する！その後相手はカードを1枚ドロウするけどね。」

「しまった！！（コストでサイレント・マジシャンが）」

レベルアップが防がれ、コストとして送られたサイレント・マジシャンはそのまま墓地へ送られた。

レトルトレディ、もとい明日香の表情が暗くなる。

「けど、カードを1枚ドロウさせてもらうわ！私はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

レトルトレディ 手札3 場（共用） モンスター1 伏せ3

サイレント・ソードマン LV5 ATK2300

「サイレント・マジシャン」のレベルアップ失敗は痛かったな。まあ、あのモンスターは結構厄介だから仕方ないが。

「俺のターン、ドロウ！俺は手札から魔法カード「ワン・フォー・ワン」を発動！手札のモンスター1枚を墓地に送り、デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する！俺はデッキから「チューニング・サポーター」を守備表示で特殊召喚！」

鍋を被ったと言えいいのか？まあ、そんな感じの機械族モンスターが現れた。

チューニング・サポーター DEF300

ざわ・・・ざわ・・・

「「ワン・フォー・ワン」面白いカードだな。」

「少なくとも、半上級モンスターを出す事が出来るのはおいしいな。」

「まあ、レベル1でいいモンスターがあまり無いのは残念だけどな。」

意外と「ワン・フォー・ワン」の受けはいいらしい。まあ、手札の「ネクロ・ガードナー」などを墓地へ落としたり、落としたモンスターを「死者蘇生」で復活させるといったコンボも可能だしな。

「さらに、「アンノウン・シンクロン」を攻撃表示で召喚！」

少し大型の丸い物体が現れる。このカードの効果って、意外と強いんだよな。

アンノウン・シンクロン ATK0

「そしてレベル1チューナー「アンノウン・シンクロン」をレベル1「チューニング・サポーター」にチューニング！2つの星々が混じり合う時、更なる希望が舞い降りる…シンクロ召喚！来い、シンクロチューナー！フォーミュラ・シンクロン！」

アンノウン・シンクロンが光となり、1つの輪となる。そしてチューニング・サポーターを包み込み、星となった。

ブウォーン！とまるでF1みたいな格好と排気音を鳴らし、颯爽と姿を現した。

フォーミュラー・シンクロン DEF1500

出たな。様々な環境で大活躍中のフォーミュラー・・・敵に回すと本当に厄介なんだよな。

「フォーミュラー・シンクロン」の効果発動！このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロウする！さらに「チューニング・サポーター」の効果発動！このカードがシンクロ素材として使用され、墓地へ送られた場合、デッキからカードを1枚ドロウする！」

「そしてボクの「TG ハイパー・ライブラリアン」の効果発動！シンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロウするよ！」

何てこつた・・・優は2枚、有栖は1枚の補充か。これは結構厄介だぞ？

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

優 手札3 場（共用） モンスター3 伏せ3
TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400
TG ワンダー・マジシャン ATK1900
フォーミュラー・シンクロン DEF1500

「私のターン、ドロウ！手札から速攻魔法「サイクロン」を発動！優君の右側の伏せカードを破壊させてもらおう！」

「残念だが、ただでは転ばない！右のセットカードオープン、速攻魔法発動！「サイクロン」！レトルトの伏せカードを破壊させてもらおう！」

「ふふ。悪いけどそれは失敗だったようだね。セットカードオープン、永続罨発動！「安全地帯」！フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。私は「TG ハイパー・ライブラリアン」を選択！そしてこのカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する！」

「なら、「TG ワンダー・マジシャン」の効果発動！自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる！ボクはレベル5チューナー「TG ワンダー・マジシャン」をレベル5「TG ハイパー・ライブラリアン」にチューニング！」

「何イ！」「そんな！」

そう、「フォーミュラー・シンクロン」と「TG ワンダー・マジシャン」は相手ターンのメインフェイズのみだが、対象を取る効果ならシンクロして回避するという方法が取れるのだ。

ワンダー・マジシャンが光り、5つの輪になる。そしてハイパー・ライブラリアンがその輪に包まれ、星になる。

5 + 5 = 10

「剣と銃、2つの武器が重なり合う時、最強の戦士が現れる！その力を持ってボク達を勝利へ導いて！」

シンクロ召喚！TG ブレードガンナー！！」

剣銃の名に相応しい武器を持ち、次元を超えて現れた。

しかし・・・だ。頼むから銃を乱射しながら出てこないでくれ！！

TG ブレードガンナー ATK 3300

「ここ、攻撃力3300!?」

吹雪さんや明日香、そして観客の方も呆然としている。

まあ、青眼の白龍の攻撃力を上回っているからなあ。

シンクロ召喚ではこれが日常茶飯事だから恐ろしい。

「どうやら・・・私は触れてはいけない物に触れてしまったようだね。だが、それでもまだ諦めはしない！バトル！サイレント・ソードマン LV5」で「フォーミュラー・シンクロン」に攻撃！

サイレント・ソードマンがフォーミュラー・シンクロンに切りかかる。

「甘い！セットカードオープン、畏発動！「くず鉄のかかし」！相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「つく！」

そこへ突如現れたかかしによって、サイレント・ソードマンの攻撃が防がれた。

「そして「くず鉄のかかし」は再びセットされる。」

「中々面倒だね。私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

レトルト 手札2 場（共用） モンスター1 伏せ3

サイレント・ソードマン LV5 ATK2300

「ボクのターン、ドロ―！ボクは手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロ―し、その後2枚捨てる。」

「させないわ！セットカードオープン、カウンター罠発動！「マジック・ジャマー」！手札を1枚捨て、魔法カードの発動を無効にし、破壊するわ！」

「なら、セットカードオープン、カウンター罠発動！「盗賊の七つ道具」ライフを1000支払い、罠カードの発動を無効にし、破壊する！」

「つく！」

これで明日香の手札が2枚。しかも妨害にも失敗か・・・ヤバイな。

優・有栖 LP8000 7000

「優、ありがとう！じゃあ、とっておきの行くよ！ボクは手札から「エフェクト・ヴェーラー」を攻撃表示で召喚！」

エフェクト・ヴェーラー ATK0

中性的な女の子が現れた。・・・実は最近まで性別が分かりませんでした。orz
まあ、TF5の「いずれアヤマかカキツバタ」パックで知っただけだな。

「そして墓地の「レベル・スティーラー」の効果発動！このカードが墓地に存在する場合、自分の場のレベル5以上のモンスターのレベルを1下げる事で、特殊召喚することが出来る。ボクの「TG

ブレードガンナー」を1下げることによって、このカードを守備表示で特殊召喚するよ」！」

TG ブレードガンナー レベル10 9

レベル・ステイラー DEF0

天道虫キター！シンクロ要因には必須な子。主に「クイック・シンクロン」と合わせると、コスト無しで「ジャンク・ウォリアー」にシンクロ出来るのは大きいな。

「そしてレベル1チューナー「エフェクト・ヴェーラー」をレベル1「レベル・ステイラー」にチューニング！」

エフェクト・ヴェーラーが光となり、1つの輪になる。そしてその輪がレベル・ステイラーを包み込む。

1+1=2

「刹那の風よ その疾風で私達を導いて！
シンクロ召喚！ TG レシプロ・ドラゴン・フライ！！」

TG レシプロ・ドラゴン・フライ ATK300

トンボ・・・と言えはいいのだろうか？いや、首周りに扇風機らしき羽が生え、それで飛んでいるといった方が正解か？

「TG レシプロ・ドラゴン・フライ」の効果発動！1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「TG」と名のついたシンクロモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地へ送り、墓地へ送ったモンスターのシンクロ召喚に使用したシンクロモンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる！ボクは「TG ブレードガンナー」を選択！」

レシプロ・ドラゴン・フライが首の羽を回し、ブレードガンナーに風を当てる。すると、シンクロ素材として使用したワンダー・マジシャンとハイパー・ライブラリアンが戻ってきた。

「なるほど。擬似的な「融合解除」みたいなものか。」

凧が分析を続けている。こいつにシンクロの概念を教えたらやばい事になりそうだな。

とと、これで条件はそろったな。

「行くよ！！レベル5チューナー「TG ワンダー・マジシャン」をレベル5「TG ハイパー・ライブラリアン」とレベル2の「TG レシプロ・ドラゴン・フライ」にトリプルチューニング！！！」

右にハイパー・ライブラリアンが、左にレシプロ・ドラゴン・フライが来る。そして中央にいたワンダー・マジシャンが全てを光で包み込み、星へと変えた。

5 + 5 + 2 = 12

「時空に眠りし機神よ、今こそ枷を解き

その力を使って、ボク達を導いて！！

シンクロ召喚！起動！TG ハルバート・キャノン！！！」

その名に相応しき斧と砲を装備した機体が時空を砕き、現れる。

そしてお約束の斧を構えてのサンライズ立ち!!
どっしりしているようで、この軽い動きは・・・むむむ。

TG ハルバート・キャノン ATK4000

「こ、攻撃力4000!?」「」

もはや「サイバー・エンド・ドラゴン」と同レベルの攻撃力を有しているからなあ。

しかし手間も半端ないが。

「バトル!」TG ハルバート・キャノン」で「サイレント・ソードマン LV5」に攻撃!ファントムスラッシュ!!」

ハルバート・キャノンがサイレント・ソードマンに切りかかる。
サイレント・ソードマンも負けじと剣を構え、両者が打ち合った。
だが、ハルバートの名に相応しい斧はサイレント・ソードマンの剣を砕き、その身ごと真つ二つにした。

「つく!」

レトルト・レトルトレディ LP8000 6300

「ボクはカードを1枚伏せ、ターンエンド!」

有栖 手札2 場(共用) モンスター2 伏せ2

フォーミュラー・シンクロン DEF1600

TG ハルバート・キャノン ATK4000

「私のターン、ドロー!(守備を固めるしかないわ。)手札から」

シャイン・エンジェル」を守備表示で召喚！」

「残念！「TG ハルバート・キャノン」の効果発動！1ターンに1度、相手の召喚・反転召喚・特殊召喚を無効にし、破壊することができるんだ！」

「何ですって!!！」

・・・

ざわ・・・ざわ・・・

「召喚封じかよ。」

「何つー鬼畜な。」

「しかも攻撃力は4000。勝てるのか？」

観客席から絶望の声が聞こえる。

「これは・・・詰みか？」

「うーん、厳しいな。」

凧の声に対し、何とか答える物の・・・正直打開策が思いつかない。せめて「死者蘇生」があれば話は別なんだが。

「けどそれ」

「「ん？」」

十代の声に対して俺達が振り向く。

「あの二人なら絶対面白い事をしてくれる気がしてならないんだよな!!」

ワクワク感が止まらずに、声を張り上げる十代。
その言葉に不思議とため息が付かなかった。

・
・

「・・・(今の手札じゃ、勝ち目が無い。なら)私は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動!デッキからカードを2枚ドロ―するわ!!」

来たカードは・・・昨日兄さんに入れてみてくれて頼まれて仕方なく入れたカードじゃない!?ここでこれ来るってことは、ついてないのかしら?

まあ、万が一って事があるわ。なら、後は兄さんに賭けるしかない!!

「私はカードを2枚伏せ、ターンエンドよ!」

レトルトレディ 手札1 場 モンスター0 伏せ4

「俺のターン、ドロ―!・・・行くか!俺は手札から速攻魔法発動!「サイクロン」!!レトルトレディの左側の伏せカードを破壊する!!」

「っ!!!(「ガード・ブロック」が!痛いわね。)(」

「そして手札から「調律」を発動!デッキから「シンクロン」と名のつくモンスターを1枚手札に加える。俺は「ジャンク・シンクロ

ン」を手札に加え、デッキをシャッフル。その後、デッキからカードを1枚墓地へ送る。(ボルト・ヘッジホッグか。当たり前だな。)」

お、調律か。サーチ系としては増援と共存できるからいいけど、こちらはレベル4以下の戦士族のみだからな。まあ、それ以外に制約がかかってないのは大きいけど。

「俺は手札から「ジャンク・シンクロン」を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300

シンクロと言えばこの人！と思うんだよなあ。
能力も中々優秀だし。

「「ジャンク・シンクロン」の効果発動！このカードの召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する！ただし、能力は無効化されるだが。俺は墓地の「チューニング・サポーター」を特殊召喚する！」

チューニング・サポーター DEF300

「そして墓地の「ボルト・ヘッジホッグ」の効果発動！自分の場にチューナーモンスターが存在している場合、墓地から特殊召喚することが出来る！俺は「ボルト・ヘッジホッグ」を特殊召喚！」

ボルト・ヘッジホッグ DEF800

その名の通り、ネジを装備(?)したネズミが地面から現れる。
しかし可愛いとしか言いようが無い。まあ、「キーマウス」や「レスキューキャット」というアイドルがいるからなあ。

「レベル3チューナー」「ジャンク・シンクロン」をレベル1「チューニング・サポーター」、レベル2「ボルト・ヘッジホッグ」にチューニング!」

いつも通り、ジャンク・シンクロンが輪になり、チューニング・サポーターとボルト・ヘッジホッグが一直線になる。そして輪で囲まれ、星となる。

3 + 1 + 2 = 6

「集いし絆が鎖となり、やがてそれは竜となる! シンクロ召喚! 吼えろ! チェーン・ドラゴン!」

チェーン・ドラゴン ATK2500

その名のごとく、鎖がついたドラゴン……。シンプルだな。実際は手軽に手に入りやすいシンクロモンスターとして、そこそこの評価を得ているらしい。ゴヨウさんもいなくなつたしな。

「チューニング・サポーター」の効果は墓地発動だから「ジャンク・シンクロン」の無効効果外だ! よって1枚ドロ! さらに、レベル2チューナー「フォーミュラー・シンクロン」をレベル6「チェーン・ドラゴン」にチューニング!」

今までのとは違い、フォーミュラー・シンクロンがチェーン・ドラゴンを導き……。消えた!?

2 + 6 = 8

「鎖を纏いし竜よ、光を導く疾風になれ！
シンクロ召喚、来い！スターダスト・ドラゴン！」

そして・・・星屑と名のつく竜が今ここに現れた。

スターダスト・ドラゴン ATK2500

まるでダイヤモンドダストが降っているかのごとく、スターダスト・ドラゴンが輝いていた。そういえば直訳だと星屑竜だから、光っているのは星の輝きだったりして。

「綺麗。」

「な、なんだありゃ・・・。」

「す、すげえ。」

観客からは絶賛の声を受けている。やっぱり主役は違っなあ。
もちろん十代も興奮しっぱなしだったが。まあ、今は放置しておく。

「・・・真紅目の黒竜。」

吹雪さんがぽつりと呟いた。まさかスターダスト・ドラゴンを見つけたの相棒を思い出したのか？

いや、よく見れば微かにだが体が震えている。幻影を重ねているのか？

（兄さん・・・。）

・・・

昨日、兄さんが私を部屋へ招いてある悩みを打ち明けてくれた。

「ドラゴン族恐怖症？」

私の言葉に、兄さんが頷く。

「どうもドラゴン族を見ると、「真紅目の黒竜」を思い出すんだ。」

「（カミューラとの決闘を思い出すのかしら？）」

「それだけならいいけど、酷い時は震えが止まらなくなってしまうてね。」

「それって、かなり危険じゃない！！何でそんな状態なのにドラゴン族を使う相手を校長に頼んだの！？」

気づけば、私は大声で兄さんを怒鳴っていた。

去年、デュエルアカデミアの方から兄さんの行方不明が聞かされたことを思い出す。あの時は気を失って、一週間は寝込んでいたわ。

物心ついたときからずっと傍にいてくれて、嫌な顔一つせず私の面倒を見てくれた兄さんが……。そう思うと生きる気力すら無くなりそうだった。

涙を流しながら私はこう思ったわ。私が必ず助けて出してみせるって。

だから私はデュエルアカデミアに入学し、兄さんを助ける手立てを考えていた。

まあ、結局は亮が敵を打ってくれたけど。（死んでません。）それからは、兄さんが無茶をしないように見張っていたわ。もう、あんな思いをするのは嫌だから。

「ははは。結構おっかないね、明日香は。」

「当たり前じゃない！もうあんな思いはこりこりよー！」

いつもの軽い口調に、気がつけば涙を流しながら怒っていた。

もし兄さんが倒れてしまったら・・・そんなことは考えたくもない。やっと掴んだ日常、そして平穏なのになぜ無茶をしたがるのだろう。

ぼん、と頭に手を乗せられる。

昔から私を慰めたり、止めたりしてくれた手だ。どうしてもこれをされると私は戸惑ってしまう。

「むー。」

「明日香。この代表戦を復帰戦にした理由は、僕自身の弱さを克服するためなんだ。」

「けど、無理してまた倒れたりしたら！」

「その時は・・・」

私の頭を撫でながら

「明日香や皆が助けしてくれると信じているよ。」

そう、宣言してくれた。

・・・

「そして手札から魔法カード「死者蘇生」発動！墓地の「フォーミユラー・シンクロン」を特殊召喚！行くぜ！！レベル2チューナー

「フォーミュラー・シンクロン」をレベル8「スターダスト・ドラゴン」にチューニング!!!!」

再びフォーミュラー・シンクロンが走り出す。・・・お疲れ様です。そしてそれに導かれ、速度を上げるスターダスト・ドラゴン。そして・・・別の次元へと誘われた。

「消えたツ!?」

皆の叫びが聞こえる。まさかDホイールなしでこの出演がなされるとはな。

2 + 8 = 10

「星屑の竜よ。光を超えた速さを得て、更なる境界の境地へ達せよ!!!シンクロ召喚!生来せよ、シューティング・スター・ドラゴン!!!」

シューティング・スター・ドラゴン ATK 3300

再び現れたと思ったら、スターダスト・ドラゴンがさらに進化していた。

スターダストより飛行能力が高くなっているのか、まるでスタントマンのごとく空を飛んでいる。・・・無論、観客からは大絶賛だが。しかしこうやって見ると、何かやんちゃ坊主に見えて来るんだが。

「シューティング・スター・ドラゴン」の効果発動!デッキから5枚めくり、その中のチューナーの数だけ攻撃する事ができる!!!1枚目「強欲な壺」!・・・マジかよ。それはもうちょっと早く来てくれ。2枚目「貪欲な壺」!・・・ええい、次!3枚目「聖なる

バリア ミラーフォース」！・・・モンスターがまだないってどう
いうことだ！？4枚目「バイス・ドラゴン」！モンスターだけど、
チューナーじゃない！！ラスト、5枚目「大嵐」！・・・これは酷
い。」

ずーん、と重い雰囲気になる。こ、これは痛いな。

「ちなみに、0の時はどうなるんだい？」

気の毒そうに思ったレトルトが聞く。

「・・・攻撃する事ができません。」

「」愁傷様。」

「」どうも。」

何っーか、今までの雰囲気を入れてぶち壊した気分だな。うん。まあ、
同情はするけどさ。

「・・・はっ、優！ボクのハルバート・キャノンを使ってよ！」

有栖が何か思い出したように優に話しかける。
何か策でもあるのか？

「あ、その手があったか。行くぞ、有栖！・・・俺の「シューティ
ング・スター・ドラゴン」と有栖の「TG ハルバート・キャノン」
をゲームから除外！！」

「いくよ！！これがボク達の愛の結晶だ！！」

ハルバート・キャノンが光となり、胸部、頭部、両足、両肩、両腕、バックウエポンの9つのパーツとなった。そしてシューティング・スター・ドラゴンに装備されていく。

まるで「バスター・モード」のように思えるが、金属の装甲を装着しているのでどちらかと言うと着装の方が正解かな？ちなみに頭部はヘルメットタイプになっており、中々似合っていた。

T G ハルバート・スター・ドラゴン ATK6000

・・・な、名前が長すぎる！てか、2体の名前をそのまま使っただけじゃないか！？
雰囲気としてほぼダンクーガだな。

T G ハルバード・スター・ドラゴン

融合・効果モンスター 星12 光属性 ドラゴン族

ATK6000 DEF5500

「シューティング・スター・ドラゴン」+「T G ハルバート・キャノン」

効果：自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚する事ができる（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

このモンスターは機械族としても扱う。このカードは相手効果モンスター・魔法・罠カードの対象にならず、効果を受けない。ターン終了時まで攻撃力を半分にする事で、相手の場の全てのモンスターに1回ずつ攻撃する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが相手モンスターを戦闘で破壊し墓地へ送った時、墓地で発動する効果を無効にする。

このモンスターが戦闘によって破壊された場合、ゲームから除外されている「シューティング・スター・ドラゴン」を1体特殊召喚する。

「攻撃力6000!?!」

ついにファイブゴッドを超えやがったか。しかし戦闘以外では手出しできないのがきついな。

「すっげー!! ロボットが竜と合体して機竜になっちまったぜ!! っ、かつこよすぎるなあ。」

十代の叫び声が凄い。近くだから耳が痛いよ。
てか、機竜はちょっと違うような……。まあ、いいや。

「行くぞ!」TG ハルバート・スター・ドラゴン」でダイレクトアタック!!」

両肩のパーツがはずれ、それが合体する。すると1本の柄の形になった。

そしてハルバート・スター・ドラゴンがそれを掴み、構える。

「優、台詞はボクが言うよ!これがボク達の愛の力だ!断空光牙剣!やってやるぜーッ!」

柄の部分から光の剣が生え、その剣で吹雪さん達を叩き切った。

「くう!」

レトルト・レトルトレディ LP6300 300

しかし、凄い風だな。と思ったら、レトルトの衣装の一部である黒いシルクハットと仮面が強風で吹き飛び、吹雪さん自身も吹き飛ばされ、倒れた。

しかも頭を強く打っているらしく、結構やばそうな感じだ。

「レトルト吹雪さん!?」「レトルト」

やっと会場もレトルトの正体に気がついたようだ。遅いよ。ついでに十代も気づいて驚いていた。

「兄さん。しつかりして!」

決闘中という事で、助けに行けないのが悔しいのか。明日香は齒切りしながら兄である吹雪さんを心配していた。

「レトルト」ということはもう1人は明日香さん!?」「レトルト」

ついにレトルトレディの正体もばれてしまったようだ。気がつくのが遅いよ。

「ええー!!あの2人って、吹雪さんと明日香だったのかよ!?ちくしょー、俺もあんな格好を試みたいぜ!って、そんな場合じゃない。吹雪さん、大丈夫ですか?」

十代も完全に正体を知って驚きつつも、吹雪さんに声を掛けていた。はたして彼は大丈夫なのだろうか?

・・・

「レトルトは?」

目が覚めて辺りを見渡すと、青い空と白い雲しか見えなかった。しかし、ここは地面ではない・・・だとしたら空中に浮かんでいるのか？

「！、真紅目の黒竜！！」

かつての相棒が僕を乗せ、空を駆けているらしい。天国への直行便だとしたら、ちょっと勘弁かな。しかし・・・

「気持ちいいなあ。」

相棒が僕を気にしつつ、飛んでいるのだろう。落とされる心配が無いまま、悠々と風を感じる事ができた。すると聞き覚えのある声が聞こえた。あの声は明日香！？それに皆！？

そう思って、声がした方向を見てみようとする。

すると、突然相棒がその場で1回転し、僕を振り落とした。

「な、うわー！！」

落下する速度が速かったが、不思議と恐怖は感じない。そして一瞬だけだが、相棒の顔を見る事ができた。

「・・・どうしてそんなに笑っているんだか。」

そう、笑っていたのだ。まるで、まだこっちに来てはいけないと言っているかのごとく。

そして相棒は天へと昇り、僕は地へと落ちる感覚を覚えつつ意識を失った。

・・・

「っは！」

ぱっ、と目が覚め辺りを見渡す。・・・どうやら元の世界に戻されたようだ。

「兄さん・・・良かった。」

明日香がホッとした表情で僕を見ていた。どうやらあの竜の攻撃で吹き飛ばされた際に、頭を強く打ちあの夢を見たのだろう。いや、夢じゃないはずだ。

「」「吹雪さん！！」「」

観客席から僕を見守ってくれている仲間達が声を掛けてくれた。なら、僕も無様に倒れているわけにはいかないな！

「よつと、皆。心配をかけてごめんねー！！」

立ち上がり、気軽に手を振って大丈夫だという合図をする。皆もホッとしているようだ。

「俺はこのままターンエンド！」

優 手札2 場（共有） モンスター1 伏せ2

TG ハルバート・スター・ドラゴン ATK6000

なるほど、中々強いね。正直骨が折れそうだ・・・。だけど、今さっきまでの幻影は消えて恐怖は無くなっていた。このターンが勝負

だ！

「僕のターン、・・・ドロー！」

よし！来てくれた。後は明日香の引き運に賭けるしかない。

「僕は手札から「ゴードンナー」を特殊召喚する！」

青を基本カラーとした男性型ロボットが現れる。

武器は格闘しかないが、それはそれで好きなんだよね。

ゴードンナー

効果モンスター 星6 地属性 機械族

ATK2400 DEF1700

効果：自分のライフポイントが半分以下で相手の場にのみモンスターが存在している場合、手札から攻撃表示で特殊召喚することが出来る。

「私は「ゴードンナー」が手札から特殊召喚された事により、手札から「ネオ・オクサー」を特殊召喚するわ！」

やはり明日香も引いてくれていたか！

ネオオクサー

効果モンスター 星5 地属性 機械族

ATK1700 DEF2400

効果：「ゴードンナー」が手札から特殊召喚された時、手札のこのカードを守備表示で特殊召喚することが出来る。」

僕の「ゴードンナー」と対になっており、「ネオオクサー」は赤色

の女性型だ。

「行くよ、明日香！」

「ええ、いいわ。兄さん！」

「僕の場の「ゴードンナー」と明日香の場の「ネオオクサー」をゲームから除外し、「ゴードンナー ツインドライブモード」を特殊召喚！」

ゴードンナーの胸部の装甲が広げられ、ネオオクサーが変形しそこへ収納される。
そして装甲を再び閉めた。

「リボルバーオープン！」

前腕部と脛のリボルバーを開き、エネルギーの循環が高まる。その熱に反応するがごとく、装甲の色が青から赤へと変化した。

「ゴードンナー、ツインドライブ！」

ゴードンナー ツインドライブモード

融合・効果モンスター 星8 炎属性 機械族

ATK3000 DEF2500

「ゴードンナー」+「ネオオクサー」

効果：自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚する事ができる（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

このカードが特殊召喚されたターンのバトルフェイズ中、このカー

ドの攻撃力は倍になり、相手の魔法・罠カードの効果を受けない。

・・・

「すっげー！！吹雪さんと明日香ってあんなモンスターを持っているのか！！くーっ、ヒーローもいいけどやっぱりあんな合体ロボットもいいよなあ。」

「なら、今度俺のロイドデッキを貸そうか？」

「え、いいのか？あ、けど・・・やっぱり止めておくよ。」

「そうか。」

十代があまりにもはしゃいでいたので、俺のダグオンを主軸としたロイドデッキを貸そうとしたら断られた。まあ、そうだろうな・・・しかし、

「何で吹雪さんと明日香があんなカードを持っているんだ？」

「さあな。」

残念ながら凧でも分からないか。さて、これで勝負を決めるか？

・・・

僕のデュエルディスクから音楽が流れる。もちろん「神魂合体ゴーダンナー！！」だ。といつても、カラオケモードだけど。歌詞が気になる人は検索してね。

「バトル！」「ゴードンナー ツインドライブモード」で「TG ハ
ルバート・スター・ドラゴン」に攻撃！！」

「な、・・・自爆特攻か！？」

）
）
）

「残念！」「ゴードンナー ツインドライブモード」は特殊召喚した
ターンのみだけど、バトルフェイズ中は攻撃力が倍になる！！」

ゴードンナー ツインドライブ ATK3000 6000

「・・・攻撃力が同じになつた！？」「・・・」

）
）

「なら、こちらも迎撃だ！！」

）

「うん！断空砲ファイヤツ！！」

TG ハルバート・スター・ドラゴンの背中から大砲が三門現れる。
頭部より少し上に1門、両方の腰に2門あるらしい。そこから轟音
と共にエネルギー砲が発射される！

）
）
）
）

「甘いわ！攻撃宣言時にセットカードオープン、速攻魔法発動！」

リミッター解除」！！自分の場の機械族モンスターの攻撃力を倍にする！」

ゴードンナー ATK6000 12000

「『攻撃力が1万を超えた!?』」

「カウンターツナックルツ!!」

僕の叫び声と共に、ゴードンナーの左腕に炎のエネルギーが集まり、それを勢いよく打ち出す。

）
）
）
）

凄まじいエネルギーのぶつかり合いだったが、ゴードンナーの方が勝っており、TG ハルバート・スター・ドラゴンが吹き飛ばされ、体制を崩した。

「ここでケリをつける！」

）
）
）
）

ゴードンナーが左腕を突き出し、右腕で構える。

「残念だけど、ダメージ計算時にセットカードオープン、速攻魔法発動!「リミッター解除」!!ボク達の場の機械族モンスターの攻撃力を倍にする!」

「それは僕達の台詞だ!僕もチェインして手札から速攻魔法発動!「リミッター解除」!!さらに倍にする!」

「そんな!」「嘘だろ!?!」

ゴードンナー ツインドライブ ATK12000 24000

TG ハルバート・スター・ドラゴン ATK6000 12000

TG ハルバート・スター・ドラゴンが体制を立て直す直前に、ゴードンナーが懐に飛び込む。

）
）
）
）

「ハアートオ、ブレイカー!?!」

そして右手を突き出し、TG ハルバート・スター・ドラゴンの左肩の装甲を貫く。

）
）
）
）

「今だ!撃てえ!?!」

「はあああ!?!」

明日香の声と共にゴードンナーの右腕のリボルバーが唸りをあげて、打ち込まれる。

）
）
）
）
）

そして打ち込まれた衝撃でTG ハルバート・スター・ドラゴンが叫び声を上げて倒れ込み、その場で固まった。

）
）
）
）
）
）

「さらばだ！レッドアイズ！！」

ゴードンナーが左手を前に出し、必殺の構えを取る。

そして、僕の目頭が熱くなった。・・・今ままで戦った光景が脳裏に甦ったからだ。

）
）
）
）

「お前が守ったこの命！そして仲間達の命を決して無駄にはしない！！」

そして、かつての相棒に別れを告げる。

）
）
）
）
）
）
）

ゴードンナーが左腕を前で一回転させて輪を作った後、思いっきり飛ぶ！

）
）
）

そしてハルバート・スター・ドラゴンが体を僅かに起こし、ゴードンナーを見上げる。

）
）
）

「ソオルウブレイカーアアア！！！！」

ゴードンナーが空中で一回転し、キックの照準を合わせ・・・勢いよく繰り出された！

）
）

勢いに乗ったキックに耐えられず、TG ハルバート・スター・ドラゴンが中央から真つ二つに裂かれた。勢い余ったゴードンナーはそのまま少し直進する。

）
）
）
）
）

そして、ゴードンナーの各部強制冷却の音と同時にTG ハルバート・スター・ドラゴンが爆発する。そして、ちょうど音楽も終わった。

優・有栖 LP7000 - 5000

・・・

「そこまで！勝者はデュエルアカデミア代表「快盗レトルト」「快盗レトルトレディ」チームなノーネー！」

わーっ！！！！

「すげえぞ！吹雪さん！！！」

「まさかの逆転だったから、すかつとしたぜ！」

「明日香さん、おめでとう！」

「優、今回の運は残念だったな！」

「有栖ちゃんもよく頑張ったよー！！！」

観客席からお互いを褒めた称える声が聞こえた。
そして吹雪さんと明日香が優さんと有栖さんに近づいて手を差し伸べた。

「いい戦いだっただよ。」

「あと少いで私達の負けだったわ。」

そして優さんと有栖さんがその手を握り、吹雪さんと明日香も握り返した。

「あと少しだったよね。優。」

「ああ、けど・・・今度は勝ちます!」

「楽しみにしているよ。」

「頑張っただね。」

そうして、彼らは控え室へと戻っていった。

「なあ、凧。この場合、どうなるんだ?」

「ああ、何でも・・・こういう場合は各校の切り札となる人物を出し合うらしい。」

十代の疑問に凧が答える。

「なら、うちなら兄さんが出るな。」

「だな。くーっ、最後の決闘だけに興奮が収まらねーぜ!」

「む、・・・次の相手はどうやらプロのようだ。」

風の言葉に皆が驚く。何せ、こちらはまだ学生だからなあ。アマチュアとプロではちと厳しい物があるかもしれないが・・・兄さんなら、やってくれると信じている！

次回予告

「イヤッホオーツ!!」

「ほう、獲物の前で舌なめずりか・・・余裕だな。」

「ちい!!」

「引いても狙い撃ちにされるだけだ。」

「俺を忘れてもらっちゃ、困るぜ!!」

次回「プロと地獄と吸血部隊」

「その隙が命取りだ!!」

フィールド17：恋と幻影と絆（「遊戯王デュエルモンスターズGX」転生者に

ということ、吹雪&明日香チームが勝ちました。

ちなみに「TG ハルバート・スター・ドラゴン」は結構前からオ
リジナルとして考えていました。

なので、この機会に使わせていただきました。負けましたけどorz
単体能力なら敵無しなんですけどね。

ここだけの話なんです、1度運営から忠告が来てしまいこういう
方法を取りました。・・・大丈夫ですよ？

フィールド18：プロと地獄と吸血部隊（前書き）

これでデュエルアカデミア対ノース校の対決に決着が付きませう。さて、どちらが勝つのだろうか？

追記：次回が迷走しているので次回予告を削除しました。気まぐれな作者ですみません。
後、一部訂正しました。&「憑依装着ヒータ」の精霊フラグを消しました。

やはり三沢には勇者がお似合いでしたので。

フィールド18：プロと地獄と吸血部隊

「さて、デュエルアカデミア対ノース校の友好デュエルは1対1という結果になってしまったので、これより、大将戦を始めるノ―ネ―！」

わーっ

「『カイザー！！！！』」

兄さんが姿を現すと、観客から大きな声援が沸き起こった。み、耳が痛い。

「翔。」

どうやら三沢が戻ってきたようだ。何やら服を片手に引っさげて来ている。

「ん、三沢か。お疲れ様・・・残念だったな。」

「ああ。だが、万丈目も相当強くなっているぞ。」

「みただいな。」

前の万丈目は火力単調な所があり、何でも入れるというギミックのかけらもないデッキだった。しかし、今回はちゃんとしたデッキを組んでいるようだ。

「さて、ノース校の切り札は一体・・・。」

「珍しいな。風の情報網に引つかからないなんて。」

「仕方が無いだろ。ノース校にはあまり情報のツテが無いんだ。」

三沢の言葉に風がため息を付きながら答える。まあ、流石に根のな
いところから情報をかき集めるのは無理だったか。

「ん、何か聞こえないか？」

「ああ。」

「そういえば。」

十代の言葉に、皆が同意し空を見る。

すると1人の生徒が会場に向かってスカイダイビングをしていた!!

「イヤッツホオオオオオオ!!」

き、キター!!エド・フェニックス!!

その声を生で聞けるなんて夢にも思わなかったぜ!

何せ前世では沢山のMAD動画が作られているほど人気だったな。
俺もよく聞いていたけど。

「……また空から人が降りてきた!?!?!」

皆は驚いているというか、呆れているというか……。

そしてエドが会場へ降り立ち、素早くパラシュート器具を外した。
てか、何でエドがここに?

「何故、貴様がここに？」

「ふっ、プロに常識は通用しない。」

兄さんが疑問に思ったのか、聞いてみたら「プロに常識は通用しない。」宣言。

論理が無茶苦茶だよ！・・・まあ、恐らく依頼か何かだと思っが。

「これより！デュエルアカデミア代表「丸藤 亮」対ノース校代表「エド・フェニックス」の試合を開始するノーネ！！」

わーっ！！！！

「カイザー！負けるなよ！」

「兄さん、頑張って！」

歓声に負けないように必死に大声を出す、喉が痛い。うっ、やはりのだ餡を用意しておくべきだった・・・。

「相手はあの「エド・フェニックス」・・・見ものだな。」

「ああ。ほぼ互角といえるからな、どちらが勝ってもおかしくない。」

どうやら、凧と三沢もこの決闘にはかなり興味があるらしい。さてはて、どうなることやら。

「俺の先攻、ドロー！カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

亮 手札4 場 モンスター0 伏せ2

モンスターを出さない？いや、出せないのか？
まさか、手札事故だったりして……。

「ふつ。いきなり手札事故なんて、君は運が無いね。僕のターン、ドロー！僕は手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動！デッキからカードを5枚選択し、相手はそこからカードを1枚選択する。僕が選ぶのは「カオス・ソルジャー 開闢の使者」。「ダーク・ホルス・ドラゴン」「墮天使ゼラート」「光神機 - 轟龍」「ダーク・ネフティス」を選択！！」

まず「カオス・ソルジャー 開闢の使者」は危険だ。次に「ダーク・ネフティス」や「墮天使ゼラート」も危ない。となると、「ダーク・ホルス・ドラゴン」か「光神機 - 轟龍」だな。だが、妥協召喚は不味いとなると「ダーク・ホルス・ドラゴン」が残るな。

「俺は「ダーク・ホルス・ドラゴン」を選択！」

「なら「ダーク・ホルス・ドラゴン」を手札に加え、他のカードを僕の墓地へ送る。そして手札から魔法カード「トレード・イン」を発動！」

なるほど。だからあの中のモンスターはすべてレベル8だったのか！！

「手札のレベル8のモンスター1体を墓地へ送り、デッキから2枚ドローする。今手札に加えた「ダーク・ホルス・ドラゴン」を墓地へ送り、デッキから2枚ドロー！！くくく……。」

エドが不気味に笑っている。何を仕出かすつもりなんだ？

「僕は手札から「ダーク・アームド・ドラゴン」を特殊召喚！」

ダーク・アームド・ドラゴン ATK2800

「遊戯王GX」だったら万丈目が切り札にしていたカード。いや、それをダーク化したモンスターだ。元々は「アームド・ドラゴンLV7」だったはずだが・・・だが、この「ダーク・アームド・ドラゴン」は元の世界でも制限をかけられるほど恐ろしい能力を持っている。

「『攻撃力2800を手札から特殊召喚！？』」

「すっげー！けど、どんな条件で特殊召喚できるんだ？」

やはり皆が驚いている。だが、十代は興奮しながらも相手の特殊召喚条件を気にしていた。俺としては十代の反応に驚かされたよ・・・。

「この「ダーク・アームド・ドラゴン」は自分の墓地に存在する闇属性モンスターが3体の場合のみ、手札から特殊召喚する事が出来る。」

「なるほど。「苦渋の選択」は特殊召喚するための墓地肥やし。「トレード・イン」は万が一と言うわけか。」

「そういうことだ。」

まさかエド・フェニックスが墓地肥やしの概念を使ってくるとは・・・。まあ、ダムド専用とでも考えているのかもしれないが。

「僕は「ダーク・アームド・ドラゴン」の効果発動！墓地の閻属性モンスター1体をゲームから除外し、フィールド上のカードを選択し1枚破壊する！僕は墓地の「ダーク・ホルス・ドラゴン」を除外し、君の右側の伏せカードを破壊！ダーク・クラッシュュ！！」

ダーク・アームド・ドラゴンの右腕に黒い魂が吸い込まれ、右手の爪が不気味に光る。そして、右手で兄さんの右側の伏せカードを叩き切った。

「つく！（「聖なるバリア ミラーフォース」が。）」

「まだまだ！もう1度「ダーク・アームド・ドラゴン」の効果発動！墓地の「ダーク・ネフィオス」をゲームから除外し、もう一枚の伏せカードを破壊する！ダーク・クラッシュュ！」

「なら、それにチェーンしてセットカードオープン、畏カード発動！「和睦の使者」！！このターン俺は戦闘ダメージを受けず、戦闘でモンスターを破壊されない。と言っても、俺の場にはモンスターはいないがな。」

「つく、小ざかしいマネを！」

ダーク・アームド・ドラゴンが伏せカードを叩き切ったが、効果を発動され無意味になった。エドも思惑通りに行かず、少し怒り気味だ。

「なら、僕は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロし、その後2枚捨てる。よし。手札から魔法カード「戦士の生還」を発動！墓地の戦士族モンスターを1枚手札に加える。僕は「カオス・ソルジャー 開闢の使者」を手札に加

える！」

ついに来たか。OCGの世界で暗黒時代を作った「カオス」シリーズの一枚が！

「僕は「天使の施し」で墓地に送った「シャイン・エンジェル」と「キラー・トマト」をゲームから除外し、「カオス・ソルジャー」開闢の使者 -」を特殊召喚！！」

カオス・ソルジャー 開闢の使者 - ATK3000

混沌の中で生み出された最強の戦士が、降り立った。もちろん効果も恐ろしく、相手モンスターを破壊した時、もう1度攻撃する事ができる。また、1ターン攻撃を封じる事で相手モンスターを1体ゲームから除外することが出来る。このカードが制限になるまでは「戦士の生還」で復帰され、倒しても倒しても現れるという悪夢を見せられたプレイヤーも多い。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

エド 手札3 場 モンスター2 伏せ1

ダーク・アームド・ドラゴン ATK2800

カオス・ソルジャー 開闢の使者 - ATK3000

「俺のターン、ドロー！」

「おや、君はダーク・アームド・ドラゴンやカオス・ソルジャーを前にしてもまだ戦えるのかい？」

兄さんがドローすると、哀れな抵抗に見えたのかエドがかわいそう

な目で兄さんを見ていた。決め付けるにはまだ早すぎるって。

「ほう、獲物の前で舌なめずりか・・・余裕だな。」

あ、どうやら兄さんの怒りの琴線に触れたようだ。まあ、どう見てもあれは侮辱にしか思えないからなあ。

「俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドロウする！そして手札から魔法カード発動！「レッドシヨルダー・マーチ」！デッキから「レッドシヨルダー」と名の付くモンスター1体を手札に加える。俺はデッキから「スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様」を手札に加える！」

レッドシヨルダー・マーチ 魔法カード

効果：デッキから「レッドシヨルダー」と名の付くモンスター1体を手札に加える。

兄さんのデュエルディスクから音楽が流れ出す。

もちろんBGMは「レッドシヨルダー・マーチ」だ。

スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様

効果モンスター 星6 地属性 機械族

ATK2500 DEF900

効果：相手の場にモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在しない場合、手札からこのカードを特殊召喚することが出来る。このカードは対象を取らない相手の魔法・罠カードの効果を受けない。

「そして手札から「スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様」を特殊召喚！」

キユイイイイイイン！ターボ音と共に、1機のATアーマード・トルーパーが現れる。敵の血で赤く塗られたその右肩が哀愁と硝煙を匂わせ、むせる。

「さらに手札から装備魔法「パイルバンカー」を「スコップドッグ レッドシヨルダー隊仕様」に装備！」

パイルバンカー 装備魔法

効果：装備したモンスターの攻撃力が500ポイントアップ。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

スコップドッグ レッドシヨルダー隊仕様 ATK2500 3000

スコップドッグの右足の外側にパイルバンカーの固定装置がセットされ、右腕にパイルバンカーを装着させるための器具が取り付けられた。

「バトル！「スコップドッグ レッドシヨルダー隊仕様」で「ダーク・アームド・ドラゴン」に攻撃！」

「そんな雑魚、蹴散らせ！」

スコップドッグが足に装備されたターボを吹かし、ダーク・アームド・ドラゴンと距離を取る。そして、ちょうど攻撃されても紙一重で避けれそうな位置を取ると、右手に持っているアサルトライフルでダーク・アームド・ドラゴンに攻撃する。

ダダダダダッ！

鉄の銃弾がダーク・アームド・ドラゴンに襲い掛かる。だが体から血を流しつつもダーク・アームド・ドラゴンはスコープドッグに接近し、必殺の一撃を試みる。

途中で速度を上げ、ダーク・アームド・ドラゴンが襲い掛かった。そして右手から繰り出されたクローによって、スコープドッグを切り裂いたかに見えた。だが、

キュイイイイイイン！

足のターボで加速を得ると、右手のアサルトライフルを投げ捨て姿勢を低くしつつダーク・アームド・ドラゴンの懐に潜り込む。次の瞬間、クローがスコープドッグに襲い掛かるがすでに懐に飛び込まれており頭一個分の差で当たらなかった。

そしてスコープドッグの右腕に装備されたパイルバンカーがダーク・アームド・ドラゴンを打ち貫く。

バシューーン！

一つの轟音が鳴り、2体はそのまま固まってしまふ。すると、打ち抜かれたダーク・アームド・ドラゴンが力を失い、ゆっくりと倒れてしまった。そしてスコープドッグはアサルトライフルを回収し、元の場所へと戻っていった。

エド LP4000 3800

「そ、そんな・・・ダーク・アームド・ドラゴン」がやられるなんて。だが、まだ「カオスソルジャー」がいる！」

ダーク・アームド・ドラゴンを失い、狼狽しかけたものの「カオス

「ソルジャー」がいる事で何とか立ち直したようだ。やはり「カオスソルジャー」がいるだけで、かなりの存在感があるからなあ。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

亮 手札3 場 モンスター1 伏せ1 装備魔法1

スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様 ATK3000

装備魔法「パイルバンカー」装備

少しずつだが、手札を消耗している。

先に「カオス・ソルジャー」を倒せるかが大きな鍵だな。

「僕のターン、ドロロー！ふふふ、これで終わりだ！！手札から速攻魔法「異次元からの埋葬」を発動！ゲームから除外しているカードを3枚まで選択し、墓地へ送る。僕はゲームから除外されている「シャイン・エンジェル」、「キラー・トマト」、「ダーク・ネティオス」を墓地へ送る。そして墓地へ送った「シャイン・エンジェル」と「キラー・トマト」をゲームから除外し、「カオス・ソーサラー」を特殊召喚！」

カオス・ソーサラー ATK2300

右手に光、左手に闇を宿した魔術師が現れる。

まさか、エドのデッキは「カオス」か！？

「そして手札から「終末の騎士」を攻撃表示で召喚！」

終末の騎士 ATK1400

闇の騎士が現れる。

出た。墓地肥やしの名人。召喚、反転召喚、特殊召喚に対応したその効果はまさに鬼だ。

「そして「終末の騎士」の効果発動！自分のデッキから「ネクロ・ガードナー」を墓地へ送る。」

「つく！（厄介なモンスターを送ったな。）」

ざわ・・・ざわ・・・

「なぜ、ネクロ・ガードナーを？」

「そういえばあいつの効果は・・・。」

「ああ、墓地発動だ。」

「これはかなり厳しい事になりそうだな。」

エドが送ったカードで皆がざわめいた。

ちなみに「ネクロ・ガードナー」の効果は、墓地のこのカードを除外すると1度だけ攻撃を無効にするという地味ながらもかなり面倒で強力な効果を持っている。

「そして「カオス・ソーサラー」の効果発動！1ターンに1度、相手モンスター1体をゲームから除外する！もちろん対象は「スコープドッグ」だ！食らえ、カオス・シューツト！！」

カオス・ソーサラーがまるで波動拳を撃つ様な体制を取る。すると手の隙間からまさに混沌の球体が現れ、それがスコープドッグに向けて放たれる！

回避行動を取ろうとしたが既に遅く、混沌の球体の直撃を食らい、・・・消滅した。

「ちい！」

「ふふふ、これで君を守るものはない！バトルだ！」「カオス・ソルジャー 開闢の使者 -」でダイレクトアタック！」

カオス・ソルジャーが兄さんに接近し、右手に持っている剣で一閃する。

亮 LP4000 1000

「これで止めだ！」「終末の騎士」でダイレクトアタック！」

終末の騎士が接近し、剣を振り下ろそうとする。

「まずい！この攻撃が通れば！！！」

「カイザー！！！」

三沢と十代が叫ぶ。カイザーの負けをほぼ予見して。

「まだまだ！セットカードオープン、畏カード発動！」「ガードブロック」！相手ターンのダメージ計算時のみ発動する事が出来る。この戦闘ダメージを0にし、さらにデッキからカードを1枚ドロウする！」

キイイインツ！

終末の騎士の剣が振り下ろされるが、何かに防がれてしまい兄さんには届かなかったようだ。

「何とか防げたようだな。」

「ふー、間一髪だぜ。」

「だけど、何で「カオスソルジャー」の時に使わなかったんだ？」

三沢と十代がほっとしていると、風が疑問を投げかけた。

普通なら「カオスソルジャー」を止めて少しでもダメージを減らすはずなんだが……。

「ふふ、焦りすぎてプレイミスをしたのかい？」

「……。」

カオスソルジャーの攻撃を通し、終末の騎士の攻撃を防いだ事にエドは笑っていた。

やはり疑問に思うところは皆同じか。

「僕はこのままターンエンドだ。……次のターンがくれば、君は確実に敗北するけどね！」

エド 手札1 場 モンスター3 伏せ1

カオス・ソルジャー 開闢の使者 - ATK3000

カオス・ソーサラー ATK2300

終末の騎士 ATK1400

挑発しているように思えるが……この世界だとそれは死亡フラグだぞ？

「なら、このターンでケリをつけるのみだ。俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動！墓地の「スコープ

ドッグ レッドシヨルダー隊仕様」を攻撃表示で特殊召喚！」

スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様 ATK2500

「さらに、「スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様」を生贄にして、「スコープドッグ・ターボカスタム」を特殊召喚！」

スコープドッグ・ターボカスタム

効果モンスター 星8 地属性 機械族

ATK2800 DEF1300

効果：このカードは自分の場の「スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様」を墓地へ送ることによって手札から特殊召喚することが出来る。このカードは相手の魔法・罫の対象にならない。このカードは相手の場の全てのモンスターに1回ずつ攻撃する事ができる。

「スコープドッグ レッドシヨルダー隊仕様」の武装の一部が排除され、各ブースターが強化されている。ちなみに機体の色が漆黒へと変化されているが。ちなみにターボカスタムは通常の兵士が乗ったら即転倒という何ともピーキーな機体という事で有名だ。

「そして手札から装備魔法発動！「異能生存体 キリコ」を「スコープドッグ・ターボカスタム」に装備！」

異能生存体 キリコ 装備魔法

効果：このカードは「スコープドッグ」と名の付いたモンスターにしか装備できない。このカードは相手の効果モンスターの効果を受けず、魔法・罫カードの効果では破壊されない。このカードを装備したモンスターの攻撃力は700ポイントアップする。このカードを装備したモンスターが破壊され墓地へ送られた場合、元のプレイヤーの手札に戻す。

このカードのプレイヤーのライフポイントが1000以下の場合のみ、このカードに装備されているモンスターは戦闘では破壊されず、自分の場の全てのモンスターは相手の効果モンスターの効果を受けず、魔法・罠カードの効果では破壊されない。

赤のパイロットスーツを着た兵士がスコープドッグに乗り込む。すると、格段に動きが良くなり、見違えるほどとなった。てか、まさかキリコまで登場するとはなあ。

そして手札から「スコープドッグ 通常仕様」を攻撃表示で召喚！

スコープドッグ 通常仕様

効果モンスター 星4 地属性 機械族

ATK1800 DEF200

効果：このモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからカードを1枚ドローする。

レッドショルダー隊と同じように、ターボ音と共に現れる。

「そしてデッキからカードを1枚ドローする！」

しかし、この効果は鬼だと思うんだ。強制効果だからタイミングを逃さないし。

「さて、行くか！バトル！「ターボカスタム」で「終末の騎士」に攻撃！」

お、兄さんのデュエルディスクから音楽が鳴り出す。やはり「炎のさだめ」か。・・・むせる。

「ふ、甘い！セットカードオープン、畏発動！「聖なるバリア ミラーフォース」！相手の場の攻撃宣言時に発動！相手の攻撃表示モンスターを破壊する！残念だったね！」

そして「ターボカスタム」が「終末の騎士」を攻撃しようとした時、無数の虹色の光が現れ、兄さんの場のモンスターに襲い掛かって来た。

「通常型」のスコープドッグが「ターボカスタム」に話しかける。

「くそっ、どうやって避ければいいんだ!？」

「逃げれば狙い撃ちにされる。突破するんだ！」

「し、しかし！」

「付いて来い！」

そう言うと、ターボカスタムはターボを吹かし、前進する。すると、ターボカスタムが前までいた場所に虹色の光が突き刺さった。

「ええい、ままよ!!！」

通常型もターボカスタムの動きに習って、前進する。そして2機は左右に動きながらミラーフォースの攻撃を回避する。

「ふふ、いつまで避けれるかな？」

エドが笑いながら見ていると、ターボカスタムの方に攻撃が集中している。懸命に避けるターボカスタム。だが、ターボカスタムの進行上に光が突き刺さり爆発する。

「っ！」

爆発の衝撃でターボカスタムはバランスを崩し、そこへ無数の光がチャンスと言わんばかりに襲い掛かった！

ダダダダダッ！！

ターボカスタムは咄嗟に右腕に装備されたアサルトライフルを撃ちまくる。もちろん狙いは定めては無いので、銃弾が暴れまわるだけだった。

「無駄な足掻きを・・・何!？」

アサルトライフルを撃ちまくる事によって発生した反動を生かし、ターボカスタムは体勢を立て直す。

「見たか。」

「ありや、ブースタンドだぜ!!！」

観客の誰かが呟く。ブースタンドとは銃撃の反動を生かし、崩れたバランスを立て直す技だ。無論、とてつもない技量が必要になるのでおいそれとは使えない。

「ちい、小ざかしいマネを!だが、ここまでだ!!！」

体勢を立て直したターボカスタムだったが、3つの光がすでに接近しており、もう駄目かと思われた。

するとターボカスタムは光の矢を引き付けると、ターンしつつ左前へ避け、1つ目の光の矢を回避した。2つ目は右前へ、3つ目は再

び左前へと1つ目と同じ要領で避けきった。
煙はまだ晴れていなかったものの、再び光の矢が襲ってくる事は無かった。

「すっげー！！ミラーフォースの光を全て避けちまうなんて！」

十代がこの動きに感動したのか、大声を上げて喜ぶ。
気分はまさにアクション映画を見ているようだろうな。

「な・・・僕のミラーフォースが全て避けられた!？」

「残念だが、装備カード「異能生存体 キリコ」は自分のライフが1000以下の時、自分の場の全てのモンスターは相手の効果モンスターの効果を受けず、魔法・罫カードの効果では破壊されない！よって「聖なるバリア ミラーフォース」や墓地の「ネクロ・ガイドナー」は通用しない！」

「なんだって!？」

兄さんの説明にエドが驚く。

まあ、こんなインチキ効果はあまり無いからなあ。「ネクロ・ガイドナー」哀れ。

「そして「ターボカスタム」は相手の場の全てのモンスターに攻撃する事が出来る！行け、「ターボカスタム」！！アサルトコンバット！！」

ダダダダダッ！！

ターボカスタムのアサルトライフルが終末の騎士に襲い掛かり、標

的を撃ち砕いく。

終末の騎士はなす術無く銃弾に食われ、その身を砕かれた。

ガチャ！パシユパシユパシユッ！！

続いて右肩に装備されたミサイルランチャーが動き、カオス・ソーサラーに向けて発射される。闇の力を使い、カオス・ソーサラーは迎撃するが、発射が迎撃を抜け、直撃を受け消し飛ばされた。

キユイイイイーン！

最後に残ったカオス・ソルジャーに向けて、ターボを吹かし接近した。カオスソルジャーもタイミングを見計らって攻撃に出ようと、身構える。

そして、自分の間合いに入ったカオス・ソルジャーが剣を振り下ろした！

シュピン！・・・ガシャン！

ドゴオッ！

カオス・ソルジャーの剣はターボカスタムの右肩に装備されたミサイルランチャーを切り落としただけだった。そして、ターボカスタムの右肩でタツクルを食らい、片膝を付く。

タツクルのショックから立ち直ろうと、顔を上げるカオスソルジャー。だが、その額にターボカスタムのアサルトライフルが突きつけられ、・・・引き金が引かれる。

パアアアアーン！！

乾いた音と共に、カオス・ソルジャーが崩れ落ちる。

そしてターボカスタムが元の位置へと戻っていった。

エド LP4000 1900 800 300

「そ、そんな・・・僕のモンスターが全滅！？だが、まだ僕のライフは尽きていない！！」

ターボカスタムの攻撃により、全てのモンスターを失い、悲しみに暮れるエド。そして、その悲しみを次のターンで晴らそうとした。

だが

「その隙が命取りだ！」

「俺を忘れてもらっちゃ、困るぜ！！」

煙の中からターボ音と共に「スコープドッグ 通常型」がエドの後ろから現れ、アサルトライフルを連射した。

「うわあああああ！！！」

蜂の巣にされ、倒れるエド。

そして、通常型も倒れているエドを尻目に元の場所へと戻っていった。

エドLP300 - 1500

「そこまで！！勝者、デュエルアカデミア代表「丸藤 亮」なノーネー！！！」

わーっ!!

「カ・イ・ザー!」「カ・イ・ザー!」「カ・イ・ザー!」
観客からカイザーコールが沸き起こる。

「くそう……。」

敗北の悔しさから、その場で悔しがるエド。
そして、そんなエドを尻目に兄さんは控え室へと戻っていった。

「この屈辱……絶対忘れはしない!!」

ゆらりと、エドが立ち上がり宣言する。そして彼も控え室へと帰ってしまった。

「まさか……あの状況から逆転するとは。」

「すげーワクワクしたぜ!くうー、今からカイザーの所へ行って決闘してくるぜ!!」

「ちよつと待て。今から結果発表と閉会式が始まるから少しそこでおとなしくしている。」

「ちえー。まあ、後から戦えるからいつか。」

三沢の言葉に十代が触発され、今から兄さんの所へ行こうとしたが、
凧に止められる。

逸る気持ちは分かるが、急がなくてもいいと思うぞ?別に兄さんは逃げないし。

「さて、対に決着が付き、今年は……デュエルアカデミアの勝利
なノーネー!!」

わーっ！！

クロノス先生の宣言と共に、生徒たちから歓声が沸く。けど、勝利した褒美は確か購買部のトメさんのキスじゃなかったっけ？アレを見て生徒の歓声が一気に消えそうだな。

「そして、勝利したデュエルアカデミアには・・・何と！あの「I2社」からお祝い用のパックが、生徒達に配布されるノーネー！！」

ワッ！！！！

デュエルアカデミアの生徒達が一気にテンションアップした。まさかのサプライズだな。

で、どんなパックが配布されるんだか。

「くーっ！どんなカードが入っているのかワクワクするぜ！！」

「わざわざI2社からお祝い用を贈ってくるとはなあ。」

「まあ、トーナメントパックみたいな物だったら凹むがな。」

「もらえるだけいいじゃないか。」

俺達が喋っていると、先生達からお祝い用のパックを買った。

これって・・・「いずれアヤメかカキツバタ」じゃねーか！！これでもいいのか？I2社。

てか、このパックはTF5用のじゃなかったっけ？

（浮気はしないでくださいね。）

（わかってるって。）

アイリスから釘を刺される。ちなみに「いずれアヤメかカキツバタ」のパックには女性系カードばかり入っているため、不安に思ったのだろう。

さて、開けようかと思っただら

「憑依装着のヒータキタ

(。。(

!

!!!!!!」

三沢がスーパーレアの「憑依装着ヒータ」を当てていて発狂している。そういえばアイツは「克蘭」や「ピケル」なども好きだったな。ちなみに俺は「地霊使いアウス」が好きだが。

「お、「カードエクスクルードー」か。かわいいな!」

十代はロリっ子。もとい、幼い少女のモンスターを手に入れていた。見た目は「ブラック・マジシャン・ガール」の幼い頃にみえるが。そういえばOCGではかなり人気で、恐ろしい値段が付いていたな。

「「マジシャンズ・ヴァルキリア」に「異次元の女戦士」。中々いい当たりだ。」

凧が自分の当たったカードを冷静に把握している。「マジシャンズ・ヴァルキリア」は露出を控えた「ブラック・マジシャン・ガール」だと思ってくれればいい。属性は光でもちろん魔法使い。2体いればロツクがかけられる娘でもある。

「異次元の女戦士」は相手モンスターと戦闘したら、お互いを除外する事が出来るというかなり強力な効果を持っている。厄介なモンスターと1:1交換できるのはかなりうまい。しかもリクルーターや「増援」で持ってこれるのは大きな強みだ。

「さて、俺も開けてみるか。」

パックを開けてカードを確認しようとしたら、校長からの話が始ま

った。

仕方ないのでパックは胸ポケットにでも入れておくか。

・・・

「な、長かった・・・。」

さすが、校長。長い話をありがとうございます。おかげで何度眠りかけた事か・・・。

アイリスが声を掛けてくれなかったら確実に夢の国に行っていたなで、デュエルアカデミアとノース校の友好試合は終わり、ノース校の生徒達は輸送機に乗せられて元の学園へと戻っていった。ちなみに万丈目は復学し、デュエルアカデミアに戻ってきた。が、勝利したためかブルーのまま戻ってきたらしい。

エドは別の機体で外国へと行ったそうだ。何かヘル化フラグが立ったような気がするな。

さて、友好デュエルの全プログラムも終わったし、皆と共に帰ろうと思った矢先・・・

「あれ？」

ドサツ

物凄い悪寒と共に全身から力が抜け、倒れた。

（翔！しっかりしてください。翔！！）

アイリスの言葉に返事をしようとしたが、声が出ない。

呼吸をすれば、悪寒が体を蝕む。だが、熱のせいで体が新鮮な空気を求め、呼吸を要求する。そしてこの悪循環が繰り返り広げられていた。

「翔、大丈夫か!？」

「おい、しっかりしろ!」

「皆。翔を保健室に運ぶぞ!」

「ああ!」

十代たちの声がかすかに聞こえる・・・だが、返事は出来ない。
徐々に薄れていく意識。最後に感じたのはとてもやさしく、温かい
何かが俺に触れていた。それに安心したのか。俺の意識は壊れたテ
レビのごとく、ぷつんと切れてしまった。

フィールド18：プロと地獄と吸血部隊（後書き）

と言うことで、デュエルアカデミア側の勝利でした。

ちなみにエドのデッキは「カオス」でした。何？デッキレシピを見せるだど？・・・すみません。適当なのでそんなものはありません。

o r z

この小説は勢いオンリーなので、気にしたら負けなのです！（ここに重要）

フィールド19：欲求（前書き）

今回は久しぶりのセブンスターズが出てきますが、やはり作者の力量不足で性格がおかしいかもしれないのでご了承を。

また兄さんが少し暴走します。これがうちの兄さんだ！！

フィールド19：欲求

十代たちによって運ばれ、ベットに寝かされた翔。保健室にいた女医が薬を投与してくれたおかげで、今はぐっすりと寝ている。

「翔は無事なんですか？」

「ええ。早めに看病できたのが救いだっただわ。」

「よかった。」

女医の言葉に安堵する十代。

皆もほっとしているようだ。これで助からなかったと思うとぞっとしただろう。

「あれ？そういえば鮎川先生の姿が見えませんか？」

「鮎川先生は都合により、本州に戻っています。私は臨時担当として来たミーネです。」

疑問に思ったマルタンに女医が答える。

すると、クロノス先生が何かを持って来て保健室に訪れた。

「皆にこれを渡すようにと校長から言われていたノーネ。」

「これは？」

「何か嫌な予感がするわ。」

「何でもこの鍵を絶対に奪われてはならないと強く言って、出張したノーネ。」

「意味が分からん。」

クロノス先生から少し古びた7つの鍵を見せられ、不安や不信に思う一同。

しかし、凧だけが驚いた表情になっていた。

「・・・これがこんな場所にあったとは。」

「シニョール神楽坂はこれを知っているノーネ？」

「ええ、一応は。この学園、いやこの土地と関係がある物とだけ言っておきます。ですが。」

凧がクロノス先生の疑問に答える。

しかし、言葉を濁らせて喋りたくない部分もあるらしい。

ふと、凧がミーネと名乗った女医を見る。

「あ、私は少し席を外した方がいいかしら？」

「すみません。」

「いえいえ。」

そういつとミーネは保健室から退出した。

「何で、彼女には話さないんだい？」

「秘密は知っている人が少ないほうがいいですから。まあ、皆はこれを預かる身だから知っておいた方がいいか。」

吹雪さんから質問を受け、黙っておこうとするが皆も自分と同じ立場になってしまったため、凧は覚悟を決めて話すことにした。

「簡単に言うと、この鍵はかつてこの土地で起こった大いなる災いとやらを封印した結界を解く鍵だそうだ。この鍵を使えば恐らく結界が破れ、その大いなる災いが復活するだろう。」

「でもなんでそんな物を？」

「さあ、恐らく校長に就いた者が代々守護者としてこの鍵を守ってきたのかもしれませんが、で、今回出張するのでその間これを守ってくれと言う事じゃないでしょうか？」

「なるほど。これはかなり厄介な代物だな。」

「そうなのーネ。万が一無くしたら大変な事になるのーネ！」

「そうね。ちゃんと私達が保管しておかないと。」

凧の簡単な説明に皆は頭を悩ませつつ、覚悟を決める。

「ところで預かり人は誰になったんですか？」

「良い質問なのーネ。こほん。」

三沢の質問にクロノス先生が咳払いをして答えようとする。

ごくり・・・責任重大な役割のため、場に緊張が走った。

「遊城 十代」。「丸藤 翔」。「三沢 大地」。「丸藤 亮」。

「天上院 明日香」。

「万丈目 準」。そして私「クロノス・デイメチ」の7人なノーネ

」

名前が発表され、クロノス先生から順番に鍵を渡されていく。特に不満は無く、皆は素直に受け取った。十代がはしゃぐかと心配されたが、翔が寝ているため控えていた。

「僕は父さんや準のサポートに回ろうと思います。」

「じゃあ、僕も明日香や三沢君のサポートに回ろうかな。」

「なら、俺は十代のサポートと情報収集に回りますから、カイザーは翔のサポートをお願いします。」

「ああ、まかせろ。」

マルタン、吹雪、凧が選ばれた人のサポートに回り、皆の役割は決まった。

「ところで、翔の鍵はどうする。誰かが預かっておくか？」

万丈目が翔を見て、口にする。

すると十代が

「ああ、後から俺が翔に渡しておくよ。」

と言い、クロノス先生から鍵を預かった。

「わかった。なら、ここで解散だな。」

亮のこの一声で皆は保健室から退出して行った。
いや、十代だけが居残って咳いた。

「アイリス。ここに鍵は隠しておくから見張りを頼む。」

（はい。翔が起きたら渡しておきますね。）

「サンキュー！じゃあな、アイリス。行くぞ相棒！」

（クリクリ〜）

（十代さん、ハネクリボーも気をつけて。）

翔が寝ている枕の下に隠し、十代は保健室を出て行った。

・・・

（ふふふ、やっとお宝を見つけたわ！）

ミーネと名乗っていた女医が保健室から少し離れた場所で不気味な笑い方をしていた。ばれない様に盗聴器を置いて、保健室から出たのが幸いしたようだ。

（さて、お頭に報告しなくちゃ。）

彼女はすぐさま、その場から去っていった。

・・・

(マスター。)

実体化して、私はそつと翔の額を触る。

今はぐっすり寝ているが、熱はまったく下がっていないようだ。

ふと、今さっきの女医の行動に不審な点がいくつか湧き上がった。

(普通、熱が出たら水で濡らしたタオルか何かを額に乗せて冷やすはずだけど、あの女医は薬を飲ませて後はそのままにしていたわ。)

女医が患者に薬を飲ませて、はいさよならとするだろうか？しかもあの女医は何かはぎこちない動きをしていた。

(まさか。)

私は女医が翔に飲ませた薬を調べてみる事にした。

えっとこの棚の・・・あった。確かこの薬を飲ませていたはず。何々、「睡眠薬」!?

まさか翔がぐっすり寝ているのはこの薬のせいなの？

ちゃんと治療していないじゃない!!

はあ。とりあえず容器とタオルを取ってきて、と。容器に水を入れて、タオルを水に浸してよく絞り、翔の額に乗せる。

(しかし、あのミネって女医は帰ってきませんね。)

いや、翔に睡眠薬を飲ませたという事は何かしらの目的があったのかしら？しかし何のために？

私は翔が寝ているベットの端に座りながら、思考を走らせた。

・・・

「う、うう……。」

ぼーっとしつつ、体を起こした。頭の中がもやっとしてあまり考えられない。が、体の震えは止まっているようだ。

呼吸をしても悪寒は感じられない。

「マスター。大丈夫ですか？」

ふと、隣にアイリスがいた。どうやら実体化しているらしい。辺りを見渡して、やっとここが保健室だという事が分かった。

「あ、ああ……何とか。頭の中がぼんやりしていて、正直とても気持ち悪いが。」

「もう少し寝ていた方がよいのではないのでしょうか？」

「ん。」

アイリスの提案に素直に従い、再び布団の中に入った。すると、アイリスが

「私も一緒にしてもいいですか？」

と少し恥ずかしがりながら言っていた。別段断る理由もないし。

「ああ。いいぞ。」

「では、失礼します。」

アイリスが隣のベットから枕を持って来て、モソモソっと布団の中に入って来た。お互いが見つめあう状態になっている。いつもなら恥ずかしいのかもしれないが、眠気が何も考えさせしてくれない。

「お休み。アイリス。」

「お休みなさい。マスター。」

そして再び俺は睡魔に誘われ、眠りについた。

しかし、眠る寸前に俺の頭に何かが巻かれるのがわかった。ひんやりして、気持ちいい・・・な・・・zzz。

・・・

私は翔が起きた時に落ちてしまったタオルを翔の頭に巻かせ、鉢巻の格好にする。

これでも少しは落ち着くはずだ。私は翔の体を抱きしめ、少しでも体を温める態勢を取る。すると、翔の体温を感じて安心したのか。私にも眠気が来た。

そうして、私も眠りに着く。お休みなさい。翔・・・。

・・・

デュエルアカデミアから少し海岸沿いの所に小さな洞窟があり、ミネはその洞窟に入っていた。すると中には黒蠍のマークと眼帯をつけたの男性が待っていた。

「ミネ。例のお宝の場所は？」

「はい。かの学生達と教員が所有していると聞きました。」

「なら、後はそいつらの目を盗んで奪うだけか。」

「チツクが今学生達の監視をしていますので、後は皆が戻るのを待つだけかと。」

「ついでに私とクリフも作業の準備が完了した。」

「学園と宿舎の警備システムは沈黙させました。いつでも行けませー！」

ミーネの後ろから豪腕な男性と少しやせ型の男性が入ってくる。

「学生の方は調べがついた！後は教員だけど・・・。」

続いて1人の少年が入ってきた。

「まあ、気にするな。大体の目星はついていいるからな。よし行くぞ！毒蠍盗掘団！！！」

「「「「「おお！！」「」「」」」」

洞窟内で微かな陰謀が今、蠢こうとしていた。

・・・

そして、時刻は真夜中。

学園と各寮の電気は消え、暗闇がこの場を支配していた。

その中に5人の人影が走る。

「6つの鍵は確保しやした。」

「しかし、残りの一つがまだ発見出来ていません。」

「どうします?。」

ミーネの手引きに従って動いていた3人が首領である男性に報告する。

6つまでは首尾良く手に入った物の、まさか最後の一つで手間取る事になるとは。

そういうことで慌てているのだろう・・・だが。

「そう慌てるな。後の一つは既にミーネが取りに行った。」

・・・

ガコンツ！保健室の天井から1人の女性が現れる。

右腕には黒蠍のマークが入っており、またその手には鞭が握られていた。

「ふふ。よく眠っているわね・・・。」

私は昼間に運ばれた生徒を見る。どうやら睡眠薬がよく効いているらしい。

しかし、1つだけ誤算があった。

「しかし、まさかこんな年で同衾とはねえ・・・マせているわね。」

そう、見知らぬ女と一緒に寝ているのだ。少々呆れるが、仕事に支障はない。

「じゃあ、いただくわよ！」

ミーネが鞭を振るい、生徒が寝ている枕の下の鍵を取ろうとした。だが、

ガバツ！ シュピンツ！！

つつ！ 私の鞭が切られた！？

あの生徒と一緒に寝ていた女が起き上がって、切り落としたのね。

私は注意深くあの女を観察した。あの服装と頬の紋章は・・・「ガ
ーディアン」！？

私達にとっては最大の疫病神じゃない！！

「つく！ 今回は見逃してあげるわ！」

私は保健室の窓を開け、すぐさまその場から逃げ出す。

・・・

「逃げましたか。」

私は刀を納め、出て行った相手を思い出した。

まさかミーネさんが盗賊とは・・・。

と、翔が起きたみたいですね。

・・・

「な、何か騒ぎが起きたようだな。」

完全、とはいかないが前よりは頭の中がすっきりしていた。そして頭に巻かれていたタオルを外し、体を起こす。

「マスター。おはようございます。」

「おはよう。アイリス。・・・じゃ、ないだろ。時間的に。」

「そ、そうですね。」

保健室に飾られた時計を見てみると、12時を指していた。無論外は真っ暗だが。まあ、それは置いといて。

とりあえず今さっきの騒ぎはなんだったのか聞いてみよう。

「で、今さっきの騒ぎはなんだったんだ？」

「実は・・・。」

アイリスからミーネという女医の話と鍵についての伝言を聞いた。まさか、セブンスターズが動き始めたのか？あと3日で夏休みになるこのタイミングで？

とりあえず、十代が置いていった鍵を見つけるか。

「えっと、枕の下に・・・あった。」

寝づらかったと思ったならコレのせいか。まあ、今は十分睡眠を取ったからいいけどさ。

どうでもいい話だが昔、バ 殿でスケベな本を枕に敷いてその夢を見るとかいう話があったなあ。懐かしい。と、それは置いといて。

さてはて・・・どうやって黒蠍の奴らを追っかな。
と考えていた時、携帯からメールが来た。

「鍵を盗んだ犯人が海岸沿いに逃げた。 凧より」

どうやら凧が奴らの場所を特定したようだ。しかし、どうやって発見したんだろ？

凧に聞いてみるか。そして返信が帰ってきた。

「発信機は便利 凧より」

どうやって発信機を手に入れたのか、また鍵に発信機を仕込んだのかはわからないが・・・ともかく行ってみるか！

と、その前に内ポケットのカードをデッキに入れる。

何のカードが入ったかは分からないが、そっちの方が面白そうだったからだ。

「じゃ、行きますか。」

「そうですね。」

アイリスを精霊化させ、俺は保健室を後にした。

・・・

俺が行ってみると、兄さんと十代がいた。

「どうやら風邪は治ったらしいな。」

「おはよう。翔。」

「まあね。といつても、体調は万全ではないけど。それと十代。今は夜だから「こんばんは」だろ？」

「そっぴやそっぴやだったな。」

十代が笑つてごまかす。

と、そっぴやええば

「他の皆は？」

「念のために寮の守備を固めるように指示した。レッドにも万丈目が行つたから、他の生徒に危害を加えられる事は無いだろう。」

「確かに。」

兄さんの言葉に納得する。

下手な面子が来ても、返り討ちにする事が出来そうだ。

「じゃあ、尻から貸してもらつたこのセンサーを頼りに行つてみようぜ！」

十代がポケットから発信機を感知する装置を取り出した。準備いいな。

「行くぞ。十代！翔！」

「おう！」

「はい！」

・・・

俺達が発信機を頼りに行ってみると、海岸線沿いに小さな洞窟があった。

その中にはやはり「黒蠍盗賊団」のメンバーがいた。

「まさか、ここが気づかれるとは。」

「へへ、俺達の方が一枚上手だったな。」

驚く「黒蠍盗賊団」。まあ、普通鍵に発信機を取り付ける奴なんてそうはいないしな。

すると、眼帯をつけたリーダー格らしき男が前に出てきた。

「1つ勝負をしないか？」

「「勝負？」」

いきなり勝負の提案をしてきた。おそらくは鍵をかけた決闘ってことか？

「そうだ。もしお前達が勝てばこの鍵を全て返し、私達はこの地を去ろう。だが、私達が勝ったら、残りの鍵をいただく。ちなみに戦うのは私と眼鏡をかけた少年。お前だ。」

どうやら俺を指名したらしい。唯一鍵を持っている存在だから、それが適切だと言える。しかし、かなりハイリターンだな。

「いいのか？お前達が負ければ、今までの苦労が全て水の泡だが。」

「ああ。勝負はいつも全賭け！それが私達「黒蠍盗賊団」だ！」

俺の質問に首領らしき人物がドンと答え、「黒蠍盗賊団」のところ
で、団員全員でポーズをとる。・・・かなり間抜けに見えるんだが。

「翔！負けるなよ！」

「・・・病み上がりだから無理はするな。」

「ありがとう。十代！兄さん、俺なら大丈夫です。」

そして俺と黒蠍首領が構える。

「決闘！！！！」

「私の先攻、ドロー！私は手札から魔法カード「増援」を発動！デ
ツキからレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える！私
はデッキから「首領・ザルグ」を手札に加える！」

やはり「黒蠍」関係のカードを持って来たか！

「さらに手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカ
ードを2枚ドロウする！そして私は私自身のカード「首領・ザルグ」
を召喚する！ここはせっかくだから、バトルの場には我々自身が参
上する。」

首領・ザルグ ATK1400

そう言うと、ザグル自身フィールド上に足を進めた。

・・・

「私自身・・・何を言っている？」

「そうか、あいつは精霊なんだ！」

「精霊？どういう事だ、十代。」

精霊の意味がわからず困っていた兄さんに、十代が苦戦しながらも教える。

ハネクリボーの存在は実体化できないため、言葉で話さないと伝わらないのが大変だな。そういう意味ではアイリスは本当に助かるよ。で、何とか兄さんは状況を飲み込んだようだ。

「つまり、あの5人は人間ではなくカードに宿る精霊でいいのか？」

「ああ、おそらくだけどな！」

すると兄さんは難しい顔になった。頭の回転が速いつて時にはきついな。

「なら、シリーズ系で戦う可能性がある・・・。翔、油断するなよ。」

「翔なら大丈夫だって。頑張れー！翔！」

そんな兄さんとは対照的に、十代は普段と同じく応援している。そこが十代の強さなのかもしれないが。

・・・

「さらに手札から魔法カード「黒蠍団召集」を発動！自分の場に「首領・ザルグ」が存在する時、自分の手札から「黒蠍」と名のついたモンスターを全て特殊召喚する事が出来る！ただし、同名カードは1枚のみだな。集まれ、野郎共！」

「「「「「おお！」「」「」」」」

ザルグの声に黒蠍のメンバーが答え、場に集まった！

「黒蠍一の力持ち！強力のゴグ！」

黒蠍 - 強力のゴグ ATK1800

ハンマーを持った凶体のでかい男性が場に足を運ぶ。

「黒蠍の紅一点！茨のミーネ！」

黒蠍 茨のミーネ ATK1000

続いて鞭を持った女性が場に出る。今さっきアイリスと戦ったのはこの人か。

「どんな罫でも朝飯前！罫はずしのクリフ！」

黒蠍 罫はずしのクリフ ATK1200

ナイフを持ち、眼鏡をかけた痩せ型の男性が場に出た。

「お宝いただきゃ、後はトンスラ！逃げ足のチック！」

黒蠍 逃げ足のチック ATK1000

最後にまだ見習いという感じがする少年が現れた。

「「「「「我ら黒蠍盗掘団！！！！！」」」」」

「か、かっけー！！何かの戦隊物か！？」

十代がキラキラした目で黒蠍盗賊団を見る。どちらかと言うと、戦隊物と言うよりワンースじゃないか？てか、そんな戦隊物は絶対に嫌だ！

「そして手札から永続魔法「連合軍」を発動！私の場にいる戦士族・魔法使い族の1体につき、私の場の戦士族は200ポイントアップ！我ら黒蠍盗掘団は全員戦士族！よって攻撃力は全員1000ポイントアップする！」

首領・ザルグ ATK1400 2400

黒蠍 - 強力のコグ ATK1800 2800

黒蠍 茨のミーネ ATK1000 2000

黒蠍 罨はずしのクリフ ATK1200 2200

黒蠍 逃げ足のチック ATK1000 2000

げげっ！かなり面倒な展開になってきたな。

てか、この戦法を見ると城之内&玲子ペアを思い出すよ。

「これで私のターンは終了だ！」

首領・ザルグ 手札0 場 モンスター5 永続魔法1 伏せ0
永続魔法「連合軍」

首領・ザルグ ATK2400

黒蠍・強力のゴグ ATK2800

黒蠍 茨のミーネ ATK2000

黒蠍 罨はずしのクリフ ATK2200

黒蠍 逃げ足のチック ATK2000

「俺のターン、ドロー！」

これって・・・1キル出来るんだがどうしようか？

(思いつきりやってください。マスター!!！)
アイリスからも賛同の声をいただいたので、行きますか。

「俺は自分の墓地にモンスターが存在しない。よって手札から「ガーディアン・エアトス」を特殊召喚！」

ガーディアン・エアトス ATK2500

今回は音楽は無しだ。前回アレをやって物凄く怒られたからなあ。

「「「「「ガーディアン」だと!?!」「」「」「」

黒蠍のメンバー全員が驚いていた。

どうやら黒蠍盗掘団とガーディアンは何かしらの関係があるらしい。
盗み手と守り手の関係って奴かもしれないが・・・まあ、いいや。

「俺は手札から速攻魔法「サイクロン」を発動！魔法・罨カードを1枚破壊する。俺はそちらの場の「連合軍」を破壊する！」

「何!?!」

突風が吹き、ザルীগが発動した「連合軍」が木っ端微塵になる。

「そして「連合軍」がなくなった事により、黒蠍盗掘団の攻撃力は元に戻る！」

首領・ザルীগ ATK2400 1400

黒蠍 - 強力のゴーグ ATK2800 1800

黒蠍 茨のミーネ ATK2000 1000

黒蠍 罨はずしのクリフ ATK2200 1200

黒蠍 逃げ足のチック ATK2000 1000

「つく！」

攻撃力が元に戻ったことでザルীগの顔に焦りが奔る。黒蠍は1人1人では力不足なのでサポートカードが欠かせないのだ。

「そして手札から魔法カード「アームズ・ホール」を発動！このターン俺は通常召喚を行うことが出来ない。そしてデッキの上からカードを1枚墓地へ送り、俺はデッキから装備魔法「魔道師の力」を手札に加え、シャッフル。」

ちなみに墓地に送られたカードは「天使の施し」。地味に痛いけど、このターンにケリがつけられれば問題ない。

「そしてカードを2枚伏せ、手札から装備魔法「魔道師の力」を2枚発動！「ガーディアン・エアトス」に装備！ちなみに「魔道師の力」の効果は自分の魔法・罠ゾーンにあるカード1枚につき攻撃力・守備力が500ポイントアップ！俺の魔法・罠ゾーンには4枚。よって2000ポイントアップ！」

ガーディアン・エアトス ATK 2500 4500 6500

「……攻撃力6500だと！？」「……」

黒蠍のメンバーが焦りだす。まさか初ターンでケリがつけられるとは思っていなかったようだ。

「アイリス。誰に攻撃しようか？」

アイリスに尋ねる。誰を狙っても一撃必殺には変わりはないからだ。

「なら、ミーネさんで。」

「……ま、まさかお前も精霊か！？」「……」

黒蠍盗掘団の全員と兄さんが驚いていた。

そつえばまだ兄さんには話していなかった。まあ、置いておこう。

「よし、じゃあ……「ガーディアン・エアトス」で「黒蠍 茨のミーネ」に攻撃！」

「ひい！」

攻撃対象になったミーネが悲鳴を上げる。
そりゃ、誰だって地獄への片道切符を渡されたら悲鳴ぐらい上げる
わな。

「ミーネさん。」

アイリスが黒い笑顔でミーネを見る。

左手は既に刀を召喚し、構えの態勢に入ろうとしていた。

「はははい！」

カタカタ震えながらミーネはアイリスの方を向き、必死に逃げ出そうとするが体が動かないみたいだ。

「人の安眠を邪魔する者は馬に蹴られなさい！」

「お助けえー！！！」

アイリスが刀を抜き、夜空にミーネの声が響いた。

チンッ！

ドサリッ！

アイリスが刀を鞘へと戻すと、ミーネがふらつと倒れた。

首領・ザルীগ LP4000 - 1500

「「「「ミーネ!」」」」

黒蠍のメンバーがミーネを心配して集まる。
しっかり呼吸をしているから、恐らく大丈夫だろう。

「加減はしていますから恐らく、大丈夫です。」

アイリスはこう言っているが、プロの峰打ちだとショック死する恐れがあるんだが。

不安だ……。てか、恐らくで一旦切っている所が怖いよ。

「うっ、お頭。皆。」

「「「「ミーネ!」」」」

どうやらミーネが目を覚ましたようだ。

手加減したとはいえ、すぐに目が覚めるのは凄い根性だ。
と考えると、ザルグが俺に近づいてきた。

「私達の負けだ。これを受け取れ。」

そういうと6つの鍵を渡してくれた。律儀だな。
ちやっかり逃げ出すかと思ったんだが。

「さて、約束通り私達はこの地を去るか。」

ミーネが何とか自力で立ち上がり、黒蠍盗掘団が去ろうとする。
と、その前に気になったことがあるので聞いてみるか。

「と、その前に1つ聞きたいんだが。」

「なんだ？」

「黒蠍とガーディアンってどんな関係なんだ？」

すると黒蠍のメンバーは全員笑っていた。

「私達にとっては、疫病神であり永遠の厄介者だったよ。もっとも、守られる側としては頼れる存在かもしれんが。」

「なるほどな。」

「納得してくれたようだな。さて、行くか！野郎共！」

「くくくくおお！」「くくく」

「くくくくく我ら「黒蠍盗掘団」！」「くくく」

ザルグが拳を掲げると、黒蠍のメンバーが声を上げた。そして例のポーズを取ると、その場から一気に走り去った。サイボーグ化された黒ネコの敵部隊を思い出すな……それと夜中に近所迷惑だろ。あの掛け声は。

「くーっ！やっぱり黒蠍盗掘団はかっこいいぜ！」

「これで全ての鍵を取り戻せたな。」

十代はまだあの掛け声にお熱が入っているようだ。それに反し、兄さんが冷静に話しかけているのは凄くシユールだよ。

「そして翔。なぜ精霊の事を黙っていたんだ？」

兄さんが俺の両肩を掴み、正面から俺の顔を見る。一気に真面目な雰囲気になる。変な答えは出来ないな。

「それは……。」

俺が言いかけようとしたとき、

「もしかしたら愛しのピケルやクランに会えるかもしれないのに！」

「はっ？」

血涙を流しながら凄い勢いで迫る兄さん。

わ、忘れてたーっ！この人が「YesロリータNoタッチ」な人間である事を。

「に、兄さん落ち着いて！」

「落ち着いて、い、ら、れ、る、かー！！！！！」

物凄い勢いで肩を揺さぶられ、頭の中がミキサーでシェイクされるような気分だ。

俺がプラモだったら、首関節がとくに折れて「これ、母さんです。」「状態になっっているぞ！」

「いかん。こんな無駄な事をしている場合じゃない！同士三沢にさっそく報告せねば！待ってる。ピケル！クラン！俺が探して出しからなー！！！」

そう叫ぶと兄さんは物凄い勢いでイエロー寮に向かった。
欲望って怖いね。本当に。

「し、翔・・・大丈夫か？」

十代が俺を心配して声を掛けてくれる。

「ああ、ありがとう十代。すまないが鍵を持って先に帰って
いてくれ。」

「無理はするなよ。」

「ああ。」

俺から鍵を受け取った十代はレッド寮に戻っていった。
そして少し休んだ後、俺もレッド寮へと戻った。

・・・

「今日は散々でしたね。」

「まっただ。」

自室に戻り、アイリスと話す。

ああ、頭の中がまだグワングワンする。

・・・うう、気持ち悪い。こういつときは早く寝るに限る。そう思
うとすぐに布団を敷き、電気を消して中へ入った。そして忘れた頃
に悪夢は戻ってくるのは鉄則だ。

「やべ、また風邪を引いたのかもしれない。」

少し体調がおかしい。さすがに夜中は厳しかったか。

「目を閉じてこちらを向いてください。」

同じく布団に入ったアイリスから目を閉じるように言われる。何を
する気だ？

まあ、言われたとおりに目を閉じてアイリスの方を向く。どの道寝
るのだから、目を閉じなければならぬしな。

「目を閉じたぞ。」

「じゃあ、風邪を早く治すおまじないをしますね。」

チュツ

前とは違い、軽い方だがそれでも十分驚いた。

「アイリス。お前に風邪が移ったらどうするつもりだっ!」

「その時は、マスターが看病してくれると信じていますから。」

「はあ。・・・まあ、その時は看病するよ。」

「じゃあ、その時を楽しみに待っています。」

「楽しむなよ・・・。」

「ふふふ、おやすみなさい。翔。」

「おやすみ。アイリス。」

そうして俺達は眠りについた。

ちなみに次の日は思いつき風邪をぶり返したので、帰りの船のチケットが取れず夏休みが始まって一週間はデュエルアカデミアに残らなければならなくなった。

ナンテコッタイ！！

フィールド19：欲求（後書き）

と云うことでVS黒蠍盗掘団でした。
次回は番外編の予定です。

フィールド20：夏・シチュエーションボタン（番外編）（前書き）

今回は番外編なので決闘は一切ありません。ご了承ください。

ルールは以下。

- 1 必ず二人でやること。キャラクターの版權、オリジナル関係なし。
- 2 夏に関係がある物とする事（例、プール、海、夏祭りなど）
- 3 二つ以上する事
- 4 必ず一人以上に回す（送り返しも可）

ZET様からバトンをいただきました。ありがとうございます。

今回のカップリングは翔×アイリス、吹雪×明日香です。

フィールド20：夏・シチューエーションバトン（番外編）

ミン、ミン、ミンッ

セミの鳴き声がデュエルアカデミアに響き渡る。

しかしアカデミアから話し声はまったく聞こえず、ただ数人の警備員が泊り込みで見張っているだけであった。今は夏休みに入っており、学生はもちろんのこと先生たちもみんな里帰りをしているのだ。1人の学生を除いて。

「まさか直前になって体調を崩すとはなあ。」

レッド寮の自分の部屋で翔が呟く。彼も里帰りを予定していたが、直前になって風邪をぶり返すというアクシデントに見舞われ、残念ながらアカデミアに残らなければならなくなった。今ではすっかり治り、週一の定期便を待つだけなのだが・・・

「せっかくの祭りがパー・・・か。」

皆で行こうと予定していた祭りや花火大会が自分だけ行けなくなり、少し残念だった。さらにこの一週間に祭りが集中しているため、落胆も大きい。

「まあ、悔しがっても仕方が無いか。」

未練はあったものの、割り切ることにした。

何せ自分の体調管理の甘さが引き起こした事なのだから。

「ただいま戻りました。マスター。」

「ん、おかえり。アイリス。」

俺の精霊であり、相棒でもある「アイリス」は今まで守護者の里に帰っていたらしい。

何でも1年に1度の会議があるんだとか。お疲れ様です。

「で、会議のほうはどうだったんだ？」

「いつも通りですね。このまま平穏に過ごす予定です。」

「そうか。」

アイリスの故郷である精霊世界の守護者の里は、「ライトロード」を初めとする様々な所と同盟関係を築いているが、今はどこも平穏なので特にすることは無いらしい。

「しかし、10分前後で終わる会議ってのは凄いやなあ。」

「まあ、平和が一番ですから。」

アイリスが苦笑して答える。俺も寂しいので早めに帰ってきてくれたほうが嬉しいが・・・流石に会議をする必要があるのだろうか？

「ここじゃあ、暇だし。外に出ないか？意外と眺めはいいし。」

「いいですね。行きましようか。」

「よし、行くか。」

一応鍵をしておく。泥棒が入ったら不味いからなあ。

・・・

「ふーっ、やっぱりこの景色はいいな。」

「そうですね。潮風も気持ちいいですし。」

ということでもレッド寮から出て、外を見渡す。海が綺麗なもんだ。普段なら忙しくてあまり見ていなかったが、こうしてゆっくりして見ると中々いい景色だと思つ。

「こうしてゆったりするのも悪くないですね。」

「そうだな。」

俺とアイリスが肩を寄せ合つて座りこむ。

皆がいた時はこんな事に気づかず動き回っていたからなあ。それだけ大変だったってことか。無論、楽しかったが。

「しかし、二人つきりつてのは少し恥ずかしいな。」

「そ、そうですね。」

頬をかきながら言うと、アイリスは少し顔を赤くする。

少しこそばゆい気分だ。秀困気を変えるために、前々から聞こうと思っていた事を聞いてみるか。

「なあ、アイリス。」

「何ですか？マスター。」

「もし、お前が自由になったとしたら・・・何をしたい？」

「自由ですか？」

「ああ。」

その言葉にアイリスは悩みだす。まあ、無理もないか。いきなりこんな質問をされても悩むのは当たり前だし。

「そうですね。・・・いつもと同じように翔の傍にいますよ？」

「え？」

にっこりと笑いながらアイリスは答える。その答えに俺は少し戸惑った。てつきり夢を追いかけたり、里に帰って皆と共に生きると思ったんだが・・・この答えは予想外でした。

「私はあなたを愛しています。他の誰よりも。あなたの傍にいる事が、あなたの役に立てるのが私の幸せです。だから、自由になったとしてもあなたの傍から離れたくないんです。」

顔を真っ赤にしながらも、伏せず言い切った。これってまさか、プロポーズか！？

「そ、そうか。」

聞いているこっちも真っ赤にならざるを得ないな。うん。

「翔は・・・私の事をどう思っているのですか？」

顔を真っ赤にしたまま、今度はアイリスが俺に質問してきた。

どう思っているか・・・か。決まっている。まあ、こういうのは口に出すんじゃない行動で示すべきだな。そう決心すると俺はアイリスを抱き寄せ、キスをする。
少し時が経ち、唇が離れた。

「俺も、アイリスを愛している。」

陳腐な答えだと思いつつも、この言葉しか出せなかった。

すると今度はアイリスから抱き寄せられ、再び唇が重なり合う。

決して離れることなく、二人はそのまま抱き合い求め合った。辺りには波の音とカモメの鳴き声が静かに響き渡った。

・・・

「兄さん、聞こえているの？」

「え、ああ・・・ごめん。」

「もう、すっかりしてよ。」

僕達は今、デュエルアカデミアの夏休み期間を利用して故郷へ戻っていた。

半年あまりではそこまで町並みは変わらないものの、それでもデュエルアカデミアから帰ってくるとほっとするものがある。ここが田舎だからだろうか？

そして今日、この町で毎年恒例の祭りがある。もちろん僕も参加す

るけどね。そうしたら明日香が「私も一緒に連れて行って」と言うことなので、一緒に祭りを楽しんでいた。ちなみに明日香は浴衣を着ている。風流だし、何より似合っているよ。

そうして祭りで賑わっている街中を歩いていると、懐かしいカキ氷屋を見つけた。

「永原のおじさん。こんばんは。」

「こんばんは。おじ様。」

「おや、吹雪に明日香ちゃんじゃないか。うちのカキ氷なんてどうだい？」

「じゃあ2つお願いします。」

「毎度！しかし、お前さんたちが来てくれて、俺は嬉しいよ。」

このカキ氷屋の永原さんには、よく世話になっている。何でもお父さんの昔なじみらしく、出張で家を留守にしがちだった両親の変わりに幼かった僕たちの面倒を喜んで見てくれた人物でもある。正直親よりも尊敬している。

永原さんと話していると、後ろから懐かしい声が聞こえた。

「あら、吹雪ちゃんじゃない。久しぶりねえ。」

「あ、三河さん。お久しぶりです。」

「お久しぶりです。三河さん。」

「明日香ちゃんも綺麗になったわねえ。」

そう言うと三河さんは明日香と何やら話し始めた。

この三河さんは、明日香が困っていた時によく相談に乗ってくれた人だ。地元では肝っ玉母ちゃんと呼ばれ、慕われている。

「おう、三河さんじゃないですか。お子さんはどうですかい？」

「それがねえ。」

永原さんが三河さんに話しかけると、そのまま何やら話し始めた。子供さんの話らしいが、残念ながら僕にはちょっと分からない話題かな。何年後かしたら僕もこの話題に参加できそうだけどね。

「兄さん。そろそろ花火が始まるから、あの場所に行きましょう。」

明日香が腕時計を見て、僕に話しかける。

もうそんなに時間が経ったのか・・・速いなあ。

「じゃあ、永原さん。三河さん。僕たちはこれで。」

「失礼します。」

断りを入れて行こうとすると、永原さんに止められた。

「吹雪、忘れ物だ。」

そう言うと頼んでいた力キ氷を2つ渡された。やばい、すっかり忘れていた・・・。

そう思っていると、永原さんから

「まったく、吹雪は相変わらず慌てん坊だな。ははは！」

と笑われ、肩を叩かれる。おっとっと、カキ氷を落とさないようにしっかり持つとかないと。ううう・・・面目ない。

「じゃあ、吹雪。明日香ちゃん。また遊びに来いよ？」

「何かあったらいつでも相談しに来てね。」

「はい。ありがとうございます。」

「それでは、失礼します。」

僕たちは永原さんのカキ氷屋を離れ、明日香が言っていたあの場所へと向かった。

・・・

この町には隠れた丘があり、毎年そこで明日香と二人っきりで花火を見ている。

幼い頃は僕たちの秘密の場所としてよく遊びに来ていたなあ。

懐かしい思い出に浸りながら、僕たちは一本の木を背に座り込む。

「明日香はカキ氷を食べるかい？」

「じゃあ、イチゴの方をお願い。」

「ん、わかった。」

僕は左手に持っていたイチゴシロップが掛けられたカキ氷を渡す。実を言うと、カキ氷の冷たさで手の感覚が少しなくなってきたから危なかったよ。

そうして僕達はカキ氷を食べ始めた。ちなみに僕の方はハワイアンブルーのシロップが掛けられている。

・・・つくー。やっぱりおいしさと冷たさは変わらないなあ。

「おいしいね。おにいちゃん。」

「そうだね。明日香。」

明日香が万遍の笑みで僕を見つめている。ちなみに僕の事を「おにいちゃん」と呼んでくれるのはこの場所だけだったりするんだ。やっぱりここなら本当の自分をさらけ出す事が出来るからかな？ そう思っていると

ヒュ〜・・・バーンッ！

一発目の花火が上がった。どうやら花火大会が始まったようだ。

「おお、綺麗だね。」

「た〜まや〜。」

僕が花火に感動していると、明日香が懐かしい事を言う。アレの続きって、実を言うと知らないんだよね〜。

まあ、それはさておき。最初の花火をきっかけに、次々と打ち上げられていく。

今さっきの大型版に、小型の連続発射、何かしらのキャラクターを模ったものまで空に描かれる。しかし、よくここまで派手に出来る

なあと関心してしまう。

そうしてあつという間に時間が過ぎてしまい・・・最後の一発となった。

まるで有終の美を飾るがごとく、空へと飛び、その美しさを人々の目に焼きつかせた。

「終わっちゃったね。」

「そうだね。」

花火大会が終わり、一気に静かになる。

あ、そういえばカキ氷をあんまり食べてなかった。

「明日香はもうカキ氷を食べ終わったのかい？」

「ううん。花火に見とれていて、すっかり忘れてちゃった。」

明日香も忘れていたのか。まあ、無理もないけどね。

「じゃあ、ゆつくり食べようか。」

「うん」

シヤク・・・シヤク・・・

カキ氷を掬い、食べる音だけが聞こえる。たまには、こんなのも悪くないね。

しかし、冷たいせいでキンキンする。うう・・・頭が痛い。

けど、何とか根性を出して食べきったよ。残すと永原さんに申し訳ないし。

どっちら明日香も食べ終わったようだ。

「さて、そろそろ帰ろうか。」

「そうね。っ！」

明日香が立とうとすると、いきなり倒れた。すぐさま駆け寄る。

「大丈夫かい？明日香。」

「ちよつと足を挫いちゃって。」

「なら・・・よつと」

「きゃ！ちよ、ちよつと兄さん!？」

倒れた明日香を背負う。そしてそれに驚く明日香。

口調がいつもどおりに戻ったのが少し悲しいけど、仕方が無い。

「大丈夫だって。誰も見てはいないよ。」

「そうだけど・・・うう。」

俯いて顔を僕の背中に隠そうとする明日香。

たぶん、顔を真っ赤にしているね。まあ、気にせず僕達はそのまま丘を降りた。

・・・

丘から降り、迂回して家へ帰ろうとする。

直進だと町に行つてしまい、皆からからかわれてしまうのだ。僕は構わないけど、明日香が気にするからね。そういえば……

「こうやって帰るのも懐かしいね。」

昔、明日香が道に迷つてしまい泣いている所を僕が発見し連れて帰ろうとするが、明日香が立てなくなってしまい、こうやって連れて帰った事があつた。

まあ、その後は永原さんから拳骨を食らつたのはいい思い出だ。

「そ、そうね。」

明日香が恥ずかしそうに答える。

そして会話はそこで止まり、僕の足音だけが辺りに響く。何で会話が止まったかつて？それは……

「すう……すう……。」

明日香が寝ちやつたからだ。僕の背中。

あの時も、同じように規則正しい寝息を立てぐっすり眠っていたっけ。

「ううん……おやすみ。おにいちゃん。」

自然と頬が緩み、温かい気持ちになる。

「今はおやすみ。明日香。」

月明かりが僕たちを照らし、やさしく見守っていた。

フィールド20：夏・シチューエーションバトン（番外編）（後書き）

裏話なんです、吹雪×明日香を書いていて明日香に少しツンを入れようと思ったら、いつの間にか近親相姦ネタになっており流石にまずいという事でお蔵入りになりました。

作者はツンを入れようとするのでレレが数倍の濃度で投下する癖があるみたいです。

どうしてこうなった・・・。

一応アイリスの故郷の精霊界もそこそこ設定は作っています。

第三期の精霊世界がどれだけ変わるかが予想できない。

バトンは凍夜 鬼哭様とガイウス様、そして時任嵐様と慧様に送ろうと思います。

フィールド21：夏祭り大会第一回戦目（神竜と金色の竜）（前書き）

何と言うか、セブンスターズの影が薄くて扱いに困っている作者です。

さて、今回は故郷での地域大会となっています。対戦相手はサブタイトルでバレバレかもしれませんが。

追記：サブタイトルをほんの少しだけ変えました。

フィールド21：夏祭り大会第一回戦目（神竜と金色の竜）

あの出来事から一週間後、俺達は帰りの船に乗船して自宅へと戻った。

寮で2人きりの生活も悪くは無かった。いや、むしろ中々良いものだとも感じられた。

まさかアイリスがあんな事やこんな事をしてくれるとは・・・ふう。どうでもいいが、今までは色々な事が起きたからなあ。

（話的には起こらないといけないんですけどね。）

（まあ、そうなんだけどさ。）

アイリスの言いたいこともわかる。だが、結構頻繁に問題が起こる方の身になってくれとしか言いようが無い。結構大変なんだぞ？名探偵が近くにおいて毎回殺人事件が起こるよりかはマシだが。

とまあ、心の中で愚痴っていたら兄さんがドアを開けて入ってきた。

「翔。今日は毎年恒例の決闘大会があるからお前も一緒に参加しないか？」

俺達の故郷は夏祭りの際、大規模な決闘大会があるのだ。去年は兄さんが修行でいなかったから俺が優勝したけど、今年はどうなるのだろうか？

「うん。いいよ。」

「よし。なら、準備はしておいてくれ。」

「わかった。」

俺がそう返事をする、兄さんは自分の部屋へと戻っていった。サイバーデッキを使うのか、スコープドッグを主軸にしたデッキを使うのかが分からないから、結構戦い辛いな。最悪「キメラテック・フォートレス・ドラゴン」(OCG版)で吸収するのも手か？あれ一枚で機械族アンチは出来るし。

いや、やめておこう。相手が禁止カードを使わない限りは。さて、俺もデッキ改良をするかな。

...

よし、これでいいだろ。

デッキを持って俺は玄関へと行く。すると兄さんが待っていた。

「翔。準備はいいか？」

「うん。行こうか、兄さん。」

「ああ。」

兄さんが玄関の扉に手を伸ばした時、外から玄関が開けられた。そして1人の男性が入って来た。

「よ、亮ちゃん！元気にしてたかい？」

陽気そうな声に、堅苦しさがまったく見えない人柄。にやっと笑っているが全然不快に思えず、むしろ人当たりが良さそうに感じる人だ。

顔と体格からして30歳前後かな。・・・間違いない。この人は

「伊達さん。お久しぶりです！」

「やっぱりな！あの「仮面ライダーオーズ」の伊達さんだよ！！ちなみに転生前は俺も毎週欠かさず見ていて、この人が面白くて好きだったな。うん。」

「けど何で「遊戯王GX」の世界にいるんだ！？」

兄さんが嬉しそうな声で答えるのとは対照的に、俺は驚いていて伊達さんを見入っていた。サインでも貰うかな？

と、俺の驚いていた顔を見て伊達さんが俺に話しかけてきた。

「え〜と、君は亮ちゃんの弟さんかい？」

「はい。弟の翔です。」

「俺は伊達 明。よろしくっ！」

右腕を上げて人差し指と中指を立てて、ビッ！とカッコつける。他人がやるとあまりかっこよくないが、この人がやると違和感が無いのが不思議だ。

「ま、玄関で立ち話するものなんだし、会場に行こうか？」

「そうですね。準備も出来ていますから行きましょう。」

「亮ちゃんナ〜イスッ！」

兄さんの答えに、伊達さんは右手の親指をグッと立てる。

「で、兄さん。伊達さん。大会に行かなくていいんですか？」

「ナイス突っ込み。さすが翔ちゃん！じゃ、行きますか。」

「ええ。」

そうして俺達は大会の会場へと向かった。

しかし、伊達さんはキャラが濃いなあ。てか、俺は翔ちゃんかよ！

・・・

そうして俺達は会場へと足を運ぶ。夏祭りの影響か、浴衣姿で参戦している人の姿もちらほらと確認することが出来た。風流だね。

「しかし、どうして伊達さんがこの大会に？」

「ああ。会長からまた新しいカードを頼まれてな。」

俺の疑問に伊達さんがデッキを取り出して答える。

しかし、会長つて誰だ？ペガサスか？それとも「ハッピーバースデーツ！！」「や「すばらしい！！」の会長か？・・・個人的には後者だと思うが。

「で、この大会で新しいカードの性能を試してみるってわけだ。」

「「百聞は一見にしかず」ですね。」

「さすが亮ちゃん。博学だねえ！」

デッキを戻しつつ、兄さんの答えをノリノリに返している。

受付に行ってみると、今回の大会の定員は32人。そこそこだな。さて、俺達も名前を書き、受付を済ませる。

「じゃ、俺のBブロックはこっちだから。亮ちゃんと翔ちゃんも頑張れよ！」

「はい！」

「伊達さんも頑張ってください。」

「ありがとよ！」

伊達さんは手を振って、Bブロックへと向かっていった。

「翔。お前も頑張れよ。」

「兄さんこそ。負けないですよ？」

「ふっ、俺は早々負けないさ。」

いや、兄さん。それは敗北フラグだから。

ちなみに俺はCブロック。兄さんはAブロックだそうだ。これでいきなり身内と戦うことはなくなっただな。そうして、俺と兄さんはそれぞれのブロックへと足を運んだ。

・・・

「これより、決闘大会を始めます！」

わー！！

観客からノリノリな声援が送られてきた。本当に毎年恒例なんだよなあ。この声援は。で、俺の相手は・・・マルタンだと!? いきなり身内じゃないか。

「あ、翔さん。風邪は治ったんですか?」

「まあ、な。悪いけど、手加減はしないぞ?」

「はい。こちらこそ!」

マルタンと少しだけ雑談をし、構える。ちなみに俺達が構えた場には色が塗られており、俺のところは赤。マルタンは青になっていた。そして開催者の合図を待つ。

「さて、ルールは通常と同じです。また、一本勝負なのでデッキ事故には気をつけてください。今から先攻を決めるためのコイントスを行います。表は赤の人が、裏は青の人が先攻になります。・・・結果は裏。よって青の場の人先攻になりました!」

コイントスの結果、マルタンが先攻か。マルタンは確か「神竜エクスリオン」デッキだったはずだから、「オネスト」には細心の注意を払わなければ。

「それでは。」

「「決闘!」」

「では、僕の先攻。ドロー!僕は手札から魔法カード「おろかな埋葬」を発動し、デッキからモンスターカードを1枚墓地に送ります。」

僕はデッキから「神竜エクセリオン」を墓地へ送り、デッキをシャッフルします！」

いきなり来たか……。さて、手札にオネストが無ければいいが。

「そして手札から「仮面竜」を攻撃表示で召喚！」

仮面竜 ATK1400

一匹の竜が現れる。見た感じでは赤い竜に銀色の仮面や鎧を上から被せたようにも見える。だから「仮面竜」なのだろうか？

ちなみにリクルーター系では優秀で、特殊召喚したモンスターの表示形式が固定されてないため攻撃表示にも守備表示にもすることが出来る。一般的なリクルーターならば攻撃表示に固定されることが多いのだが。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

マルタン 手札3 場 モンスター1 伏せ1

仮面竜 ATK1400

基本中の基本と言えるかな？まあ、これからだな。

「俺のターン、ドロ！手札から「ガーディアン・エアトス」を攻撃表示で特殊召喚！」

ガーディアン・エアトス AKT2500

一陣の旋風と共に、アイリスが現れる。

少し時代劇風になっている気がするが、気にしない。

「さっそく来ましたね。」

「ああ、最初から飛ばさせてもらおう！」

マルタンもこれには少し驚いているようだが、逆に燃えてもいるのだろう。

「バトル！「ガーディアン・エアトス」で「仮面竜」に攻撃！」

アイリスがいつものごとく左手から刀を呼び出し、接近する。仮面竜も口から火炎弾を放つがすべて避けられる。

「はあああ！」

そして、アイリスが仮面竜を一閃した。

マルタン LP4000 2900

「つく！だけど、僕は破壊された「仮面竜」の効果を発動！デッキから「神竜エクセリオン」を攻撃表示で特殊召喚！」

神竜エクセリオン ATK1500

神々しいほどに真っ白い竜が1体現れる。マルタンのエースモンスターだ。

生贖召喚された時のみだからまだ効果を持っていないが・・・どうなる？

「俺はモンスターをセット。カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札2 場 モンスター2 伏せ2
ガーディアン・エアトス ATK2500
セットモンスター DEF?

「僕のターン、ドロー！僕は手札から永続魔法「カードトレーダー」を発動！そして場の「神竜エクセリオン」を生贄に、手札から「神竜エクセリオン」を攻撃表示で召喚！」

ついに、効果を持ったエクセリオンが現れる。

今さっきよりも、迫力がある気がするのは俺だけだろうか？

「そして、「神竜エクセリオン」の効果発動！このカードが召喚された時、自分の墓地の「神竜エクセリオン」の数だけ効果を得ることが出来る！ただし、同じ効果は選べない。僕の墓地にはエクセリオンが2体。よって、2つの効果を得ることが出来る！僕は攻撃力を1000ポイントアップする効果と、相手モンスターを破壊した時その攻撃力分のダメージを与える効果を選択！」

まるで陽炎のように薄い2体のエクセリオンが場にいる1体のエクセリオンと重なり、場のエクセリオンが輝きを増した。

神竜エクセリオン ATK1500 2500

「バトル！「神竜エクセリオン」で「ガーディアン・エアトス」で攻撃！エクセリオンバスター！」

エクセリオンはエアトスに狙いを定め、口からビームを発射した。

「そしてダメージステップ時に手札から「オネスト」を捨てて効果

発動！相手の攻撃力分だけ攻撃力をアップします！」

「やるな！だが、通すわけにはいかない！セットカードオープン、カウンター罠「天罰」を発動！手札を1枚墓地へ送り、効果モンスターの効果を無効にし破壊する！」

「しまった！」

オネストとエクセリオンの効果で一撃必殺を狙ったようだが、何とか避けることには成功した。

しかし、ビームの直撃を受けたアイリスはボロボロになり、满身創痕になってしまう。だが、アイリスは最後の力を振り絞ってエクセリオンに接近する。エクセリオンはもう一撃を加えようとするが、寸分の差でアイリスがエクセリオンの首を切り落とした。頭部を失ったエクセリオンが崩れ落ちる。そしてアイリスも倒れ、両者は完全に力尽きてしまった。

「エクセリオン……。」

「アイリス……。」

一瞬の沈黙。お互いのエースであり最愛の相棒がやられてしまったからだ。

「僕はこのまま、ターンエンドです！」

マルタン 手札1 場 モンスター0 永続魔法1 伏せ1

永続魔法「カードトレーダー」

一気に攻めるべきか？

「俺のターン、ドロー！俺はセットモンスターを反転召喚！」「ウエポンサモナー」！」

ウエポンサモナー ATK1600

青いローブを身にまとった男性の魔法使いが現れる。

ちなみにイラストで呼び出されているモンスターは「ガーディアン・エルマ」だ。

「そして「ウエポン・サモナー」の効果発動！デッキから「ガーディアン」と名のついたカードを1枚手札に加える！俺はデッキから「ガーディアン・エアトス」を手札に加える！」

ウエポンサモナーが呪文を唱えると、デッキからガーディアン・エアトスのカードが手札に加えられた。

「ガーディアン系のサポートモンスターですか。」

「ああ。そしてバトル！「ウエポンサモナー」でダイレクトアタック！」

ウエポンサモナーが片手に気合を入れると、気合弾らしきものが出て来てそれでマルタンを攻撃した。

マルタン LP2900 1300

「つく！」

「そしてこのままターンエンド！」

翔 手札2 場 モンスター1 伏せ1
ウエポンサモナー ATK1600

これでマルタンがモンスターカードや迎撃用罠を引かなければ勝てるが・・・そう甘くは無いな。カードトレーダーもあるし。

「僕のターン、ドロー！僕は「カードトレーダー」の効果を発動し、手札を1枚デッキに戻しシャッフル。そして1枚ドロー！・・・よし。手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドローする。そしてセフトカードオープン、速攻魔法「クリボーを呼ぶ笛」を発動！僕はデッキから「ハネクリボー」を守備表示で特殊召喚！」

ハネクリボー DEF200

クリボーの亜種であり、「遊戯王GX」の主人公遊城 十代の相棒でもあるカードだ。

しかし、クリボーに羽を生えさせて天使族って発想は面白いと思う。

「そしてハネクリボーを生贄に、手札から「マテリアルドラゴン」を攻撃表示で召喚！」

マテリアルドラゴン ATK2400

金色の竜が現れる。ただ、竜と言っても何か竜っぽくないような・・・。まあ、元々はアメリカから輸入したカードだったから、日本のデザインに慣れている俺からすれば不思議に思えるのだろう。

ちなみに効果は効果ダメージを回復にするという、バーンデッキに

は天敵の能力を持っている。そして後の「スターダスト・ドラゴン」の元になったとも言える効果を持っており、場のモンスターを破壊する効果が発動した時、手札1枚を捨てることでその効果を無効にし破壊する。という効果がある。「スターダスト・ドラゴン」との違いはモンスター以外でも使えるか。連続して使えるか。手札コストは必要か。などである。

ある意味ではスターダストのご先祖様とも言えるが、このモンスターは光属性なので「オネスト」などの加護が得られるのは大きい。

「そして手札から装備魔法「魔道師の力」と「団結の力」を装備！僕の場の魔法・罠1枚につき、攻撃力と守備力を500ポイントアップします。僕の間にはこのカードを含めて3枚。よって1500ポイントアップ！そして「団結の力」は僕の場のモンスターの数だけ攻撃力・守備力が800ポイントアップします！」

マテリアルドラゴン ATK2400 3900 4700

「バトル！「マテリアルドラゴン」で「ウェポンサモナー」に攻撃！シャイニングバーストツ！！」

神竜エクセリオンと同じく、マテリアルドラゴンの口からビームが出て、ウェポンサモナーを消し飛ばした。

翔 LP4000 900

「くう！！」

「そして僕はそのままターンエンドです！」

マルタン 手札0 場 モンスター1 永続魔法1 装備魔法2

永続魔法「カードトレーダー」

マテリアルドラゴン ATK4700

装備魔法「魔道師の力」「団結の力」を装備

マルタン・・・お前の意地は見せてもらった。
なら、今度はこちらの番だな！

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「ハリケーン」を
発動！お互いの魔法・畏カードを全て手札に戻す！」

「しまった！」

突風がお互いの魔法・畏カードを吹き飛ばし、手札へと戻してしま
った。

「そして、手札から魔法カード「死者蘇生」を発動！俺の墓地の「
ガーディアン・エアトス」を蘇生！甦れ、アイリスッ！」

再び旋風が巻き起こり、アイリスが呼び戻された。

「そして手札から装備魔法「魔道師の力」を「ガーディアン・エア
トス」に装備！」

ガーディアン・エアトス ATK2500 3000

「そして「ガーディアン・エアトス」の効果発動！装備されている
装備魔法カードを1枚墓地に送り、相手の場のモンスターを3枚ま
でゲームから除外する。そしてターン終了時まで、この効果で除外
したモンスターの数×500ポイント攻撃力がアップする！俺はマ
ルタンの「神竜エクセリオン」2体と「オネスト」1体をゲームか

ら除外し、攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

「え、そんな！」

アイリスがいつも通り左手で刀を召喚し、鞘から抜いた刀を天へと掲げる。

すると、マルタンの墓地から3つの魂が現れ、その刀に吸い込まれた。そして魂を吸収した刀が光り輝く。恐らくこの効果で取り除いたモンスターの魂を吸収し、それを力に変えているのだろう。

ガーディアン・エアトス ATK3000 2500 4000

「行くぞ、マルタン！バトル！」「ガーディアン・エアトス」で「マテリアルドラゴン」に攻撃！」

「っ、マテリアルドラゴン！」

マルタンの声に呼応するがごとく、マテリアルドラゴンが吼える。そして再び口から閃光溢れ、今にも発射しようとしていた。

一方のアイリスは刀を地面に突き刺し、何やら呪文を唱えていた。すると、地面に突き刺された刀を中心に、魔方阵が現れる。そして魔方阵の中から火の鳥が現れ大いに羽ばたいた。

「アカシックバスターツ！」

「シャイニングバスターツ！」

俺とアイリスの声と共に、火の鳥がマテリアルドラゴンへと突撃する。加速しながら体の炎はさらに勢いを増し、マテリアルドラゴンを燃やし尽くそうとしていた。だが、マテリアルドラゴンも口から

ビームを発射し、火の鳥ごとアイリスを消し飛ばそうとする。

そして、火の鳥と閃光が正面からぶつかり合う。火の鳥が押し負け、閃光に飲み込まれるかと思われたが、火の鳥の鳴き声と共に体の炎は美しく燃えあがり、さらに勢いを増す。その勢いで閃光を切り裂き、そしてマテリアルドラゴンを買いた。

紅蓮の炎に焼かれ、悲しみの咆哮を上げるマテリアルドラゴン。まるで、マルタンに謝っているかのようにも聞こえる。そんな感傷的になる咆哮を残し、マテリアルドラゴンは燃え尽きてしまった。

「お疲れ様。マテリアルドラゴン。」

そして、そんなマテリアルドラゴンにまるで「謝らなくていいよ。」と言わんばかりに、やさしげにマルタンは呟いた。

マルタン LP1300 - 300

「勝者、丸藤 翔!」

審判の声と共に、ソリッドビジョンが解除される。

「やっぱり、翔は強いですね。」

「いや、もしマルタンが「天罰」を防ぐカードを持っていたら、負けていたのは俺の方だったよ。」

そう、あのタイミングで「盗賊の七つ道具」もしくは「魔宮の賄賂」といったカードが使われた場合、エクセリオンの戦闘ダメージと効果ダメージの2連撃で敗北していたからだ。

そういう意味では、本当に幸運だった。

「そういえば、クロノス先生たちも来ているのか？」

マルタンがいるなら、親であるクロノス先生がいてもおかしくは無い。と言うことで、マルタンに聞いてみる。

「はい。父さんもこの大会に参加しています。」

マルタンの口から発せられたのは、やはり肯定だった。もしもクロノス先生と当たったら、確実に激戦となるだろう。

「そういえば、十代や万丈目の姿も見ましたね。」

「あいつらもこの大会に参加しているのか!？」

「ええ。おそらくですが。」

だとすると、勝ち残るのは知り合いばかりだったりして。まあ、それはそれで面白そうだが。

「では、翔。僕の方まで頑張ってください!」

「おう!」

そうしてマルタンは下がっていった。

さて、次の相手は誰なんだろうか？

フィールド21：夏祭り大会第一回戦目（神竜と金色の竜）（後書き）

と言うことで、伊達さんが登場しました。

ついにアニメと特撮の壁が壊れたよ。orz

次の対戦相手をまったく考えていませんが、頭をひねって出そうと思います。

それでは。

フィールド22：夏祭り大会第二戦目（闇と風の旋風）（前書き）

今回もサブタイトルでバレバレかもしれませんが、気にしないでください。

それと、期末テストが始まったので更新スピードが遅れました。申し訳ありません。

追記：一部台詞を修正しました。

フィールド22：夏祭り大会第二戦目（闇と風の旋風）

「時間切れです！もし、まだ決闘が終わっていない所があった場合、残りのLPが多い方が勝者となります。」

ついに時間切れになったらしく、未だに決闘していた人たちも審判の判断によって勝者と敗者に分けられていく。勝って喜ぶ人や負けて悔しがる人などがちらほらと見られた。

そして勝者である俺達は再びランダムで赤の場、青の場に分けられる。ちなみに今回俺は青の場になった。これで赤の場が先攻になったら泣けるな。

「で、今回はお前が相手が・・・風。」

「翔が前回の優勝者つてのは驚いたがな。」

どうやら風もこのブロックの参加者だったようだ。身内がかなり多いな。

まあ、デュエルアカデミアでもかなりの猛者だから分かる話だが。

「翔。悪いが俺の優勝のための犠牲になってもらうぞ！」

「それはこちらの台詞だ！」

風の挑発に、俺も真正面から立ち向かう。友として、決闘者として。そしてお互いが構え、開始の合図を待った。

「それでは、コイントスをします。・・・裏です。よって、青の場の方が先攻になりました！」

「よしっ！」

俺は思わずガッツポーズを取った。

風の忍法シムルグデッキでは先攻を取らないと死活問題になってしまっからだ。

「ダーク・シムルグ」を出されてしまったら、その効果で伏せられなくなってしまう。そうなれば俺の畏カードは意味を成さない。まさにスピード勝負なのだ。

「後攻か……。なら、お前のお手並みとやらを見せてもらっぞ。」

後攻になった風は俺の動きを観察し始めていた。コピーデッキを使い、本人に真似れるほどの洞察力は警戒しないと。

「それでは。」

「「決闘！」」

「俺の先攻、ドロー！俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せターンエンド！」

翔 手札3 モンスター1 伏せ2

セットモンスター DEF？

さて、風はどう出る？

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「魔道戦士ブレイカー」を攻撃表示で召喚！」

魔道戦士ブレイカー ATK1600

赤い鎧を身に纏った戦士が現れた。

このモンスターは遊戯王のダーツ編の「狂戦士の魂」と共に一躍有名になった過去がある。あの時はスタッフの暴走を感じたなあ。

「そして召喚した「魔道戦士ブレイカー」の効果発動！このカードに魔力カウンターを1つ乗せる！そして「魔道戦士ブレイカー」は自分に乗っている魔力カウンター1つにつき、攻撃力が300アップする！」

魔道戦士ブレイカー ATK1600 1900 魔力カウンター
0 1

「「魔道戦士ブレイカー」の効果発動！このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除き、場の魔法・罫カードを破壊する！対象は翔。お前の右側の伏せカードだ！mana・ブレイク！」

魔道戦士ブレイカー 1900 1600 魔力カウンター 1 0

魔道戦士ブレイカーの剣から紫色の波動が発せられ、剣を振り下ろすと同時にその波動が俺の右の伏せカードに襲い掛かり、破壊した。

「っ！（くそっ、「ライジング・エナジー」が！）」

「バトル！「魔道戦士ブレイカー」でセットモンスターに攻撃！」

ブレイカーが剣でセットモンスターに襲い掛かり、剣で一刀両断しようとする。

だが、セットモンスターの剣がそれを防ぎ、鏝迫り合いになった。

「セットモンスターは「異次元の女戦士」だ！守備力は1600。よって戦闘では破壊されない！」

金色の髪をした女戦士がブレイカーの剣を防いでいた。

そして女戦士がブレイカーの剣を弾き、ブレイカーは元の場所へと戻った。

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「エンド時にセットカードオープン、速攻魔法「サイクロン」を発動！今伏せた左側のカードを破壊する！」

「エンドサイクロンかつ！？（つち。「魔封じの芳香」がやられたか。」）

危ない危ない。下手したら「ダーク・シムルグ」とのコンボで、口ツクが完成していたな。

凧 手札3 モンスター1 伏せ1

魔道戦士ブレイカー ATK1600

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「久遠の魔術師ミラ」を召喚！」

久遠の魔術師ミラ ATK1800

「光霊使いライナ」が成長したような女性が現れる。しかし、最初にイラストを見た時は「目が死んでるよ！」と思ったのは俺だけなのだろうか？

まあ、こちらではちゃんと目に光があるから大丈夫っぽいが……。

「久遠の魔術師ミラ」の効果発動！このカードが召喚に成功した時、相手の場にセットされたカード1枚を選択して確認する！」

「なら、セットカードオープン……出来ない!?」

「久遠の魔術師ミラ」の効果の発動に対して、相手は魔法・罫力カードを発動することが出来ない！」

「マジかよッ！」

ミラが右手に持っている杖を掲げると、風の伏せカードがめくられる。

「奈落の落とし穴」か……。危ない危ない。

「なら、俺は「異次元の女戦士」を攻撃表示に変更し、バトル！久遠の魔術師ミラ」で「魔道戦士ブレイカー」に攻撃！」

「ブレイカー、迎撃しろ！」

風の言葉を受け、ブレイカーがミラに切りかかるうとする。しかし、ミラが杖を掲げ呪文を唱えると辺りが光に包まれ、光が消えるとブレイカーは消滅していた。

風 LP4000 3800

「まだだ、「異次元の女戦士」でダイレクトアタック！」

女戦士が風に切りかかる。無論、風は受けるしかない。

凧 LP3800 2300

「つく、さすが今年の優勝者。それは伊達じゃないらしいな。」

「まあな。カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札2 モンスター2 伏せ2

異次元の女戦士 ATK1500

久遠の魔術師ミラ ATK1800

さて、凧はどう攻めてくるかな？

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドロー！そして手札の「ハーピー・クイン」を墓地へ送り、フィールド魔法「ハーピーの狩場」を手札に加える！」

忍法シムルグじゃなくて、アロマハーピーかよ！

「そしてフィールド魔法「ハーピーの狩場」を発動！」

辺り一面が何も無い殺風景な場所になる。

なるほど。隠れる場所も無く、ただ狩られる立場にあるっていうことか。

「そして手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てる。・・・翔。悪いが勝ちはもらったぞ！」

ついに来たか？

「まずは小手調べだ！手札から「ハーピー・レディ1」を攻撃表示で召喚！そして「ハーピー・レディ1」の効果により、自身を含め風属性モンスターの攻撃力は300ポイントアップ！さらに、「ハーピーの狩場」により、攻撃力が200ポイントアップ！」

ハーピー・レディ1 ATK1300 1600 1800

赤い長髪な女性が現れる。ただし、手足には「鳥」をイメージさせる部分があり、「ハーピー・レディ」と言う名がしつくり来るのがわかる。

「そして「ハーピーの狩場」の効果発動！「ハーピー・レディ」または「ハーピー・レディ三姉妹」が召喚・特殊召喚された時、場の魔法・罠カードを1枚選択し、破壊する！対象は翔の左側の伏せカードだ！」

上空に飛んでいたハーピー・レディ1が急降下して、俺の左側の伏せカードに襲い掛かる。マジで狩りかよ！

「なら、左側のセットカードオープン、速攻魔法「月の書」を発動！場のモンスター1体を選択し、裏側守備表示に変更する！無論、対象は「ハーピー・レディ1」だ！」

「ちい！」

急降下していたハーピー・レディ1の姿が消え、ただのセットモンスターになってしまった。

「なら、墓地の闇属性モンスター「魔道戦士ブレイカー」と風属性モンスター「ハーピー・クイン」をゲームから除外して、手札の「ダーク・シムルグ」を攻撃表示で特殊召喚！そして「ハーピーの狩場」の効果で攻撃力が200ポイントアップ！」

ダーク・シムルグ ATK2700 2900

黒い「神鳥シムルグ」が現れる。

まあ、ダークモンスターなんてそんなもんです。効果は強力だけだな。

「バトル！「ダーク・シムルグ」で「久遠の魔術師ミラ」に攻撃！」

「っ、ミラ！」

俺の声にミラが反応し、杖を掲げようとするがその前にダーク・シムルグが大きく羽ばたく。その羽ばたきは嵐を起こし、ミラは吹き飛ばされてしまった。

翔 LP4000 2900

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

凧 手札1 モンスター2 伏せ2 フィールド魔法「ハーピーの狩場」

ダーク・シムルグ ATK2900

セットモンスター DEF？

ついに来た「ダーク・シムルグ」。

さて、どうやってケリをつければいいんだか。下手にモンスターを

召喚すれば「奈落の落とし穴」でやられるしなあ。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドローする！」

これは・・・いけるか？

「俺は手札から「ライトロード・プリースト ジェニス」を守備表示で召喚！」

ライトロード・プリースト ジェニス DEF2100

白を基調とした服を着た赤髪の女性が現れる。見た感じではお姫様っぽいイメージがするな。ちなみに「ライトロード」系モンスターだが、ライトロード特有の効果が備わっていないというちょっと変わったモンスターである。

前の「いずれアヤマかカキツバタ」のパックに入っていたカードで、「サイバー・ドラゴン」に破壊されない守備力は大きな魅力だと思いい、一応入れてみた。

「バトル！「異次元の女戦士」で「ダーク・シムルグ」に攻撃！」

女戦士がダーク・シムルグに切りかかる。

「自爆特攻か。だが、それはさせない！セットカードオープン、罠カード「ゴッドバードアタック」発動！裏守備表示の「ハーピー・レディー」を生贄に、「異次元の女戦士」と翔のセットカードを破壊する！」

「なら、セットカードオープン！罠カード「D2シールド」を発動

！自分の場の表側守備表示モンスター1体を選択し、発動する。選択したモンスターの守備力は元々の守備力の倍になる！選択するのは「ライトロード・プリースト ジェニス」だ！」

「つち！面倒な事を。」

ライトロード・プリースト ジェニス DEF 2100 4200

「サイバー・エンド・ドラゴン」が来たとしても、十分耐えられる守備力はすごいなあ。

マジで要塞だよ。

ちなみに異次元の女戦士は、横から炎に包まれたハーピー・レディが突っ込んできて、両者は破壊された。・・・い、痛そうだな。

「俺はこのままターンエンド！」

翔 手札3 モンスター1 伏せ0

ライトロード・プリースト ジェニス DEF 4200

「異次元の女戦士」で「ダーク・シムルグ」を葬れなかったのは結構痛い。

さて、この後風はどうやってこれを突破するのだろうか？

「俺のターン、ドロー！・・・俺は手札から「キラー・トマト」を守備表示で召喚！」

キラー・トマト DEF 1100

トマトのお化けといったらわかりやすいだろうか？まあ、そんな感

じのモンスターが現れる。実を言うとこの「キラール・トマト」はある外国のホラー映画をモチーフにしており、日本版と海外版ではイラストがまったく異なっている。

「そしてカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

凧 手札0 モンスター2 伏せ2 フィールド魔法「ハーピィの狩場」

ダーク・シムルグ ATK2900

キラール・トマト DEF1100

凧が悔しそうにエンド宣言をした。

お、やはり突破する事は出来なかったか。なら、このターンでケリをつけさせて貰う！

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「ハリケーン」を発動！場の全ての魔法・罠カードを手札に戻す！」

「何！？」

突風が発生し、お互いの魔法・罠カードが手札に戻っていった。

ちなみに俺の魔法・罠カードは無いから、凧のしか戻らなかったけどな。

そして「ハーピィの狩場」によって映し出された風景が消え、元に戻った。

「ふふふ、凧。これでケリをつける！俺は「ライトロード・プリースト ジェニス」を生贖に、「ライトロード・エンジェル ケルビム」を生贖召喚！」

ライトロード・エンジェル ケルビム ATK2300

ジェニスが光に包まれて消えると、代わりに鎧を来た青髪の天使が現れる。

このモンスターも「いずれかアヤメかカキツバタ」に入っており、ジェニスと共に入れてみた。

「攻撃力2300。何か効果があるのか？」

「ああ。「ライトロード・エンジェル ケルビム」の効果発動！このモンスターが「ライトロード」と名のつくモンスターを生贄に召喚に成功した時、デッキからカードを4枚墓地へ送り、相手の場のカードを2枚破壊する！対象は「ダーク・シムルグ」と「キラー・トマト」だ！」

「何ッ！」

風の目がカツと大きく開かれる。

それと同時にケルビムが槍を掲げ、振り下ろす。すると2つの波動がダーク・シムルグとキラー・トマトを切り裂いた。

ちなみに墓地へ送られたカードは「ガーディアン・エアトス」、「大嵐」、「A・D・チエンジャー」、「閃光の双剣 トライス」だった。「大嵐」は惜しいな。

「そして俺は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動！俺の墓地の「ガーディアン・エアトス」を蘇生！現れる、アイリス！」

一陣の風と共に羽を大きく広げ、民族衣装を着た金髪の女性が現れる。

しかし、その鳥の形をした兜は何をモチーフにしているのだろうか？

ガーディアン・エアトス ATK2500

「バトル！」「ライトロード・エンジェル ケルビム」でダイレクトアタック！」

ケルビムが槍を構え、凧を突き刺そうとする。だが、突然霧が発生し、槍は何も突き刺さなかった。

「最後の抵抗をさせてもらう。墓地の「ネクロ・ガードナー」の効果を発動。このカードをゲームから除外し、攻撃を無効にする。」

なるほど。あの霧は「ネクロ・ガードナー」が発生させたのか。感動的だな。だが、無意味だ。

「「ガーディアン・エアトス」でダイレクトアタック！」

左手を掲げ、刀を呼ぶ。

そして構える。次の瞬間、凧を一閃した。

凧 LP2300 - 2000

「勝者、丸藤 翔！」

審判の声と共にソリッドビジョンが消える。

「先に「魔封じの芳香」がやられたのが痛かったな。」

「逆にあれがあったら、俺は負けていたかもしれない。」

凧が悔しそうに呟く。あのロックは転生前にやられたことがあったので、恐ろしさは身にしみている。ただし鬼畜モグラやキモチュッチュツや黒ネコなどのネオスパーシアンがいないので、そこそこ気軽ではあったが……。
鬼畜モグラがいたら確実に負けていたよ。

「てか、忍法シムルグデッキじゃないんだな。」

前回のデッキとは違っていたので、疑問を凧にぶつけてみる。

「ああ。忍法シムルグデッキもちゃんと用意しているが、お前らだと情報がすでにバレているからな。これはその対策用ってわけだ。」

そういうと、凧はサイドデッキを取り出す。

なるほど、先入観を逆手に取ったのか。相変わらず考え方が恐ろしいな。

「まあ、それでも敵わなかったがな。……つーか、守備力4200は卑怯だろ。」

呆れた顔をしつつ凧が俺を見る。

まあ、まともに戦闘破壊することはほぼ不可能だから、頼みの綱は「ゴッドバードアタック」しかないわな。

「確かにな。」

俺も苦笑しつつ答える。

まともに戦って勝てるとしたら「ガーディアン・エアトス」に「魔道師の力」を装備させ、他に3枚以上魔法・畏ゾーンにカードが存

在しないと無理だ。

「翔。俺の変わりに頑張れよ！」

「ああ。任せろ！」

そうして風は下がっていった。

これで残りは8人か。

「さて、これで残りは8人となりました！これより、AブロックからDブロックまで勝ち残ってきた選手を紹介したいと思います。Aブロックは「丸藤 亮」選手と「遊城 十代」選手です！」

わーっ！

歓声が沸き起こる。

兄さんは予想通りだが、まさか十代がAブロックに参戦しているとは……。

「Bブロックは「伊達 明」選手と「クロノス・デ・メディチ」選手です！」

伊達さんとクロノス先生か。ここだけ大人の部な気がするの、俺の気のせいかな？

「Cブロックは「丸藤 翔」選手と「万丈目 準」選手です！」

万丈目、お前もか……。

「Dブロックは「大徳寺 勝平」選手と「小原 流奈」選手です！」

小原 流奈？誰だろう。残念ながら心当たりが無いな。てか、大徳寺先生もちやつかり参戦していたのかよ！

「今からこの8名はクジを引いてもらい、A～Hに分けられます。ちなみに次の対戦はAとBの方になります。」

司会者がそういうと、スタッフがクジの入った箱を持ってくる。そして俺達は思い思いにクジを引く。そして結果はこうなった。

- A クロノス・デ・メディチ
- B 大徳寺 勝平
- C 小原 流奈
- D 伊達 明
- E 丸藤 翔
- F 遊城 十代
- G 丸藤 亮
- H 万丈目 準

どうやらA・B・E・FブロックとC・D・G・Hブロックに別れる様だ。

となると、第二試合は俺で対戦相手は十代か。これは気を引き締めないとな。

フィールド22：夏祭り大会第二戦目（闇と風の旋風）（後書き）

と、言うことで凧と対戦することになりました。
ダーク・シムルグは魔法で除去できないこの世界では結構きついです。

HIRO様から「小原 流奈」さんをお借りしました。
さて、もう1度原作を読み直して彼女の性格や言動を確認しなければ。

フィールド23：夏祭り大会第3試合（機械と神話）（前書き）

今回はクロノス先生対大徳寺先生です。

しかし、大徳寺先生の台詞を書いているとア ルーを書いているよ
うな気分になりました。口調ってこれで合ってますよね？

追記：誤字を訂正しました。

フィールド23：夏祭り大会第3試合（機械と神話）

「これより、「クロノス・デ・メデイチ」選手対「大徳寺 勝平」選手の対戦を始めます！」

わーっ！

観客から歓声が沸く。

しかし、デュエルアカデミア教員同士による対決してかなり珍しくないか？

「父さん。頑張ってください！」

マルタンが必死になって応援する姿が見えた。
頑張っているなあ。

「くうー！大徳寺先生の戦い方がめっちゃくちゃ気になるぜ！」

マルタンの隣にいた十代は目を輝かせながら大徳治先生を見ている。
確かに。ここまで勝ち上がったきた戦法は結構気になるな。

・・・

「まさか大徳寺先生もこの大会に参加しているとは思わなかったノ
ーネー！」

「いやはや。私もクロノス先生が参加しているとは思いませんでしたにゃ〜。」

まさかの参戦に2人とも驚いていた。

「しかーし、だからと言って手を抜くわけにはいきませんーノ！」

「お手柔らかにお願いしますにゃ〜。」

思いつきり対照的になるクロノス先生と大徳寺先生。

見ている方としても中々おもしろい。

「では、表をクロノス選手。裏を大徳寺選手でコイントスします。・
・結果は裏！よって大徳寺選手が先攻になります！」

どうやら大徳寺先生が先攻になったようだ。

「最初から矛先がいいですにゃ。」

「ふふん。後攻で巻き返させていますノーネ！」

ノリノリな大徳寺先生・・・頼むから音符はやめてくれ。

それに対して少し悔しそうなクロノス先生。気持ちはお察しします。

「それでは」

「「決闘！」」

「私の先攻。ドロー！私は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動
しますにゃ！デッキからカードを2枚ドローしますにゃ。私は手札
から「幻獣サンダーペガス」を守備表示で召喚しますにゃ！」

幻獣サンダーペガス DEF2000

二つの首を持つユニコーンもどきが現れる。
幻獣だと！？錬金術じゃないのか？

「いつもの錬金とはまったく関係ないノーネ？」

「ふふふ。錬金術は専門分野ですが、古代神話もかなり興味がありますにや〜。」

「なるほどなノーネ。」

クロノス先生や皆の疑問に大徳寺先生が答える。
まあ、錬金術も古代神話に近い何かがあるし分からなくは無い。

「クロノス先生は古代神話には興味は無いんですかにや？」

「残念ながら、私はそういった話はあまり興味は無いノーネ。」

「残念ですにや。」

大徳寺先生がクロノス先生に話を持ちかけようとするが、興味が無いと断られ、少し落ち込んでしまう。

「まあ、仕方ありませんにや。私はカードを2枚伏せ、ターンエンドにや！」

大徳寺 手札4 モンスター1 伏せ2

幻獣サンダーペガス DEF2000

「私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード「テラフォーミ

ング」を発動！デッキからフィールド魔法を1枚手札に加えるノーネ。もちろん手札に加えるのは「歯車街」なノーネ！そして手札からフィールド魔法「歯車街」を発動！」

場が一気に暗くなり、歯車で構成された町の風景が浮かび上がった。

「そして手札から「マシンナーズ・ソルジャー」を攻撃表示で召喚するノーネ！」

マシンナーズ・ソルジャー ATK1600

右手にナイフを装備した機械の兵士が現れる。

しかし、整備兵の「マシンナーズ・ギアフレーム」より弱い兵士つてのも珍しいな。

「そして「マシンナーズ・ソルジャー」の効果発動！このカードが場に召喚された時、自分の場にこのカード以外のモンスターが存在していない時、手札から「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚するノーネ！私はこの効果により、手札の「マシンナーズ・フォートレス」を攻撃表示で召喚するノーネ！」

マシンナーズ・ソルジャーが右手のナイフで前を指す。すると、奥の方からその名のごとく「要塞」をイメージさせる戦車が現れる。

マシンナーズ・フォートレス ATK2500

「バトルなノーネ！「マシンナーズ・フォートレス」で「幻獣サンダーペガス」に攻撃！アクティーブツ・カノンツ！」

マシンナーズ・フォートレスの右肩に装備されているカノン砲が、

サンダーペガスに照準を向けて発射される。咄嗟の事で避け切れなかったサンダーペガスはそのまま直撃を受け、破壊される。

「そして「マシンナーズ・ソルジャー」でダイレクトアタックなノーネ！」

マシンナーズ・ソルジャーが大徳寺先生に向かって襲い掛かり、ナイフで切り裂いた。

大徳寺LP4000 2400

「っ、まさか「幻獣サンダーペガス」が破壊されるとは思っていなかったにや〜。」

「ふふん。機械族を舐めてもらっては困るノーネ！私はカードを1枚伏せ、ターンエンドなノーネ！」

まるで仁王立ちするかのごとく、得意げになるクロノス先生。これって死亡フラグじゃないか？

「なら、その時にセットカードオープン、速攻魔法「サイクロン」を発動するにや！もちろん対象はクロノス先生の今伏せたカードにや！」

「ぬぐぐ……。」「聖なるバリア ミラーフォース」が、やられたノーネ。」「

「ふふふ。ささやかな反撃をさせてもらいましたにや！」

そして大徳寺先生のエンドサイクロンにより「聖なるバリア ミラ

「フォース」を破壊されてしまった。そして今度は大徳寺先生がドヤ顔になる。

この決闘は何度死亡フラグが成立すればいいんだ？

クロノス 手札2 場 モンスター2 伏せ0 フィールド魔法「
歯車街」

マシンナーズ・ソルジャー ATK1600

マシンナーズ・フォートレス ATK2500

「私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動するにや！デッキからカードを5枚選択し、相手はその中から1枚選ぶんだにや。私が選択するのは「幻獣クロスウイング」を3枚と「幻獣サンダーペガス」を1枚、そして「ネクロ・ガードナー」を選択しますにや！」

こ、これは酷い……！！

幻獣デッキと戦う時に墓地に送られたら厄介な「幻獣クロスウイング」と「幻獣サンダーペガス」に、ゲームから取り除いたら攻撃を1度だけ無効にする「ネクロ・ガードナー」。俺なら「ネクロ・ガードナー」を選ぶが。

「なら、「ネクロ・ガードナー」を選択するノーネ！」

やはりか。まあ、他も面倒だけど、そうだよなあ。

「わかりましたにや。なら私は選択された「ネクロ・ガードナー」を手札に加え、他のカードを墓地へ送るのにや。そして私は手札から魔法カード「天使の施し」を発動しますにや！」

「ぬぐっ！（これは不味いノーネ！）」

着々と準備を進める大徳寺先生に、クロノス先生は冷や汗を流す。ここまで一気に墓地肥やしを行う大徳寺先生はすごいとしか言いようがないな。この世界では墓地肥やしの概念があまり無いのに。

「私はデッキからカードを3枚ドロし、その後手札を2枚捨てますにや。そしてセットカードオープン、永続罫「リビングゲッドの呼び声」を発動しますにや！墓地の「幻獣サンダーペガス」を攻撃表示で召喚しますにや！」

幻獣サンダーペガス ATK700 1600

「こ、攻撃力が上がったノーネ！」

「「幻獣クロスウイング」の効果ですにや。このカードが墓地に存在する場合、場の「幻獣」と名のつくモンスターの攻撃力を300ポイントアップしますにや！」

驚いているクロノス先生に対し、「幻獣クロスウイング」の効果を教える大徳寺先生。

まあ、「幻獣」のカテゴリ自体が意外と知られていないから、知らないのも無理は無いか。

「そして「幻獣サンダーペガス」を生贄に、「幻獣ロックリザード」を生贄召喚しますにや。このモンスターはレベルが7ですが、「幻獣」を生贄にした場合、生贄は1体で事足りますにや！」

幻獣ロックリザード ATK2200 3100

体の構造は「ケンタウロス」に似ているものの、全体がその名の通

り岩のような皮膚で覆われている。また上半身も「リガードマン」みたいなものになっていた。

「バトルですよ！」「幻獣ロツクリザード」で「マシンナーズ・ソルジャー」に攻撃するにや！アイアン・ナックルツ！」

「き、切り捨てるノーネ！」

ロツクリザードが猛スピードでマシンナーズ・ソルジャーめがけ突進する。一方、マシンナーズ・ソルジャーもナイフを構え、一撃必殺を目論む。

そして自分の間合いに入った瞬間、マシンナーズ・ソルジャーのナイフは一閃し、ロツクリザードを切り裂いたかに見えた。だが、ロツクリザードには傷一つ付いておらず、逆にマシンナーズ・ソルジャーが倒れ、機能停止してしまった。よく見てみるとロツクリザードが拳を突き出しており、マシンナーズ・ソルジャーの胸部を砕いていた。

「そして「幻獣ロツクリザード」の効果を発動しますにや！このカードが相手モンスターを破壊した時、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与えますにや！」

「な、何ですと！」

クロノスLP4000 2500 2000

「私はカードを2枚伏せて、ターン終了しますにや！」

大徳寺 手札1 場 モンスター1 伏せ2

幻獣ロツクリザード ATK3100

これでクロノス先生が仮に「古代の機械巨竜」を出したとしても、攻撃力が1000足りない。また一度だけなら「ネクロ・ガードナー」で防がれるし、「幻獣サンダーペガス」の効果で戦闘破壊を免れることも可能だ。

「私のターン、ドロー！まだ私には奥の手がありますーノ！手札から魔法カード「大嵐」を発動！場の魔法・罠カードを全て破壊するノーネ！」

「つく！やられましたにや！（「幻獣の角」と「ドレイン・シールド」が破壊されてしまったにや。）」

「幻獣の角」と「ドレイン・シールド」か。例え「一族の結束」で攻撃力を上げたとしても、返り討ちにして「幻獣の角」の効果で1ドローされる恐れがあったな。それに下手したら「ドレイン・シールド」で大量のLPを得ることも出来たから、これらを破壊できたのはうまい。

「そして「歯車街」の効果発動！このカードが破壊された時、デッキ又は手札か墓地から「古代の」と名のつくモンスター1体を特殊召喚することが出来るノーネ！現れるノーネ！「古代の機械巨竜」

！！」

古代の機械巨竜 ATK3000

歯車街が音を立てて崩れると同時に一体の竜が現れ、咆哮を上げる。まるで主を守らんとする守護神の「つく」。

「さらに私は手札から、魔法カード「強欲な壺」を発動ッ！デッ

キからカードを2枚ドロするノーネ！これはラッキーなノーネ！私は手札から永続魔法「一族の結束」を発動！墓地のモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分の場の同じ種族のモンスターの攻撃力を800ポイント上げるノーネ！」

「にゃ、にゃんですとー！」

マシンナーズ・フォートレス ATK2500 3300

古代の機械巨竜 ATK3000 3800

これで「幻獣ロックリザード」の攻撃力を上回った！

「バトルなノーネ！「古代の機械巨竜」で「幻獣ロックリザード」に攻撃するノーネ！アルティメット・ファンゲ！」

「っ！なら墓地の「幻獣サンダーペガス」の効果発動！墓地にあるこのカードをゲームから除外して、場の「幻獣」と名のつくモンスターの破壊を1度だけ防ぎますにゃ！」

古代の機械巨竜がロックリザードに噛み付く。だが、砕くまでにはいならず、ロックリザードは何とか耐え凌いだ。

「しかし、ダメージは通るノーネ！」

「ッ！」

大徳寺LP2100 1400

「そして「マシンナーズ・フォートレス」で「幻獣ロックリザード」に攻撃しますーノ！」

「再び、墓地の「幻獣サンダーペガス」の効果を発動しますにゃ！」

「なら、ダメージステップに手札から速攻魔法「突進」を発動！
モンスター1体の攻撃力を700ポイントアップするノーネ！」

マシナーズ・フォートレスが突進し、ショルダータックルを食ら
わせた。その衝撃に体勢を崩したロツクリザードをゼロ距離の力
ノン砲が襲い掛かった。

それも何とか耐え切ったロツクリザード。しかし体がふらついてお
り、ポロポロだということがよくわかる。

大徳寺LP1400 500

「ふ、風前の灯にゃ。」

「なら、次のターンでその灯も消し去ってあげるノーネ！ターンエ
ンドなノーネ！」

クロノス 手札1 場 モンスター2 伏せ0 永続魔法「一族の
結束」

マシナーズ・フォートレス ATK3300

古代の機械巨竜 ATK3800

肩を下ろし、がっくりと頂垂れる大徳寺先生と、圧倒的優位を誇ら
しげにするクロノス先生。場のモンスターがそれを物語っている。
一方はポロポロになった1体だけのモンスター。もう一方は威風堂
々とたたずんでいるモンスター達。

さて、これからどうやって挽回していくかな？

・・・

「俺は大徳寺に勝つと思うね。」

「俺もです。」

「お、亮ちゃんもか。」

俺は今、伊達さんとどちらが勝つか予想している。

「見クロノス先生が圧倒的に押しているように見えるが、「幻獣ロツクリザード」が生き残っているので、逆転は十分に可能だ。」

「何らかの効果で「幻獣ロツクリザード」の攻撃力を上げ、「マシンナーズ・フォートレス」を戦闘破壊する。すると「マシンナーズ・フォートレス」の効果で相手の場のカードを1枚破壊する効果が発生し、おそらく「幻獣ロツクリザード」が狙われるだろう。だが、「幻獣ロツクリザード」の効果は相手の効果でこのカードが破壊されたとき、相手に2000ポイントのダメージを与える効果がある。それを狙えば・・・。」

「・・・ちゃん、亮ちゃん。」

伊達さんが俺に呼びかけ、はっとする。いつもの癖が出たようだ。

「まあた、いつもの考え癖が出たな。」

「すみません。つい。」

「ま、いいけどさ。こんな時くらい、楽しまないと。」

「そうですね。」

伊達さんの呑気な声に俺も賛同する。

そつだ。こんな時くらいはあまり考えずに楽しむべきだろう。

そつ考えると、俺はただ場を見守ることだけに専念した。

・
・
・

場にはまだ「幻獣ロックリザード」が存在し、私のデッキには逆転することが出来るカードが眠っている。だが、それを引けるかどうか……。私は不安を覚える。

デッキに手を回すが、震えていてカードを引くことが出来ない。

「頑張れー！大徳寺先生！」

「にゃ、じゅ、十代君！」

ふと、声をした方を向くと十代君がいた。

「見せてくれよ、ワクワクするドローをさ！」

「！」

その言葉に私ははつとした。

そつだ。元々デュエルは楽しむために存在するのだ。勝ち負けはただの結果でしかない。・・・そんな単純な事を忘れていたとは。気がつけば心の中がとても軽くなり、そしてワクワクしている。

ふと十代君の決闘を思い出す。彼はいつも、どんな時でもデッキを信じ純粹に決闘を楽しんでいた。彼はいつもこんな感じで決闘しているのか。

なら、私も最後まで楽しみつつ、デッキを信じていることが出来るはず

だ。

私はデッキを信じ、ドローした。

「私のターン、ドロー！」

そして、今引いたカードを見る。

・・・見事にデッキは答えてくれた。

「私は手札から魔法カード「野性解放」を発動するにや！場の獣族・獣戦士族モンスター1体の攻撃力はこのターン、そのモンスターの守備力の数値分だけアップするのにや！もちろん対象にするのは「幻獣ロツクリザード」ですにや！「幻獣ロツクリザード」の守備力は2000。よって攻撃力は5100に上がりますにや！」

「ま、マンマミア！この土壇場で引くなんて！！」

幻獣ロツクリザード ATK3100 5100

野性を解放されたロツクリザードは、自身の傷を気にしないかのうとく力強く立っていた。今なら・・・いける！

「バトルにや！「幻獣ロツクリザード」で「マシンナーズ・フォートレス」に攻撃するにや！」

「む、迎え撃つノーネ！」

マシンナーズ・フォートレスのカノン砲が唸り、ロツクリザードに襲い掛かる。そして命中し、煙が立ち込める。だが・・・

「む、無傷なノーネ！」

「残念ですにゃ。野性を解放した力、その目に焼き付けるといいですにゃ！食らえ、アイアンナックルツ！！」

ロックリザードの拳が唸り、マシンナーズ・フォートレスの上半身を消し飛ばした。

そして、その衝撃波はクロノス先生を襲った。

クロノスLP2000 - 2000

「うぐう！」

「そして、「幻獣ロックリザード」の効果を発動するにゃ！このカードが相手モンスターを破壊した時、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与えますにゃ！」

「ペペロンチーノ！」

クロノスLP2000 - 3000

...

「勝者！大徳寺 勝平！」

審判のことと共に、勝敗は決した。

「やはり、決闘は最後の最後まで分からないノーネ。」

少し悔しそうにしながらも、手を差し伸べるクロノス先生。

「そうですね！」

そしてがっちりとその手を掴む大徳寺先生。

わーっ！

歓声が沸き起こり、会場が熱気に包まれる。

「次は負けないノーネ！」

「今度も勝たせてもらいますにや」

そして2人は決闘場から離れた。

「さて、第二試合は「丸藤 翔」選手対「遊城 十代」選手の対決です！」

司会者から俺の指名が来た。

さて行かねば……。

ふと、十代の姿が見えた。大徳寺先生と何かを話しているようだ。

そして十代が照れている。お礼でも言われたのかな？すると大徳寺先生が十代に1枚のカードを差し出し、十代はそれを受け取る。そしてそのカードをデッキに入れた。

何のカードか分からないが、十分警戒はした方がいいかもな。

俺は気を引き締めて、会場へと向かった。

フィールド23：夏祭り大会第3試合（機械と神話）（後書き）

と言うことで大徳寺先生のデッキは「幻獣」でした。

錬金と神話は何か似ていると思い、採用させてもらいました。

・・・少し無理やりだったかな？

フィールド24：夏祭り大会第3試合（HEROの意地）（前書き）

さて、翔対十代の対決になりました。

書くのが結構難しかったです。orz

途中で計算がおかしくなっているかもしれませんが、その部分があつたとしたら感想にてお書きください。

追伸：「凡骨の意地」で一部おかしい所があつたので、オリカで補正しました。申し訳ありません。orz
さらに誤字を訂正しました。

フィールド24：夏祭り大会第3試合（HEROの意地）

「これより、「丸藤 翔」選手対「遊城 十代」選手の対戦を
始めます！」

「フーッ！！」

会場から歓声が沸く。実際近場で聞くと耳が痛いなあ。

「そういえば翔、お前と決闘するのは初めてだな。」

「そういえば、そうだな。」

十代の言葉に、俺ははっとした。確かにまったくやっていた
な。うん。

「くー、興奮が止まらないぜ。」

「おいおい。」

少し呆れつつも、気持ちは察することが出来た。まったく……。

「では、表を十代選手。裏を翔選手でコイントスします。……結
果は表！よって十代選手が先攻になります！」

「よっしゃ！今回もついてる〜！」

十代は先攻を取れて、とても嬉しそうにはしゃいでいる。
ん、今回も？……まさか、いつも先攻を取っていたのか？

「まあ、いいか。」

あまり気にしないようにする。うん、そうした方がいいだろう。

「それでは」

「「決闘!!」」

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「E・HERO スパークマン」を攻撃表示で召喚！」

E・HERO スパークマン ATK1600

青と黄色の2色が特徴なHEROが現れる。ちなみにこの「スパークマン」。彼女である「スパークウーマン」がいるらしい。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

十代 手札4 場 モンスター1 伏せ1

E・HERO スパークマン ATK1600

「俺のターン、ドロー！俺は手札からモンスターをセットする！」

セットモンスター DEF?

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札3 場 モンスター1 伏せ2

セットモンスター DEF?

「俺のターン、ドロー！俺は手札から永続魔法「凡骨の意地」を発動！」

「凡骨の意地」だと！？まさか十代のデッキは凡骨HEROなのか？

・・・

大会前日の夜

「「凡骨の意地」？」

「ああ。」

凧が十代の家に泊まりお互いのデッキ調整をしていた時、凧がふと十代のデッキに疑問を持った。そして凧は十代のデッキから通常モンスターを取り出していく。

「十代。お前のデッキは見ての通り、通常モンスターが多い。」

「ああ。それは知っているけど？」

凧の言葉に十代は首をかしげる。

「なら、何で通常モンスターのサポートカードを入れないんだ？」

「え、そんなのあったのか？」

「お前なあ・・・。」

ひょんとした十代の言葉に、凧が頭を抱えてため息をつく。

HERO馬鹿とは知っていたが、ここまで来るとは……。

「まあ、いいや。十代。お前のHEROは何をメインで行くのか？」

「そりゃ、「融合」だな！」

「そうか。……なら、このカードを外して。」

十代の返事を聞き、不要と思ったカードを次々と外していく。

「え、HERO系の専用サポートカードを抜くのかよ！」

「当たり前だ！ただですら事故りやすいのに……。お前の運がおかしいだけだ！まったく。」

再びため息をつきながら、デッキを編集する凧。

「「ホープ・オブ・フィフス」を入れて。」

「それは「攻撃の無力化」の方がよくないか？」

「いや、ただですら融合で手札消費が激しいからな。守備よりか手札補充の方が重要だ。」

「まあ、確かに。」

凧の言葉に十代が頷く。

「あとは……。」

そうして風の手により、十代のデッキは魔改造されていた。

・・・

「さらに手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロ―し、その後2枚捨てる。そして「凡骨の意地」の効果発動！このドロ―で、通常モンスターを引いた時、そのカードを相手に見せ、俺はデッキからカードを1枚ドロ―する！俺が引いたモンスターは「E・HERO フェザーマン」！よってカードを1枚ドロ―！そして今引いたカードは「E・HERO バーストレディ」！よってもう1枚ドロ―する！」

さすが十代といったところか。ドロ―力が恐ろしい。

「よし！俺は手札から魔法カード「融合」を発動！手札の「E・HERO フェザーマン」と「E・HERO スパークマン」と「E・HERO バブルマン」を融合！「E・HERO テンペスター」を攻撃表示で召喚！」

E・HERO テンペスター ATK2800

やせたバブルマンにフェザーマンの翼が生えたというべきだろうか？まあ、そんな感じのモンスターだ。ちなみのこのテンペスター。守備力が攻撃力と同じ数値という恐るべき硬さだ。「月の書」対策なのだろうか？

「バトル！「E・HERO スパークマン」でセットモンスターに攻撃！」

「なら、攻撃宣言時にセットカードオープン！速攻魔法「エネミー

コントローラー」発動！俺は自分のセットモンスターを生贄に、ターン終了時まで「テンペスター」のコントローラーを得る！」

「や、やべー！」

俺のセットモンスターが消え、エネミーコントローラーによってコントローラーを得たテンペスターが俺の場にやって来た。

「なら、俺はターン終了だ！そして「テンペスター」は俺の場に戻ってくる。」

そして、テンペスターが十代の場に戻っていった。

十代 手札1 場 モンスター2 伏せ1 永続魔法「凡骨の意地」
E・HERO スパークマン ATK1600
E・HERO テンペスター ATK2800

まさかの「凡骨の意地」によるドロローが結構生きたな。生憎、今の俺には攻める手が無い・・・なら。

「俺のターン、ドロロー！俺はモンスターをセット。」

セットモンスター DEF?

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札2 場 モンスター1 伏せ2
セットモンスター DEF?

「俺のターン、ドロロー！バトル！「スパークマン」でセットモンス

ターに攻撃！スパーク・フラッシュ！」

スパークマンの攻撃がセットされたモンスターへ向かう。

「セットモンスターは「ウエポン・サモナー」だ！」

ウエポン・サモナー DEF1600

青いローブを着た魔術師が現れた。

そしてスパークマンの雷がウエポン・サモナーに届く寸前、

「さらに、ダメージステップ時にセットカードオープン、畏カード「D2シールド」を発動！ウエポン・サモナーの守備力を倍にする！」

「えー！そんなの有りかよ!?!」

ウエポン・サモナー DEF1600 3200

ウエポン・サモナーの守備力が上がり、跳ね返された雷が十代へと襲い掛かった。

十代 LP4000 2400

「痛てててて……。」

「さらに、「ウエポン・サモナー」のリバーズ効果発動！デッキから「ガーディアン」と名のつくカードを1枚手札に加える。俺は「ガーディアン・エアトス」を手札に加える！」

呪文を唱えると、デッキから「ガーディアン・エアトス」が現れ、手札に加えられた。
そしてデッキをシャッフルする。

「俺はこのままターンエンド！」

十代 手札2 場モンスター2 伏せ1 永続魔法「凡骨の意地」
E・HERO スパークマン ATK1600
E・HERO テンペスター ATK2800

しかし、こうやって見ると十代の場が中々恐ろしいな。
気をつけねば。

「俺のターン、ドロ―！墓地の「ADチエンジャー」の効果発動！
このカードをゲームから除外し、場のモンスター1体の表示形式を
変更する！俺は「スパークマン」を守備表示に変更！」

ADチエンジャーが旗を振ると、スパークマンが攻撃体勢から守備
体勢へと変更された。

スパークマン DEF1500

「つく！（これじゃあ、セットした「ジャスティス・ブレイク」が
使えない！」

「そして俺の墓地にモンスターが存在しない時、手札から「ガーデ
イアン・エアトス」を特殊召喚することが出来る！行くぞ、アイリ
ス！」

「はい！」

一陣の風と共に、民族衣装を身に纏った金髪の女性が現れた。

ガーディアン・エアトス ATK2500

「そして手札から装備魔法「魔道師の力」を「ガーディアン・エアトス」に装備！俺の魔法・畏ゾーンには3枚あるから攻撃力・守備力共に1500アップ！」

ガーディアン・エアトス ATK2500 4000

紫色のオーラがアイリスの身に纏われ、アイリスの力が増した。

「そして「ウエポン・サモナー」を攻撃表示に変更！」

ウエポン・サモナー ATK1600

「バトル！「ウエポン・サモナー」で「スパークマン」に攻撃！」

ウエポン・サモナーの波動弾によってスパークマンが撃ち抜かれた。

「「ガーディアン・エアトス」で「テンペスター」に攻撃！」

「つく！「テンペスター」の効果発動！このカード以外のカード1枚を墓地へ送り、自分の場のモンスターを1体選択する。そのモンスターはこのカードが表側表示で存在する限り、戦闘では破壊されない！俺は伏せカードを墓地へ送り、「テンペスター」を選択する！バブル・ガード！」

「なら、手札から速攻魔法「禁じられた聖杯」を発動！モンスター

1体の攻撃力を400ポイントアップし、ターン終了時までそのモンスターの効果が無効にする。もちろん選択するのは「テンペスター」だ！」

「そんなのありかよ！」

テンペスターが自分自身を泡で包み込んで守ろうとするが、その前に黄金の器に入れられた液体を浴びてしまい、泡が消えてしまった。アイリスが左手を掲げると、風が集まってきた。その風は渦を作り、その中から刀が召喚される。アイリスが刀を掴むとその風の渦は消え、元通りになった。

「・・・行きます！」

アイリスが刀を抜かずに構え、テンペスター目掛けて突撃する。そして疾風のごとき速さで刀を抜き、その勢いを保ったままテンペスターを一閃した。

十代LP2400 1600

「そして俺はこのままターンエンド！」

翔 手札0 モンスター2 伏せ1 装備魔法「魔道師の力」
ウエポン・サモナー ATK1600
ガーディアン・エアトス ATK4000
装備魔法「魔道師の力」を装備

手札が無いのは痛いが・・・何とかなるか？

「俺のターン、ドロー！よし！俺が引いたカードは通常モンスターの「E・HERO クレイマン」！よってデッキからカードを1枚ドロー！よっしゃ！今引いたカードは通常モンスター「E・HERO フェザーマン」！よってもう1枚ドロー！さらに、今引いたカードも「E・HERO バーストレディ」！よってさらにドロー！」

「俺は手札から魔法カード「融合賢者」を発動！デッキから「融合」を手札に加える。そして手札から「融合」を発動！手札の「フェザーマン」と「バーストレディ」を融合！現れる、「E・HERO フレイム・ウイングマン」！」

E・HERO フレイム・ウイングマン ATK2100

「そして手札から魔法カード「凡骨の閃き」（オリカ）を発動！自分の手札を全て捨て、その数だけドローする！俺の手札は2枚。よって2枚ドロー！さらに、この効果でドローしたカードの中に通常モンスターがあった場合、相手に見せることでもう1枚ドローすることが出来る！俺が引いたカードに通常モンスターの「E・HERO バーストレディ」があるから、1枚ドローする！そして「E・HERO バーストレディ」を召喚！」

E・HERO バーストレディ ATK1300

炎を後ろに「HERO」の紅一点、バーストレディが現れる。

「さらに！手札から「R・ライトジャスティス」を発動！場の「HERO」の数だけ魔法・罠カードを破壊する！俺の場には2体のHEROがいる！よって2枚破壊する。対象は翔の伏せカードと「魔道師の力」だ！」

フレーム・ウィングマンとバーストレディの体が輝き始めて、アイリスが身に纏っていた「魔道師の力」と俺の伏せカードが一瞬にして消え去った。

「しまった！（「プライドの咆哮」が！）」

万が一のために伏せておいた「プライドの咆哮」が破壊された。このパターンは・・・まさか！

「手札からフィールド魔法「摩天楼 スカイスクレイパー」を発動！」

地面からビルが生え出し、場がアメリカンコミック風になった。

そして十代のモンスター達は一番高い塔の頂上に立っており、俺のモンスターを襲撃しようとしていた。

「バトル！「フレーム・ウィングマン」で「ガーディアン・エアトス」に攻撃！スカイスクレイパーシュート！」

フレーム・ウィングマンが飛び降り、アイリスに襲い掛かる。

アイリスも刀を構えて、タイミングを計った。・・・そして切りかかる。

だがフレーム・ウィングマンは紙一重でその攻撃をかわし、右手の火炎放射器でアイリスを燃やし尽くした。

「すみません。翔・・・。」

アイリスが倒れる前に、俺に謝る。・・・仇は討つてやるからな。

翔LP4000 3400

「そして「フレイム・ウィングマン」の効果により、破壊したモンスターは攻撃力だけダメージを相手に与える！」

フレイム・ウィングマンが俺に近づき、火炎放射器で炙った。

俺は汚物なのだろうか・・・って、熱い！まじで熱い！！冗談を言っている場合じゃないようだ。

翔 3400 900

「さらに「バーストレディ」で「ウェポンサモナー」に攻撃！バースト・スカイスクレイパーシュート！」

フレイム・ウィングマンと同じように、バーストレディも飛び降りてウェポンサモナーに襲い掛かった。そして右手を炎で包み込み、そのままウェポン・サモナーを殴り倒した。

翔 LP 900 200

「ターンエンドだ！」

十代 手札0 場 モンスター2 伏せ0 フィールド魔法「摩天楼 スカイスクレイパー」 永続魔法「凡骨の意地」
E・HERO フレイム・ウィングマン ATK2100
E・HERO バーストレディ ATK1300

やばい！手札、場にカードが無い。起死回生のカードを引かないと確実に負ける。

「俺のターン、ドロー！」

よし！これに賭けるしかない！！

「俺は手札から魔法カード「ラストチャンス！」（オリカ）を発動！自分のライフを100にし、デッキの一番上のカードの種類（魔法・罫・モンスター）を当てる。その後デッキの一番上のカードをめくり、当たった場合、自分はデッキからカードを3枚ドローする。外れた場合、自分は100ポイントのダメージを受ける。・・・本当のラストチャンスだな。俺が宣言するのは、魔法カードだ！」

自分のデッキの一番上のカードに手をかける。

緊張の一瞬が場を包み込んだ。そしてそのカードが表になった！

「よし！一番上のカードは「天使の施し」！魔法カードだ！！」

「やるじゃねえか！翔！」

「ああ。俺もまさかこんな所で大当たりするとは。よって、カードを3枚ドローする！」

これで俺の手札が息を吹き返した。

十代、これからが俺の逆転劇だ！

「さらに、手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てる。そして手札から魔法カード「大嵐」を発動！場の魔法・罫ゾーンのカードを全て破壊する！」

「しまった！」

大嵐がビルを、塔を、全てを飲み込んで破壊していった。そして嵐が過ぎ去った後には何も残らなかった。

「さらに、手札から「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚！」

機械で出来た白銀の竜が現れる。羽も手足もないので蛇のようにも見えるな。

「そして手札から魔法カード「死者蘇生」を発動！俺の墓地の「ガーディアン・エアトス」を蘇生！甦れ、アイリス！」

ガーディアン・エアトス ATK2500

「只今戻りました。・・・けほつ。」

再び風が吹き、アイリスが甦った。ただし、兜や鎧が所々焦げているのは哀愁が漂うなあ。

「バトル！「ガーディアン・エアトス」で「フレイム・ウィングマン」を攻撃！」

アイリスが刀を呼び出し、フレイム・ウィングマンに切りかかる。だが、突如表れた黒い霧がそれを邪魔してしまい、攻撃は失敗に終わった。

「墓地の「ネクロ・ガードナー」の効果発動！このカードをゲームから除外することで攻撃を無効にする！」

「なら、「サイバー・ドラゴン」で「フレイム・ウィングマン」攻撃！エヴォリション・バースト！」

「フレイム・シュート！」

サイバー・ドラゴンがエネルギー弾を発射すべくチャージしている
と、フレイム・ウイングマンが炎の塊となってサイバー・ドラゴン
に突撃する。そしてサイバー・ドラゴンの頭部を見事に破壊するが、
チャージ中だったエネルギーが暴走し爆発する。その衝撃にフレイ
ム・ウイングマンも巻き込まれ、消え去った。

「俺はこのまま、ターンエンド！」

翔 手札0 場 モンスター1 伏せ0
ガーディアン・エアトス ATK2500

「中々やるな、翔！俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード
「ホープ・オブ・フィフス」を発動！墓地の「E・HERO」と名
のつくモンスターを5体選択し、デッキに戻す。俺は墓地の「クレ
イマン」、「フェザーマン」、「フレイム・ウイングマン」、「バ
ーストレディ」と「スパークマン」をデッキに戻してシャッフル。
そしてデッキからカードを2枚ドローする！そして手札から魔法カ
ード「強欲な壺」を発動！デッキから2枚ドロー！このカードは！
！」

十代が驚いていた。何があったんだ？

・・・

大徳寺先生からお礼を言われて照れていると、大徳寺先生がポケッ
トから1枚のカードを取り出し、俺に差し出した。

「十代君。君にこのカードをあげるにや。」

「え、ありがとう。大徳寺先生！」

それを受け取り、カードを見る。「E・HERO プリズマー」？

「へへ、俺の知らない「HERO」があつたんだ。けど、なんで大徳寺先生がこれを？」

「錬金術の研究成果の一部にや！」

その言葉に俺は驚きを隠せなかった。心の英雄がまさか錬金術と関わりがあつたなんて。

「え、「HERO」と錬金術って関係あつたんだ！？」

「正確に言うと、このモンスターが錬金術の基本である「等価交換の原則」を満たすカードなんだにや。」

「等価交換？」

大徳寺先生の言葉に俺は？を上げるしかなかった。

「簡単に言うと、十代君はドローパンやパックを買うときにお金を支払うにや。」

「当たり前だろ？そうじゃなきゃ泥棒だぜ？」

「つまり、そういうことなんだにや。」

「はあ？」

俺は首を傾げる。・・・さっぱりわかんねえ。

「十代君はドローパンやパックを買うときに金を支払う。つまり、商品を買う代わりに代金を支払う。「何かを得たければ、何かを失う」という法則が錬金術の基本なんだにや。」

「へえ、なるほど。」

つまり、日常的なものだということか。

「このカードの場合は、自分自身を他の何かに移し変える「鏡」とも言える効果を持っているにや。様々なサポートカードがある十代君のデッキとなら、相性は抜群なんだにや！」

「サンキュー。大徳寺先生！（言えない。先日に見とデッキを改造したせいでサポートカードがあまり無いなんて。）」

俺はカードをデッキに入れつつ、冷や汗を何とかばれない様にして会場へ向かった。

・・・

「俺は手札から「E・HERO プリズマー」を攻撃表示で召喚！」

E・HERO プリズマー ATK1800

まるで水晶体が人型になったように思える「HERO」だな。

てか、何故十代がこのカードを！？本来ならまだ後の方で使用され

たはずだが。

「「二重融合」を発動！ライフを500支払い、このターン2回融合することが出来る。場の「バーストレディ」と手札の「フェザーマン」を融合！「E・HERO フレイム・ウィングマン」を融合召喚！」

十代LP1600 1100

「ま、まさか！」

「そう、「E・HERO プリズマー」の効果は自分の融合デッキからカードを1枚見せ、その融合素材のモンスターをデッキから墓地へ送ることで、そのカードと同名になる効果だ！俺は「E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン」を見せ、その融合素材の「E・HERO スパークマン」をデッキから墓地へ送り、このカードを「E・HERO スパークマン」にする！そして「スパークマン」となった「プリズマー」と「フレイム・ウィングマン」を融合！現れる！「E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン」！」

水晶が輝き、その体がスパークマンへと変化する。そしてフレイム・ウィングマンと融合し、更なるHEROが誕生した。

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500

光り輝き、まぶしいHEROが現れる。まさかこのタイミングで召喚されるとは！

「そして「シャイニング・フレア・ウィングマン」は俺の墓地の「

HERO」の数×300ポイント攻撃力がアップする！俺の墓地には10体のHEROが眠っている。よって攻撃力は3000ポイントアップ！」

E・HRO シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500
5500

「攻撃力5500!?!」

観客や司会者が驚いていた。ちなみに俺も驚いていた。機械族なら「リミッター解除」があるから分かるが・・・無茶苦茶だろ!?!

「バトル!」シャイニング・フレア・ウィングマン」で「ガーディアン・エアトス」に攻撃！」

全身を光らせ、シャイニング・フレア・ウィングマンがアイリスに近づこうとする。

だが、突如として発生した霧がシャイニング・フレア・ウィングマンを包み込み、光を消し去った。それを見て、十代は驚いていた。

「ね、「ネクロ・ガードナー」!?!」

「十代!お前と同じ方法で回避させてもらったよ。墓地の「ネクロ・ガードナー」の効果を発動し、無効にした!」

そう、「天使の施し」の際に墓地へ送っていたのだ。もし、来なかつたらやられていた。

「へへっ、やっぱり決闘はこうでなくっちゃ！ターンエンド！」

防がれた十代は、逆にワクワクしていた。なら、その期待に答えな
いとな。

十代 手札2 場 モンスター1 伏せ0

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK5500

さて、これをどうやって打開するかな。まあ、「月の書」か、アレ
がくればいける。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発
動！デッキからカードを2枚ドローする！」

強欲な壺によって2枚のカードを引く。そして確認してみると・・・
あった！サーチカードの方だが、十分だ。

「手札から魔法カード「アームズ・ホール」を発動！デッキからカ
ードを1枚墓地へ送り、デッキ、または墓地から装備魔法を1枚手
札に加える。俺が手札に加えるのは「レインボー・ヴェール」ッ！」

今墓地へ送られたカードは「リビングデッドの呼び声」・・・あま
り意味が無いな。

「そして手札から装備魔法「レインボー・ヴェール」と「魔道師の
力」を「ガーディアン・エアトス」に装備！俺の場の魔法・罫ゾー
ンには2枚のカードがある。よって攻撃力・守備力共に1000ポ
イントアップ！」

ガーディアン・エアトス ATK2500 3500

アイリスの翼が虹色に輝きはじめた。

「そして「ガーディアン・エアトス」の効果発動！相手の墓地のモンスターを3枚まで除外し、ターン終了時までその数×500ポイント攻撃力をアップする！俺は「フェザーマン」、「バーストレイ」、「プリズマー」をゲームから除外！」

ガーディアン・エアトス ATK2500 4000

アイリスが刀を呼び出す。そして鞘から抜いて、天へと掲げる。すると十代の墓地から3つの魂が現れ、アイリスの刀に吸収される。そして刀が吸収した魂に呼応するがごとく、煌いた。

一方のシャイニング・フレア・ウィングマンは少しだけ輝きに陰りが見え、力を失ったのが感じられた。

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK5500 4900

「行くぜ、十代！バトル！「ガーディアン・エアトス」で「シャイニング・フレア・ウィングマン」に攻撃！」

「し、翔！本気が！？」

十代は俺の行動に驚いていた。まあ、「レインボー・ヴェール」の恐ろしさを身をもって知れるがいい！

「装備魔法「レインボー・ヴェール」の効果発動！このカードを装備したモンスターが相手モンスターと戦闘した場合、相手モンスターの効果をダメージ計算終了時まで無効にする！絢爛たる鳳凰の翼よ！その七色の輝きを天空に放ち、俺達に希望の光を照らせ！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 4900 2500

「え、嘘だろ!?!」

アイリスの翼から発せられた虹色の光に、シャイニング・フレア・ウイングマンの輝きが失われた。

元の世界で「カタストル」に散々悩まされた拳句の対応策として入れられた「レインボー・ヴェール」がこんな形で活躍するとは……。

てか、あまりの興奮のためか懐かしい漫画の台詞をそのまま言ってしまった。

「霞切り!!!」

シャイニング・フレア・ウイングマンの輝きが失われ、怯んだ所をアイリスは容赦なく切り裂いた。少しえげつない気もするが、これも勝負の世界なので気にしないことにする。

十代LP1100 - 400

「勝者、丸藤 翔!」

審判の合図と共に、勝敗が決した。

そして、十代が俺に近づいて、いつものポーズをとった。

「ガツチャ! やっぱ翔は強いなあ。」

「いや、十代も相当強いと思うぞ?」

そう、もし「ラストチャンス！」や「アームズ・ホール」を引けなかったら、負けていたのは確実に俺の方だろう。まさに首の皮一枚で勝利をもぎ取った気分だ。心臓に悪いよ。

「翔、優勝目指して頑張れよ！」

「ああ、応援宜しく。」

そう言っつて、俺達は会場から離れた。

「さて、第三試合は「小原 流奈」選手対「伊達 明」選手の対戦です！」

お、次は伊達さんと流奈さんか・・・お互いどんなデッキを使うのかとても興味があるな。

フィールド24：夏祭り大会第3試合（HEROの意地）（後書き）

と、いうことで翔がギリギリ勝ちました。

さて、次は伊達さん対HERO様の「遊戯王」精霊の歌声」から「小原 流奈」さんの対決です。・・・毎度同じく、性格がおかしくなるかもしれませんが、ご了承を。それでは。

フィールド25：夏祭り大会第3試合（霊使いの主）（遊戯王「精霊の歌声」）

遅れてすみませんでした！

「オーズ」と「精霊の歌声」の両方を見つつ、キャラクターの性格を探っていて遅れました。orz

と、言うことで、今回はHERO様の「遊戯王「精霊の歌声」」とのコラボです。

毎度ながら、キャラクターの性格が違うといった感想があるかも知れませんが、何とぞご了承ください。

それと、勝手ながらモンスターの特殊効果を1部追加しました。もしご不満があれば、平行世界のカードだと思ってください。

追記：1部おかしい所があったので、少し変更しました。

「これより、「小原 流奈」選手対「伊達 明」選手の対戦を
始めます！」

わーっ！

観客から歓声が沸く。もはや恒例だな。これ。
さて・・・伊達さんと小原さんのデッキはどんなだろうか？しっ
かり観察しておかねば。

「俺の名前は伊達 明。よろしく！」

「私は小原 流奈です。よろしくお願ひします。」

ノリノリな伊達さんに少し大人しそうな小原さん。
人柄的にも面白そうな展開になりそうだ。

「では、表を小原選手。裏を伊達選手でコイントスします。・・・
結果は表！よって小原選手が先攻になります！」

裏、表、表・・・次は裏だろうか？

だとしたら、万丈目が先攻になるな。

「さーて、やりますか！」

「お願ひします。」

「それでは」

「決闘！」

「私の先攻、ドロ―！私はモンスターを裏守備表示で召喚し、カードを1枚伏せターンエンドです！」

小原 手札4 場 モンスター1 伏せ1

セットモンスター DEF？

「俺のターン、ドロ―！俺は手札から「カードガンナー」を召喚。」

カードガンナー ATK400

両腕にキャノン砲を装備したガンタンク？もどきが現れる。

といつても、メタルスラッグ3のエイリアンの兵器のほぅが似ているような・・・。

「そして「カードガンナー」の効果発動！1ターンに1度、デッキから3枚まで墓地へ送ることとその枚数×500ポイント攻撃力がアップする。俺は3枚墓地へ送り、攻撃力を1500ポイントアップ！（落ちたカードは・・・速攻のかかし」「天使の施し」「苦渋の選択」か。ついてないね。」

カードガンナーの目の部分が輝きを増し、体が激しく揺れている。

恐らくは攻撃力が増えたことに対するアクションなのだろうが、物凄く壊れているように見えて不安だ。

「バトル！「カードガンナー」でセットモンスターに攻撃！」

両腕のキャノン砲から弾丸が発射され、裏守備モンスターを撃ち抜こうとする。

「攻撃宣言時にセットカードオープン、永続罫「精霊術 和」を発動します！これにより自分の場の「霊使い」と名のつくモンスターは戦闘では破壊されません。私のセットモンスターは「地霊使いアウス」。よって、「精霊術 和」の効果で破壊されません。」

茶髪のショートカットをし、茶色のローブを身にまとって眼鏡をかけた女の子が現れる。その隣には羽の生えた動物がふわふわと浮かんでいた。

地霊使いアウス DEF1500

そしてアウスの前に「精霊術 和」によって生み出された障壁がガードガンナーの玉を弾いた。

「なるほど。いいセンスしてるね。」

「さらに「地霊使い アウス」のリバーズ効果を発動します。相手の場の地属性モンスター1体のコントロールを得ます！私は「カードガンナー」を指定！アウス、お願い！」

（はい。生麦生米生卵・・・じゃない、ええつと・・・そいや！）

アウスがなにやら呪文を唱えると、カードガンナーがブスンツと音を立て機能停止する。・・・壊れたのか？と思っていたら、再起動して小原さんの場に移動した。

「お、おお。こりやまいったな・・・。俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

伊達 手札3 場 モンスター0 伏せ2

「私のターン、ドロー！私は手札から「光霊使い ライナ」を攻撃表示で召喚！」

光霊使い ライナ ATK500

（いっくよー！）

白髪でアウスと同じローブを身に纏った女の子が現れた。

しかし、何か陽気な感じがするな。ん？てか、今喋ったよな？
なら、あの娘も精霊持ちか。

（驚かないのですか？）

「まあ、俺や十代といった前例があるからなあ。」

（そうですね。）

何せ、俺というイレギュラーがいるのだ。他にも精霊持ちがいたとしてもあまりおかしくは無いだろう。ただ、今後の動きが分かりづらくなるのは厄介だが。

「さらに、「精霊術 和」の効果を発動します！1ターンに一度自分フィールド上の「霊使い」と名のつくモンスターを一体選択し、そのモンスターと同じ属性でレベルが2以下のモンスターを一体デッキから特殊召喚します。私は「光霊使いライナ」を選択し、デッキから光属性の「ハッピー・ラヴァー」を守備表示で召喚します。」

ハッピー・ラヴァー DEF500

天使の輪をつけた不気味な生き物が現れる。

・・・かわいいのか？あれは？しかも頭からハートビームを出すらしい。何それ怖い。」

「そして手札から魔法カード「融合」を発動します。場の「光霊使い ライナ」と「ハッピー・ラヴァー」を融合し、「光霊騎士 ライナ」を融合召喚します！」

光霊騎士 ライナ ATK2500

ライナが白を基本色とした可愛らしい鎧を身に纏い、杖ではなく弓矢を持って現れた。

まさかの「憑依装着」ではなく、オリジナルカードが出てくるとは・・・。

この娘も転生者か？用心しなければ。

「さらに、「地霊使い アウス」と「カードガンナー」を墓地へ送り、デッキから「憑依装着 アウス」を攻撃表示で特殊召喚します！」

憑依装着 アウス ATK1850

アウスとカードガンナーが消え、相棒の動物が威嚇しつつ戦闘状態に入ったアウスが現れた。

「バトル！「憑依装着 アウス」でダイレクトアタック！」

（先手必勝です！はあ！）

アウスがそのまま杖で伊達さんを殴ろうとする。
そこは使い魔が攻撃するんじゃないのか？

「おおつと、なら手札の「速攻のかかし」の効果を発動！このカードを墓地へ送り、攻撃を無効にする。そしてバトルフェイズは終了！」

伊達さんの前に案山子が現れ、アウスがそのかかしを杖で碎いた。
見ている方からすると、かなり威力がありそうで怖いな。

「そ、そんな……。なら、私は「光霊騎士 ライナ」の効果を発動します！このカードの攻撃力の数値分自分のLPを回復します！ただし、この効果を使用したターン、「光霊騎士 ライナ」は攻撃することが出来ません。ライナ、宜しくね！」

(そいや〜。)

小原さんに鏃の部分がハートになった矢を向けるライナ。そして矢が放たれ、光となった。その光が小原さんを包み込み、LPを回復する。

小原 LP4000 6500

「カードを1枚伏せて、ターンエンドします！」

「これはお返しかな？エンドフェイズにリバースカードオープン、罨カード「砂塵の大竜巻」を発動！今伏せたセットカードを破壊するわ。」

竜巻が今伏せたカードを巻き込み、破壊した。

「あ！（「和睦の使者」が！）」

「さて、「砂塵の大竜巻」の効果でカードを1枚伏せる。」

伊達さんがカードを伏せたが、何故「砂塵の大竜巻」で「精霊術和」を破壊しなかったのだろうか？いや、わざと残しておいて何かするの？

小原 手札2 場 モンスター2 伏せ0 永続罫「精霊術 和」
光霊騎士 ライナ ATK2500
憑依装着 アウス ATK1850

「俺のターン、ドロー！お、これは……。」

そういうと伊達さんは自分の場と相手の場を見比べる。

「結構つやばいね。なら、俺は手札から魔法カード「一時休戦」を発動するわ。このカードが発動した時、お互いはデッキからカードを1枚ドローし、次の相手のターンまでダメージを受けない。一旦休憩を挟もうじゃないの。」

そういうと、伊達さんはその場に座り込んで腰のポケットから1本のジュースもどき……いや、どうやらあの缶の中身は「おでん」らしく、中に入っていた卵を爪楊枝で刺してうまそうに食べていた。

「やっぱ、これに限るね。」

その光景を見て呆れる一同。

そりゃそうだよな。カードゲームの大会中に座り込んでおでんを食

べだすなんて……。

「今は夏ですよ?」

「ん、知っているけど?」

「普通はカキ氷やそうめんやら……冷たい物を食べると思っんですけど?」

「まあ、いいじゃないの。アフリカに行った時も鍋を持って来て、皆でおでんをしたんだし。」

「はぁ……。第二次世界大戦中のイタリア軍じゃないんですから。」

「お、小原ちゃんナイス突っ込みッ!」

「褒めていません!」

「はははっ。と、小原ちゃんもおでん、いるかい?」

「いりません!」

「おお、いい声だ。さて、俺はカードを2枚伏せてターンエンドかな。」

伊達 手札1 場 モンスター0 伏せ3

ある意味漫才だよなこれ。

ボケる伊達さんと突っ込む小原さん……いいコンビになりそうだ。

てか、アフリカに行ったってことはやはり医者なのか？だとしたら被弾しているかもしれないな。

「私のターン、ドロー！私は手札から「火霊使い ヒータ」を攻撃表示で召喚します！」

火霊使い ヒータ ATK500

赤い髪をした少女が現れる。無論、茶色のローブを着ているが。しかし、使い魔の狐が可愛いな。

（よっしゃ、行くぜ！）

やはりヒータも精霊らしい。なら、他の霊使いも精霊かな？だとしたらダルクがとてつもなく大変だろうな・・・もげる。

「そして「精霊術 - 和」を発動し、「火霊使い ヒータ」を選択します。そしてデッキから炎属性の「きつね火」を守備表示で特殊召喚します！」

きつね火 DEF200

1匹の狐が現れる。地味に壁として有能な子なんだよなあ。しかし狸は出ないのか？

「そして手札から魔法カード「融合」を発動！「火霊使い ヒータ」と「きつね火」を融合し、「火霊騎士 ヒータ」を攻撃表示で召喚します！」

火霊使いヒータ ATK2500

紅の鎧を身に纏い、刀を持ったヒータが現れる。
かなり似合っていて驚いたが・・・刀か。てつきり拳でやるかと思
ったよ。

「そして「火霊騎士 ヒータ」の効果を発動します！このターン「
火霊騎士 ヒータ」で攻撃を行えなくなりますが、「火霊騎士 ヒ
ータ」の攻撃力の数値分、相手にダメージを与えます！ヒータ、お
願い！」

（ああ。いづくぜー！）

ヒータの刀に炎が集まり、刀を抜くと同時に炎が伊達さんを襲った。
まるで波動拳のように見えるな。

「あちあち！」

炎を浴び、本当に熱がる伊達さん。
髪が燃えていないからソリッドビジョンだと分かったが・・・中々
の演技だよ。マジで一瞬だまされた。

伊達 LP4000 1500

「さらに、「光霊騎士 ライナ」の効果発動！ライナ、また宜しく
！」

（アイアイサ〜！）

今さっきと同じく、矢が放たれて回復する。・・・地味に不味いな。

小原 LP6500 9000

「私はこれでターンを終了します！」

小原 手札1 場 モンスター3 伏せ0 永続罫「精霊術 和」

光霊騎士 ライナ ATK2500

憑依装着 アウス ATK1850

火霊騎士 ヒータ ATK2500

攻撃力2500が2体。結構やばいぞ。

しかし、アウスだけ騎士じゃないのは地味に可愛いそうだな。

「さてと。」

おでんが入っていた缶をポケットへ突っ込み、伊達さんが立ち上がる。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「天よりの宝札」を発動！お互いに手札が6枚になるようにデッキからドローする！俺の手札は1枚。よってデッキからカードを5枚ドローする！」

「私の手札は1枚です。よって、デッキからカードを5枚ドローします！」

一気に手札補充したか。そろそろ伊達さんが動くかな？

「よし！これで十分手札がそろったな。行くぜ、小原ちゃん！俺は手札から永続魔法「生還の宝札」を発動！」

「生還の宝札」？アンデット族か？いや・・・まさか。

「さらに魔法カード「調律」を発動！デッキから「シンクロン」と名のついたモンスター1枚を選択し、手札に加える。じゃ、俺はデッキから「クイック・シンクロン」を手札に加えるわ。その後、デッキの一番上のカードを墓地へ送る。（お、「スノウ・シンクロン」が落ちたか。）」

ハーブの音色に導かれて、デッキから「クイック・シンクロン」が手札に加わった。

そしてデッキから1枚、墓地へ送られる。原作効果だと鬼畜だったけどね。

って、まさか伊達さんのデッキは「シンクロン」デッキかよ!?!「デブリダンデイ」ではなさそうだけど・・・それでも「生還の宝札」とのコンボは恐ろしい。

「さらに手札の「レベル・ステイラー」を墓地へ送ることで手札の「クイック・シンクロン」を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700

茶色の帽子とマントを被り、まるでアメリカの中世期に出てくるガンマンが現れる。

もちろん、腰にはリボルバー式のライフルが装備されてある。

「さらに墓地の「レベル・ステイラー」の効果発動！このカードが墓地に存在する時、自分の場のレベル5以上のモンスターのレベルを1つ下げることによって、墓地から特殊召喚する。と言ってもまあ、普通なら生贄召喚にしか使えないけどな。俺は「クイック・シンクロン」のレベルを1つ下げ、「レベル・ステイラー」を守備表示で特殊召喚！」

クイック・シンクロン レベル5 4

レベル・ステイラー DEF0

星型のマークをつけた天道虫が現れた。シンクロではこのカードは結構必須だったな。もちろん「生還の宝札」との相性はばっちりだ。

「「生還の宝札」の効果は今回発動しない。俺は「レベル・ステイラー」が墓地から特殊召喚されたことによつて、手札から「ドッペル・ウォリアー」を攻撃表示で特殊召喚！」

ドッペル・ウォリアー ATK800

小銃を構えた兵士が現れた。まさかこのカードまで出てくるとは……

「レベル2の「ドッペル・ウォリアー」にレベル4となった「クイック・シンクロン」をチューニング！シンクロ召喚！「ドリル・ウォリアー」！」

クイック・シンクロンの手には、いつの間にか「ドリル・シンクロン」の絵が描かれた紙が持たされた。そしてその紙を勢いよく空へ放り上げ、腰に装備された銃で撃ち抜く。するとクイック・シンクロンは光の輪となり、ドッペル・ウォリアーを包み込む。

その光が晴れると、右手にドリルを装備した戦士が現れた。……間違つてもゲッター2なんて言うなよ？

ドリル・ウォリアー ATK2400

「さらに、シンクロ素材となった「ドッペル・ウォリアー」が墓地へ送られたとき、レベル1の「ドッペルトークン」を攻撃表示で2体特殊召喚する！」

ドッペルトークン ATK400

ドッペル・ウォリアーの子供版とも言える、少年型のトークンが現れた。

「さらに、セットカードオープン、永続罠「リビングデッドの呼び声」を発動！自分の墓地のモンスター1体を選択し、特殊召喚する！俺は墓地の「クイック・シンクロン」を特殊召喚し、「生還の宝札」の効果で1枚ドロロー！」

クイック・シンクロン ATK700

本日2度目の登場。なんか「スピード・ウォリアー」という過労死を思い出した。

まあ、「ネオス」ほどではないが・・・。

「レベル1「ドッペルトークン」2体にレベル5の「クイック・シンクロン」をチューニング！シンクロ召喚！「ニトロ・ウォリアー」！」

今度は「ニトロ・シンクロン」の絵が描かれた紙を持って現れる。そしてまた紙を撃ち抜き、光の輪になる。その輪がドッペルトークンを包み込む。今度は全身から力を感じさせる炎をその見に宿した戦士が現れた。

ニトロ・ウォリアー ATK2800

「まだまだ！俺はセットカードオープン！永続罠「リミット・リバース」を発動！自分の墓地の攻撃力1000以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！三度登場、「クイック・シンクロン」！そして再び「生還の宝札」の効果で1ドロウする！」

少し疲れ始めた「クイック・シンクロン」。。。何かとてもかわいそうな気がするな。

「「ドリル・ウォリアー」のレベルを1つ下げ、「レベル・ステイラー」を守備表示で特殊召喚！」

ドリル・ウォリアー レベル6 5

レベル・ステイラー DEF0

「そして「生還の宝札」で1ドロウ！おお、手札が増える増える。やったね、たえちゃん！」

伊達さん、それは鬱フラグだ！やめてくれ！

「レベル1の「レベル・ステイラー」にレベル5の「クイック・シンクロン」をチューニング！シンクロ召喚！「ターボ・ウォリアー」！」

お次は「ターボ・シンクロン」が描かれた紙を持って、撃ち抜く。そして光の輪となり、レベル・ステイラーを包み込む。今度は赤いボディをした戦士が現れた。ただし、見た目は乗り物をモチーフにしているためか、少し戦士っぽくないような。。。まあ、「ジャンク・デストロイヤー」は思いつきり機械族だろ！って突っ込みた

い。

ターボ・ウォリアー ATK2500

「そして手札から魔法カード「マジック・プランター」を発動！自分の場の永續罠1枚を墓地へ送り、デッキから2枚ドロウする！俺は「リミット・リバーズ」を墓地へ送り、デッキから2枚ドロウするわ。」

ここで手札増幅か……。 「生還の宝札」で稼いでいるから大丈夫だと思うんだが。

「手札から「ジャンク・シンクロン」を召喚！」

黄色い帽子を被り、体も黄色というちよつと変わった少年風なモンスターが現れた。

これと「スピード・ウォリアー」は遊星のデッキの過労死組筆頭だといつても過言ではない。

「そして「ジャンク・シンクロン」の効果発動！自分の墓地のレベル2以下のモンスター1体を選択し、効果を無効にして特殊召喚することが出来る！よって俺の墓地の「ドッペル・ウォリアー」を守備表示で特殊召喚し、そして「生還の宝札」により1枚ドロウする。」

ジャンク・シンクロンの効果により、ドッペル・ウォリアーが戻ってきた。このレベルといつたら……。アレか！？

「レベル2の「ドッペル・ウォリアー」にレベル3の「ジャンク・シンクロン」をチューニング！シンクロ召喚！「ジャンク・ウォリ

アー！」

ジャンク・シンクロンが背中中の機械についてある紐を思いっきり引っ張ると、その機械が動き出し、光の輪となった。そしてドッペル・ウォリアーを包み込む。

そして紫色のカラーリングが特徴的な一体の戦士が現れ、右腕の拳を前へ突き出した。

ジャンク・ウォリアー ATK 2300

吸収効果が使えないのは残念だが、これであらかたウォリアーが出揃ったな。

ん、けど伊達さんはまだ何かしようとしているみたいだ。

「ドッペル・ウォリアー」の効果があるが、今回は使わない。これで打ち止めかな。俺は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動！墓地の「スノウ・シンクロン」を守備表示で特殊召喚！そして「生還の宝札」で1ドロー！」

スノウ・シンクロン DEF 1200

一言で言えば、雪だるま型のシンクロンだな。結構可愛らしい。

しかし・・・場にはすでにモンスターが揃っているから、これ以上シンクロするのは無理だろ？

「スノウ・シンクロン」は中々面白い効果を持っているな。こいつをシンクロ素材にする場合、他のシンクロ素材モンスターを自分の墓地にあるモンスターを使ってシンクロすることが出来るのさ。

まあ、この効果でシンクロ素材になったモンスターはすべてゲームから取り除かれるけどな。」

は、反則だろ！？もしOCG化したら速攻で悪用されるぞ！！

「墓地のレベル2の「ドツペル・ウォリアー」、レベル1の「レベル・ステイラー」、レベル1の「速攻のかかし」2体に場のレベル2の「スノウ・シンクロン」をチューニング！シンクロ召喚！「スノウ・ウォリアー」！」

薄い色になったドツペル・ウォリアーとレベル・ステイラーと速攻のかかしが現れ、そこへスノウ・シンクロンが自身を雪だるまから雪の粒へと変化し、ドツペル・ウォリアー達に振りかける。すると光に包まれ、光の中から青い防寒着を着て、スノーボートに乗ったスピードウォリアーにそっくりなモンスターが現れた！

スノウ・ウォリアー ATK2600

初めて見るウォリアーだな。効果は何だろ？・・・てか、これで伊達さんの場には5体のモンスターが揃った。しかし、いくらシンクロンの展開力が早いからって、1ターンではこれは予想できなかつたな。

ん、よく見ると・・・色が戦隊物の順で揃っている。ただし、リーダーはジャンク・ウォリアーだが。

「漆黒の戦士、ジャンク・ウォリアー！」

「火炎の戦士、ニトロ・ウォリアー！」

「氷雪の戦士、スノウ・ウォリアー！」

「疾風の戦士、ターボ・ウォリアー！」

「大地の戦士、ドリル・ウォリアー！」

「ooooooooシンクロ戦隊ッ！」「」「」

思い思いに気合を貯めるポーズを取り、

「ooooooooウォリアーズッ！！」「」「」

掛け声と共に、右腕を突き出した。

そして背景は爆発したヴィジョンになった。・・・力入れすぎだろ。

「な、また新しい戦隊物だと！？」

「ヒュー、かつこいいな。」

「うお、かつけー！だけど俺のHEROも負けぢやないぜ！な、相棒！」

(クリクリ)

どうやら観客(特に子供)や十代には大うけらしい。

まあ、こんな演出をされたら胸熱だろうなあ・・・。

「皆、行くぞ！」

「ooooooooおう！」「」「」

「いいノリじゃないの！俺はセットカードオープン、畏カード「風林火山」を発動！」

風林火山の発動と同時に、各ウォリアーの体が黄金色に光り輝く。ちよつと待て！ジャンク・ウォリアーは関係ないだろ！？

「しまった!？」

「「風林火山」は場に炎属性、水属性、地属性、風属性が存在する時のみ発動することが出来るとおきの罫カードだ。まあ、その代わり効果は絶大なんだけどな。」

驚いている小原さんに対して、伊達さんがゆっくりと説明する。

ちなみに「風林火山」の発動条件は場に、なので相手の場のモンスターと合わせて発動することが出来る。

「そして俺が選択するのはもちろん・・・「相手モンスターを全て破壊する」効果!」

「ッ!」

「ククククシンクロ・同・盟・拳!」「」「」

黄金になった各ウオリアーが再び拳を突き出すと、大きな波動となつて小原さんの場のモンスターに襲い掛かった。今度はGンかよ!？」

(うわぁー!)

(きゃーっ!)

(マスター、すまねー!!)

「皆・・・。」

波動に飲み込まれ、霊使いは吹き飛ばされる。
・・・勝敗は決したな。

「じゃ、バトル！ジャンク・ウォリアー、ニトロ・ウォリー、スノウ・ウォリアー、ターボウォリアー、ドリル・ウォリアーでダイレクトアタック！」

小原LP	9000	6700	2900	3000	-	2200	-
4600							

「勝者！伊達 明選手！」

審判の宣言と共に、勝敗が決した。

しかし・・・１ターンで逆転するとは。やはりシンクロは強いな。

「と、少しやりすぎたけど・・・大丈夫？」

「え、ええ。」

伊達さんが心配して小原さんに声を掛ける。

「なら、少しは手加減したらどうですか？と言いたくなるのは俺だけなのだろうか？」

「中々面白いモンスターですね。また機会があったら決闘してください！」

「お、嬉しい事言ってくれるじゃないの！じゃ、またな！」

「はい！」

そう言うと、伊達さんと小原さんがその場を離れた。

もしも伊達さんが「和睦の使者」を破壊せずに「精霊術 和」を狙っていたら、今度は小原さんが逆転していたんだろうか？・・・気になるが、終わってしまったことだ。気にしても仕方が無い。

「続いて、第四試合は「丸藤 亮」選手対「万丈目 準」選手の対決です！」

さて、次は兄さんと万丈目か・・・パワー対決になるかもしれないから、これは見逃せないな。

フィールド25：夏祭り大会第3試合（霊使いの主）（遊戯王々精霊の歌声々々

と、言うことで伊達さんが勝ちました。

しかし「シンクロン」デツキは本当に展開力が恐ろしいですね。

ちなみに「霊使い」でエリア、ウイン、ダルクが登場していませんが別に彼らのことが嫌いではありません。ただ出番が無かっただけです。

・・・もう少しうまく書けたら、出番があつたかもしれませんね。

フィールド26：夏祭り大会第3試合（熱気）（前書き）

今回はカイザーVS万丈目の対決です。

ついでに、前半と後半に分けてみました。・・・勝手な作者ではありません。

FOOLさん。オリカを送っていただき、ありがとうございます。

追記：後半部分で大変失礼な事を書いてしまい、申し訳ありませんでした。

フィールド26：夏祭り大会第3試合（熱気）

「これより、「丸藤 亮」選手対「万丈目 準」選手の対戦を
します！」

わー！！！！

いつもより歓声が大きい。恐らく、兄さんの決闘を生で見れるので興奮しているのだろう。

「頑張れー、万丈目！」

十代の声が歓声に飲み込まれないぐらい大きい声で、万丈目を応援している。

なら、俺も兄さんを応援するか。

「兄さん、負けないでー！」

すると、あちこちから兄さんと万丈目を応援する声が聞こえてきた。兄さんとはかく、万丈目がここまで応援されるのはちょっと驚いたな。

「カイザー。俺の修行の成果をあんたにぶつけさせてもらおう！」

びしっ、と効果音が出そうな勢いで兄さんを指差す万丈目。

どうでもいいがそれ、ちょっと失礼じゃないか？

「面白い。このカイザーに宣戦布告するとは……。いいだろう、全力でかかって来い！！万丈目！！！」

万丈目の宣戦布告に対し、J〇J〇立ちをしながらそれに答える兄さん。いや、カイザー。・・・ノリノリだな。

「それで「先攻はお前にくれてやる。万丈目。」え！」

司会者のコイントスを堂々と無視して先攻を譲るカイザー。こりゃ完全にスイッチが入ったな。もう誰にも止められない。

「ちょ「ほお。俺も舐められたものだ。が、貰っておこう。」・・・」

それに対して万丈目は先攻を貰った様だ。司会者カワイソス。

「「決闘!!!」」

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「仮面竜」を守備表示で召喚！」

仮面竜 DEF1100

白と赤の二色の竜が現れる。頭部はまるで仮面を被ったかのような形であり、名前の由来が分かる。

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

万丈目 手札4 場 モンスター1 伏せ1

仮面竜 DEF1100

消極的に見えて中々堅剛な構えを見せる万丈目。だが、サイバー相手には少し厳しいと思うがな。

「俺のターン、ドロ！俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロし、その後2枚捨てる。そして「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

機械によって生み出された白銀の竜が現れる。ただし、手足や羽はないため、蛇のようにも見える。

「さらに「融合呪印生物―光」を守備表示で召喚！」

融合呪印生物―光 DEF1600

まるで脳みそのような不気味な生物が現れる。しかし、このパターンは……

「「融合呪印生物―光」の効果発動！自分の場のこのカードを含む融合素材モンスターを生贄に捧げることで、光属性の融合モンスターを特殊召喚する！俺は「融合呪印生物―光」と「サイバー・ドラゴン」を生贄に捧げ、「サイバー・ツイン・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800

融合呪印生物とサイバー・ドラゴンが消え、2つ首になったサイバー・ドラゴンが現れる。しかし、胴体が細いため少しバランスが悪い。

「バトル！「サイバー・ツイン・ドラゴン」で「仮面竜」に攻撃！」

エヴォリューション・ツイン・バースト！」

2つの頭部からエネルギー弾が発射され、仮面竜を撃ち抜いた。

「俺は「仮面竜」の効果を発動し、デッキから「仮面竜」を守備表示で特殊召喚！」

「無駄だ！「サイバー・ツイン・ドラゴン」はバトルフェイズ中、2回の攻撃が出来る効果を持っている！再び「サイバー・ツイン・ドラゴン」で「仮面竜」を攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト！」

仮面竜の効果によりデッキから仮面竜が呼び出されたものの、再び破壊される。

「っ！だが、「仮面竜」の効果で「仮面竜」をデッキから守備表示で特殊召喚！」

「守りを固めても俺は倒せないぞ？万丈目！俺はカードを4枚伏せて、ターンエンドだ！」

亮 手札0 場 モンスター1 伏せ4

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800

万丈目と対極して豪快な戦い方を見せるカイザー。

「大嵐」が飛んできたらどうするつもりなんだ？

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動！デッキからカードを5枚選択し、相手はその中から1枚選ぶ。俺が選ぶのは「真紅眼の飛竜」を3枚、「ミンゲイドラゴン」を2

枚だ！」

「なら「ミンゲイドラゴン」を選択する。」

「選択された「ミンゲイドラゴン」を手札に加え、それ以外のカードは墓地へ送る。さらに俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚引き、その後2枚捨てる！」

「ほう。何をやる気だ？」

「俺は手札から魔法カード「融合」を発動！行くぜ、カイザー！手札の「真紅眼の黒竜」2体を融合！「真紅眼の双頭竜」を融合召喚！」

真紅眼の双頭竜 (レッドアイズ・ツインヘッド・ドラゴン)

融合・効果モンスター 星8 闇属性 ドラゴン族

ATK3100 DEF2300

「真紅眼の黒竜」+「真紅眼の黒竜」

効果：このカードの融合召喚は、上記のカードでしか融合できない。このカードは1回のバトルフェイズ中に2回攻撃することができる。まるで「サイバー・ツイン・ドラゴン」のように2つ首になった「真紅眼の黒竜」が現れ、咆哮を挙げる。まるで自分の存在を示すかのごとく。そして、主である万丈目の期待に答えるかごとく。

「そして「仮面竜」を攻撃表示に変更し、バトル！「真紅眼の双頭竜」で、「サイバー・ツイン・ドラゴン」を攻撃！黒双炎弾！」

「エヴォリューション・ツイン・バースト!!!」

真紅眼の双頭竜の口から2発の炎の弾が撃ち出される。サイバー・ツイン・ドラゴンも2発のエネルギー弾を撃ち出し炎の弾を消し飛ばそうとするが、逆にエネルギー弾が飲み込まれてしまいそのままサイバー・ツイン・ドラゴンに命中。炎上し、大破した。

亮LP4000 3700

「真紅眼の双頭竜」はバトルフェイズ中2回の攻撃が可能なモンスターだ！俺は「真紅眼の双頭竜」でダイレクトアタック！」

「まるで俺の「サイバー・ツイン・ドラゴン」を見ているようだ。が、そう甘くは無いぞ？セットカードオープン、罠カード「ガードブロック」発動！このダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロウする！」

涼しげな顔をして「真紅眼の双頭竜」の攻撃を防ぐカイザー。しかし、場は圧倒的に不利だぞ？

「そして「仮面竜」でダイレクトアタック！」

「ならセットカードオープン、永続罠「リビングデッドの呼び声」を発動！墓地の「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を攻撃表示で特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ ATK1500

「サイバー・ドラゴン」を模したモンスターが突如現れる。

「巻き戻しが発生し、俺は「仮面竜」の攻撃を中止する。やはりこの程度では駄目か……。」

「リビングデッドの呼び声」によってダイレクトアタックを中止せざるを得なくなり、悔しがる万丈目。それに対し、カイザーはドヤ顔で待ち構えていた。

「そしてターン終了時に「真紅眼の飛竜」の効果発動！このターン俺が通常召喚をしていない場合、このカードをゲームから取り除くことで墓地の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚する！俺は墓地の「真紅眼の飛竜」を1枚ゲームから除外し、墓地の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚！

真紅眼の黒竜 ATK2400

原作では城之内や吹雪さんが使っていたモンスターが、まさか万丈目が使うことになるとは……。

万丈目 手札2 場 モンスター2 伏せ1

真紅眼の双頭竜 ATK3100

真紅眼の黒竜 ATK2400

仮面竜 ATK1400

「中々味なマネをするな……俺のターン、ドロロー！ふふ、サイバ一流の底力を見せてやる！俺は「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」の効果を発動し、手札の魔法カード「機械複製術」を見せる。これによって、このターン「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」は「サイバー・ドラゴン」として扱う！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ サイバー・ドラゴン

「さらに、セットカードオープン、罾カード「ゲットライド！」発

動！墓地の「アーモード・サイバー」を「サイバー・ドラゴン」となった「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」に装備！さらに「アーモード・サイバー」の効果発動。1ターンに1度、装備されたモンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせることによって、フィールド上の表側表示のモンスター1体を破壊する。万丈眼の「真紅眼の双頭竜」を破壊！」

サイバー・ドラゴン ATK1500 500

レーザー砲に撃ち貫かれ、「真紅眼の双頭竜」が破壊される。これで「機械複製術」のコンボが可能になった。・・・かなりやばいぞ？

「そして手札から魔法カード「機械複製術」を発動！もちろん指定するのは「サイバー・ドラゴン」となった「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」。よって、デッキから2体の「サイバー・ドラゴン」を攻撃表示で特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100 x2

「さらにセットカードオープン！永続罠「リミット・リバース」を発動！墓地の「融合呪印生物ー光」を攻撃表示で特殊召喚！そして「融合呪印生物ー光」の効果を発動！「融合呪印生物ー光」と「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を墓地へ送り、「サイバー・ツイン・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800

再び「融合呪印生物ー光」の効果によって「サイバー・ツイン・ドラゴン」が現れる。原作だったら、確実に「サイバー・エンド・ドラゴン」を出していただろうが・・・。

「バトルだ！」「サイバー・ツイン・ドラゴン」で「真紅眼の黒竜」に攻撃！これで終わりだ。万丈目！」

「まだまだ！セットカードオープン、罾カード「バーストブレス」発動！「真紅眼の黒竜」を生贄に捧げ、その攻撃力以下のモンスターを全て破壊する！」

「何い！ちい、チエーンしてセットカードオープン！罾カード「アタック・リフレクター・ユニット」発動！俺の場の「サイバー・ドラゴン」を生贄に捧げ、デッキから「サイバー・バリア・ドラゴン」を守備表示で特殊召喚する！」

サイバー・バリア・ドラゴン DEF2800

カイザーの咄嗟の機転により全滅は免れたものの、真紅眼の黒竜から吐き出されたブレスがサイバー・ツイン・ドラゴンとサイバー・ドラゴン、そして味方であるはずの仮面竜まで巻き込みながら破壊していった。

その光景を目の当たりにしたカイザーは、むしろ生き生きとした表情になっていた。

「万丈目。今までお前を侮っていた。だが、これなら存分に楽しめそうだ！」

「ほう、帝王の本気か。なら俺の、いや俺達の誇りに賭けて。カイザー、あんたを倒してみせる！」

亮 手札0 場 モンスター1 伏せ0 永続罾「リビングデッドの呼び声」「リミット・リバース」

サイバー・バリア・ドラゴン DEF2800

2人の戦いが一層熱気に包まれ、会場のテンションもヒートアップする。

それに呼応するがごとく蝉の鳴き音も大きくなり、「夏」を感じさせた。

フィールド26：夏祭り大会第3試合（熱気）（後書き）

と言うことで、中途半端なところで前半が終了しました。
個人的に、後半は泥沼になりそうな感じです。・・・ボトムズでも
見直すか。

フィールド26：夏祭り大会第3試合（機竜の咆哮）（前書き）

先に一言。すみません・・・どうやら上、中、下の3話になりそうです。

今回は万丈目視点で話を進めます。

それと少し口調がおかしくなっているかもしれませんが、ご了承ください。

フィールド26：夏祭り大会第3試合（機竜の咆哮）

熱気が体温を上げ、体から汗が吹き出てくる。滴り落ちる汗を腕で払いつつ、決闘は続いていた。

一部は変な意味で「ハアハア」と荒い息をしていたが……。気にしないでおう。

（「バースト・ブレス」でカイザーのモンスターをほぼ一掃したが、こちらにも決定打が無い。）

カイザーの場には守備力2800の「サイバー・バリア・ドラゴン」がいる。それに対して俺が出せるのはせいぜい墓地の「真紅眼の飛竜」の効果をして「真紅眼の黒竜」を出すことが精一杯だ。恐らくは硬直状態が続くだろう。

「俺のターン、ドロー！」

……。やはり打開策は見つからない。なら、

「俺は自分のターン終了時、墓地の2体目の「真紅眼の飛竜」の効果発動！このターン通常召喚を行っていない場合、墓地の「真紅眼の黒竜」を1体特殊召喚する！俺は墓地の「真紅眼の飛竜」を1体ゲームから除外し、墓地の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

雄たけびと共に、黒き竜が現れる。

現状で出すことが出来るカードの中では最強の攻撃力を誇っている。……もしもそれ以上のモンスターが現れたら、覚悟しなければな

らない。

「そのままターンを終了する！」

万丈目 手札2 場 モンスター1 伏せ0

真紅眼の黒竜 ATK2400

「真紅眼の黒竜」なら、「サイバー・ドラゴン」には負けはしないが、カイザーなら「真紅眼の黒竜」を簡単に打ち破る術はあるだろう。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「マジック・プランター」を発動！自分の場の表側永續罫カードを1枚墓地へ送り、デッキから2枚ドローする！俺は「リミット・リバーズ」を墓地へ送り、デッキから2枚ドロー！」

ふっ、とカイザーが笑った。何か来たのか！？

緊張のあまり、呼吸が乱れ俺の心臓の音はつきりと聞こえる。そしてカイザーの動作がまるでスローモーションに見えてしまった。恐れているのか、俺は？

ふと、手を見ると微かにだが震えていた。飲み込まれているのだ。カイザーの気迫に。

「俺は「サイバー・ドラゴン・ドライ」を守備表示で召喚！」

サイバー・ドラゴン・ドライ DEF900

「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を簡略化させたようなデザインを持つ機械の竜が現れた。

(アレは確か、サイバー専用リクルーターモンスターだったはずだ。不味いな。)

脳の一部はまだ恐怖に飲み込まれていないのか、冷静に分析していた。

「俺はこのままターンエンドだ!」

カイザー 場 手札1 モンスター2 伏せ0 「リビングゲデッドの呼び声」

サイバー・バリア・ドラゴン DEF2800

サイバー・ドラゴン・ドライ DEF900

カイザーのエンド宣言に思わず肩を落とした。そして一旦深呼吸し、ペースを持ち直す。

(今さっきのは・・・ハツタリ、なのか?)

少しだけ考えてみる。もしも、ハツタリだったら時間稼ぎをしたいのだろう。だが、何のために?

(キーカードがない?)

だが、あのカイザーがそうそうキーカードを引けないなんて事は無いだろう。

十代も似たような物だが、あいつらには恐るべき引き運が備わっている。なら、なぜ?

(とりあえず、ドロースべきだな。)

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは「ダメージ・ブロック」・・・守りのカードだ。思わず顔をしかめる。「竜の鏡」を引ければ。

その言葉に、ふと過去の戦いを思い出した。そうあの廃屋でのカイザー対カミュラの時の決闘だ。確かカイザーは「オーバーロード・フュージョン」で・・・。

「オーバーロード・フュージョン」！？

その言葉に俺の頭の中が閃き、一つの答えを出した。

そう。カイザーの手にはすでに「オーバーロード・フュージョン」があり、あとは墓地を肥やすだけの状態に入っているという事だ。

（なら、「サイバー・ドラゴン・ドライ」を破壊するのは逆に不味いな。）

だが、一つ腑に落ちない点があった。

「サイバー・ドラゴン・ドライ」には、場に他の「サイバー」と名のつくモンスターがいる場合、名称を「サイバー・ドラゴン」として扱う効果を持っている。

先のターンで「オーバーロード・フュージョン」を発動できたはずだ。なら、なぜ発動しなかったんだ？

疑問が疑問を呼び、深みに嵌っていく。駄目だ。これでは逆に、こっちのペースが完全に崩れてしまう。とりあえず、「サイバー・ドラゴン・ドライ」を潰しておくか。

「バトル！「真紅眼の黒竜」で「サイバー・ドラゴン・ドライ」に攻撃！黒炎弾！！」

真紅眼の黒竜の口から炎の塊が発射され、サイバー・ドラゴン・ドライを焼き尽くした。

「破壊された「サイバー・ドラゴン・ドライ」の効果発動！デッキから「サイバー」と名のついたレベル4以下の機械族モンスターを特殊召喚する！俺は「サイバー・ドラゴン・ドライ」を守備表示で特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン・ドライ DEF900

再びリクルーターか。予想通りといえば予想通りだが・・・失敗だな。

まあ、攻撃を行ったことで若干冷静さを保つことが出来たから良しとしよう。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

万丈目 手札1 場 モンスター1 伏せ1

真紅眼の黒竜 ATK2400

さて、俺の予想は・・・どうだ？

「俺のターン、ドロー！」

ゴクリッ！

緊張の一瞬が走る。

全身から冷や汗が流れ、心臓が鼓動が早くなった。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

カイザー 手札1 場 モンスター2 伏せ1 「リビングゲデッドの呼び声」

サイバー・バリア・ドラゴン DEF2800
サイバー・ドラゴン・ドライ DEF900

ふっ、と深呼吸し肩を降ろす。

カードを伏せただけでエンド宣言が行われたが・・・心臓に悪い。ただですら機械族は「リミッター解除」という切り札があるのだ。さらに、カイザーには恐るべき運も備わっている。毎回のドローで冷や汗が流れ、倒れそうなほどプレッシャーがかかる。

だが、倒れだすわけには行かない。あれほどの啖呵を切ったのだ。勝つにしろ負けるにしろ、逃げだすという手は無い。それに俺には誇り高き竜と共にいる。その誇りを汚すのは誰であろうと許すわけにはいかないのだ！

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を發動！デッキからカードを2枚ドローする！」

・・・これは次のターンまで待つしかないな。

「俺はカードを1枚伏せターンを終了するが、3体目の「真紅眼の飛竜」の効果発動！このターン通常召喚を行っていない場合、墓地の「真紅眼の黒竜」を1体特殊召喚する！俺は墓地の「真紅眼の飛竜」を1体ゲームから除外し、墓地の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

「ターンエンドだ！」

万丈目 手札2 場 モンスター2 伏せ2

真紅眼の黒竜 ATK2400

このまま平穩に終わってくれればいいのだが・・・そう都合良く行かないだろうな。

ある種の諦めがふと心の中で呟く。

この偽りの平穩も、恐らくはこのターンを持って碎かれるだろう。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「貪欲な壺」を發動！墓地の「サイバー・ドラゴン」2体、「サイバー・ツイン・ドラゴン」2体、「融合呪印生物ー光」をデッキに戻しシャッフル。その後デッキから2枚ドローする！よし！」

来るか！

「俺はセットカードオープン「ゲットライド」を發動！」

「なら、チェーンしてセットカードオープン！速攻魔法「禁じられた聖杯」を發動！対象はもちろ「サイバー・ドラゴン・ドライ」！」

「何イ！」

カイザーの目がカツと開く。

恐らくは今さつきと同じように「ゲットライド」から「アーマード・サイバーン」を呼び、効果を使用して攻撃力が下がった所で「機械複製術」を使うつもりだったのだろう。

だが、「禁じられた聖杯」は「サイバー・ドラゴン・ドライ」の効果が無効にする効果を持っており、「サイバー・ドラゴン」にしか装備できない「アーマード・サイバーン」はもちろん装備することが出来ず、結果として「ゲットライド」は不発に終わった。

これで、少しの間は時間が稼げる。
そう思っていると、カイザーが不敵な笑みを浮かべていた。

「万丈目……この戦法を打ち破ったように思っているだろう。」

「ああ。と言うよりも、実際打ち破っているんだがな。」

見た感じではそうだ。……ん、何か引つかかるな。
何と言うか、喉に小骨が刺さっているような感じだ。

待てよ。この戦法は「サイバー・ドラゴン」となっているモンスターが何らかの手で防がれたらそこで失敗だ。もし、手札から「アーマード・サイバーン」を召喚したとしても次のターンで撃破することは可能だ。墓地に「サイバー・ドラゴン」となる「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」がいるが……仮に出して「サイバー・ドラゴン」を展開できたとしても「融合」が無ければ鳥合の衆。次のターンでこれまた破壊される。そんな愚策をカイザーが取るはずはない。何をするつもりだ？

「ふふふ、もしもそれが……」「禁じられた聖杯」を使わせるための策だったとしたら？」

「っは！」

カイザーの言葉に俺は言葉を失った。そう、「ゲットライド」を發動させたのは……陽動だったのだ。何か分からないが、そのモンスターの効果が無効化されないために、先に「ゲットライド」と「アーマード・サイバーン」と「機械複製術」のコンボを見せることによって、わざと中断させるように仕向けたのだ。

「俺は手札から魔法カード「オーバーロード・フュージョン」を発

動！墓地の「サイバー・ドラゴン」となっている「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」と「サイバー・ドラゴン・ドライ」、そして「アーマード・サイバーン」、場の「サイバー・ドラゴン・ドライ」と「サイバー・バリア・ドラゴン」をゲームから除外し、「キメラテック・オーバー・ドラゴン」を攻撃表示で融合召喚！」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK？

複数の首を持った機竜が現れる。その大きさは見たものを恐怖に陥れる事が出来るほど、圧倒する物だった。廃屋でのカミュラを思い出す。あの時よりはとてもやさしいが、それでも厄介なものには変わりはない。

「キメラテック・オーバー・ドラゴン」が融合召喚に成功した時、自分の場のこのカード以外のカードを墓地へ送る効果があるが……すでに使い終わった「リビングデッドの呼び声」が送られるだけだからほとんど意味は無い。そして「キメラテック・オーバー・ドラゴン」の攻撃力と守備力は融合素材のモンスターの数×800ポイントの数値になる！俺は4体を融合素材としたため、攻撃力と守備力は4000！さらに、融合素材にした数だけ相手のモンスターに攻撃することが出来る。よってモンスターに対して5回まで攻撃が可能だ！」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK4000

攻撃力が決定して瞬間、「キメラテック・オーバー・ドラゴン」が咆哮を挙げた。

まるで今まで貯めていた怒りを全て晴らすような……そんな恐ろしさを感じさせる。

「バトル！「キメラテック・オーバー・ドラゴン」で2体の「真紅眼の黒竜」に攻撃！エヴォリューション・レザルト・バースト！」

「っ、黒炎弾！」

真紅眼の黒竜が先制して黒炎弾を発射し、キメラテック・オーバー・ドラゴンに命中させる。だが、キメラテック・オーバー・ドラゴンには傷一つ付かず、真紅眼の黒竜がひるむ。その隙に、チャージを終えたキメラテック・オーバー・ドラゴンが5つの頭部を動かし、ビーム砲を発射する。目標は2体の真紅眼の黒竜。

1体目は胴体を貫かれつつも、黒炎弾を発射して最後まで抵抗する。無論、まるで歯が立たないのを承知で。そしてそのまま体が溶け、首だけがその場に転がった。

2体目は不運にも最初から頭部を吹き飛ばされた。頭部の無くなった体は力を失い、そのまま地に伏せた。

万丈目LP4000 2400 800

あ、圧倒的だ。その心情を表すかのごとく、頬の汗が滴り落ちる。俺の場の「真紅眼の黒竜」がまさか1ターンで全滅するとは・・・しかも攻撃力は「サイバー・エンド・ドラゴン」と同じ4000。どうする？

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

カイザー 手札1 モンスター1 伏せ1

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK4000

さらにカードが伏せられ、磐石な体勢を敷かれる。これでさらに厳しくなったな。

「俺のターン、ドロー！」

今引いたカードを見る。・・・「聖なるバリア ミラーフォース」！
よし、これで何とか防げる！

「俺はスタンバイフェイズに墓地の「ミンゲイドラゴン」の効果発
動！自分の場にモンスターが存在しない場合、墓地から特殊召喚で
きる！俺は守備表示で特殊召喚！」

ミンゲイドラゴン DEF200

「そしてカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

万丈目 手札2 モンスター1 伏せ2

ミンゲイドラゴン DEF200

恐らくカイザーの伏せカードは、カウンター罠あたりを用意してい
るはずだ。だとしたら「聖なるバリア ミラーフォース」は通用し
ないだろう。もはや博打を打っている気分だ。
そのせいか、まだ冷や汗が止まらない・・・いい加減脱水症状で倒
れないか不安だ。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「サイバー・ドラゴン・ツヴ
アイ」を攻撃表示で召喚！」

サイバー・ドラゴン・ツヴアイ ATK1500

「バトル！「サイバー・ドラゴン・ツヴアイ」で「ミンゲイドラゴ
ン」に攻撃！」

「なら、攻撃宣言時にセットカードオープン、罠カード「聖なるバリア ミラーフォース」発動！相手攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

虹色の光が現れ、カイザーの攻撃を防ごうとする。

「無駄だ！セットカードオープン、カウンター罠「魔宮の賄賂」発動！魔法または罠カードの発動を無効にし、破壊する！これでミラーフォースは無力だ！」

だが、その光が突如として消えてしまった。
やはり予想通りだった・・・が、

「だが俺は「魔宮の賄賂」の効果により1枚ドローする！」

「引いたカードも使えなければ意味がない。これで決まりだ！「キメラテック・オーバー・ドラゴン」でダイレクトアタック！」

「最後の最後まで抗って見せる！セットカードオープン、罠カード「ガードブロック」発動！この戦闘でのダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドローする！」

キメラテイク・オーバー・ドラゴンのビーム砲が直撃する。だが、寸前に発動したガードブロックが俺を守る盾となり、ダメージは受けなかった。

だが、衝撃までは殺すことが出来ず・・・危うく吹き飛ばされかけた。

「いい根性だ。万丈目！ターンエンドだ！」

カイザー 手札1 場 モンスター2 伏せ0
キメラティク・オーバー・ドラゴン ATK4000
サイバー・ドラゴン・ツヴァイ ATK1500

これで殆ど戦う手段がなくなってしまった。が、まだ希望はある。
俺は「魔法再生」を引いたのだ。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「魔法再生」を発動！墓地の「天使の施し」を手札に加える！」

しかし俺の手はそこで止まってしまふ。もしもだ。もしも・・・あのカードを引けなかったとしたら？不安が体を硬直させ、震えが走る。

ボコッ！

いきなり右頬を打たれ、痛みが広がった。

その原因を見てみるといつの間にかシロンが右肩に乗っており、怒っていた。

（ガガガーガガガガッ！！）

・・・「俺達をもっと信用しろ！」か。そうだったな。

ふと、思い出す。今まで冷静だと思っていたが、結局はカイザーの秀囲気に飲まれてしまい、ただ暴走していたのではないだろうか？そう思うと今までの自分が滑稽に思えてしまい、笑いが止まらなかった。

「くくくつ、アーハハハハハハッ！」

まわりの観客達は不信がっていたが、気にしない。

「何だ？恐怖でおかしくなったのか？」

少し引き気味にカイザーが俺に尋ねる。

「いや、そうじゃない。・・・ただ今までの俺があまりにも馬鹿だったからな。」

「そうか。」

俺の問いにカイザーは何かを悟ったらしい。

もう、気負うことはない。行くぞ！シロンッ！！

(ガガッ！)

「俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロ―し、その後2枚捨てる！」

来たッ！

「俺は手札から「風の幼竜 シロン」を攻撃表示で召喚！」

風の幼竜 シロン ATK300

背中羽でパタパタッと飛び、ゆっくりと着地する。

そして眼はきらりと光り、戦闘態勢に入った。

「そして「風の幼竜 シロン」の効果発動！手札を2枚墓地へ送り、

このカードを生贄に捧げる。デッキから「伝説の風竜 シロン」を特殊召喚する！シロン、カムバック！」

「ガガッ！」

まるでアイスクリームのコーン状の物体が現れる。色はシロンと同じく白と青の2色だ。

そしてシロンがコーン状の中へ入ると自らを結晶化させる。

「リポーンッ！」

俺の声に反応して取っ手の部分が回転し、シロンの結晶が光り輝く。そしてシロンが立派に成長し、一匹の風竜へと進化を遂げた！

伝説の風竜 シロン ATK2500

進化したシロンが俺のほうを向く。

ボカッ！

・・・どうやらシロンの鉄拳を食らったようだ。かなり頭が痛い。

「まったく、もうちっとは俺達を頼れよな！」

俺を見て睨みつつ、忌々しげにシロンが呟いた。

「すまん。」

その呟きに対して、俺は謝るしか術を持たなかった。

「ま、いっけぢや。」

何とか怒りを飲み込み、シロンは指の骨を鳴らしつつカイザーと対峙した。

「さあて、散っていったあいつらの仇を討たせてもらうぜ！」

フィールド26：夏祭り大会第3試合（機竜の咆哮）（後書き）

と言うことで、今回も途中まででした。

ちなみに個人的にはこの戦いは結構伸びると思っていたのですが・
・まさかここまで伸びるとは。てか、話をぶつ切りにしながらなの
でそりゃそうか。ともいえますね・・すみません。orz

次はおそらくカイザー視点になりそうですね。
果たして勝者はどちらになるのだろうか？

フィールド28：夏祭り大会第3試合（駆け引き）（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

・・・自動車免許を取るうとしたら結構時間を食われてしまい、中々書けずにいました。それと今後の展開をどうするか悩んでいます
たorz

今回は亮視点です。

注意：「丸藤 亮」がいろんな意味で壊れているので、注意してお読みください。

リスペクト？何それうまいの？的な意味で。

追伸：文の一部追加と修正を行いました。

フィールド28：夏祭り大会第3試合（駆け引き）

万丈目の場にはあいつのエースモンスターらしき竜が現れる。

「バトル！」「シロン」で「キメラテック・オーバー・ドラゴン」に攻撃！」

「血迷ったか、万丈目！」

キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は4000。しかし万丈目のシロンとかいう竜の攻撃力は2500だ。何を考えている？

「いいや、カイザー！あなたはシロンを舐めている！」

「何？」

「思いつきりやれ！シロンッ！！」

「うおーっ！！」

「な、何だ！？」

あのシロンと言う竜が風を一点に集中している。場の魔法・罫をすべて吹き飛ばすほどの風力だ……。俺の想像を軽く超える事態になるだろう。もしそれを1体のモンスターにぶつけたら？っは、万丈目はこれを狙っていたのか！？

「ストームツ、ハリケーン！！」

シロンの翼が一気に羽ばたき、キメラテック・オーバー・ドラゴンの真下から大嵐が発生した。その暴風の中心に晒されたキメラテック・オーバー・ドラゴンは必死にもがくが、風の力が強すぎて身動きがまったくとれない。

しまった！これではキメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃がまともにできず、本来の威力を発揮することは出来ない！！・・・やるな、万丈目。

「伝説の風竜は伊達じゃない！シロンの攻撃宣言時、相手モンスターへの攻撃力は半分になる！もつとも、同じ風属性が相手ならこの暴風も意味はないんだがな。」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK 4000 2000

エキスパート相手に小細工は通用しないという事か。

だが、相手がそれでなかった場合は今回のように効果絶大だがな。

しかし風が強い。・・・つく、目にゴミが！！

目を擦っていると、かわいらしい女の子がスカート先端を必死になつて押さえていたのが視界に入った。ふほっ！いい少女！カイザーアイは決してか弱き乙女を逃さない。あと少しなんだ！風よ頑張れ！！ぐほっ！！

少女のスカートに目がくらんでいると後頭部に思いつきり衝撃を受け、頭を抱える。そして触っていた右手を見ると・・・血がべっとりついていた。

「な、なんじゃこりゃー！」

「大丈夫かカイザー！？」

「う、うろたえるんじゃないッ！万丈目！デュエルアカデミア生徒

はうるたえないッ！」

「いや、出血は不味いだろ!?!」

「何故分かった。万丈目！」

「いや、物凄い勢いで鼻から出ているんだが……。」

「なん、だと!?!」

万丈目の指摘を受け、咄嗟に鼻を触る。どうやらスカートが気になりすぎて鼻の血管が切れてしまったようだ。まったく、アレは刺激が強すぎるな。いかんいかん。

ポケットからハンカチを取り出し、抑えておく。とりあえずはこれで決闘を続行することが出来るな。

「とりあえず、バトル続行。シロン、そのデカ物を吹き飛ばしてやれ！」

「あいよ!まったく、人使いの荒いマスターだ。じゃ、行くぜ!?!」

シロンがさらに羽ばたくと暴風の勢いが増し、キメラテック・オーバー・ドラゴンは風と言う名の剣によってズタズタに切り裂かれる。やめてあげてよお!

そして体のあちらこちらから火花が散り、ついに耐え切れなくなつて爆散した。

カイザーLP3700 3200

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

万丈目 手札1 場 モンスター1 伏せ1

伝説の風竜 シロン ATK2500

やばいやばい、結構ヤバイ！

まさか俺の切り札である「キメラテック・オーバー・ドラゴン」がやられちゃった！！

どうする。アイ ルル・・・っは、現実逃避をするな。カイザー！しかしどうする？手札は完全に積みだ。これで「リミッター解除」か「オネスト」を引けなければ・・・。

「俺のターン、ドロー！」

「サイクロン」だと？いいカードだが、このタイミングで来るか！？

「俺は「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を守備表示に変更し、カードを1枚伏せターンエンド！」

カイザー 手札1 場 モンスター1 伏せ1

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ DEF900

「俺のターン、ドロー！そして「シロン」の効果発動！1ターンに1度、場のすべての魔法・罠カードを持ち主の手札に戻す！」

「ウイング、トルネイドッ！！！」

疾風が場を包み込み、俺の伏せカードが吹き飛ばされる。

しかし、何という風力。吹き飛ばされないようにするだけで精一杯だ。

てか、ノーコストで「ハリケーン」と同じ効果は鬼だと思うんだ。
うん。

「さらに、手札から「ランサー・ドラゴニユート」を攻撃表示で召喚！」

ランサー・ドラゴニユート ATK1500

槍を持った竜人が現れる。どうみても貫通効果持ちです。本当にありがとうございました！！（泣

「バトル！」「ランサー・ドラゴニユート」で「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」に攻撃！」

「っく！」

ランサー・ドラゴニユートの槍によってサイバー・ドラゴン・ツヴァイが貫かれた。そして突き刺した槍がそのまま俺に向かってくる！！痛い！！

カイザーLP3200 2600

「そして「シロン」でダイレクトアタック！」

「ウイングトルネード！！！」

「ぐわっ！！！」

亮LP2600 100

再び竜巻が俺に襲い掛かってくる。・・・こらえるのが結構辛くなってきた。

あ、危なかった。何とか首の皮一枚で繋がったか。

「俺はこのままターンエンド！」

万丈目 手札1 場 モンスター2 伏せ1

伝説の風竜 シロン ATK2500

ランサー・ドラゴニユート ATK1500

「俺のターン、ドロー！」

よし、まだ俺の首は繋がるらしい。

「俺は手札から「サイバー・ラーヴァ」を攻撃表示で召喚！」

サイバー・ラーヴァ ATK400

「俺はカードを伏せずに、ターンエンドだ！さあ、万丈目！こいつの効果が恐ろしくなかったら、かかって来るがいい！！！」

カイザー 手札2 場 モンスター1 伏せ0

サイバー・ラーヴァ ATK400

もちろんハツタリだ！だが、とある博打漫画でもハツタリは大切と言うことがよくかかれてあったからな。これに賭けるしかない。

「俺のターン、ドロー！（何か効果があるのか？だが、ここは迷わずに攻める！）バトル！「シロン」で「サイバー・ラーヴァ」に攻撃！」

「ウイングトルネードッ！」

サイバー・ラーヴァが竜巻に飲み込まれ、どこかへ吹き飛ばされた。
・・・どこへいった？しかしやっぱり無理だったか。ちくしょう。

(泣)

だが、「サイバー・ラーヴァ」はちゃんとした効果を持っているからこのターンはまだ持つ！

「だが、「サイバー・ラーヴァ」の効果発動！表側表示のこのカードが攻撃対象となった時、このターン戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる！さらに、このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキから「サイバー・ラーヴァ」1体を特殊召喚する！」

「つく！なら「ランサー・ドラゴニユート」で攻撃！」

サイバー・ラーヴァが串刺しになって破壊される。結構惨いな。

「無駄だ！俺のライフは減らず、デッキから「サイバー・ラーヴァ」を攻撃表示で特殊召喚する！」

「ええい、しぶとい！ターンエンドだ！」

万丈目 手札2 場 モンスター2 伏せ1

伝説の風竜 シロン ATK2500

ランサー・ドラゴニユート ATK1500

「俺のターン、ドロー！・・・。」

「機械複製術」かよ。これは酷いorz。だが、チャンスはまだ1回ある！

「俺はこのままターンを終了する！」

カイザー 手札3 場 モンスター1 伏せ0

サイバー・ラーヴァ ATK400

これで「強制転移」が来たら詰む。確実に詰む。
いや、「バーストブレス」もヤバイか……。

「俺のターン、ドロー！バトル！「シロン」で最後の「サイバー・ラーヴァ」に攻撃！」

再び吹き飛ばされるサイバー・ラーヴァ。何か黄色く塗って大きな腫があつたらスゾーに見えてきた。……疲れているんだろうか。俺は？

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

万丈目 手札2 場 モンスター2 伏せ2

伝説の風竜 シロン ATK2500

ランサー・ドラゴニユート ATK1500

「さあ、カイザー。これであんたの守る盾はなくなった!!！」

びしっ！と音が出そうなくらいの勢いで指を刺す万丈目。……これは乗らなくてはな!!！」

「ふふふ、盾だと!?!? 万丈目……これは貴様に与えた猶予だ!!！」

「何だと!？」

今度は俺が万丈目を勢い良く指を刺す。その勢いに万丈目は押され
たらしく、少し引け腰気味になった。

「見ている、万丈目!これが・・・帝王の、カイザーの力だ!ドロ
ー!!!」

そしてドロウしたカードを見てみる・・・「サイバー・ヴァリー」
!!

よし!だがその前に。

「俺は手札から速攻魔法「サイクロン」を発動し、万丈目の右側の
セットカードを破壊する!」

「しまった。「バーストプレス」がっ!」

危ない危ない。先に「サイバー・ヴァリー」を召喚していたら、完
全に積んでいたな。
さて、やるか。

「俺は手札から「サイバー・ヴァリー」を召喚!」

サイバー・ヴァリー ATK0

「攻撃力0のモンスター!？」

万丈目が不思議な顔をする。まあ、攻撃力0のモンスターは大概厄
介な効果を持っているモンスターが多いからな。

「そして手札から魔法カード「機械複製術」を発動！自分の場に攻撃力500以下の機械族モンスターを1体選択し、発動する。デッキから同名カードを2枚まで特殊召喚することが出来る！俺は場の「サイバー・ヴァリー」を選択し、デッキから「サイバー・ヴァリー」を攻撃表示で2体特殊召喚する！そして「サイバー・ヴァリー」の効果発動！場の「サイバー・ヴァリー」2体をゲームから除外し、デッキから2枚ドロウする！」

サイバー・ヴァリーを残しておいて時間稼ぎする手もあるのだが、「月の書」を発動されたら貫通ダメージで終わるからな。それでは安心できないので2枚ドロウの賭けに出してみる。・・・き、キター！！

「俺は手札から「サイバー・エルタニン」を特殊召喚！」

サイバー・エルタニン ATK?

簡単に言うと犬型の巨大兵器の周りにビットもどきが多数浮かんでいるといえれば分かりやすいかな？いや、犬型と言うよりもあれは口ッ マンエグゼのゴペルといった方が分かりやすいな。

「「サイバー・エルタニン」が特殊召喚された時、場と墓地の光属性機械族モンスターを全てゲームから除外し、その数×500ポイントの数値が攻撃力と守備力の数値になる！俺の場には「サイバー・ヴァリー」が1体、そして墓地には「サイバー・ラーヴァ」が3体、「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」が1体いる。そしてそれらを全て除外し、「サイバー・エルタニン」の攻撃力・守備力は2500になる！」

サイバー・エルタニン ATK? 2500

「そして「サイバー・エルタニン」が特殊召喚された時、このカード以外のモンスターを墓地へ送る!!!」

「何っ!?!」

サイバー・エルタニンの周りをふよふよ浮かんでいたビットもどきが一斉に火を噴き、俺と万丈目のモンスターに襲い掛かった。といっても、俺の場にはモンスターは「サイバー・エルタニン」しかないんだけどな。

見る。万丈目のモンスターがゴミのようだ!!!

「バトル!」「サイバー・エルタニン」でダイレクトアタックッ!」

「つく!セツトカードオープン、畏カード「ガード・ブロック」!ダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロウする!」

「こしやくなマネを!俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド!」

カイザー 手札0 場 モンスター1 伏せ2

サイバー・エルタニン ATK2500

今伏せたカードは「リミッター解除」と「禁じられた聖杯」・・・万が一攻撃力が高いモンスターが出てきたとしても「リミッター解除」で反撃することが可能だ。そして厄介な効果モンスターが現れたとしても「禁じられた聖杯」で無効にすることが出来る!まさに完璧!!!これぞカイザーだ!!!

「さあ、万丈目。次のターンでお前のライフを0にしてやる!」

「いや・・・その必要はない。」

「何？」

「このターンでケリをつける。行くぞ！俺のターン、ドロー！！俺は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動し、墓地の「伝説の風竜シロン」を攻撃表示で特殊召喚！」

伝説の風竜 シロン ATK2500

「そして「シロン」の効果発動！場の全ての魔法・罫ゾーンにあるカードを手札に戻す！」

「なら、チェインして速攻魔法「禁じられた聖杯」を発動！ターン終了時までシロンの効果を無効にし、攻撃力を400ポイントアップする！」

シロン ATK2500 2900

これでシロンの効果を防ぐことが出来た。さて、これでチェックメイトだ！万丈目！！

「バトル、「シロン」で「サイバー・エルタニン」に攻撃！」

万丈目が攻撃を仕掛けてきた・・・それが自らの破滅を意味するとも知らずに。

くくく、望み通りに吹き飛ばしてやる！！

「ダメージステップにセットカードオープン、速攻魔法「リミッタ

「解除」発動！俺の場の機械族モンスターの攻撃力は2倍になる！
これで止めだ。万丈目！！」

「それはどうかな？・・・カイザー。次にあんたは「しまった！？」
と言っ。」

万丈目の宣言と共に、サイバー・エルタニンの様子がおかしくなっ
た。よく見てみると、エルタニンの額に槍が刺さっている。まさか
あれは・・・「禁じられた聖槍」！？

「しまった！？、っは！？」

咄嗟に喋った言葉が万丈目の宣言どおりになった。

「そう。俺はチェーンして手札から速攻魔法「禁じられた聖槍」を
発動した。対象はもちろん「サイバー・エルタニン」でな。効果は・
・知っているだろう？カイザー。」

「ああ。「禁じられた聖槍」の効果は対象にしたモンスターの攻撃
力を700ポイント下げ、このターン他の魔法・罠の効果を受けな
い。つまり。」

「そう。「サイバー・エルタニン」は攻撃力を700ポイント下が
り、「リミッター解除」の効果を受けない。シロン！！」

サイバー・エルタニン ATK 2500 1800

「ウイング・トルネード！！」

シロンの翼から発せられた突風を受け、サイバー・エルタニンがミ

シミシと嫌な音を立てていく。ここまでか。そしてサイバー・エルタニンの装甲が徐々に剥げ、体中から火花が散る。次の瞬間、体から爆発が生じ、悲しみの咆哮を挙げ・・・サイバー・エルタニンは地に付した。

カイザーLP100 - 1100

「勝者、万丈目 準選手！」

審判の声と共に、ソリッドビジョンが解除された。そして沸き起る歓声。

まさか万丈目が俺に勝つとは・・・やるようになったな。俺は万丈目に近づき、手を差し伸べる。

「強くなったな。万丈目！」

万丈目も俺の手を取り、

「次も勝たせてもらいます。カイザー！」

堂々と宣言した。それも自信満々の顔で。

「ハハハ、こやつめ。」

その顔が憎たらしく思えた俺は万丈目の首を右脇で挟み、そのまま絞めあげる・・・別にくやしくないぞ？

「さて、準決勝第一試合は「大徳寺 勝平」選手対「丸藤 翔」選手です！」

次は大徳寺先生と翔の対戦か。これは見なければ。
ん、万丈目の顔色が青いな？って、泡吹いているし！すみませーん、
患者だー！！

フィールド28：夏祭り大会第3試合（駆け引き）（後書き）

実を言うと、「竜の鏡」を使うべきか悩みましたが後の機会にまわすことにしました。・・・やっぱり万丈目にはシロンがっている気がしますから。

やっぱりカイザーははっちゃけた方が書きやすいですね。・・・今回は色々と酷かったです。さて今回は大徳寺先生対翔です。ネタを貯蔵しなければ。

フィールド29：夏祭り大会準決勝（隠し玉）（前書き）

今回は大徳寺先生VS翔です。

・・・自動車学校早く終わらないかな？
追記：一部修正しました。

フィールド29：夏祭り大会準決勝（隠し玉）

「準決勝1回戦。大徳寺 勝平」選手対「丸藤 翔」選手の対戦を始めます！」

司会者の宣言と共に会場がヒートアップし、歓声もそれに乗った。俺と大徳寺先生がお互いに前に出る。

「まさか翔君と決闘することになるとは……夢にも思わなかったにや〜。」

「それは俺もこっちの台詞ですよ。大徳寺先生。」

まさか「アルカナム」だったっけな？あれの前に素の大徳寺先生と戦う機会があるとは……夢にも思わなかった。

「さて、コイントスで先攻後攻を決めさせてもらいます。表を大徳寺選手。裏を丸藤選手で行きます。」

ピンッ！

コインが飛び、宙を舞った。

そして司会者がタイミングを見計らってコインを取る。

「コイントスの結果は……裏です！よって丸藤選手が先攻になります。」

よしっ！思わず握りこぶしを作ってしまった。

「おお、翔君が先攻になりましたか。中々矛先がいいですよ。」

大徳寺先生が抜けた声で俺を褒める。何だかな。
つと、気を引き締め直して

「「それでは」」

「「決闘！」」

「俺のターン、ドロ―！俺はモンスターを裏守備表示で召喚！」

セットモンスター DEF？

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札4 場 モンスター1 伏せ1

セットモンスター DEF？

「私のターン、ドロ―ですよ！・・・翔君。サイドデッキの大切さを教えてあげますにゃ！！」

げっ！まさか大徳寺先生のデッキってまさかサイドで思いっきりデッキが変わるのかよ！？

「私は手札から永続魔法「次元の裂け目」を発動しますにゃ！さあ、課外授業の始まりですよ！！」

し、しまった！今伏せているモンスターは「ADチェンジャー」。
破壊されたら墓地へ送られず除外されるから効果が使えない。

「私は手札から「D・D・アサイラント」を攻撃表示で召喚しますにゃ！」

D・D・アサイラント ATK1700

真紅のマフラーを首に巻き、少し変わった服装をした金髪の女性が次元を裂いて現れる。左手には鉞に近い大型の剣を逆手で持っており、どうやらそれで相手を切り裂くみたいだ。

しかし、大徳寺がこのカードを出してくるとは・・・デュエルターミナル版のデッキと思っただ方がいいだろう。

ん？ふと見るとアサイラントが大徳寺先生をちらちらと見ている。まさか精霊か？

「バトル！「D・D・アサイラント」でセットモンスターに攻撃しますにゃ！」

D・D・アサイラントが駆け足で接近する。その目はまるで狩りをするタカのように鋭くなっていた。

セットモンスター ADチェンジャー DEF100

俺の裏側守備表示のモンスターが姿を現す。学ランを着た旗持ちといえれば分かりやすいだろうか？まあ、そんな感じのモンスターである。

そしてD・D・アサイラントがADチェンジャーの懐に飛び込み、左手の剣でADチェンジャーの胴体を薙ぎ払った。・・・アサイラントが暗殺者という設定とはいえ、ちょっとグロイな。

「そして永続魔法「次元の裂け目」の効果により、ゲームから除外されますにゃ〜！」

ニコニコ顔で説明する大徳寺先生。絶対確信犯だな。

しかし、「ガーディアン・エアトス」を主力とする俺のデッキにこれは大助かりなんだが・・・。

「私はカードを2枚伏せ、ターンを終了しますにゃ〜！」

大徳寺 手札2 場 モンスター1 伏せ2 永続魔法「次元の裂け目」

D・D・アサイラント ATK1700

不味いな。「D・D・アサイラント」は戦闘破壊された時、このモンスターと戦闘した相手のモンスターごとゲームから除外する効果を持っている。結構鬼畜な効果だと思う。まあ、どちらかというと「異次元の女戦士」の方が使い勝手はいいかな。と言っても、アレの使い勝手のよさが異常なだけなんだけどな。

「俺のターン、ドロー！」

お、これで少しはしのげるか？

「俺はモンスターを裏守備表示で召喚！」

セットモンスター DEF？

「翔君。残念ですが、守備だけでは決闘に勝つことは出来ませんにゃ〜。」

「D・D・アサイラント」を倒したら除外されますから。迂闊に攻められませんよ。」

「あ、やっぱりバレバレだったにや？」

「ええ。」

アサイラントも大徳寺先生を見て少し呆れている。そりゃ、効果を知っていれば攻撃を出来ませんって。ある意味「落とし穴」を知っている状態でわざと踏みに行く気分だし。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札3 モンスター1 伏せ2

セットモンスター DEF？

このセットモンスターで少しは時間を稼げればいいが……。

「私のターン、ドローにや！お、いいカードが来ましたにや！」

何が来た？

「私はセットカードオープン！永続罫「マクロコスモス」を発動しますにや！そしてこの効果により、デッキから「原始太陽 ヘリオス」を守備表示で特殊召喚されますにや！」

原始太陽 ヘリオス DEF？

全身を包帯まみれにしたスタイルのいい女性体が現れる。ただし顔は太陽なだけどなっ！

「原始太陽 ヘリオス」は自分の除外されているカードの数×1
00ポイント攻撃力・守備力が上がりますにゃ！といっても、今は
ないから0なんだなにゃ。」

原始太陽 ヘリオス DEF? 0

しかし大徳寺先生は何でヘリオスを呼んだんだ？生贄といつても・
・生贄！？まさか！！

俺はある事を思い出した。次元といえば・・
もし、もしもだ。これが大当たりなら俺は穴にツララを突っ込まれ
た気分だ。とてつもなく嫌な予感がびんびんする！！

「私は「原始太陽 ヘリオス」を生贄に「氷帝メビウス」を召喚し
ますにゃ！」

氷帝メビウス ATK2400

突然吹雪が舞い始め、1つの人影が現れる。氷を表すかのような白
い鎧と青いマントを羽織ったモンスターだ。そして徐々に吹雪は止
み始め、完全に元に戻った。

ぎゃー！やっぱ「次元帝」かよ！？鬼畜ってレベルじゃねーぞっ
！！

しかも「氷帝メビウス」は現段階で来たら一番面倒なカードじゃね
ーか。orz

「「氷帝メビウス」の効果を発動しますにゃ。このカードが生贄召
喚に成功した時、場の魔法・罫カードを2枚まで破壊しますにゃ！
私は翔君の2枚の伏せカードを破壊しますにゃ！」

「ところがギッチョン！ただでは倒れませんよ？大徳寺先生！チェインしてセットカードオープン、速攻魔法「サイクロン」発動！先生の伏せカードを破壊します！」

「つく！中々やりますにゃ！（これで伏せていた「グランドクロス」は無駄になったにゃ〜。）」

氷帝メビウスが両手を掲げ、まるで（＾o＾）ノオワタのポーズを取る。取りたいのは俺の方だよ！！

そして俺の伏せカードが2枚とも凍りつき、砕かれた。といっても1枚はすでに発動済みなので失ったのは1枚のみ。ただし、「D2シールド」が破壊されたのは結構きつい。

「バトルですにゃ！」「D・D・アサイラント」で裏守備表示モンスターに攻撃しますにゃ！」

再びアサイラントが襲い掛かってくる。そして自分の間合いに入った瞬間、剣を振ってモンスターを薙ごうとする。だが、

カキンッ！！

金属が硬い何かにぶつかった音が聞こえた。よく見るとアサイラントの攻撃がバリアによって防がれていた。そしてバリアの中には杖を掲げた1人の女性が立っている。そうセットモンスターは「ライトロード・プリースト ジェニス」だったのだ。

セットモンスター DEF？ ライトロード・プリースト ジェニス DEF2100

そして跳ね返された衝撃が大徳寺先生を襲った。

「にゃ!?!?・・・流石にこれは驚きましたにゃ〜。」

大徳寺LP4000 3600

少し驚いた顔をする大徳寺先生。奇襲は成功したようだな・・・だが、残念なことに「氷帝メビウス」の攻撃は防げない。

「中々堅い守備ですにゃ。なら「氷帝メビウス」で「ライトロード・プリースト ジェニス」に攻撃しますにゃ! エターナル・フォース・ブリザード!!」

ジェニスがバリアを張って守ろうとする。一方、メビウスはジェニスのバリアの周りを冷気で包み込み始めた。手を震わせながら必死になって耐えるジェニス。だが、その努力も虚しく、バリアごとジェニスは凍り付いてしまう。まるで氷像のように。そしてメビウスが指を鳴らすと同時に、バリアごとジェニスが砕かれてしまった。

「私はこのままターンを終了しますにゃ!」

大徳寺 手札2 モンスター2 伏せ0 永続魔法「次元の裂け目」
永続罫「マクロ・コスモス」
D・D・アサイラント ATK1700
氷帝メビウス ATK2400

帝が来た事により、結構危なくなってきた。唯一幸運なのは「異次元からの生還者」が出ていないことだ。もしあのカードが召喚されて帝の生贄コストにされたら毎ターン「黄泉カエル」の復活を見るような気分になるだろう。

「俺のターン、ドロー！」

よし、いいカードだ！

「俺は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てる！」

流石に「アームズ・ホール」を腐らせるのは勿体無いから捨てておいて・・・と、よし。

「俺は手札から「異次元の女戦士」を召喚！」

異次元の女戦士 ATK1500

黒いスーツ姿をした金髪の女性が現れる。「荒野の女戦士」が次元に巻き込まれた姿と言われているが、公式発表はされておらず関係は不明である。

「そして手札から速攻魔法「エネミーコントローラー」を発動！「氷帝メビウス」の表示形式を変更する！」

「あ、しまったにやー！」

まるでゲームのコントローラーが現れ、ボタンが自動的に押された。俺も社長のよう押ししてみたかった・・・。すると、メビウスが自分を守る体勢へと移った。

氷帝メビウス DEF1000

意外と半上級モンスターは守備力が脆いのが多い気がするな。まあ、倒しやすくもいいのだが。

「バトル！」「異次元の女戦士」で「氷帝メビウス」に攻撃！次元一閃！！」

女戦士がメビウスに近づき、左手で持っていた剣で切り下げた。どうやら衝撃に弱かったらしく、メビウスの体は粉々に砕け散ってしまった。

「破壊された「氷帝メビウス」は「次元の裂け目」の効果によりゲームから除外される。ここから反撃させてもらいますよ？大徳寺先生。」

「ダメージは食らわなかったとはいえ・・・ちょっと不味いにや。」

大徳寺先生が少し顔をゆがめる。しかしこちらも少し不味い。

何たつて貴重な「エネミーコントローラー」を消費してやっと倒せたのだ。もしまた帝が現れたら形勢は再び大徳寺先生の方が有利になるだろう。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札2 モンスター1 伏せ1

異次元の女戦士 ATK1500

「私のターン、ドローですよ！翔君。「異次元の女戦士」と言えば、万能で無いという事を証明してあげますにや！私は手札から「異次元の生還者」を攻撃表示で召喚しますにや！」

異次元からの生還者 ATK1800

ぎゃーっ！「異次元殺し」の異名を持つ人が現れた。orz
ちなみに容姿は黒いスーツ姿でマントを羽織っている金髪の男性だ。
どうでもいいけど金髪が多いな。うん。

「バトルですよ！」「異次元の生還者」で「異次元の女戦士」に攻撃しますにゃ！」

異次元の生還者が女戦士に近づき、右手の剣で切りかかった。

カキンッ！

女戦士も左手に持っている剣で何とか防ぐものの、徐々に生還者の剣が押していく。そして

ズバツ！！

女戦士の剣を体ごと両断し、勝敗は決した。

「つく！」

翔LP4000 3700

「だが、「異次元の女戦士」の効果発動！このモンスターと戦闘した相手モンスターごとゲームから除外する！」

異次元の女戦士の体が霞のように消える。そう、異次元の生還者を巻き添えにして。

そして生還者も女戦士と共に霞のように消えていった。

「しかし「異次元の生還者」は表側表示で除外されたターンの終了時、自分の場に攻撃表示で戻ってきませんにゃ！」

そう、「異次元の生還者」はターン終了時に戻ってくるのが可能なのだ。まあ、戻ってくる事が出来なければ「生還者」じゃないけどな。しかし、生贄コストとしても、アタッカーとしても一級品なのは結構面倒だ。

「そして「D・D・アサイラント」でダイレクトアタックしますにゃ！」

D・D・アサイラントの姿がまるで陽炎のように消えた。

どこだ？どこにいる？必死で辺りを見渡すが姿がまったく見つからない。

ゾクッ！！

背中から何か凄まじい殺気を感じ、ふと後ろを振り向く。

そこには剣を構え、今にも振り下ろそうとするアサイラントの姿があった。そして無常にも、彼女の剣はそのまま振り下ろされた。

「痛っ！」

翔LP3700 2000

さすが暗殺者の名を持つモンスター。攻撃方法が洒落にならない。しかしアレは忍者の方が向いている気がするようないような・・・
・まあ、いいか。

「私はそのままターンエンドですよ！そして、「異次元の生還者」の効果が発動しますにゃ！表側表示のこのカードがゲームから除外されたターンの終了時、私の場に特殊召喚されますにゃ！」

何やら空間の裂け目っぽいものが現れ、「よっころしょつと」という声と共に裂け目を広げて生還者が顔を覗かせた。そして左右を確認すると体を乗り出し、大徳寺先生の場に戻ってきた。そして空間の裂け目が閉じていく。

何っ！か、クールなイメージが完全にぶち壊された気分だ。

大徳寺 手札2 場 モンスター2 伏せ0 永続魔法「次元の裂け目」永続罫「マクロ・コスモス」
D・D・アサイラント ATK1700
異次元の生還者 ATK1800

「俺のターン、ドロー！」

よし、少しは時間が稼げそうだ。

「俺は手札から「サイバー・ドラゴン」を攻撃表示で特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

「バトル！「サイバー・ドラゴン」で「異次元の生還者」に攻撃！エヴォリューション・バースト！！！」

サイバー・ドラゴンがエネルギー弾を放ち、異次元の生還者を吹き飛ばした。

そしてその衝撃が大徳寺先生にも襲い掛かる。

「あたたたた。中々激しい攻撃だにや。」

大徳寺LP3600 3300

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札1 場 モンスター1 伏せ1

サイバー・ドラゴン ATK2100

「なら、ターン終了時に「次元の裂け目」によって除外された「異次元の生還者」の効果を発動しますにや！再び私の場に特殊召喚しますにや！」

そう。「異次元の裂け目」や「マクロ・コスモス」の効果により、墓地へ送られるカードは除外されるのだ。もちろん、生贄にしたモンスターや戦闘破壊されたモンスターも除外される。そして「異次元の生還者」の効果により再び戻ってくるという仕組みなのだ。まあ、「異次元の生還者」の効果は1ターンに1度しか使えないから、戻ってきた所を「落とし穴」などで潰すしかない。まあ、俺のデッキには入っていないから「大嵐」や「ハリケーン」といったカードを引くしかないが。

「私のターン、ドローですにや！おお、これはいいカードを引きましたにや！」

大徳寺先生の顔がぱあつと輝いた。何かいいカードでも引いたのか？

「私は「異次元の生還者」を生贄に、「風帝ライザー」を攻撃表示で召喚しますにや！」

風が起こり、嵐が生まれる。その中から緑色の鎧をした人影が現れた。よく見ると「氷帝メビウス」にそっくりだが、細部では少し異なるらしい。

そして風が止み、嵐は消え去った。

「「風帝ライザー」の効果を発動しますにゃ！このカードが生贄召喚に成功した時、場にあるカード1枚を選択し、持ち主のデッキの一番上に置くことが出来ますにゃ！もちろん対象は「サイバー・ドラゴン」ですにゃ！バツク・ストーム！」

ライザーが手を振ると、旋風が巻き起こる。それはサイバー・ドラゴンを巻き込み、俺のデッキの1番上へと吹き飛ばして行った。そしてその風が、俺の心に3つのメダルを誕生させた！

O・W・T（おいおい・笑わないと・耐えられない）

オワタ、オワタ、オワタッ！！シャキーン！！

あははははっ！！もう笑うしかないな、うん。

「邪帝ガイウス」なら次のターンに望みはあったかもしれないが、ドロドロツクされてしまったら絶望しかない。orz

「何だかコンボ音が聞こえた気がしましたが・・・まあ、いいですよ。バトル！「風帝ライザー」でダイレクトアタックですよ！デス・ストーム！」

「まだまだっ！セットカードオープン、速攻魔法「月の書」を発動！モンスター1体を裏守備表示に変更する！対象は「風帝ライザー」！」

「にゃ！こりゃまた面倒な事になったにゃ〜！」

風帝ライザーが月の書の効果によって裏側守備表示モンスターへと変わった。これによりライザーの攻撃は中止になる。やったね翔ちやん！

「不、不吉な事を言わないでくださいにゃ！」

「どうしたんですか？大徳寺先生。」

「い、いや・・・ちよつと疲れただけにゃ。」

突然頭を抱えて悩みだす大徳寺先生。何かあったのだろうか？

そう思っていると何かを思い出したかのようにすくつと顔を立ち上げた。

「とりあえず「D・D・アサイラント」でダイレクトアタックしますにゃ！」

ちっ、やっぱり忘れてなかったか。

ぐほっ！っ、次は柄の方で思いつきり腹を殴られた・・・痛い。

翔LP2000 300

「私はターンエンドしますにゃ！そして「異次元の生還者」の効果により、私の場に再び戻ってきますにゃ！」

3度登場の生還者さん。少し顔色が悪く見えるのは気のせいか？

大徳寺 手札2 場 モンスター2 伏せ0 永続魔法「次元の裂

け目」永続罫「マクロ・コスモス」

D・D・アサイラント ATK1700

異次元の生還者 ATK1800

セットモンスター DEF?

・・・

「出たー！大徳寺先生のマジックコンボだっ！！」

「い、いきなりどうした？十代。」

「い、いや。何となく言わないといけない気がしてさ。」

俺は今、十代と共に翔と大徳寺先生の戦いを観戦していたのだが、十代がいきなり大声を出したからびっくりした。心臓に悪いからあんまりしないでくれ。

「なあ、凧。」

「どうした。十代？」

「翔が黒蠍窃盗団と戦った事を覚えているか。」

「ああ。確か夏休み直前の出来事だったな。」

そういえば翔はあの事件のせいで熱が再発し、寝込んだんだっただけな？

そのせいで俺達より一週間変えるのが遅くなっただけなのに・・・まあ、ご愁傷様だな。

「で、それがどうしたんだ？」

「あかさ……。」

十代の顔が深刻になる。

こいつらしくないな。どうしたんだ一体？

「最近、この町で起きた奇妙な事件と何か関係があるのかなって思
つてさ。」

「例の通り魔か？」

「ああ。」

正確に言えば通り魔というより人斬りといった方がいいたろう。被害者は3人。死因はすべて大量出血によるショック死だそうだし、それだけの事をやらかして目撃情報や証拠はまったく挙がっていないのはどうも不自然すぎる。

「どちらにせよ、俺には精霊が見えないからなあ。」

俺は右手で頭を抱える。

特定の人にしか見えない存在。そんな彼らが人々に牙を向いたら？
そんな疑問が浮かび上がる。

翔のアイリスや十代のハネクリボーはこっちに対して一切害を与え
なかったが、よくよく考えてみればすべてがそいつらのようにいい
奴とは限らない。現に「黒蠍窃盗団」とやらは俺達の鍵を奪いに来
たし……。

「ま、今はそれより翔達の決闘を観戦する事に専念しよう。」

「ああ。翔ー！大徳寺先生ー！頑張れー！！」

十代が声を張り上げて応援する。・・・って、両方応援するのかよ！？

ま、いいけどさ。

・・・

もしも次に何かしらの帝が来たら、今度こそアウトだ。

「俺のターン、ドロー！再び「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

「バトル！「サイバー・ドラゴン」でセットモンスターに攻撃！エヴォリューション・バースト！」

サイバー・ドラゴンが光弾を放ちセットモンスターを吹き飛ばした。まあ、今さつき月の書で裏側守備表示に変えた風帝ライザーなんだけどな。

「俺はこのままターンエンド！」

翔 手札1 場 モンスター1 伏せ0

サイバー・ドラゴン ATK2100

次のターン、「D・D・アサイラント」の自爆特攻 生還者のダイレクトアタックで終わりか。

「私のターン、ドローですよ！」

さあ、一思いにやってくれ!!

「私は手札から魔法カード「痛み分け」を発動しますよ！」

厄介と言えば厄介だが・・・そこで使うか!?

「私は「異次元の生還者」を生贄に、翔君もモンスター1体を生贄にしなければいけないのよ！」

「除外はもう嫌だ!」と言わんばかりに顔を青ざめて必死になって逃げようとする生還者。しかし、対象になってしまったために光となつて次元の裂け目に吸い込まれた。哀れ。

ちなみに俺のサイバー・ドラゴンも同じ結果になりました。ちくしよう!

「これでトドメにゃ!」「D・D・アサイラント」でダイレクトアタックですよにゃ!」

たたたたつと、まるで忍者のような動きでこちらに接近する。そして剣を振り上げ、まるで脳天から下まで一刀両断するかのごとく振り降ろす。剣の輝きが俺の命の終わりを告げていた。

「ヒッ!」

恐怖のあまり目を瞑ってしまい、風だけが今の状況を教えてくれた。すとの風が突然止まった。あれ?風が止んだ?そう思って目を開ける。

するとアサイラントが俺の顔面直前で剣を止めていた。どうしたん

だ？そう思っていたら、アサイラントが剣を横向きにしてそのまま俺の頭に叩きつけた。痛ってー！！

翔LP300 - 1400

「勝者！大徳寺 勝平選手！」

審判の声が会場に響き渡り、歓声が響き渡った。

俺は痛む頭を右手で撫でながら大徳寺先生に近づく。ふと、手に何か感触がありそれを取る。

どうやら紙が張られていたらしい。ん、何か書かれているようだ。何々？

「LPを1000も削れないのは小学生までだよなー？」

「キャハハハッ！！」

気がつけば、俺は右手に力を込めてその紙を握りつぶしていた。あの野郎！！

「しよ、翔君。大丈夫ですかにや？」

豹変した俺の姿を見て、大徳寺先生がびびっていた。

「ええ。大丈夫です・・・。」

「紙をゴッドハンドクラッシャーしながら言う台詞じゃないと思いますにや！？」

「今の俺ならどんな物だって砕けそうな気がします。」

「お、落ち着くのじゃ！こんな時は素数を数えるのじゃ！！」

「1、2、3、・・・ヒャッハー！我慢できねー！！0だ！」

「色々間違っているじゃ！！」

その後10分ほど暴走劇は続き、俺は様々な意味で黒歴史を作ってしまった。

「って、私の出番はないんですか！？」

・・・NEXT「伊達 明」VS「万丈目 準」

フィールド29：夏祭り大会準決勝（隠し玉）（後書き）

と言うことで大徳寺先生が勝ちました。

今回の翔は手札が事故気味だったようです。まあ、十代みたいにい
つもチートドロイーできるわけじゃないんですよ。

次回は伊達さんと万丈目の決闘です。投稿が少し遅くなると思いま
すが、ご了承を

フィールド30：夏祭り大会準決勝2回戦（奥の手）（前書き）

な、何とか投稿できました。遅くなってすみません。
今回は伊達さんと万丈目の対戦になります。

・・・ZET様から再びお借りしました。

何でこんなに暴走しているかは少し後で説明する予定です。

ZET様、お許しください！「ぬわーっ！」

追伸：一部訂正しました。

フィールド30：夏祭り大会準決勝2回戦（奥の手）

「準決勝2回戦目は「伊達 明」選手対「万丈目 準」選手です！」
司会者の宣言と共に会場画盛り上がった。これと決勝戦でこの大会も終わりか。

ふと、空を見ると曇り空になってきている。雨が降らなければいいが。

伊達さんと万丈目が互いに前に出る。

「俺の名前は伊達 明。よろしく！」

「俺の名前は万丈目 準だ。」

気軽に声を掛ける伊達さんと堅物っぽくしゃべる万丈目。あれ？何か万丈目が5103に見えてきた。

「それではコイントスで先攻を決めます。表が伊達選手、裏が万丈目選手になります。・・・結果は裏！よって万丈目選手が先攻になります！」

万丈目が先攻か。これで伊達さんのシンクロに対して何も手が出せないと言う結果は少し無くなったな。

「それでは」

「「決闘！」」

「俺の先攻、ドロ―！俺は手札から魔法カード「天使の施し」を發動！デッキからカードを3枚ドロ―し、その後2枚捨てる。そして手札から装備魔法「早すぎた埋葬」を發動。俺のLPを800支払い、墓地のモンスターを特殊召喚する！俺は墓地の「ミンゲイドラゴン」を特殊召喚！」

ミンゲイドラゴン ATK400

「そして「ミンゲイドラゴン」を生贄に捧げて、「真紅眼の黒竜」を攻撃表示で召喚！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

黒き竜が現れるが今回は咆哮を上げず、ただじっとしている。

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

万丈目 手札2 場 モンスター1 伏せ2

真紅眼の黒竜 ATK2400

...

俺はノース校にいた時に「天空 優」、「神崎 有栖」と話した時の事を思い出す。

あいつらは「シンクロ召喚」という未知な技術を用いて相手を圧倒していた。それを不思議に思った俺は、直接「シンクロ召喚」について聞き出そうと思ったのだ。

恥だと思つ奴もいるかもしれないが、「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。」という。俺はそれを覚悟して奴らからそれを聞き出そうとした。

「優、有栖。シンクロ召喚について教えてくれ！」

校内のご真中で土下座して頼み込む。周りの連中は驚いていたようだ。

むしろ、優と有栖の驚いた表情の方が印象的だったな。

「別に構わないが・・・万丈目。頼むから流石にここで土下座をするのはやめてくれ。」

「あ、ああ。わかった。」

優からそう言われはつとする。確かにここで土下座するのはただの見世物だな。まあ、俺も切羽詰っていたから仕方ない。誰だってそんな時はあるさ。

そういうことで俺は実演を兼ねてシンクロ召喚の概念を体に叩き込まれた。地獄を見たという意味でな。

「・・・なあ、優。」

俺が疲れた声を出してあいつらに訴える。

「どうしたんだ？万丈目。」

「俺に決闘をさせてくれ・・・頼むから。」

「え、今決闘をやったる？」

俺の声に優がひょんといいた声で答える。その声に俺の怒りが爆発した。

「嘘付け！？なんだあの「ダーク・ダイブ・ボンバー」とか言うモンスターは！！ふざけるな！！5回連続1KILLされるこっちの身にもなっけてくれ！！！」

しかも優は口元で「サモサモキャットベルンベルン」というおかしな呪文を唱えていた。もう、アレがトラウマになりそうだ。

ちなみにそれが来ないと思ったら初手に「大寒波」、次のターンに「墮天使ゼラート」をコストに「ダーク・グレファアー」を特殊召喚。効果で手札の「終末の騎士」とデッキの「ネクロ・ガードナー」を墓地に落とす。そして墓地が閻属性3体のみなので「ダーク・アームド・ドラゴン」を特殊召喚。効果で俺のモンスターと伏せカードが全滅。さらに速攻魔法「緊急テレポート」を発動し、サイキック族とかいう未知な種族のモンスターを特殊召喚した。「サイコ・コマンダー」だったか？そして「サイコ・コマンダー」と「ダーク・グレファアー」をシンクロ。「ダーク・ダイブ・ボンバー」を特殊召喚。そのままダイレクトアタックで終わった。さらに優はここぞとばかりに、攻撃が終了した「ダーク・ダイブ・ボンバー」と「ダーク・アームド・ドラゴン」を生贄に、ダメージを与えてきた。どちらにしろ、もう嫌だ！

いや、まだそれならやさしいか？

「先行ドロー。「レベル・ステイラー」をコストに「クイック・シンクロン」を特殊召喚。「ジャンク・シンクロン」を通常召喚。「クイック・シンクロン」のレベルを1つ下げ、効果で「レベル・ステイラー」を特殊召喚。さらに手札の「ドッペル・ウォリアー」の効果を発動し特殊召喚。「クイック・シンクロン」、「ドッペル・ウォリアー」、「レベル・ステイラー」で「ロードウォリアー」をシンクロ召喚。「ドッペル・ウォリアー」の効果で「ドッペル・トークン」を2体特殊召喚。「ジャンク・シンクロン」、「ドッペ

ル・トークン」1体で「アームズ・エイド」シンクロ召喚。「ロード・ウォリアー」を対象に「レベル・ステイラー」を特殊召喚。「ロード・ウォリアー」の効果デッキから「アンノウン・シンクロン」を特殊召喚。「アンノウン・シンクロン」、「レベル・ステイラー」で「フォーミュラ・シンクロン」をシンクロ召喚。召喚効果によりデッキから1枚ドロ。「ロード・ウォリアー」を対象に「レベル・ステイラー」特殊召喚。「ロード・ウォリアー」、「アームズ・エイド」、「フォーミュラ・シンクロン」で「シューティングクエーサードラゴン」をシンクロ召喚。万丈目、おまへのターンだ。」

あれはもう悪夢としか言いようがないな。攻撃力4000のモンスターが1ターン目、さらに1ターンに1度、魔法・罠・モンスターの効果を無効にし、破壊する効果も持っている。・・・これに対してどうやって勝てと？

まあ、これを出される前に一気に勝負をかけたときもあったのだが、「ブラックローズ・ドラゴン」というシンクロモンスターの効果で場のカードがすべて吹き飛ばされた。・・・そして「死者蘇生」で復活され、ダイレクトアタックを食らい負けた。さらにはやつとのかさ召喚した「真紅眼の黒竜」を「ゴヨウ・ガーディアン」とかいふモンスターによって奪われてしまった。こいつはひでえ。

「悪い悪い。まあ、これがシンクロだ。万丈目。」

「優。流石にそれは大人げ無いと思うよ？（汗）」

黒い笑みを浮かべた優に対し、有栖は苦笑して声を出す。俺も有栖の意見に大いに賛同だ！

「まあ、レベルとチューナーという存在が鍵だということとはよく、

わかった。」

「そうか。わかってくれて俺は嬉しいぞ？万丈目。」

その後はきつちりと実演ではなく、論理的に教えてもらった。初めからそうしてくれ・・・。

・・・

だが、あの戦いで分かったことが複数ある。1つ目は、チューナーと言う存在が必要不可欠である。2つ目は、レベルに頼ってしまい、どうしても効果に頼りがちである。

「俺のターン、ドロー！お、中々ついているな。俺は手札から魔法カード「調律」を発動！デッキから「シンクロン」と名のついたモンスター1枚を手札に加える。ん、俺はデッキから「クイック・シンクロン」を手札に加えようかな。で、その後デッキをシャッフルし、デッキの一番上のカードを墓地に送る。（あ、「ドツペル・ウォリアー」が落ちたか。こりゃ、まあまあかな。）」

調律か。確実にチューナーを手札に持ってこれるカードか。かなり厄介だな。

「ま、いいか。俺は手札から「ジャンク・シンクロン」を召喚！そして効果発動！このカードが召喚された時、墓地のレベル2以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する！俺は墓地の「ドツペル・ウォリアー」を守備表示で特殊召喚するわ。」

ジャンク・シンクロン ATK1300

黄色の帽子を被り、眼鏡をかけたモンスターが現れる。来たな、俺のトラウマモンスターの1体。

ドッペル・ウォリアー DEF800

効果で現代風の黒い軍服を着た兵士が現れる。こいつは俺のトラウマを的確にえぐってやがる！

「レベル2の「ドッペル・ウォリアー」にレベル3チューナー「ジャンク・シンクロン」をチューニング！シンクロ召喚！「ジャンク・ウォリアー」！」

紫色のボディに真っ赤なマフラーを巻いたモンスターが現れ、目の前で右腕を突き出した。

ジャンク・ウォリアー ATK2300

「そして墓地へ送られた「ドッペル・ウォリアー」の効果発動！このカードがシンクロ素材に使用され、墓地へ送られたとき、場に「ドッペル・トークン」を2体特殊召喚する！」

ドッペルウォリアーにそっくりなモンスターが現れる。いや、むしろ息子と言った方が正解か？

ドッペル・トークン ATK400×2

「さらに「ジャンク・シンクロン」がシンクロ召喚に成功した時、自分の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力分、このモンスターの攻撃力がアップする！」

ジャンク・ウォリアーの目が真っ赤に輝き、体から炎を上げているように見える。

ジャンク・ウォリアー ATK2300 3100

「そして手札の「レベル・ステイラー」を墓地へ送り、「クイック・シンクロン」を特殊召喚！」

まるで西部劇に出そうなガンマン風モンスターが現れた。しかもホルダーから銃を取り出してこちらに狙いを定めている。

クイック・シンクロン ATK700

そして3つ目は・・・レベルの足し算であるため、高確率でレベルの低いモンスターを出さないといけないという事だ！！

「セットカードオープン、畏カード「無力の証明」を発動！自分の場にレベル7以上のモンスターがいるときのみ発動ができ、場のレベル5以下のモンスターを全て破壊する！」

「やべっ！」

真紅眼の黒竜が特大の咆哮を上げる。すると相手の場の全てのモンスターがその衝撃に耐えられず、砕け散っていった。

「あっちゃー。こりゃ、ちょっとヤバイな。」

よし、これでチューナーとシンクロモンスターを一掃することが出来た。

あとは一気に形をつけるだけだ！！

「カードを2枚伏せ、ターンエンドかな。」

伊達 手札1 場 モンスター0 伏せ2

・・・

万丈目の「無力の証明」により、伊達さんの場のモンスターが一掃された。

大丈夫か？伊達さん。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「ランサー・ドラゴニユート」を攻撃表示で召喚！」

槍を持った竜人が現れる。攻撃力がギリギリ足りなかったが、それでも致命傷を受けるだろう。

ランサー・ドラゴニユート ATK1500

「バトル！「ランサー・ドラゴニユート」でダイレクトアタック！」

手に持っている槍で勢いよく突き刺した。

伊達 LP4000 2500

「さらに、「真紅眼の黒竜」でダイレクトアタック！黒炎弾！」

伊達 LP2500 100

さらに炎の塊の直撃を受け、大ダメージを受けてしまった。

「あららら、相当・・・やばいな。これは。」

万丈目 手札2 場 モンスター2 伏せ1

真紅眼の黒竜 ATK2400

ランサー・ドラゴニユート ATK1500

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「一時休戦」を発動！お互いにデッキからカードを1枚ドローする。そして次の自分の番までお互いにダメージは受けない。」

「時間稼ぎか！」

「ま、現状で勝つ方法がないんでね・・・俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

伊達 手札0 伏せ4

伊達さんの場には4枚の伏せカード。これで万丈目に対してプレッシャーを与えるつもりなのだろうか？

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動！デッキからカードを5枚選び、相手はそこから1枚を選択する。俺は「真紅眼の黒竜」を2枚、「真紅眼の飛竜」を3枚選択する。」

「ん〜、じゃ、「真紅眼の飛竜」を選ぼうかな。」

「なら、俺は「真紅眼の飛竜」を手札に加え、他のカードを墓地へ送る。さらにカードを1枚伏せ、手札から永續魔法「一族の結束」

を発動。墓地のモンスターの元々の種族が1種類である場合、同じ種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

真紅眼の黒竜 ATK2400 3200

ランサー・ドラゴニユート ATK1500 2300

「そしてターンエンド時に、墓地の「真紅眼の飛竜」の効果が発動！このターン通常召喚を行っていない場合、墓地のこのカードをゲームから除外し、墓地の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚する！俺は2体の「真紅眼の飛竜」をゲームから除外し、2体の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚する！そしてターンエンド！」

万丈目 手札3 場 モンスター2 伏せ1 永続魔法「一族の結束」

真紅眼の黒竜 ATK3200

ランサー・ドラゴニユート ATK2300

真紅眼の黒竜 ATK3200

真紅眼の黒竜 ATK3200

これで万丈目の場には4体のモンスターが揃った。さらに、「ランサー・ドラゴニユート」は貫通効果を持っているから、壁モンスターを置いた所で何の気休めにもならない。

「俺のターン、ドロー！よし、来た！俺は手札から「アンノウン・シンクロン」を特殊召喚！」

アンノウン・シンクロン ATK0

丸い物体に1つの目をつけた感じのモンスターが現れる。ちなみにこのモンスターは1度だけ「サイバー・ドラゴン」と同じ特殊召喚

方法が使えるという、結構貴重なモンスターだ。

「この期に及んでまだシンクロ召喚する気か!？」

「いや、違うね。俺は「アンノウン・シンクロン」をゲームから除外し、デッキから「ライダー・バース」を特殊召喚する!」

アンノウン・シンクロンが光となり、1枚のメダルとなった。アレは・・・セルメダル!?

そして伊達さんの前にベルトが浮かんでおり、それにセルメダルを入れた。

「変身!」

ガチャガチャ、カポンツ

「バース」

まるでガチャポンのハンドルを回すような音がした後、いい音とともに何かが割れた(開いた?)音がする。その直後、そして機械合成の男性の声が現れたモンスターの名前を告げた。

チャキン、チャキン、チャキン!と何かを装備する音と共に、銀色の装甲に黒いスーツ、そしてクワガタみたいなV字型の頭部(?)をしたライダーが現れる。

仮面ライダー・バース

レベル8 闇属性 機械族

ATK2500 DEF2000

効果:このカードは通常召喚することは出来ない。このカードは自分の場のレベル1チューナーモンスターをゲームから除外した場合

のみ、手札またはデッキから特殊召喚することが出来る。自分の手札または場のチューナーモンスターを1枚ゲームから除外する。除外したチューナーモンスターのレベルの数だけ、このカードにセルメダルカウンターを乗せる。また、このカードが相手モンスターを戦闘で破壊し墓地へ送った場合、破壊したモンスターのレベルの数だけこのカードにセルメダルカウンターを乗せる。

このカードの上の置かれているセルメダルカウンターを任意の数だけ取り除くことで、以下の効果を発動する。

2枚：デッキから装備魔法カードを1枚選び、このカードに装備する。

10枚：相手の場の全てのモンスターに1回ずつ攻撃することが出来る。

30枚：相手の場の全てのカードを破壊する。このターン、このカードは攻撃することは出来ない。

「ば、バースだど！？そういえば世界では「仮面ライダー○○○」が絶賛放送中だったな。まさかの大物が現れるとは……。

そして周りのちびっ子達も「バースだ！」とはしゃぎまわっている。残念ながらここはヒーローショーではありませんよ？

「セットカードオープン、永続罠「リミット・リバース」を発動！墓地の「クイック・シンクロン」を攻撃表示で特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700

「そして「ライダー・バース」の効果発動！手札または場のチューナーモンスターをゲームから除外し、そのレベルの数だけこのモンスターにセルメダルカウンターを乗せる！」

クイック・シンクロンが光の輪になり、それが銀色のメダルへと変

わった。そしてそのメダルを伊達さん、いやバースが右手でキャッチする。

「さてと。さらにセットカードオープン！魔法カード「マジック・ブランチター」を発動！自分の表側表示の永続罠1枚を墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドローする！俺は「リミット・リバース」を墓地へ送り、カードを2枚ドロー！お、ツキが向いてきたな。俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動し、デッキからカードを2枚ドローする！」

「そして手札から魔法カード「戦士の生還」を発動！墓地の「ジャンク・シンクロン」を手札に加える。そして、「バース」の効果で除外し、そのレベル分セルメダルカウンターを乗せる。」

バース セルメダルカウンター5 8

「よっしゃ、そろそろいいかな。じゃ、「バース」の効果発動！このカードのセルメダルカウンターを2つ取り除き、デッキから装備魔法カードを1枚選択し、このカードに装備させる！俺はデッキから「ドリムアーム」を選択し、「バース」に装備させる！」

バース セルメダルカウンター8 6

ガチャリガチャリ、カポンツ！「ドリルアーム！」

合成音の男性の声と共に、バースの右腕にドリルが装備される。男のロマンだな、ドリルは。

ドリルアーム 装備魔法

効果：「仮面ライダー・バース」のみ装備することが出来る。装備

モンスターの攻撃力は600ポイントアップし、相手モンスターを破壊した場合、セルメダルカウンターをそのモンスターのレベルの半分の数値だけこのカードを装備しているモンスターに乗せることが出来る。(切り上げ)

「再び「バース」の効果を発動し、デッキから「クレーンアーム」を選択し、装備！」

バース セルメダルカウンター6 4

ガチャリガチャリ、カポンツ！「クレーンアーム！」

合成音の男性の声と共に、バースの左腕にクレーンが装備される。
・何つーか、上半身だけフル装備なのでバランスが悪い。

クレーンアーム 装備魔法

効果：「仮面ライダー・バース」のみ装備することが出来る。装備モンスターの攻撃力は400ポイントアップし、このカードを装備したモンスターまたはそのモンスターを対象にしている装備魔法が相手の対象を取る魔法・罠の効果の対象になった時、効果を無効にして破壊することが出来る。

「さらに「バース」の効果を発動し、デッキから「キヤタピラレッグ」を選択し、装備！」

バース セルメダルカウンター4 2

ガチャリガチャリ、カポンツ！「キヤタピラレッグ！」

合成音の男性の声と共に、バースの脚部に戦車みたいなキヤタピラ

が装備される。これが中々ごつく力強そうなので、やっとバランスが取れたように見える。

キヤタピラレッジ 装備魔法

効果：「仮面ライダー・バース」のみ装備することが出来る。装備モンスターの攻撃力は300ポイントアップし、このカードを装備したモンスターとそのモンスターを対象にしているに装備されている装備魔法は相手の対象を取らない魔法・罠カードの効果を受けない。

「これでバースの攻撃力は1300ポイントアップし、3800になる！」

仮面ライダー・バース ATK3800

「そしてセットカードオープン、魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロし、2枚捨てる！来た来た来た！！！俺は手札のレベル7チューナー「地獄の使い」をゲームから除外し、「バース」にセルメダルカウンターを7つ乗せる！」

バース セルメダルカウンター2 9

「さらにセットカードオープン！速攻魔法「異次元からの埋葬」を発動！ゲームから除外しているカードを3枚選択し、墓地へ送る。もちろん墓地へ送るのは「ジャンク・シンクロン」「クイック・シンクロン」「地獄からの使い」だ。そして手札から魔法カード「死者蘇生」を発動し、「クイック・シンクロン」を特殊召喚！で、再び「バース」の効果を発動し、セルメダルカウンターを乗せる。」

バース セルメダルカウンター9 14

ガヤチャリガチャリ、カポンツ！「ウイングカッター！」

合成音の男性の声と共に、バースの背中に小型のブースターらしき物が装備される。その両翼は鋭く、そして鈍い光を放っており、その切れ味を表すかのようにだった。

「よっしゃ、一丁ド派手に行きますか！「バース」の効果を発動し、デッキから装備魔法「ウイングカッター」を選択し、装備！」

バース セルメダルカウンター14 12

ウイングカッター 装備魔法

効果：「仮面ライダー・バース」のみ装備することが出来る。装備モンスターの攻撃力を500ポイントアップする。このカードを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、もう1度攻撃することが出来る。

「そして、もう1度「バース」の効果を発動し、デッキから装備魔法「魔道師の力」を選択し、装備！俺の場にはこのカードを含めて5枚の装備魔法が存在している！よって、攻撃力、守備力共に2500ポイントアップ！」

バース セルメダルカウンター12 10

ガヤチャリガチャリ、カポンツ！「魔道師の力！」

バースの体から紫色のオーラが現れる。

バース ATK3800 4300 6800

「これで仕上げだ！「バース」の効果発動！バースのセルメダルカウンターの10個取り除き、このターン全ての相手モンスターを1回ずつ攻撃することが出来る！」

バース セルメダルカウンター100

ガチャチャリガチャリ、カポンツ！「ブレストキャノン！」

バースのベルトの部分にキャノン砲が装備される。そしてバースが素早くメダルをベルトに入れていく。メダルの1枚1枚にキャノン砲が呼応し、熱が溜まっていくのが分かる。

「よっしゃ、ターゲットロック。ブレストキャノン！発射ッ！」

臨界点に達したブレストキャノンがついに火を噴いた。その範囲はとても広く、万丈目のすべてのモンスターを飲み込んだ！

「かかった！攻撃宣言時にセットカードオープン、速攻魔法「禁断の聖槍」を発動！モンスター1体を選択し、ターン終了時までそのモンスターの攻撃力を800ポイントダウンさせ、このカード以外の魔法・畏カードの効果を受けない。終わりだ！」

聖なる槍がバースに向かって投げられる。

「おおっと、奇策としては面白いな。けどな」

バースの左腕に装備されているクレインアームのアーム部分が発射され、禁断の聖槍がアームによって掴まれた。・・・有線式だったのか。

「装備魔法「クレーンアーム」の効果は装備したモンスターとそれに装備されている装備魔法は相手の対象を取る効果を無効にし、破壊する！」

ギギギギツ、パキンツ！！

クレーンアームの圧力に耐え切れず、聖槍は折れてしまった。

「っ！」

そしてそのまま3体の真紅眼の黒竜とランサー・ドラゴニユートはブレストキャノンの光に包み込まれ、次の瞬間には完全に塵となつて消えていた。そしてその衝撃が万丈目にも襲い掛かった。

「なら、手札から魔法カード「竜との契約」とレベル8ドラゴン族モンスター「タイラント・ドラゴン」をゲームから除外し、LPを100になるように支払って発動する。このターンの戦闘ダメージを0になる！」

竜との契約 魔法カード（オリジナルカード）

効果：自分の場にドラゴン族モンスターがいる場合のみ発動することが出来る。自分の場の全てのドラゴン族モンスターはこのターン、相手の効果モンスターの効果、畏カードの効果を受けない。

自分の場のドラゴン族モンスターが戦闘で破壊された時、手札からレベル8のドラゴン族モンスター1枚とこのカードをゲームから除外し、自分のライフポイントが100になるようにライフポイントを払って発動することが出来る。このターン戦闘で発生するダメージを0にする。この効果を使用した次のターンのドローフェイズ時に通常のドローの代わりに手札が5枚になるようにドローする。そ

のターンのエンドフェイズ時に、あなたは敗北する。

タイラント・ドラゴンが万丈目を守り、衝撃波を防いだ。が、代償として万丈目のLPが100になってしまった。

万丈目LP3200 100

「お、防いだのか・・・やるねえ。さて、「バース」の効果発動！破壊したモンスターレベル分だけこのモンスターにセルメダルカウンターを乗せることが出来る。今回の収穫はレベル7の「真紅眼の黒竜」が3体、そしてレベル4の「ランサー・ドラゴニユート」が1体。計25枚つと。」

塵となって消えていった「真紅眼の黒竜」と「ランサー・ドラゴニユート」が銀色のメダルと形を変えた。そしてそれは、「バース」の横に置かれてあったガスボンベもどきの器の中へと入っていった。

「さらに、「ドリルアーム」の効果発動！相手モンスターを破壊した時、そのレベルを割った数だけ装備モンスターにセルメダルカウンターを乗せる。切り上げだけだな。えっと、7だから4になって12枚か。でさらに4を割った2枚を足して、14枚。先のと合わせれば、39枚か！大量大量！！」

いつの間にかドリルアームに大量のセルメダルが引っ付いており、それを1枚1枚丁寧にはがして器へと入れていく。

「俺のターン、ドロー！俺は「竜との契約」の効果発動！ドローフェイズ時に通常のドローの代わりに俺の手札が5枚になるようにドローする。ただし、この効果を使用したターンの終了時までには勝てなければ、俺は敗北する。・・・行くぞ、シロン！！」

(やつと、出番が来たな。)

「俺は手札から「風の幼竜 シロン」を召喚！」

「ガガガッ！」

風の幼竜 シロン ATK300

「そして「シロン」の効果発動！手札を2枚捨て、このカードを生贄にすることで手札、またはデッキから「伝説の風竜 シロン」を特殊召喚する！シロン、カムバック！リボーン！」

いつものように、進化してシロンが現れる。そして指を鳴らしながらシロンは呟いた。

「よし、誰かさんと違って出番はあるようだな。」

...

(くしゅん)

いきなりくしゅみをするアイリス。風でも引いたのか？

「ん、大丈夫か？アイリス。」

(あ、大丈夫です。ただ、どこかで私の噂をしていたような気がするのですが。)

俺の疑問に手を振って大丈夫と答える。しかしだなあ……。

「そ、そうか……。」「志村、後ろ後ろ!」「じゃないが、知らぬが仏だよな?」

気づかないって事は幸せなのだろうか? まあ、いいや。

...

「さらに、手札から魔法カード「竜の鏡」を発動! 墓地の「真紅眼の黒竜」3体と「ランサー・ドラゴニユート」、ファイブ・ゴット・ドラゴン「ミンゲイドラゴン」をゲームから除外し、「F・G・D」を融合召喚!」

F・G・D ATK5000 5800

ファイブ・ゴット・ドラゴン

その名の通り、5つの頭を持った竜が現れる……。って、あの頭部は今さっき融合召喚に使用したモンスターたちの頭じゃないか!? 「真紅眼の黒竜」や「ランサー・ドラゴニユート」はいいんだが、「ミンゲイドラゴン」の頭部だけ物凄くひ弱そうな感じがするな。いや、逆に考えるんだ。「ポケ・ドラ」2体と「ベビー・トラゴン」3体を融合させれば? うん、不気味すぎてさらに怖い。

「おお、中々凄いモンスターが出てきたな。けど、残念だが攻撃力は足りてないな。」

「いや、これが勝利の鍵だ! 手札から魔法カード「受け継がれる力」を発動! 自分の場の「F・G・D」を生贄に、その攻撃力を「シロ」に与える!」

「ちくしょー!」と言わんばかりに悔しげな咆哮を残して光とな

るF・G・D。何っーか、扱いがひでえ。そしてその光がシロンの体に吸収される。

シロン ATK3200 8200

「バトル！「シロン」で「バース」に攻撃！」

「ウイング・トルネード！！！」

「っ、それはさせねえ！」

バースはキャタピラレッグを使い一気にシロンへ近づき、右手のドリルアームで貫こうとする。だが、シロンは空中へと飛んでしまい、避けられてしまった。バースはすかさず左腕のフックを射出してシロンを捕まえようとする。その動きを見切ったシロンが大きく羽ばたき、竜巻を起こし、クレーンアームごとバースを吹き飛ばそうとした。だが、バースも負けておらず、キャタピラレッグで必死に抗い、ウイングカッターでの飛行を試みようとしていた。

「吹き飛べーっ！！！」

シロンがさらに大きく羽ばたき、勢いが増す。

そしてついに抗うことが出来なくなり、バースは空の彼方へと吹き飛ばされてしまった。ウイングカッターで何とか危機を脱しようとしたが、竜巻のせいで展開することが出来ず、そのまま風に流されてしまう。

そして、重力によって地面へと打ちつけられ・・・動かなくなってしまう。

「勝者 万丈目 準選手！」

審判の宣言と共に、会場から歓声が沸き起こった。

まさか万丈目の逆転勝ちとはな。・・・攻撃力の高いドラゴン族だからこそその方法か。

「ふーっ、まさかこんな方法で逆転されるとはなあ。まいったまいった！」

頭を掻きながら伊達さんは握手をして、お互い戻ろうとしていたら伊達さんが振り返った。何かあったのか？

「じゃ、頑張れよ！千丈目！」

「万丈目だ！」

「おお、悪い悪い。俺は長年海外にいたから漢字が苦手だな。じゃあな、億丈目！」

「万丈目だ！！2度も言わせるな！」

「ははは、冗談冗談。じゃあな、万丈目！」

「まいったく」

そういつて両者は完全に去っていった。

（次も頑張るか。兆丈目！）

「俺は万丈目だーっ！！！」

万丈目が怒鳴り声を上げた。どうやらシロンにからかわれているらしい。

と、次で最後か・・・大徳寺先生と万丈目。どちらが勝つか見ものだな。

フィールド30：夏祭り大会準決勝2回戦（奥の手）（後書き）

万丈目が勝ちました。さて、これで決勝戦に出場するメンバーが決まりました。

大徳寺対万丈目、戦いはどうなるのか自分でもまだわかりませんが、出来れば応援してやってください。それでは。

フィールド31：夏祭り大会決勝戦（竜の誇り）（前書き）

ついに決勝戦！

さて、大徳寺先生と万丈目・・・どちらが勝つのだろうか？

追伸：「風の幼竜 シロン」と「伝説の風竜 シロン」の効果を少し変更しました。幼い方は自身がデッキに戻り、伝説の方は手札コストが課せられました。・・・流石にノーコストハリケーンは強すぎましたので。

フィールド31：夏祭り大会決勝戦（竜の誇り）

「これより「大徳寺 勝平」選手対「万丈目 準」選手の決勝戦を
始めます！」

「さてはて、まさか決勝戦まで進めるとは・・・驚きましたにや。」

「だからと言って、手加減はしませんよ？大徳寺先生。」

少しおどおどしながらも何とか会場に足を運ぶ大徳寺先生。そして
堂々と会場に足を運ぶ万丈目。大徳寺先生。そこは教員だからしゃ
きつとしてください！

「さて、これよりコイントスを開始します。表が「大徳寺」選手。
裏が「万丈目」選手で始め済ます。・・・結果は表！よって「大徳
寺」選手が先攻になりました。」

危ういな。初手に「次元の裂け目」を張られたり「マクロコスモス」
をセツトされたら、万丈目が得意とする墓地肥やしの戦術は使えな
くなる。

「これも運ですから恨まないでくださいにや。」

「たかが先攻後攻で恨みませんよ。」

手を合わせて謝っている大徳寺先生に対し、まったく持つて意を持
たない万丈目。

こうやって見ると大徳寺先生の腰が低いような気がするな。

「されでは」

「決闘！」

「私の先攻、ドローしますにや。私はモンスターをセット。」

セットモンスター DEF？

「そしてカードを1枚伏せ、手札から永続魔法「次元の裂け目」を発動しますにや！墓地へ送られるモンスターカードは墓地へ送られず、ゲームから除外されますにや。これにより万丈目君が得意とする墓地肥やしは殆ど封じましたにや！」

やはり初手で引いていたか。ここから大徳寺先生の独壇場かな？

「そしてターンエンドしますにや！」

大徳寺 手札3 場 モンスター1 伏せ1 永続魔法「次元の裂け目」

セットモンスター DEF？

「それはどうかな？俺は手札から魔法カード「ワン・フォー・ワン」を発動！手札の「仮面竜」を捨て、デッキからレベル1モンスター「風の幼竜 シロン」を特殊召喚！」

風の幼竜 シロン ATK300

「俺は「風の幼竜 シロン」の効果発動！このカードをデッキに戻し手札を2枚捨てることで、手札またはデッキから「伝説の風竜」

シロン」を特殊召喚する！カムバック、リボーン！！」

伝説の風竜 シロン ATK2500

「そして「伝説の風竜 シロン」の効果発動！1ターンに1度、自分の手札を1枚捨てることによつて場の魔法・罠カードを全て本来の持ち主の手札に戻す！！やれ、シロンッ！」

「ウイング・トルネード！！」

シロンが大きく羽ばたくと竜巻が発生し、それが場の魔法・罠カードをすべて吹き飛ばしてしまった。

「にゃ！そ、その手がありましたか……。」

「さらに、手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロし、その後2枚捨てる。そして手札から永續魔法「未来融合ーフューチャービジョン」を発動！融合デッキからモンスターを選択し、デッキからその融合モンスターの素材を墓地へ送る。そして2ターン後のスタンバイフェイズに対象にした融合モンスターを特殊召喚する！俺は「F・G・D」を指定し、デッキから「真紅眼の黒竜」を2枚、「真紅眼の飛竜」を3枚の計五枚のモンスターを墓地へ送る。」

ここぞとばかりに墓地を肥やして次の手に備える万丈目。しかし殆どの手札を使い切ってしまったのは結構ヤバイと思うが。

「バトル！「伝説の風竜 シロン」でセットモンスターに攻撃！」

「ふふふ、かかりましたにゃ！セットモンスターは「異次元の女戦

士」ですよ！」

異次元の女戦士が風で吹き飛ばされるが、左手で持っていた刀を振ると次元の裂け目が出来た。ちよ、それなんてプラシドさん！？そして女戦士がその次元に入るとシロンの真後ろにも次元の裂け目がもう一つ出来ていた。今度はドラ もんかよ！？そこから出てきた女戦士がシロンの背中に飛び移った。

「なっ、この野郎！離しやがれ！！」

咄嗟のことに対応できず、羽を羽ばたかせて何とか振り落とそうとするシロン。だが、女戦士はしっかり？まっっており、振りほどくのは困難に見えた。

「ふふっ、可愛い坊やねえ。威勢のいい子は好きよ？異次元でたっぷり可愛がってあげるわ。」

怪しげな笑顔をしつつシロンの耳たぶをペロリと舐める女戦士。それに対して背中をゾクリとさせ青ざめるシロン。ちよ、これR-18 だろ！？お子様に見せちゃってもいいのかよ？

「やめろっ！俺にそんな趣味は・・・アーツ！！！！」

「シローンッ！」

女戦士が次元の裂け目を作り、シロンごと入れてしまった。

1名様、お持ち帰りーっ！！

「あゝ、本来はこんな感じじゃないんだけどにやゝ。まあ、「異次元の女戦士」の効果で「伝説の風竜 シロン」ごとゲームから除外

させてもらいましたにゃ。(「異次元の女戦士」って、ドSだったのですかにゃ。)

大徳寺先生もあの光景には少し引きながら効果を説明している。まあ、確かにあんな事態になったら誰だって驚くわな。

「く・・・ならターン終了時、墓地の「真紅眼の飛竜」の効果発動！通常召喚していないターンの終了時、このカードをゲームから除外し、墓地の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

万丈目 手札0 場 モンスター1 伏せ0

真紅眼の黒竜 ATK2400

「私のターン、ドローですにゃ！私は手札から永続魔法「次元の裂け目」を発動しますにゃ。そして魔法カード「天使の施し」を発動しますにゃ！デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てますにゃ！」

なるほど。何かを除外して「D・D・R」で持ってくる腹か？それとも「アレ」か？

「私は除外された「ネクロ・フェイス」の効果を発動しますにゃ！このカードが除外された時、お互いにデッキからカードを5枚ゲムから除外しますにゃ！」

「つく！（「竜の鏡」がやられた！？ちっ！！）

「私は手札から装備魔法「D・D・R」を発動しますにゃ！自分の

手札1枚を捨て、ゲームから除外されている自分のモンスターを特殊召喚しますにゃ！！私は「異次元の生還者」を特殊召喚しますにゃ！！」

異次元の生還者 ATK1800

まるでブラック企業に勤め、ボロボロになっている社員のごとく・
・何か哀れな雰囲気を出したまま現れた。

「そして「異次元の生還者」を生贄に「邪帝 ガイウス」を生贄召喚しますにゃ！！」

「またか……。」「眩きと共に完全に諦めた表情になって次元の裂け目に吸い込まれる生還者。大徳寺先生。せめてリ ビタンBの差し入れはしておいてください。見ていてとてもかわいそうです。」

邪帝 ガイウス ATK2400

「風帝ライザー」や「氷帝 メビウス」にそっくりなモンスターが現れる。ただし、カラーリングは漆黒の闇だが。

「「邪帝 ガイウス」の効果が発動しますにゃ！！このモンスターが生贄召喚に成功した時、場のカード1枚をゲームから除外しますにゃ。もちろん対象は万丈目君の「真紅眼の黒竜」ですにゃ！！」

ガイウスが両手から黒い球体を作り出す。まるで小型のブラック・ホールみたいだ。それを真紅眼の黒竜に目掛けて発射し、飲み込もうとする。

真紅眼の黒竜は黒炎弾を放ちその球体を破壊しようとするが、すべてその球体に飲み込まれてしまう。そして球体が真紅眼の黒竜の体

に触れ、徐々に飲み込まれてしまう。必死になって抗う真紅眼の黒竜だったが、その行為も虚しく・・・完全に飲み込まれてしまった。

万丈目LP4000 3000

「つく・・・何！LPが減っているだど!?」

真紅眼の黒竜の最後を見届け、万丈目が呆けていると自分のLPが減っていることに気づいて驚いていた。

「邪帝 ガイウス」によって除外されたカードが闇属性モンスターの
場合、相手LPに1000ポイントのダメージを与えますにや
!」

もしもこれが闇属性でのミラーマッチだった場合、「邪帝 ガイウス」は物凄いバーンカードになりかねんな。

「バトルですよ！「邪帝 ガイウス」でダイレクトアタックですよ！」

真紅眼の黒竜を飲み込んだ球体が万丈目に向けて発射される。今回は球体にプラズマが走っている。何か痛そうだ。

「くう!!」

万丈目LP3000 600

「私はカードを2枚伏せてターンエンドですよ！そしてこの時に「異次元の生還者」の効果が発動し、特殊召喚されますにや!」

真っ白になって帰ってきた生還者。まるで明日の ヨーミみたいだ。

大徳寺 手札1 場 モンスター2 伏せ2 永続魔法「次元の裂け目」

邪帝 ガイウス ATK2400

異次元の生還者 ATK1800

「俺のターン、ドロー！・・・っち！そのままターンエンドし、俺は墓地の「真紅眼の飛竜」の効果発動！自身をゲームから除外し、墓地の「真紅眼の黒竜」を特殊召喚！」

真紅眼の黒竜 ATK2400

万丈目 手札1 場 モンスター1 伏せ0

真紅眼の黒竜 ATK2400

前もって用意しておいた「真紅眼の黒竜」もこれで打ち止め・・・かなり厳しいな。

次のターンで何かしらの方法がなければ完全に詰むぞ。

「私のターン、ドローですよ！そしてスタンバイフェイズにゲームから除外している「異次元からの宝札」を発動しますよ！このカードが除外された次の自分のスタンバイフェイズにこのカードは私の手札に戻りますよ。そしてこの効果で手札に戻った時、お互いにデッキからカードを2枚ドローしますよ！」

「いつの間に・・・だが、これで。」

異次元の宝札の効果によって、自身もドローできると知りほっとする万丈目。だが、大徳寺先生は何やら怪しげな微笑を浮かべていた。

「ふふふ。」

「ん、何がおかしい。」

「私はこの時を待っていましたにや！セットカードオープン、永続罨「便乗」を発動しますにや！」

「なっ！」

このタイミングで便乗か！？次からとはいえ、これで万丈目のドロ一系カードが発動するたびに大徳寺先生にもメリットが生まれるのか。これはきついな。

「「便乗」は相手がドロフェイズ以外でカードをドロしたときに発動できますにや！次から万丈目がドロフェイズ以外でカードをドロするたびに私はデッキからカードを2枚ドロしますにや！」

「ちい、厄介な！」

大徳寺先生の説明に対して苦々しい表情を浮かべる万丈目。

「さて、私は「異次元の生還者」を生贄に「光帝 クライス」を生贄召喚しますにや！」

あひやひやひやひやひや！と狂ったように笑い出した生還者。アカン、大徳寺先生。そいつはもう狂い初めているぞ！！頼むから「異次元の偵察者」と変えてくれ。

光帝 クライス ATK2400

ガイウスの鎧を金ぴかにした感じのモンスターが現れる。肩に「百」と書きたいのは俺だけだろうか？

「そして「光帝 クライス」の効果を発動しますにゃ！このカードが召喚・特殊召喚した時に場にあるカードを2枚まで破壊できますにゃ！ただし、破壊されたプレイヤーはその枚数分デッキからカードをドローしますにゃ！そしてこの効果を使用したターン、「光帝 クライス」は攻撃することが出来ませんにゃ。私が対象を取るのは「真紅眼の黒竜」ですにゃ！」

クライスが右手を掲げると、ボンツ！という音と共に真紅眼の黒竜が宝札に変わった。

なるほど、確かにこれだったら「何故破壊したカードの枚数分ドローすることが出来るのか？」という効果も納得できるな。

「そして万丈目君が「光帝 クライス」の効果でカードをドローした瞬間、永続罫「便乗」の効果によって私はデッキからカードを2枚ドローしますにゃ！！！」

真紅眼の黒竜が元いた場所にある宝札を盗賊が便乗して大徳寺先生に宝札を渡す。・・・何か大徳寺先生が悪代官に見えてきた。不思議！

「ちい、厄介な！！！」

「バトルですにゃ！「邪帝 ガイウス」でダイレクトアタックですにゃ！」

再び球体を作り出し、万丈目に向けて撃ち出した。これが命中したら。

「つく！手札の「竜との契約」とレベル8ドラゴン族モンスター「ダーク・ホルス・ドラゴン」をゲームから除外し、このターンの戦闘ダメージを0にする！」

ダーク・ホルス・ドラゴンがその身を盾にして万丈目をかばう。これで一時的にはしのげたか。

「中々守備も堅いですよ……しかし、次のターン内に勝てなければ万丈目君は「竜との契約」の効果によって敗北しますよ。さて、私はカードを2枚伏せ、ターンエンドしますよ。そして「異次元の生還者」が特殊召喚されますよ！」

顔をへブン状態にして帰ってきた生還者。疲れ果ててしまったので壊れてしまったのか……。

大徳寺	手札4	場	モンスター3	伏せ4	永続魔法「次元の裂
け目					
邪帝	ガイウス	ATK	2400		
光帝	クライス	ATK	2400		
異次元の生還者		ATK	1800		

「俺のターン、「竜との契約」の効果により手札が5枚になるようにデッキからカードをドロウする！よし。」

万丈目が勝負を仕掛けるようだ。……さて、どんなカードを切ってくるかな？

「俺はスタンバイフェイズに墓地の「ミンゲイドラゴン」の効果を発動！自分の場にモンスターが存在しない時、このカードを特殊召喚することが出来る！ただし、この効果を使用した場合、場から離れたときゲームから除外する。」

ミンゲイドラゴン ATK400

「俺はカードを3枚伏せ、「ミンゲイドラゴン」を生贄に「破壊竜ガンドラ」を生贄召喚！」

破壊竜ガンドラ ATK？

全身が黒く、そして血のように赤い宝玉を体中に埋め込まれた竜が現れる。

まさかここでガンドラが現れるとはなあ・・・凄い引きだな。

「LPを半分払い、「破壊竜ガンドラ」の効果発動！このカード以外の場に存在する全てのカードを破壊し、ゲームから除外する！！デストロイ・ギガレイズ！！」

万丈目LP600 300

「つく！しまったにや！！」

ガンドラの宝玉から紅の光線が発射され、場の全てのカードを吹き飛ばす。味方も、敵も・・・。分け隔てなく。

「そしてこの効果によって破壊したカード1枚につき、「破壊竜ガンドラ」の攻撃力は300ポイントアップする！今破壊したカードの枚数は11枚。よって攻撃力は3300になる！！」

破壊竜ガンドラ ATK? 3300

「さらに手札から装備魔法「団結の力」を「破壊竜ガンドラ」に装備！」

破壊竜ガンドラ ATK3300 4100

これでガンドラの攻撃力が大徳寺先生のLPを上回った！

「これでトドメだ！！バトル！「破壊竜ガンドラ」でダイレクトアタック！デッド・エンド・シュートツ！！」

ガンドラがその身を震わせて、口から最後の一撃を発射しようとした時・・・異変は起きた。ガンドラの攻撃はかき消され、カチツカチツとまるで古時計のような音を立てている1体のモンスターが現れていたのだ。あ、あれは！

バトル・フェーダー DEF0

「惜しかったですにや。残念ながら、私は手札の「バトル・フェーダー」の効果を発動させてもらいましたにや。このモンスターを特殊召喚することによって攻撃は無効となり、バトルフェイズを強制的に終了させますにや。」

「なん・・・だと!?!」

ドサリッ。万丈目が体勢を崩してしまい、片足立ちになる。

「・・・ターンエンドだ。そして「竜との契約」により、俺は敗北

する。」

静かに、呟くがごとく万丈目の言葉が会場に響く。そして完全に倒れてしまった破壊竜ガンドラが今の万丈目の心境を物語っていた。

「勝者 大徳寺 勝平選手!!!」

審判の宣言が静かになった会場に響き渡り、その一瞬後に歓声が最大級に沸き起こった。何せ万丈目を相手に完封勝ちしたのだ。これで沸き起こらないほうがおかしいだろう。

大徳寺先生がそつと万丈目に手を差し伸べる。

「万丈目君。今回は勝たせてもらいましたにや。」

万丈目はその手を見て少し悩んだが、素直にその手を取った。

「今回は・・・俺の負けです。しかし、次は必ず勝ちます!!!」

気骨のある声が会場に響き渡る。それは大徳寺先生に対しての宣戦布告のようにも思えた。

「その機会を楽しみに待たせてもらいますにや!!!」

大徳寺先生もまた万丈目の宣戦布告を堂々と受け取った。

「それでは、これにて夏祭り大会を閉会します!お疲れ様でした。」

司会者の言葉と共に会場から人々が去っていき、同時に熱も去っていく。

まるで暑い夏が過ぎ、少し寂しげな秋になるような気分になった。

「大徳寺先生、万丈目。本当に面白いデュエルだったぜ！ガツチャ
！！」

「ああ。最後の攻撃が通っていれば万丈目が勝っていた……。諦めずによくやったな。万丈目。」

「十代。それにカイザー……。」

十代と兄さんが万丈目に声を掛ける。ん？兄さんの両手にはなぜか袋が持たされていた。

「兄さん。それは？」

「ああ。せっかく集まったからな。たまには皆で騒ごうかと思っ
な。」

なるほど。そのための食料を調達していたのか。

「さて、大会で疲れたろ。皆も待っているし……行くぞ！」

そう言って兄さんは駆け足で会場を後にする。

「さて。俺達も行くか？」

「そうですね。早く行かないと皆を待たせてしまいますよ。」

「よっしゃ、いっぱい食べまくるぜ！」

万丈目と大徳寺先生と十代がそれに釣られて兄さんの後を追う。

（マスターは皆と一緒にいなくなるのでしょうか？）

アイリスの言葉に思わずはっとした。そういえば俺は皆の待ち合わせ場所を知らないから、見失った時点でアウトだ！！急がなければ。

「待ってくれー！！」

俺も万丈目たちの後を追ひ、会場を後にした。

・・・

「賑やかなものだ・・・最後の時をもう少しだけ楽しむがいい。丸藤翔。」

裏路地から人影がうつすらと現れる。

そして雲の隙間から太陽の光が差し、人影に握られていた刀を赤く輝かせている。まるで、血で塗り固まってしまったかのように・・・。

フィールド31：夏祭り大会決勝戦（竜の誇り）（後書き）

結果的には大徳寺先生が完封勝ちでしたが、もしも大徳寺先生が「バトル・フェーダー」を手札に持っていなかったら万丈目が逆転していました。

そんな感じで今回の副題をつけさせてもらいました。

どうでもいい話ですが、女戦士を少し暴走させすぎたかな・・・と思う作者です。

あの場面だけは本当にノリノリで書いていましたw
それでは。

フィールド32：パーティと刺客（前書き）

今回は再びZET様の「遊戯王デュエルモンスターズGX」転生者による転生記「とのコラボをさせていただきました。リクエストがあつたような気がしたので。

この作品ではヴァイロンの出番が少し後になりそうなのでユタ様には本当に申し訳ありません。orz

追伸：一部訂正しました。&描写を増やしました。不完全ですみませんorz

それと今回からLPはマイナスを無くし、0にしようと思います。

フィールド32：パーティと刺客

「お、皆待たせたな。」

兄さんの案内の下、広場に行くと言っていた。

あれ、ノース校との親善試合の時のノース校代表だった「天空 優」と「神崎 有栖」さんも来ていた。

まあ、それは置いておいて……

「……」

皆の声と共に食事が始まった。

しかし、伊達さん。またおでんってのはどうかと思うんだが……。と、そんな感じで思っていた俺とは対照的に、伊達さんは日頃の疲れを癒すかのように飲み食いしていた。

「ふう、やっぱり日本が落ち着くわ。」

少し手を休めて呟いた。え、じゃあやっぱり。

そう思っているとマルタンが伊達さんに話しかけていた。

「え、伊達さんはどこか海外に行っていたんですか？」

「ああ。俺は医者として色々な所を回っていたよ。紛争のある国、貧困で困っている村々……。どれもこれも大変だったけど、やりがいのある仕事だわ。」

しみりとしながらも、楽しく語る伊達さんの姿に皆は驚いていた。まあ、外国での治療体験というのは結構過酷だそうだからな。

「医者だったんですか!？」

そっちかよ!マルタンの言葉に思わず心の中で突っ込んだ。

「おう。ま、何か怪我をしたときは呼んでくれ!と言っても、怪我をしないのが一番いいんだがな。」

(流石に医者だからって、全てを治療できるはずはないよなあ。)

ハア、とため息をつくシロン。そのため息は何かしら重く感じられた。

「どうした。シロン?」

その姿に万丈目が疑問を覚え、尋ねる。

「いや、何でもない。(流石に絞り取られまくって、血しか出なくなっただけなんじゃないよなあ。)」

だが、適当にはぐらかされてしまったようだ。ただし、シロンの顔には哀愁が漂っているが……。

その頃、生徒達から少し離れた場所では大徳寺先生とクロノス先生が何やら話しているようだった。

「まさーか、レッド寮長であるあなたーが優勝するんーて……思いもよらなかったノーネ。」

「それに関しては私も同感ですよー。」

何か渋い雰囲気を出しながら、クロノス先生と大徳寺先生はお互いにジューズを飲んでいた。流石に昼からお酒は不味いのだろう。

ガイガイワヤワヤ騒いでいると、万丈目が優さんや有栖さんと何やら話しているようだ。何か有力な情報があるかもしれないので耳を立てておくか。

「お前達はどこのブロックで戦ったんだ？」

「俺はAブロックだったな。まさかカイザーと戦う羽目になるとは・
・後攻1K1E1Lはサイバー流の18番だったということが再確認できた。」

「僕はDブロックだったよ。あそこにいる伊達さんって人と当たって、バースにやられちゃった。」

「はあ。」

万丈目が肩を落としながらため息をついた。珍しいな。そう思った俺は万丈目に声を掛ける。

「ん、どうした万丈目？」

「いや、「サモサモキャットベルンベルン」がちょっとトラウマだな。」

何つー鬼畜デツキを！これは酷すぎる。

「アレに当たったのか？」

「あー、スマン。万丈目・・・あの時な。」

優さんがそのことについて話してくれた。何でも「嫉妬団」と毎日抗争があつて、疲れ果てている所に万丈目が来てしまったそうだ。

「なるほどな。ピリピリしていた時期に万丈目が来て、ヒヤッハ―しちまった訳だ。」

「ああ。」

「いくらタイミングが悪かったとはいえ・・・アレは酷かった。」

「流石にアレはやりすぎだよ。優。」

「悪い悪い。(ん？何か俺の知っている「丸藤 翔」とは・・・別人か？いや、だとしたら何でこっちの知っている翔と瓜二つなんだ？)」

優さんと有栖さんが俺を少し不信な目で見ている。まさか・・・な。まあ、ちょっと力けてみるか。となると、万丈目を少し外させてもらうか。

「あー、スマンが万丈目。ちょっと席を外してくれないか？他言無用な話があつてな。」

「別に構わないが。」

「悪いな。」

よし、万丈目が離れた。やってみますか。

「優さんと有栖さんだったっけ？まさかと思うけど・・・俺と同じクチかい？」

「「！！」」

俺の言葉に反応した。ビンゴ！

本当ならタバコの煙を利用した方法を使ってみたかったが、生憎未成年だ。さらに俺はタバコが苦手だから無理だった。

「当たり前・・・か。」

「やはり俺の知っている「丸藤 翔」じゃなかったか。」

「ああ。といつても「丸藤 翔」であつて、「丸藤 翔」でないといつたほうが正解かな。」

「えつと・・・？」

有栖さんが少し混乱しているらしい。そこは優さんがフォローしてくれた。

「つまり、俺達の知っている「丸藤 翔」ではないけど、この世界では「丸藤 翔」として存在しているって事か。」

「まあ、そんな感じだな。で、こつちの世界に来た目的は？」

「実は・・・。」

優さんがこつちの世界に来た経緯を話してくれた。何でも無事に卒

業した後に旅行をしていたら、突如としてこっちに吹っ飛ばされたらしい。

「なるほど。不慮の事故により、なぜかこっちの世界に来てしまった、と。」

「ああ。」

「本当なら優と一緒に婚姻届を出しに行くはずだったのに！」

有栖さんの大声の一瞬後、この場にいた全員が有栖さんと優さんを見ていた。

しかし全員が（。。。）の顔になっているのは酷いと言えないような。

「ちょ、まだあの婚姻届を持っていたのか!？」

有栖さんの告白に優さんが慌てふためいていた。ここに嫉妬団がいたら「リア充爆発しろ」と言われても文句は言えないはずだ。

「はははっ！そりゃ、災難だったな。」

伊達さんが思いっきり笑いながら有栖さんに声を掛ける。

「そついえば・・・えーと。」

「翔でいいよ。有栖さん。」

「翔君はやっぱりロイドとか使っているの?？」

「ああ。勇者デッキで採用しているが……。」

「勇者デッキ!? 見せて見せてッ!」

有栖さんが目をキラキラ輝かせている。

「あ、こら! 有栖!」

「悪い癖が出た」と言わんばかりに優さんが有栖さんを止めようとする。

が、俺自身有栖さんと戦ってみたいのでちょっと対戦を申し出てる。

「見せるのは構わないけど……せつかくですから決闘しませんか?」

「いいよー!」

やはり即答か。

「決闘!」

「じゃあ、ボクの先攻。ドロー! ボクは手札から「マシンナーズ・ギアフレーム」を攻撃表示で召喚するよ!」

マシンナーズ・ギアフレーム ATK1800

オレンジカラーの機械の整備兵が現れる。と言っても、こいつも機械なんだがな。

しかし……兵士より強い整備兵って何かおかしくないか?

てか、「TG」じゃないんだな。まあ、「マシンナーズ」の方が安定性は充実しているが。

「そして「マシンナーズ・ギアフレーム」の効果発動！このカードの召喚成功時、デッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。ボクは「マシンナーズ・フォートレス」を手札に加えるよ！」

「さらに、カードを2枚伏せてターンエンド！」

有栖 手札4 場 モンスター1 伏せ2

マシンナーズ・ギアフレーム ATK1800

「俺のターン、ドロー！」

「俺は手札から「スチームロイド」を召喚！」

スチームロイド ATK1800

機関車型のロイドが現れる。へんな言い方をしてしまったら「機関車トース」と言ってしまうから気をつけないと。

「バトル！「スチームロイド」で「マシンナーズ・ギアフレーム」に攻撃！」

スチームロイドの煙突から煙が噴出し、物凄い勢いでギアフレームに突進する。

「そして「スチーム・ロイド」の効果発動！このモンスターが相手モンスターに攻撃する時、このカードの攻撃力は500ポイントア

「ッブ！」

スチームロイド ATK1800 2300

そしてスチームロイドがギアフレームを轢き壊した。

これが人間だったら人身事故だよ！！

有栖LP4000 3500

「俺はカードを3枚伏せ、ターンエンド！」

「ならエンドフェイズにセットカードオープン、速攻魔法「サイクロン」を発動！今伏せた右側のカードを破壊するよ！」

突風が今伏せた俺のカードを粉々にした。

「っ！（「攻撃の無力化」が！）」

翔 手札2 場 モンスター1 伏せ2

スチーム・ロイド ATK1800

「ボクのターン、ドロー！ボクは手札から「マシンナーズ・ソルジャー」を攻撃表示で召喚！」

マシンナーズ・ソルジャー ATK1600

右手にナイフを装備した緑色の機械兵が現れる。

「マシンナーズ・ギアフレーム」より攻撃力が低いつてどういふことなんだ？

「そして召喚した「マシンナーズ・ソルジャー」の効果発動！このカードが召喚に成功した時、自分の場にこのカード以外のモンスターが存在していない場合、手札から「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！ボクは手札から「マシンナーズ・フォートレス」を攻撃表示で特殊召喚！」

ソルジャーが右手を前に突き出すと、奥から「キュラキュラ」というキヤタピラ音と共にその名の通り「要塞」をイメージさせられるかのような戦車が現れた。

マシンナーズ・フォートレス ATK2500

「マシンナーズ・フォートレス」が特殊召喚に成功した時、セットカードオープン、罠カード「激流葬」を発動！場の全てのモンスターを破壊する！」

地響きと共に濁流が流れ込み、場を全て流し洗おうとする。

「いい手だけど、甘いよ？セットカードオープン！カウンター罠「魔宮の賄賂」を発動！魔法・罠カードの発動を無効にし、相手はデッキからカードを1枚ドロウする。よって「激流葬」は無効になるよ！」

だが、直前になって濁流の勢いが止まってしまい・・・失敗に終わってしまう。

「つく！」

これはヤバイ！

「バトル！「マシナーズ・フォートレス」で「スチームロイド」に攻撃！」

フォートレスがキャタピラ音と共に徐々に接近してくる。まるでW1の重戦車だな。

この迫力だけでも相手を萎縮させることが出来そうだ。

スチーム・ロイド ATK1800 1300

「「スチーム・ロイド」の攻撃力が下がった！？」

観戦していた十代から驚きの声が出る。まあ、あいつはHERO専門だから仕方ないと言えばそこまでだが、もうちょっと知っておいた方がいいと思うぞ？

「「スチーム・ロイド」のモンスター効果だ。あのモンスターは攻撃を仕掛けたときには攻撃力が上昇するが、逆に攻撃された時は攻撃力が下がるんだ。」

そこへ兄さんが十代に説明する。フォロワーありがとうございます。そしてフォートレスの右手で殴られ、スチームロイドは粉々になっ
てしまった。

こ、怖え……。

翔LP4000 2800

「さらに、「マシナーズ・ソルジャー」でダイレクトアタック！」

ソルジャーが俺に襲い掛かり、右手のナイフで切りかかってくる。

翔LP2800 1200

「ボクはカードを1枚伏せてターンエンド!」

有栖 手札2 場 モンスター2 伏せ1

マシンナーズ・ソルジャー ATK1600

マシンナーズ・フォートレス ATK2500

「俺のターン、ドロー!俺は手札から魔法カード「天使の施し」を
発動!デッキからカードを2枚ドローする。・・・よし、俺は手札
から魔法カード「苦渋の選択」を発動!デッキからカードを5枚選
択し、相手はそこからカードを1枚選ぶ。俺は「カイトロイド」
「シャベルロイド」「パトロイド」「レスキューロイド」「ラダー
ロイド」を選択!」

「じゃあ、「パトロイド」を選ぶよ。」

「選ばれた「パトロイド」を手札に加え、その他のカードは墓地へ
送る!そしてセットカードオープン!永続罫「リミットリバー」
を発動!墓地の「エクスプレスロイド」を攻撃表示で特殊召喚!」

エクスプレスロイド ATK400

新幹線型のロイドが現れる。「ロイド」デッキならほぼ必須と言え
るカードの1枚だ。

「え?いつの間に・・・あ!」

「「天使の施し」の時に墓地へ送ったよ。そして「エクスプレスロ
イド」の効果発動!このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功

した時、墓地の「エクスプレスロイド」以外の「ロイド」と名のつくモンスターを2枚手札に加える！俺は墓地の「レスキューロイド」「ラダーロイド」を手札に加える！」

回収が本当にうまい。回収したモンスターを捨てて「マシンナーズ・フォートレス」を出すデッキもあるらしいが、俺は持ってないから組めないんだ。

「さらに、「エクスプレスロイド」を生贄に「ジャンボロイド」を
守備表示で召喚！」

ジャンボロイド DEF2700

ジャンボジェット機をモチーフにしたロイドが現れる。ちなみに鶴が書かれたマークをしているおり、芸が細かいと思ったのは秘密だ。

「そして「ジャンボロイド」の効果発動！このカードが「ロイド」と名のつくモンスターを生贄にして召喚に成功したとき、デッキからカードを2枚ドローする！」

よし、揃った！

「俺は手札から魔法カード「融合」を発動！場の「ジャンボロイド」と手札の「パトロイド」「ラダーロイド」「レスキューロイド」を融合し、「火炎合体 ファイヤーダグオン」を融合召喚！」

「レスキューロイド」と「ラダーロイド」が「ジャンボロイド」の左右の格納庫から発進し、その格納庫が変形して「ジャンボロイド」の足となった。次に「ジャンボロイド」の前頭部分が2つに割け、肩となる。そこへ「レスキューロイド」と「ラダーロイド」が左右

の腕となり、「パトロイド」が大きく開かれた「ジャンボロイド」の胴体部分へと格納された。そしていつの間にか現れていた頭部の目に光が宿る。

「火炎合体！「ファイヤーダグオン」！！！」

火炎合体　ファイヤーダグオン　ATK3200

「あ、「ファイヤーダグオン」だ！やっぱりカッコいい！！」

「くーっ、やっぱりカッコいいなあ。」

「さてと、「ファイヤーダグオン」の効果発動！ファイヤーホールドゥー！！」

赤い炎がマシンナーズ・ソルジャーを拘束した。

こうやって見ると処刑台に立たされた囚人に見える気がするな。

「バトル！「ファイヤーダグオン」で「マシンナーズ・ソルジャー」に攻撃！ファイヤーブレード！」

ファイヤーダグオン　ATK3200　4200

「「ファイヤーダグオン」の攻撃力が上がった！？」

有栖さんから驚きの声上がる。

「「ファイヤーダグオン」は攻撃宣言時に、攻撃力が1000ポイントアップする効果を持っている！」

「残念だけど、セットカードオープン！罾カード「次元幽閉」を發動するよ。ゴメンね・・・ファイヤーダグオン。」

しかし加速したファイヤーダグオンは次元に幽閉すべく開けられた穴をすり抜け、そのまま攻撃を続行した。

「え？嘘っ！」

「「ファイヤーダグオン」は攻撃時に相手の罾カードの効果を受けない！よって「次元幽閉」の効果の効果は受けない！！」

そのままファイヤーダグオンは炎によって拘束されたソルジャーを一閃し、右腕を上にあげて構える。

その直後、ソルジャーは体中から火花を散らし爆発した。

有栖LP3500 900

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

翔 手札1 場 モンスター1 伏せ1 永続罾「リミット・リバース」

火炎合体 ファイヤーダグオン ATK3300

「ボクのターン、ドロー！よし。ボクは手札から魔法カード「大嵐」を發動！場の魔法・罾カードを全て破壊するよ！」

げえ！俺の「聖なるバリア ミラーフォース」が！

「さらに手札から永続魔法「機甲部隊の最前線」を發動！」

「グリーン・ガジェット」を攻撃表示で召喚！」

グリーン・ガジェット ATK1400

その名の通り、歯車に緑色の手足と頭をつけたようなモンスターが現れる。

ステータスは低いが、効果は恐ろしい。・・・よくあるパターンのモンスターだ。

「そして「グリーン・ガジェット」の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」を手札に加えることが出来るんだ。僕は「イエロー・ガジェット」を手札に加えてデッキをシャッフル。」

デッキ圧縮と手札補充。そして「マシンナーズ・フォートレス」用のコスト回収は鬼だと思う。

「バトル！「マシンナーズ・フォートレス」で「ファイヤーダゴン」に攻撃！」

マシンナーズ・フォートレスが右肩のキャノン砲でファイヤー・ダグオンを狙い撃ちにする。咄嗟のことで避けきれず、ファイヤー・ダグオンは直撃を受けてしまった。だが、威力が足りなかったのかファイヤーダグオンを仕留めきれず、距離をつめられてしまい、ファイヤーブレードによって串刺しになってしまう。

有栖LP900 200

「つく！けど、これも計算のうちだから大丈夫！！そして戦闘破壊された「マシンナーズ・フォートレス」のモンスター効果発動！こ

のカードが戦闘によって破壊されたとき、相手の場のカードを1枚破壊する。僕は「ファイヤーダグオン」を破壊する！」

フォートレスが、ギギギツと今にも壊れそうな音を立てつつも動く。実際、体中から火花が出ているからもう長くはないだろう。だが、フォートレスの目は一瞬だけ光り輝き、キャノン砲をファイヤーダグオンの頭部に狙いを定めた。

「しまった！」

いくら勇者とはいえ、精密機械であることは間違いない。

そして放たれる砲弾。・・・ファイヤーダグオンのツインアイから光が消え、ゆっくりと前のめりに倒れる。そして役目を終えたフォートレスも静かに息を引き取った。

「そして永続魔法「機甲部隊の最前線」の効果発動！戦闘によって機械族モンスターが戦闘破壊され墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力が低い同じ属性の機械族モンスターを1体をデッキから特殊召喚する！僕はデッキから「スクラップ・リサイクラー」を守備表示で特殊召喚！」

スクラップ・リサイクラー DEF1200

ゴミ箱みたいな頭部に手を付け、脚部は車輪。・・・何つーか、アニメに出てきそうなモンスターだ。

「そして特殊召喚された「スクラップ・リサイクラー」の効果発動！デッキから機械族モンスター1枚を墓地へ送ることが出来る。僕は「マシナーズ・フォートレス」を墓地へ送る！」

万が一の時の保険か。確かに「D・D・クロウ」で除外されたらアウトだからなあ。

「そして「グリーン・ガジェット」でダイレクトアタック！」

「なら、手札の「カイトロイド」の効果発動！このカードを墓地に送ることで直接攻撃を無効にする！」

ふはははは。まだまだ青いな明 君！

・・・ん？何か声が聞こえたが気にしないでおう。

「あちゃー！惜しいなあ。ボクは「スクラップ・リサイクラー」の効果を発動し、墓地のレベル4モンスター「マシンナーズ・ソルジャー」と「マシンナーズ・ギアフレーム」をデッキに戻し、デッキからカードを1枚ドローする！」

スクラップになったソルジャーとギアフレームがスクラップ・リサイクラーの頭部に入れられ、ミキサーにかけられるような音が場に響く。あれってミキサーの役割をする装置だったのか・・・。そしてチンツ！というまるでオープンで焼けたような音がしたと同時に、デッキの1番上のカードを引いたようだ。

「手札から魔法カード「強欲な壺」を発動し、デッキからカードを2枚ドロー！ボクは手札から永続魔法「一族の結束」を発動！墓地のモンスターの元々の種族が一種類だった場合、ボクの場の同じ種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするよ！」

グリーン・ガジェット ATK1400 2200

「そしてボクはこのままターンエンド！」

有栖 手札2 場 モンスター2 伏せ0 永続魔法「機甲部隊の最前線」「一族の結束」

グリーン・ガジェット ATK2200

スクラップ・リサイクラー DEF1200

「俺のターン、ドロー！」

手札を全て使い切ってしまったからな・・・これはキツイ。

「俺は「ジャイロイド」を守備表示で召喚！」

ジャイロイド DEF1000

ヘリ型のロイドが現れる。今となっては「シールドウィング」にお株を奪われているが、当時としては珍しいモンスターだ。

「そしてターンエンド！」

翔 手札0 場 モンスター1 伏せ0

ジャイロイド DEF1000

「ボクのターン、ドロー！ボクは手札から「イエロー・ガジェット」を攻撃表示で召喚！」

イエロー・ガジェット ATK1200 2000

今度は黄色のガジェットが現れる。どうでもいいが、ガジェットといえは「ガジェット警部」は面白かったなあ。

「そして召喚に成功した「イエロー・ガジェット」の効果発動！デッキから「レッド・ガジェット」を手札に加えるよ。そして手札の「レッド・ガジェット」と「マシナーズ・ソルジャー」を墓地へ送り、墓地の「マシナーズ・フォートレス」を特殊召喚！」

マシナーズ・フォートレス ATK2500 3300

ファイヤーブレードによって傷ついたボディをそのまま引っさげ、中の部品だけを修理して甦ったようだ。何っ！か、機械族ならではの方法だな。

「バトル！「イエロー・ガジェット」で「ジャイロイド」に攻撃！」

「「ジャイロイド」は1ターンに1度、戦闘では破壊されない！」

「けど、2回目はないよ？「グリーン・ガジェット」で「ジャイロイド」に攻撃！」

「つく！」

流石に耐え切れずにバラバラになってしまっちゃうジャイロイド・・・かわいそうだ。

「そして「マシナーズ・フォートレス」でダイレクトアタック！」

「まだまだっ！墓地の「カイトロイド」の効果発動！墓地のこのカードをゲート、無から除外することでダイレクトアタックを無効にする！」

1枚で2度おいしいカイトロイドはおかしいと思うんだ。使ってい

る俺が言える言葉じゃないと思うが。

「勝ったと思っただけだな。ターンエンドかな。」

有栖 手札1 場 モンスター4 伏せ0 永続魔法「機甲部隊の最前線」 「一族の結束」

グリーン・ガジェット ATK2200

スクラップ・リサイクラー DEF1200

イエロー・ガジェット ATK2000

マシンナース・フォートレス ATK3300

「俺のターン、ドロー！手札から魔法カード「強欲な壺」を発動し、デッキからカードを2枚ドロー！さらに、手札から魔法カード「融合回収」を発動し、墓地の「融合」と融合素材となった「パトロイド」を手札に加える。そして手札から魔法カード「死者蘇生」を発動し、墓地の「シャベルロイド」を特殊召喚！」

シャベルロイド ATK1400

「そして手札から魔法カード「融合」を発動！場の「シャベルロイド」と手札の「パトロイド」を融合。「剛力合体 パワーダグオン」を融合召喚！」

巨大な「シヨベルロイド」のシャベル部分に「パトロイド」が乗っている。

人が乗り操縦する場所が真っ二つに割れ、後部に接続されて腕となる。接続部分からロックが掛かる音が聞こえる。これがまたかっこいいんだよ。うるさい？それはロマンが分からない奴だけだ。そして後部が立ち上がり、上半身となる

さらに正座をしていた人間が立つような動作でどんどん下半身への

変形が完了していく。どうやら足のロックも完了したようだ。そして胴体が開き、中から顔が現れる。そこへシヨベル部分に乗った「パトロイド」が入り、格納される。そして胴体が閉じり、両目に光が灯る。

剛力合体 パワーダグオン ATK3300

「え、パワーダグオン」まであったの!？」

「まあ、そういうこと。バトル!「パワーダグオン」で「グリーン・ガジェット」に攻撃!パワードリルアーム!！」

グリーン・ガジェットが必死になって逃げようとするが、数倍の大きさを持つパワーダグオンからは逃れられない。そして死刑執行人のごとく、無情なドリルがグリーン・ガジェットを貫いた。

有栖LP2000

「うーん、惜しかったなあ。やっぱり勇者は強いね!」

「こっちは冷や冷やものだったけどな……。」

勝った側の台詞ではないと思うが、「強欲な壺」や「死者蘇生」「融合回収」が来なければ確実に負けていたからなあ。正直怖かった。冷や汗がいまだに止まらないな。

さて、デュエルディスクのデッキを入れ替えて、ん?ふと、手に水滴がついた……まさか。

「やばいノーネ!雨が降り出したノーネ!！」

「翔、すまないが家に帰って窓を閉めてきてくれ！」

「え、閉めてなかったの!？」

兄さんの言葉に少し呆然とする。家は留守にしているから泥棒が入り放題だろ!？」

「夏で窓を閉めっぱなしにする奴はいないだろ？」

「ちよ、兄さん!・・・わかった。行ってくる。」

突っ込みたかったが、そうしている場合ではないので急いで家に向かった。

・・・

(雨が強くなってきましたね。)

「ああ。帰ったら速攻で風呂に入らないと風邪を引くのは確実だな。ん？」

ふと、前にコートを被った人が俺の前に立ち塞がっていた。なーんか嫌な予感。

「丸藤 翔。ここが貴様の死に場所だ！」

コートを剥ぎ、宙を舞う。するとデュエルディスクを装着した「不意打ち又佐」が現れた。

ちよ、いきなりかよ!せめて「鍵をよこしたら命は助けてやる」って台詞はないのか!？」

仕方ない。速攻で形をつける！！

「決闘！！」

「私の先攻、ドロー！私は手札から「ダーク・グレファア」を召喚
！」

ダーク・グレファア ATK1700

女の尻を追っかけて闇にまで落ちた戦士が現れる。
で、いいんだよな？設定的には。

「そして「ダーク・グレファア」の効果発動！手札の「不死武士」
を墓地へ送り、デッキから「ネクロ・ガードナー」を墓地へ送る。」

不死武士だと！？結構マイナーなモンスターを使うな。「不死武士
シンクロ」ならかなり厄介だが・・・生憎この時代にはあまりシン
クロモンスターはいないはずだ！
しかし、「ネクロ・ガードナー」がかなり厄介だな。

「そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

不意打ち又佐 手札2 場 モンスター1 伏せ2

ダーク・グレファア ATK1700

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「サイバー・ドラゴン」を特
殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

竜を模した機械竜が現れる。どちらかと言えば俺より兄さんの十八番と言った方が正解だろう。

「ふん、甘いな。「サイバー・ドラゴン」の特殊召喚時にセットカードオープン、罨カード「奈落の落とし穴」を発動！攻撃力1500以上のモンスターが召喚・特殊召喚に成功した時に発動でき、そのモンスターを破壊し、ゲームから除外する！」

サイバー・ドラゴン。ボツシュート！

「なら手札から「久遠の魔術師 ミラ」を召喚！」

久遠の魔術師 ミラ ATK1800

「光霊使い ライナ」を成長させたような感じといえば分かりやすいだろうか？ただし、寡黙？冷静？うーん、わからん。まあ、知的な感じとっておこう。

「そして「久遠の魔術師 ミラ」の効果発動！このモンスターの召喚に成功した時、相手の場のセットカードを1枚めくることが出来る！俺は伏せカードを確認する。」

ミラが手に持っている杖を掲げると、セットカードがめくられる。

「攻撃の無力化」か。

無難といえば無難だな。が、雨が降っている今では少し厄介だ。

「さらに、手札から「ガーディアン・エアトス」を特殊召喚する！頼む、アイリス！」

「はい！」

雨を吹き飛ばすほどの旋風が吹き荒れ、場を支配する。
そしてその風の中から民族衣装と鳥をモチーフにした兜を装備した
金髪の女性が現れる。ん、今回は最初から刀を腰に装備して現れた
ようだ。

ガーディアン・エアトス ATK2500

「なっ！まさか「サイバー・ドラゴン」は！？」

「そう、囷だ。（と言っても、「激流葬」じゃなくて本当に助かった。）」

「バトル！「ガーディアン・エアトス」で「ダーク・グレファア」に攻撃！」

「はあ！」

気合の入った声と共に、アイリスが刀を抜く。
するとその刀から波動が飛び出し、ダーク・グレファアに向かって
飛んでいく。

「攻撃宣言時にセットカードオープン、カウンター罠「攻撃の無力
化」を発動！攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる。」

グレファアの前に歪みが現れ、それが波動を飲み込んだ。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

翔 手札2 場 モンスター2 伏せ1

久遠の魔術師 ミラ ATK1800
ガーディアン・エアトス ATK2500

「私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドロウする。そして手札から魔法カード「増援」を発動！デッキからレベル4以下の戦士族モンスター1枚を手札に加える。私はデッキからレベル3の私自身である「不意打ち又座」を手札に加える。」

不意打ち又佐は装備魔法を装備すると2回連続で攻撃できるモンスターだ。意外と厄介だから侮れないな。

「そして「不意打ち又佐」を召喚するが、私自身が場に出よう。」

不意打ち又佐 ATK1200

「さらに手札から装備魔法「妖刀 村正」を発動し、「不意打ち又佐」である私に装備！」

妖刀 村正 装備魔法カード

効果：このカードは閻属性戦士族のみ装備する事ができる。装備モンスターの攻撃力は700ポイントアップし、このカードを装備したモンスターの攻撃を受けたプレイヤーはお互いのエンドフェイズ毎に100ポイントのダメージを受け、手札をランダムに1枚捨てる。

まるで血によって塗り固められたかのごとく、怪しげな紅の輝きを見せた刀が「不意打ち又佐」に装備される。

不意打ち又佐 ATK1200 1900

「そして、これが貴様を殺すための切り札だ！手札から魔法カード
「闇討ち」を発動！」

闇討ち 魔法カード

効果：自分の場に「不意打ち又佐」または「忍者」と名のつくモンスターが存在する時、発動することが出来る。「不意打ち又佐」または「忍者」と名のつくモンスター1枚を選択する。このターン、選択したモンスターは直接攻撃を行うことが出来る。選択されなかったモンスターはこのターン、攻撃宣言を行うことが出来ない。

「このカードは自分の場に「不意打ち又佐」が存在する時、発動できる。このターン「不意打ち又佐」1体しか攻撃出来ないが、その代わりダイレクトアタックすることが出来る！」

かなり強いな・・・装備ビートに特化したデッキでなら1KILLも可能じゃないのか？

相手に防御手段がない場合の話だが。

「バトル！「不意打ち又佐」でダイレクトアタック！」

「ッー！」

強烈な悪感に襲われ、思わず後ろに下がった。

「痛！！！」

翔LP4000 2100

いつの間に切られたのかは分からないが、左肩を薄く切られていた。

危ない、もう少し深かったら確実に動脈を切られており・・・死んでいただろう。

無論、傷口から出血はしているが。

「翔、大丈夫ですか!？」

「ああ。思ったよりは深くない。・・・大丈夫だ。」

アイリスが心配そうな顔をして俺を見る。

しかしこの痛みと言い、出血と言い・・・闇のゲームより性質が悪い。

アレは精神的なものだけだが、この傷は本物だ。もしもLPがなくなる前に死んでしまっても、この決闘の敗者となるだろう。てか、人生的な意味でエンド宣言がされてしまう!

「ふふふ。だが、「不意打ち又佐」は装備魔法を装備している時、もう1度攻撃することが出来る。食らえ!」

体を左側に捻り、何とか避けようとする。

「あだっ!」

っ、今度は右脇腹を切られた!

翔LP2100 200

「翔!」

アイリスから悲痛な声が届く。

悪いが、今回ばかりは大当たりだ。・・・顔から脂汗が流れる。

「おや、意外と反射神経はいいようだな。せつかく苦痛でもがき苦しむ姿を見ようと思ったものを。」

「悪趣味・・・だな。」

右脇腹を抑えつつ、何とか声を出す。大声は傷に響くから結構きついな。

「私は「ダーク・グレファア」を守備表示に変更し、ターンエンド！そして地獄が始まるぞ？貴様にとってのなあ！！」

「何？・・・くう！」

何だこれは！？傷口が焼けるように痛くなってきた。おまけに出血がやけに激しくなってきたというサービス付だな。

「くくく、「妖刀 村正」の効果だ。このカードを装備したモンスターの攻撃でダメージを受けると、相手はお互いのターンの終了時に100ポイントのダメージを食らい、手札をランダムに1枚捨てなければならぬ。」

翔LP200 100

又佐の声に反応し、手札のカードが強制的に捨てられた。な、「死者蘇生」が！！

しかも出血が酷く、視界がぶれて来やがった・・・くそっ！！

「丸藤 翔。次のターンで貴様は終わりだ。死という敗北だな！」

フィールド32：パーティと刺客（後書き）

今回は描写の方で時間が掛かってしまいました。
段取りだけは31日に終わっていたのですが・・・。

さて、次から結構本編と異なる部分が出てきますがご了承ください。
今頃ですが。orz

フィールド33：居場所（前書き）

前回の話からの二部構成になっています。

後半が少しグダグダかつ、くどくなり過ぎたかなと反省しています。しかし・・・こういうのを時たま書きたくなるのは作者の性分なので広い心で許してください。

個人的には力が強いからって心までそうとは限らないので・・・むしろそれを支える存在を大きく書きたいのがちよつとした悩みになっています。

フィールド33：居場所

「俺のター・・・つく！」

血が流れすぎてしまい、力が入らない。おかげで体がふらっと倒れそうになる。

ついでに頭の中がボヤツとするな・・・不味い。例えバーンダメージがなかったとしてもこのターン中に片をつけなければ意識の方が持たないだろう。

・・・

私は不安になる。

かつて言った「翔がどこかへ行ってしまうんじゃないだろうか。」という言葉は、翔が死ぬということを予言していたの难道だろうか。そして、それが今なのかもしれない。

その恐怖を、悟られないためにも必死になって私は堪える。

しかしその努力も無駄だった。自然と涙が溢れ、目がかすんでしまう。そして震えて、体がすくんでしまう。

怖い。翔が死んでしまうことが。いなくなってしまうことが。

「くくくくくつ。」

そんな私を見て、又佐は笑い出す。まるで酷く滑稽な物を見たかのように。

「な、何がおかしいのですか!!！」

その笑い声に私は怒鳴り声で返した。

「いや、人ならざる天使が人のために涙を流すという面白い物を見れたからな。」

笑いを止めた又佐は同時ににやりと不気味で愉快そうな顔をする。まるでいじめっ子が苛められっ子の大切な物を奪い、それを手のひらで遊んでいるかのような表情だった。

「悔しかろう？怖かろう？いくら力があっても、自分を守る術はあつても。本当に守りたい者を救えないのだからなあ！！」

その言葉に私の心は悲痛な叫び声を上げる。

そう、今の又佐の言う通りだった。守護者という名を持ちながら本当に救いたい人を守れない。無力な自分が今、ここにいる。そんな自分に腹立たしさを感じると共に、今までの自分がいかに滑稽だったかを思い知らされた。そして心の中に闇が生まれ、私に囁きかけてくる。

自分がいつも翔の傍にいたのは、本当は自分自身を必要としてほしかったのではないだろうか？

翔の布団に潜り、抱きしめて寝ていたのは自分の不安を消すために利用しただけではないのだろうか？

ホントウハシヨウノコトヲアイシテハオラス、ジブンニトツテツゴウノイidouグトオモツテイルノデハナイノダロウカ？

不安が、恐怖が、自分の醜さが私の心を犯す。それと同時に自分から崩壊していくのが手に取るように分かる。そして私の体から徐々に温もりが失われていった。

寒い、怖い……。たす……。けて……。しょ……。う……。

・・・

アイリスの様子がおかしい。まるで雨に打たれ、震えているよう子犬のように何かに怯えているように感じる。

「アイリス、どうした？アイリスッ！！」

呼びかけているものの、一切返事をしない。
なら、させるまでか。

「ドロー！」

よし、いいカードを引いた。

それに血も抜けすぎたから逆に頭がすつきりしたし、体も何とか根性で動かせる。といっても、これも少ししかもたないのだろう。ガンの末期患者が最後まで意識が戻るとい話があるように、この正常さも俺がここで終焉を迎えるという意味なのだろう。なら、派手に散るまでだ！！

「俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドローする！」

これは・・・俺にシンクロ召喚を行えというのか！？
少し戸惑ってしまったが、死に直面しているのだ。四の五の言っていられないだろう。

それに、俺はここで死んでしまうのかもしれない。その後のことなんて知ったことか！！

「俺はセットカードオープン、装備魔法「レインボー・ヴェール」を「ガーディアン・エアトス」に装備！」

やさしい光がアイリスの翼に宿る。
まるで宿主の心を救済するかのように。

・・・

やさしい輝きが私の心を照らす。

その光が私の意識を再び呼び起こした。っ、翔は！？
不安に思った私は後ろを向く。

「大丈夫か。アイリス？」

そんな私を心配してくれたかのように翔は声を掛けてくれた。
嬉しさと同時に、私の中に醜さが生まれた。

ドウセシヨウニシンパイシテホシカッタノダロウ？

その言葉を必死に押し込みつつ、私は返事をする。

「はい、大丈夫です！」

血を流しても自分を心配してくれるマスターと自分の不安に取り込まれてしまった守護者・・・これでは滑稽でしかない。

しかし、今だけはそれを考えず翔を守ることだけを考えよう。

・・・

「そして「ガーディアン・エアトス」の効果発動！自身に装備されている装備魔法1枚を墓地へ送り、相手の墓地にあるモンスターカードを3枚まで除外することができる！俺はそっちの墓地の「不死

「武士」と「ネクロ・ガードナー」、それ以外にモンスターカードがあつた場合、適当に1枚頼む。」

「なら、チェインして墓地の「ネクロ・ガードナー」の効果を発動！このカードをゲームから除外し、相手の攻撃を1度だけ無効にすることができる！それと私の墓地には他にモンスターカードが存在しない！よって「不死武士」のみ対象となる！」

「ちい、だが「不死武士」は除外されるから攻撃力が500ポイントアップ！」

ガードイアン・エアトス ATK2500 3000

「さらに墓地の「死者蘇生」をゲームから除外して、手札から「マジック・ストライカー」を特殊召喚！」

マジック・ストライカー ATK600

ハンマーを持った子供の戦士が現れる。特殊召喚能力、直接攻撃が可能、戦闘ダメージを0にするという3つの優れた能力を持っており、使い勝手は恐ろしく良い。

「そして手札から「エフェクト・ヴェーラー」を召喚！」

エフェクト・ヴェーラー ATK0

白い服を着ており、また背中に布らしき物を羽織った青髪の女性が現れる。ちなみにTF5では彼女がメインのパックがあるらしい。やったね！

「ふん、そんな軟弱なモンスターをいくら召喚した所で何になる？」

俺の行為を鼻で笑う又佐。

確かにこの時代のカードだけだったらそうかもしれないが・・・今、俺は自らの枷を解く！

「ふふふ、これが勝利の鍵だ！レベル3「マジック・ストライカー」にレベル1チューナー「エフェクト・ヴェーラー」をチューニング
！」

「シ、シンクロ召喚！？翔、それは危険」

俺の行為に気づき、止めようとするアイリス。だが、もう遅い！

そしてエフェクト・ヴェーラーが光の輪になり、1つの輪となつてマジック・ストライカーを包み込む。

「悪いな、アイリス。もう手段を選べる状態じゃないんだ。シンクロ召喚、力が全てをなぎ払う！その腕となれ！！アームズ・エイド
ッ！！！」

アームズ・エイド ATK1800

ゴツイ腕が現れる。ア　ク？だと思つた人は今すぐ来い。ちよつと話そうか？

「シンクロ召喚だとッ！？」

又佐が驚きの声を上げる。この世界の住人なら皆そうだろうなあ。だが、今はそんなことに構ってはいられない。

「そして「アームズ・エイド」の効果発動！1ターンに1度、場のモンスターに装備することが出来る。俺は「アームズ・エイド」を「ガーディアン・エアトス」に装備！そして「アームズ・エイド」を装備したモンスターは攻撃力が1000ポイントアップする！」

ガーディアン・エアトス ATK3000 4000

アイリスの右腕にアームズ・エイドが装備される。これでキャラが変わったら怖かったが、そうならなくて良かった。

「さらに手札から装備魔法「魔道師の力」を「ガーディアン・エアトス」に装備！このカードは自分の魔法・罠ゾーンにあるカードの数×500ポイント分、装備モンスターの攻撃力と守備力をアップさせるカードだ！「アームズ・エイド」も装備魔法扱いとなっているため、俺の場にはこのカードを含めて2枚ある！よって攻撃力が1000ポイントアップ！」

ガーディアン・エアトス ATK4000 5000

「バトル！「久遠の魔術師 ミラ」で「ダーク・グレフアー」に攻撃！」

「馬鹿め、いくらモンスターの攻撃力を上げようと・・・何!？」

ミラが杖を掲げ閃光を放とうとするが、突如として霧が発生し、ミラの攻撃が防がれる。

「馬鹿な！何故「ネクロ・ガードナー」の効果は勝手に!？」

「「ネクロ・ガードナー」の効果を先に発動した場合、一番最初で

発生する戦闘を必ず無効にしなければならぬ！よってミラの攻撃に反応し、「ネクロ・ガードナー」の守りは消える！」

今しかない！このチャンスで・・・片をつける！！

「バトル！「ガーディアン・エアトス」で「不意打ち又佐」に攻撃！ゴツド・ハンド・クラッシャー！！」

「ふん！！」

又佐が先に仕掛け、剣を振るうがアイリスの右腕に装備されているアームズ・エイドがそれを掴む。

ギリギリギリッ！

僅かにだが又佐が押ししており、アームズ・エイドごとアイリスを切るようにする。

「怯えろ、竦め！自らの恐怖に食われるがいい！！」

「うっ……。」

駄目だ。力押しでは全体重をかけて切り下ろそうとする又佐に分がある。

何か手は・・・そっだ！

「アイリス、奴の顎を狙え！」

「はいっ！！」

俺に反応し、アイリスが左手で又佐の顎を思いっきり殴りつける。
顎は人間の、いや生物の急所である場合が多い。精霊もその類なら
。。。
俺の予感的中したらしく、又佐は大きくのけぞりつつ2、3歩後
ろへ下がった。

「はあ!!」

そしてアイリスがその隙を狙い、アームズ・エイドで相手を捕獲し
又佐を握りつぶし始めた。ここだけ聞くとG ンだよなあ。と思う
俺は何なんだろ。

又佐LP4000 100

「くうううう。。。だが、私のLPはまだ尽きていない。そして「
妖刀 村正」は1度効果を発揮したら墓地へ送られても永続的に効
果を発動する。貴様の負けだ!!」

「甘いつ!「アームズ・エイド」のモンスター効果。このカードを
装備したモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、そのモ
ンスターの攻撃力分だけ相手ライフにダメージを与える!!」

「何イ!!ガア!!」

段々、又佐が握りつぶされてまさに虫の息になっていた。
間違っても対人戦でこれは使わない方がいいな。うん。

「ヒートッ、エンドッ!!」

「馬鹿なあっ!!!!」

又佐LP1000

グチャツ!!という生々しい音と共に又佐は握りつぶされた。辺りは血まみれ・・・又佐ってカ ル君フラグだったのか？と、それはさておき

「アイリス、大丈夫か？」

返り血を浴びたアームズ・エイドを装備して微動だにしないアイリス。

ちなみにアイリス自身には返り血は付いていなかったのだが、こりや・・・トラウマものだよなあ。

「・・・。あ、はい。大丈夫です。」

少しブーツとした後に気が付いたらしく、返事をした。

いきなり「嫌アー!!」って叫ばれても危なかったが、こっぴどってブーツとしているのもなんか怖いな。

「そうか。あれ？」

「翔!」

急に力が抜け、その場に倒れそうになるが寸前でアイリスが抱きとめ、事なきを得る。

「無茶のしすぎです。」

「だな。」

アイリスの苦笑に俺も力なく笑う。
その後、俺はアイリスに右肩を支えてもらいながら帰路に付くことになった。

が、道中アイリスの顔が俯いている。悩み事でもあるのか？

「なあ、アイリス。」

「ど、どうしたんですか。翔？」

俺の声に、はつとして顔を上げながら答えるアイリス。

いつもなら「マスター」って言うはずだが・・・何か悩んでいるな。

「何か悩んでいるのか？」

「い、いえ・・・何でも。」

「嘘付け。いつもなら俺の事を「マスター」って呼んでいるけど、今さっきは「翔」って呼んでいたぞ？」

「あ!?!？」

俺の突っ込みにアイリスは思わず声を上げた。

やっぱりな・・・うん。これでも一応は相棒ですから。

「まあ、話したくなかったら話さなくてもいいけどな。」

「え?」

俺の言葉に、思わずアイリスが肩透かしを食らった表情になった。

中々レアだな、これ。脳内保存脳内保存っと。

「き、聞かないんですか？」

ちよつと驚きながらも、俺に尋ねてくる。

「まあ、誰にだって1つや2つ隠しておきたい事や後ろめたい事があるからなあ。伊達に相棒をやっていないって。」

少し自傷気味になりながらも、アイリスに話しかける。

転生の話は結構やばいからなあ。下手すると世界を崩しかねん。てか、この世界の歴史ってちまちまっとだが、結構変わっているよなあ。

と、感傷に浸っているとアイリスが必死な顔になりつつも、感情を抑えながら途絶え途絶えに喋ろうとしているが、やはり感情を抑えることは出来ないらしく、涙ながらに話した。

「こ、怖かった。私が・・・翔の事を・・・道具としてしか・・・見ていないんじゃないかって。自分にとって・・・都合のいい・・・者としてしか・・・。必死になって・・・否定しよう・・・って思った。けど・・・否定し切れなかった。・・・心の底で・・・そう・・・思っていたのかも・・・しれないから。」

「そうか。」

「ごめん・・・なさい・・・。」

涙声になりつつも、アイリスは必死に謝っている。

そこで俺はアイリスの肩から右腕を外し、アイリスの正面に行った。

「アイリス。」

俺の声にビクツと肩を上げながらも顔を俯かせているアイリス。
・・・兜が邪魔で顔が見えないな。そう思い左手で兜を持ち、ちよ
つと退かせる。

意外と重いから傷に響くなあ。他人事のように思いつつも、右手を
前へ突き出す。

「ありがとうな。」

右手でアイリスの頭を撫でつつ笑いかける。

「え？」

意外な声を出して顔を上げるアイリス。

「何だ？叱られるとでも思ったのか？」

「だって・・・私は。」

目を合わせづらいのだろうか、再び顔を俯かせる。
本当は上げてほしかったのだが・・・まあ、いいか。

「こうやって話してくれたじゃないか。それにさ。」

一旦区切り、息を呑む。

今度は俺の番だな。

「俺だって不安だった。アイリスが俺みたいな奴のパートナーにな
って後悔しているんじゃないかって。」

「そんなこと……。」

「無い、とは言えないんだよな。これが。まあ、聞いてくれ。」

アイリスの頭を撫でつつ、ぽつぽつと語った。

「俺ってさ、不器用だから人より倍以上時間が掛かってばかりだった。どんな時だってそうだ。いつも落ち込んでいた俺をお前は励まし、支えてくれた。嬉しかったよ。」

かつての苦い記憶が鮮明に甦る。同級生の中でいつもビリだった事を。

まあ、転生前からの不器用さとは言え……アレは本当に死にたくなったな。そのせいでよくいじめにあっていたし。

そんな時、アイリスはいつも支えてくれた。もし、支えてくれなかったら俺は駄目になっていたのかもしれない。

「それは……。」

「ま、いつも支えてくれたと思ってているからこそかな。「こんな駄目な俺をいつかは見限るんじゃないかって」な。」

「……。」

ついに無言になったか。だが、こればかりはちゃんと話さないとな。

「だから俺は……自分を隠すことにした。泣く事を。弱みを見せる事を。こうやって明るくしていれば何時までもお前と共にいられるって思ったからな。」

と言つても、結構見せてきた気がするが・・・まあ、いいや。気にしないでおこう。

「馬鹿ですね。」

ふと、アイリスが涙を流しながら俺を見つめる。

「ああ。といつても、昔からだけだな。」

ため息をつきながら俺もアイリスの顔を見つめる。
そして2つの影が近づき、1つになろうとした時・・・

ぐうぐ

俺の腹から思いっきり音が鳴った。なんと言う空気ブレイカー。これは死ねる。

そんな俺を見てくすつと笑うアイリス。笑いたきゃ笑え！こんちくしょう！！（涙

「なら、早く家に帰って料理を作りますね。」

「そう言えば血を流しすぎたからなあ・・・そのせいかもしれない。」

だとしたら、「孔明の罠」と言うべきか？いや「おのれデイドツ！」か「ゴゴムの仕業か！？」といった方がいいかもな。

「ふふふ、なら帰りましょつか。」

「そうだな。じゃ、また肩を頼むわ。」

「はい。」

俺は再びアイリスに肩を抱いてもらって、帰路に付く。
ふと、アイリスが呟いた。

「やっぱり翔は温かいですね。」

「ん、そうか？むしろ雨に濡れているし血も出すぎているから体温は結構下がっていると思うが？」

「いえ、体温の話じゃなくて心の問題です。」

「心？」

「はい。」

アイリスは上機嫌になって俺の問いに答える。
ん、原因は分からないが・・・ま、いいか。

ふと空を見上げると、今まで降っていた雨が止み雲の切れ目から太陽の光が差し込み始めていた。まるで、悲しみを終え再び明るさを取り戻したかのよう。

フィールド33：居場所（後書き）

か、完全に失血フラグを忘れていた・・・。

といえる最後でした。結局大丈夫だったのかよ！？という突っ込みはあると思いますが、ご了承を。orz

むむむ、もう少し「人間らしさ」をうまく書ければなあ・・・。

フィールド34：娘襲来（前編）（前書き）

シナリオを考えていたら物凄く遅くなりました。

セブンスターズの面々が最悪ちょびつとしかでないかも・・・

と、今回はリクエストがあつた未来の娘が登場しますが決闘は次回になりそうです。

熱いものを急激に冷やすと壊れやすくなるのは物だけでは無いと作者は思っています。

フィールド34：娘襲来（前編）

時は大会開催の前日に戻る。

「ここ・・・どこなんだろ？」

水色のロングヘアで麦藁帽子を被っており、純白のワンピース姿をした1人の少女が街中でぽつんと呟く。背丈はレイと同じぐらいで、まだまだ子供のようだ。

手には地図があるが、完全に迷ったらしい。

きよるきよると辺りを見渡している。その動きはまるで小動物のよう。

「ん、どうしたんだい？」

たまたまそこを通りがかった三沢がその少女に声を掛ける。

ビクツと肩を震わせ、他者である三沢をも驚かせながらも少女は振り返った。

そして勇気を振り絞りながら、尋ねようとする。

「・・・あ、あの。丸藤 翔って人を知りませんか？」

・・・

そして、現在。

「っ！」

傷が痛み、ふと目が覚めてしまった。

といっても、時計は7時を指していたから十分睡眠は取れたようだ。

が、動けない。

原因は分かっている。無論、金縛りではない。

・・・アイリスが俺を抱きしめているからだ。

両手に力が入っていない様で、しっかりと抱きしめている。キツイとか痛いといった不満は一切なく、むしろやさしく感じられるのでこちらからお願いしたい物だ。

しかし、どうやってこの力加減を覚えたのが本当に気になるな。

クマの人形なら可愛げがあるんだが、「淫乱デイベア」なら泣くしかない。アレは酷かった。

まあ、そんな冗談はさておき、個人的にはちと困っている。

アイリスがこちらを向いて寝ているのは抱きしめているから、対座になるのは予測が付くだろう。そして胸が押し当てられているのは「押ししてるのよ」と思えば何とかなる。

しかしな。顔が目の前にあるのは・・・「お預け」を食らっている気分だ。

無論、自分からキスすることは何度かあったのだが、今回のように寝ているところを襲うつてのは、どうなんだろうな？むむむ。

ちなみに今のアイリスはピンク色のラインが入ったパジャマ姿だ。

流石にいつもの民族衣装を使い回すのはどうかと思っただので購入した。まあ、俺が今着ている青色のラインが入ったパジャマとのセットでだがな。背丈に関してなんだが、今の俺の身長は十代とほぼ同じと思ってくれて構わない。早めに背が伸びる努力をしていて良かったよ。アイリスも俺とほぼ同じぐらいだからサイズは問題なかった。

「えーと、昨日は・・・。」

仕方ないので昨日の事を思い出す。

家に帰った後は風呂場のタオルを持って来てお互いに拭き、アイリスは料理。俺はシャワーを浴びた。逆の方がいいのでは？と聞いたから「早めに包帯をしておいた方がいいです。それに私は大丈夫ですが、マスターは病弱ですから。」と言われたので、素直にその言葉に従った。で、ちやつちやか浴びてアイリスと交代し料理を引き継ぐ。と言っても、豚ニラの味噌炒めと味噌汁だったから後は焼いたり温めるだけだったけどな。

で、焼き終わった豚ニラと事前に炊いていたご飯を適当に盛り付け、そして今日の朝に作った味噌汁を注ぎ、シャワーを浴びてさっぱりしたアイリスと共にいただいた。

夕飯が済み、分担をして片付けと茶碗などの洗いを済ませた後にアイリスに頼んで包帯を巻いてもらった。怪我に関しては彼女の方が知識が豊富で看護し涙目の包帯テクニクだったといっておこう。さすがガーディアン。

で、後は適当に時間を潰して寝たはずなんだが……。まあ、いいや。

「しかし昨日は暴走しすぎたなあ。」

又佐との対戦を思い出す。幸いにも周りに人がいなかった良かったものの、切り札であるシンク口召喚を行ってしまった。もしも人目にはばれていたら結構やばかった。といっても伊達さんは思いつきりやっていたが・・・アレは別だ。

「死を覚悟していたとはいえ、手札を切ってしまったから今後が厳しくなりそうだ。」

何せまだ名探偵の孫や子安、42時間テレビの張本人や閻魔野との死闘が残っている。そんな中でもしも奴らがシンク口というチートな手段を用いてきたらほぼ勝ち目が無い。といっても、こちらはテ

ストをカンニングした状態であるからある意味では50:50になる条件ではあるが・・・。

「さて、そろそろ・・・ん？」

ふいにアイリスの腕が移動し、俺の首の後ろで交差する。まるで得物をがっちりと捕獲するかのよう。何か良い様で嫌な予感。

そしてアイリスが顔を突き出してこちらに近づいてくる。ちょ、近い近い！

あ・・・ま、いいか。

俺は思考を放棄し、目を閉じてアイリスの唇を堪能する。

せつかくだから俺もアイリスの背中に手を回し、抱きしめた。温かくやわらかい。柔軟剤を使っているのか？

そんな阿呆な考えがちよつと浮かぶが気にしない。まあ、俺も寝るか。

安らぎと睡魔に対しての抵抗を止め、再び眠りに付いた。

・・・

私はかつての事を思い出していた。

あれは・・・私が翔と会ってから2週間後のことでした。

「なあ、エアトス。やっぱりエアトスって何かの名前だったりするのか？」

「へ？」

翔のひょんとした質問に、私は少し戸惑った。

こういった質問をされるとは思わなかったからだ。

「えーと、エアトスっていうのは私の地方でいう里の長みたいなものです。」

「里の長？」

「マスターには話しましたっけ？ガーディアンの里の話のことは。」

「いや、それは初耳だな。」

「じゃあ、話しますね。」

コホン、と咳をついて私は翔に語りだす。

「「ガーディアン」が各種族に分かれているのはご存知ですよね。」

「ああ。「グラール」の恐竜族や「ケースト」の海竜族、「バオウ」の悪魔族や「トライス」戦士族、後は「シール」の炎族に「エルマ」と「エアトス」の天使族だったよな。」

「はい。これらの種族別でもっとも優れた者がこの名前と「ガーディアン」の責任を引き継いでいます。」

「えーと、つまり・・・そのトップがその「ガーディアン」の長であるってことか。」

「そうですね。まあ、私の「エアトス」ですと師匠がトップだったのですが。」

「ん？どうしたんだ？」

「実は行方不明なので、本当だったら次点の人がその「エアトス」の長になるはずだったのですが、師匠が書置きで「ちよつとの間留守にします。」と書いてあり、まあ、村の皆は師匠の帰りを待っていたのですが……。」

「中々帰ってこなかったんだな。」

「はい。で、弟子である私に「探してこい」と里の長から頼まれてのでこっちに来て……で、今に至るって事です。」

「なるほど。お疲れ様。」

「ありがとうございます。」

この話をしていたら何だか涙が出てきましたね。うう、弟子の私だつたら分かるってことは無いんですよ!?

「で、君自身には名前はあるのか?」

「えーと、無いですね。里でも……あの人の弟子」と言われ続けられていましたから。」

「え?」

翔が驚いた顔をしています。まあ、この世界では一般的ではないでしょうからそれは驚きますよね。

「「実力のある師匠の弟子」としてしか里の人たちから見られていませんでしたから、まあ……複雑な気分です。」

そう言っつて私は落ち込んだ。実力があり人望がある人が師匠で、その弟子となるとただの付き人やら何やらという感じでしか存在していない。師匠が有名になるのは嬉しいけど、やはりやるせない気持ちがあります。

「……。」

それを聞いて翔は黙っている。
何かを考えているみたいだ。

「よし！じゃあ、名前を考えるか。」

「え？」

いきなりのことに私は驚いた。その証拠に目をぱちくりとさせているのが自分でも分かった。

「いや、やはり名前って体を現すって言うからな。それに無いと不便だろ？」

「……。」

翔が必死になつて私に名前の重要性を解いている。
里の中では、「あの人の弟子」としか言われていなかったのでも正直驚きました。けど、私にあった名前なんて……。

「よし。思い立ったが吉日と言っし、行きますか。」

不安にしている私を他所に、翔は外へ足を運んだ。

私もはっとして、すぐに後を追う。この時は精霊状態にしているの

で見える人にしか見えません。

(どこへ向かうんですか。マスター?)

「図書館だな。餅は餅屋っていうし。」

そして歩くこと10分程度でそこその規模の図書館を発見し、中へ入りました。

この世界を始めて行く私にとっては、とてつもなく未知の世界です。いたるところに本、本、本。・・・本当に目を回しそうでした。そこからここに大量の資料が置かれています。里の人が外界に興味を持つ理由がよくわかりました。

「さて、名前系は・・・と。」

翔が隅っこにある検索用のパソコンの前に座り、検索ワードを絞りつつ探っていく。

そして絞り込まれていった中からこれと思ったものを探り、そして紙に記録していきました。どんな本なんだろう?

私は期待を胸に抱きながら翔を見守っていました。

「よし。これだけあれば何とかあるだろう。」

そう言うと、翔はメモを頼りに図書館の中をあちこち回り、色々な本を漁っていきました。しかし、人が多いですね。こうやって精霊としての視点から見るというのも何か新しい気分です。

「さて、探してみますか。」

そういつてあちこちから持ってきた本を開き、真剣な目になって1

つ1つ丁寧に調べ上げていきます。

・

・

・

気が付けば周りが薄暗くなり、人がめっきり減っていました。恐らく閉館時間間際になったようです。しかし翔は今だと本と格闘しており、そのことに気が付いていませんので、ちよつと注意します。

（マスター。もう閉館時間みたいですよ？）

「え、あ・・・本当だ。」

翔が当たりを見渡して納得する。そして未だに読み終わっていない本を借りるための手続きを取り、自宅へと戻りました。

自宅には誰もいなかった（翔いわく、この頃から亮さんは旅行に行っており、私と一緒に住むことが日常になっていました。）ので、電気をつけて翔は椅子に座り、再び本との格闘を再開したので、
・
・しかし、一向にいい名前が思い浮かばなかったようでした。時間が経つにつれて翔の目はやつれ今にも倒れそうでしたが、必死になって探す姿に私は圧倒されており、ただじつと待っていました。そして借りていた本もこれが最後になり、次の朝日が窓から差し込んでくる頃、急に翔が倒れました。焦った私は後悔の念を抱きながらも、翔の様子を見ました。

「アイ・・・リス。」

「へ？」

翔の呟きに私はただ呆然としていました。そして静かな寝息がこの部屋を包み込む。

ふと、翔が今まで調べていた本を見てみると「花言葉 完全版」というタイトルで「アイリス」というアヤメ科の花についての写真と説明が書かれている記事が大きく開かれています。

「アイリス」 アヤメ科

花言葉は「良き便り」「優しい心」「あなたを大切にします」

別段、翔に対して何か特別な事をした覚えもないのに、そんな私を何でここまで必死になってくれたのか？

心の中で疑問が生じたが、それと同時に胸の中で熱い何かか混み上げて来ました。そしてそれは臉も熱くさせ、私の目から1粒の水滴を流させました。私は必死になってそれを止めようとしますが、それは留まる事を知らずにどんどん溢れ出てきました。

私自身、何故こうなったのかその時はわかりませんでした。

そしてそれが収まる頃には、私にも睡魔が襲ってきました。普通、精霊は睡眠や食事などは必要としないのですが・・・この世界になつて初めてそうした欲求に駆られました。ので、翔を抱え私も一緒に布団で寝ることにしたのです。後からこの行動に私自身驚きましたが、その時は何も考えていませんでしたね。

・・・

懐かしい夢の途中でしたが、ふと私の目が覚めました。！？

・・・ボツ！私の頬に熱が込み上げてくるのが分かりました。

今の状況は私が翔の首に手を伸ばし、また翔も私を抱きしめています。

それだけならよかったです……

(え、えええ!?)

どうやら私の方から翔にキスしているみたいです。どうしてこうなった……orz

とりあえず、名残惜しいですが翔の口から一旦離れつつ、手を翔の首から外します。

「懐かしい思い出ですね……。」

布団の中で寝転がりながら、私は翔の頬をちょんちょんと軽く触ります。

寝ているせいか完全に無防備な状態を私に曝け出してしまっている翔。今、彼はどんな夢を見ているのか少し気になります。昨日の今日ですから、悪夢を見なければ良いのですが……。

里を出る前の自分だったら呆れそうな気がします。今の自分だと完全に肯定するでしょう。恐らく私は弱くなっただのかもしれないですが、それと引き換えにとても大切なモノを得たと私は確信しています。

……

気がつけば俺は、血の池の中にいた。夢のはずだが、なぜかしらそうでないと俺の直感が告げている。

(ここはどこだ?)

辺りを見渡す。・・・その瞬間、俺は吐き気に襲われる。

そう、人だったものがそこら中にばら撒かれていたのである。

脳、目、指、内臓、手足、そして頭だったもの・・・。肉の塊が1つの山を作っており、血が池を作っていた。それに蛆や八工が沸き、悪臭と不気味さを一層引き立てていた。

ゾツとしながらも、俺は無我夢中で血の池から出て、その肉の山を駆け上がった。足の裏側から嫌な感触が絶えず背中に襲い掛かるが、何とか無視して突き進む。何故そうしたのかはわからない。ただ、その頂上に何かあるという予感が俺を突き動かしていた。そして、そこにあつたものは・・・。

何かを必死になって探す1人のガーディアン・エアトスらしき姿があつた。そして彼女の瞳は・・・空色。

「アイ・・・リス？」

ふと、彼女の名前を口にする。そんなはずは無い。まるで刃物のように鋭い銀色の髪に、闇を思わせる黒き翼。そして血に塗られた右手の刀と民族衣装。・・・だが、瞳の色だけは彼女と同じだ。

その声に反応し、彼女が俺に気づいたようだ。そして彼女の口がまるで半月のように裂かれ、一言だけ呟く。

「みいつけた。」

そして彼女はふらつきながらも徐々に近づいてくる。

彼女から殺気を感じた俺はとりあえず逃げようとするが・・・肉の山から腕が数本生え、俺の足を掴んで動けなくする。必死に振りほどこうとするが、掴む力が強くてまったく動けない。蜘蛛の糸に引

つかかった蝶の気分だ。ただし蝶は男だが。

「さよおならっ!!!」

そして彼女は刀を高く掲げ、一気に振り下す。

「居眠り小僧」。完！

・・・だと思われたが、一陣の風がこの地獄とも呼べる場所を全て吹き飛ばした。

アイリスと同じ目をした女性も、今まで足を掴んでいた腕と肉の山も、そして血の池もすべてが風と共に消え去っていく。

そして風景が一変し、雲ひとつ無い青空の下の原っぱのど真ん中に立たされていた。

何か懐かしい心情になり、不思議と落ち着くことが出来た。時たま聞こえる風の音がやさしいメロディを奏でている。

誰もいないのでちょっと寝転がってみた。

日光の暖かさと風の心地よさに心が安らぐ。自然と目が閉じ、その安らぎに身を任せて俺は意識を手放した。

・・・

そして目が覚める。するとアイリスが興味深々に俺を見つめていた。どうやら俺が2度寝している間に起きていたようだ。

「おはよう。アイリス。」

「おはようございます。マスター。」

俺はアイリスの背中から手を離しつつ時計を見る。9時か。流石に寝すぎたな。

ふと、アイリスを見ると少し残念そうにしているが仕方ない。このまま寝るのは勿体無いからな。そして体を起こして立ち上がるうとすると、アイリスが俺を抱きしめるようにして背中に抱きついてきた。

トクンツ、トクンツ

体が密着していることでアイリスの心臓の音がはっきりと感じられる。

その音と共に自分の頬が熱を帯びているのがわかった。何っーか、安心できるんだが聞いているほうが恥ずかしいってか照れくさいよ。うな。まあ、そんな感じだ。

「翔。私に名前をつけてくれた時の事を覚えていますか？」

「え、ああ。あの時は徹夜で本に目を通してぶっ倒れたなあ。」

漫画みたいだろ？しかし現実なのよね。

「ええ。そして起きた所を私が説教しましたね。」

クスクスツとアイリスは笑う。

まあ、俺からすればいきなりだったから驚いたがいい思い出だ。

「だったな。まあ、俺からすれば俺と一緒にアイリスが寝ていたことのほうが驚いたが。」

流石にアレは焦った。まさか俺が意識が無いうちに何かやったのは？と思い、内心汗だくになりつつ原因を探っていったっけ。

「翔。」

アイリスがやさしく俺を抱きしめる。

「私が「何故、私にアイリスという名前をつけたのか？」と聞いたときに言ってくれたあの言葉をもう1度言ってくれませんか？」

「え!？」

アレを言えと!？当時は勢いで言ったけど、今となっては恥ずかしいんだがなあ。

しかし、アイリスはノリノリで待っている。・・・しゃあない。言いますか。

当時の事を思い出し頬にまた熱が込み上げてくるのを必死に抑えつつ、口を開いた。

「そうやって怒ってくれるのも、俺を心配してくれているからだろ？そうでなければ他人である俺に対して一々説教をしたりはしないはずだ。そして、その心配は相手を思いやっているからこそすることができ、その思いやりはやさしさから成り立っていると俺は思っている。君は当たり前だと思っているが、そのやさしさを当たり前と思えているからこそ俺は大切にしたい。君自身を。そしてその優しい心を。・・・だったよな？」

「はい。と言っても・・・だったよな？は、ありませんでしたけどね」

はあーっと深いため息をつきながら、肩を降ろす。

正直、口説き文句にしか聞こえない。もしも寝不足でテンションがハイじゃなかったら、確実にこんな言葉は言っていないだろう。臭すぎてもう言いたくない。(涙)

しかしアイリスの方はまんざらじゃない様子だ。
うおーっ！！俺の黒歴史を誰か消してくれ！！！！

俺が酷い後悔に晒されている時、突然チャイムが鳴った。一応念のためにアイリスを精霊化させておきつつ、俺は急いでドアを開ける。するとそこには三沢と見知らぬ少女がいた。・・・三沢エとりあえず俺は三沢の肩をポンツと叩き、ささやいた。

「三沢、悪いことは言わないからおとなしく警察に捕まれ。」

「ま、待て！これには事情が！！」

三沢が俺の言葉に動揺していると、少女が俺の顔をじっと見つめている。

「で、君は？」

そんな少女に俺は声を掛けた。するとビクツと肩を浮き上がらせて驚きつつもおどおどした声で喋りだした。

「ま、丸藤・・・しよ、翔さん・・・ですよね？」

「ああ。そうだけど？」

俺の答えに少女の顔がぱあっと輝いた。どうしたんだ。一体？
レイみたいなファンって事は無いと思うけど・・・どわっ！
俺が少女について考えていると、当の本人がいきなり飛び掛って抱きついてきた。

「初めまして、お父さん!!」

「はい!?!」「な、何ー!?!」(えええーっ!!)

その一言で俺達は混乱の極みに達した。
ちなみに右から俺、三沢、アイリスだ。

...

そして茶の間に三沢と少女を移動させ、用件を聞こうとした時三沢から「流石にパジャマは不味いだろ」という指摘を受けたので、俺は1度自室へと戻った。

「しかし、見知らぬ少女から未来のお父さん宣言か……。どうしてこうなった。」

ちゃっちゃと着替えつつも、頭痛を何とか抑える。

俺は今年で16歳。そして少女はおよそレイと同じ位の年頃だとすれば10歳程度だと思われる。……。5歳の時に?いやいや、そんなことは無いだろう。

(な、何か凄いことになりましたね。)

アイリスもどうやら混乱しているみたいだ。ちなみに既に着替え終わっている。

「ああ。まあ、勘違いだといんだけど……。」

(そうですね。)

ちよつと昔の事を思い出す。そういえば女性の先生に対してお母さんって呼んだことがあったっけ？懐かしいなあ。恐らくはそんな類だろ。

そして俺は腹を括りつつも、茶の間へと移動し少女に直面するように座る。アイリスも俺の隣へ座った。が、精霊状態なので恐らく見えないただろう。

「待たせてゴメンな。」

「いえ、このくらいなら大丈夫です。」

俺の言葉にさも当然という感じで少女が答える。そんな光景に少女の隣にいた三沢が口を開いた。

「なあ、翔。流石に俺は席を外した方がいいか？」

「いや、何かの縁だから別に構わない……てか、三沢はどうしてこの娘をここへ？」

「ああ。この少女が地図を片手にそわそわしていたから声を掛けてみたんだ。すると翔を知っていないか？と尋ねられたから俺が案内したんだ。」

これが兄さんや変態じゃなくて良かったよ。と、それは置いて・・・

「で、何で俺の家の場所を知っているんだ？確か教えていないはずだが。」

「ああ。カイザーに連絡して教えてもらった。」

なるほど。それなら合点がいくな。さて、本題に入ろうか。
俺は少女の眼をしつかり見つめ、口を開く。

「君は俺の事をお父さんと呼んだが・・・君の名前は？」

「私の名前は丸藤 電です。」

少女がにっこりと微笑みつつ、自己紹介する。
電？・・・氷関係かな。

「で、電ちゃんが未来の俺の娘さんだとして・・・お母さんは誰なんだ？」

(ドキドキ)

緊張しつつも俺は電と名乗る少女に尋ねる。さて、オープン・ザ・
プライスの時間だ！

「私のお母さんは「丸藤 明日香」だったから・・・。明日香さん
ですね。」

エターナル・フォース・ブリザード！！

電ちゃんの言葉で、一瞬にして場が凍りついた。

ざわ・・・ざわ・・・

俺の頭から危険信号が感知される。もちろん発信源は隣からだ。
アイリス。頼むから刃物を研ぐのはやめてくれ！！

(ふふふ・・・大丈夫ですよ。ええ。私は大丈夫ですよ。)

いかん。アイリスがいい感じに壊れてやがる。
すると三沢からも殺気が飛んできた。

「翔。後から屋上な。」

三沢。お前もか。いい笑顔になっているじゃないか。
凍りついた部屋の中、俺は自らの心の中で遺書を書いた。

フィールド34：娘襲来（前編）（後書き）

アップダウンが激しい1話になりました。

本来ならイチャラブだけで済ませるはずだったんですが・・・

フィールド35：娘襲来（後編）（前書き）

今回は未来の娘である雷との対決です。

・・・使ったことの無いデッキになると書き辛いから困りますor

z

フィールド35：娘襲来（後編）

命の危険を感じつつ、俺は未だに席を立てないでいる。いや、立たが最後。俺の生命は保証できないな。

ということ、この冷え切った部屋の中で必死になって頭を働かせる。

誤解ならよし。真実なら・・・素直に玉砕しよう。

先に断っておくが浮気はしていないぞ？

そう思っていると、1匹の三毛猫が雹ちゃんの肩に乗っていた。いつの間に・・・。

「雹。冗談も程々にや。」

「「キヤー、ネコガシャベッターッ!!」」

三沢と俺が同時に叫んだ。

お前もこのネタを知っていたとは。やるな!

「発狂セット!!」

「マ ドナルドの提供でお送りしましたにや。」

何っーノリノリ。さすがわが娘。知っていたか。

てか、猫もこのネタを知っていたとは・・・。といってもまあ、元ネタを少し変えたんだがな。ちなみにこのネタを知らないアイリスは呆然としている。

ん、待てよ？

「なあ、今「冗談」って言わなかったか？」

俺は猫に話しかける。傍から見ると物凄く不自然だろう。

「そうだにや。まったく電は・・・といつてもまあ、亮さんや吹雪さんを止める間柄と言う意味では当たっているにや。」

ため息をつきながら、愚痴る猫。

何つー自爆の人とそっくりなネタ。あいつも転校するたびに悪友(?)の名前を使っていたっけ？

「ご、ごめんなさい。まさかちょっとした冗談でここまで部屋の温度が下がるとは思わなかったので。」

電ちゃんが頭を下げて謝る。

その言葉と共に殺気が消え、頭の中で「警戒態勢解除。大佐、指示をくれ。」と蛇の声が聞こえた。ふう、やれやれだぜ。

「しかし、そんなに仲がいいのか？」

ちよつと嫉妬している感じで三沢が聞く。

すると、電ちゃんが頭を縦に降ろしつつ答えた。

「えーと、何て言うか。亮さんと吹雪さんがタッグを組んで暴走して、それをお父さんと明日香さんが一緒になって必死に抑えていますから、回りから夫婦って呼ばれていますね。お父さんいわく「苦勞人コンビ」って言っていましたけど。」

兄さん、吹雪さん。あんたらは一体何をやっているんですか!?!? 頭痛が少しするが気にしないでおく。ちなみに三沢は納得がいった

らしく、嫉妬が消えたみたいだ。むしろ俺に対して哀れみの視線を向けている。勘弁してくれ。

「だが、何で雹ちゃんの猫は喋れるんだ？」

サイボーグの黒猫や青狸ならまだしも、普通の三毛猫は喋れないだろ？

すると三毛猫が首輪を前足で触る。

「亮さんの友人で真田さんって人がいますにや。その人がオイラの泣き声を人語に変換してくれる機器。つまりこの首輪を作ってくれたんだにや。」

す、すげえ。いや、むしろ真田さんなら朝飯前か。

あの人は「こんな事もあるつかと」で有名で、別世界では即席でガミラスのデスラー砲を反射させる物質やら波動カードリッジ弾を作り上げることが出来る天才だしな。てか、あの人がこの世界にいたのかよ！？なら、確実に安心できるな。

だけど初代のアニメ版最終話だけは爆笑した。うん、あのオチは酷かった。

「ちなみにオイラの名前はリードだにや。」

「リード・・・先導役って事か？」

「まあ、そういう事だにや。伊達に雹より長生きしていないにや。」

「ん、ちょっと待て？猫はせいぜい13〜4年程度しか生きられないはずだが・・・。」

「猫って言っても、オイラは二又の化け猫にや。まあ、せいぜい長生きが出来て記憶力がいいだけの話なんだがにや〜。」

そう言つて、リードは顔洗いをする。

確かに尻尾を見ると2本ある。だからどうした？とも言えそうなのだが……。

しかしかわいい。自然と頬が緩んでしまう。

「やっぱりお父さんは何時までもお父さんなんですな。」

そんな俺を見て雷ちゃんは微笑む。子供を見ている母親的な顔で。何か敗北を感じるんだけど……まあいいや。ちょっと聞いてみよう。

「どういう意味だ。そりゃ？」

「変わらないって事ですよ。」

ふと横を見るとアイリスも俺を見て微笑んでいる。

つまり俺は、今のように子供のままって事か！？泣けるぜorz
すると、少し気まずそうにしつつも三沢が口を挟んだ。

「ん、すまないがちょっと用事を思い出したからここらで退席させてもらつぞ。」

「ああ。わかった。雷ちゃんを送ってくれてありがとう。」

「三沢さん。またね。」

「じゃあ、またな。」

そうして三沢は席を立ち、去っていった。
頼むから電ちゃんの話を広めないでくれよ？ ややこしい事になりそうだから。

そんな不安を抱いていると、電ちゃんが背中中のバックからデュエルディスクを取り出していた。俺のより小型らしく、ぴったりだ。

「お父さん。決闘してください！」

いきなりだな。だが、悪くない。

「よし、受けて立つ！ だけど外でやろう、な！」

「そうですね。」

流石に茶の間でデュエルディスクを使うのは心臓に悪い。

ソリッドビジョンと分かっているとはいえ、家の備品が壊されたら洒落にならんからなあ。

そうして俺達は庭に出る。

「それでは。」

「「決闘ッ！！」」

「じゃあ、先攻は電ちゃんに譲るよ。」

「やったあ！」

先攻を譲ったら電ちゃんが喜んでいる。和むなあ。
すると、リードが横から口を挟んだ。

「雷。サイバー流は後攻でこそ本領発揮するデッキだから注意しろ！」

「あ、そっか！さすがお父さん。策士だね。」

リードの諫言に雷ちゃんが驚いている。
ちなみに俺のデッキはサイバー流じゃないぞ？

「じゃあ、私の先攻。ドロー！私はモンスターをセット。カードを1枚伏せてターンエンドです！」

雷 手札4 場 モンスター1 伏せ1

セットモンスター DEF0

常套手段とは言え、結構面倒だな。

が、伏せたことで「冥府の使者 ゴーズ」フラグは無くなった。

「俺のターン、ドロー！」

よし。いいカードを引いた。

「俺は手札から「久遠の魔術師ミラ」を攻撃表示で召喚！」

久遠の魔術師ミラ ATK1800

この暑さの中、涼しげな顔のままミラが現れる。
やっぱりソリッド・ビジョンだから温度は感じないのか？

「そして「久遠の魔術師ミラ」の効果発動！このカードの召喚成功

時、相手の伏せカードを1枚確認する！俺はセットカードを確認。」
セットカードは・・・「サイクロン」か。
なら、そこまで恐れることは無いか。

「じゃあ、バトル！「久遠の魔術師ミラ」でセットモンスターに攻撃！」

ミラが杖を掲げ、光でセットモンスターを消し去ろうとする。

セットモンスター DEF？ 黄泉ガエル DEF100

頭に輪が付いた蛙が現れる。ちゃっかり白い羽つきだ。

恐らくエンドサイクロン 次のターンガエル復活をやるつもりだろう。

そしてそのまま光が蛙を包み込み、蒸発させた。哀れ。

「んー。セットカードが分かっているからなあ。ターンエンド！」

翔 手札5 場 モンスター1

久遠の魔術師ミラ ATK1800

「んー、失敗かな？じゃあ私のターン、ドロー！私は手札から「コールド・エンチャンター」を攻撃表示で召喚するよ！」

コールド・エンチャンター ATK1600

少し露出が派手で、その名の通り氷をイメージさせる服装をした女性の魔術師が現れる。ちなみに漫画版のGXでは明日香が使用したモンスターだ。

「そして「コールド・エンチャンター」の効果発動！手札を1枚捨て、場のモンスターにアイスカウンターを1つ乗せる。私は手札の「キラー・ラブカ」を捨てて、「コールド・エンチャンター」にアイスカウンターを1つ乗せます。そして「コールド・エンチャンター」は場のアイスカウンターの数×300ポイント攻撃力が上昇します！」

エンチャンターの周りに魔力を帯びた冷気が漂い、自身の力を強くさせた。

見た感じだと少し涼んでいるようにも見えるな……。

コールド・エンチャンター ATK1600 1900
アイスカウンター 0 1

厄介だな。「キラー・ラブカ」は簡易「ネクロ・ガードナー」と言っている性能だ。

だからと言ってこのまま放っておいたら「コールド・エンチャンター」が強くなってしまう。

「バトルです！「コールド・エンチャンター」で「久遠の魔術師ミラ」に攻撃！フリーズ・マグナム！！」

「やばい、ミラ。迎撃だ！」

お互いに杖を構え、エンチャンターは氷を。ミラは光を。それぞれの魔力によって生み出し、同時に発射した。光が氷を包み込み、そのまま溶けていく。

やったか！？と思った瞬間、ミラの胸に氷柱が刺さっていた。

目を開いて信じられないものを見たような雰囲気を残し、ミラはそ

のまま倒れてしまう。エンチャントは氷の障壁で、光を完全に防いでいた。

なるほどな。氷柱を氷の層で覆い、氷の層が溶けると同時にそのまま氷柱が相手に襲い掛かったのか。やるな。

翔LP4000 3900

「私はカードを1枚伏せ、ターンエンドです！」

電 手札2 場 モンスター1 伏せ2

コールド・エンチャント ATK1900

どうしたものか……。ま、なるようになれ。

「俺のターン、ドロ！俺は手札から「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

竜を模した兵器が現れる。兄である「丸藤 亮」の切り札で有名なモンスターであり、現実でも使用率はそこそこ高いエースモンスターだ。

「なら、「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚時にセットカードオープン！永續罫「アイスバーン」を發動します！このカードは自分の場に水属性モンスターが表側表示で存在し、水属性モンスター以外のモンスターが召喚に成功した時、そのモンスターは守備表示になります！」

コールド・エンチャントがそつと呪文を唱え、サイバー・ドラゴ

ンの足場を氷で覆う。するとサイバー・ドラゴンが思いつきり滑り、体勢を崩してしまった。
いたずらが成功したことに喜ぶエンチャンター。・・・リアルだったら洒落にならんぞ？

サイバー・ドラゴン DEF1600

しかし不味いな。完全にこっちが翻弄されている。
何か打つ手は・・・ないな。

「さらに俺はモンスターをセット。カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「じゃあ、エンド宣言時にセットカードオープン。速攻魔法「サイクロン」を発動し、右側のセットカードを破壊します！」

竜巻が俺の伏せカードを飲み込み、ズタズタにした。
が、残念ながらこれはブラフだ。

「あ、「スキルサクセサー」。・・・流石に読まれちゃったか。」

少し残念そうな顔をする雹ちゃん。

まあ、「サイクロン」がばれている状態で「ミラフォ」をセットする人はあまりいないだろうな。

翔 手札2 場 モンスター2 伏せ1

サイバー・ドラゴン DEF1600

セットモンスター DEF?

「私のターン、ドロー！じゃあ、私は手札から魔法カード「強欲な

壺」を発動し、デッキからカードを2枚ドロします。そして手札から「憑依装着・エリア」を攻撃表示で召喚するよ。」

憑依装着・エリア ATK1850

「霊使い」と呼ばれるシリーズで水属性を操ることが出来る少女が現れた。その名の通り、髪の色は青で傍らには使い魔である「ガガギゴ」が腕を組んで主を守ろうとしている。

「さらに手札から魔法カード「テラフォーミング」を発動し、デッキからフィールド魔法「酷寒地帯 シベリア」を手札に加えます。」

「酷寒地帯 シベリア」？初めて聞くカードだな。

「そして手札から「酷寒地帯・シベリア」を発動します！」

雪ちゃんが「酷寒地帯 シベリア」を発動した瞬間、まだ夏だったはずの庭が一転して地獄の冬になっていた。太陽の光が風の層によって遮られ、吹雪が辺りを覆い、その寒さによって俺の場のモンスター^のの戦闘力を奪っていた。

サイバー・ドラゴン DEF1600 1100

酷寒地帯 シベリア フィールド魔法^{オリジナル}

効果：場の水属性モンスター以外のモンスターの攻撃力・守備力が500ポイントダウンする。場の表側表示の水属性モンスターが水属性以外のモンスターを戦闘によって破壊した時、破壊したモンスターの効果を無効にする。

「バトルです！「憑依装着 エリア」で「サイバー・ドラゴン」に

攻撃！」

「っ！」

主であるエリアの力を借り、力を増幅させたガガゴゴがサイバー・ドラゴンを殴りつける。殴られた箇所から火花が散り、サイバー・ドラゴンは機能を停止してしまった。

「さらに「コールド・エンチャンター」でセットモンスターに攻撃
！」

エンチャンターが氷弾を放ち、撃ち貫こうとする。
そしてそこにはスーツ姿をした金髪の女性戦士が己を守っていた。

セットモンスター DEF? 異次元の女戦士 DEF1600
1100

「悪いけど、セットモンスターは「異次元の女戦士」。除外させて
もらうよ。」

「お父さん。シベリアの冬は甘くないですよ？」

女戦士に氷弾が命中し、そのまま倒れてしまう。そしてシベリアの
吹雪が女戦士の体を包み込み、白の世界へと誘って行った。

「な、・・・効果が使えない!？」

「そうです。「酷寒地帯 シベリア」は水属性モンスターが水属性
以外のモンスターを破壊した時、破壊したモンスターの効果を無効
にします!」

かなり厄介だな。これでリバーズモンスターは完全に封じられた。さらに「アイスバーン」で水属性以外のモンスターは守備表示になる。・・・水属性モンスターは俺のデッキに入っていないから不味い。で、もしも攻撃表示に出来たとしても「キラー・ラブカ」があるから恐らく無理だろう。

「私はこのままターンエンドします!」

雷 手札2 場 モンスター2 フィールド魔法「酷寒地帯 シベリア」永続罫「アイスバーン」
コールド・エンチャント ATK1900
憑依装着 エリア ATK1850

「俺のターン、ドロー!手札から魔法カード「天使の施し」を発動し、デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てる。」

ミラフォが来ない。・・・どうしろと?

「モンスターをセットし、カードを1枚伏せターンエンド!」

翔 手札1 場 モンスター1 伏せ2
セットモンスター DEF?

「私のターン、ドロー!手札から「ブリザード・ドラゴン」を召喚します!」

ブリザード・ドラゴン ATK1800

青を基本とした竜が現れる。ただし、翼が無いので飛べないみたい

だ。「MH」シリーズを知っている人は青色の「ティガレックス」を想像してくれば分かると思う。

「そして「コールド・エンチャンター」の効果を発動します。手札の「キラー・ラブカ」を墓地へ送り、「コールド・エンチャンター」にアイスカウンターを1つ乗せます。それにより、「コールド・エンチャンター」の攻撃力はさらに300ポイントアップします！」

コールド・エンチャンター ATK1900 2200
アイスカウンター1 2

さらに冷気を纏い、力を増幅させるエンチャンター。

「よし。手札から魔法カード「天よりの宝札」を発動し、お互いの手札が6枚になるようにドローします！」

完全に手札が尽きたと思ったらこれか。恐ろしい引き運だな。

「さらに「コールド・エンチャンター」の効果を発動し、手札の「黄泉ガエル」を墓地へ送って、再び「コールド・エンチャンター」にアイスカウンターを1つ乗せます。そしてまた攻撃力が300ポイントアップします！」

コールド・エンチャンター ATK2200 2500
アイスカウンター2 3

またもや冷気を纏い、力を増幅させた。

これで「ガーディアン・エアトス」と同じ攻撃力が・・・恐ろしいな。

「さらに墓地の「黄泉ガエル」をゲームから除外して「水の精霊
アクエリア」を特殊召喚します！」

水の精霊 アクエリア ATK1500

「ス」が付けば、有名な飲料水と同じ名前の少女が現れる。

どうでもいい話だが、水の精霊は大概女性型が多いよな。何でだろ？

「バトルです！「水の精霊 アクエリア」でセットモンスターに攻
撃します！」

両手から水を集め、1つの塊にする。

そしてその塊を俺のセットモンスターに向けて発射した。

セットモンスター DEF? ADチェンジャー DEF0

学ランを来た旗持ちが現れるが、水の塊によって押し流されてしま
い、どこかへ行ってしまった。

「そして「ブリザード・ドラゴン」でダイレクトアタックします！」

ダイナミックお邪魔します！

そんな空耳が聞こえつつも、アイアンクローを顔面に喰らってしま
った。・・・痛い。

翔LP3900 2100

「さらに「憑依装着 エリア」でダイレクトアタックします！」

オラオラオラッ！

とばかりに連続パンチを繰り返すガガギゴ。しかし、人に暴力を振るうのは流石に気が引けたのだろう。主であるエリアは自分の力をガガギゴに与えていない。なので痛みは殆ど無い。強いて言うなら、ピコピコパンチを連続で受けている気分だ。

翔LP2100 250

「最後です！」「コールド・エンチャント」でダイレクトアタックします！」

氷柱を練成し、俺に向かって放つエンチャント！

ちよ、死ぬ！！

「墓地の「ネクロ・ガードナー」の効果発動！墓地の「ネクロ・ガードナー」を除外し、この戦闘を無効にする！」

氷柱が俺に命中する直前、黒い霧が俺を覆い隠す。

一瞬送られて氷柱が俺のいた場所へと飛んできたが、残念ながら外れてしまった。

「あ……。けど、後ちよつと。私はカードを2枚伏せてターンエンドします！」

電 手札3 場 モンスター4 伏せ2 フィールド魔法「酷寒地

帯 シベリア」永続罫「アイスバーン」

コールド・エンチャント ATK2500

憑依装着 エリア ATK1850

ブリザード・ドラゴン ATK1800

水の精霊 アクエリア ATK1500

「俺のターン、ドロー！」

よっしゃ！来てくれたか。

「電ちゃん。」

「何ですか。お父さん？」

俺の言葉に首をかしげる電ちゃん。ふふふふふ……

「悪いけど、このターンで勝負をつけさせてもらうよ！セットカードオープン、魔法カード「アームズ・ホール」を発動！デッキからカードを1枚墓地へ送り、自分のデッキまたは墓地から装備魔法カードを1枚手札に加える。ただし、このターン通常召喚を行うことが出来ない。俺はデッキから「レインボー・ヴェール」を手札に加えるよ。」

ちなみに今墓地へ送られたカードは「聖なるバリアーミラーフォース」だった。……1ターン遅いよ。まあ、いいや。

「そして手札から魔法カード「大嵐」を発動！場の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「っ！ならチェインしてセットカードオープン、カウンター罠「マジック・ジャマー」を発動します。手札を1枚捨てて、魔法カードの発動を無効にし破壊します。私は手札の「キラール・ラブカ」を墓地へ送り、お父さんの「大嵐」を無効にします！」

やった！そう思ったらしく、電ちゃんの顔に喜びが映りかける。だが、そいつは敗北フラグだ！

「ふふ、甘いぞ？セツトカードオープン、カウンター罠「神の宣告」を発動！ライフを半分支払い、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚。魔法・罠の発動のいずれかを無効にし、破壊する！よって電ちゃん「マジック・ジャマー」は無効となり、「大嵐」はそのまま通る！」

「そんな！」

翔LP250 125

大嵐がシベリアの酷寒を、すべてを飲み込んだ。ちなみにもう1枚の伏せカードは「和睦の使者」だった。危ない危ない。そして景色が再び生氣溢れる夏へと戻った。

「そして手札から魔法カード「死者蘇生」を発動し、墓地の「ガーディアン・エアトス」を特殊召喚！行くぞ、アイリス！！」

「はい！」

冬の終わりを告げ、再び夏の風を纏った旋風がこの場へと降り立った。

そして旋風が吹き止むと同時に、純白の翼に民族衣装を来た金髪の女性が主を守らんと構えていた。

ガーディアン・エアトス ATK2500

「え、いつの間？」

「「天使の施し」で墓地へ送ったのは何も「ネクロ・ガードナー」

だけじゃないってことだ。」

「そして手札から装備魔法「魔道師の力」2枚と「レインボー・ヴ
エール」を発動し、「ガーディアン・エアトス」に装備。そして「
ガーディアン・エアトス」の効果を発動！自身に装備されている「
魔道師の力」を墓地へ送り、相手の墓地のカードを3枚までゲーム
から除外する！電ちゃんの墓地の「キラール・ラブカ」を3枚、ゲー
ムから除外する！！」

アイリスが刀を天へ掲げる。すると電ちゃんの墓地から3つの魂が
現れ、アイリスの刀に吸収される。そして刀が光り輝き始めた。

「さらに、この効果によって除外されたモンスターの数×500が
ターン終了時までこのカードの攻撃力に加算される！！！」

ガーディアン・エアトス ATK2500 4000

「そして装備魔法「魔道師の力」は俺の場の魔法・罠ゾーンになる
カードの数×500ポイント、装備モンスターの攻撃力と守備力を
アップさせる効果がある。」

ガーディアン・エアトス ATK4000 5000

「け、けど。まだ耐えられ……。」

「いや、電ちゃん。君が「サイクロン」で破壊したカードは何だっ
たっけな？」

「あ……！」

「墓地の「スキルサクセサー」の効果発動！このカードを除外し、自分の場のモンスター1体を選択する。このターンの終了時までそのモンスターの攻撃力は800ポイントアップする！ただし、この効果は墓地へ送られたターンには使えず、自分のターンのみしか使うことが出来ない。もちろん選択するのは「ガーディアン・エアトス」！」

ガーディアン・エアトス ATK5000 5800

「私の馬鹿ーッ！！」

自分の失敗に頭を抱える雹ちゃん。
悪いが、俺はその隙を見逃すほど甘くない！

「バトル！「ガーディアン・エアトス」で「コールド・エンチャンター」に攻撃！」

「え、何で攻撃力が高い「コールド・エンチャンター」を！？エンチャンター。迎撃、あれ！？」

コールド・エンチャンター ATK2500 1600

「そんな、「コールド・エンチャンター」の攻撃力が元に戻った！？」

「装備魔法「レインボー・ヴェール」の効果が発動したんだ。このカードを装備したモンスターと戦闘を行った場合、相手モンスターの効果はダメージ計算終了時まで無効となる！」

アイリスが剣を地面に突き刺し、呪文を唱える。

すると地面から魔法陣が現れ、中から火の鳥が現れた。
おお、久しぶりのアレだな！

「アカシックバスターツ！」

火の鳥が大きく羽ばたくと、コールド・エンチャンターに向かって突撃を開始した。

コールド・エンチャンターも無数の氷の弾丸を作り出し、火の鳥に向かって撃ち込む。

氷の弾丸が火の鳥に命中したかに見えるが、実際は体の熱によって完全に溶かされている。まあ、炎を纏った鳥だからそりゃそうなるわな。

そして火の鳥はコールド・エンチャンターを炎によって包み込み、一瞬にして蒸発させてしまった。

電LP40000

「んー。あの時にもう一枚のセットカードを選んでいけば……。」「
ちよつと落ち込んでいるようだ。まあ、俺も同じ考えを何度か持ったことがあるな。」

「まあ、今回は偶然と言っているいい気分だな。正直「アイスバーン」のロックと「酷寒地帯 シベリア」はきつかった。」

「それはよく言われますね。」

俺がため息をつくと、電ちゃんも苦笑しつつも俺に答えてくれた。
ふと、今さっきの決闘で疑問が上がったのでちよつと聞いてみることにした。

「なあ、電ちゃん。上級モンスターを召喚していなかったけど、入っていないのか？」

「いえ、「天よりの宝札」で「氷帝メビウス」が来ていたので召喚しようかと思っていたのですが・・・すでに召喚権を使っていたから。」

「なるほど。そりゃ、残念だったな。」

「ついでに言うと、手札に「大寒波」が来たので次のターンで安全に攻めようと思っていただけ・・・。」

しゅんとなつて少し落ち込む電ちゃん。

聞けば聞くほど、冷や汗が流れる。マジで危なかったようだ。

「まあ、そんな時もあるさ。」

「そうですね。」

「電。そろそろ時間だにゃ！」

「あー!!」

リードの助言に何かを思い出したかのように大声を上げる電ちゃん。

「ん、どうしたんだい？」

「そろそろ帰らないといけなくなってしまったので・・・。」

「そうか。」

デュエルディスクをバックの中へ戻しつつ、帰りの準備をする。もうお別れか。意外と早かったなあ。

そう思っていると、電ちゃんがこっちを向いて万遍の笑みを浮かべていた。

「お父さん。」

「ん？」

「今度は弟がほしいです。」

「はい!？」

電ちゃんの告白に俺の頭はフリーズした。

そしてリードの追撃がさらにそれを悪化させる。

「まあ、毎晩飽きずにやれば・・・そりゃばれるにや。」

「・・・。」

絶倫なんだな。てか、嫁さんは大丈夫なのか？体力的な意味で。そしてこんな男が夫なんかで!？」

「じゃあ、行って来ます。お父さん。お母さん。」

「おう、いつてらっしゃ・・・ん。お母さん？」

そう言って、電ちゃんは去っていった。

が、リードがちょこんと残っており、口が開かれた。

「ちなみに雷は初めから見えていたにや。」

「なるほど・・・!？」

ふと、アイリスを見ると顔がトマトのように真っ赤になって俯いている。

え、ちょ・・・えええ!?!いや、そりゃ嬉しいけどさ。戸籍とかどうやって用意したんだ？

変な所で頭が働いていると、リードが呟いた。

「世の中銭にや。」

ああ、なるほど。頭の中が一気に覚めた。

やっぱり嫌な世の中だ。が、今回だけは感謝しよう。

「まあ、お幸せににや。」

そういつてリードは雷ちゃんの後を追った。

そして俺とアイリスだけがぼつんと取り残された。・・・気まずい。

「えーと。アイリ・・・。」

「私は・・・。」

「ん?」

「私は別に・・・構いませ・・・よ?その、翔が・・・求めてくれるのなら。」

そう言うと、アイリスの顔がもっと赤くなってしまった。

何でこう、言ってくれるかなあ。どストレートで。おかげで自分を抑えるのがキツイじゃないか。

アイリスと同じくらいに真っ赤になった自分の頬を掻きつつ、何とか話題から逸らすことにした。流石に昼から狼は不味いつて。

「ま、まあ、とりあえず時間が時間だから昼飯にしよう。な？」

「そ、そうですね。」

気まずい雰囲気を残しつつ、俺達は家の中へと戻った。

嵐のような1日だったな。心の中でそう呟き、俺は未来の俺にこう思った。

もう少し抑えとけ……と。

フィールド35：娘襲来（後編）（後書き）

最初のネタでは本当に明日香の娘にしようか悩みましたが・・・
ちよっと他のネタで行くことにしました。

これも没ネタになりましたが、翔が死んでいる世界もちよっと考えていました。

が、やはりハッピーエンドが1番なので・・・都合主義ですみません。

ちなみに次回からビターな話が多くなると思います。

フィールド36：設定（キャラクター紹介のみ）（前書き）

今頃ですが、設定を張ろうと思います。

最初から張っておけと言われそうですが・・・

フィールド36：設定（キャラクター紹介のみ）

キャラクター紹介

丸藤 翔（まるふじ しょう）

所属：オシリスレッド1年

「丸藤 翔」として転生した主人公。性格はどちらかと言うと事なかれ主義。しかし知人が困っている時は、出来る限り力になるようにしている。

実は暗い部分もあり、1度受けた傷は一生忘れない。しかし、1度受けた恩も忘れない。敵に回すと厄介な存在。

好きなことは猫と戯れたり、アイリスと話したり、ひなたぼっこをしたり、読書（歴史形）することだが、祭りで悪乗りすることは決して欠かさない。ひゃっはー、お祭りだー！！

苦手なのは、ホラー系とG（英語ではC）。後者は飛ぶんじゃない！じゃんけんではかなりの勝率の持ち主で、あだ名は「ラッキーマン」。

ちゃっかり背丈が伸びて「遊城 十代」とほぼ同じだったりする。

（ここ重要。本人談）

相棒は精霊の「アイリス」

心の支えになっている存在であるが、時たま彼女をからかったりして遊んでいる。しかし心の奥底ではいつも感謝と敬意を抱き、彼女を愛している。

余談だが、彼女の膝枕は本人曰く最高らしい。（じゃんけんの罰ゲーム）

デッキは本来の「丸藤 翔」が使っている「ロイド」と、兄である「丸藤 亮」の「サイバー」の合体型と転生前に愛用していた「ガーディアン」と「魔法使いデッキ」。

転生系でよくある「転生前に所持していた全てのカードを持ってくる」事は出来なかったが、たまたま転生直前まで持っていた「ガーディアン」のデッキとそのサイドデッキは無事だった。魔法使いデッキはこの世界で手に入れたカードにより復元している。

ちなみに「アイリス」はこの「ガーディアン」デッキに入っていたOCG版の「ガーディアン・エアトス」だったりする。

アイリス（ガーディアン・エアトス）

「丸藤 翔」の精霊であり、相棒でもある。

性格は穏やかで、滅多な事では怒らない。しかし一度怒ると、どこから持ってきたか分からないが「ガーディアン・デスサイズ」の仮面を着け、怒りが解けるまで「ガーディアン・デスサイズ」になって暴走する。暴走した後は自己嫌悪していることが多い。

髪型がポニーテールであり、瞳の色がスカイブルーなのが特徴的で、それを基準に識別している。（ちなみにポニーテールをしている原因は、翔と暇つぶしにじゃんけんをして負けたときにそれを頼まれたから。）

ガーディアン・エアトスでよくイメージされる「凛々しい」ではなく、「かわいい」といった方が正確であり、よく涙目になったりする。本人曰く、精神がまだ未熟。そのせいか時にはとんでもない事をしてしまうことがある。

主である「丸藤 翔」の影響か、決闘するよりネコと戯れたり、料理を作ったりすることの方が好きらしい。ちなみに翔の昼の弁当は彼女の手作り料理である。

「丸藤 翔」の事は、誰よりも深く信頼し、愛している。

普段は彼の事を「マスター」と呼んでおり、怒った時や真面目な時は「翔」と名前で呼んでいる。

ちなみに「アイリス」は花言葉で「優しい心」と言う意味である。余談ではあるが、「アイリス」には「私はあなたを愛します」という意味があり、この事を知ったアイリスは顔を真っ赤にして物凄く混乱したらしい。(ちなみに翔はこの事を知らず、まったくの偶然であつたりする。)

フィールド37：悪夢再び（前書き）

ホラーを書こうとしたのですが、コメディ系になっていました。
何故こうなったorz

てか、やっと1年生後半ってどづいつことよ？
と言われそうです。
後、クロック・タワーネタは記憶があやふやなのでちょっと間違えている部分があるかもしれません。

追記：一部訂正しました。

フィールド37：悪夢再び

時は33話終了時まで遡る・・・

シトシトと雨が降っている中、眼鏡をかけた青年が傘をさして歩いていた。

その反対の手には袋を持っており、スーパーから食料を買ったことが窺える。

「く、おや。かなりの血痕だにや。世の中も物騒になりましたにや〜。」

最近ではこの近所で通り魔が出ているという話をニュースで聞きましたにや。

嫌な時代になりましたにや〜。

（・・・マスター。）

「ん、どうかしましたかにや？」

アサイラントが少し曇った顔をして私を見ていますにや〜。こついうときは大概何か嫌なことが・・・

（微弱ですが、例の反応があります。）

「にや。・・・それは本当か？」

（はい。）

私の顔から一筋の冷や汗が流れる。最も恐れていたことが起こったか。

「まさか、復活の兆候が見え始めるとは・・・予想以上に早いな。」

（で、やはりこれを回収しますか？）

「ああ。もし、ああなったとしてもこれさえあれば助かるかもしれないしな。」

（了解。）

かつての又佐だったモノを集める。すると、それらが光の輪となつて一枚のディスクとなつて収められた。黒く、禍々しいオーラを放ちながら。

そう、これこそが始まりだったのかもしれない。

・・・

「何？不審者？」

夏休みが終わり、俺達は再びデュエルアカデミアへと戻ってきた。で、それから一週間後のことだった。どうやら一部の生徒が不審者に襲われたらしい。

サスペンスに嵌っている連中が「事件」と言つて騒いでいるのだからと思つていたら、これが結構ヤバめだそうだ。

凧の証言によると、刃物を持った化け物が真夜中に突如として襲い掛かってきたそうだ。まあ、凧は夜中に外でうろついていたから後で先生から大目玉を貰ったんだがな。で、先生達の対応としては厳戒令と夜遅くの外出禁止令が徹底された。前者は本土にこのことが

漏れないように内密に処理するみたいだ。後者に関しては、これ以上の被害を防ぐ目的なのだろう。

で、その話を三沢から聞かせてもらった。

・・・ちと、心当たりがあるから怖いんだが。

「しかし、襲われた奴がすべて鍵の持ち主だしなあ。」

「ああ、俺もそれは思った。」

今まで襲われている奴は明日香、万丈目、凧の3人だそうだ。

明日香は学園内。万丈目は寮へ帰宅途中に。凧は夜中にうろついていたら……。洒落になっていないな。が、幸運なのは全員が軽症、または無傷という事だ。

「で、問題なのは例のモンスターとそっくりだと言っていたことだな。」

そう、カミューラが使っていた「シザーマン」にそっくりなのだと言っていた。

普通の人なら冗談だろうと笑い飛ばしていただろうが、俺は又佐に襲われたという過去を持っているからそうだとは思えない。

「ああ。俺もモンスターが実体化して襲い掛かってくるなんて夢にも思わなかったがな。」

「普通はそうだよ。」

そう、普通だったらな。

だが、異常なときの普通ってのは期待しない方がいい。大概嫌な目

に会うから。

「さて、と。俺は明日香さんと万丈目の見舞いに行くから、翔は風の方を頼む。」

「ああ。わかった。が、気をつけるよ。三沢？わざと軽症で済ませで見舞いに行く奴らうを・・・ピッ。かもしれんからな。」

俺は自分の首に右手を当て、斜めに切り落とすような仕草をする。言ってみれば、危険というサインだ。

「わかってるさ。そういう翔も気をつけるよ？」

「俺には相棒がいるからな。大丈夫だ。」

「そうか。」

そうして俺達は別れ、それぞれ見舞いに行った。

・・・

と、いうわけで風の自室に向かっている。

（「シザーマン」は双子って・・・本当なんですか！？）

「ああ。確か兄がボビィ。弟がダンだったはずだ。兄の方は機能不随で3日しか生きられず、時が止まる時計塔。つまり、クロックタワーでしか生きられない体になっていると言っ話を聞いたことがある。で、弟のダン健康体だったから普通に活動しているという話だ。」

（だから、兄のボビイはカミューラと共にいたんですね。）

「恐らくな。まあ、今となつてはその原因を探す方法は無いんだが。」

（しかし、何で弟の方は今まで活動しなかったんでしょうか？）

「ん、流石にそこまでは……。と、おーい。凧。大丈夫か？」

コンコンッ！

ノックをして尋ねてみる。

「ん、翔か。ちょっと待つてくれ。」

ガチャ！

部屋から凧が現れた。見た感じでは怪我は無いようだが……。

「不審者に襲われたらしいが、大丈夫か。凧？」

「ああ。見ての通りだ。と、立ち話は何だから部屋に入ってくれ。」

「じゃ、お邪魔します。」

・・・

凧の部屋の中へ入り、当時のことについて話してもらうことにした。まあ、それが目的だしな。

「なるほどな。鍵の情報を探っていたら、奴に襲われたというわけ

か。」

「ああ。闇の決闘だったな。ありや。」

顎に手を当てながら推測する凧。

しかしまあ、

「よく逃げ切れたな？」

「わざと弱い攻撃を誘って畏カードの「閃光弾」を使い、目を眩ましたところで一目散に逃げたんだ。」

「ん、ちょっと待て。闇の決闘って逃げれるのか？」

「別に結果があつたわけじゃなかったからなあ。後は草木に身を隠しつつ、寮まで逃げ込んだってわけだ。まったく、好奇心は猫をも殺すと昔の人は言ったが・・・本当に体感したよ。」

おかげで死ぬかと思つた。と愚痴る凧。

・・・お前、すげーな。

「なんつー、MGS。まさしくスネーク。」

「褒めるなよ。恥ずかしい。」

「いや、褒めてない褒めてない。」

トントントンッ！

「凧、大丈夫か!？」

「その声は十代か。開いているから入っただいぞ。」

十代が扉を開けて中に入ってきた。
どうやら俺と同じく見舞い目的のようだ。

「あ、翔。お前も来ていたのか。」

「ああ。十代と同じく見舞いに来たんだが……見た通りぴんぴんしているよ。」

「そっか。良かった。」

「あー、何だ。心配させた俺びとっては何だが、十代。俺とデュエルするか?」

「お、やるやる!翔もやろうぜ!」

「いや、俺は兄さんの確認に行つて来ようかと思つてな。」

「そっか。じゃ、また今度。」

「またな。翔!」

「ああ!」

そうして俺は風の部屋から出る。

えーと、兄さんがうるつきそつな場所はどこ……

「スカイスクレイパーシユート!」

「お、俺のシムルグがー!!」

十代の十八番と風の悲鳴が聞こえたような気がするが、気にしない。
・・・うん、気にしない。

と、いうわけで適当に探すことにした。だって、うるつきそんな場所と言ってもなあ。正直さっぱりだし。

「さて、ん。兄さん！それに吹雪さんまで!!」

偶然歩いている二人を発見した。本当に運が良かったよ。

「ん、翔か。」

「やあ、翔君。久しぶりだね。」

「吹雪さん。お久しぶりです。それより、兄さん。例のシザーマンに襲われていない?」

「ん、アレのことか?」

兄さんが指を刺した方向を見ると

シャキーンシャキーンシャキーン!!

ギャー!! 噂をすれば何とやら。奴が来た!!

「さて、ここまで鬼ごっこに付き合っただ。そろそろこの世から退場していいだろう。」

「亮。流石にそれは酷いと思うよ?」

あれ？何か兄さんがボケで吹雪さんが突っ込み役になってないか？

「ん〜、エロスなら僕の方が自信があるんだけどね。」

ニヤニヤしながら吹雪さんは呟いた。

頼むからそれは、種の不死身さんとゆっくり語り合ってください。

「さてと、決闘！！」

「クケケケツ！ドロー！手札カラ「キラー・トマト」ヲ守備表示
デ召喚。」

キラー・トマト DEF1100

その名の通り、真っ赤なトマトのモンスターが現れる。元ネタの映画が懐かしいなあ。

「サラニカードヲ2枚伏せ、ターンエンド！」

シザーマン 手札3 場 モンスター1 伏せ2

キラー・トマト DEF1100

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

白き機竜が現れる。来た！なぜか必ず手札に来るサイバー・ドラゴン！

絶対、何かしらのイカサマをしているよな？

「さらに手札から「サイバー・ドラゴン・ドライ」を攻撃表示で召喚！」

サイバー・ドラゴン・ドライ ATK1400

サイバー・ドラゴンを簡略化させたデザインが特徴で、「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」の後継機だ。

「バトル！「サイバー・ドラゴン・ドライ」で「キラー・トマト」に攻撃！」

サイバー・ドラゴン・ドライから放たれたエネルギー弾の直撃を受け、キラー・トマトは蒸発してしまった。

「ダガ戦闘ニヨツテ破壊サレタ「キラー・トマト」ノモンスターヲ発動、デツキカラ攻撃力1500以下ノモンスターヲ攻撃表示デ特殊召喚スル事ガ出来ル。デツキカラ「キラー・トマト」ヲ攻撃表示デ特殊召喚。」

キラー・トマト ATK1400

再び現れるキラー・トマト。

しかしその顔は絶望に満ちていた。

「デツキ圧縮か。いいだろ。望み通りにしてやる。「サイバー・ドラゴン」で「キラー・トマト」に攻撃！エヴォリユーション・バースト……！」

「やっぱりな！」と言わんばかりに覚悟を決めて、サイバー・ドラゴンのエネルギー弾を受けるキラール・トマト。・・・漢だ！

シザーマンLP4000 3300

「再び「キラール・トマト」ノ効果ヲ発動。デッキカラ「クリッター」ヲ特殊召喚スル！」

クリッター ATK1000

3つ目のお化けと思われるモンスターが現れる。
クリボーを少し凶暴化させたと言ったら分かりやすいだろう。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「エンド宣言時ニセットカードオープン、罨カード「砂塵の大竜巻」ヲ発動！相手ノ場ノ魔法・罨カード1枚ヲ破壊スル！右ノセットカードヲ破壊！！」

竜巻が兄さんの伏せカードを吹き飛ばす。

「ちい！（「サイバティック・ヒデウン・テクノロジー」が破壊されたか。」

亮 手札2 場 モンスター2 伏せ1

サイバー・ドラゴン ATK2100

サイバー・ドラゴン・ドライ ATK1400

「ケケケケケツ。ソノ後、自分ノ手札カラ魔法・罨カードヲ1枚セツトスル事が出来ル。僕ハカードヲ1枚伏セル。ソシテ、僕ノター

ン、ドロー！「クリッター」ヲ生贄ニ捧ゲ、「邪帝ガイウス」ヲ生贄召喚！」

邪帝ガイウス ATK2400

漆黒をイメージさせる鎧を着たモンスターが現れる。まるで全てを無に帰させるような雰囲気纏って……。

「「邪帝ガイウス」ノモンスター効果発動！コノカードガ生贄召喚ニ成功シタ時、場ノカードヲ1枚選択シ、除外スル！対象ニスルノハ「サイバー・ドラゴン・ドライ」！」

「しまった！リクルートモンスターを先に潰す気だ！！」

「消エ口、忌マシキ機竜ヨ！」

ガイウスの両手から闇の球体が生まれ、それがサイバー・ドラゴン・ドライに向かつて放たれる。確実に直撃コースに入っており、このままではやられてしまう！

「甘い！セットカードオープン、速攻魔法カード「フォトン・ジェネレーター・ユニット」発動！場の「サイバー・ドラゴン」2体を生贄に捧げ、手札、デッキまたは墓地から「サイバー・レーザー・ドラゴン」を特殊召喚することが出来る！そして「サイバー・ドラゴン・サード」は自分の場に「サイバー・ドラゴン・サード」以外の「サイバー・ドラゴン」と名の付くモンスターが存在する場合、このカードの名称を「サイバー・ドラゴン」として扱う！」

「ナ、何！」

「俺の場の「サイバー・ドラゴン」と「サイバー・ドラゴン」となった「サイバー・ドラゴン・サード」を生贄に、デッキから「サイバー・レーザー・ドラゴン」を特殊召喚！」

サイバー・レーザー・ドラゴン ATK2400

サイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ドライが光に包まれ、消滅する。

そしてサイバー・ドラゴンを強化した1体の機竜が現れた。特殊すぎるが故にコストが重く、多くの決闘者から見捨てられたあの「サイバー・レーザー・ドラゴン」が。

「ダガ、生贄ニナツテ墓地へ送ラレタ「クリッター」ノ効果ヲ発動スル。デッキカラ攻撃力1500以下ノモンスターヲ1枚手札ニ加エル。僕ハ「幻銃士」ヲ手札ニ加エル。・・・カードヲ1枚伏せて、ターンエンド！」

シザーマン 手札3 場 モンスター1 伏せ3

邪帝 ガイウス ATK2400

「何で攻撃しなかったんだろ？」

「ん〜、わざと残しておいて盾にしたかったんだと思うよ？」

「ケケケケ。(僕ガ伏セタカードハ「ヘイト・バスター」。モシ攻撃スレバソノモンスターゴト木っ端微塵ニ・・・。)」

シザーマンが何やらニヤついている。

そいつは敗北フラグだぞ？

「俺のターン、ドロー！」「サイバー・レーザー・ドラゴン」のモニター効果発動！1ターンに1度、このカードの攻撃力以上の攻撃力、または守備力を持つモンスター1体を選択し、破壊する！もちろん対象にするのは「邪帝 ガイウス」！」

「！シ、シマツタツ！！」

「ターゲットロック、誤差修正完了！・・・破壊光線フォトン・エクスターミネーション発射！！」

テッテッテッテッテッテ、テッテッテッ！

懐かしい宇宙戦艦のOPと共に兄さんが咄嗟にサングラスをかける。どうしたんだろ？と思った矢先、サイバー・レーザー・ドラゴンから物凄い光が発せられ視界が強制的にホワイトアウトさせられた。

「目ガ、目ガア！！！」

目の前でそれを見つめてしまったシザーマンは両手で目を覆い、転げまわる。

大佐のまねをするとは・・・やるな！が、俺も目が痛い。

もちろん目標に命中し、邪帝ガイウスは消滅してしまった。

そして兄さんはサングラスを外し、決闘を再開させた。

「俺は手札から装備魔法「早すぎた埋葬」を発動！LP800を支払い、墓地のモンスターを特殊召喚する！俺は「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚する！」

亮LP4000 3200

墓地からサイバー・ドラゴンを特殊召喚させた！この打点なら・・・
いける！！

「バトル！サイバー・ドラゴン」でダイレクトアタック！エヴォ
リューション・バースト！！」

シザーマンLP3300 1200

「これで終わりだ！サイバー・レーザー・ドラゴン」でダイレク
トアタック！エヴォリューション・レーザーショット！！」

「ック！セットカードオープン、速攻魔法「終焉の炎」ヲ発動！自
分ノ場ニ「終焉トークン」ヲ守備表示デ2体特殊召喚スル！」

終焉トークン DEF0

うらめしやくという声がなぜか聞こえそうな黒い炎が2体現れる。
現世に何か残しているのか？

「（わざと残すために・・・か？）相手の場にモンスターが増えた
ことよって巻き戻しが発生する。バトル！サイバー・レーザー・
ドラゴン」で「終焉トークン」に攻撃！エヴォリューション・レ
ザーショット！！」

ちきしょお！！と、物凄く悔しそうな叫び声を残し、光線の中へ消
えていった終末の炎。

な、何か未練があったのか？

「そしてカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

亮 手札1 場 モンスター2 伏せ1 装備魔法「早すぎた埋葬」
サイバー・レーザー・ドラゴン ATK2400
サイバー・ドラゴン ATK2100

「僕ノターン、ドロー！アノ悪夢ヲ再現サセテヤル！！手札カラ「
幻銃士」ヲ召喚！」

幻銃士 ATK1100

「ソシテ召喚シタ「幻銃士」ノ効果発動！コノカードガ召喚・反転
召喚ニ成功シタ時、自分ノ場ニトークン以外ノモンスター1体ニツ
キ「幻銃士トークン」ヲ1体特殊召喚スル！僕ノ場ニハ「幻銃士」
ノミ。ヨツテ「幻銃士トークン」ヲ1体特殊召喚スル！」

幻銃士トークン ATK500

「ソシテ場ノ3体ノモンスターヲ生贄ニスルコトデ手札カラ「シザ
ーマン」ヲ特殊召喚スル！！ソシテコノ「シザーマン」ハ僕自身ガ
場ニ出ル。」

シザーマン（オリジナル）

効果モンスター レベル8 闇属性 悪魔族

ATK3500 DEF0

効果：このカードは通常召喚することが出来ない。自分の場の悪魔
族モンスター3体を生贄に捧げた場合でのみ、特殊召喚することが
出来る。このカードは相手の魔法・罫・効果モンスターの効果では
破壊されない。

シャキーン、シャキーン、シャキーン！

鉄の金属音が辺りに響く。獲物を処刑すべく、今か今かと待ち構え

ていたように。

「バトル！」「シザーマン」デ「サイバー・ドラゴン」「二攻撃！」

「つく！エヴォリユーション・バースト！！」

エネルギー弾がシザーマンに向けて発射される。が、シザーマンはスツと消えた。

サイバー・ドラゴンは辺りを見渡して探すがまったく見つからないふと、背後から音がした。サイバー・ドラゴンの首が後ろを向く。・
・それがサイバー・ドラゴンの最後だった。

突如として現れたシザーマンによって首を刎ねられ、切られた部分からオイルは噴き出した。まるで血をイメージさせるかのように。そして再びシザーマンが姿をくらました瞬間、サイバー・ドラゴンが爆発した。どうやらショートした電流が噴き出したオイルを引火させたようだ。その破片が兄さんに襲い掛かり突き刺さった。大きな傷ではないものの、出血はしているらしく制服が血まみれになる。だが、兄さんは顔色を変えずに立っていた。

亮LP3200 1800

シザーマン 手札2 場 モンスター1 伏せ2

シザーマン ATK3500

「俺のターン、ドロー！」「サイバー・レーザー・ドラゴン」のモンスター効果を発動！対象は「シザーマン」。破壊光線フォトン・エクスターミネーション発射！！」

凄まじい光がシザーマンに襲い掛かった。

消し飛んだか！？皆の願いがそれ一点に集中する。

だが、その期待も虚しくシザーマンはピンピンしていた。

「クケケケケツ！残念。僕八戦闘デシカ破壊デキナイヨ？」

「つく、手札から魔法カード「死者蘇生」を発動し、墓地の「サイバー・ドラゴン・ドライ」を守備表示で特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン・ドライ DEF900

「「サイバー・レーザー・ドラゴン」を守備表示に変更し、カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

亮 手札1 場 モンスター2 伏せ2

サイバー・レーザー・ドラゴン DEF1800

サイバー・ドラゴン・ドライ DEF900

サイバー・ドラゴン・ドライはリクルーター。・・・時間を稼ぎつつ墓地肥やしをする気だろう。なら、狙うは「オーバードロード・フュージョン」のみ。

「ケケケケケツ！万策尽キタヨウダネ？僕ノターン、ドロー！ソシテセツトカードオープン、畏カード「無用の欲張り」ヲ発動！デツキカラカードヲ2枚ドロースル！僕八手札カラ「死霊騎士デスカリバー・ナイト」ヲ攻撃表示デ召喚スルヨ。」

死霊騎士デスカリバー・ナイト ATK1900

黒い品のある馬に乗った骸骨の騎士が現れる。・・・間違っても「アンデット・ウォリアー」とは違うからな？

・・・しまった！例え「オーバードロード・フュージョン」で「キメ

ラテエック・オーバー・ドラゴン」を特殊召喚したとしても、特殊召喚時の効果によって「死霊騎士デスカリバー・ナイト」の効果が誘発し、破壊されてしまう！

「ケケケ、リクルートモスベテ破壊スレバ意味ハナイ。手札カラ魔法カード「殺戮の衝動」ヲ発動！」

殺戮の衝動 魔法カード

効果：手札を2枚捨て、自分の場のレベル7以上の悪魔族モンスター1体を選択し、発動する。選択したモンスターはこのターン、相手の場の全てのモンスターに攻撃する。

「手札ヲ2枚墓地へ送り、自分ノ場ノレベル7以上ノ悪魔族モンスター1体ヲ選択シテ発動スル。選択シタモンスターハコノターン、相手ノ場ノスベテノモンスターニ攻撃スル。」

「お、おやおや。これじゃいくらモンスターが出てきても意味が無いね。」

「兄さん……。」

思わず吹雪さんと俺の口から不安の声が出る。

「バトル！「シザーマン」デ目障リナ機竜ドモヲ全テ破壊スル！」

サイバー・ドラゴンと同じように首を刎ねられ、破壊される。

「だが、「サイバー・ドラゴン・ドライ」が戦闘によって破壊されたとき、デッキから「サイバー」と名の付いた機械族モンスター1体を選択して特殊召喚することが出来る！「サイバー・ドラゴン・

「ドライ」を守備表示で特殊召喚！」

「ナラ、空ニナルマデ破壊スルマデダ。ケケケケケッ！」

再び首が刎ねられ、宙を舞った。

「再び「サイバー・ドラゴン・ドライ」の効果を発動。「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を守備表示で特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ DEF900

「無駄ダ！」

またもは刎ねられる。

どうでもいいけど、ここがオイルの池になりそうなんだが……。

「コレデ終ワリダア！「死霊騎士デスカリバー・ナイト」デダイレクトアタック！」

猛スピードで兄さんに突撃するデスカリバー・ナイト。馬のスピードによって威力を増した剣が兄さんに向かって振り下ろされた。ここまでなのか！？

「まだまだっ！セットカードオープン、罠カード「ガードブロック」を発動！この戦闘で発生するダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロウする！！！」

キーン！と、鈍い金属音と共にデスカリバー・ナイトが振り下ろした剣が弾かれる。

ひ、ひやひやさせるなあ。

「チィ。ダガ、次ノターンデ終ワラセル。ターンエンド!」

シザーマン 手札1 場 モンスター2 伏せ1

シザーマン ATK3500

死霊騎士デスカリバー・ナイト ATK1900

「俺のターン、ドロー!・・・!!」

ドローした瞬間。兄さんの顔が一気に変わった。

まさかこのタイミングで「オーバードロード・フュージョン」を引き当てたと言うのなら悲惨だな。

「俺は手札から魔法カード「苦渋の決断」を発動!デッキからカードを5枚選択し、相手はそこから1枚を選択する!俺が選ぶのは「サイバー・ドラゴン」2枚、「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」2枚、そして「プロト・サイバー・ドラゴン」だ!」

「ナラ、「プロト・サイバー・ドラゴン」ヲ選択スル!」

「なら、選択された「プロト・サイバー・ドラゴン」は手札に加え、その他のカードは墓地へ送る。そして手札から「プロト・サイバー・ドラゴン」を召喚!」

プロト・サイバー・ドラゴン ATK1100

全体的に丸びを帯びた形のサイバー・ドラゴンが現れる。

「サイバー・ドラゴン」シリーズの始祖とされているカードだ。今となってはサポートカードもそこそこ出ているので、あまり人気は無い。

「ケケケケケツ！ツイニ観念シタンダネ？・・・僕ガ地獄へ送ッテアゲルヨ。」

「いや、地獄へ送られるのは・・・お前の方だ！手札から装備魔法「守護神の矛」を発動し、「プロト・サイバー・ドラゴン」に装備！」

プロト・サイバー・ドラゴン ATK1100 9200

プロト・サイバー・ドラゴンの両目が光り、力強い咆哮を挙げる。未だに現役である事を示すような、誇りのある咆哮だ。

「バ、馬鹿ナ！！なぜ攻撃力ガココマデ上ガルンダ！？」

「装備魔法「守護神の矛」は装備モンスターと同じ名前を持つ墓地に存在するカードの数×900ポイント、攻撃力を上げる効果を持っている。」

「ダ、ダガ「プロト・サイバー・ドラゴン」八墓地ニ存在シナイハズダ！！」

「確かに「プロト・サイバー・ドラゴン」は墓地に存在しない。だが、このカードが場に表側表示で存在する限りこのカードの名称は「サイバー・ドラゴン」として扱う効果を持っている！そして、墓地の「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」と「サイバー・ドラゴン・ドライ」は墓地に存在する限り、名称を「サイバー・ドラゴン」とする効果がある。」

「ナ、ナラナゼ「プロト・サイバー・ドラゴン」ノ効果ニ「死霊騎

士デスカリバー・ナイト」ノ効果が発動シナイ!?」

「勉強不足だったな。「死霊騎士デスカリバー・ナイト」の効果はチェーンに乗る効果にのみ、発動する。「プロト・サイバー・ドラゴン」の名称変更効果は永続効果。よってチェーンには乗らない。もつとも、「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」の場合は起動効果だったから危なかったがな。」

「ソ、ソシナ馬鹿ナ・・・。」

「これがサイバー流の始祖、魂の源だ!!!バトル!」プロト・サイバー・ドラゴン」で「シザーマン」に攻撃!」

プロト・サイバー・ドラゴンがシザーマンをロックオンして、攻撃動作に入ろうとする。

「・・・ククク、カカツタナア!セツトカードオープン、罠カード
「ヘイト・バスター」ヲ発動!」

「あ、アレは悪魔族モンスターが攻撃対象になった時、相手攻撃モンスター1体と攻撃対象となったモンスターを破壊して、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるカード!」

「兄さん!」

驚いている俺達とは裏腹に、兄さんは不敵な笑みを浮かべていた。

「その程度の手は・・・お見通しだ。セツトカードオープン、カウンター罠「トラップ・ジャマー」を発動!バトルフェイズ中に発動した罠カード1枚の発動を無効にし、破壊する!」

「ヨ、読マレテイタノカ!?」

「使う機会がなかったただけだが・・・な。これで終いだ。ダメージステップに手札から速攻魔法「リミッター解除」発動!自分の場の機械族モンスターに攻撃力を倍にする!プロト・エヴォリューション・バースト!!!」

プロト・サイバー・ドラゴン ATK 9200 18400

「ギヤアアアアアア!!!」

シザーマンLP1200 - 13700

閃光がシザーマンを包み込み、徐々に体が溶けていくシザーマン。だが、プロト・サイバー・ドラゴンは一切手を抜かずに攻撃を続ける。そして・・・

「灰になったか・・・。地獄でもう1度出直して来い。」

どうやら決着がついたようだ。

しかし兄さんの制服は血まみれになっており、重体であることが分かる。

「兄さん。怪我は大丈夫?」

「ああ。この程度なら大丈夫だ。さて、帰るか。」

「翔君。亮の事は僕が面倒を見るから大丈夫だよ。君こそ気をつけてね。」

「はい。」

吹雪さんはこういったときにはふざけない人だと思うから、恐ろくは大丈夫だろう。

そして兄さんと吹雪さんはブルー寮へと戻って行った。

(私達も帰りましょうか。)

「そうだな。ん？」

ふと、シザーマンが灰になった場所が気になったので振り返る。するとそこには黒く不気味なCDが浮かんでいた。思い当たる節はあるんだが・・・違うはずだしなあ。

(回収しますか？)

「うーん。そうだな。」

ちょっとした興味心からそのCDを取り、ポケットに入れる。そして俺達はその場を後にした。

・・・

ブルー寮の亮の部屋にて

「痛いっ！！吹雪、染みるからもう少し優しくしてくれ！！」

「亮。痛いなら最初から言ったらどうなんだい？」

傷口を消毒したときの痛みにも苦しむつつ、亮は僕に苦情を出す。まったく、無茶をするからこうなるんだ！そんな親友の姿を見ながら、僕は呆れつつも聞いてみた。

「む……それは無理な注文だな。俺は兄だから翔に心配をかせたたくないんだ。」

苦い顔をしつつも、亮はどことなく楽しそうな顔をしている。

「ははは、その気持ちはよくわかるよ。」

そんな亮の姿を見て、僕も自然と笑いが出た。

「兄というのは……大変だな。吹雪。」

「そうだね。亮。」

・・・

「ふう、ハラハラしたなあ。」

「そうですね。下手をすればもっと大きな怪我をしていましたから。」

「だな。ま、ああ言っているんだし。大丈夫なんだろう。」

自室に戻った俺達はゆっくりしていた。

兄さんは一応、原作だと心臓停止してもちゃんと生き返ったんだし、この程度なら問題ないのだろう。

「ところで、翔。」

「ん、どうした？」

「これは一体何ですか。（黒微笑）」

アイリスが手にしているもの。それは「キングの看護婦は淫乱でなければならぬ」あなたのお注射、いただきちゃうんだから！」という本当のキングが見たらぶち切れしそうなパロディアダルトゲームだ。・・・って、誰がこんなものを置いたんだ！？

「いや、俺も知らないんだが……。てか、俺だとしても本棚に堂々と置かないぞ？」

「ふふふ……。」

げっ、ヤバイ！

アイリスが久しぶりに「ガーディアン・デスサイズ」の仮面を取り出している。

ってことは……。

「問答無用！！」

「アッー！！」

フィールド37：悪夢再び（後書き）

段々と話がおかしくなってきました。

第三期をイメージしたのですが・・・完全にミリタリーゲームになっていると言つ恐るべき結果になっていました。本来はカードゲームなのに。orz

フィールド38：ギャンブル（前書き）

遅くなってすみませんでした!!

TF6に付きっ切りになってしまい、こうなりました。
やっとフィギュアが5つ揃ったよ。やったね！
ということ、執筆活動を再開できそうです。

フィールド38：ギャンブル

「ん、翔。どうしたんですか？頬のそれは……。」

「気にするな。うん、気にしないでくれ。頼むから。」

俺の右頬にあるもの……それは、キスマークだ。

あの夜、アイリスに強く頬を吸われ、内出血させてから作ったのだ。口紅ではないから水で洗っても落ちないので、治るまで待つしかない。そして、それまでは周知の的になるだろう。

アイリスいわく、「これが罰です」「だそうだが……ある意味ピントや鉄拳よりきついな。」

「シニョール翔。頬に口紅が付いてありますが、どうかしましたノーネ？」

「気にしないでください。お願いですから……。」

「わ、分かりましたノーネ。」

クロノス先生も俺に声を掛けてくれたが、顔を真っ赤にして俯いている俺を見てなんとなく合点がいったのだろう。本当にいい先生だ。

「さて、今回は抜き打ちテストをさせてもらいますノーネ。」

クロノス先生の言葉に、生徒から不満の声が上がる。

まあ、抜き打ちだから簡単だと思うが……

「では、テスト用紙を配りますノーネ。」

さっそく用紙を見てみる。
何々？

第一問：自分の場にモンスターが1体存在し、伏せカードは「落とし穴」があります。相手がメインフェイズに手札から「サイバー・ドラゴン」を効果によって特殊召喚する時、「落とし穴」を発動できますか？（配点5点）

・・・簡単すぎるな。ちなみに答えは発動出来ない。
特殊召喚に対応していないからな。

第二問：自分のLPは100。相手のLPは1700です。このターン中に勝ちなさい。

場は自分：モンスター「ミノタウルス」ATK1700 伏せなし。
相手：モンスター「古代の機械巨人」ATK3000 伏せなし。
自分の手札には「オネスト」と「幻惑の巻物」と「愚鈍の斧」があります。（配点5点）

またまた簡単だな。正解は自分の「ミノタウルス」に「幻惑の巻物」を装備し、光属性に変更。バトルフェイズに入り、「ミノタウルス」で「古代の機械巨人」に攻撃。そしてダメージステップに「オネスト」を発動し、そのまま勝利。これは1度でも霊使いデッキを使っただ人ならすぐに解けそうだ。

第三問：自分のLP100。相手のLPは2800です。このターン中に勝利しなさい。

場は自分：モンスター「カードエクスクルード」ATK400
伏せなし。

相手：モンスター「ネクロ・ガードナー」DEF1200 「マジ

ツク・ストライカー」 ATK600
伏せ2枚「聖なるバリア ミラーフォース」「天罰」
自分の手札は「ブリザード・プリンセス」「精神操作」「ディメン
ション・マジック」「聖なる魔術師」
相手の手札は1枚です。

(以下の点に注意)

自分の場のモンスターが効果を発動したとき、「天罰」を発動しま
す。また墓地の「ネクロ・ガードナー」が除外される場合、チェー
ンして「ネクロ・ガードナー」の効果を発動します。

「ネクロ・ガードナー」が墓地に存在する時、1番攻撃力の高いモ
ンスターの攻撃時に効果を発動します。

「聖なるバリア ミラーフォース」は相手の攻撃宣言時に必ず発動
します。

(配点90点)

配点高っ！てか、これを正解しなかったら先の2問は意味無しじゃ
ねーか！！

まあ、戦士族が多いレッド寮にとっては少し問題が難しいな。
ん、どうして戦士族が多いかって？それはだな、値段が安いからな
んだ。

言っっちゃ悪いかもしれないが、子供のおこずかいなんて高が知れて
いるからな。まあ、その中で以下に効率良くカードを集めるかって
事になるとやはり種類が豊富で優秀な「戦士族」に飛びつくのは眼
に見えている。他にも「恐竜族」「獣戦士族」「獣族」が結構安め
であつたりするんだよなあ。。。逆に高いのは「機械族」「魔法
使い族」「ドラゴン族」の3択だろうな。「魔法使い族」「ドラゴ
ン族」は言わずがなで、「機械族」はこの世界では勇者シリーズや
他の人気アニメがラインナップされているからその世代からの支持
率が凄まじいらしい。そのおかげで「リミッター解除」の値段が一

気に高騰したんだよなあ。あ、そうそう。「天使族」と「悪魔族」は一部がべらぼうに高いだけであって一般的なカードは普通なんだよね。「天使族」だと「アテナ」「ヘカテリス」「堕天使ゼラート」など。まあ、「堕天使ゼラート」は汎用性があるからね。「アテナ」と「ヘカテリス」はほぼキーカードだし。ちなみに「悪魔族」は「冥府の使者ゴーズ」「トラゴエディア」のツートップだったけな。ちと癖は強いがまあ、納得はいくかな。

と、さてさて・・・正解は「精神操作」を発動して「ネクロ・ガードナー」をいただき、さらに「デイモンシオン・マジック」で「ネクロ・ガードナー」を生贄に捧げて、「聖なる魔術師」を召喚し、「マジック・ストライカー」を破壊。ん、「デイモンシオン・マジック」は魔法使い族を生贄にしなければならんだって？いや、正確には自分の場に魔法使い族がいれば生贄は何でもいいんだ。と、そして特殊召喚した「聖なる魔術師」を生贄に「ブリザード・プリンス」を召喚。そして効果により相手の伏せカードを1ターン封じる。この効果はチェインを組まないのだから「天罰」によって防がない。そして「カードエクスクルード」の効果が発動し、相手の墓地の「ネクロ・ガードナー」をゲームから除外するが、チェインして「ネクロ・ガードナー」の効果が発動される。バトルフェイズに入り最初に「カードエクスクルード」で攻撃し、「ネクロ・ガードナー」の効果が発動させる。前に1度やった手だ。そして「ブリザード・プリンス」で攻撃。つと。

全てを書き終え、肩をとんとんと叩く。

（おつかれさまです。マスター。）

（ああ、流石にこの問題は面倒だった。）

アイリスの声に対し、テストのプリント用紙の端に文字を書き、それに答えた。

ちよっと暇が出来たので周りの様子見をすることにしよう。といっても、さすがに辺りを見渡すのはカンニング行為に思われるので耳を立てるだけにする。

「げっ！こんな問題ありかよ！！」

この悲鳴は十代か。まあ、あいつは戦士族メインだから仕方ないな。

「ん、ここはこうしてっど……。」

少し苦戦しつつも、順調に解いている風。

あいつは色んなデッキを研究していたからまあ、大丈夫だろ。

そして解き終わってから5分後……

「そこまでなノーネ。では、ペンを下ろすノーネ。」

クロノス先生の声と共にペンの音が止まった。

そして順々にプリントが回収されていく。ちなみにプリントの端に書いた文字は消しているから大丈夫だ。

「今日の講義はここまでのノーネ。それでは、解散なノーネ！」

その一言共に、教室内の生徒が駆け足で外へ出て行った。

「学園内で走っては駄目なノーネ！！」

クロノス先生が大声を出して注意するがあっという間に生徒はいな

くなり、いつの間にか俺と十代だけが残っていた。

「なあ、翔。今日って何かあったっけ？」

「いや、確か何も無かったはずだけど。クロノス先生。心当たりはありませんか？」

十代が疑問を浮かべた顔をしつつ、俺に尋ねる。

残念だが、俺も十代と同じく理由が思いつかない。のでクロノス先生に聞いてみる。

するとクロノス先生は渋い顔になっていた。

「クロノス先生？」

「いよいよアレがやって来たノーネ。」

「あれ？」

「そう。禁断のドローパーンver2が入荷されたノーネ。」

「え、そうなのか！？やべっ、俺も急がなきゃ！！！」

十代が走って教室から去っていく。

そっいえば十代は強運の持ち主だったから連続で黄金の卵パンを当たっていたよな？

まあ、俺も行ってみますか。

「じゃあ、クロノス先生。」

「皆に廊下を走らないように言ってほしいノーネ。」

「わかりました。」

ため息をついて頭を抱えるクロノス先生に対して、苦笑しつつに答える。

教員って大変なんだな。

そうして俺も教室を後にした。

・・・

そうして購買部に到着した俺が目にしたのは・・・阿鼻叫喚の世界だった。

「な、「爆導索」だと！？く、口の中で爆竹が・・・あばばばっ
！！」

「痛え！は、歯が。何で鎖が入っているんだ！？何？「連鎖破壊」
だと！？」

「うえ、血の味がするなあ。ん、「天使の生き血」かよ。勘弁して
くれ。」

ある者は口の中で爆竹が破裂して、ある者は鎖を噛んでしまい、ある者は血の味がするパンを引いてしまったようだ。
なるほど。クロノス先生が渋い顔をしていた理由がよくわかった。

（どうやらネタを増やしたようですね。）

「ああ。だけどこれは酷い。」

恐らくネタにを強化した結果がこれなんだろう。しかし、前者は病院送りレベルだぞ？

「やった！！黄金の卵パン・・・じゃない!？」

歓喜の音が一点、悲鳴に変わった。

この声は十代か。何があったんだ？

「どうした？十代。」

「しょ、翔。これ。」

何々？「偽者の罠」か。・・・懐かしいな。

恐らくは着色料で黄金の卵パンそっくりに仕立て上げたのだろう。何という孔明の罠。

「ぐ、ぐぶお!!！」

顔を真っ青にしつつ、腹を押さえながら必死にトイレを目指す凧。ふと、凧の手から1枚のカードが落ちた。

「激流葬」

うわぁ・・・。

凧。アウト!!

(しかし、何でこんなに被害者が出るんでしょうか?)

アイリスの言う通り、よく見ると普通のパンに当たった人が見当たらない。

普通のドローパンならまだここまで被害が出ることは無いはずだが・
・・。

「禁断の名は伊達じゃないってことか。」

もちろん、嫌な意味でな。

しかし、・・・俺も食いたくなってきた!!

(え、ま、マスター!!)

「トメさん。今日入荷したドローパンを1つお願いします。」

「いいのかい？何やら騒がしいことになっているけど。」

「恐らく大丈夫です。・・・さて、いただきます!!」

袋からパンを取り出し、勢いよくかぶりつく。

ちなみにパンの形はハンバーガー系のバンズだ。

さて、気になる中身は？

「・・・。に、苦い。」

そう、苦すぎるのだ。

(えーと、「ゴブリンの秘薬」ですね。これは)

「良薬口に苦し」と言っが、これは苦すぎる。

恐らく、蛇の人も絶句するだろう。それほど苦いんだ。・・・やべ、
涙が出てきた。

(大丈夫ですか。翔?)

「う、うん。何とか大丈夫だ。」

前の勇者達に比べればまだマシなだけだね。

しかしまあ、禁断のドロップンとはいえここまで被害が大きいわけは無いんだが・・・

てか、商品化すらされないだろ!!危険すぎて!!

「吹雪!!俺は人間をやめるぞー!!」

この声は兄さん!?

ふと、声をした方を見ると吹雪さんと兄さんが対峙していた。

しかもその手には「リミッター解除」のカードが握られている。原因はアレか!

「亮。年上のお姉さんの魅力に何故気づかない!？」

「黙れ吹雪!!年食った女などのどこに魅力があるんだ!？」

・・・性癖か。ほつといておこづ。

そう思った矢先、一部から殺伐とした雰囲気の中に明日香が乱入した。

おお、助かった!!

「やめて!?!あたしのために争わないで!?!」

な、何か物凄く勘違いをしてらっしゃるようです。

てか、ジュンコとももえが参戦して一緒に歌いだしたし。何がどうなっているんだ!??

ピーンポーンポーンポーン

よくある放送室からの連絡音だ。
まさかいきなり絶叫が流れ出すとか無いよな？

「ああん それは私の・ん、酷いわ。肉まんを乱暴的に鷲掴みするなんて。」

「声じゃあ否定していても、体は正直ですねぇ？」

「も、もう……。しょうがない子ね。」

シンクロ系のスイミングに使われるイヤンな音楽と共に昼ドラ的な何かが放送室から漏れ出した。

もつとヤバイのキター！！てか、放送室もノリノリだなこれ。

てか、これはアウトだろ！？絶対！！

しかしこの艶やかな声で男子生徒の大半がやばいことになっているし……。気持ちはお察しします。

ちなみに俺は大丈夫だ。何っ？か、エロイというより笑いの方がこみ上げてきたからなあ。アイリスは顔を真っ赤にしているが。

「ふふふ。私の掌で愚民共が踊るのは最高ね！！」

そんな高らかな声とともに半裸の女性が現れる。

ん、ちよつと待て！？こいつは「魅惑の女王 LV7」じゃないか！！

ふと、彼女が俺のほうを見る。

「その青髪の方や、封印の鍵を差し出しなさい。」

その声とともに俺の体が勝手に動き出した。
やばい！体のコントローラが聞かない！！

（翔！？しっかりしてください！！）

「翔。どうしたんだ？」

十代が心配した口調で俺に尋ねる。

そっだ、アイリスは対象になっていないから・・・説明すれば何とかなるかもしれない。

（アイリス。十代に奴と決闘するように言ってくれ。）

（はい。十代さん。ハネクリボーさん。聞こえますか？）

「お、アイリス。久しぶり。」

（クリクリ〜。）

（お久しぶりです。と、悠長に話している暇は無いですね。十代さん。彼女は鍵を狙う者です。決闘して鍵を守ってください！）

「確かそれって、凧が話していた・・・。」

（はい。そうです。）

「あれって本当だったんだ。まあ、いいや。とりあえずわかった。」

どうやら十代が事を理解してくれたようだ。

そして女王に近づき、デュエルディスクを構える。
この流れはまさか……。

「おい、デュエルしろよ。」

言いやがった！

てか、その台詞は蟹だろうが！！

「ふふ、威勢のいい坊やね。いいわ。先に片付けてあげるわ。」

十代の言葉に女王が反応したようだ。

どうやら、その気になったらしい。さすが主人公。

「決闘！！」

「私の先攻、ドロー！私は手札から「クリッター」を攻撃表示で召喚！」

クリッター ATK1000

クリボーを野生的にしたモンスターが現れる。

しかし普通は攻撃表示にするか？

「私はこのままターンエンド！」

魅惑の女王 手札5 場 モンスター1 伏せ0

クリッター ATK1000

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「E・HERO ワイルドマン」を召喚！」

ワイルドマン ATK1500

民族風の男性が現れる。といつても、アマゾネスを男性化させたよ
うな感じだ。

ちなみに罠の効果を受けないのは優秀だと思う。

「バトル！「ワイルドマン」で「クリッター」に攻撃！」

背中にしよつていた剣を振り、クリッターを真つ二つに切り捨てる。
攻撃方法もワイルドだな。

魅惑の女王LP4000 3500

「破壊された「クリッター」の効果発動！このカードが破壊され墓
地へ送られたとき、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを
1枚手札に加える。私は「魅惑の女王 LV3」を手札に加えるわ
！」

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

十代 手札4 場 モンスター1 伏せ1

E・HERO ワイルドマン ATK1500

「私のターン、ドロー！私は手札から「魅惑の女王 LV3」を召
喚！」

魅惑の女王LV3 ATK500

LVシリーズでも特に難しいと言われる魅惑の女王が現れる。

うまく使えば・・・いや、無理だな。

「さらに手札から装備魔法「降格処分」を発動し、「ワイルドマン」に装備させるわ！」

ワイルドマン LV4 2

「あれ？レベルが下がっただけだけど・・・何がしたかったんだ？」

「ふふふ、「魅惑の女王LV3」のモンスター効果を発動するわ！

相手の場のレベル3以下のモンスター1体を選択し、装備させる！」

「て、事は・・・」

「そう、あなたのワイルドマンをいただくわ！」

魅惑の女王が杖を掲げると、杖の先が紫色の怪しげな光を発する。

するとワイルドマンが消えてしまった。どうやら吸収されたようだ。

「げえ！そんなのありがよー!!」

「そして「魅惑の女王」でダイレクトアタック！」

女王が魔法を唱える。すると青い弾が現れ、十代に向かって発射された。

どうでもいいけど、カメックを思い出した俺は何なんだ・・・。

「うわっ！ー!!」

十代LP4000 3500

「痛てててて……。」

「ふふふ。私はカードを2枚伏せてターンを終了するわ。」

魅惑の女王 手札3 場 モンスター1 伏せ2

魅惑の女王LV3 ATK500

「俺のターン、ドロー！よし、俺は手札から「E-HERO フェ
ザーマン」を攻撃表示で召喚！」

フェザーマン ATK1000

羽を生やした緑色の男性が現れる。

フェザーマンってこういうったアホネタ話には殆ど出番があるような
……。

「バトル！「フェザーマン」で「魅惑の女王」に攻撃！フェザー・
シヨットー！」

「甘いわっ！セットカードオープン、罠カード「くづ鉄のかかし」
を発動！攻撃を無効にしする！」

フェザーマンが翼の羽を飛ばして女王を狙うが、くづ鉄のかかしが
それを防いだ。

「さらに、「くづ鉄のかかし」は発動後、再びセット状態にするこ
とが出来るわ！」

再びかかしは伏せられる。この効果って地味に強いよな。

特に蟹が使うと。

「ええっ！そんなのありかよ!？」

この時代では中々お目にかかれない効果だから十代が驚いている。
サイクロンやライトジャスティスが無い限り突破することはほぼ不
可能なのが厳しいな。

「ん、俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

十代 手札2 場 モンスター1 伏せ2

E・HERO フェザーマン ATK1000

「私のターン、ドロー！そしてスタンバイフェイズ時に「魅惑の女王LV3」の効果発動！このカードが相手モンスターを装備した状態の場合、このモンスターを生贄に捧げ、デッキまたは手札から「魅惑の女王LV5」を特殊召喚することが出来る！「魅惑の女王LV3」を生贄に捧げ、デッキから「魅惑の女王LV5」を特殊召喚するわ！」

魅惑の女王LV5 ATK1000

「えっと、LV5って事は・・・。」

「そう、坊やの場のレベル5以下のモンスター1体を装備することが出来るわ。」

「やっほー！」

「「魅惑の女王LV5」の効果でレベル3の「フェザーマン」を装

備するわ！」

「ああ、フェザーマン!!！」

再び杖が光り、今度はフェザーマンが吸収された。
やはりネタには欠かせないな。フェザーマンは。

「バトル!」魅惑の女王LV5」でダイレクトアタック!」

「くう!!！」

十代LP3500 2500

「私はこのままターンを終了するわ。さあ、坊や。抗ってみなさい?」

魅惑の女王 手札4 場 モンスター1 伏せ2

魅惑の女王LV5 ATK1000

「俺のターン、ドロー!・・・あれ?こうすればいいんじゃないかね?」

何やら十代は秘策を思いついたようだ。

「俺はモンスターをセットしてターンエンド!」

なるほどな。モンスターをセットすれば情報を公開しないためレベルが判明しない。

よって吸収されないと考えたのだろう。・・・やるな。十代。だが、奴はその1歩先に行くぞ?

十代 手札2 場 モンスター1 伏せ2
セットモンスター DEF?

「私のターン、ドロー！ふふ、坊やなりに頭を使ったようね。ただど甘いわ？私は「魅惑の女王LV5」を生贄に捧げ、「魅惑の女王LV7」をデッキから特殊召喚するわ！」

魅惑の女王LV7 ATK1500

「あれ？絵柄と同じだ。」

「そうよ。だから私自身が場に出るわ。」

「そして私自身の効果発動！相手の場のモンスター1体を選択し、装備することが出来る！そしてこの効果は相手モンスターの表裏表示に関係なく発動できるわ！」

「や、やばー！」

「ふふ、あなたのセットモンスターを装備させてもらっわ！」

3度十代のモンスターが女王によって吸収された。

今度はクレイマンだったか。スパークマンだったら良かったのに。

「さらに手札から「女王親衛隊」を攻撃表示で召喚するわ！」

女王親衛隊 ATK1700

女王を守るべく、剣を装備したスーツ姿の男達が立ち塞がる。

てか、1枚のカードなのに複数人いるのって結構珍しいような・・・

「バトルよ！」「女王親衛隊」でダイレクトアタック！」

「っ！」

男達が一斉に十代に襲い掛かる。

そして四方八方から剣で切り刻まれた・・・が、出血はしていない。どうやら俺とは違い闇の決闘ではないようだ。

十代LP2500 800

「十代！！！」

「トドメよ！私でダイレクトアタック！」

女王がそのまま十代に殴りかかる。

「ダメージ計算時にセットカードオープン、罠カード「ガードブロック」を発動！この戦闘でのダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロウする！」

見えない壁が女王の攻撃を防ぎ、十代を守った。

ひゃひゃさせるな。

「中々やるわね。私は手札から装備魔法「伝説の剣」を発動し、「女王親衛隊」に装備させるわ。」

女王親衛隊 ATK1700 2000

「さらに装備魔法「魔術の秘書」を私に装備するわ。」

魅惑の女王LV7 ATK1500 1800

「そしてターンエンド。」

魅惑の女王 手札2 場 モンスター2 伏せ2

魅惑の女王LV7 ATK1800（装備魔法「魔術の秘書」）

女王親衛隊 ATK2000（装備魔法「伝説の剣」）

「へへ、面白いなあ。」

十代が笑っている。・・・これは勝利フラグか？

「ふふ、恐怖のあまりおかしくなったのかしら？」

「いや、やっぱり決闘はこうでなくっちゃ！！俺のターン、ドロー！！セットカードオープン、魔法カード「E エマジエンシーコール」を発動！デッキから「HERO」と名の付いたモンスター1体を手札に加える！俺はデッキから「E・HERO バブルマン」を手札に加える！そして「バブルマン」を攻撃表示で召喚！」

バブルマン ATK800

水色の少し太った男性が現れる。アニメ効果はマジ鬼畜。

まあ、十代も「困った時はバブルマン」発言をしているからなあ。

「「バブルマン」の効果発動！このカードの召喚成功時、自分の場にこのカード以外のカードが無い時、デッキからカードを2枚ドロースする！よし、さらに手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動！」

デッキからカードを5枚選択し、相手はそこからカードを1枚選ぶ。俺が選択するのは「E・HERO フェザーマン」「E・HERO バーストレディ」「E・HERO クレイマン」「E・HERO スパークマン」「E・HERO ネクロ・ダークマン」だ！」

「（通常召喚権はもう使ったから・・・）なら、「ネクロ・ダークマン」を選択するわ。」

「じゃあ、選択された「ネクロ・ダークマン」を手札に加え、それ以外のカードは墓地へ送る。さらに手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てる！」

「最後の抵抗かしら？」

「いや。これがHEROの底力さ。手札から魔法カード「ミラクル・フュージョン」を発動！墓地の「フェザーマン」と「バーストレディ」をゲームから除外し、融合モンスターを特殊召喚する！現れる！！マイフェアリットカード、「E・HERO フレイム・ウイングマン」！」

フレイム・ウイングマン ATK2100

久しぶりに見たフレイム・ウイングマン。

第一話では見事に返り討ちに会ったからなあ。

「さらに手札から魔法カード「ハリケーン」を発動！お互いの魔法・罠カードを全て本来の持ち主の手札に戻す！」

「し、しまった！！」

ハリケーンがお互いの魔法・罨ゾーンのカードを吹き飛ばした。
これで女王を守る壁はなくなったな。

「そして魔法カード「ヒーローハート」を発動！「フレイム・ウィングマン」の攻撃力を半分にし、このターン2回攻撃をすることが出来る！！」

フレイム・ウィングマン ATK2100 1050

「痛恨なプレイングミスね。攻撃力がたったの1050のモンスターで私達に敵うと思ってるの？」

「へへっ、HEROにはHEROの戦う舞台つてのがあるんだ！！手札からフィールド魔法「摩天楼―スカイ・スクレイパー」発動！！」

十代のテーマと共に、フィールド魔法の効果によって場が大きく変わった。

ビルなどの建築物が生え出し、一瞬にしてアメリカな都市へと変貌させる。そして一番高いビルの頂上にいるのもちろんフレイム・ウィングマン。

「バトル！「フレイム・ウィングマン」で「女王親衛隊」に攻撃！！ビルから飛び降り、親衛隊に向かって襲い掛かる。

その姿はまるで獲物を狙うタカのようなようだ。

「血迷ったのかしら？私のモンスターのほうが攻撃力が上よ？」

「それがこのフィールド魔法のトリガーになるのさ。」「摩天楼ースカイ・スクレイパー」はHEROが相手モンスターに攻撃を行う時、相手より攻撃力が低い場合、攻撃力を1000ポイントアップさせるフィールド魔法!!」

フレイム・ウイングマン ATK1050 2050

「何ですって!?!」

「行けえ!フレイム・ウイングマン!!スカイ・スクレイパーシュートッ!!」

上空からの勢いを生かし、親衛隊を一掃するフレイム・ウイングマン。

その姿はまるでアメリカンコミックのヒーローだ。

魅惑の女王LP3500 3150

「けど、ダメージは微々たる物よ?」

「「フレイム・ウイングマン」の効果発動!相手モンスターを戦闘によって破壊した時、その攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える!」

「そんな!!」

魅惑の女王LP3150 1450

「そして「ヒーローハート」の効果により、「フレイム・ウイングマン」はもう1度戦闘を行うことが出来る!」

「し、しまった!！」

「バトル!」「フレイム・ウィングマン」で「魅惑の女王」に攻撃! スカイ・スクレイパーシユート!！」

再びビルの頂上へ戻り、強襲するフレイム・ウィングマン。

女王も呪文を唱え対抗しようとするものの、それよりも先にフレイム・ウィングマンが懐に飛び込み、右手の火炎放射器によって女王を燃やし尽くした。

「きゃあ!！」

魅惑の女王LP1450 900

「再び「フレイム・ウィングマン」の効果を発動!!相手に破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える!!」

魅惑の女王LP900 0

「こ、こんな方法で……。」

片膝を付き、倒れる女王。

「ガッチャ!楽しいデュエルだったぜ!！」

ビシッ!と例のポーズを取り、かっこつける十代。
やっぱりこれがないとね。

「ふふ、まさか逆転されるとはね。すごいわ。坊や。」

「言っておくけど、俺は坊やじゃなくて遊城 十代って名前があるんだぜ？」

「なら、十代。次は負けないわよ？」

「ああ！」

そうして魅惑の女王は去っていった。

すると次第に兄さんや明日香といったおかしな行動を取っていたメンバーの正気が戻った。どうやらドロパンに入っていたカードに闇の力を使って操っていたようだ。・・・何つーか、しょーもないような気がするな。うん。

とりあえず、ほっとしていると背後から殺気を感じた。

「ふふふふふ。」

こ、この声は・・・。

「皆ここで正座をするノーネ!!！」

やばい!! クロノス先生にばれちゃった!!
急いで逃げなければ。

「ま、待つノーネ!!！」

皆が一斉に逃げ出し、それを追うクロノス先生。
結局午後は島全体を使った鬼ごっこにより、講義は潰れることとなった。

・・・

そしてその日の夜。ドローパーン事件により職員会議が発生し、夜遅くまでそれに付きっ切りになっていましたにや。うう、おかげでお腹が空きましたにや。

「はあ、やっと学園の騒ぎにひと段落が着きましたにや。」

（やはり例の？）

「まあ、そうみたいかもしれないにや。・・・といっても、イタズラ程度の被害だったから良かったですにや。」

（まるで金魚蜂を被った連中みたいな感じですね。）

「それだったらまだ可愛げがありますにや。ん。ひ、人が流されていますにや!」

よく見ると青髪の青年がぶかぶかと浮いていた。

急いで海に飛び込み、彼を助け出した。幸いにも息があつたので生きているのは確実だ。

ふと、青年の顔を見してみる。その見覚えのある顔に私は驚きを隠せなかった。

・・・なぜ、彼がここに？

アンチノミー。いや、ブルーノ・・・。

フィールド38：ギャンブル（後書き）

もはや原作（笑）の勢いになってきました。

が、もはや暴走を止める気は無いのであしからず。それでは。

フィールド39：整備士と破壊の王子（前書き）

投稿が遅れて申し訳ありませんでした。orz
季節風にかかってしまい、ちよつとダウンしています。（まだ治っていません）

ブルーノちゃん。まさかの参戦！

ですが、彼は猫が好きみたいなので懐かしい（作者にとっては）デ
ツキにしました。・・・分かる人がいるかなあ？

と、今回は決闘の内容が少なめなので2連続で入れてみました。

注意：捏造が嫌な方はお勧めしません。てか、今回からバリバリ捏
造していきますのでご注意を。

追伸：一部修正しました。&後半の一部を削除させてもらいました。
流石に彼女達はまだ早かった・・・。

フィールド39：整備士と破壊の王子

「何をする気だ！？ブルーノ！！」

「僕の中に組み込まれているプラスの遊星因子をマイナスのモーメントにぶつける。そうすればアースクレイドルは上昇を始め、落下を防ぐ事が出来るはずだ。」

「やめろ！そんな事をしたらお前が。」

「いいんだ。遊星。僕達のツケは僕達自身がケリをつけなければならぬんだ。」

デルタイーグルが加速する。ボロボロになりつつも、最後の仕事を果たすために誇り高く、未来を創るために前へ。大きく羽ばたいた。

「生きるんだ。遊星！！君は僕の、いや僕達の希望だ！！」

「やめろ！ブルーノツ！！」

「うおおおおお！！」

叫び声と共にデルタイーグルが。そしてボク自身がモーメントに衝突した感触があった。

これで救われる。この希望の灯が。・・・ボク達が夢見た未来が。

「ブルーノオツ！！」

さよなら。皆・・・さよなら。遊星・・・

・・・

「っは！」

突如として目が覚めた。

目の前には少し太り気味のトラ猫が僕の腹に乗って、顔をまじまじと見ている。

辺りを見渡したところ、何かの室内であることは確かなんだけど・・・どこなんだろう？

「目が覚めましたかにはゃ〜？」

この抜けた声は・・・まさか！？

「アルナエムツ！？」

「にゃ。今は大徳寺と名乗っていますにゃ。・・・アンチノミー。」

とても懐かしい友人に会い、驚く。あの事故以降、彼とはまったく連絡がついていなかったからだ。

ふと、周りが気になり辺りを見渡した。どうやら病院ではないようだが・・・

「ここは・・・っ！？」

「あまり動かない方がいいにゃ。まるで交通事故でもあったかのような傷の負い方だったのにゃ。」

「ある意味では・・・正解かもね。」

ボクはアルナエム。いや、大徳寺に今までであった出来事を全て話した。

記憶喪失なった僕を仲間として認めてくれた皆のこと。そしてチームとなつて大会に出場し、見事に優勝したこと。ネオドミノシティを消滅させるべくZ・ONEがアースクレイドルを落下させようとしたこと。そして、僕とデルタイグルをアースクレイドルのモメントに激突させ、ボクという存在がその世界から消滅したこと。

「そうか……。やはりZ・ONEは。」

「うん。彼は逝つたよ。安らかな笑顔で。」

「こういうことは非情かもしれないが……。やはり私の錬金術は、いや、不老不死の研究は初めから間違いだつたと思わざるを得ないな。所詮、人は死ぬからこそ輝くことが出来る。教員になって、生徒と接しているうちにそう感じざるを得なくなつてしまった。」

暗く、俯きながら呟く大徳寺。

まるで罪の重さを初めて知つた犯罪者のように、手を震わせながら言葉を続ける。

「そうだね。ボクも……。そう思うよ。」

「周りから誰もいなくなつて……。ただ1人抗い続ける。まるで先の見えないマラソンのようだ。そんな道を、私は彼に案内させてしまった。」

大徳寺は涙を流し、かつての自分を悔いる。そんな彼にボクは言葉を投げかけた。

「けど、Z・ONE。いや、遊星は走り続けた。例えば地獄だろうと、その先に希望を諦めきれていなかったから。例えば、自身が悪と罵られようと。1人でも多くの人を救いたかった。その思いが、ネオドミノシティにアースクレイドルを落下させるといふ非情な手段を選ばせてしまったのかも知れない。」

「もし……いぶし銀の彼がいたとしても、遊星と同じ事をしていたかもしれないな。」

「彼も責任感が強いからね。って、あれ？彼とは連絡が付いていないのかい？」

「……実は転移の時にバラバラになってしまったな。予定なら私と同じ地点に飛ばされるはずだったのだが。」

「そ、そうなんだ。」

「まあ、あいつのことなら心配は無い。よほどのことでもない限り死にはしないだろうし。」

「そうだね。」

ふと、彼の事を思い出す。

冷静のように見えて理想や情熱に関しては人一倍に熱気があり、また義理人情にかけても厚いが、いつも壁にもたれているというちょっと変わった人だった。

「アンチノミー。いや、ブルーノ。」

「どうしたんだい。大徳寺？」

「悪いが明日から働いてもらうぞ？」

「別に構わないけど、何をすればいいの？」

「簡単に言うただな・・・」

「い、いいけど、ボクにそんなことが出来るかなあ？」

流石にそんなことはしたことが無いので不安が募る。

ジャックみたいに無職ってのは嫌だけど、人に物を教えるのは難しいからね。

「まあ、変な事をしなければ大丈夫だ。さて・・・」

そういうと、大徳寺は猫の刺繍が入ったエプロンを来てフライパンを持つ。

彼の足元には今さっきの猫が頬ずりしていた。おなかが空いているのだろう。

「ちやっちやとご飯にしますかにや。」

「・・・治ってなかったんだ。その癖。」

「実を言うと、結構気に入ってたりしますにや。」

「そうなんだ・・・。」

何も言わないことにしよう。うん。

・・・
そして次の日。

「そういえば、今日は新しい先生が来るらしいな。」

「マジで!?!」

三沢の言葉に俺は驚いた。

何せ原作ではそんなことが無かったからだ。まあ、もはや原作のげの文字が少し残っているだけだが・・・。

「ああ。と言っても、殆ど情報が入っていないからどんな先生かは不明だな。」

ガイガイワヤワヤと話していると、大徳寺先生が教室に入ってきた。お、そろそろか？

「皆、静かにするにや。今から新しい先生を紹介しますにや!じゃあ、入ってほしいのにや。」

・・・シーン。

「あれ?」

新しい先生が入ってこない。どうしたんだ?遅刻か? そう思っていると・・・

「ほーら、いい子ちゃんねー。ここもしっかり拭いてあげるね。」

え？

「・・・何やっているのにゃ？」

「いや、ファラオの毛並みを整えていてね。」

ああ。なるほど。猫の毛並みか・・・。待てい！？
なんで彼がここの世界にいるんだ？

「それよりも早く表に出てほしいにゃ。すでに自己紹介は始まっていますにゃ！」

「ゴメンゴメン。と、お待たせ！皆！！！」

記憶喪失。青髪。メカニック。

5D'sでこのキーワードを入れればほぼ確実に「みんな大好き」
が頭につく彼が教室に入ってきた。いつもの服装で・・・結構自由
なんだな。服装に関しては。
後一つ、目が虚ろではなくちゃんと光が灯っていた。

「ボクの名前は皆大好きブルーノちゃん！！！」

体を乗り出し、万遍の笑みで右の人差し指で自身を指す。

ドサッ！

皆が一斉にずっこける。物凄く息のあった行動だとちよつとばかり
感心してしまった。

てか、感じていることは皆一緒か。

ふと、呆れ顔をしたクロノス先生が教室にいた。・・・見ちまった
のか。

「シニョールブルーノ。いきなりで悪いですが、あなたの実力を試させてもらってもよろしいノーネ？」

「え。別に構わないけど・・・。」

「なら、早速腕試しをさせてもらおうノーネ。」

まあ、あんな事をいきなりされたら腕の方が不安だろうなあ・・・。
ちよっとばかり、同情はします。

・・・

そして歓迎会は急遽クロノスVSブルーノの決闘となった。

生徒一同が見守る中、・・・ついにゴングが切って落とされようとしている。

「それでは」

「「決闘!!!」なノーネ!」

「私の先攻、ドローナノーネ。私は手札からフィールド魔法「歯車街」を発動するノーネ。」

その名の通り、歯車によって構成された街が出現した。
初っ端これか・・・きついな。

「フィールド魔法「歯車街」の効果は「アンティーク・ギア」と名の付くモンスターの生贄が1体少なくなるノーネ。よって私は手札から、「古代の機械獣」を召喚しますノーネ。」

古代の機械獣 ATK2000

少し古びた感じの獣が現れる。攻撃力は少し低いが、能力は強い。しかし、これのモチーフって何だろ？チーターとかかな？

「さらに私はカードを1枚伏せてターンを終了するノーネ。」

クロノス 手札3 場 フィールド魔法「歯車街」モンスター1
伏せ¹

古代の機械獣 ATK2000

「アンティーク・ギアか・・・少し厄介だね。僕のターン、ドロ！僕は手札から魔法カード「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドロし、その後2枚捨てる。よし、手札から「マッドサイエンティスト 剛くん」を守備表示で召喚するよ！」

マッドサイエンティスト 剛くん DEF1600

「え、ワシツ!？」

白衣を着た球体体系のおっさんが現れる。
懐かしいなあ。

「さらにボクの場合に「マッドサイエンティスト 剛くん」が場に存在しているから、手札から「サイボーグ ミーくん」を攻撃表示で特殊召喚するよ！」

サイボーグ ミーくん ATK2400

「剛くん。大丈夫!？」

「うん。ワシは大丈夫だよ。ミーくん。」

鋼色のボディをした猫型のロボットが現れる。

そして先に出てきた剛くんを心配していたようだ。うん、やっぱり彼らはこうでなくちゃ。

「そして「マッドサイエンティスト 剛くん」のモンスター効果発動！1ターンに1度、デッキ又は墓地から装備魔法を1枚選択し、自分の場のモンスターに装備するが出来る！ボクはデッキから装備魔法「ガトリング砲」を「ミーくん」に装備！」

「ミーくん、これを使ってくれ！」

「ありがとう。剛くん！」

剛くんが急いでガトリング砲を組み上げ、ミーくんに投げ渡した。ミーくんはそれをキャッチして右手に装備する。

サイボーグ ミーくん ATK2400 3000

「バトル！「ミーくん」で「古代の機械獣」に攻撃！」

「い、急いで接近するノーネー！」

クロノス先生の言葉に反応し、機械獣がミーくん飛び掛った。

だが、ミーくんは完全にその動きを見切っており、機械獣に向けてガトリング砲を構えた。そして・・・

「うおおおおおっ！ー！」

ドドドドッ！！

ガトリング砲から銃弾が発射され、機械獣に襲い掛かった。その1つ1つが強靭な装甲を持つ機械獣を食い破っていく。そして空中で力尽きてしまい、そのまま倒れ・・・もう立ち上がることは無かった。

クロノスLP4000 3000

「そして装備魔法「ガトリング砲」の効果発動！このカードを装備したモンスターが戦闘を行ったダメージステップ終了後、相手の場のカード1枚を選択し、破壊することが出来る！ボクは伏せカードを破壊するよ！」

「な、何いー！」

「いくよー！」

再びガトリング砲から発砲が始まった。

対象となった伏せカードは粉々に砕けてしまい完全に破壊される。ちなみに伏せカードは「融合」・・・ちよつと待て！？アレを出す気じゃないだろうな？

「ボクはカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

ブルーノ 手札3 場 モンスター2 伏せ1

マッドサイエンティスト 剛くん DEF1600

サイボーグ ミーくん ATK2400 + 装備魔法「ガトリング砲」
ATK600

「私のターン、ドローナノーネ！私は手札から魔法カード「磁力の召喚円 LV2」を発動！手札からレベル2以下の機械族モンスター1体を特殊召喚することが出来るノーネ！私は手札から「古代の歯車」を特殊召喚するノーネ！」

古代の歯車 DEF800

「そして「古代の歯車」を生贄に捧げ、現れるノーネ！「古代の機械巨人」！！！」

古代の機械巨人 ATK3000

「さらに手札から魔法カード「大嵐」を発動するノーネ！場の全ての魔法・罠カードを破壊するノーネ！」

「ならチェーンしてセットカードをオープンするよ！速攻魔法発動！「収縮」！場のモンスター1体を選択し、ターン終了時まで元々の攻撃力を半分にする！「古代の機械巨人」を指定するよ。」

古代の機械巨人 ATK3000 1500

「だ、だけど破壊された「歯車街」の効果が発動させるノーネ！このカードが破壊されたとき、デッキ、手札又は墓地から「古代の」と名の付いたモンスター1体を選択して特殊召喚することが出来るノーネ！私はデッキから「古代の機械巨竜」を特殊召喚するノーネ！」

古代の機械巨竜 ATK3000

「バトルなノーネ！「古代の機械巨竜」で「ミーくん」に攻撃する

ノーネ！！アルティメトツ・ファンゲ！！」

「なら、これだね。墓地の「シールド・ウォリアー」の効果を発動するよ！このカードをゲームから除外することでこの戦闘によってモンスターは破壊されなくなるよ！」

「しかし、ダメージはそのまま通りますノーネ！！」

シールド・ウォリアーが盾となりミーくんは機械巨竜に食べられずにすんだものの、ダメージはそのまま通った。

ブルーノLP4000 3400

「ぼ、暴力反対！！」

やばい、くすつと笑いがこみ上げてきた。

やはりブルーノはこの台詞がないとなあ。

「私はこのままターンを終了するノーネ！」

クロノス 手札0 場 モンスター2 伏せ0

古代の機械巨人 ATK3000

古代の機械巨竜 ATK3000

「ど、どうやって突破すればいいんだ？」

「か、勝てっこないよ！」

生徒達から絶望の声がちらほらと聞こえる。

まあ、勇者シリーズは手間が掛かるしシンクロの無いこの時代だと結構やばいよなあ。

「まいったなあ。ボクのターン、ドロー！」

「こんなピンチの時は・・・手札から魔法カード「破壊の王子参上！」を発動するよ！このカードは自分の場に「サイボーグ ミーくん」「マッドサイエンティスト ゴーくん」「隻眼の野良猫 マタタビ」「天才少年 コタロー」「お手伝いロボ ナナちゃん」のうち2体以上が表側表示で存在している場合のみ発動出来るんだ。ボクはデッキ又は手札から「サイボーグ クロちゃん」を特殊召喚するよ！」

サイボーグ クロちゃん ATK2600

「ちえ、しょーがねーな。」

舌打ちしつつ、その名の通りの黒猫が現れる。

ただし、外見はぬいぐるみを着ており中身はちゃんとしたサイボーグだ。

「破壊の王子と言えど、残念ながら攻撃力が足りないノーネ。」

「なら合体するまでだ！行くぞ、ミーくん！」

「よし！」

「合体！！！」

クロちゃんとミーくんが同時にジャンプして手をクロスさせる。まぶしい光と共に、次の瞬間にはミーくんの頭部が腹部になってそれに手足が付いており、その上にクロちゃんの頭がくっついている

と言う少しホラーな合体モンスターが誕生した。

クロ&ミー ATK3000

「な、私のモンスターと攻撃力が互角になったノーネー！」

「さらに「ゴーくん」の効果を発動し、デッキから装備魔法「スーパースニーカー NIKU Qマックス」を「クロ&ミー」に装備させるよ！」

クロ&ミー ATK3000 3500

「こいつを授けよう。クロ。」

ゴーくんがポケットから赤いスニーカーシューズを差し出す。そしてクロ&ミーがそれを履いた。ちなみに原作ではジャンプなら100メートルまで飛ぶことが出来る優れたものだ。

ただし猫にしか装着することは出来ないが……。

「そして手札から魔法カード「何でも切れる剣」を「クロ&ミー」に装備するよ！」

クロ&ミー ATK3500 4500

ぴかぴかに磨かれた一本の剣がクロ&ミーに装備された。それと同時に攻撃力も上がったようだ。

「バトル！「クロ&ミー」で「古代の機械巨竜」に攻撃！」

「よっしゃ！今度はこっちの番じゃ〜っ！！」

クロ&ミーが上空へとジャンプし、一気に切り下げようとする。だが、古代の機械巨竜もそれを待ち構え逆に返り討ちにしようとしていた。

そして徐々に高度が下がりお互いの間合いに入った。

「今度こそ噛み砕くノーネ！！アルティメット・ファング！！」

先に機械巨竜が動き、クロ&ミーに噛み付こうとする。

だが、それはクロ&ミーにとってもまたとないチャンスだった。

「もらったぁー！！！」

剣が一闪し、機械巨竜の顔が縦に切られる。

そしてそのまま切り下げて行き、機械巨竜は完全に真っ二つとなっ
てしまった。

クロノスLP3000 1500

「よし、この時に装備魔法「スーパースニーカー NIKU Qマ
ツクス」の効果を発動するよ！このカードを装備したモンスターが
相手モンスターを戦闘によって破壊した時、相手の場にモンスターが
存在する時、もう1度攻撃を行うことが出来る！」

「そ、そんなの有りなノーネ!？」

「行くぜ〜。うりあっ!！」

クロノス先生が驚いているうちにクロ&ミーが古代の機械巨人に接

近し、剣で切り刻んだ。

「げ、迎撃するノーネ！アルティメント・パウンド！！」

クロノス先生が声を出すのが、機械巨人はまったく反応しない。まるで時が止まったかのように。

「ど、どうしたノーネ！？」

異変に気づいたクロノス先生が声を掛けてみるがやはり反応は無い。そして……

グラッ

機械巨人がゆっくりと後ろ向きに倒れ始める。そしてそこにはクロノス先生がちょうど立っていた。

「な、な、な……。」

ガシャーッ！！

凄まじい音と共に機械巨人が倒れてしまい、クロノス先生は直撃を受けてしまった。……い、痛そう。

クロノスLP15000

「ペ、ペペロンチ……。」

カクンッ、と首が倒れ、そのまま気絶してしまったようだ。

「あ、だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。まあ、私が保健室に運んでおきますからブルーノはそのまま授業を続けてくださいにや。」

「じゃあ、頼んだよ。大徳寺。」

そして大徳寺先生がクロノス先生の肩を支え、そのまま引きずりながら教室から去っていった。

「えーと、ボクの授業は機械工学だからわからないことがあったら気軽に聞いてね。」

ブルーノちゃんは機械工学か。まあ、本編でも色々いじっていたしなあ。妥当だと思うんだが……。何故に機械工学があるんだ？

「じゃあ、早速だけど授業を始めるよ。」

えーっ、と言う生徒の声に苦笑しつつも授業は始まった。

・・・

キーンコーンカーンコーン

「あ、そろそろ昼か。じゃあ、今日はここまで。復習はしっかりね。それじゃ。」

そうしてブルーノは教室から去っていった。

「中々面白い先生だったね。」

「年も僕達よりちょっと上っばかったし。」

「授業が実習型だったからわかりやすかったなあ。」

「どうやら評判は良い様だ。」

「けど・・・。」

「・・・何で皆大好きブルーノちゃんって言ったんだろ?」「・・・」

皆の疑問はどうやら同じらしい。

まあ、本人からすれば緊張を解くためのジョークと思うが・・・いや、案外地だったりして。

(マスター。そろそろご飯にしませんか?)

「そつだな。」

生徒がぞろぞろと教室から去っていくので俺も便乗して教室から出る。

そして階段を使って上へと昇り、屋上へと出た。

「やっぱり遠くを見渡せるって気持ちいいな。」

(そつですね。)

青々とした空。どこまでも見渡せる海。心地よい風。

・・・高所恐怖症の俺でもそれを我慢してでも見たくなる絶景の場所だ。

いつもならここで十代と一緒に飯を食べるのだが、生憎大徳寺先生から呼び出しを喰らってしまったようだ。

なので2人きりなのかなと思っていたが、どうやら先客がいたようだ。

「剛くん。コタローくん。ブルーノさん。ご飯だよ！」

「ミーくんの料理はうまいからなあ。」

「ミーくんって剛くんの奥さんみたい。」

「確かにそうだね。ん？」

ミーくんがせつせと弁当箱を取り出し、皆に配っていた。ふと、どうやらブルーノがこっちに気づいたらしく、こっちを見ていた。

何か呑気っぽいイメージがあったからちょっと驚いた。

「あ、こんにちわ。」

「やあ、こんにちわ。何なら一緒にご飯を食べないかい？」

「じゃあ、失礼します。」

あいさつをするときになり誘われた。

ちょっと驚いたが、せっかくなので誘いを受けることにする。

「こんにちわ。ボクの名前はミー。よろしくね。」

「ワシは剛 万太郎じゃあ。まあ、剛くんって呼んでくれ。」

「ボクはコタローだよ。えっと……。」

「ああ、俺は丸藤 翔だ。よろしくな。ブルーノさん。ミーくん。剛くん。コタローくん。」

(私も挨拶をした方がいいですね。)

「そうだな。と、紹介するよ。俺の相棒の」

「アイリスです。ブルーノさん。ミーさん。剛さん。コタローさん。よろしく願います。」

「宜しくね。アイリス。さてと、自己紹介も済んだ事だし。」

「……………いただきます!!」「……………」

……

「ブルーノ先生はどうしてここの学校に？」

「ボクのことと呼び捨てでいいよ。ちなみにここに来た理由は大徳寺に頼まれてね。」

「大徳寺先生と知り合いなんですか？」

「うん。ちょっとした仲でね。」

ブルーノの言葉に少し違和感を覚える。あれ？確か本編ではまったく縁がない他人同士だったはずなんだが……。

「ミーくんって料理が上手なんですな。いつ頃から始めたんですか

「？」

「ん〜。剛くと出会った頃ぐらいかな。」

「あの頃のワシは若かったなあ。」

「剛八カセ。そんな事を言わないでくださいよ！」

アイリスとミー君達の会話も少し面白いことになってきている。

確かミーくと剛くんが出会ったのは剛くんが大学生時代だったはずだから・・・結構な付き合いだよな。しかもサイボーク化前から料理が出来るミーくんは本当に器用だ。

さてと、

「……………」
「……………」
「……………」

ん、昼飯を食べるのが早いって？・・・昼飯を食べるシーンを期待した人なんていないでしょ。

ということと弁当箱を片付けて、少しのんびりする。
するとブルーノは何かを思い出したらしく、俺に話しかけてきた。

「翔。今日は月一テストだけどデッキ調整をしなくて大丈夫かい？」

「下手にいじると逆に悪くなりますから。」

「確かにそうだね。と、ボクはそろそろ行かないといけないから翔も遅れないようにね。」

「わかってますよ。」

「じゃ。またね。」

「アイリスちゃんも頑張ってたね。」

「はい。ミーくんも頑張ってくださいね。」

そうしてブルーノとミーくんたちは階段を使って降りていった。しかしまあ、一気に静かになったなあ。と、余裕をかましていると・

キーンコーンカーンコーン

「マスター。予鈴が鳴っていますよ?」

「げげ、ブルーノが移動したのはこのためか!急ぐぞ、アイリス!」

「はい!」

俺達も急いで屋上から降り、月一テストの会場へと足を運んだ。

・
・
・

人盛りが出来ている。が、まだテストは開始されていなかったようだ。

危ない危ない。

(間に合ってよかったですね。マスター。)

「そうだな。」

汗を拭いつつ、席に座る。

「翔!」

背後から十代の声が聞こえた。

どうやらあいつも間に合ったようだ。

「おう、十代。昼飯はちゃんと食べたのか?」

「・・・腹が減って力が。と、それよりも呼ばれているぞ?」

「マジで!?!」

「ああ。」

何てこった。初手から俺が行かないといけないとは・・・ついてないな。

「じゃ、ちよつと言ってくる。」

「おう、頑張れよ!」

「わかってるって!」

またもや急いで指定の場所へと走る。

昼飯を軽めにしておいて本当によかったよ。

・・・

「それではこれより、月一テストの決闘を開始するノーネ!!!」

わーっ!!!

周りから歓声が聞こえる。しかしまあ、久しぶりだな。この月一決闘も。

「さて、第一回戦は丸藤 翔対橋 一角なノーネ。」

お、浪漫に溢れる1キルを考案中の一角さんじゃないか。確か原作だと「一撃必殺居合いドロ」で有名なはずだ。

「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

ヴェノミナーガ「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

代償ガジエ「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

!!!

図書館ライフチェインバーン先攻1キル「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

ギガプラーキル「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

BF「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

Vドラコントロール「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

混沌ヤタロツク「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

カーム1キル「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

クイツクジャンクドツペル「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

ワールドトランス「出来た! 男の浪漫、夢のワンターンキルデッキ!!!」

！！」

無限トリシユ特化「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ
！！」

速攻展開型植物軸魔轟神「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキル
デツキ！！」

図書館エグゾ「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！！」
ガエル「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！！」

サイエンカタパ「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！
！！」

デミスドーザー「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！
！！」

D・D・B「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！！」
ガリス「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！！」

六武衆「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！！」
V・HERO「出来た！男の浪漫、夢のワンターンキルデツキ！！」

一角が堂々とデツキを掲げて会場のだ真ん中で叫ぶ。

ちよ、それを叫んでいるのかよ！！てか、色々な所から1キルの声
が聞こえたような気が……。お前らは浪漫のかけらすらないガチ
デツキだろ！！

「それでは」

「「決闘！！」」

「先攻は譲る。」

一角が先攻を譲ってくれた。

どうやら1人相撲は避けられたようだ。・・・助かった。

「なら、俺の先攻。ドロー！」

ただし、手札を見て絶望に浸ってしまったがな。とりあえず……。

「俺は手札から「マジック・ストライカー」を攻撃表示で召喚。」

マジック・ストライカー ATK600

ハンマーを待った小柄な少年が現れる。墓地の魔法カードをゲームから除外することによって特殊召喚できるので、このデッキでは大助かりだ。

「そしてカードを2枚伏せてターンエンド！」

翔 手札3 場 モンスター1 伏せ2

マジック・ストライカー ATK600

「俺のターン。ドロー！俺は手札から魔法カード「大嵐」を発動！場の魔法・罠カードを全て破壊する！」

大きな嵐が俺の場の魔法・罠ゾーンに伏せてあったカードをスタズタに引き裂いた。

ああ、俺の「聖なるバリアーミラーフォース」と「ガード・ブロック」が！

「さらに手札から魔法カード「苦渋の決断」を発動！俺はデッキからカードを5枚選び、相手はその中から1枚を選択する。俺はデッキから「可変機獣ガンナードラゴン」を2枚。「不屈闘士レイレイ」と「獣神機王バルバロスUR」と「偉大魔獣ガーゼット」1枚ずつ

「選択する！」

「ぎゃーっ！！戦術はバレバレだけど、もうヤバイ。マジやばい。デミスじゃないのが救いだけど、防ぐ手立ては無い！！・・・しょうがない。」

「俺は「可変機獣ガンナードラゴン」を選択する。」

「なら、選択された「可変機獣ガンナードラゴン」は手札に加え、それ以外は墓地へ送られる。ふふふ、さらに手札から魔法カード「ダークバースト」を発動！自分の墓地の攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える。俺は今墓地へ送った「偉大魔獣ガーゼット」を手札に加える！」

もう、回収手段があつたとは・・・早い、早いよ！！

「そして墓地の「不屈闘士レイレイ」1枚と「可変機獣ガンナードラゴン」をゲームから除外して「獣神機王バルバロスUr」を特殊召喚！」

獣神機王バルバロスUr ATK3800

で、出たー！攻撃力は本当に高いモンスター。

ただし、デメリットがあれなので値段はバルバロスと比べるととても安い。

が、個人的にはモンスター排除に特化すれば恐ろしく強いと思うんだ。

「さらに「獣神機王バルバロスUr」を生贄に捧げ、「偉大魔獣ガーゼット」を生贄召喚する！」

偉大魔獣ガーゼット ATK0

「そして「偉大魔獣 ガーゼット」のモンスター効果発動！このカードが生贄召喚によって召喚した場合、このカードの攻撃力は生贄にしたモンスターの元々の攻撃力の倍になる！」

偉大魔獣 ガーゼット ATK0 7600

「『こ、攻撃力7600!?』『』『』」

観客席から驚きの声が聞こえる。

うん。気持ちに分かるんだ。ただどね・・・今、俺が対峙しているモンスターなんだよ！畜生！！
すでにマジック・ストライカーも顔を青ざめているしね。

「『偉大魔獣ガーゼット』で『マジック・ストライカー』に攻撃！
！暗黒熱死線！！」

「に、逃げる！マジック・ストライカー！！」

逃げ腰になっていたマジック・ストライカーは一目散に逃げる。
だが、ガーゼットは容赦なく狙いを定め、胸の部分から熱線を出しマジック・ストライカーを蒸発させた。

「この武器は・・・強力すぎる！」

おい、一角！懐かしい台詞を言うんじゃない。

「あれ？翔のライフが減ってないぞ？」

観客席からちらほらと疑問の声が聞こえる。
ので、一応答えておこう。

「マジック・ストライカー」はこのカードによって発生する自分への戦闘ダメージを0にする効果を持っている！」

「ふふ、やるじゃないか!!！」

冷や汗が俺の頬を伝った。

この効果がなければ俺は一撃でノックアウトされていただろう。

「なら、俺はカードを2枚伏せてターンを終了するぜ。」

一角 手札0 場 モンスター1 伏せ2

偉大魔獣 ガーゼット ATK7600

(ふふふ、俺の伏せカードは「わが身を盾に」と「禁断の聖杯」。
これを打ち破る術はあるまい!)

「俺のターン、ドロー!!！」

うん。何とかいいカードを引けた。からいいんだが、流石にガチでは敵しすぎる。
ので……。

「俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動!デッキからカードを2枚ドローする!!！」

よし、やっとモンスターカードを引けた。が……1ターン遅いよ

！！

今の手札を確認しつつ、勝負に出ることにした。

「俺は手札から「エフェクト・ヴェーラー」を召喚！」

エフェクト・ヴェーラー ATK0

まるで天子の羽みたいな布を背に纏った水色の髪をした少女が現れる。

ロットンに撃ち抜かれた時は本当にびっくりしたな。蟹のアイドルカードが……って。

ふと、エフェクト・ヴェーラーが正面を見て驚きつつ、後ろに振り向いて右の人差し指で自身を指していた。顔からは冷や汗が凄く流れ出ている。

そんなエフェクト・ヴェーラーに俺は首を縦に振って答える。まるで死刑宣告をする裁判官みたいだ。それを見て、エフェクト・ヴェーラーはとほほ……と肩を落としてつつ再び前を向いた。

まあ、彼女からすれば「前門の虎 後門の狼」だからな。だが、無為無策に召喚したわけじゃないぞ？

「翔が召喚したモンスターも攻撃力が0だ！」

「一体どんな効果を持っているんだ？」

観客席から期待の声が聞こえる……が、残念。

そんなものは無い！！手札にあつてこそその効果だしな。

「俺はカードを1枚伏せ、手札から装備魔法「魔道師の力」2枚と「レインボー・ヴェール」を「エフェクト・ヴェーラー」に装備！」

エフェクト・ヴェーラー ATK0 4000

「攻撃力が4000!?!」

流石の一角もこれには驚いたようだ。

「装備魔法「魔道師の力」は自分の場の魔法・罨ゾーンにあるカードの数×500ポイント、装備モンスターの攻撃力と守備力を上げる効果を持っている!」

「だが、まだ「偉大魔獣ガーゼット」には届かない!」

「そうかな?バトル!」「エフェクト・ヴェーラー」で「偉大魔獣ガーゼット」に攻撃!」

「何!?!自滅する気か?」

死刑宣告に泣きながら、エフェクト・ヴェーラーが魔法力を集め1つの塊にする。

対するガーゼットは余裕をこいて、ただヴェーラーを見ていた。攻撃力の差から慢心が出たのだろう。それが命取りだ!!

「装備魔法「レインボー・ヴェール」の効果は、バトルフェイズの間戦闘する相手モンスターの効果を無効にする能力を持っている!よって、「ガーゼット」の効果は無効となり、攻撃力は0になる!」

「なんだと!?!」

エフェクト・ヴェーラーから魔法弾が発射された。

眩いほどの光がガーゼットに纏っていた力を剥ぎ取り、魔法弾が無防備になったガーゼットを襲う。

腹を貫通され、断末魔を残しガーゼットこの世からは消滅した。

一角LP4000 0

「逆1キルだと・・・!?!」

一角が驚き、その場に膝を着いた。

ヴェーラーは目を何度も開いたり閉じたりしている。よほど驚いたのだろう。攻撃力0のモンスターである自分が7000越えのモンスターを倒せてしまったのだから。

「勝者。丸藤 翔なノーネ!!」

わーっ!!

歓声の大きさに肩をびくつとさせて驚くヴェーラー。

まあ、慣れていないから仕方ないだろう。しかし、流石にひやひやした。

もしも伏せカードがミラフォやサイクロンだったら逆にやられていたからなあ。

「まさかあんな方法で俺のモンスターを倒してくるとはな・・・よし、今度は装備ビート1キルを作ってみるか。」

何やら一角がぶつぶつと呟いていた。

・・・今度は「邪神の大災害」を入れておくか。

その後も大きなトラブルもなく、月一テストは無事終了した。
しかしまあ、個人的には風VSマルタンの試合は中々面白かったな。
「ゴッドバードアタック」が決め手になったが、マルタンも後一歩
まで追い詰めていたし。いい試合だったな。

フィールド40：触れざる過去（前書き）

実を言うと、本編を3回書き直しており「まるで意味が分からんぞ！」という部分も多数あると思いますが、ご了承ください。

様々な考えを浮かび上がらせながら書くと話がごっちゃになるって本当ですね。

今度から気をつけねば……。

さて、ハロウィンネタでも考えますか。

追伸：一部訂正しました。

フィールド40：触れざる過去

学校のとある一室にて。

スタッスタッスタッ、ドサツ！

「ふっー、やっと終わったな。」

（お疲れ様です。マスター。十代さん。）

「ああ。やっとな。」

（クリクリ）

最後のダンボールを指定位置に置き、作業を全て終わった事を確認してため息をつく。

共に作業をしていた十代も少しお疲れ気味だったらしく、床に寝転がっていた。

今日は日曜日だったので休校日だったが、十代と一緒に目的も無くただぶらぶらしていた時にブルーノに頼まれてちよつとした作業を手伝っていたのだ。ちなみにそのちよつとした作業とは・・・ブルーノが学校で使う教材の搬入作業である。が、その大半が重い機械が入った段ボール箱だったため、かなりの重労働だったのだ。前世でも似たようなバイトをやっていたんだが・・・こういった事は腰痛になりやすいから、気をつけなければ。

ガチャ

「お疲れ様。十代。翔。」

作業が終わって少し休んでいると、ブルーノが両手に缶ジュースを持って入ってきた。

最初はブルーノも作業をしていたのだが、途中で職員会議があり席を外さなくてはいけなくなった。そのため、俺と十代が必死になって教材運びを続けていたのだ。

「あ、ブルーノ。サンキュー！」

「ありがとう。ブルーノ。」

俺達はブルーノからジュースを受け取り、開けてからすぐに飲む。ちなみに敬語に関してだが、本人からあまり使わないでと頼まれたため普通通りになっている。まあ、十代は元から普段どおりだったが。

「ふーっ、生き返った！」

「ご馳走様。うまかったよ。」

「そう言ってもらえると助かるよ。と、それと……。」

ブルーノはポケットからパックを2つ取り出し、十代と俺に1つずつ手渡した。

十代にはパッケージイラストがマスク・チェンジの「英雄変身！」と書かれたパックが、俺にはパッケージイラストが突然変異の「無限の可能性」と書かれたパックだった。……どちらも見ただことの無いパックだな。てか、俺のは置いといて十代のはモロそのままじゃないか？

ふと、十代を見るとかなり驚いていた。何かあったのか？

「こ、このパックって・・・もう絶版の奴じゃないか！？本当にサンキューな！ブルーノッ！！」

なるほど。だから喜んでいいのか・・・ちよつと待て？

「なあ、ブルーノ。このパックはどこで手に入れたんだ？」

「実は今さっき、購買部の人たちがレジの故障で困っていたままたま通りがかった僕がそのレジを直した際、お礼としてもらったんだ。」

「え、いいのか？それって。」

「まあ、ボクにはボクのデッキがあるしね。それに、それらのパックは十代や翔の方がうまく使ってくれると思ったから。」

万遍の笑みで俺達を見るブルーノ。その表情にはまったく邪気がなく、某Z E A Lの「裏があるウラ」が口癖な奴も完全に信じてしまっただろう。さすがみんな大好きブルーノちゃん。恐ろしい子・・・。

「じゃあ、ありがたくいただくよ。」

「うん。」

「翔。早速開けてみようぜ。」

「そうだな。」

十代と俺がパックを開けて中のカードを取り出した。

えっと、十代はその名の通りHERO系のサポートカードが3枚と

融合関連のちよつと面白そうなカードが2枚。俺の方は目当ての突然変異を1枚と高レベルモンスターの召喚サポート系カードが3枚とネタカードが1枚入っていた。・・・悪くは無いが、難しいな。

「よし、さつそく部屋に戻ってデッキ構築してみるか。ところで翔はどうするんだ？」

「うん。俺もちよつと考えてみるかな。モンスターの数も増やした方がいいかもしれないし。」

(前회가事故つていましたからね。)

(うん。アレは酷かった。)

いくら装備魔法が来たとしても、装備するためのモンスターが来なければ意味が無い。だが、下手に増やしてもこれまた事故るので慎重に改造しなければ・・・。

「じゃあ、何かあったときはボクにでも相談してね。」

「ああ。わかってるって！」

「そつさせてもらつよ。」

軽く話をして十代と共に部屋から出る。さて、自室に戻ってデッキ改良でもするか。

頭の中でそろばんを弾きながら慎重にデッキ構築をする。増やしすぎたらまた事故るしなあ。だからって、前みたいにモンスターが来ないのもヤバイ。が、魔法・罫の比率を下げるのは心細いし・・・。

「むむむ。」

「何がむむむだ！」

「うおー！」

悩んでいてふと口にした言葉に十代が大声を出した。
流石に予想をしていなかったので、肩を大きく上げて驚いてしまう。

「ど、どうしたんだ十代？」

「あ、いや。悪い。何か言わないといけない気がして。」

「そ、そうか……。」

あー、びっくりした。

いきなり某歴史本の有名なネタが出てくるとは思わなかったよ。って、しまった。

驚いたショックで今まで考えていたデッサン構築が真っ白になってる。結構頑張ったのに。orz

「はあ。」

「どうしたんだ？翔。」

「いや、なんでもない。」

（あ、あまり気を落とさないでください。私も手伝いますから。）

「うん。ありがとう。」

俺が肩を落として落ち込んでいると、元凶(?)の十代は首を傾げていた。

帰路の途中、アイリスが懸命に励ましてくれた。・・・本当に助かるよ。

・・・

「よし、これで完成っと。手伝ってくれてありがとう。アイリス。」

「どういたしまして。」

レッド寮に戻って十代と別れた後、自室にてアイリスと共にデッキを改造していたのだが、ようやくそれが終わった。

墓地にモンスターがある状態で、エアトスを引いてしまったときの対処法を考えるのに一番時間を取ってしまった。次元斬じゃないと結構難しいからなあ。そして、何とか開いたスペースにブルーノから貰ったカードを入れてやっと完成した。・・・事故率は高いが、まあ、ご愛嬌と言っことだ。

「ふあゝあ。や、やばい。睡魔が・・・。」

疲れが一気に出たせいか、あくびが出て目が虚ろになりかけている。ちよっとやばいかも・・・。

「一旦昼寝をした方がいいと思いますよ?」

「うん。ちよっとそうさせてもらおうわ。」

アイリスのアドバイスを受けて、干してあった枕を出し横になる。すると、すぐに睡魔が襲い掛かってきて一瞬のうちに意識が奪われてしまった。

・・・おやすみ。アイリス。

・・・

横になるとすぐに眠りについた翔。今の気温は暑くもなく、寒くもないので昼寝をするには最適であり、また時々吹く風が頬を撫で、眠りへと誘うかのようだ。

翔の健康的な寝息に私自身も安らぎを感じ、少しばかりうとうとしてしまった。・・・私も一緒に寝ようかな？

そう思うと、奥から枕を一つ取り出して翔の枕の右側に置く。そして私も兜を外して横になろうとする。しかし、今のまま寝てしまつたら恐らく私達は風邪を引くだろう。だけど、布団と毛布は干している途中だから使うのには勿体無い。

考えていると、睡魔が襲いつつある頭の中で一つの名案が浮かんだ。私は寝ている翔をこちらに向かせて、しっかりと抱きしめる。そして右の翼で翔を抱きしめるように包み込む。これなら私も風邪を引きませんし、翔も風邪を引かないと思います。それに恥ずかしいですけど、こうすることで翔がずっと私の元に居続けてくれる気がしますから。

しかし、一つだけ疑問があります。

何故翔は私の事を「相棒」というのでしょうか？

あまり気にしていませんが、その・・・告白もしましたし、き、キスもしましたから恋人と言ってくれてもいいと思うのですが。

・・・どうしてなんですか？翔。
翔の寝顔を見て少しだけ寂しさを感じつつ、私も睡魔に身をゆだねた。

・・・

「何だ。これは」

俺は横になって眠りについた。

だが、そこに待っていたのは・・・漆黒の闇に包まれた墓場。
そして目の前には、「丸藤 翔」と名のついた墓石が1つ存在していた。

流石に冗談でも洒落にならないぞ？

「お気に召しましたかなあ？」

俺の呟きに、後ろからの声が答えた。

振り向くと、黒装束をした骸骨が鎌を持って楽しそうに笑っている。
よく見たら「魂を削る死霊」だった。「カードを狩る死神」だった。
ら懐かしいのだが・・・残念。

「見ての通り、あなたの墓ですなあ。」

死霊がさも当然のように言い放つ。

「今から俺に死ねと言うのか？」

顔が引きつりながらも、死霊に対して疑問を投げかける。
この年で死ぬのは勘弁なのだが・・・。

「いえ、少し違いましたねえ。これはあなたが殺した「丸藤 翔」の墓ですよお。」

「俺が、殺した？」

その言葉に戸惑いを感じた。

気が付けば俺は「丸藤 翔」になっていたが・・・殺した、だと？

「そうです。あなたは本来の「丸藤 翔」という人間を殺し、その立場を横取りした極悪人。」

「ちょ、ちよつと待て！俺は人殺しなんてやってないぞ？」

確かに「丸藤 翔」という立場を取ってしまったが、人殺しなんてやってないぞ？

「まだ、わからないのですかあ？」

焦っている俺を見て、死霊は首をかしげる。

鎌からは鈍い光が発せられ、これから死への準備をしると言わんばかりだ。

「あなたは転生された際、「丸藤 翔」という人格を殺し、体を乗っ取った！！」

そう告げられ、何も否定できない自分が居る。

確かに、2重人格というネタは無かったからな。だが、殺しては居ないはず・・・だ。

「確かに、俺は「丸藤 翔」という人間になったが・・・それと人

殺しは関係ないだろ！」

「それが関係あるんですよお。」

俺の声に、死霊が愉快そうに答える。

まるで弱り始めた獲物をいたぶるかのよう。

「人は、肉体に魂を入れて初めて存在が認められます。しかし、魂無き肉体はただの器にしか過ぎません。・・・言ってみれば、あなたは「丸藤 翔」という魂を殺し、器となった肉体に寄生して立場を利用した極悪非道の殺人者なんですよお！」

「違う！！！」

奴の1つ1つの言葉が俺の心を確実にえぐっていく。

確かに俺は「丸藤 翔」として今を生きているが、本来なら元の彼がこの世界で平和に過ごしていたはずだった。だが、俺と言っイレギュラーがその存在を塗り替えた、いや、殺したのだろう。・・・無自覚の殺人と言っべきなのだろうか？

「違いなくはありませんよお？本来のあなたは既に消滅しているはずです。なのに、今なお彷徨い続けているのは何故ですかあ？」

「そ、それは・・・。」

「世の中には死んでも死に切れず、彷徨い続ける亡霊がいますからねえ。そんな魂は・・・私が残らず狩らせていただきますよお！！！」

死霊が俺に対して襲い掛かり、鎌がついに俺に牙を向いた。

期待はできないが、両手をクロスにして防御の構えを取る。無駄な

抵抗だと知っていたとしてもだ。・・・アイリス。別れの挨拶が出来なくてごめんな。

心の中で謝りつつ、覚悟を決めた。

「アカシックバスターッ！！」

炎に包まれた火の鳥が、死霊に対して襲い掛かり攻撃が中断される。その隙に俺は必死になって走り、死霊との距離を取った。アカシックバスターと言うことは・・・来てくれたのか！？

「ええい、後一步と言うところを！！」

死霊は鎌で火の鳥を追い払うと、後ろに下がる。

そして翼を使って空を飛んでいたアイリスが俺の前に降下し、死霊と対峙した。

「翔。大丈夫ですか？」

「あ、ああ。何とか・・・。」

アイリスが心配して俺の方を振り返る。た、助かった・・・。

安心感から一気に息を吐き、平常心を取り戻そうとする。奴の精神攻撃は恐ろしいからな。ここで元のペースに戻さなければ、いずれは奴のペースに乗せられてしまう。そうなれば・・・終わりだ。

「なるほどお。あなたの精霊ですか。だから、主人の精神にリンクすることが出来たんですね。」

死霊が1人勝手に喋って納得している。

しかもカタカタ鳴っているから、墓場という地形的にも良く合って

いる。
無論、不気味な方だな。・・・これが「ワイト」なら愛嬌があるんだがなあ。

「まあ、いいでしょう。精霊と一緒に、あなたの魂を狩らせていただきますよお！」

ついに死霊がデュエルディスクを取り出し、準備をする。

「悪いがまだ生きていんでな・・・。」

俺もデュエルディスクにデッキをセットし、準備を完了させた。負ければ俺は魂を狩られ、死んでしまうだろう。絶对的な真実に少しばかり恐怖心が生まれ、ちよつとばかり震えてしまった。

「翔。」

そんな俺を見て、アイリスが声を掛けてきた。
どうしたのだろう？

「後で聞きたいことがありますから、絶対に勝ってくださいね！」

万遍の笑みで俺を見つめ、しだいに精霊状態になるアイリス。
ありがとうんだが、死亡フラグにも聞こえるんだよなあ・・・。まあ、約束を反故しないためにも、そして生き残るためにも、頑張りますか！

「「決闘！！」」

「私の先攻、ドロォ！私は手札から魔法カード「融合」を発動！

手札の「魂を削る死霊」と「ナイトメアホース」を融合！あなたを冥府へと誘う足音が聞こえますかなあ？「ナイトメアを駆る死霊」を融合召喚！！」

ナイトメアを駆る死霊 ATK800

魂を削る死霊がナイトメアホースに乗って、現れる。

遊戯王名物「乗っただけ融合」だ。

「さらに、手札から「トラウマ・シャドウ」を攻撃表示で召喚！」

トラウマ・シャドウ（オリカ）

闇属性 悪魔族 レベル4 効果モンスター ATK0 DEF0

効果：このカードは戦闘では破壊されない。このカードが攻撃表示のとき、相手のエンドフェイズ時に相手の場に「マインド・ミラートークン」（闇属性悪魔族レベル1 ATK0/DEF0）1体を攻撃表示で特殊召喚する。「マインド・ミラートークン」は生贄にすることが出来ない。また戦闘によって破壊されず、戦闘によって発生するダメージは0になる。自分のスタンバイフェイズ開始時に相手の場にある「マインド・ミラートークン」の数×300ポイントのダメージを相手に与える。

突如として不気味な黒い影が現れ、ゆらゆらと揺らめいている。

攻撃力が0か・・・どんな効果を持っているんだ？

「カードを1枚伏せ、ターンエンドお！」

魂を削る死霊 手札1 場 モンスター2 伏せ1

ナイトメアを駆る死霊 ATK800

トラウマ・シャドウ ATK0

さて、「ナイトメアを駆る死霊」は戦闘破壊耐性を持っているから倒すことは出来ないし・・・まあ、「トラウマ・シャドウ」を狙ってみるか。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から「久遠の魔術師 ミラ」を攻撃表示で召喚！」

久遠の魔術師 ミラ ATK1800

白髪の知的な女性が現れる。簡単に言えば、成長した「光霊使いライナ」といった所か。

「そして召喚に成功した「久遠の魔術師 ミラ」の効果発動！相手の場の伏せカードを1枚めくり、確認する！俺はそちらのセットカードをめくる！」

ミラが杖を掲げ、杖に光が灯ると相手の伏せカードが表になった。「スピリット・バリア」か。自分の場にモンスターが存在する場合、戦闘ダメージを0にする永續罠だったはず。面倒だな。が、流石に戦闘破壊までは防ぐことは出来ない。なら、今のうちに数を減らすのが得策だろう。

「俺は手札から「久遠の魔術師 ミラ」を攻撃表示で召喚！」

久遠の魔術師 ミラ ATK1800

白髪の知的な女性が現れる。簡単に言えば、成長した「光霊使いライナ」といった所か。

「そして召喚に成功した「久遠の魔術師 ミラ」の効果発動！相手の場の伏せカードを1枚めくり、確認する！俺はそちらのセットカードをめくる！」

ミラが杖を掲げ、杖に光が灯ると相手の伏せカードが表になった。

「スピリット・バリア」か。確か自分の場にモンスターが存在する場合、戦闘ダメージを0にする永続罠だったはず。結構面倒だな。が、流石に戦闘破壊を防ぐことはまでは出来ない。ならば、今のうちに数を減らしておくか。

「バトル！「久遠の魔術師 ミラ」で「トラウマ・シャドウ」に攻撃！」

「なら、攻撃宣言時にセットカードをオープンしますよ！永続罠「スピリット・バリア」発動お！自分がモンスターをコントロールしている場合、戦闘によって発生するダメージは0になる。」

「だが、戦闘破壊までは防げない！」

ミラが杖を掲げ、呪文を唱える。

辺り一面が光に包まれ、トラウマ・シャドウも消え去った・・・かに見えた。

が、再び朧な影が現れ何とも無かったかのようにそのまま揺らめいている。

「っ、戦闘破壊耐性持ちか！！」

「そうですね。」「トラウマ・シャドウ」は戦闘では破壊されません。」

ナイトメアを駆る死霊なら対象を取る魔法・罠・効果モンスターの効果で対象に取れば自壊する効果を持っているが、トラウマ・シャドウにそれを持っていかどうかはわからない。これはうかうかしてられないな。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

「あなたのエンドフェイズ時に「マインド・ミラートークン」の効果発動！相手の場に「マインド・ミラートークン」を特殊召喚させますよお！」

マインド・ミラートークン ATK0

その名の通り、鏡が俺の場に現れる。
てか、攻撃力が0だと！？や、やばい。

「このトークンは生贄に出来ませんが、このトークンでの戦闘によるダメージは発生しませんよお。」

焦っている俺を見て、笑いながら説明する死霊。まるで、今の光景を楽しむかのように。ちよつと癩だが、この効果は地味に助かる。
・さすがにダメージが発生したら死ねるしなア。

翔 手札4 場 モンスター2 伏せ1

久遠の魔術師 ミラ ATK1800

マインド・ミラートークン ATK0

「私のターン、ドロー！そして私のドローフェイズ開始時にスタンバイフェイズに「マインド・ミラートークン」の効果発動！相手の場に存在するトラウマトークンの数×300ポイントのダメージを

相手に与えます。クッククク・・・あなたの心の傷を・・・あなたの闇を・・・さらけ出させてもらいますよぉ!!」

「何?っ!!!!」

死霊の説明と共にマインドミラーが輝き、かつての記憶が目の前に広がる。

こ、これは・・・学生時代の頃だな。

「おい、屑。まだ出来ないのか?」

「ははっ。だから屑なんだ。」

「うっうっ・・・。」

不器用な自分はいつも皆より1歩遅れていた。だからか、それを免罪符に苛めたりからかったりする輩が現れる。無論、助けてくれる人などいなかった。そりゃそうだ。そんなお人よしは漫画でしかない。大概の人は苛めに参加するか、関わらない。・・・残酷ながら、正しいともいえる処世術だ。

「やーね、使えない人って。」

「そうそう。」

そして直接関わらずに陰口を叩いて、ヒソヒソと含み笑いをする人もいた。

これが地味にきついんだよ。いつもなら他人の振りが出来るから、何かあったとしても面倒ごとから逃げれるしな。

「お前はまだ出来ていないのか？ついて来れないのなら授業の邪魔だ！とつとと帰れ！！」

これが先生の言うことか！？PTAが真っ赤になって飛び掛りそんな言動だよ。

ただし、そのPTAすら俺に関わろうとしなかったがな。・・・はあ。

心の傷跡が思い出され、憂鬱になっていると少しずつ目の前の過去がおぼろげになり、消え去った。

翔LP4000 3700

ライフを確認すると、確かに減っている。

どうやら「トラウマ・シヤドウ」は毎ターン、この幻影を見せてくれるらしい。

最悪な効果だな。特に思い出したくない過去を持っている奴にとつては。

「私は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドロップしますよお。さて、バトル！「ナイトメアを駆る死霊」でプレイヤーにダイレクトアタックう！」

「っ！」

ナイトメアに鞭を打ち、まるで疾風のように駆る死霊が鎌で俺を薙いだ。

・・・痛みはあまり無いが、何か精神的にきついな。

翔LP3700 2900

「そして「ナイトメアを駆る死霊」の効果発動！このカードの直接攻撃が成功した時、相手の手札を1枚ランダムに選択し、墓地へ送る。さて、何が落ちますかなあ？」

墓地へ送る場所から、黒い手が生え俺の手札のカードを1枚持つていった。

「マジック・ストライカー」が・・・やられたな。

「私はカードを1枚伏せ、ターンを終了しますよお。」

魂を削る死霊 手札2 場 モンスター2 伏せ1 永続罠「スピリット・バリア」

ナイトメアを駆る死霊 ATK800

トラウマ・シャドウ ATK0

「俺のターン、ドロー！」

お、このカードならいけるな。よし。

「俺はモンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンド。」

「そしてエンドフェイズ時に「マインド・ミラートークン」を特殊召喚させていただきますよお。」

過去を映し出す鏡がさらに1つ増えた。まったく、嫌なものだ。

翔 手札2 場 モンスター12 伏せ2

久遠の魔術師 ミラ ATK1800

セットモンスター DEF?

マインド・ミラートークン ATK0

「私のターン、ドロォー！そしてスタンバイフェイズ時に「トラウマ・シャドウ」の効果発動！相手の場のマインド・ミラートークンの数×300ポイントのダメージを与える！あなたの場には2体。よって600ポイントのダメージですよ。」

今さっき見た学生時代の幻影が再び映し出され、気が滅入り始める。そしてそれが消え始め、やっと終わったと思ったら……1つの家庭が映し出された。

「なあ、お前は俺の顔に泥を被せたいのか？ああ？」

俺の親父が映し出される。

あんたも俺と同じように不器用だったからな。よく、会社でも蔑まれていたらしい。その怒りの矛先が俺に飛んだんだろう。

「俺が活を入れてやる！」

そうして、親父はタバコの火がついた部分を俺の右目に押し当てた。物凄い痛みと熱さが、俺を襲いその場で転げまわった。それを見て親父は愉快そうに笑う。これのせいで俺は片目の視力を失い、次の日から化け物扱いされるようになった。

「あんたなんか、生まれてこなければ良かったのに！！」

殴りながら俺に怒りをぶつけるお袋。

何でも、近所の人から同年代のこと比較されることがしばしばあり、そのたびに不快な思いをしたらしい。……子供は親の道具じゃないだろうに。

家庭の闇を思い出しながら、その幻影は徐々に晴れていき元の戻った。
冷や汗が頬を伝っていたので、それを拭いっつ荒くなっていた呼吸を整える。

翔LP2900 2300

「おや、意外と耐えますねえ。」

「まあ、な。」

死霊の驚いた声に、俺は何とか答える。

しかしまあ、一部では冷静な答えが出せた自分が怖いと思ったのは内緒だ。

「なら、徐々に壊れていくさまを見せてもらいますよあ！バトル！
「ナイトメアを駆る死霊」でダイレクトアタック！」

再びナイトメアを駆って接近する死霊。
だが、やらせてもらっぞぞ？

「攻撃宣言時にセットカードオープン、畏カード「聖なるバリアー
ミラーフォース」発動！相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する
！！！」

「無駄ですねえ！私もセットカードオープン、カウンター畏「トラ
ップ・ジャマー」を発動させていただきましたよあ。バトルフェイズ
中に発動した畏カード1枚の発動を無効にし、破壊します！！！」

「ちい！」

虹色の光が一瞬現れるものの、すぐに消え去り何も無かったかのようになつた。

そして再び死霊が鎌を振り、俺を切り裂く。

翔LP2300 1500

「そして「ナイトメアを駆る死霊」効果を発動お！今度は何が落ちますかなあ？」

再び墓地から手が生え、1枚のカードが送られた。

よし、「神の警告」だな。・・・もはやブラフにしかない。

「私はカードを1枚伏せてターンを終了しますよお。」

魂を削る死霊 手札2 場 モンスター2 伏せ1 永続罠「スピ

リット・バリア」

ナイトメアを駆る死霊 ATK800

トラウマ・シャドウ ATK0

「俺のターン、ドロー！」

これなら・・・いけるか？

「俺は手札から速攻魔法「エネミーコントローラー」を発動！相手の場の表側表示モンスター1体を選択し、表示形式を変更させる！対象に取るのは「ナイトメアを駆る死霊」！」

ゲーム機によく使われそうなコントローラーが現れ、自動的にコマンドが押される。

そういえば、社長は自分で押していたけど・・・なんでこうなった？

「甘いですねえ！！セットカードオープン、カウンター罠「八式対魔法多重結界」を発動！私は1番目の効果を使用し、対象を取る魔法カード1枚の発動を無効にし、破壊しますよお！！」

八式と漢字で書かれた怪しげな機械が現れ、中央の穴からビームが飛び出しコントローラーを撃ちぬいた。そして火花が散り、爆発するエネミーコントローラー。

・・・別にビームじゃなくても良くないか？

てか、ここまでカウンター罠を使う奴を見たのは結構久しぶりだな。

「なら、俺はセットモンスターと「久遠の魔術師 ミラ」を生贄に「ガーディアンエアトス」を召喚する！来てくれ、アイリス！！」

「はい！」

俺が伏せていたモンスターと「久遠の魔術師 ミラ」が光に包まれて消えると、旋風と共にアイリスが現れる。・・・しかしこの旋風って、どうやって起こしているんだろ？

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「そして、エンドフェイズ時に新たなマインド・ミラートークンがあなたの場に特殊召喚されます。」

翔 手札0 場 モンスター4 伏せ2

ガーディアン・エアトス ATK2500

マインド・ミラートークン ATK0

マインド・ミラートークン ATK0

「私のターン、ドロー！そしてスタンバイフェイズ・・・あなたにとつて、もつとも思い出しなくなかった過去を、あなたとその精霊にお見せしますよお！！」

「や、やめろお！！」

今まで見せてきた中で、最高の笑顔と上機嫌な声を出す死霊。それに不安を覚えた俺は悲鳴に近い叫び声を出した。

ま、まさか・・・アレか？アレなのか？

精神的にもだが、過去の黒歴史的にも思い出したくない。出来れば、もう二度と触れたくは無かったが。あ、そうそう。ちなみにアイリスは今までの俺の過去を見て真っ青になっています。ゴメンな。ほんとに。

で、風景が一変し夜の街へと変わった。

確かあの頃は・・・前の俺の絶頂期と言ってよかったな。

高校生になって親元を離れて、噂の広まっていけない県へと移り高校生デビュー(?)をし、何とか友人や恋人を作って1人前へと成長することが出来た。

しかし、それはある一日で崩壊することになるとは・・・このときの俺には予想がつかなかった。そう、あれは友人と共に彼女の誕生日を祝うって約束だったんだ。だが、友人は急な用事が出来てしまいい行けなくなったらしい。ということ、1人で彼女の家へと向かう。

右手に箱を持っており、この中にはプレゼント用のネックレスが入っている。前々からこの日の為にバイトをして必死に貯めたお金でネックレスを買ったのだ。

少し恥ずかしかったが、こんな俺を受け入れてくれた彼女に何かしらの形で恩返しをしたいと考えていた。そして今日、その恩返しが出来ると信じていた……。

彼女から貰った合鍵を使って家に入り、彼女の部屋の前まで行く。緊張してしまい、ちよつと足が震えた。が、こうなったら当たって砕けるだ！覚悟を決めると勢いよくドアを開け、「ハッピーバースデー！！」と叫ぶ。

そして目の前に広がっていたのは……

辺りに散らばった衣服に、
全裸で喘いでいる彼女とそれを全裸で貪っている友人の姿だった。

俺の手からプレゼント用の箱が零れ、地面に吸われるように落ちていく。

そして落下の衝撃により箱が壊れ、中に入っていたネックレスが外に出て宙を舞った。

……

そこで風景が今の状態へと戻り、再び墓場へと戻る。

あれ以降、俺は自失状態に陥り、気が付いたら「丸藤 翔」になっていた。だが、今まで見た自分の過去を振り返ることは無かった。いや、無意識のうちに逃げていたのかもしれない。

振り返ってしまえば……今までの全てが否定されてしまうような気がしたから。

「クックック、いいですよ。その眼です。絶望に満ちたその眼！
それこそ私にとっては無二の至宝ですよー！！」

俺の今の表情を見て上機嫌に喋る死霊。確かに、あんたからしてみれば最高かもしれないな。ふと、アイリスの方を見ると俯きつつ何か呟いている。・・・駄目だ。ここからでは聞こえない。

「さあ、あなたの魂を狩らせていただきますよ！バトル、「ナイトメアを駆る死霊」でプレイヤーにダイレクトアタック！！」

これで終わりでも・・・いいわけないだろう！！！！

「ダメージ計算時にセットカードオープン、罠カード「ガード・ブロック」発動！この戦闘でのダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロー！」

見えない壁に阻まれ、死霊の鎌が弾かれた。

よし、何とか防ぐことが出来たか。その事実には少しだけほっとする。

「くっくっく、無駄ですよ。例えダメージが通らなくても、「ナイトメアを駆る死霊」は効果を発揮します。さあ、何が落ちますかなあ？」

3度墓地から手が伸び、今引いたカードが墓地へ送られる。

「ウエポン・サモナー」が落ちたか・・・。

「私はカードを1枚伏せ、ターンを終了しますよー！！さあ、あなたの最後の足掻きを見させてもらいましょうか。」

魂を削る死霊 手札2 場 モンスター2 伏せ1 永続罫「スピ
リット・バリア」

ナイトメアを駆る死霊 ATK800

トラウマ・シャドウ ATK0

「俺のターン、ドロー！手札から魔法カード「強欲な壺」を発動。
デッキからカードを2枚ドローする。」

俺は緊張して振るえている手を必死に動かしながら、ドローする。
そしてそのカードを覗いた……。
来た！これで一気に片をつけさせて貰う！！

「俺は手札から「極星獣グルファクシ」を召喚！」

極星獣グルファクシ ATK1600

黒い体に金色の鬣を生やした一頭の馬がこちらに駆ける。

俺のデッキで唯一のレベル4チューナーだ。

「最後に引いたカードがモンスターですか……惜しいですねえ！
「大嵐」だとしたら勝ち目があったのかもしれないが。」

俺が出したモンスターを見て、愉快そうに笑う死霊。

その吠え面、いつまで続けていられるかな？

「俺はレベル1「マインドミラー・トークン」に3体とレベル4チ
ューナー「極星獣グルファクシ」をチューニング！！」

グルファクシが場を駆け抜け、光の輪となる。そして幻影を写し続
けた呪われし3つの鏡が光の輪に包まれ星になった。

「漆黒の紅よ！戦場を血で染めろ！シンクロ召喚！」

光の輪が輝き、中に包まれていた星も共鳴して煌く。

「ダーク・ダイブ・ボンバー！！」

ちよ、違う違う！頼むから爆弾魔さんは引っ込んでください。
と、言うわけで・・・

「現れる！ブラックローズ・ドラゴン！！」

その名の通り、漆黒の体に紅い薔薇を生やしたドラゴンが表れる。
本編ではSMデュエルを開眼させたとして、スターダスト・ドラゴンやその主人と共に有名なモンスターでもある。

「噂に聞くシンクロモンスターですかあ。だが、そんなモンスターでは私にダメージすら与えられませんよお？」

ブラックローズ・ドラゴンを見ても笑っている死霊。
効果を知らないから・・・そんなことが言えるんだよ。

「『ブラックローズ・ドラゴン』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、場の全てのカードを破壊する！！」

「な、何ですとお！なーんてな。セットカードオープン、カウンタ―罫「天罰」を発動！手札を1枚墓地へ送り、効果モンスターの効果を無効にし破壊します！残念でしたねえ。最後の手も失敗に終わってしまったて！！」

驚いた振りをした次の瞬間、対策のカードを発動させ再び笑い出す死霊。

だからさ・・・甘いんだよ。

「セットカードオープン、カウンター罠「神の宣告」を発動！自分のLPを半分にし、モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚、または魔法・罠カードのいずれかの発動を無効にし、破壊する！！」

翔LP600 300

俺のセットカードが発動され、死霊の笑いが途切れる。

そして代わりに驚きの声が発せられた。

「な、なぜ最初に伏せたそのカードを今まで発動しなかったのですかあ！？」

「ライフコストが重すぎたからな。確実な手段を得られるまで暖めておいたのさ！！チェーン終了により、「神の宣告」で「天罰」が無効化される。」

天からの雷が落ちそうになっていたが、神と思われる老人が一喝するとそれが消え去った。

「そして「天罰」が無効化されたことにより、「ブラックローズ・ドラゴン」の効果は有効！メテオ・インパクト！！」

ブラックローズ・ドラゴンの中心部が紅く輝きだし、一気に爆発する。

その名の通り、物凄い衝撃波が場を包み込み、煙が辺りを暗ました。

「な、なんと言う・・・だが、あなたの場も全滅・・・何イ!!!」

煙が晴れ、場が月明かりで照らされる。そこには傷一つ無いアイリスが月光を浴びつつ、にっこりと笑って立っていた。その事実死に死霊は慌てふためく。

「何故だ！何故あなたの「ガーディアン・エアトス」が残っているのですかあ！？今の衝撃波で粉々になつたはず・・・。」

「残念だつたな。「ガーディアン・エアトス」の生贄にした「ハードアーム・ドラゴン」の効果彼女を守つたのさ。「ハードアーム・ドラゴン」はレベル7以上のモンスターの生贄に使用された場合、そのモンスターはカードの効果によっては破壊されなくなる！」

ちなみに「ハードアーム・ドラゴン」はブルーノから貰つたパックに入っており、万が一エアトスが手札で腐つた場合の緊急用として入っていたモンスターだ。まさかこんな形で役に立つとはなあ・・・サンキュー、ブルーノ。

「俺は手札から魔法カード「貪欲な壺」を発動し、自分の墓地のモンスターを5枚選択する。俺は「マジック・ストライカー」「久遠の魔術師 ミラ」「ハードアーム・ドラゴン」「極星獣グルファクシ」「ブラックローズ・ドラゴン」を選択し。デッキへ戻す。そしてカードを2枚ドロー!!」

お、このカードは・・・まあ、いいか。

「俺は手札から装備魔法「魔道師の力」を「ガーディアン・エアトス」に装備！そして「ガーディアン・エアトス」の効果発動！自身に装備されている装備魔法を1枚墓地へ送り、相手の墓地のモンス

ターを3枚までゲームから除外し、除外したモンスターの数×50ポイント攻撃力がターン終了時まで上がる！俺は「魔道師の力」を墓地へ送り、そちらの「魂を削る死霊」「ナイトメアを駆る死霊」「トラウマ・シャドウ」の3枚をゲームから除外し、攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

ガーディアン・エアトス ATK2500 4000

アイリスが刀を掲げると、3つの魂が相手の墓地から現れ、刀に吸収され光り輝く。

ここが墓場だから結構似合うな。

「バトル！「ガーディアン・エアトス」でダイレクトアタックッ！」

アイリスが微笑みながら刀を抜く。どす黒いオーラが彼女から発せられ、死霊が「動けジ・O！ジ・O！何故動かん！！」の状態に陥っている。

・・・こ、これって、確実にキレてるよな？

「遺言を聞く時間すら惜しいですから、一気に片をつけますね。」

カチャリと言う音と共に処刑準備が完了する。

何っーか、某暴れん坊將軍のように見えるな。

彼女が走りながら一気に接近し、切りかかる。だが、突如として発生した霧が死霊を包み込んで攻撃が防がれてしまった。

「墓地の「ネクロ・ガードナー」の効果発動お！墓地のこのカードをゲームから除外し、その攻撃を無効にする！（手札には「死者蘇

生」がある。次のターン、このカードで墓地の「ナイトメアホース」を蘇生すれば。」

にやりと口元が笑っている。確かに、今までならここまでだろう。だが、このカードがそれを変える。

「俺は手札から速攻魔法「ダブルアップ・チャンス」を発動！自分モンスターの攻撃が無効化された時に発動することができ、そのモンスターはもう1度攻撃させることが出来る！そしてこの効果の対象になったモンスターの攻撃力はターン終了時まで倍になる！！」

ガーディアン・エアトス ATK4000 8000

「こ、攻撃力が8000！？・いない、どこにいる！？」

死霊が辺りを見渡すが、アイリスは見当たらない。ふと、空中を見上げるとアイリスは月を背に大きく飛んでいた。刀を逆手に持ち、まるでクナイのように構えながら。

そしてアイリスが一気に降下し、その速度を生かした一撃が死霊へと叩き込まれる。・・・チリン。空耳かもしれないが、彼女の首飾りからまるで鈴のような音が聞こえた気がする。そしてその音と共に死霊の身は真つ二つに切り裂かれ、墓場へと崩れ落ちた。

「やっと勝てたか。」

振り返れば、「ブラックローズ・ドラゴン」の自爆効果や強欲な壺ハードアーム・ドラゴンとダブルアップ・チャンスのどれかが欠けていれば負けていたのは俺の方だった。

・・・正直、今までの決闘で今のままが一番というちょっとした慢心があったのかもしれない。気をつけねば。

「翔。」

今回の決闘のカードを振り返っているとアイリスから声を掛けられた。

ふと、彼女の手が差し伸べられる。掌には1枚の黒いCDがあり、前にも発見したのと同じだった。恐らく、死霊のいた場所から発見されたものだろう。

「ああ。ありがとう、アイリス。」

俺はそれを受け取り、学生服の内側ポケットの中に入れる。

冬服の場合は内側ポケットが結構大きいので、そこそのものなら収納できるのだ。かなり便利だからいつもは予備のカードを入れていたのだが、今回はそれを置いていたため収納するためのスペースを確保することが出来たのである。

（ん、あれ？）

視界がぼやけ、徐々に意識が薄れていった。

恐らく、死霊を倒したことで元の世界へ戻ることが出来るようになったのだろう。しかしまあ、何がともあれ・・・こんな経験はもうこりこりだ。

そして意識が完全に無くなり、視界が真っ白になった。

・・・

ふと、目が覚めるとアイリスの顔が視界に映った。健康的な寝息を出しており、熟睡しているようだ。・・・今さっきのは、夢だったのか？

確認するために制服の内側ポケットを探ると、やはり黒いCDが1枚入っていた。

「夢じゃ……なかったのか。」

ぽつりと、口から零れる。

「丸藤 翔」として生きている自分。だが、そのために元の「丸藤 翔」を殺してしまった……。その事実が胸に突き刺さる。

本当なら、彼は不自由ない一般的な生活を過ごせたはずだったが、俺というまったく関係のない人間を生かすための生贄になってしまった。

彼に何の責任がある？俺は罪の無い人を殺してまで生きるほどの価値はあるのか？

暗い感情が俺の脳裏を駆け巡り、憂鬱になってしまう。

こんな事をして、無駄なものにな。

「俺は本当に……丸藤 翔」として彼女の傍にいてもいいのだろうか？」

今の状態を見て、俺はその言葉を口にす。

彼女の触れれば折れてしまうような細い腕と、何者にも犯されない純白の翼が俺をしつかりと抱きしめている。まるで、俺を誰にも渡さないように必死になって縋りつくかのように。

「……、翔。怖い夢でも見たのですか？」

突如として発せられた声に驚く。

ふと見ると、アイリスが眠たそうにしながらも俺の顔をまじまじと

見つめていた。

「あ、アイリス。おはよう。」

ドギマキしながらも何とか挨拶をし、必死に動揺を隠す。

怖い、か。ある意味では当たりかもしれない。心の声に反応し、少しだけ瞼が熱くなった。

「おはようございます。翔。」

いつもと同じように俺に挨拶するアイリス。

あれ、俺と同じようにあの世界にいたはずじゃ・・・どうなっているんだ？

頭の中で疑問を解決させようとしていると、アイリスの両手が俺の頭後部をしっかりと抱きしめ、そのまま彼女の胸元まで抱き寄せた。

(!?!?!?!?)

普通に抱きしめられることはあったのだが、流石にこれは予想していなかったため頭の中も頬も真っ赤になる。

「翔。例え、過去が何者であったとしてもあなたはあなたです。」

アイリスの言葉にはっとさせられた。

やはり、彼女もあの世界の記憶があるのか。けど、なんでこんな事を？

そんな俺の疑問は他所に、アイリスの言葉は続いた。

「今さつき、「丸藤 翔」として私の傍にいてもいいのだろうか？」「と言っていましたね。」「

(聞いていたのか。)

心の中で思わず呟いた。

直接彼女に言ってしまうえば、負担になるかもしれない。だからこそ、聞かないでほしかった。・・・そんな思いが心の中で浮かび上がる。

「私にとってあなたは、「アイリス」という名前を与えてくれて、様々な思い出と一緒に築き上げてきたかけがえの無い人です。そして、いつでも私を支えてくれる大切な、大切な・・・グスッ」

彼女の涙ながらの告白と共に俺の瞼が熱くなり、水滴が少しずつ落ち始める。

まるで、閉じていた蓋が少しずつ開かれるように。

「だから私にとって・・・丸藤 翔」はあなただけなんです。・・・だから、・・・だから、そんな事を言わないでください。」

そして彼女の言葉が途切れると共に瞼がさらに熱くなり、一気に決壊する。自身の感情ごと、一気に。・・・俺は怖かったのかもかもしれないな。

今更ながら、そんな当たり前なことに気が付いた。

もしもだ。仮に「丸藤 翔」じゃなかったとしたら、こんな極普通な日常は過ごせただろうか？そして、今のようにかけがえのない友人や相棒に恵まれていただろうか？いや、そもそも出会えていただろうか？

様々な考えが頭を過ぎる。だが、それは「もしも」な話だ。

だからこそ、このぬくもりを感じつつ元の「丸藤 翔」に対して一

言だけ心の中で言わせて貰った。
必ず君の分まで生きてみせる、と。

・・・

デュエルアカデミア近くにある火山内部にて

「あら、死霊ちゃんの反応が消えちゃったわ。」

オカマ口調な男性が傍にいた老人に話しかける。
しかし、このオカマ。ノリノリである。

「そうか。・・・アムナエルの動きは？」

「まったく動きがないズラ。残念ズラね。」

しかしあまり動じた表情を見せず、作業に当たっていたモグラ型のロボットに尋ねる。だが、彼の反応も良くなく、計画は難航に差し掛かっていた。

すると、そんな雰囲気を感じたのか。1人の魔術師が名乗り出る。

「フルッフツ！なら、ここはワイに任せてもらいましょうか？」

「そうだな。もはや時間はない。頼むぞ！」

「では、さっそく。フルッフツ！」

魔術師が手に持っていた鏡を光らせ、トランプのダイヤを模した形で一回転した後に消えた。その光景を見て、モグラ型のロボットがぼつりと呟く。

「しかしまあ、あの魔術師は不気味ズラね。」

「・・・俺は、もっと凄いものを見たぞ？」

その呟きに、警備に当たっていた傭兵が答える。
顔を真っ青にしながら、当時の事を振り返っていた。

「どんなズラ？」

「・・・あれが分身したんだ。」

「ま、まさかあの顔が・・・。」

「4人になった。」

「ゲゲツ！そ、それは辛いズラね。・・・しかしよく、耐えられたズラね？」

その言葉に、傭兵は肩を落としながら呟く。

「・・・それから3日は寝込んだぞ。」

「・・・結構根性あるズラね。」

フィールド40：触れざる過去（後書き）

次回からいよいよ大詰めに入ります。（ハロウィンネタがなかったら）

フィールド41：閑話・ハロウィン編（前書き）

作者「ヒヤッハー！俺は前回からの感想が0だから手札から魔法カード「打ち切り」を発動！これでこの物語はお終いだっ！！」

翔「させるか！セットカードオープン、カウンター罠「封魔の呪印」を発動！手札の魔法カード1枚を捨て、魔法カードの発動を無効にする！俺は手札の魔法カード「サイクロン」を捨てることによって、魔法カード「打ち切り」を無効にし、破壊する！そして、この効果で破壊された魔法カードはこのデュエル中発動することが出来ない！！」

作者「おのれ、翔！！」

今回は季節ネタでハロウィンをします。が、急造なので文章が甘いかもしれませんがあしからず・・・

フィールド41：閑話・ハロウィン編

「トリック・オア・トリート！！（ご馳走をくれないと悪戯するよ！）」

玄関を開けると怨念がぎっしりと詰まってそうな灰色の鎧を着て、さらに呪いをかけそうな仮面をつけたモンスターが現れ、話しかけられる。

無論、両手に鎌を持っており断れない状態だ。・・・どうしてこうなった？

・・・

話はその日の昼に戻る。

「今年も後少しか・・・。」

部屋に飾っていたカレンダーを見て眩く。

今日は10月31日。来年まであと二ヶ月程度しかない。

「そうですね。あつという間に過ぎた気がします。」

「だな。」

アイリスと共に今年一年の事を振り返る。

十代を初めとした濃いメンバーに出会い、夏の大会にも出場した。

その後、自分の娘と名乗る少女にも遭遇するという結構面白い出来事に遭遇したな。しかし、今なお校長先生から託された鍵についてはまだ未解決。・・・どうするんだろ。これ？

ポケットに入れていた鍵を取り出す。

（どこにでもありそうな、何の変哲もない鍵にしか見えない。しかし、この鍵がこの島の伝説とやらに関わっているから不思議なものだ。）

鍵を指でいじくりつつ心の中で呟きながら、再びポケットの中に鍵をしまい込む。

ふと、アイリスが何かを思い出したかのように声を上げた。

「翔。今日は10月31日でしたよね？」

「そうだけど。」

「すみませんが、ちょっと用事があるので出かけてきます。」

「ん、わかった。いってらっしゃい。」

「いってきます。」

そうしてアイリスがどこかへと行ってしまった。

まあ、彼女にも都合というものがあるから別に気にはしないが・・・と、俺も暇だし風から借りた本でも見ておくか。

・・・

で、読書に夢中になっていたため時間を忘れていると外からノック音がしたのでドアを開けたら、ガーディアン・デスサイズに遭遇し今に至るといっわけだ。

確か「トリック・オア・トリート」って、「お菓子をくれなきゃ悪

戯するよ」って意味だったよな？まあ、どちらにしても・・・

「とりあえず、部屋に入ってくれ。」

外は寒いからな。それに、ガーディアン・デスサイズが外をうろつろつするのちよっと怖いし。

・・・

「で、これはどういうことなんだ？アイリス。」

「やっぱりばれちゃいましたか。」

率直に聞くと、素直に答えて仮面を外すアイリス。しかし、何でこんな格好を？少しばかり頭痛がしたので右手で頭を抑える。残念ながら今日は金ちゃん仮想大賞じゃないぞ？

「今日はハロウィンですから。せつかくなので、デスサイズの格好をしてきました。」

悪戯を思いついたかのようなにつこり笑顔で、楽しそうに語る。ん、ちよっと酒臭いような・・・ま、いいか。

そういえば、日本にはハロウィンの風習って無かったな。まあ、どこぞのハハツ！なネズミの樂園にはそういったイベントがあるらしいが。

しかし、少しだけ気になる点があった。

「しかし、何でアイリスがハロウィンを知っているんだ？」

そう、俺と一緒にいる間はそんなイベントがあるなんて知らなかつ

たはずだ。知っていたとしても、せいぜい名月などだろう。

「帰郷した時に先輩から教えてもらいました。」

即答で返ってくる。なるほど、夏休みのあのときに教えてもらったのか……。あれ？確かアイリスがあつちに行つて、こちらに帰ってくるのに10分もかからなかったよな。で、その間に会議があつたはずだ。……。まさか、会議と言つより顔見せ状態になつていたのかな？

ちよつとした不安が頭の中で駆け巡る。ひよつとしたら、あちらの世界の住人は平和ボケをしているんじゃないだろうか？そんな考えが浮かび、冷や汗が流れた。

「ところで、「トリック・オア・トリート！」の答えを聞きたいのですが。」

俺が物思いに耽っていると、アイリスがまっすぐこちらを見て聞いてくる。

お菓子と言つても、何かあつたけな？まあ、あつたものを渡せばいいか。

「ああ。ちよつと待つてくれ。確か押入れに……。うお!？」

押入れの中を探ろうと後ろを振り向くと、鎌が俺の首すれすれで止まっていた。

……。いつの間に。てか、前回の死霊を思い出すから勘弁してくれ。

「あ、アイリス。これは洒落になつてないぞ?」

冷や汗でびっしょりになりつつ、後ろ向き状態でアイリスに尋ね

る。

流石に首を刎ねられて誠君状態は勘弁だよ。それがギロチンの鈴の音だな。

「とりあえず、人と話すときは前を見ましようね？翔。」

いつもと変わらない声がある。しかし、背後からは獲物を見つけて狩りをする狩猟者の殺気に近いものを感じた。ギギギギッと、錆び付いたブリキおもちゃが無理やり体を動かす音が頭の中で響きつつ、体をアイリスの方に向ける。

するとそこには、頬を紅く染めつつもご馳走を目の前にした子供のような目をした相棒の姿があった。どうしてこうなった……。(汗

「こんなご馳走が目の前にあるのに、逃がすわけないじゃないですか。」

アイリスが左手で俺の頬を優しく撫で、艶のある眼で俺を見つめる。彼女の甘い体臭と温かな体温が俺の中の男を目覚めさせようとしていた。

や、やばい。静まれ、俺！静まれ、俺！！

「いただきます。」

すっと目を閉じてアイリスが、身を乗り出す。

その姿に……。俺は弾けた。

すかさず左手で腰を、右手で彼女の後頭部を抱きしめ、彼女の唇を貪るかのよつに奪つ。

「！？」

突然のことでアイリスは驚いたのか、目を開き手足をジタバタさせた。だが、しっかりと抱きしめていたので彼女の抵抗も徒勞に終わる。そしてそのまま彼女の唇を堪能し続けた。

そして数分後、彼女の右手に持っていた鎌が落ちた音がきつかけで正気に戻り、一旦彼女から離れる。すると、いつの間にか「ガーデイアン・エアトス」に戻っていたのだが、その表情は恍惚になっており、目は蕩けきっていた。

「悪戯をするような悪い子にはお仕置きだ。」

そんな彼女を抱き寄せ、再び唇を塞ぐ。

俺達の夜は・・・これからだ！

・・・

「べくしゅん！！」

「大丈夫？エルマ。」

突如としてくしゃみが出たことに少し驚く。

といつても、風邪を引いてはいないから噂でも流れているのだろう。

「平気よ。ただの噂だから。」

そういえばあの子はアイリスしっかりやっているかしら？

まあ、相棒の人がヘタレじゃないなら今頃楽しんでいるでしょうし・・・。

「エルマ。そのお酒は？」

「ああ。ちよつとね。」

エアトスに指摘され、右手に持っている酒瓶を見せる。

あの子は昔から酔いやすかったからねえ。まあ、ミイラ取りがミイラになると言っても、それが幸せに繋がるなら万々歳でしょ？さて、役得役得。

「エルマ。今は禁酒でしょ？」

「マジで？」

と言うことで、お酒はケーストに持っていかれたけど・・・あの子の子供が産まれたときぐらいはたっぷり飲みますか。さてと、今はゆっくり寝ようかな。

フィールド42：幻の影（前書き）

次回の構成で手間取っていました。・・・申し訳ありません。しかし、最近はめっきり冬になってしまい寒いですね。ああ、コタツの出番が待ち遠しい。

ちなみに最初の視点は十代から始まっています。

フィールド42：幻の影

ふと目が覚めて体を起こした。だが、風景は何もなくただ真っ白な空間が続いており、ここが現実でない事を表していた。だとしたら・・・夢の中か？

すると突如として、光の球体が俺の目の前に現れた。

「遊城 十代。」

その光の球体の中から声がした。俺の名前を呼ぶ声が・・・とても懐かしい、あの声が。

「もうすぐ、この世界に大いなる災いが訪れるだろう。」

その言葉に俺は驚き、声を発そうとする。が、声が出ない。仕方が無いのでとりあえずおとなしく聞いておこう。

「もしも、困った時はこれを使ってくれ。」

球体の中から一枚のカードが現れ、俺に渡される。枠は効果モンスターと同じだが、表面には何も書いておらずさっぱりだ。こんなもの、どうやって使えばいいんだ？

カードを見てぽかんとしている俺の表情が滑稽だったのか、光の球体から苦笑が聞こえる。

「いずれ、時が来れば分かるさ。・・・だが、私としてはその時が来ない事を祈っているが。」

だが、その苦笑の裏には同時に苦悩も詰まっているようだった。

俺にもはつきりではないが、その苦しさは分かったような気がする。俺だって、自分のせいで誰かを悲しませるのは苦しいから。

「・・・君の幸運を祈っている。」

その言葉と同時に光の球体が一気に輝きを増し、目の前が真っ白になる。

大いなる災い。光の球体が残した言葉をしっかりと噛み締めつつ、俺は意識を失った。

・・・

「っ、あれ？」

(クリクリ)

ふと、目が覚めるといつもと変わらない風が俺の頬を撫でている。そして相棒が起きた俺を確認して、声を掛けた。

「ああ、おはよう。ハネクリボー。」

体を起こして、立ち上がろうとすると右手が何かを掴んでいた。

何だろう？ そう思い右手を確認すると、夢で貰ったカードが1枚握られている。

「大いなる災い・・・か。」

光の球体が最後に残した言葉が引っかかった。が、何にも思い浮かばない。

考えているうちに、校長から預かった鍵をまだ返していなかったこ

とに気づいた。何せ、アレからすぐ夏休みに入り、その後は校長先生から呼び出しを貰っていないからだ。
やっぱり自主的に返した方がよかったかな？

「おーい、十代！」

そんな事を考えていると、翔とアイリスがやってきた。
走ってきたらしく、こちらにつくと右手で腹を抑えつつ肩で息をしながら呼吸を整えている。

「どうしたんだ。翔？そんなに慌てて。」

「校長先生から・・・例の鍵を持っている人は・・・全員校長室に集まるように・・・放送があつたんだが・・・。」

「え、マジか!？」

その言葉に驚きつつ、俺も急いで校長室へ向かおうとした。
すると、翔が俺に鍵を手渡してきた。ど、どうしたんだ。翔？

「すまないが・・・先に行って鍵を渡してくれ。ちょっと、わき腹が・・・。」

苦しそうにしながら、途絶え途絶えに声を出す。

悪い、翔。今回はゴメンな！

「ああ。皆にはちゃんとっておくから、ゆっくり来てくれ！」

翔にそう言い残し、俺は急いで校長室へと向かった。

・・・

「はぁ・・・まったく。」

（お疲れ様です。翔。）

痛むわき腹を押さえつつ、今まで起きた事を思い出した。

昼ご飯を食べた後、ゆっくりしていたら校長先生からまさかの呼び出しがあり、校長室へと向かった。だが、十代が来ていなかった為呼びに行く人をくじ引きで決めたのだ。・・・ちくしょう。じゃんけんだったら負けないのに。

「しかしまあ、十代がここに来たがる理由が分かるな。」

（そうですね。）

この屋上から見える景色は本当に最高だ。いつ見てもまったく色褪せる事がない。それどころか、毎日少しずつ変わった風景が楽しめるので、心を落ち着かせる場所としてはこれほどいい場所はないだろう。ただし、校長室からここまで全力ダッシュはもう勘弁だが・・・。

「さて、逝くか。」

（あの、漢字が違うはずですけど？）（汗）

まるでゾンビのようにふらふらしながら、再び階段へと向かう。

今思えば、校長室に鍵を置いていけばよかったよ・・・。そんな後悔が頭の中で思いつくが、もはや過ぎたことだ。気にしないでおう。

・・・

何とか校長室までたどり着き、ドアを開ける。室内には十代を含めて全員揃っているらしく、これから話を始めようとしていたようだ。

「・・・すみません。遅れました。」

「いえ、今ちょうど大徳寺先生も来ましたから。」

校長の声に反応し、「遅くなりましたにや〜。」とのんびりとした声を出して謝る大徳寺先生。あれ？確かこの世界では、大徳寺先生は鍵の持ち主じゃなかったはずだ。だとしたら何故？

「さて、皆お疲れ様でした。私が留守の間は、この鍵が原因で何かトラブルになったことはありませんか？」

劣いの言葉を言った後、校長が皆に対して問いかける。窃盗団の話をした方がいいのかな？これは・・・少し悩んでいると、凧が前に出て例の毒蠍窃盗団の事を校長に話し、皆に鍵に纏わる伝説を話してもらおうように頼んでいた。そ、即断即決だな。

その話にし少し渋る様子を見せた校長だったが、クロノス先生と大徳寺先生が「被害が出てからでは遅い。」と言い、ついに折れた。

「分かりました。では・・・話しましょう。」

コホンッ、とわざと咳をつく。

「神と呼ばれた3枚のカードがあることは皆さんは知っていますね？これらのカードは「三幻神」と呼ばれ、強大な力を持っています。仮に己が野心のために使うものがいたとすれば、世界は滅んでしまおうでしょう。過去の記録によると、国王が1枚の神のカードを欲望のままに使ってしまったため、その国が1夜のうちに滅んだという話が存在するほどです。」

校長から発せられた言葉には一種のプレッシャーが発せられており、一気に室内の温度が下がった。

「そ、そんなに……。」

「恐ろしいものなのか。」

明日香と三沢が冷や汗を流す。

カード手裏剣という元の世界では「ねーよ！」と言えそうな事がこの世界では普通と言えど、流星にそこまで威力があったとは……。伊達に神という名前は付いていないか。

「そのような威力を持つ神のカードがもしも、すべて悪人の手に渡ってしまったら？世界は今話した国と同じ運命に晒されてしまうでしょう。」

その言葉に皆が喉を鳴らせて、唾を飲み込む。

「……しかし「表裏一体」という言葉の通り、「三幻神」と同等の力を持っているカードがこの世界に存在しています。その名も「三幻魔」と呼ばれるカードです。「オシリスの天空竜」とその影である「神炎皇ウリア」。「ラーの翼神竜」とその影である「降雷皇ハモン」。「オベリスクの巨人兵」とその影である「幻魔王ラビエ

ル」。・・・そして、この鍵こそ「三幻魔」の封印を解くための鍵なのです。」

「しかし、何で「三幻魔」なんだ？もつと言いようがあったと思うんだけど。」

「確か、昔は「影」を「魔」として呼んでいた地域があったらしく、その呼び名が今でも続いているらしいぞ。」

「へえ〜。そうなんだ。」

十代の疑問に対し、凧が答える。

あいつは歴史系は結構詳しかったからな。ちゃっかり三沢より成績が上だったりする。

「よく知っていますね凧君。さすが「神楽坂」の跡取り……。」

その言葉に凧が反応し、眼が一気に鋭くなる。

どうやらあいつにとってこの話題は禁句らしい。

「校長先生。その話はしないとおっしゃったはずでは？」

「と、申し訳ありません。さて、皆さんから鍵を返してもらいましたので……このままお眠りいただきましょう……！」

その言葉と同時に、いつの間にか校長が右手に鏡を持っておりそれが。すると怪しい光を発した。

しまった……！今からじゃ遅すぎる。

「ッーアサイラントッー！」

「はあ！！！」

大徳寺先生の大声と共に「D・D・アサイラント」が実体化し、校長に対して横薙ぎに切りかかった。だが、その動きを見切っていたらしく、軽々と避けられてしまう。が、体勢を崩したることによって相手の目論見をとりあえずは防ぐことに成功した。

そして、校長の姿が徐々に変わり「物まね幻想師」へと変化する。

「フルッフ！中々やりますなあ。アムナエル！！！」

「まさか校長に化けていたとはな。流石に私も予想がつかなかったよ。」

普段の大人しげな雰囲気が一変し、相手の動向を注意深く観察する大徳寺先生。

その眼はもはや狩人と言っていていいほど鋭く、今にも飛び掛りそうだった。

「道化師は人の発想の2段3段を飛び越えなけりゃいけませんから。さて、ワイは行かせて貰いましょうか。」

「させるか！」

「ほほ。威勢のいい事ですなあ。では、ワイの分身と遊んでな。」

突如として3つの影が現れ、それが物まね幻想師と同じ姿になった。

「な、ぶ、分身したノーネ！って、あれ？本体はどこへ行ったノーネ！？」

辺りを見渡すが、3つの影しかない。

どうやら戸惑っている間に本体が姿を消したようだ。やっってくれる。

「『』なら、ワイらと決闘してもらいましょうか？」「『』」

3体の幻想師が一齐にデュエルディスクを起動させる。

・・・ここから動かせないようにする気か？

「ここは私とシニョール吹雪とシニョール三沢に任せるノーネ！」

するとクロノス先生が踏み出し、幻想師に対してデュエルディスクを構えた。

どうやら彼らと一戦交える気らしく、気迫がここまで伝わってくる。

「『』く、クロノス先生！」「『』」

「シニョール大徳寺。あなたが何者かはわかりませんが、教師として同じ釜の飯を食った仲間なノーネ。ですから、あなたと他の皆は鍵を取り戻してほしいノーネ。」

決して振り返らず、幻想師たちと対峙したまま大徳寺先生や他の皆に語りかける。

その姿勢に大徳寺先生が深く頷き、クロノス先生を背にして皆に語りかけた。

「皆、恐らく奴らは火山内部に設立している「封印の扉」に向かっているはずニヤ。ですが、途中で奴らの仲間が襲ってくるかもしれないですから注意してほしいニヤー！」

「封印の扉」に関しては俺が案内できる。皆、俺に着いてきてくれ！」

「皆、頼んだぞ！」

「亮、明日香。皆のフォローを頼むよ！」

「ああ、わかってるさ。」

「うん。兄さんも気をつけて！」

凧の案内の元、俺達は校長室を立ち去った。
クロノス先生、三沢、吹雪さん。・・・無事に勝ってくれ！

・・・

「さてと、私達も早めに幻影を片付けて合流した方がいいノーネ。」

「そうですね。」

「だけど、油断は大敵です。」

「……………決闘！！……………」

「私のターン、ドロー！手札から魔法カード「テラ・フォーミング」を発動！自分のデッキからフィールド魔法を1枚選択し手札に加えるノーネ！私はデッキからフィールド魔法「歯車街」を手札に加え、発動するノーネ！」

場が校長室から歯車によって構成された街に一変する。歯車が回転

する際に発せられる金属音。そしてその動力源を支えるオイルの臭い……やはり、この古臭さは癖になるノーネ。

「そして手札から「古代の機械騎士」を攻撃表示で召喚！」

古代の機械騎士 ATK1800

左腕に歯車の形を模した盾、そして右腕がランスというまさに騎士に相応しい武装を施した機械兵が現れた。といっても、右腕は付け根からランスが装備されているので厳密に言うと右腕はないノーネ。

「カードを1枚伏せてターンエンドなノーネ！」

クロノス 手札3 場 フィールド魔法「歯車街」 モンスター1

伏せ1

古代の機械騎士 ATK1800

「ワイのターン、ドロー！手札から永続魔法「魔法族の結界」を發動！さらにモンスターを1枚セットしてエンドさせてもらいましょうか。」

ものマネ幻想師 手札4 場 モンスター1 伏せ0 永続魔法「魔法族の結界」
セットモンスター DEF?

「私のターン、ドローなノーネ。（確か「魔法族の結界」は魔法族系のドロー系サポートカード。厄介なノーネ）私は手札から永続魔法「古代の機械城」を發動！場の「古代の」と名のつくモンスターは攻撃力と守備力が300ポイントずつアップするノーネ！」

中世期に作られそうな西洋風の城が現れる。

僅かながら攻撃力と守備力を上げることができ、さらにこのカードは私の「古代の」と名のついたモンスターの生贄の代わりにするこ
とが出来るので、結構使い勝手がいいノーネ。

古代の機械騎士 ATK 1800 2100

「さらに「古代の機械騎士」を再度召喚することにより、効果を得るノーネ！その効果は「このカードの攻撃宣言時、相手は魔法・罫の発動を行えない効果」なノーネ！」

このモンスターは他のモンスターと違い、「デュアルモンスター」なので再度召喚しなければ効果が使えないのが残念ですが、攻撃力が高いのは中々使い勝手がいいノーネ。・・・「マシンナーズ・ギアフレーム」の方がサーチが出来る分、いいと思うのは言っちゃいけないノーネ。

「げげっ、それは不味いですなあ！」

「さらに、モンスターが召喚されたことにより「古代の機械城」にカウンターが1つ乗るノーネ！」

古代の機械城 カウンター 0 1

「バトル！「古代の機械騎士」でセットモンスターに攻撃！」

右腕のランスが奴のセットモンスターに襲い掛かり、そのまま標的を貫いた。

串刺しになったのは紫色の服を着て、杖を持っていたいかにも魔法使いっぽいモンスターが破壊されたノーネ。

「なら、破壊された「見習い魔術師」の効果を発動させてもらいますわ！このカードが戦闘によって破壊された時、デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター1体を裏側守備表示で特殊召喚することが出来る！ワイは「見習い魔術師」を裏側守備表示で特殊召喚させてもらいますわ。そして魔法使い族モンスターが破壊されたことにより、「魔法族の結界」に魔力カウンターが1つ乗る！」

魔法族の結界 魔力カウンター0 1

不味いノーネ。破壊した「見習い魔術師」はリクルーターなので「魔法族の結界」と相性が良く、また「見習い魔術師」は召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、場のカードに魔力カウンターを1つ乗せることが出来ますから、どのみち「魔法族の結界」のカウンターを貯める事になってしまうノーネ。

「私はそのままターンエンドなノーネ。」

クロノス 手札3 場 フィールド魔法「歯車街」 モンスター1

伏せ1 永続魔法「古代の機械城」

古代の機械騎士 ATK2100

「ワイのターン、ドロー！むむむ、ワイはカードを1枚伏せて、ターンを終了しまっせ！」

ものマネ幻想師 手札4 場 モンスター1 伏せ1 永続魔法「

魔法族の結界」

セットモンスター DEF?

「私のターン、ドローなノーネ！手札から「古代の機械獣」を攻撃

表示で召喚するノーネ！」

虎をモチーフにした歯車によって構成された獣が現れる。
このカードなら、「見習い魔術師」を打ち破れるノーネ！」

古代の機械獣 ATK2000 2300

「そしてモンスターが召喚されたことにより、「古代の機械城」に
カウンターが1つ乗るノーネ！」

古代の機械城 カウンター1 2

「バトルなノーネ！」「古代の機械獣」でセットモンスターに攻撃す
るノーネ！」

機械獣が魔術師に襲い掛かる。無論、魔術師も防御魔法を発動して
攻撃を防ぐものの、そんな薄い壁では機械獣の勢いを防ぐことが出
来ずに防御魔法が打ち砕かれる。

そして機械獣が魔術師に噛み付き、食いちぎった……ちよつとグ
ロイノーネ。

「なら、再び「見習い魔術師」の効果を……」

「無駄なノーネ！」「古代の機械獣」の効果発動！このカードが相手
モンスターを戦闘で破壊した時、破壊したモンスターの効果は無効
化されるノーネ……」

「や、やてくれますなあ。しかし、「魔法族の結界」の効果は有効
ですな！」

魔法族の結界 魔力カウンター1 2

「さらに、ダメージステップ終了後にセットカードオープン！永続罠「エンジェル・リフト」を発動！墓地のレベル2以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！ワイは墓地の「見習い魔術師」を攻撃表示で特殊召喚しますわ！」

見習い魔術師 ATK600

「そして特殊召喚された「見習い魔術師」の効果を発動！このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、自分の場のカードに魔力カウンターを1つ置く事ができる！ワイは「魔法族の結界」に魔力カウンター1つ乗せさせていただきませわ！」

魔法族の結界 魔力カウンター2 3

「さらに、「古代の機械騎士」で攻撃するノーネ！」

「げ、迎撃するんや！！行け、見習い魔術師！！！」

見習い魔術師が呪文を唱え、杖から黒い光が集まる。

それが一点を集中させ古代の機械騎士に向けて放たれるが、機械騎士が装備していた盾によって容易に弾かれた。それを見た魔術師がもう1度攻撃を行おうと呪文を唱え始めるが、その隙に機械騎士は盾を前面に展開しつつ突撃し、シールドタックルを魔術師に喰らわせた。呪文を唱えている途中で避けることが叶わなかった魔術師は軽々と吹き飛ばされ、倒れてしまう。そこを機械騎士がランスで突き刺し、止めを刺した。

ものマネ幻想師 LP4000 2500

「くう！だが、「見習い魔術師」の効果が発動しまつせ！自分はデ
ツキからレベル2の「執念深き老魔術師」を裏側守備表示で特殊召
喚させていただきますわ！さらに、「魔法族の結界」に魔力カウ
ンター1つ乗っかるで！！」

魔法族の結界 魔力カウンター3 4

これで4つ・・・かなり面倒なノーネ。

「私はこれでターンを終了するノーネ。」

クロノス 手札3 場 モンスター2 フィールド魔法「歯車街」

モンスター1 伏せ1 永続魔法「古代の機械城」

古代の機械騎士 ATK2100

古代の機械獣 ATK2300

「ワイのターン、ドロー！ししし、今まで待たせた分。きつちり返
させていただきますわ！手札からフィールド魔法「魔法族の里」を
発動！それにより、前のフィールド魔法である「歯車街」は破壊し
ますわ！」

私の歯車によつて構成された街が音を立てて崩れさり、次の瞬間に
は何やら不思議な雰囲気を出している木々に囲まれた風景になった
ノーネ。て、これはかなりピンチなノーネ！！「魔法族の里」は魔
法使い族モンスターがいなければ魔法カードを使用することができ
なくなると言うロック系のカードなノーネ！！
しかーし、そのための代償は高くつくノーネ！！！！

「なら、破壊された「歯車街」の効果が発動するノーネ！このカー

ドが破壊された時、デッキ、手札又は墓地から「古代の」と名のついたモンスター1体を選択し、特殊召喚することが出来るノーネ！私はデッキから「古代の機械巨竜」を攻撃表示で特殊召喚するノーネ！！」

歯車の町が崩れ、その瓦礫の中から歯車によつて構成された機械竜が現れる。「古代の機械巨人」の方が貫通の点で有利ですが、特殊召喚が容易な点で十分差別化が可能なノーネ。

古代の機械巨竜 ATK3000 3300

「ほー、攻撃力が3000。伊達にデュエルアカデミアの教師ではないですなあ。」

「ふん。煽てには乗らないノーネ！さつさとターンを進めるノーネ！」

「なら、そうしましょうか。私は手札から魔法カード「おろかな埋葬」を発動！デッキから「ものマネ幻想師」を墓地へ送りましょう。そして手札から魔法カード「死者蘇生」を発動し、今墓地へ送った「ものマネ幻想師」を特殊召喚しますわ。」

ものマネ幻想師 ATK0

「さらに「ものマネ幻想師」が特殊召喚された時、手札から速攻魔法「地獄の暴走召喚」を発動しますわ！」

「なっ！だからこの私に「古代の機械巨竜」を特殊召喚させたノーネ！？」

「そうですね。ま、堪忍してくださいな。と言つことで、デッキから「ものマネ幻想師」を2体特殊召喚させていただきますわ。」

「くーっ、なら私もデッキから「古代の機械巨竜」2体を攻撃表示で特殊召喚するノーネ！」

私も切り札である「古代の機械巨竜」を3体も展開することが出来ました。相手はコピー能力を持っている「ものマネ幻想師」を3体に増やしましたので、相手の場に「古代の機械巨竜」と同じスタータスを持ったモンスターが3体並んだと思つた方がいいノーネ。

「そして特殊召喚した「ものマネ幻想師」の効果が発動しますわ！このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、相手の場のモンスター1体を選択し、その元々の攻撃力・守備力に変化する効果や！もちろん対象は「古代の機械巨竜」や！」

ものマネ幻想師 ATK0 3000

「さらにセットしていた「執念深き老魔術師」を反転召喚し、リバース効果発動や！相手の場のモンスターを1体選択し、破壊する！もちろん破壊するのは「古代の機械巨竜」や！」

執念深き老魔術師 ATK450

年を取つた魔術師が現れ、何やら呪文を唱える。

すると古代の機械巨竜の周りに何やら怪しげな文字が現れ、困い始めたノーネ！

・・・ばっ、と魔術師が両手を天に掲げるとそれらの文字が怪しく輝き、中にいた古代の機械巨竜が爆発したノーネ！！うう、す、少しやばいノーネ。

「そして「魔法族の結界」の効果を発動！このカードと「執念深き老魔術師」を墓地へ送り、このカードに乗っていた魔力カウンターの数だけデッキからカードをドロウする！このカードに乗っていた魔力カウンターは4！よって、デッキからカードを4枚ドロウするわ！」

「な！す、凄い手札補充なノーネ！！」

こ、これはかなりピンチなノーネ！！

「さらに行きまっせ！手札から永続魔法「強者の苦痛」を発動や！相手の場のモンスターは自身のレベル×100ポイント攻撃力がダウンするんや。さらに永続魔法「一族の結束」を発動や。自分の墓地のモンスターの元々の種類が一種類なら、自分の場の同じ種類のモンスターは攻撃力が800ポイントアップするんや！そして仕上げに装備魔法「団結の力」を「ものマネ幻想師」に装備！このカードは自分の場のモンスターの数×800ポイント装備モンスターの攻撃力を上げる代物や！ワイの場には3体。よって攻撃力は2400ポイントアップするっちゅう訳やな！」

「な、何ーッ！」

古代の機械騎士	ATK	2100	1700
古代の機械獣	ATK	2300	1800
古代の機械巨竜	ATK	3300	2500
古代の機械巨竜	ATK	3300	2500
ものマネ幻想師	ATK	3000	3800
ものマネ幻想師	ATK	3000	3800
			6200

ものマネ幻想師 ATK3000 3800

「バトル！「ものマネ幻想師」で「古代の機械巨竜」に攻撃！」

「なら、攻撃宣言時にセットカードオープン！罨カード「邪神の大災害」を発動するノーネ！相手の攻撃宣言時に場の魔法・罨を全て破壊するノーネ！」

ものマネ幻想師が攻撃する直前、大きな竜巻が発生しお互いの魔法・罨のカードを全ていった。そして弱っていた古代の機械巨竜も負けじと反撃の動きを見せる。ものマネ幻想師の鏡から光が照らし出され、古代の機械巨竜の装甲を焼いていく。だが、古代の機械巨竜は自身の装甲が融解しながらも悠然ともものマネ幻想師に噛み付き、下半身を食いちぎった。・・・そして融解した場所から火花が散り、限界を超えてしまった機械の竜は両目の光を徐々に曇らせ、そのまま息絶えた。・・・よく頑張ったノーネ。

「ちい！下手な小細工をしゃがって！！残りの2体で「古代の機械獣」と「古代の機械騎士」に攻撃！」

「相手が攻撃する前に一気に片付けるノーネ！！！」

古代の機械獣と機械騎士が私の声に従い、2体のものマネ幻想師に飛び掛る。一方は噛み砕き、もう一方はランスで串刺しにし、破壊に成功したかのように見えた・・・だが、それはただの青いマントであり、本体が機械獣と機械騎士を囲むように現れる。そして鏡の光をモロに浴びてしまった機械獣と機械騎士は一瞬にして装甲が溶けてしまい、後には影しか残っていなかったノーネ。

クロノスLP4000 3000 1800

「さらに手札から速攻魔法「ディメンション・マジック」を発動！自分の場に魔法使い族モンスターがいる時のみ発動ができ、自分の場のモンスター1体を生贄にし、手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する。さらに相手の場のモンスター1体を選択し、破壊することができるんや！」

「！」

「ワイは自身である「ものマネ幻想師」を生贄に、手札から「マジカル・コンダクター」を攻撃表示で特殊召喚！さらにあんたの場の「古代の機械巨竜」を破壊する！」

妙な箱が1つ現れ、その中にもものマネ幻想師が入り込む。

すると同じ箱がもう一つ現れ、その中からマジカル・コンダクターが現れる。そして彼女が前の箱に対して呪文を唱えると、無数の剣がどこからか現れ箱を突き刺した。・・・するとその箱が開かれ、中には串刺しにされた私の古代の機械巨竜が・・・て、箱と機械巨竜の大きさがまったく違ってないノーネ！！そもそも、いつの間に押し込んだノーネ！？

「そして「マジカル・コンダクター」でダイレクトアタックや！」

彼女もまた、呪文を唱えて魔術を用いた攻撃を仕掛けてくる。伏せカードもないので、受けるしかないノーネ。

「ぐう！」

クロノスLP1800 100

く、首の皮一枚で繋がったノーネ。

「惜しいなあ。ま、次で終わらせたるわ。ターンエンド。」

ものマネ幻想師 手札1 場 モンスター2 伏せ0

ものマネ幻想師 ATK3000

マジカル・コンダクター ATK1700

「私のターン、ドロー！手札から魔法カード「強欲な壺」を發動するノーネ！・・・残念ですが、次のあなたの番はもうないノーネ！」

「な、何やて!?!」

「私は手札から魔法カード「古代の整備工場」を發動！墓地の「古代の」と名のつくモンスターを1枚手札に加えるノーネ！私は墓地から「古代の機械巨竜」を手札に加えるノーネ！」

「残念ですなあ。そんな最上級モンスターを手札に加えたところで、心の慰めにしかなりませんか？」

「その考えこそ、甘いノーネ。（シニョール亮。あなたが修行の際に私に預けていたこのカードを今、使わせてもらおうノーネ。）」

「私は手札から魔法カード「パワー・ボンド」を發動するノーネ！
！」

「そ、そのカードは丸藤兄弟しか持っていなかったはず！どうしてあなたが持っているのかさっぱりですな!!」

「消え逝くあなたには関係のないことなノーネ。私は手札の「古代

の機械巨人」と「古代の機械巨竜」と「古代の機械工兵」を融合！
生徒達を守るため、現れるノーネ！！「古代の究極機械巨人」！！
！」

ゴゴゴゴゴッ！！

地響きと共に、「古代の機械巨人」や「古代の機械巨竜」よりも一
回り大きなモンスターが現れる。右腕にはナックルガードが搭載さ
れており、また速度向上のため脚部は4脚に変更され相手を一撃粉
砕するために改良された最強の「古代の」モンスターなノーネ！！

古代の究極機械巨人 ATK4400

「そして「パワー・ボンド」の効果により、攻撃力が2倍になるノ
ーネ！」

古代の究極機械巨人 ATK4400 8800

「こ、攻撃力が8800!?!」

「バトルなノーネ!」「古代の究極機械巨人」で「ものマネ幻想師」
に攻撃!さらにダメージ計算時に手札から速攻魔法「リミッター解
除」を発動!!自分の場の機械族モンスターはターン終了時まで攻
撃力が倍になるノーネ!!」

古代の究極機械巨人 ATK8800 17600

「こ、攻撃力が1万を超えた!!!んな、アホな!?!」

「これが私の、本気の一撃なノーネ!真・アルティメット・パウン
ドッ!!!」

「ぐぎやああああ！！！！！！！」

ものマネ幻想師LP2500 - 15100

「縦、一文字切り！」

「叩つ切り！！」

私の決闘が終わった直後に皆の決闘も終了したみたいなのーネ。シニョール三沢とシニョール吹雪も無事に勝つたらしく、ものマネ幻想師の姿が消えているのーネ。

「皆、大丈夫なのーネ？」

「ええ、何とか。」

「少し痛みはありますが、この程度なら。ん？」

ガタガタッ！

何やら校長の机の下から音がするのーネ。ちょっと覗いていて見るのーネ。

すると中には・・・手足を縛られ、布で口を封じられた校長の姿が。す、すぐさま助けるのーネ！

「ふう、助かりました。」

「しかし、何で校長が机の下に閉じ込められていたのーネ？」

「はい。今さっきのものマネ幻想師によって縛られ、真下に隠され

ていたのです。動くことが出来ないように暗示をかけて……。」

「だから、ものマネ幻想師がいなくなってから動けるようになったんですね。」

「ええ。と、それよりも……話は聞かせてもらいました。」

「なら、話は早いノーネ。私達も皆と合流したいのですが、目的地が分からないと待つてしまう恐れがありますノーネ。」

「それなら、私が道案内をしましょう。では、皆さん着いて来て下さい……」

「「はい!」「「お願いしますノーネ!」」

「と、その前に委員会に連絡を……はい。私とシニョール大徳寺の授業は全て自習と言つこと。はい。では切らせてもらうノーネ。」

シニョール大徳寺。そして皆。

少しばかり遅くなるかもしれませんが、必ず追いついて見せるノーネ。

フィールド42：幻の影（後書き）

次回から少しワンパターンな展開になってしまいますが、あしからず。

・・・さて、出来るだけ早く投稿せねば。

フィールド43：閑話・勤労感謝の日（前書き）

とある本を見て、思いついたネタを即急に書きました。

ので、正直誤字脱字が多いと思いますがご勘弁ください。

このネタを知っていたら友人にさせてください！

・・・本編はそこそこ出来ました。まだもうしばらく掛かります。
申し訳ありません。

フィールド43：閑話・勤労感謝の日

今日は勤労感謝の日だ。なので、この日はアイリスのお願いを聞くことになっている。いつものお礼ということだな。・・・そこ、首輪を持ってくるんじゃない!!

「アイリスは何か頼みたい事とかあるか？」

部屋のコタツを境目にTVを見ていたアイリスに尋ねる。
寒い時期はコタツに限るな。うん。

「なら、翔。今から海に行きませんか？」

コタツに入って料理番組を見ていたアイリスがふと呟いた。原因は「季節の幸の特集」が放送していたからだろ。

確かに秋刀魚はうまそうだけど・・・冬直前で「秋の幸」をやるか普通？

「まあ、別に構わないが・・・」

むむむ、今の時期に秋刀魚って連れるのかな？

まあ、つり道具関係も含めて大徳寺先生に相談してみるか。

さて、ちゃんと厚着をして行こう。・・・さらば、わがオアシス。

・・・

コンコンッ

「大徳寺先生、いますか？」

大徳寺先生が住んでいる部屋のドアをノックする。
別にノックしなくてもいいという意見もありそうだが、「こら、ノックしないとは何事だ！」と言って戦いを挑む校長もいるくらいだからな。礼儀は必要だ。

「ン、今開けますにゃ」

ドアから大徳寺先生が現れた。

ふと、隙間から部屋の様子が・・・ええっ!?

そこには、コタツで寝転びながら幸せそうに寝ている「D・D・アサイラント」の姿が・・・どうやら戦犯はコタツの上に置かれてあるあのオレンジ色の物体だろう。くそ、羨ましい!!

「翔君、何をそんなに・・・ああっ!!アサイラント、寝ちゃ風邪を引きますにゃ!!」

俺の視線に気づいたのか大徳寺先生が急いで毛布を持って来てアサイラントに被せる。これでいいのか？アサイラント暗殺者・・・。

「翔君、出来ればこの事は誰にも話さないでほしいのにゃ」

大徳寺先生が真剣な表情になって俺に頼み込む。

その姿はさながらペットを変えないマンションの中で秘密裏に猫を飼っていた飼い主が他の人にバレた姿を想像させた。

「先生。アパートの中ではペットを飼っちゃいけないんじゃない・・・」

「彼女はれっきとした精霊にゃ!!あ!??」

言葉を放った直後、物凄く失敗した表情になりつつ右手で顔を隠す大徳寺先生。

何と言うか、大徳寺先生にとって今日は厄日だな。哀れ。

「・・・で、何のようによ」

もはや投げやりになっている。やばい、もっと弄ってみたいなとと、それじゃあ話が進まないか。アイリスも待っているし。

「今の時期に港で秋刀魚は釣れますか？」

「は？秋刀魚ですかにや？まあ、釣れない事はないですが・・・」

ぽかんとした表情になりながらも答える。

「どうやら、一応大丈夫そうだな。なら・・・」

「で、秋刀魚を釣るための釣竿があったら貸してほしいのですが」

「まあ、別に構いませんにや」

「ついでに七輪もあつたら嬉しいのですが・・・」

「翔君。・・・君は中々通ですにや。と、ちょっと待ってほしいのにや」

呆れた表情を見せつつ大徳寺先生が室内へ戻る。

そして少し待つと、チャッカマンと点火用の新聞紙。そして串と団扇と軍手と七輪と釣竿におまけの塩とナス1つを持って来てくれた。これで何とかかなりそうだ。

「分かっていると思うけど、火の扱いには注意してほしいのじゃ。」

「はい。と、・・・炭はちゃんと入っているな。じゃあ、行ってきます！」

「くれぐれも気をつけてくださいにゃ」

そうして大徳寺先生がドアを閉めた。今日は部屋で大人しくしておいた方がいいと思いますよ？

(周囲に人はいないみたいですから、私も手伝いましょうか?)

「ああ、頼む」

アイリスが実体化して、釣竿とチャッカマンと新聞紙を持ってくれた。

俺も軍手をはめて七輪を持つ。さて、行くか。

・・・

案の定、寒いせいか外には誰もいなかったので騒ぎになることはなくすいすいと港まで行くことが出来た。今思うと七輪を持ったレッド生徒と釣り道具を持った民族衣装の女性天使・・・なんでだろ。物凄く写真を取りたくなる気分は。

そんな複雑な感情をもちつつ、さっそく七輪をセットしチャッカマンで新聞紙に火をつけてそれを七輪の中に投入する。

「翔。七輪の火は私が管理しますね」

「ん、わかった。」

アイリスが団扇を扇いで七輪の中に風を入れる。すると、中の火の勢いが増し、煌々と燃え上がる。こうやって見ると火って綺麗だな。

と、少しだけ感心しつつ俺は軍手を脱ぎ捨てて釣りの準備をする。風も穏やかだから条件は結構いいな。さてと、何か釣れるかな？

・・・

それから15分後

パチパチパチッ

七輪の上で串に貫かれた4匹の秋刀魚が焼かれている。今日の戦果だ。

まさか、冬直前のこの時期に秋刀魚が釣れるとは思っていなかったがここまで早く釣れるとも思っていなかった。両方の意味で驚いた。まあ、結果としては万々歳だがな。で、それをアイリスが調理している。

焼き具合はいいから・・・そろそろだな。

「塩をまぶして・・・いただきますしょうか」

「そうだな、じゃあ」

「いただきます」

さっそく秋刀魚にかぶりつく。・・・熱いけど、うまい!!!
やっぱり七輪に塩は最高だ!!!

「おいしいですね。翔」

「ああ。そうだな」

アイリスもおいしそうに秋刀魚を食べている。うん、この表情を見ただけで満足だ。そしてお互いにもう一匹の秋刀魚をおかわりして、今日の釣りは終了した。

「「ごちそうさまでした」」

海の幸に感謝しつつ、手を合わせる。こういった場所で食べれるのはやっぱりいいな。と、思っていると紫色に輝る物体がもの寂しそうに顔を覗かせていた。

「ん、ナスもあつたんだな」

大徳寺先生がおまけとしてくれたナスだ。せつかくだし、こいつも七輪で焼いて食べますか。

「アイリス。悪いけどナスを切ってくれないか」

「え？ああ、はい」

アイリスが俺からナスを受け取ると、刀でナスを輪切りにする。

師匠のエアトスが見たら怒りそうだよなあ・・・まあ、刀も人切り包丁だし大丈夫か。

お腹が膨れたせいかそんな事をのんびりと考えつつ、ナスを七輪に乗せた。

そういえば・・・

「秋ナスはよ 目に食わずな」だったっけな？」

何かの雑誌にそんな事を書いていたが、今もどんな意味なのかさっぱり分からない。秋ナスをわざわざ目に食べさせる人物がいるのだろうか？

そんな事を考えていたらちよつと困った表情でアイリスが俺の方を見ている。どうしたんだ？

「翔。それは「秋ナスは嫁に食わずな」じゃないんですか？」

ああ、何だそういうことか。
なら・・・

「アイリスは食べられないな」

無意識のうちにその言葉を口にした瞬間、ぼけっとしていた脳が活性化して我に返った。我に返った。あれ、俺は一体何を言っているのだろ？

ふと、アイリスを見ると彼女の顔が真っ赤に染まって俯いていた。そんな彼女を尻目に、あたふたと俺の脳がパニックを起こしていると

「じゃあ、行って来ます。お父さん。お母さん」

未来の娘と名乗る少女から言われた言葉がリフレインする。

え、あ、いや、ちょ、あれ？やばい。パニックがパニックを呼んで收拾がつかない。

しかも、アイリスは何も言わないから物凄く気まずい・・・今さっきまでの雰囲気はどこへ行ったんだ！？

俺がパニックに陥っているとアイリスがポツリと

「ゆっくり食べてくださいね？あなた」

爆弾発言をする。ちよ、ま！？

アイリスの方を見ると顔を赤くしながらもにっこりと微笑みつつ俺を見つめていた。

え、えくと・・・しゃあない。腹を括るか。

「ああ。しつかりいただくよ」

俺も顔を赤くしつつもそれに答え、いい焼き具合になったナスを貪りつく。

そんな俺を見て、嬉しそうに微笑むアイリス・・・恥ずかしさのあまり転げまわりたい衝動を抱えつつ、俺は七輪の上で焼いていたナスを次々と口の中に入れて処理をした。

味？味覚が正常に機能していない状態で聞かれても困るんだがな。

その後は片付けをして大徳寺先生に七輪などを返還し部屋へと戻ったのが、その間も転げまわりたい衝動が消えることはなかった。何と言うか「口は災いの元」だな・・・ま、それもいいか。俺の方を向いて幸せそうに寝ている彼女を見るとそんなことが些細なことに思える。

「おやすみ。アイリス」

彼女の頭を優しく撫で、俺も眠りについた。

ありがとな、アイリス。そしてこれからもよろしく。

感謝の意を心の中で呟き、意識は闇の中へと落ちて行った。

フィールド43：閑話・勤労感謝の日（後書き）

実を言うと、当初はナスネタのみ書こうと思っていましたが、それでは華がないと言うことで秋刀魚も追加しましたが・・・作者はお芋が大好きです！！

フィールド44：空爆（前書き）

大変お待たせしました。

本編を1度は書いたものの、中々納得がいかず別物状態にしてようやく投稿させていただきました。まだ、本調子ではないものの楽しんでいただければと思います。

・・・リーチ！

追伸：最近書いてなかったせいか、思いっきり間違えていた点を修正しました。三沢は前回の居残り組みでしたorz
それと、間違いのご指摘ありがとうございました。

フィールド44：空爆

俺達は風の案内の元、学園を後にする。

一応、奴らの手下が学園内部に入っていないか警戒するために万丈目とマルタンには居残ってもらった。ちなみに大徳寺先生が走りながら携帯であちこちに連絡するというちょっとした小技を披露したのは驚いたな。実際やると結構大変だし。

で、現在地は学園近くの森林内を全力疾走中だ。この方向は海岸に向かっているな。確か原作では吹雪さんと万丈目の暴走がきっかけで「三幻魔」の封印が解けた記憶があるんだが・・・まさか、ここまで変わるとは。

「このまま海岸まで出て、そこにある洞窟を直進すれば火山内部の最深部まで繋がっている。そしてその一番奥深くに三幻魔のカードが封印されている場所なんだ」

「けど、何で封印場所が火山なの？もつと嚴重な場所にすればよかつたのに・・・」

明日香の言葉に皆が頷く。確かに火山にあるなんて予想はあまり出ないだろうが、ちよつとばかり不用心だろう。

「そうしたかったのは山々なんだが、モノがモノだけに人気が少ない場所の方がいいからな。グールズとかレアハンターなどに目を当てられたら、洒落にならん。それに、あの鍵にはちよつとした細工が施されていてな。ヒントは温度変化によって形状が変わるってところかな」

ん、何か聞いたことがあるな・・・確か

「まさかと思うが、形状記憶合金か？」

「翔・・・よく分かったな、正解だ。常温ならどこにでもありそうなただの鍵なんだが、温めると封印を解くための扉の番号が浮き上がり、その番号にあった扉の鍵に変化するんだ。このカラクリを知っている人は両手で数える程度だったんだが・・・」

顔をしかめつつ、凧が言葉を止める。

「しかし、何で凧がこの事を知っているんだ？」

「・・・わかった。が、時間がないから走りながら話すぞ」

兄さんの質問に意を決した凧が重い口を開けた。

「俺の一族は古い時代から三幻魔を封じる人達のスポンサーでな。」

「三幻魔」を封じるこの地の守護者達を支援してきたんだ。で、「神楽坂」の嫡男である俺もその関係者だからここに来たってわけだ」

「けど、何でその話を嫌がっていたんだ？」

「・・・支援者である以上、俺は三幻魔に関して色々知っているからな。もしも、その事が三幻魔を狙うほかの組織にバレたら、誘拐される可能性があるんだ。」

「え、そんなに危ない思いをしてきたの!？」

「まあ、そんなところだ。ん、もうすぐ海岸だな。このまま海に沿って・・・」

「おおっと、悪いがここから先は通さないぜ？」

凧の言葉を遮って、赤いバンダナを頭に巻いた金髪の20代半ばと思われるアメリカンな男性が待ち構えていた。こ、この声は……

「お、お前は……。」

「よお。亮……久しぶりだな。」

「アンデッド・キース！久しぶりだな！！」

「アンデッドじゃねー！バンデッドだつ！！勝手に殺すな！！」

一文字違いで死人が盗賊に変わるのか……。てか、原作（漫画版）では1度死んだからある意味アンデッドでもあっているような気がするな。

しかし、何で兄さんとキースが知り合いなんだ？

「で、カイザー。この人誰だっけ？」

十代の一言にその場にいた皆がずっこける。

一応、この人はテレビにも結構出ていたぞ？

「簡単に説明すると、ペガサス会長が主催した決闘王国で上位に食い込んだ猛者だ。世界大会にも出場したが……。そこは黒歴史だからそっとしておいてやれ」

「黒歴史って？」

「それ以上は聞かないことだ。ヒゲの生えた機械人形が飛んでくるぞ？」

その後で御大將が来て「お兄さん」発言するんですね。わかります。

「相変わらず好き勝手言いやがって・・・まあ、いい」

兄さんと十代の会話を聞いていたキースが頭を抱え、疲れた顔をしながらも場の雰囲気や元に戻した。そして左腕に装着されているデュエルディスクを起動させた。

「とにかくだ。ここを通りたけりゃ、俺を倒すんだな」

「そうか・・・他の皆は先に行ってくれ。大徳寺先生、皆を頼みます」

「分かっていますにや！！」

大徳寺先生が頷くとそのままデュエルディスクを起動させ、キースと対峙する。

そして俺達は兄さんの言葉に従いこの地を後にして先へと進んだ。兄さん、無茶はしないでくれよ？

・・・

「行つちまいやがったか・・・まあ、本命を残せたのでよしとするか」

この地を後にし、先へと進んだ皆を眺めつつキースが呟いた。本命か。ここで時間を・・・いや

「最初から俺との決闘を望んでいたのか？」

「ああ。あのときの決闘の決着をつけさせてもらうためにな。ま、奴らの依頼を受けたのもこの機会を設ける絶好のチャンスだったから乗ったまでだ」

顔をニヤつかせ、今回の件を話し始める。

ギブ&テイクにしては、確かに割に合った話だな。仮に俺がキースと同じ立場なら引き受けていただろう。それに、突然のトラブルとはいえ決闘を中断されてしまったのだ。白黒をつけたい気持ちはこっちも同じだ。

「そうか。なら」

「「決闘!」!」」

「俺のターン、ドロー!俺は手札から「キラートマト」を守備表示で召喚!」

キラートマト DEF1100

その名の通り、トマトの形をしたモンスターが現れる。

何と言うか、あいつだったら「UFOTートル」とか機械族リクルーターを使うと思ったんだがな。まあ、いいか。

「さらにカードを2枚伏せてターンエンド!」

キース 手札3 場 モンスター1 伏せ2

キラートマト DEF1100

「俺のターン、ドロー！相手の場のみにモンスターが存在する場合、手札から「サイバー・ドラゴン」を特殊召喚することが出来る！」
サイバー・ドラゴン」を攻撃表示で特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

「さらに手札から「融合呪印生物ー光」を召喚！」

融合呪印生物ー光 DEF1600

「そして「融合呪印生物ー光」の効果発動！フィールド上のこのカードを含む融合素材モンスターを生贄に捧げることで光属性の融合モンスターを特殊召喚することが出来る！俺はこのカードと「サイバー・ドラゴン」を生贄に捧げ、「サイバー・ツイン・ドラゴン」を特殊召喚する！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800

どうでもいい話だが、正規融合より手札消費が少ないのでこの召喚方法の方が個人的には気に入っている。流石にいつもサイバー・ドラゴンが複数だとか、融合を手札に持っているなんて事はないからな。

「バトルだ！「サイバー・ツイン・ドラゴン」で「キラー・トマト」に攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト！」

サイバー・ツイン・ドラゴンの2つの頭部からエネルギー弾が発射され、キラー・トマトを消し炭にする。

「つと！戦闘破壊された「キラー・トマト」のモンスター効果発動！デッキから攻撃力1500以下の閥属性モンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚することができる！俺はデッキから「キラー・トマト」を攻撃表示で特殊召喚するぜ！」

キラー・トマト ATK1400

召喚されないなや、目の前にいるサイバー・ツイン・ドラゴンとご対面しキラートマトの顔面が真っ青になる。ふと、後ろのキースが含み笑いをしている。てめえ、鬼だろ！！

「サイバー・ツイン・ドラゴン」は1度のバトルフェイズに2回攻撃を行うことが出来る！バトル！「サイバー・ツイン・ドラゴン」で再び「キラー・トマト」に攻撃！エヴォリション・ツイン・バースト！」

え、そんなモンスターに攻撃する俺も鬼じゃないかって？決闘だから仕方が無い。

「えーい、ヤケクソじゃー！！」と言わんばかりに突進してくるキラー・トマトにエヴォリション・バーストが放たれ、まるで生きた証を残すかのように中身が飛び散った。
汚ねえ花火だぜ！

キース LP4000 2600

「だが、再び「キラー・トマト」の効果が発動するぜ！俺はデッキから「マジック・リアクター・AID」を攻撃表示で特殊召喚する！」

マジック・リアクター・AID ATK1200

サイバー・ドラゴンの頭部に胴体は実弾兵器を搭載させて重武装化させたようなモンスターが現れる。知らないモンスターだな。しかし、「リアクター」繋がりで何か恐ろしいものが出来てそうな予感がする。今のうちに潰した方がいいだろう。

「俺は手札から速攻魔法「フォトン・リード」を発動！手札からレベル4以下の光属性モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！俺は手札から「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」を特殊召喚する！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ ATK1500

「おおっと、なら「マジック・リアクター・AID」のモンスター効果発動！1ターンに1度、相手が魔法カードを発動した時、そのカードを破壊し相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！マジック・リアクト！！」

マジック・リアクターの腹部に装備されているミサイルポッドからミサイルが発射され、俺の魔法カードを破壊する。そして爆風が俺に襲い掛かった。

亮 LP4000 3200

「っ、少し面倒だな。バトル！「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」で「マジック・リアクター・AID」を攻撃！」

「無駄だぜ？セットカードオープン、罠カード「フェイク・エクスプロージョン・ペンタ」発動！相手モンスターの攻撃宣言時に発動することができ、モンスターはこの戦闘では破壊されない！」

「だが、ダメージは通る！そして「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」は攻撃時に自身の攻撃力を300ポイントアップさせる効果を持っている！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ ATK1500 1800

サイバー・ドラゴン・ツヴァイの頭部から発射されたレーザーがマジック・リアクター・AIDを捕らえたが、突如発せられた爆風がマジック・リアクター・AIDを吹き飛ばし、奴の左翼を破損させるだけに留まった。

キース LP2600 2000

「くっ！だが「フェイク・エクスプロージョン・ペンタ」の効果により破壊は免れるぜ。そして「フェイク・エクスプロージョン・ペンタ」の効果はそれだけじゃない！ダメージ計算後に自分の手札から「サモン・リアクター・A I」を特殊召喚することが出来る！この効果により、俺は手札の「サモン・リアクター・A I」を特殊召喚させてもらう！」

煙の影からゆらゆらとまるで陽炎のように揺らめきながら1つの影が映し出され、風が身に纏っていた煙を吹き飛ばし、太陽の光が煌々とその姿を照らしていた。

サモン・リアクター・A I ATK2000

まるで爆撃機を人型にさせただけなモンスターが現れる。

といっても、最新式の全翼機ではなく肩にはエンジンとプロペラがついており、これはこれで味があるといえる。

しかし、さらに「リアクター」系のモンスターが1体出てきたか。

「マジック・リアクター・A I D」と同じ系統ならバーン系のはずだが・・・あのキースがロックバーンを目指すことはないだろうし、何かあるな。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

亮 手札1 場 モンスター2 伏せ1

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ ATK1500

「俺のターン、ドロ！俺は手札から魔法カード「闇の誘惑」を發動！デッキからカードを2枚ドロし、その後手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。俺は手札の「リボルバー・ドラゴン」をゲームから除外する」

奴らしくないな。普通なら「リボルバー・ドラゴン」を手札に温存させる癖があるんだが・・・そこまでして、何をやりたいんだ？

「俺は手札から魔法カード「忍び寄る闇」を發動！墓地の闇属性モンスター2体をゲームから除外し、デッキからレベル4の闇属性モンスター1体を手札に加える！俺は墓地の「キラー・トマト」2体をゲームから除外し、デッキから「トラップ・リアクター・RR」を手札に加える。そしてそのまま守備表示で召喚」

トラップ・リアクター・RR DEF 1800

まるでジリ作品に出てきた機械にそっくりだが気のせいか？まあ、いいか。

しかし、トラップと言うことは罠発動時にバインドダメージか。なら、サモン・リアクターはモンスター召喚時にバインドダメージだろうな。

といつても、流石にノーコストモンスター破壊なんてのは無いと思うから、恐らくはダメージと何か副次的な効果がある程度だろう。

「くくくくくっ！」

いきなりキースが笑い出した。何があつたんだ一体？

「まさかここまで順調に手が整うとはなあ。「サモン・リアクター・AI」の効果発動！自分の場に「サモン・リアクター・AI」、「マジック・リアクター・AID」、「トラップ・リアクター・RR」が場にいる時、この3体のモンスターを生贄に捧げることにより、デッキ・手札・墓地のいずれかから「ジャイアント・ボマー・エアレイド」を特殊召喚する！俺はデッキから「ジャイアント・ボマー・エアレイド」を攻撃表示で特殊召喚！！」

ジャイアント・ボマー・エアレイド ATK3000

まるで「磁石の戦士」のように合体し、全体的にはサモン・リアクター・AIの雰囲気を残しているものの、さらに爆撃機としてのイメージを強調させたような、言うなれば戦略爆撃機だろう。

「「ジャイアント・ボマー・エアレイド」のモンスター効果発動！手札を1枚捨てることにより、相手の場のカード1枚を選択し、破壊する！俺は手札の「セカンド・チャンス」を墓地へ送り、亮！貴様の「サイバー・ツイン・ドラゴン」を破壊させてもらうぜ？」

ジャイアント・ボマー・エアレイドの両翼から1つずつ、合計2発のミサイルが発射されサイバー・ツイン・ドラゴンに襲い掛かった。

「ちい、ツイン・エヴォリューション・バースト！」

高々2発のミサイルくらい！そう思い、サイバー・ツイン・ドラゴンが迎撃を試みようとする。そして両方のミサイルをロックオンしたその瞬間、ミサイルが分解し中から筒型の物体が3つずつ現れ、そのままサイバー・ツイン・ドラゴンの周囲の地面に突き刺さるかのよう落下した。

何だこれは・・・まさか!?

落下した物体の正体に気づき、アレを破壊するように指示を出そうとする。だが、その落下した物体のほうが先に動き、筒状の物体の後ろからアンテナが立ち、そこから強力な電磁波が発せられサイバー・ツイン・ドラゴンが悲鳴を上げる。最先端の技術によって構成されたこの機械の竜は衝撃には強いものの、中の機器に直接攻撃するとなれば話は別だ。体のあちこちから黒煙が発せられ、両目の防風ガラスも割れてしまった。そして、体の中から食い尽くされた機械の竜は、その姿を残したまま機能を完全に停止した。

「さて、バトルに入らせてもらうか。「ジャイアント・ボマー・エアレイド」で貴様の「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」に攻撃！」

「ならば、セットカードオープン！罾カード「和睦の使者」発動！このターン、自分の場のモンスターは戦闘によって破壊されず、戦闘ダメージは0になる！」

「っへ、そんなカードが俺に通用すると思っっているのか？チェーンしてセットカードオープン、罾カード「トラップスタン」を発動！このターン、このカード以外のフィールド上の罾カードの効果は無効にする。よって、貴様の「和睦の使者」は無意味ってわけだ」

「なっ!?!」

サイバー・ツイン・ドラゴンがレーザーで応戦するも、ジャイアント・ボマー・エアレイドの装甲には焦げ目すらつけることすら叶わず、逆に奴の右腕によって頭を？まれた。ミシミシと装甲から軋む音が聞こえ、徐々に砕かれていくサイバー・ドラゴン・ツヴァイ。そして、ついに装甲が砕けてしまい奴が握っていた頭部の破片が散らばり、それと同時に頭を失い、動けなくなったボディが力なく横たわった。

亮 LP3200 1700

「俺はこのままターンを終了するぜ」

キース 手札1 場 モンスター1 伏せ0

ジャイアント・ボマー・エアレイド ATK3000

不味い。奴の攻撃力を上回るモンスターもいないし、あの破壊効果を耐えられるモンスターもない。どうする。

「俺のターン、ドロー！」

破壊効果には手札を消費せざるを得ない。なら、このモンスターならどうだ？

「俺は「サイバー・ヴァリー」を攻撃表示で召喚！」

サイバー・ヴァリー ATK0

「（かかったな！）その瞬間、「ジャイアント・ボマー・エアレイド」の効果発動！1ターンに1度、相手がモンスターを召喚・反転

召喚・特殊召喚した時にそのモンスターを破壊し、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与えるって優れものだ！」

「何だと!？」

「喰らいやがれ!シャープ・シューティングツ!」

ジャイアント・ボマー・エアレイドに装備されている機銃がサイバー・ヴァリーに狙いを定め、死の旋律を奏で始めた。嵐とも言える銃弾の雨に晒され、サイバー・ヴァリーは唸り声を上げつつ身を碎かれていった。そしてサイバー・ヴァリーの装甲を食い破った銃弾の雨は俺にも降り注がれ、ライフを削り取っていった。

亮 LP1700 900

こ、これではモンスターを召喚しても守りに徹することが出来ない
!!

不味いな・・・このままでは・・・

フィールド45：技術（前書き）

な、何とか年明けまでには間に合いました。

が、結構抜けている部分が多いので後から修正するつもりです。す

みませんorz

では、よいお年を！

フィールド45：技術

「……俺はそのままターンを終了する」

亮 手札1 伏せ0

ジャイアント・ボマー・エアレイドによりモンスターでの防御策はもはや尽きてしまった。

しかもLPは後900。下手な行動を取ればすぐに吹き飛ばされそうな数値だ。

「っへ！既に万策は尽きたってか？」

俺のターン終了宣言にキースがにやりと笑う。

くそっ、ジャイアント・ボマー・エアレイドさえ何とか無力化できれば……

「俺のターン、ドロー！バトルだ！」「ジャイアント・ボマー・エアレイド」でダイレクトアタックだ！！」

ジャイアント・ボマー・エアレイドの全ての武器が俺に狙いを定め、放たれる。

まだまだ！まだ、終わらんよ！！

「俺は手札の「速攻のかかし」の効果を発動する！手札のこのカードを捨てることにより、直接攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させるー！！」

ジャイアント・ボマー・エアレイドの攻撃が当たる直前、俺の前に

1体のかかしが現れて盾となった。そして次の瞬間、ミサイルと機関銃の雨に晒されてしまいそのまま砕け散ってしまった。どうでもいいが、これって絶対オーバーキルだろ!?

「ほう、まだ凌ぎやがったか」

冷や汗を流している俺とは対照的に、嬉しそうな声を出すキース。つち、強者の余裕って奴か。

「悪いが、負けるわけにはいかないからな」

「っへ、そういうことは「ジャイアント・ボマー・エアレイド」を倒してから言うんだな。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

キース 手札2 場 モンスター1 伏せ1

ジャイアント・ボマー・エアレイド ATK3000

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードをドロー！さらに、手札から「天使の施し」を発動！デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てる！」

「亮、てめえ・・・絶対仕込んでいるだろ？」

強欲な壺と天使の施しを連続で使用したことにキースがうんざりした顔になる。

普通、これくらいは引くだろ？

「いや、普通に引いたんだが？」

「・・・まあ、いいか。続けてくれ」

「俺は手札から魔法カード「オーバーロード・フュージョン」を發動！墓地のモンスターを融合素材として扱い、融合デッキから闇機械族モンスター1体を特殊召喚する！ただし、融合素材になったモンスターはゲームから除外される。俺は墓地の「サイバー・ドラゴン」を軸に、墓地の「サイバー・ツイン・ドラゴン」、「融合呪印生物ー光」、「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ」、「サイバー・ドラゴン・ドライ」、「サイバー・バリア・ドラゴン」、「サイバー・ラーヴァ」の合計7体をゲームから除外し、融合デッキから「キメラテック・オーバー・ドラゴン」を融合召喚！」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK？

7つの首を持った「サイバー・エンド・ドラゴン」と言ったらわかりやすいだろうか？

しかし、7つか。竜の玉だったら無条件勝利していたかもしれないよなあ。と、それはさておき

「「キメラテック・オーバー・ドラゴン」が融合召喚された時、自分の場のこのカード以外のカードを全て墓地へと送る・・・が、俺の場には「キメラテック・オーバー・ドラゴン」しかないので無意味だ。そしてこのモンスターの攻撃力は融合素材の数×800ポイントの数になる！よって攻撃力は5600だ！」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK？ 5600

「（ドライとバリアは「天使の施し」か。）だが、「ジャイアント・ボマー・エアレイド」の効果を忘れてもらっちゃ困るぜ！例え特殊召喚だろうが、それに例外はねえ！！！」

ジャイアント・ボマー・エアレイドの胸に装備されている銃口が、キメラテック・オーバー・ドラゴンに狙いを定めた。

「甘いな。俺は手札から速攻魔法「禁じられた聖杯」を発動する。対象は「ジャイアント・ボマー・エアレイド」だ」

突如としてジャイアント・ボマー・エアレイドに上空から滝のような水がドバツとかけられる。・・・バルバロスはいつもこの仕打ちに耐えているのか。

ジャイアント・ボマー・エアレイド ATK3000 3400

「ん？俺のモンスターの攻撃力なんて上げてどうするつもりだ？」

「「禁じられた聖杯」には攻撃力アップの他に、もう一つ効果がある。それは、このカードの効果を受けたモンスターはターン終了時まで自身の効果を無効化する効果がある！」

「なっ！」

ジャイアント・ボマー・エアレイドの銃口が下がり、無事にキメラテック・オーバー・ドラゴンは生存している。チャンスは今しかない！

「よって「ジャイアント・ボマー・エアレイド」の効果は無効化され、「キメラテック・オーバー・ドラゴン」は健在だ！バトル、「キメラテック・オーバー・ドラゴン」で「ジャイアント・ボマー・エアレイド」に攻撃！エヴォリション・レザルト・バースト！」

「ちい、迎撃しろ！ジャイアント・ボマー・エアレイド！！」

ジャイアント・ボマー・エアレイドが持てる火器を全て作動させキメラテック・オーバー・ドラゴンに対して、一斉射撃を行った。対するキメラテック・オーバー・ドラゴンも真正面から7つの頭部からそれぞれ一発ずつのエネルギー弾を発射する。

1つ1つのエネルギー弾がジャイアント・ボマー・エアレイドの武器を消し去り、それぞれがジャイアント・ボマー・エアレイドの各部分に直撃する。そして、内蔵されていた弾薬に引火し、大爆発と共にジャイアント・ボマー・エアレイドは粉々となった。

キース LP3000 800

「っ、やっってくれるぜ！」

「俺はこのままターンを終了する」

亮 手札0 場 モンスター1 伏せ0

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK5600

「俺のターン、ドロ―！（ここは耐えしのぐしか手は無いか）手札から「クリッター」を守備表示で召喚！」

クリッター DEF600

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

キース 手札1 場 モンスター1 伏せ2

クリッター DEF600

「俺のターン、ドロ―！手札から魔法カード「大嵐」を発動！お互いの魔法・罠カードを全て破壊する！」

「なっ！」

嵐が吹き荒れ、お互いの場の魔法・罠ゾーンに伏せていたカードが破壊された。といっても、俺のカードは無かったんだがな。で、キースの伏せカードは「闇の幻影」に今さっき伏せた「聖なるバリアミラーフォース」か。もしも「ジャイアント・ボマー・エアレイド」が閻属性だったら危なかったな。

「バトル！「キメラテック・オーバー・ドラゴン」で「クリッター」に攻撃！」

7つの首から発せられたエネルギー弾により、クリッターの姿は跡形も無く消え去った。

「なら、破壊された「クリッター」の効果発動！このカードが場から墓地へ送られた場合、デッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を選択し、手札に加える！俺はデッキから「ブラック・ボンバー」を手札に加える！」

「そしてターンエンドだ」

亮 手札0 場 モンスター1 伏せ0

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK5600

「俺のターン、ドロ―！俺は手札から魔法カード「強欲な壺」を発動！デッキからカードを2枚ドロ―する。モンスターをセットし、カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

キース 手札1 場 モンスター1 伏せ2
セットモンスター DEF?

「俺のターン、ドロー！」

伏せカードがさらに2枚。ブラフか？それとも本命か？
だが、迷ってはいられないな！

「バトル！キメラテック・オーバー・ドラゴン」でセットモンスターに攻撃！」

キメラテック・オーバー・ドラゴンの集中攻撃により、機関車型のモンスターが吹き飛ばされた。・・・トー スじゃないよな？

「セットモンスターは「魔装機関車デコイチ」！破壊されるが、その前にリバーズ効果が発動するぜ！デッキからカードを1枚ドローする！」

1枚ドローか、地味にくるな。それに結局伏せカードを使ってこなかったし。
ならば！

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

亮 手札0 場 モンスター1 伏せ1
キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK5600

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「苦渋の選択」を発動！デッキからカードを5枚選択し、相手はその中から1枚を選

択する。俺がデッキから選択するのは「ダークシー・レスキュー」を3枚と「リボルバー・ドラゴン」を1枚と「ブローバック・ドラゴン」の1枚だ！」

「なら、「リボルバー・ドラゴン」を選択する」

「ほう。ならば選択された「リボルバー・ドラゴン」は手札に、それ以外のカードは全て墓地へと送られる。セットカードオープン、永続罫「リミット・リバーズ」を発動！墓地の攻撃力1000以下のモンスター1体を選択し、特殊召喚する！俺は「ダークシー・レスキュー」を特殊召喚するぜ！」

ダークシー・レスキュー ATK0

シー・レスキューの名の通り、水難事故で人を助けるためのゴムボートに乗った怪しい2人組みのモンスターが現れる。

「さらに手札から「ブラック・ボンバー」を召喚！」

ブラック・ボンバー ATK100

まるでボンバーマンに出てきそうなモンスターが現れる。

は、破壊輪内蔵型モンスターじゃないだろうか？

「そして召喚された「ブラック・ボンバー」の効果発動！自分の墓地のレベル4閻属性機械族モンスター1体を守備表示で選択し、特殊召喚する！ただし、効果は無効化されているがな。出て来い！」「トラップ・リアクター・RR」！！」

ブラック・ボンバーの口から、4つの暗い炎が飛び出す。すると、

その4つの炎が1つに集まり、トラップ・リアクター・RRへと姿を変えた。下級モンスターが3体？この流れ・・・まるで伊達さんと同じような戦法だな。

ん、まさか!?

「シンクロ召喚か!？」

「さすがだな、亮。どこで知ったのかはしらねえが・・・これが俺の新しい力だ!!レベル3チューナー「ブラック・ボンバー」をレベル1の「ダークシー・レスキュー」とレベル4の「トラップ・リアクター・RR」にチューニング!!」

3 + 1 + 4 = 8

「シンクロ召喚!ダーク・フラット・トップ!!」

ダーク・フラット・トップ DEF3000

空母と思わしき、カタパルトがついた船が現れる。攻撃表示じゃないって事は、守り専門なのか？

「そして「ダーク・フラット・トップ」がシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材となった「ダークシー・レスキュー」の効果が発動される!こいつがシンクロ素材として使用され、そのモンスターがシンクロ召喚に成功したとき、デッキからカードを1枚ドロースる!」

シンクロ召喚時のサポート効果モンスターか!?!ドローは地味に痛いな。

「そして「ダーク・フラット・トップ」の効果発動！1ターンに1度、手札または墓地の「リアクター」と名のついたモンスターが蘇生条件を満たした「ジャイアント・ボマー・エアレイド」1体を条件を無視して特殊召喚することが出来る！！」

「何だとっ！？」

「俺はこの効果により、墓地の「ジャイアント・ボマー・エアレイド」を特殊召喚するぜ！！」

ダーク・フラット・トップのカタパルトにジャイアント・ボマー・エアレイドが乗り、勢いよく発進した。なるほど、リアクター系の空母でもあり、母艦ということか。

ジャイアント・ボマー・エアレイド ATK3000

「惜しかったなあ。亮。・・・ま、貴様の悪運もこれまでだ」

再びジャイアント・ボマー・エアレイドが奴の場に呼び出されて、キースがにやりと笑う。
さすがに・・・この状況は不味いな。

・・・

その時、俺は気づかなかった。俺のデッキが深い黒き翳に一瞬だけ包まれた事を。

今、俺達は海岸沿いを全力疾走しているところなんだが・・・

「結構、人数が減ったな。」

「ああ。」

ふと、気が付けば俺、アイリス、十代、凧、明日香、大徳寺先生しか残っていない。

もしもこれ以上敵が現れたとしたら、人数的にも時間的にもやばいのは目に見えている。

「凧君。三幻魔の復活にはどのくらいかかりますにや？」

「1つの扉を完全に開放するのに5分程度は掛かるはず。校長室に集まったのが12時少し過ぎで、今が28分ですから・・・急がないと不味いですね。」

単純計算で4〜5個の扉は開放されたか。だとしたら、タイムリミットはレッドゾーンかよ!?

「急がないと不味いわね!」

明日香からも焦った表情を隠さないまま、皆に告げた。

このまま三幻魔の門が開けば、世界は、いや、そんなことよりも俺の相棒アイリスが・・・

(し、翔!？わ、私のことより世界の事を!!)

どうやら小声でだが呟いたらしく、それを聞いたアイリスが精霊状態のまま顔を真っ赤にしていた。あ、やべ・・・聞かれてしまったか。恥ずかしいな。しかしまあ、なんだ。

(いや、正直「世界」だの何だの言うけど・・・ピンと来ないんだよな)

よく正義のヒーローが「世界」だの「正義」だのそういった事を口にするが、残念ながら俺にはさっぱり分らないんだよ。一市民だし。なので、友人やアイリスを守ると言った方がわかりやすく、明確でいいと思うんだがな。

と、そう考えているうちに洞窟が見えた。後は一直線！

そ思った矢先、1人の男性が洞窟の内部から現れ、俺達と対峙した。あ、あの人は・・・

「あら、可愛い子がいっぱいじゃない。アムナエル？」

「泉 京水か！」

京水と呼ばれた男の品定めをする目が俺達に注がれ、男子勢は全員肩を震わせた。

皆、無意識のうちにヤバイと感じ取ったんだな。

すると、京水の目が明日香の胸に留まり・・・表情が変わっていく。

「あなた、いい身体しているじゃない」

京水から発せられた言葉に十代以外の男子が肩を落とし、安堵の息をついた。それとは対照的に明日香は少し戸惑った顔をしている。だが・・・

「でも、私のほうがおっぱいおおきいわ」

その言葉に皆がぼかんとし、意味を理解しようと必死に頭を回して

いる。
そして・・・

「私のほうがおっぱいおおきいわ!!!」

(; 。) ! ? (; 。) ! ? (; 。) !
?

もう1度発せられた同じ言葉に俺を除く全員が明日香の方を見る。
ちなみに俺はアイリスの両手によって顔を固定されており、振り向けないようになっていた。・・・地味に力が籠っていて、ちよつと痛いです。

当の明日香は顔を真っ赤にして、両腕をクロスにし胸を隠していた
そうだ。(後日談)

「ちよ、ちよつと・・・変な事を言わないでよ!変なおっさん!!」
どつやら怒ったらしく、キツと睨みながら普段だと言わなさそうな
言葉を発する明日香。
け、結構きついんだな。

「変なおっさん?・・・変なおっさん!!!?」

そしてその言葉によって、何かスイッチが入ったのか。奴の表情が
一変する。

「言ったわね!!!?あんだレディに対して最大の侮辱をつ!!!
ムッキイイイイイ!!!」

れ、レディ!?!な、何を言っているんだこいつは!?!

まさか奴はホ　ではなくオ　マだったのか！？

「皆、先に行つて頂戴。わたしが相手をするから」

激高する京水に対し、氷点下のようにならぬ今にも全てを凍らせそうと言葉を発して皆を先に行かせようとする明日香。や、やべえ・・・こつちも何だかスイッチが入つて修羅場に入ったようだ。オラ、何だかわくわくするげふんげふん。

「わ、わかつたにゃ！明日香さん。後は任せましたにゃ！」

少し引き腰になりながらも大徳寺先生が言つと、皆が洞窟へと向かう。

やべえやべえ。「好奇心は猫をも殺す」って本当だったんだな。

・・・

「さてと、皆を待たせるわけには行かないから・・・悪いけど瞬殺させてもらつわ」

「太陽に変わつて、お仕置きよ？」

私がデュエルディスクを構えると、大徳寺先生が京水と呼んでいた男もデュエルディスクを構えた。

久々ね、こんな気持ちになるのは・・・女としてのプライドをここまで傷つけておいて、ただじゃ済まさないわよ？

「「決闘！！」」

閑話・正月ネタ（前書き）

明けましておめでとございます。

今年は平和な年でありますように・・・

*今回は作者が病的な意味で衝動に駆られて書いたものなのであまり期待せず呼んでいただければ幸いです。

閑話・正月ネタ

「ついに新年ですね」

「ああ。そうだな」

現在俺達はコタツに入って、新年を迎えた夜を満喫している。除夜の鐘が静かな夜を奏でている最中だ。本来なら神社に行ってお参りしたかったんだが、お留守番なため、残念ながら居残っている。ちなみに兄さんは伊達さんに誘われるままそのまま外へ行ってしまった。

恐らくは、修行時代に出会った人たちとパーティをするのだろう。と思われるので、伊達さんの誘いを断り、こうして家でのんびりしているというわけだ。
やはり冬はコタツだね。

「翔。みかんはいかかですか？」

「ん、なら1つ頂戴」

「はい」

「ありがとうございます」

アイリスから1つみかんを貰い、早速皮をむいて食べ始める。
うん。鉄板とはいえ、最高だ！！このまま眠ってしまいたいなあ・・・
・はあ。

「どうしたんですか。翔？」

俺がちよつとため息をつくとき、アイリスが不思議そうに尋ねる。

「……ん、待てよ？毛布 羽毛 羽 天使 羽 羽毛 毛布！！」

後から考えると物凄くぶつ飛んだ考えだが、このときの俺はコタツの魅力と睡魔によつて脳みそが正常に機能していなかった。だからだろう、何の躊躇も無く行動したのは。

俺がコタツから出ると、向かい合っていたアイリスの方へと向かう。その行動に彼女はちよつと疑問に思うだけで何も言わなかった。そして俺がアイリスの隣に座ると、即座に彼女の首に両手を回し、身体全体で抱きしめる。そして頭を彼女の肩へと乗せた。

「し、翔つ！?!?!？」

声を震わせながらも、アイリスはぎこちない動きで俺を抱きしめた。頬と頬が触れ合い、彼女の頬が熱くなるのが直に伝わる。やはり恥ずかしいのだろうか？

「翼でも、抱きしめてくれ」

小声で呟くと、アイリスがゆっくりと自分の翼で俺を包み込んでいく。

除夜の鐘が鳴り終わったのだろうか。俺が感じるのはすぐ傍で聞こえるアイリスの呼吸と抱きしめていることで感じる体温。そして

トクンツ……トクンツ……

彼女が生きている証拠である心臓の鼓動だ。その1つ1つが俺にとつての宝物であり、愛しい存在だ。「生」を象徴する心地よいメロディが、「アイリス」という名の通り優しい温かさが、俺を眠りへと包み込もうとする。

だが、その前に。眠りに着く前に、彼女に。アイリスに伝えなければならぬ。
必死になって意識を稼働させ、睡魔によって重くなった口を根性で動かす。

「いつも・・・傍にいて・・・くれて・・・あり・・・が・・・とう。アイ・
・り・・・す」

この言葉を発した直後、俺は全ての意識を睡魔に預ける。
そして力を失った身体が、彼女へと倒れ掛かった。

・・・

「翔？」

私に寄りかかってきた翔を優しく抱きしめ、彼に声を掛けてみた。
すると・・・

すっー・・・すっー・・・すっー・・・

健康な呼吸音が私の返事をしてくれた。どうやら寝てしまったようだ。
だ。

（コタツで寝ると風邪を引きますよ？まったく、もう！！）

心の中で不貞腐れますが、そんな考えも彼の呼吸と体温を感じていくうちに隅の方へと追いやられていきます。そして、心の中で暖かい何か私を満たしていくのがはつきりと感じられました。

（いつも傍にいてくれて、ありがとう。ですか）

翔が寝る前に残した言葉を、振り返る。

彼らしい言葉と言えそうですが、逆を言えば翔が私の傍にいてくれたからこそ、私はあなたの傍にいられたのだと思います。

（翔。あなたは覚えていますか？）

不意打ち又佐と戦ったあの決闘。ココロが闇へと堕ちてしまいそうな私を助けくれて、そして彼を疑ってしまったことに恥じ、涙を流していた私を優しく撫でてくれた事を。

その他にも様々な事がありましたね。・・・あれ？

ふと、頬を何か熱い液体が零れ視界が歪みました。

（泣いているん・・・ですね）

熱い液体の正体が涙だと悟り、少しだけ安堵します。

ドクン・・・ドクン・・・

翔のやさしく、力強い鼓動がはっきりと聞こえ、私もその鼓動に身を委たくなる衝動に駆られます。しかし、今のまま寝てしまったら身体のバランスが崩れてしまい、痛い思いをすと思うます。ですので、翔の身体をゆっくりと、起こさないように横にします。

「アイリス・・・」

横になった翔が私の名前を寝言で呟きました。その言葉に、私の身体の芯から熱がこみ上げてくるのが感じられます。一体、翔はどんな夢を見ているんでしょうか？

「翔」

私も彼の名前を呼び返し、良い夢を見られる事を祈りながら私の唇で彼のを塞ぎます。そして翔の体温を一つも逃さないように全身で彼を抱きました。

（おやすみなさい。翔）

意識が段々と薄れ、そしてゆっくりと私は睡魔に身を任せました。

・・・

「くしゅん！」

「大丈夫か。アイリス？」

その後、やはりと言うべきか・・・アイリスが風邪を引いてしまった。

精霊も風邪を引くのだろうか？という疑問もあるが、今は実体化しているので、そういったことも人間とほぼ同じなのかもしれないな。

「もうコタツで寝ようとしなくてくださいね」

アイリスが俺をじっと見て、笑顔で言い放つ。うう、耳が痛い言葉だ。

と、そろそろ昼だから俺の昼飯と同時にアイリスのおかゆも作るかな。

「翔」

俺が立とした瞬間、アイリスが俺に声を掛ける。
何だろう？何かリクエストしたいのかな？

「おかゆは熱々なのでお願いしますね」

「あ、熱々か。わかった」

アイリスが楽しそうに俺に対してリクエストした。

うん、恐らくだけど「熱いので冷ませてくれませんか？」と笑顔で
言われ、顔を赤くしながらも吹いて冷ます俺とそれを嬉しそうに見
ているアイリスの姿を想像できるよ。

しかしな、男には・・・分かっていても引けないときがあるんだよ。
と言うことで、行って来ます！！（その後、予想したことは現実の
ものとなりました。まさか「あーん」まで来るとは思わなかったけ
どな。・・・恥ずかしくて死にたいorz）

閑話・正月ネタ（後書き）

しかし、冬にコタツとミカンは最強だと思っ今日この頃。
ああ、家でのんびりしたいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9198t/>

憎まれ役に転生！？

2012年1月3日02時54分発行